

HP SiteScope

Windows, Solaris, および Linux オペレーティング・システム用

ソフトウェア・バージョン : 11.00

SiteScope の使用

ドキュメント・リリース日 : 2010 年 7 月 (英語版)

ソフトウェア・リリース日 : 2010 年 7 月 (英語版)



法的通知

保証

HP の製品およびサービスの保証は、かかる製品およびサービスに付属する明示的な保証の声明において定められている保証に限りです。本文書の内容は、追加の保証を構成するものではありません。HP は、本文書に技術的な間違いまたは編集上の間違い、あるいは欠落があった場合でも責任を負わないものとします。

本文書に含まれる情報は、事前の予告なく変更されることがあります。

制限事項

本コンピュータ・ソフトウェアは、機密性があります。所有、使用、コピーには、HP による有効なライセンスが必要です。FAR 12.211 および 12.212 に従って、商用コンピュータ・ソフトウェア、コンピュータ・ソフトウェアのドキュメント、および商用アイテムの技術データは、HP の標準商用ライセンス条件に基づいて米国政府にライセンスされています。

著作権

© Copyright 2005 - 2010 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

商標

Adobe® および Acrobat® は、Adobe Systems Incorporated の商標です。

Intel®, Pentium®, および Intel® Xeon® は、米国およびその他の国における Intel Corporation の商標です。

Java は、Sun Microsystems, Inc. の米国商標です。

Microsoft®, Windows®, Windows NT®, および Windows® XP は、Microsoft Corporation の米国登録商標です。

Oracle は、Oracle Corporation またはその子会社、あるいはその両方の登録商標です。

UNIX® は The Open Group の登録商標です。

謝辞

本製品には、Apache Software Foundation (<http://www.apache.org/>) (英語サイト) が開発したソフトウェアが含まれています。

本製品には、JDOM Project (<http://www.jdom.org/>) (英語サイト) が開発したソフトウェアが含まれています。

文書の更新

本書のタイトル・ページには、次の識別情報が含まれています。

- ソフトウェアのバージョンを示すソフトウェア・バージョン番号
- ドキュメントが更新されるたびに更新されるドキュメント・リリース日
- 本バージョンのソフトウェアをリリースした日付を示す、ソフトウェア・リリース日

最新のアップデートまたはドキュメントの最新版を使用するには、次の URL にアクセスしてください：

<http://support.openview.hp.com/selfsolve/manuals>

このサイトでは、HP Passport に登録してサインインする必要があります。HP Passport ID の登録は、次の URL にアクセスしてください。

<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html> (英語サイト)

または、HP Passport のログイン・ページの [**New users - please register**] リンクをクリックしてください。

適切な製品サポート・サービスに登録すると、更新情報や最新情報も入手できます。詳細については HP の営業担当にお問い合わせください。

サポート

HP ソフトウェアのサポート Web サイトは、次の場所にあります。

<http://support.openview.hp.com/>

この Web サイトでは、連絡先に関する情報や、HP ソフトウェアが提供する製品、サービス、およびサポートの詳細情報を提供します。

HP ソフトウェア・サポート・オンラインでは、お客様にセルフ・ソルブ機能を提供しています。ビジネスの管理に必要なインタラクティブな技術サポート・ツールにアクセスするための効率的な手段を提供します。有償サポートをご利用のお客様は、サポート・サイトの以下の機能をご利用いただけます。

- 関心のある情報や文書の検索
- サポート相談や改善依頼の送信および追跡
- ソフトウェア・パッチのダウンロード
- サポート契約の管理
- HP サポート連絡先の検索
- 使用可能なサービスに関する情報の閲覧
- 他のソフトウェア・カスタマとの意見交換
- ソフトウェア・トレーニングの検索と申し込み

ほとんどのサポート・エリアでは、HP Passport ユーザとして登録し、ログインする必要があります。また、多くの場合、サポート契約も必要です。HP Passport ID の登録は、次の URL にアクセスしてください。

<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html> (英語サイト)

アクセス・レベルに関する詳細は、次の URL を参照してください。

http://support.openview.hp.com/access_level.jsp

目次

はじめに	17
本書の構成	18
対象読者	20
必要な情報の見つけ方	20
そのほかのオンライン・リソース	22
文書の更新	23

第 I 部 : SITESCOPE の紹介

第 1 章 : SiteScope の概要	27
SiteScope の概要	28
SiteScope の主な機能	29
SiteScope アーキテクチャ	30
SiteScope 監視モデル	31
SiteScope 統合	32
サイレント・ログインの使用	33
SiteScope フェールオーバー の使用	34
JMX コンソールの使用	35
SiteScope 設定 API の使用	36
SiteScope へのアクセス方法	38
サイレント・ログイン URL の作成方法	39
SiteScope の設定および管理方法	43
SiteScope の監視用の設定方法	47
テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの 設定方法 - フローチャート	50

第 II 部：概要と管理

第 2 章：SiteScope ユーザ・インタフェースの操作	53
SiteScope ユーザ・インタフェースについて	54
コンテキスト・ツリーでのアクションの操作と実行	58
複数のグループやモニタに対するアクションの実行	58
SiteScope オブジェクトのコピーと移動	59
SiteScope キーボード・ショートカット	62
SiteScope ユーザ・インタフェースの操作	63
第 3 章：SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理	105
SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理の概要	106
フィルタ設定の定義と管理	107
検索 / フィルタ・タグを使った作業	108
新しい検索 / フィルタ・タグの作成および定義方法	109
[タグの検索 / フィルタ] のユーザ・インタフェース	112
第 4 章：Business Service Management (BSM) との連携	121
SiteScope と BSM の通信方法について	122
接続の設定	123
SiteScope データと BSM の構成アイテムとの統合	126
BSM への検出トポロジのレポート	135
CI のダウンタイム	138
IT リソースのパフォーマンスに関するデータの収集方法	140
SiteScope-BSM 通信のための SSL の使用方法	144
トポロジ・レポートの設定方法	145
標準設定で CI タイプが定義されていないモニタ	148
コンピュータ以外の標準設定の CI タイプがあるモニタ	149
測定値ごとの CI をレポートするモニタ	150
注意事項と制限事項	151
第 5 章：Operations Manager 製品との連携	153
SiteScope が Operations Manager 製品と通信する方法について	154
イベントの送信	160
HP Operations Agent を使用した測定値のレポート	167
SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを 送信する方法	171
SiteScope を使用して HP Operations Agent に測定値を レポートする方法	179
SiteScope-Operations エージェントの測定値の整合	182
第 6 章：グローバル検索と置換	187
グローバル検索と置換の概要	188
グローバル検索と置換の実行方法	191
[グローバル検索と置換] ウィザード	196

第 7 章：SiteScope ツール	209
SiteScope ツールの概要	210
モニタの設定時または編集時のツールの使用方法	212
SiteScope ツールのユーザ・インタフェース	214
第 8 章：正規表現の使用	275
正規表現の概要	276
正規表現の定義	277
文字列リテラルの照合	279
メタ文字を使用したパターンの照合	281
検索モード修飾子	286
内容の照合値の保持	287
SiteScope の日付変数	288
ログ・ファイル監視の例	294
正規表現の使用時に発生する問題	302

第 III 部：モニタ

第 9 章：SiteScope グループを使った作業	307
SiteScope グループの概要	308
グループの管理方法	311
[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス	315
第 10 章：SiteScope モニタを使った作業	319
SiteScope モニタの概要	320
SiteScope モニタのカテゴリ	321
リモート・サーバの監視	324
グループの依存関係の監視	325
状態のしきい値の設定	328
ベースラインを使用した状態のしきい値の設定	333
モニタのデプロイ方法	343
ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法	347
モニタ・カテゴリ・リスト	358
Windows 環境にインストールされた SiteScope のみで サポートされているモニタ	363
Windows Management Instrumentation (WMI) を サポートしているモニタ	364
SiteScope の監視に使用されるポート	365
廃止された SiteScope モニタのリスト	370
SiteScope モニタのユーザ・インタフェース	371

第 11 章 : XML ドキュメントの監視	437
XML ドキュメントの監視の概要	438
XML ドキュメントの内容の照合	439
モニタ設定での XML 内容照合値の使用	441
 第 IV 部 : 統合モニタ	
第 12 章 : SiteScope 統合モニタを使った作業	445
統合モニタの概要	446
テクノロジー統合モニタのトポロジ設定	450
統合モニタのデプロイ方法	457
廃止された統合モニタのリスト	461
トラブルシューティングと制限事項	462
第 13 章 : 統合モニタのフィールドのマッピング	467
統合モニタのフィールドのマッピングの概要	468
フィールドのマッピングの構造について	471
イベント・サンプルのフィールドのマッピングの設定	472
測定値サンプルのフィールドのマッピングの設定	478
チケット・サンプルのフィールドのマッピングの設定	484
イベント・ハンドラの構造	488
第 14 章 : HP Network Node Manager との統合	497
Network Node Manager 統合の概要	498
Network Node Manager データをエクスポートする スクリプトの記述	499
Network Node Manager でのイベントの設定方法	500
 第 V 部 : リモート サーバ	
第 15 章 : リモート・サーバを使った作業	503
リモート・サーバの概要	504
リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法	506
リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法	518
リモート・サーバのユーザ・インタフェース	520
トラブルシューティングと制限事項	541
第 16 章 : SiteScope での IP バージョン 6 のサポート	551
IP バージョン 6 のサポート	552
SiteScope での IP バージョン 6 アドレスの優先の有効化方法	556
IP バージョン 6 アドレスがサポートされているモニタ	558

第 17 章 : SiteScope セキュア・シェル (SSH) を使用した監視	561
SiteScope および SSH の概要	562
SSH を使用したリモート Windows サーバの監視	566
リモート UNIX サーバでの SSH 監視の設定方法	568
リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法	569
UNIX リモート・サーバの SSH 設定要件	585
Perfex ベースまたは非 Perfex ベースの Windows SSH が サポートされているモニタ	586
トラブルシューティングと制限事項	587
第 18 章 : SSH クライアントを使った作業	589
統合された Java SSH クライアントの概要	590
統合された Java SSH クライアントの設定方法	593
第 19 章 : UNIX オペレーティング・システム・アダプタ	597
SiteScope UNIX オペレーティング・システム・アダプタの概要	598
アダプタの追加方法	599
SiteScope で提供される UNIX アダプタ	601
アダプタ・ファイルの形式	602
アダプタ・コマンド・リスト	603
 第 VI 部 : プリファレンス	
第 20 章 : 一般プリファレンス	611
一般プリファレンスの概要	612
一般プリファレンス・ページ	614
第 21 章 : インフラストラクチャ・プリファレンス	627
インフラストラクチャ・プリファレンスの概要	628
インフラストラクチャ・プリファレンス・ページ	629
第 22 章 : 統合プリファレンス	659
統合プリファレンスの概要	660
アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファ レンスの設定方法	669
一般データ統合の XML タグの参照情報	671
[統合プリファレンス] のユーザ・インタフェース	674
第 23 章 : ログ・プリファレンス	699
ログ・プリファレンスの概要	700
SiteScope ログ・データベース・テーブルの構造	701
ログ・プリファレンス・ページ	702
トラブルシューティングと制限事項	706
第 24 章 : 電子メール・プリファレンス	707
電子メール・プリファレンスの概要	708
電子メール・プリファレンスのユーザ・インタフェース	709

第 25 章 : ページャ・プリファレンス	717
ページャ・プリファレンスの概要.....	718
ページャ・プリファレンスのユーザ・インタフェース	719
第 26 章 : SNMP プリファレンス.....	727
SNMP トラップ・プリファレンスの概要.....	728
SNMP トラップのユーザ・インタフェース	729
第 27 章 : 共通イベント・マッピング	735
共通イベント・マッピングの概要.....	736
共通イベント・マッピングの設定方法.....	737
共通イベント・マッピングのユーザ・インタフェース	739
第 28 章 : スケジュール・プリファレンス	749
スケジュール・プリファレンスの概要.....	750
スケジュール・プリファレンスのユーザ・インタフェース	753
第 29 章 : ユーザ管理プリファレンス	759
ユーザ管理プリファレンスの概要.....	760
パスワード要件パラメータ	765
ユーザ管理のユーザ・インタフェース	765
第 30 章 : 資格情報のプリファレンス	785
資格情報のプリファレンスの概要.....	786
資格情報のプリファレンスの設定方法.....	789
[資格情報のプリファレンス] のユーザ・インタフェース	791
第 31 章 : タグの検索 / フィルタ	797
タグの検索 / フィルタの概要	798
タグの検索 / フィルタ・ページ	799
第 32 章 : 証明書管理.....	801
証明書管理の概要	802
証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法	804
[証明書管理] のユーザ・インタフェース	806
第 33 章 : 多言語化 (I18N) 環境での SiteScope の使用.....	811
多言語ユーザ (MLU) インタフェースのサポート	812
SiteScope の英語以外のロケールの設定方法.....	814
特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示.....	815
多言語化がサポートされているモニタ	817
注意事項と制限事項.....	819

第 34 章 : SiteScope ヘロゲインのための認証方法の設定	821
Lightweight シングル・サインオンについて	822
SiteScope のシングル・サインオン文字列の変更	823
SiteScope の Identity Management Single Sign-On (IDM-SSO) への接続方法	823
第 35 章 : Lightweight シングル・サインオン認証 (LW-SSO) - 一般的な参照	825
LW-SSO 認証の概要	826
LW-SSO のシステム要件	828
LW-SSO のセキュリティに関する警告	829
トラブルシューティングおよび制限事項	831

第 VII 部 : テンプレート

第 36 章 : SiteScope テンプレート	837
SiteScope テンプレートの概要	839
テンプレートについて	843
テンプレート例	846
テンプレートの計画	847
テンプレート変数を使った作業	849
モニタ・テンプレートのカウンタ選択	855
CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ	859
テンプレート・デプロイメントの更新	860
テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法	863
既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法	872
ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法	874
CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法	877
関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法	882
正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更方法	887
テンプレートのエクスポートとインポート方法	888
PDF へのエクスポート時の Unicode フォントの有効化方法	890
予約済みテンプレート・グループ・タイプ	891
SiteScope テンプレートのユーザ・インタフェース	892

第 37 章 : 自動テンプレート・デプロイメント	931
自動テンプレート・デプロイメントの概要	932
XML ファイルの作成と操作	933
XML ファイルの例および変数	933
XML バリデータ	938
XML を使用したテンプレート変更適用	939
デプロイメントの結果	941
XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ	942
テキストの暗号化方法	946
デプロイメントの更新方法	947
XML タグ参照情報	949
トラブルシューティングおよび制限事項	953
第 38 章 : フェールオーバー監視テンプレート	957
フェールオーバー監視テンプレートの概要	958
フェールオーバー監視テンプレートのデプロイ方法	962
[Failover Monitoring Template] ページ	965
第 39 章 : SiteScope ソリューション・テンプレート	969
ソリューション・テンプレートの概要	970
SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	974
ソリューション・テンプレート・ページ	976
注意事項と制限事項	977
第 40 章 : Active Directory ソリューション・テンプレート	979
Active Directory ソリューションの概要	980
Active Directory ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	982
Active Directory ソリューション・テンプレート・ページ	983
第 41 章 : AIX Host ソリューション・テンプレート	985
AIX Host ソリューションの概要	986
AIX Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	988
AIX Host ソリューションの設定要件	989
AIX Host ソリューション・テンプレート・ページ	989
第 42 章 : HP Quality Center ソリューション・テンプレート	991
HP Quality Center ソリューション・テンプレートの概要	992
HP Quality Center ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	995
HP Quality Center ソリューション・テンプレートの設定要件	996
HP Quality Center ソリューション・テンプレート・ページ	998
トラブルシューティングと制限事項	1008

第 43 章 : HP Service Manager ソリューション・テンプレート	1009
HP Service Manager ソリューションの概要	1010
HP Service Manager ソリューション・テンプレートの デプロイ方法	1012
HP Service Manager ソリューションの設定要件	1013
HP Service Manager ソリューション・テンプレート・ページ	1015
第 44 章 : JBoss Application Server ソリューション・ テンプレート	1019
JBoss Application Server ソリューションの概要	1020
JBoss Application Server ソリューション・テンプレートの デプロイ方法	1022
JBoss ソリューションの設定要件	1023
JBoss ソリューション・テンプレート・ページ	1024
第 45 章 : Linux Host ソリューション・テンプレート	1027
Linux Host ソリューションの概要	1028
Linux Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1030
Linux Host ソリューションの設定要件	1031
Linux Host ソリューション・テンプレート・ページ	1031
第 46 章 : Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート	1033
Microsoft Exchange ソリューションの概要	1034
Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートの デプロイ方法	1037
Microsoft Exchange ソリューションの設定要件	1038
[Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート・ページ	1039
第 47 章 : Microsoft IIS ソリューション・テンプレート	1043
Microsoft IIS ソリューションの概要	1044
Microsoft IIS ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1046
Microsoft IIS ソリューションの設定要件	1047
Microsoft IIS ソリューション・テンプレート	1047
第 48 章 : Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート	1049
Microsoft SQL Server ソリューションの概要	1050
Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートの デプロイ方法	1052
Microsoft SQL Server ソリューションの設定要件	1053
Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート・ページ	1054
第 49 章 : Microsoft Windows Host ソリューション・ テンプレート	1057
Microsoft Windows Host ソリューションの概要	1058
Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートの デプロイ方法	1060
Microsoft Windows Host ソリューションの設定要件	1062
Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート・ ページ	1063

第 50 章 : .NET ソリューション・テンプレート	1065
.NET ソリューションの概要	1066
.NET ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1068
.NET ソリューションの設定要件	1069
.NET ソリューション・テンプレート・ページ	1070
第 51 章 : Oracle Database ソリューション・テンプレート	1073
Oracle Database ソリューションの概要	1074
Oracle Database ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1076
Oracle Database ソリューション・テンプレートの使用ガイドライン	1077
Oracle Database ソリューション・テンプレートのツール	1077
Oracle ソリューション・テンプレート・ページ	1080
第 52 章 : SAP ソリューション・テンプレート	1083
SAP ソリューションの概要	1084
SAP ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1085
SAP ソリューション・テンプレートの設定要件	1086
SAP ソリューション・テンプレート・ページ	1087
第 53 章 : Siebel ソリューション・テンプレート	1091
Siebel ソリューションの概要	1092
Siebel ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1094
Siebel ソリューションの設定要件	1095
Siebel ソリューション・テンプレート・ページ	1097
第 54 章 : Solaris Host ソリューション・テンプレート	1103
Solaris Host ソリューションの概要	1104
Solaris Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1106
Solaris Host ソリューションの設定要件	1107
Solaris Host ソリューション・テンプレート・ページ	1107
第 55 章 : WebLogic ソリューション・テンプレート	1109
WebLogic ソリューションの概要	1110
WebLogic ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1112
WebLogic ソリューションの使用ガイドライン	1113
監視対象の WebLogic モジュールの選択	1113
WebLogic ソリューション・テンプレート・ページ	1115
第 56 章 : WebSphere ソリューション・テンプレート	1119
WebSphere ソリューションの概要	1120
WebSphere ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1122
WebSphere ソリューション・テンプレート・ページ	1124

第 VIII 部 : SITESCOPE ダッシュボード

第 57 章 : SiteScope ダッシュボードを使った作業	1129
SiteScope ダッシュボードの概要.....	1130
ダッシュボード・フィルタの概要.....	1131
モニタの状態の確認.....	1132
SiteScope ツールへのアクセス	1133
SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法	1134
SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法.....	1136
SiteScope ダッシュボードのユーザ・インタフェース.....	1139
第 58 章 : サーバ中心のレポート	1165
サーバ中心のレポートの生成.....	1166
サーバ中心のレポートの作成方法.....	1168
サーバ中心のレポートの作成方法 – 使用例のシナリオ	1170
サーバ中心のレポートの測定値	1175
サーバ中心のレポート	1176
第 59 章 : SiteScope サーバの状況	1181
SiteScope 状況の概要	1182
SiteScope 状況のグループ	1185
BSM 統合設定モニタ	1187
BSM 統合統計モニタ	1188
接続統計モニタ	1188
SiteScope サーバの状況モニタ	1188
SiteScope ログ・イベント・モニタ	1189
SiteScope 負荷モニタの監視	1189
SiteScope の状況監視データの分析方法.....	1190
SiteScope の状況のユーザ・インタフェース.....	1194
第 60 章 : サーバ統計の表示	1211
サーバ統計の使用	1212
SiteScope サーバの負荷を表す統計情報の解析	1213
ログ・ファイルの使用	1216
SiteScope サーバ統計の分析方法	1219
監査ログの設定方法.....	1220
SiteScope ログ・ファイルの列	1221
監査ログのエントリ	1222
SiteScope サーバ統計のユーザ・インタフェース.....	1232

第 IX 部：警告とレポート

第 61 章：SiteScope 警告	1249
SiteScope 警告の概要	1251
警告アクションの作成	1254
SiteScope 警告が送信される時期について	1255
警告テンプレートのカスタマイズ	1260
データベース警告を使った作業	1262
モニタの無効化 / 有効化警告を使った作業	1263
電子メール警告を使った作業	1264
ログ・イベント警告を使った作業	1265
ページ警告を使った作業	1266
送信警告を使った作業	1267
スクリプト警告を使った作業	1268
SMS 警告を使った作業	1272
SNMP トラップ警告を使った作業	1274
サウント警告を使った作業	1275
警告の設定方法	1276
警告メッセージ内容のカスタマイズ方法	1279
警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ方法	1281
SiteScope 警告テンプレートのディレクトリ	1282
SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティの ディレクトリ	1283
SiteScope 警告のユーザ・インタフェース	1292
第 62 章：スクリプト警告のスクリプトの記述	1325
スクリプト警告のスクリプトの記述の概要	1326
SiteScope のスクリプトを使った作業	1326
SiteScope からスクリプトへのデータの引き渡し	1328
第 63 章：SiteScope レポート	1331
SiteScope レポートの概要	1332
SiteScope レポート・タイプ	1334
SiteScope 管理レポートを使った作業	1336
レポートの作成方法	1338
SiteScope レポートのユーザ・インタフェース	1340
索引	1387

はじめに

本書では，分散 IT インフラストラクチャの可用性とパフォーマンスを監視するために HP SiteScope のエージェントレス監視ソリューションを設定および使用する方法について説明します。

本章の内容

- ▶ 本書の構成 (18 ページ)
- ▶ 対象読者 (20 ページ)
- ▶ 必要な情報の見つけ方 (20 ページ)
- ▶ そのほかのオンライン・リソース (22 ページ)
- ▶ 文書の更新 (23 ページ)

本書の構成

本書は、次の各部で構成されています。

第 I 部 SiteScope の紹介

SiteScope について紹介し、SiteScope の重要な機能、アーキテクチャ、監視モデルの概要、および組織の IT インフラストラクチャの監視に SiteScope を使用するための作業順序を説明します。さらに、SiteScope にアクセスし、サイレント・ログインを使用する方法について説明します。

第 II 部 概要と管理

SiteScope ユーザ・インタフェースの操作方法、SiteScope オブジェクトの検索およびフィルタ方法、グローバル検索と置換の使用方法、SiteScope ツールを使用したリソースおよびモニタ設定に関する問題のトラブルシューティング方法、正規表現の使用方法について説明します。また、SiteScope を HP Business Service Management (BSM) のデータ・コレクタとして使用する方法や、SiteScope イベント・データと SiteScope 測定値データを HP Operations Manager (HPOM) および BSM と統合する方法についても説明します。

第 III 部 モニタ

SiteScope グループおよびモニタの操作方法について説明します。XML ドキュメントの監視方法についても説明します。

第 IV 部 統合モニタ

SiteScope 統合モニタの操作方法について説明します。Network Node Manager とのモニタ・フィールドのマッピングと統合についても説明します。

第 V 部 リモート サーバ

SiteScope でリモート環境を監視できるように接続プロパティを設定する方法について説明します。リモート・サーバ監視のセキュア・シェル (SSH) 接続の使用方法、SSH を使用するクライアントの設定方法、UNIX 監視のアダプタ・ファイルの作成およびカスタマイズ方法についても説明します。

第 VI 部 プリファレンス

インフラストラクチャ、統合、ログ、接続設定（電子メール、ページャ、SNMP システムとの接続）、スケジュール・プロファイル、ユーザ・プロファイル、検索タグ、フィルタ・タグ、共通イベント・マッピング、証明書管理、資格情報管理など、SiteScope の一般的な機能と管理機能の設定方法について説明します。また、I18N 環境での SiteScope の使用や、SiteScope へのログインに使用する認証方式の設定についても説明します。

第 VII 部 テンプレート

テンプレートを使用して、グループ、モニタ、リモート・サーバ、警告などの監視ソリューションを効率的にデプロイ、保守、更新する方法について説明します。一般的に使用される IT アプリケーションの SiteScope 監視の、ソリューション・テンプレートを使用したデプロイメントについても説明します。また、モニタ・デプロイメント・ウィザードの使用についても説明します。

第 VIII 部 SiteScope ダッシュボード

[SiteScope サービス状況] タブを使用して、最新のリアルタイム監視データを表示し、監視結果の表示をカスタマイズする方法について説明します。SiteScope サーバ状況の監視、およびサーバ統計情報とログの表示についても説明します。

第 IX 部 警告とレポート

SiteScope 警告を使用してインフラストラクチャ内のイベントまたは状態変更の通知を送信する方法、および警告テンプレートをカスタマイズしてスクリプト警告を作成する方法について説明します。SiteScope レポートを作成し、測定するモニタ・パラメータ、時間間隔、またはサマリ・データを定義する方法についても説明します。

対象読者

本書は、次の SiteScope 利用者を対象としています。

- ▶ SiteScope または BSM の管理者
- ▶ SiteScope または BSM のアプリケーション管理者
- ▶ SiteScope または BSM のデータ・コレクタ管理者
- ▶ SiteScope または BSM のエンド・ユーザ

本書の読者は、エンタープライズ・システム管理、インフラストラクチャ監視システム、SiteScope に精通し、監視対象として設定されるシステムを熟知している必要があります。さらに、BSM と統合する読者は、BSM、エンタープライズ監視および管理の概念を理解している必要があります。

必要な情報の見つけ方

本書は HP SiteScope ヘルプに含まれています。SiteScope ヘルプは、すべての SiteScope ドキュメントへの単一のアクセス・ポイントを提供します。

SiteScope ヘルプにアクセスするには、SiteScope サーバ上で **[ヘルプ]** > **[SiteScope ヘルプ]** を選択します。

トピック・タイプ

本書では、各サブジェクト・エリアをトピックに分けて説明しています。個々のトピックには、サブジェクト固有の情報モジュールが含まれます。トピックは、通常、その中に含まれる情報のタイプに従って分類されています。

この構造は、ユーザが各時点で必要とする情報のタイプに合わせてドキュメントを分割することによって、個々の情報に簡単にアクセスできるように設計されています。

中心となるトピック・タイプは、**概念**、**タスク**、**参照情報**の3つです。これらのトピック・タイプは、アイコンによって視覚的に区別されています。

トピック・タイプ	説明	使用目的
概念 	背景情報，説明情報，または概念的情報。	特定の機能について一般的な情報を得る。
タスク 	操作手順が示されたタスク：アプリケーションの操作および目的の達成に役立つ，順を追ったガイダンス。タスク・ステップによっては，サンプル・データを使用した例が示されます。 タスク・ステップは，番号が付いているものと番号なしのものがあります。 ▶ 番号付きのステップ：各ステップを順番どおりに進めることによって実行されるタスクです。 ▶ 番号なしのステップ：どのような順にでも実行できる，個々に完結する操作のリストです。	▶ タスクの全体的な流れを把握する。 ▶ 番号付きタスクに示されたステップを順に実行し，タスクを完了する。 ▶ 番号なしのタスク内のステップを実行することにより，独立した操作を行う。
	使用例としてのシナリオ・タスク：具体的な状況に関するタスクの実行方法を示した例です。	実際の場面でタスクをどのように実行できるかを知る。

トピック・タイプ	説明	使用目的
参照情報 	一般的な参照情報 ：参照情報としての資料の詳細リストと説明です。	特定の状況に関連した具体的な参照情報を検索する。
	ユーザ・インタフェースの参照情報 ：特定のユーザ・インタフェースについて詳しく説明する、専門的な参照情報トピックです。製品の [ヘルプ] メニューから 「このページのヘルプ」 を選択すると、通常、ユーザ・インタフェース・トピックが表示されます。	1 つ以上の特定のユーザ・インタフェース要素（ウィンドウ、ダイアログ・ボックス、ウィザードなど）に入力する情報や使用方法などに関する具体的な情報を調べる。
トラブルシューティングおよび制限事項 ： 	トラブルシューティングおよび制限事項 遭遇することが多い問題とその解決方法について説明するとともに、機能領域または製品領域の制限事項を示す、専門的な参照情報トピックです。	特定の機能を使用する前や、ソフトウェアの使用上の問題に直面した場合などに、重要な問題についての理解を深める。

その他のオンライン・リソース

トラブルシューティングとナレッジ・ベース：HP ソフトウェア・サポート Web サイトのトラブルシューティング・ページにアクセスします。ここで、セルフ・ソルブ技術情報を検索できます。[ヘルプ] > [トラブルシューティング&ナレッジベース] を選択します。この Web サイトの URL は、<http://h20230.www2.hp.com/troubleshooting.jsp> です。

HP ソフトウェア・サポート：HP ソフトウェア・サポート Web サイトにアクセスします。このサイトで、セルフ・ソルブ技術情報を参照できます。また、ユーザ・ディスカッション・フォーラムへの投稿や検索、サポート依頼の送信、パッチや更新されたドキュメントのダウンロードなども行えます。[ヘルプ] > [HP Software サポート] を選択します。この Web サイトの URL は、<http://support.openview.hp.com> です。

ほとんどのサポート・エリアは、HP Passport ユーザとしての登録およびサインインが必要です。また多くは、サポート契約も必要です。

アクセス・レベルに関する詳細は、次の URL を参照してください。

http://support.openview.hp.com/access_level.jsp

HP Passport ユーザ ID の登録は、次の場所で行います。

<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html> (英語サイト)

HP ソフトウェア Web サイト : HP ソフトウェア Web サイトにアクセスします。このサイトでは、HP ソフトウェアの製品に関する最新情報を提供します。新しいソフトウェアのリリース、セミナー、展示会、カスタマ・サポートなどの情報も含まれています。[ヘルプ] > [HP ソフトウェア Web サイト] を選択します。この Web サイトの URL は、<http://welcome.hp.com/country/jp/ja/prodserv/software.html> です。

文書の更新

HP ソフトウェアは、新たな情報に基づいて継続的に製品ドキュメントを更新しています。

最新のアップデートまたはドキュメントの最新版を使用していることを確認するには、HP ソフトウェアの製品マニュアル Web サイト (<http://support.openview.hp.com/selfsolve/manuals>) にアクセスしてください。

はじめに

第 I 部

SiteScope の紹介

1

SiteScope の概要

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope の概要 (28 ページ)
- ▶ SiteScope の主な機能 (29 ページ)
- ▶ SiteScope アーキテクチャ (30 ページ)
- ▶ SiteScope 監視モデル (31 ページ)
- ▶ SiteScope 統合 (32 ページ)
- ▶ サイレント・ログインの使用 (33 ページ)
- ▶ SiteScope フェールオーバー の使用 (34 ページ)
- ▶ JMX コンソールの使用 (35 ページ)
- ▶ SiteScope 設定 API の使用 (36 ページ)

タスク

- ▶ SiteScope へのアクセス方法 (38 ページ)
- ▶ サイレント・ログイン URL の作成方法 (39 ページ)
- ▶ SiteScope の設定および管理方法 (43 ページ)
- ▶ SiteScope の監視用の設定方法 (47 ページ)
- ▶ テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法 - フローチャート (50 ページ)

概念

SiteScope の概要

HP SiteScope は、サーバ、オペレーティング・システム、ネットワーク・デバイス、ネットワーク・サービス、アプリケーション、アプリケーション・コンポーネントなどから構成される、分散 IT インフラストラクチャの可用性とパフォーマンスの確認を目的とする、エージェントレス監視ソリューションです。SiteScope は Web ベースでインフラストラクチャを監視し、軽量で柔軟にカスタマイズでき、実運用システムにデータ収集エージェントをインストールする必要がありません。

SiteScope は 90 を超えるモニタ・タイプを備えており、さまざまなホスト・タイプやアプリケーション・プラットフォームの使用状況、応答時間、使用率、リソース可用性を監視できます。SiteScope は、IT インフラストラクチャの問題を検出するたびに警告するように設定できます。警告アクションには、電子メール・メッセージの送信、ページング、SNMP (Simple Network Management Protocol) トラップの送信、スクリプトの実行など、複数のタイプがあります。

1 つのモニタ、複数のモニタ、さらに複数のモニタ・グループに対するレポートを作成できます。SiteScope レポートには、時間の経過に伴う監視対象のサーバとアプリケーションのパフォーマンスに関する情報が表示されます。SiteScope レポートは、運用パフォーマンスと可用性の監視とトラブルシューティング、監視対象環境の確認を行ううえで重要なツールです。

SiteScope は、テンプレート、テンプレート変更適用ウィザード、自動テンプレート・デプロイメントなど、一連の標準化されたモニタ・タイプおよび設定を 1 つの構造として開発できるさまざまなツールを提供します。SiteScope テンプレートを組織全体に渡り迅速に配備し、監視側のインフラストラクチャがテンプレートの標準セットに準拠するように素早く更新できます。SiteScope にはまた、さまざまなメディアでイベント情報の通信と記録に使用できる警告タイプも用意されています。警告テンプレートは、組織のニーズに合わせてカスタマイズできます。

SiteScope は自身の動作状況の主要要素を監視して、モニタ設定上の問題や重大なサーバ負荷を識別します。また、Business Service Management (BSM) へのレポートが設定されている場合、自身の統合やデータのイベントも監視します。

SiteScope の主な機能

SiteScope には次の機能があります。

- ▶ **エージェントレス監視** : SiteScope では、監視対象のサーバ上にエージェント・ソフトウェアをデプロイすることなく監視を行います。この機能により、SiteScope のデプロイメントおよび保守は、ほかのパフォーマンス監視ソリューションに比べて非常に簡素です。
- ▶ **エンタープライズ対応アーキテクチャ** : SiteScope では、フェールオーバー機能、大量システムの同時監視、セキュリティ保護された接続のサポートを利用できます。SiteScope フェールオーバーの詳細については、**<SiteScope ルート・ディレクトリ>¥sisdocs¥pdfs¥SiteScopeFailover.pdf** にある『HP SiteScope Failover Guide』（英語版）を参照してください。
- ▶ **簡素なインストールとデプロイメント** : SiteScope は、サービスまたはプロセスとして移動する 1 台のサーバ上にインストールされます。このため、インストールが迅速で、監視の設定も容易です。
- ▶ **インフラストラクチャのパフォーマンスと可用性の監視** : SiteScope には 90 を超えるモニタ・タイプがあります。SiteScope は、さまざまなホスト・タイプやアプリケーション・プラットフォームの使用状況、応答時間、使用率、リソース可用性を監視できます。
- ▶ **テンプレートを使用したモニタのデプロイメントと更新の標準化** : SiteScope テンプレート、テンプレート変更適用ウィザード、自動テンプレート・デプロイメントによって、企業内のさまざまな IT 要素の監視を標準化するエンタープライズ・ソリューションを提供します。テンプレートを使用することで、グループ、モニタ、警告、リモート・サーバ、設定を 1 つの構造にまとめた単一操作でデプロイメントと更新を繰り返し実行できるため、企業全体へのモニタのデプロイメント時間が短縮されます。

- ▶ **予防的警告** : SiteScope は, IT インフラストラクチャの問題を検出するたびに警告するように設定できます。警告アクションには, 電子メール・メッセージの送信, ページング, SNMP (Simple Network Management Protocol) トラップの送信, スクリプトの実行など, 複数のタイプがあります。
- ▶ **自己監視** : SiteScope は自身の動作状況の主要要素を監視して, モニタ設定上の問題や重大なサーバ負荷を識別します。また, BSM へのレポートが設定されている場合, 自身の統合やデータのイベントも監視します。
- ▶ **カスタマイズ機能** : SiteScope では, カスタム・データ・フィールドと HTML センシティブな記述タグを使用して, カスタマイズしたグループとモニタを表示できます。さらに, SiteScope では, テンプレートとユーザ定義変数を使用して警告テキストとレポート設定のカスタマイズが可能です。
- ▶ **直感的な管理** : SiteScope では, ユーザが使いやすいブラウザ・ベースのインタフェースで監視プラットフォームの表示と管理ができるため, 監視環境の管理にかかる時間が短縮されます。

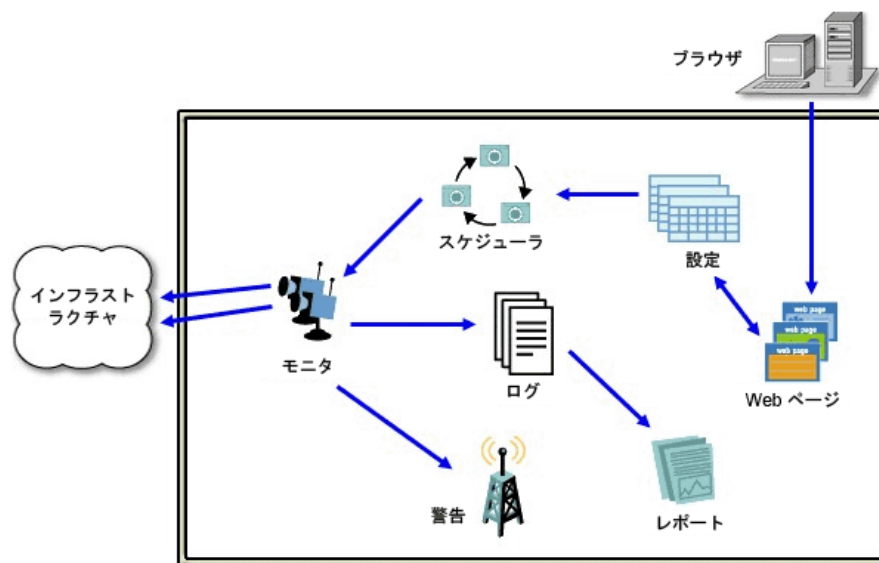
SiteScope アーキテクチャ

SiteScope の Web 対応アーキテクチャでは, 拡張性の高い監視環境の作成と継続的な管理が可能です。監視環境は次のコンポーネントで構成されます。

- ▶ **ブラウザ・ベースのインタフェース**。エンド・ユーザのステータス情報要求, 設定変更要求, アクセス制御を管理します。
- ▶ **スケジューラ**。モニタ, 警告作成, レポート生成の実行を調整します。
- ▶ **モニタ**。監視対象システムのパフォーマンスおよび可用性情報を収集します。
- ▶ **警告**。監視対象システムの例外, 障害, ステータス変更イベントの通知。
- ▶ **レポート**。傾向把握および分析を目的とした監視対象データの履歴表現。

SiteScope 監視モデル

SiteScope 監視モデルを次の図に示します。



SiteScope アーキテクチャは次の主要なコンポーネントで構成されます。

- ▶ **グループ:** グループは監視対象アセットのコンテンツです。グループはモニタの整理に使用され、サブグループを含む場合があります。グループはモニタよりも前に作成されます。
- ▶ **モニタ:** モニタは、サーバ・コンポーネント、主要なアプリケーション・プロセス、ログ・ファイル、ネットワーク・デバイスなどのステータスをチェックします。選択したメトリックスに基づいてデータを収集し、設定されたしきい値に対して正常、警告またはエラーのステータスを表示します。
- ▶ **警告:** 警告は、監視対象アセットのステータスが変化するとトリガされるアクションです。問題イベントや障害が発生すると必要なユーザに通知します。警告は、電子メール、ページャ、SMS（ショート・メッセージ・サービス）メッセージ、SNMP トラップなど、さまざまなメディアに送信できます。
- ▶ **レポート:** レポートは監視対象データの履歴表現です。SiteScope では、クイック・モニタ・レポートから詳細な管理レポートまで、さまざまなレポートを提供します。レポートを使用して、傾向と運用パフォーマンスの追跡や問題のトラブルシューティングを行うことができます。

SiteScope 統合

スタンドアロン・アプリケーションとしての SiteScope は、IT インフラストラクチャのパフォーマンスと可用性を監視するエージェントレス・ソリューションです。SiteScope はまた、次のアプリケーションと統合することもできます。

- ▶ **HP Business Service Management.** SiteScope は、BSM のデータ・コレクタとして使用できます。BSM は、エンド・ユーザ、ビジネス・プロセス、システムに関するデータをレポートおよび分析で使用するために収集します。すべてのモニタの監視データ、または選択したモニタの監視データを送信できます。詳細については、121 ページ「Business Service Management (BSM) との連携」を参照してください。
- ▶ **HP Diagnostics :** SiteScope は HP Diagnostics にグループ、モニタ、測定値のデータを転送し、Diagnostics によって監視されるアプリケーション・サーバのビューをより包括的に表示できるようにします。このデータから、アプリケーション・サーバのデプロイ先であるインフラストラクチャ・コンポーネントに関する洞察を得ることができます。HP Diagnostics は、SiteScope から送信されたデータを読み込み、レポートやグラフで表示できます。詳細については、664 ページ「Diagnostics 統合の概要」を参照してください。
- ▶ **HP Operations Manager :** SiteScope は HP Operations Manager 製品と連携できるため、エージェントレスとエージェント・ベースのインフラストラクチャ管理を組み合わせることでより強力な機能を実現します。HP Operations Agent を使用すると、SiteScope からイベント・データを HP Operations Manager (HPOM) または BSM のオペレーション管理に転送できるため、IT 運用の状況に関してより包括的で詳細な全容を把握できます。HP Operations Agent により、SiteScope は自身で収集したメトリックス・データのデータ・ストレージとして機能できるようになり、HPOM および BSM レポート製品からそのデータを直接使用できます。詳細については、153 ページ「Operations Manager 製品との連携」を参照してください。
- ▶ **汎用統合 :** SiteScope を使用して、SiteScope からの XML ファイルを受信できるほかのアプリケーションにデータを転送できます。これらのファイルには、SiteScope のグループ、モニタ、測定値のステータスに関する情報が含まれています。汎用的なデータ統合の詳細については、667 ページ「汎用データ統合の概要」を参照してください。SiteScope が受信側のアプリケーションに転送する統合ファイルに含まれる XML タグ、要素、属性の詳細なリファレンスについては、671 ページ「一般データ統合の XML タグの参照情報」を参照してください。

サイレント・ログインの使用

サイレント・ログインは、ユーザ・ログイン名およびパスワードを SiteScope のログイン・ページに入力することなく SiteScope を起動する自動プロセスです。サイレント・ログインにより、初期ログイン・ページをスキップして直接 SiteScope クライアントを表示できます。さらに、サイレント・ログインとブラウザのお気に入りのリストに保存したページ・オプション・ビューを併用すると、SiteScope の特定のグループまたはビューを直接表示できます。お気に入りのページ・オプション・ビューの設定の詳細については、56 ページ「SiteScope 共通ツールバー」の「ページ・オプション」を参照してください。

サイレント・ログインを使用して SiteScope を起動するには、ユーザ・ログイン名およびパスワードを SiteScope 暗号化ツールを使用して暗号化し、暗号化した情報をサイレント・ログイン URL に入力する必要があります。URL の形式は次のとおりです。

`http://<サーバ名>:8080/SiteScope?sis_silent_login_type=encrypted&login=<暗号化ログイン名>&password=<暗号化パスワード>`

SiteScope サイレント・ログイン URL の作成方法の詳細については、39 ページ「サイレント・ログイン URL の作成方法」を参照してください。

SiteScope フェールオーバー の使用

SiteScope フェールオーバー は、自動フェールオーバー機能を備えた特殊なバージョンの SiteScope です。SiteScope マシンに障害が発生した場合、サービスをほとんど中断せずに素早く自動的に別のマシンに置き換えることで、インフラストラクチャ監視のフェールオーバー機能を実装できます。

SiteScope フェールオーバーを使用して SiteScope のサーバ障害後にバックアップの監視を使用可能にする操作の詳細については、**<SiteScope のルート・ディレクトリ> %sisdocs%\pdfs\SiteScopeFailover.pdf** にある『HP SiteScope Failover Guide』（英語版）を参照してください。

注：プライマリ SiteScope はすべて共有リソース上にインストールする必要があるため、このガイドで示されているインストール・パスは、共有リソース上の SiteScope インストール・パスとみなす必要があります。

JMX コンソールの使用

SiteScope には、Java 監視および管理 (JConsole) ツールが含まれています。このツールは、Java Management Extension (JMX) テクノLOGYを使用し、Java プラットフォーム上で実行されるアプリケーションのパフォーマンスおよびリソース消費に関する情報を提供します。

JConsole を使用して、リモート管理操作の実行、プロセスのパフォーマンス表示、SiteScope の問題領域のトラブルシューティングを行うことができます。このツールは、実運用環境のメモリ消費、スレッドなどに関する難しい問題のデバッグに役立つ場合があります。

JConsole ツールにアクセスするには、Windows プラットフォームの場合は **<SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%bin%jconsole.exe** を実行します (UNIX プラットフォームの場合は **<SiteScope のルート・ディレクトリ>/java/bin/jconsole** バイナリ・ファイル)。監視対象の SiteScope に応じて、**ローカル**、または**リモート**とポート **27676** を選択します。

JMX サーバへのアクセスはパスワードで保護されていないため (SiteScope の標準設定では JConsole パスワード認証は無効)、不正侵入を防ぐために JMX パスワード認証を有効にすることをお勧めします。詳細については、46 ページ「JMX サーバのパスワード保護の有効化 (任意指定)」を参照してください。

注：その他の JConsole 設定は変更しないことをお勧めします。



SiteScope 設定 API の使用

SiteScope には、大規模で動的な環境の管理に役立つ拡張 SOAP ベースの API が含まれています。この API では、SiteScope テンプレート、グループ、モニタ、警告、リモート・サーバ、サーバの状況および設定を操作するためのサービスを提供します。各 API 呼び出しは、Windows または UNIX プラットフォームのコマンド・ラインから実行できます。

SiteScope API では次の操作がサポートされています。

SiteScope オブジェクト	操作
テンプレート	▶ テンプレートの管理（テンプレートの作成/削除、テンプレート・コンテナの作成/削除、テンプレートのインポート） ▶ テンプレートのデプロイメント（モニタ、グループ、警告、リモート・サーバ作成） ▶ テンプレートの更新による更新のデプロイメント（グループ、モニタ、警告、リモート・サーバ）
グループ	グループの有効化/無効化、グループの削除
モニタ	モニタの有効化/無効化、モニタの削除、モニタの実行
警告	警告の有効化/無効化
リモート・サーバ	リモート・サーバ・プリファレンスの削除
状態	SiteScope サーバの状態（アクティブ監視、起動）に関する統計情報の取得
設定	SiteScope 設定の取得

SiteScope API のサンプルは<SiteScope のインストール・ディレクトリ>¥examples¥integrations¥api ディレクトリにあります。API の使用方法の詳細については、¥api ディレクトリの **readme.txt** ファイルを参照してください。

SiteScope に含まれる API の詳細および API を活用するサンプルの Java コードについては、<SiteScope の インストール・ディレクトリ>¥examples¥integrations¥api¥doc¥javadoc.zip にある『HP SiteScope API Reference』（英語版）を参照してください。

注意事項および制限事項

- ▶ この API のメソッドでは、メソッド呼び出しの一部として SiteScope ユーザおよびパスワードが要求されます。これらのメソッドを使用する前に、**<SiteScope インストール>%groups%master.config** のアクセス制御を定義する行を編集して「_accessControlled=true」に変更します。ユーザおよびパスワードは、平文でも暗号化してもかまいません。文字列を暗号化するには、**<SiteScope インストール>%tools%AutoDeployment%encrypt_password.bat** を使用します。
- ▶ ユーザ名およびパスワードを持たないすべての API メソッドは SiteScope の今後のバージョンでは廃止されます。ユーザおよびパスワード認証を使用する類似の API メソッドの名前はすべて変更され、ほかのパラメータで同じメソッド名を使用しないように、Ex サフィックスが付きます(enableGroupEx など)。
- ▶ SiteScope ユーザのアクセス・レベルはメソッドの動作に影響します。たとえば、getConfigurationSnapshot と getFullConfigurationSnapshot を呼び出す場合、返されるマップにはユーザがアクセス権限を持つエンティティのみが含まれます。
- ▶ 以前のバージョンの API で作成されたアプリケーションを使用するには、_accessControlled=false を設定し、廃止された API を使用します。このような廃止されたメソッドは今後のバージョンではサポートされないため、セキュリティ保護されたバージョンの API メソッドを使用するようにアプリケーションを移行する必要があります。
- ▶ _accessControlled=true と設定して廃止された形式のメソッドを使用したり、_accessControlled=false と設定してセキュリティ保護されたメソッドを使用すると例外が発生します。
- ▶ .bat ファイルはサンプル専用であり、実運用のスクリプトを目的とはしていません。スクリプトは、要件に合わせて変更できます。特殊文字は、パラメータ値ではサポートされていません。
- ▶ [プリファレンス]>[ユーザ管理プリファレンス]>[権限]>[警告]で[警告を一時的に無効化]権限が選択されていない場合、警告無効化 API はサポートされていません。
- ▶ サーバ上で一部の API 操作を無効にすることができます。これは、API を介して設定をリモートで変更できないように、読み取り専用モードをサポートしています。

タスク

SiteScope へのアクセス方法

このタスクでは、SiteScope にアクセスするためのさまざまな方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 38 ページ「ブラウザから SiteScope へのアクセス（任意指定）」
- ▶ 38 ページ「[スタート] メニューから SiteScope へのアクセス（任意指定）」
- ▶ 38 ページ「リモート・ログインを使用した SiteScope へのアクセス（任意指定）」
- ▶ 39 ページ「結果」

ブラウザから SiteScope へのアクセス（任意指定）

SiteScope にアクセスするには、Web ブラウザで SiteScope のアドレスを入力します。標準設定のアドレスは `http://<サーバ名>:8080/SiteScope` です。

[スタート] メニューから SiteScope へのアクセス（任意指定）

Windows プラットフォームでは、[スタート] メニューから SiteScope にアクセスすることもできます。[スタート] > [プログラム] > [HP SiteScope] > [Open HP SiteScope] をクリックします。

リモート・ログインを使用した SiteScope へのアクセス（任意指定）

サイレント・ログインを使用して SiteScope にアクセスできます。これにより、ログイン・ページをスキップし、サイレント・ログイン・アドレスを使用して特定のユーザ名とパスワードに対するユーザ・アカウントを直接開くことができます。

概念の詳細については、33 ページ「サイレント・ログインの使用」を参照してください。

タスクの詳細については、39 ページ「サイレント・ログイン URL の作成方法」を参照してください。

結果

SiteScope が初めてデプロイされた場合は、インタフェース要素の初期化のために遅延が生じます。SiteScope に接続すると、SiteScope の [ダッシュボード] ビューが開きます。

注：このアカウントとその権限の使用を制限するには、管理者アカウント・プロフィールを編集して、ユーザ・ログイン名およびログイン・パスワードを含める必要があります。これにより、SiteScope にアクセスする前にログイン・ダイアログが表示されます。管理者ユーザにユーザ名およびパスワードが定義されていない場合、SiteScope はログイン・ページをスキップして自動的にログインします。管理者アカウント・プロフィールの編集方法の詳細については、760 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。

サイレント・ログイン URL の作成方法

このタスクでは、サイレント・ログイン URL の作成方法について説明します。サイレント・ログイン URL を使用すると、SiteScope のログイン・ページを表示せずに指定した SiteScope サーバに直接ログオンできます。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 40 ページ「ユーザ・プロフィールの作成」
- ▶ 41 ページ「ユーザ権限の設定（任意指定）」
- ▶ 41 ページ「ユーザ・プロフィールの暗号化」
- ▶ 42 ページ「ユーザ・プロフィール用 SiteScope サイレント・ログイン URL の作成」
- ▶ 42 ページ「結果」

1 ユーザ・プロフィールの作成

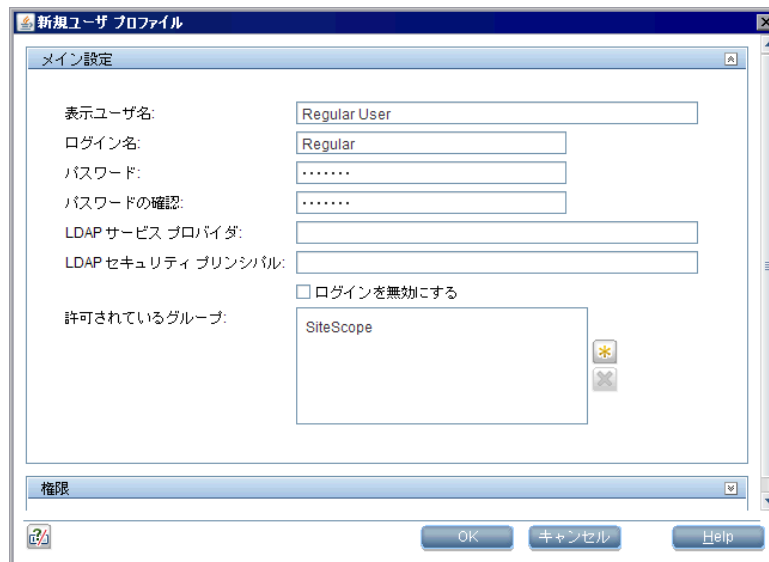
「**プリファレンス**」コンテキストで、「**ユーザ管理プリファレンス**」メニューをクリックし、ユーザ・アカウントを作成します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、766 ページ「**「ユーザ管理プリファレンス」ページ**」を参照してください。

注：管理者アカウントは標準設定のアカウントで、製品がインストールされると有効になります。ほかのアカウントを作成するには、最初に管理者アカウント・プロフィールを編集してユーザ・ログイン名およびログイン・パスワードを含める必要があります。

例：

表示名「**一般ユーザ**」を持つユーザ・プロフィールが、ログイン名 **Regular**、パスワード **Regular** で追加されました。



新規ユーザ プロファイル

メイン設定

表示ユーザ名: Regular User

ログイン名: Regular

パスワード:

パスワードの確認:

LDAP サービス プロバイダ:

LDAP セキュリティ プリンシパル:

☐ ログインを無効にする

許可されているグループ: SiteScope

権限

OK キャンセル Help

2 ユーザ権限の設定（任意指定）

新規ユーザ/ユーザの編集ダイアログ・ボックスの[権限]セクションで、ユーザのアクション権限を設定します。標準設定では、新規ユーザにはほかのユーザのプリファレンスの変更または削除権限を除く、すべての権限が与えられます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、767 ページ「[新規ユーザ プロファイル] / [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

3 ユーザ・プロファイルの暗号化

ユーザ・ログイン名およびパスワードを暗号化します。

- a コマンド・プロンプトで、ログイン名についてコマンド **<SiteScope のルート・ディレクトリ>%tools%AutoDeployment%encrypt_password.bat <ログイン名>** を実行します。

例を次に示します。

```
C:%SiteScope%tools%AutoDeployment%encrypt_password.bat Regular
```

Regular の暗号化値は (sisp)uq1zrGl1lms= です。

- b <http://www.blooberry.com/indexdot/html/topics/urlencoding.htm>（英語サイト）のリストに従って、非標準の URL 文字をエンコードします。1 文字の URL エンコーディングは、% 記号とその後に続く 2 桁の文字表現で構成されます。

この例では、= が予約文字であるため %3D で置き換えます。その結果、Regular のエンコード値は (sisp)uq1zrGl1lms%3D になります。

- c 暗号化値をサイレント・ログイン URL に追加できるように保存します。
- d ログイン・パスワードについて暗号化プロセスを繰り返します（ログイン名と異なる場合）。

4 ユーザ・プロフィール用 SiteScope サイレント・ログイン URL の作成

Web ブラウザに SiteScope サイレント・ログイン URL を入力します。次の URL 形式を使用します。

http://<サーバ名>:8080/SiteScope?sis_silent_login_type=encrypted&login=<暗号化パスワード>&password=<暗号化パスワード>

<暗号化ログイン名>と<暗号化パスワード>は暗号化したログイン名とパスワードで置き換えます。

5 結果

SiteScope はログイン・ページをスキップし、指定されたユーザ名およびパスワードに対するユーザ・アカウントを直接開きます。

注：ログイン名およびパスワード・パラメータに入力した値がどちらも存在しないか見つからない場合、または認証が失敗した場合は、SiteScope のログイン・ページが表示されます。

SiteScope の設定および管理方法

このタスクでは、SiteScope の使用準備をする際の推奨作業順序について説明します。

SiteScope フェールオーバー を使って作業する場合の注意事項: SiteScope フェールオーバー を使用してバックアップのインフラストラクチャ監視を使用可能にする場合、推奨作業順序については、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥sisdocs¥pdfs¥SiteScopeFailover.pdf** にある『HP SiteScope Failover Guide』（英語版）を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 44 ページ「SiteScope へのログイン」
- ▶ 44 ページ「SiteScope ライセンスの入力」
- ▶ 44 ページ「SiteScope のプリファレンスの設定」
- ▶ 45 ページ「リモート・サーバの接続プロファイルの設定」
- ▶ 45 ページ「ミドルウェア・ドライバのインストール」
- ▶ 46 ページ「JMX サーバのパスワード保護の有効化（任意指定）」
- ▶ 46 ページ「結果」

1 SiteScope へのログイン

Web ブラウザで SiteScope のアドレスを入力します。標準設定のアドレスは `http://localhost:8080/SiteScope` です。

2 SiteScope ライセンスの入力

インストール時に SiteScope のライセンス情報を入力しなかった場合、[プリファレンス] > [一般プリファレンス] > [ライセンス] で入力します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、618 ページ「ライセンス ファイル」を参照してください。

3 SiteScope のプリファレンスの設定

SiteScope 内の管理タスクに関連する特定のプロパティと設定値を設定します。

- a **SiteScope ユーザ・アカウントを作成します。**管理者アカウントは標準設定のアカウントで、製品がインストールされると有効になります。このアカウントは SiteScope を管理するすべての権限を持ち、アカウントを制限しなければ、製品にアクセスするすべてのユーザが使用します。組織の要件に基づいて、その他のユーザ・アカウントを作成して設定します。概念の詳細については、760 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。

注：管理者ユーザにユーザ名およびパスワードが定義されていない場合、SiteScope はログイン・ページをスキップして自動的にログインします。

- b **SiteScope の電子メール・プリファレンスでサーバを設定します。**管理者の電子メール・アドレスを設定し、SiteScope がユーザへの電子メール・メッセージや警告の送信に使用できるメール・サーバを指定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、709 ページ「[電子メール プリファレンス] ページ」を参照してください。
- c **ログ・プリファレンスを調整します。**監視データを SiteScope サーバ上に保持する日数を設定します。標準では、SiteScope は 40 日以上経過したログを削除します。監視データを外部データベースにエクスポートする場合は、データベースと必要なドライバを準備し、ログのプリファレンスを適切に設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、702 ページ「ログ・プリファレンス・ページ」を参照してください。

- d SiteScope オブジェクトの資格情報を設定します。** [資格情報のプリファレンス] を使用して、ユーザ認証を必要とする SiteScope オブジェクトの資格情報を保存、管理します。タスクの詳細については、789 ページ「資格情報のプリファレンスの設定方法」を参照してください。
- e SiteScope 統合を設定します**（必要に応じて）。
- ▶ BSM に報告するよう SiteScope を設定します。これにより、SiteScope 監視データのログを BSM に記録できます。概念の詳細については、123 ページ「接続の設定」を参照してください。
 - ▶ HP Operations Manager 統合を設定します。これにより、SiteScope イベントの送信および HP Operations Manager と BSM への測定値データのレポートが可能になります。概念の詳細については、154 ページ「SiteScope が Operations Manager 製品と通信する方法について」を参照してください。

注：さらに、必要に応じてほかの SiteScope プリファレンスも設定できます。詳細については、92 ページ「プリファレンス・メニュー」を参照してください。

4 リモート・サーバの接続プロファイルの設定

セキュリティ要件に応じて、監視するリモート・サーバの接続方法を指定します。

SiteScope によるリモート Windows サーバのデータ監視の有効化の詳細については、506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

SiteScope によるリモート UNIX サーバのデータ監視の有効化の詳細については、518 ページ「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

5 ミドルウェア・ドライバのインストール

リモート・データベースとの接続用のミドルウェア・ドライバと、ドライバを必要とするモニタ用のアプリケーションをインストールします。

詳細については、各モニタのヘルプを参照してください。

6 JMX サーバのパスワード保護の有効化（任意指定）

SiteScope に組み込まれた JMX サーバへの不正侵入を防止するため、次のシステム・プロパティを設定して JVM の起動時にパスワード保護を有効にします。

`-Dcom.sun.management.jmxremote.authenticate=true`

- ▶ Windows プラットフォームの場合、Windows レジストリ設定 **HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥Services¥SiteScope¥serviceParam** にこの引数を追加するか、置き換えます。

標準設定では、`serviceParam` の `-Dcom.sun.management.jmxremote.authenticate` パラメータは `false` に設定されています。

- ▶ UNIX プラットフォームの場合、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>/bin/start-monitor** スクリプトにこの引数を追加する必要があります。

JVM の設定方法の詳細については、Java Sun のドキュメント (<http://java.sun.com/j2se/1.5.0/docs/guide/management/agent.html#auth>)（英語サイト）を参照してください。

JMX コンソールの詳細については、35 ページ「JMX コンソールの使用」を参照してください。

7 結果

これで SiteScope を使用できるようになりました。

- ▶ SiteScope での基本的な監視構造の作成の詳細については、47 ページ「SiteScope の監視用の設定方法」を参照してください。
- ▶ テンプレートを作成および開発し、標準化したグループ構造、命名規則、設定を使用して監視のデプロイメントを迅速化する方法の詳細については、863 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」を参照してください。

SiteScope の監視用の設定方法

このタスクでは、SiteScope で作成したグループにモニタを個別に追加して基本的な監視構造を作成する際の作業順序について説明します。

ヒント: または、SiteScope テンプレート、ソリューション・テンプレート、テンプレート変更適用ウィザード、自動テンプレート・デプロイメントを使用して、企業内のさまざまな IT 要素の監視を標準化できます。一括デプロイメントの場合、これらの方法は基本的な監視方法よりも効率的です。テンプレートを使用した監視ソリューションの設定に関連する手順を示すフローチャートについては、50 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法 - フローチャート」を参照してください。

テンプレート・ワークフローの詳細については、863 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 48 ページ「前提条件」
- ▶ 48 ページ「グループとサブグループの作成」
- ▶ 48 ページ「モニタ・インスタンスの作成」
- ▶ 48 ページ「モニタの依存関係の設定（任意指定）」
- ▶ 48 ページ「モニタのしきい値の設定（任意指定）」
- ▶ 49 ページ「モニタおよびグループの警告のセットアップ（任意指定）」
- ▶ 49 ページ「モニタおよびグループのレポートのセットアップ（任意指定）」
- ▶ 49 ページ「結果」

1 前提条件

SiteScope に監視を設定する前に、インストール後の管理タスクの実行が終了していることを確認します。

タスクの詳細については、43 ページ「SiteScope の設定および管理方法」を参照してください。

2 グループとサブグループの作成

実装するモニタ階層に従ってグループを作成します。これにより、モニタと関連付けられた警告のデプロイメントを管理しやすくし、環境や組織への有効性を高めることができます。たとえば、場所、サーバ・タイプ、ネットワーク・リソースなどのグループを作成できます。

タスクの詳細については、311 ページ「グループの管理方法」を参照してください。

3 モニタ・インスタンスの作成

グループに追加するモニタ・インスタンスを選択します。

タスクの詳細については、343 ページ「モニタのデプロイ方法」を参照してください。

4 モニタの依存関係の設定（任意指定）

グループと主要なモニタの依存関係を作成し、過剰な警告を制御できるようにします。

概念の詳細については、325 ページ「グループの依存関係の監視」を参照してください。

5 モニタのしきい値の設定（任意指定）

ベースラインを使用して 1 つまたは複数のモニタのしきい値を設定するか、各モニタ・インスタンスについてレポートされるステータスを決定するロジック条件を手動で設定します。

- ▶ ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法の詳細については、347 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」を参照してください。
- ▶ 手動でモニタしきい値を設定するためのユーザ・インタフェースの詳細については、384 ページ「しきい値設定」を参照してください。

6 モニタおよびグループの警告のセットアップ（任意指定）

イベントが発生したか、インフラストラクチャの要素やシステムのステータスが変化したときに通知を送信する警告を作成します。

タスクの詳細については、1276 ページ「警告の設定方法」を参照してください。

7 モニタおよびグループのレポートのセットアップ（任意指定）

時間の経過に伴う監視対象のサーバおよびアプリケーションのパフォーマンスに関する情報を表示するレポートを作成します。

タスクの詳細については、1338 ページ「レポートの作成方法」を参照してください。

8 結果

SiteScope は、モニタ・ツリーの指定されたコンテナにモニタ、警告、レポートを追加します。

テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法 - フローチャート

次のフロー・チャートは、SiteScope テンプレートおよびテンプレート変更適用ウィザードを使用して SiteScope 監視ソリューションを設定するために必要な手順を示します。テンプレートは、一連の group 構造、モニタ・タイプ、設定を 1 つの構造に標準化し、繰り返しデプロイおよび更新できるようにするために使用します。

詳細については、863 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」を参照してください。



第 II 部

概要と管理

2

SiteScope ユーザ・インタフェースの操作

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope ユーザ・インタフェースについて (54 ページ)
- ▶ コンテキスト・ツリーでのアクションの操作と実行 (58 ページ)
- ▶ 複数のグループやモニタに対するアクションの実行 (58 ページ)
- ▶ SiteScope オブジェクトのコピーと移動 (59 ページ)

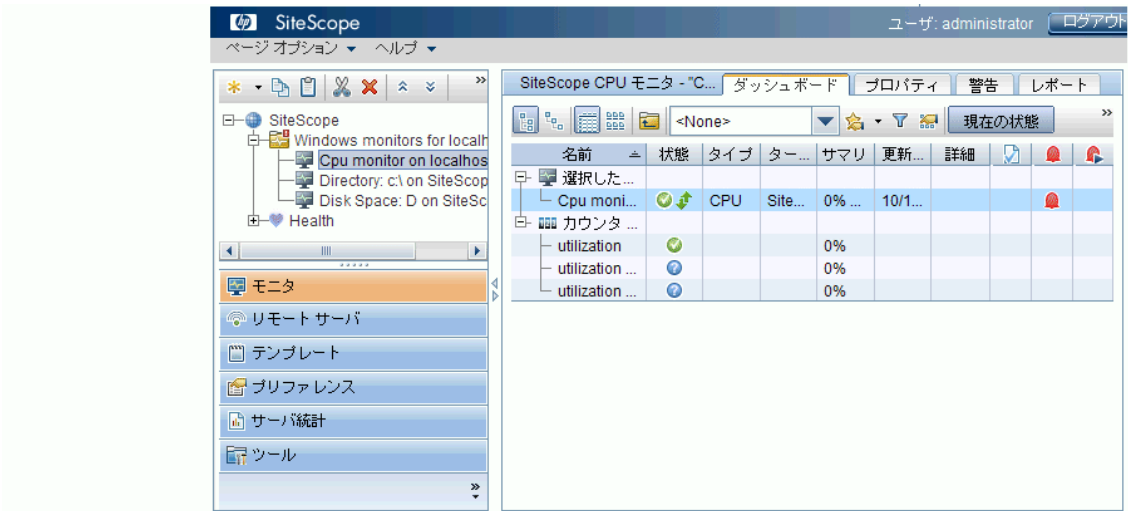
参照情報

- ▶ SiteScope キーボード・ショートカット (62 ページ)
- ▶ SiteScope ユーザ・インタフェースの操作 (63 ページ)

概念

SiteScope ユーザ・インタフェースについて

SiteScope に接続すると、SiteScope の「ダッシュボード」ビューが次のように開きます。ユーザ名を入力して SiteScope にログオンした場合は、ユーザ名がウィンドウの右上に表示されます。



SiteScope ウィンドウには、次の主要な要素が含まれます。

- ▶ **SiteScope 共通ツールバー**：ページ・オプション、ドキュメント、追加のリソースにアクセスできます。このツールバーはウィンドウの上部にあります。詳細については、56 ページ「SiteScope 共通ツールバー」を参照してください。
- ▶ **SiteScope コンテキスト・ツールバー**：選択した SiteScope コンテキスト内でよく使用されるコマンドのボタンが含まれます。詳細については、64 ページ「ツリー・ツールバーのボタン」を参照してください。
- ▶ **SiteScope コンテキスト・ツリー**：ツリー構造で SiteScope オブジェクトを作成、管理できます。詳細については、71 ページ「モニタ・ツリー」、82 ページ「リモート・サーバ・ツリー」、83 ページ「テンプレート・ツリー」を参照してください。

- ▶ **SiteScope コンテキスト・ボタン** : SiteScope モニタ, リモート・サーバ, テンプレート, プリファレンス, サーバ統計, 診断ツールにアクセスできます。詳細については, 57 ページ「SiteScope コンテキスト・ボタン」を参照してください。

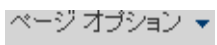
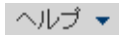
注 : SiteScope の以前のバージョンで利用できた SiteScope クラシック・インタフェース (URL は `http://<sitescope ホスト>:8888`) は, SiteScope の管理には使用できなくなりました。詳細については, 『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』 (PDF) の「SiteScope クラシック・インタフェース」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 56 ページ「SiteScope 共通ツールバー」
- ▶ 57 ページ「SiteScope コンテキスト・ボタン」

 SiteScope 共通ツールバー

SiteScope 共通ツールバーは、SiteScope ウィンドウの上部にあり、すべてのコンテキストからアクセスできます。次のボタンが含まれます。

UI 要素	説明
	次のページ・オプションを選択できます。 ▶ お気に入りに追加。現在の SiteScope ビューをブラウザのお気に入りのリストに追加できます。 ▶ ユーザのお気に入りにレイアウトを保存。現在のビューを特定の SiteScope ユーザの標準設定のレイアウトとして保存できます。
	SiteScope のヘルプ、特定のウィンドウのコンテキスト・センシティブ・ヘルプ、リリース・ノート、そのほかの追加オンライン・リソースにアクセスできます。 また、ほとんどのページまたはダイアログ・ボックスでユーザ・インタフェース要素の説明を表示できます。この機能をアクティブにするには、特定のページまたはダイアログ・ボックスで [クイック ヘルプ]  ボタンをクリックし、マウス・ポインタを要素ボックスの上に置いてヒントの説明を表示します。この機能を使用不能にするには、 [クイック ヘルプ] ボタンをもう一度クリックします。
	SiteScope セッションからログアウトします。

モニタ・ツリーのビューをカスタマイズして、作業中の SiteScope 要素のみを表示することができます。また、検索／フィルタ・タグをグループ、モニタ、レポート、警告に割り当てて、選択内容をさらに絞り込むこともできます。このトピックの詳細については、106 ページ「SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理の概要」を参照してください。

SiteScope では、グローバル置換を使用して複数のモニタ、グループ、または複数の SiteScope を対象にモニタ設定を変更できます。グローバル置換のユーザ・インタフェースの詳細については、196 ページ「[グローバル検索と置換] ウィザード」を参照してください。

SiteScope コンテキスト・ボタン

SiteScope には次のコンテキストがあり、左側の表示枠から使用できます。

UI 要素	説明
 モニタ	モニタ・ツリーで表された階層で SiteScope グループおよびモニタの作成、管理できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、71 ページ「モニタ・ツリー」を参照してください。
 リモートサーバ	SiteScope がリモートの Windows および UNIX 環境で実行されているシステムとサービスを監視できるように、接続プロパティをセットアップできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、82 ページ「リモート・サーバ・ツリー」を参照してください。
 テンプレート	テンプレートを使用して、標準化した監視パターンを、インフラストラクチャの複数の要素へデプロイできます。事前に設定された SiteScope ソリューション・テンプレートを使用することも、独自のテンプレートを作成および管理することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、83 ページ「テンプレート・ツリー」を参照してください。
 プリファレンス	SiteScope 内のほとんどの管理タスクに関連する特定のプロパティおよび設定値を設定できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、92 ページ「プリファレンス・メニュー」を参照してください。
 サーバ統計	主要な SiteScope サーバ・パフォーマンス・メトリックスを表示できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、95 ページ「サーバ統計メニュー」を参照してください。
 ツール	SiteScope の問題のトラブルシューティングや、モニタ設定に役立つ診断ツールを表示できます。利用可能なツールの詳細については、210 ページ「SiteScope ツールの概要」を参照してください。

コンテキスト・ツリーでのアクションの操作と実行

コンテキスト・ツリーの操作、アクションの実行、オブジェクト・プロパティの編集にはいくつかの方法があります。

コンテキスト・ツールバーを使用してアクションを実行するか、またはコンテキスト・ツリー内でオブジェクトを強調表示して右クリックし、そのオブジェクトのメニュー・オプションにアクセスできます。たとえば、モニタ・ツリーで **SiteScope** ノードを右クリックした場合、その **SiteScope** ノードに対して実行できるアクションのみが表示されたメニューから選択します。複数のグループおよびモニタに対してアクションを実行することもできます。詳細については、58 ページ「複数のグループやモニタに対するアクションの実行」を参照してください。

コンテキスト・ツリー・オブジェクトとツリーのオブジェクトごとに選択可能なさまざまなコンテキスト・メニュー・オプションの詳細については、71 ページ「モニタ・ツリー」、82 ページ「リモート・サーバ・ツリー」、83 ページ「テンプレート・ツリー」、92 ページ「プリファレンス・メニュー」、95 ページ「サーバ統計メニュー」、97 ページ「[ツール] メニュー」を参照してください。

複数のグループやモニタに対するアクションの実行

複数の **SiteScope** オブジェクトに対して一括操作を実行するには、モニタとグループの管理機能を使用します。この機能では、モニタ・ツリーの複数の **SiteScope** オブジェクトに対してモニタの移動、コピー、削除、実行、モニタの有効化／無効化、関連付けられた警告アクションの有効化／無効化を実行できます。フィルタ・オプションを使用し、フィルタ基準に基づいてフィルタしたグループとモニタのリストを作成することもできます。

[モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックスを使用して、組織の展開可能な階層ビューから 1 つ以上のグループとモニタを選択し、実行するアクションを選択できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、67 ページ「[モニタとグループの管理] ダイアログボックス」を参照してください。

SiteScope オブジェクトのコピーと移動

SiteScope オブジェクトをコンテキスト・ツリー内の別の場所にコピーできます。さらに、SiteScope オブジェクトをテンプレートにコピーできます。また、モニタとグループをその内容とともにモニタ・ツリーの別のグループに移動することもできます。

各オブジェクトを区別できるように、オブジェクト名は親コンテナ内で一意にする必要があります。たとえば、SiteScope オブジェクトをコピーまたは移動する場合、同じグループ内でまったく同じ名前を持つ 2 つのモニタは作成できません。SiteScope オブジェクトのコピーを作成し、その名前がコンテナ内の既存のオブジェクトと同じである場合、SiteScope では自動的にサフィックス (数字) がオブジェクト名の最後に追加されます。たとえば、モニタ **Mail Flow** のコピーを作成し、同じモニタ・グループ内に貼り付けると、SiteScope では自動的に名前が **Mail Flow(1)** に変更されます。

次の SiteScope オブジェクトをコピーまたは移動できます。

SiteScope オブジェクト	操作と説明
グループ	コピー/貼り付け: モニタ・グループ (サブグループ, モニタ, 警告, レポートを含む) を同じまたは別のモニタ・グループにコピーします。 切り取り/貼り付け: モニタ・グループ (サブグループ, モニタ, 警告, レポートを含む) を別のモニタ・グループに移動します。 テンプレートにコピー: モニタ・グループ (モニタ, 警告, レポートを含む) をテンプレートにコピーします。 注: ▶ モニタ・グループをそのサブグループに移動またはコピーすることはできません。 ▶ 警告やレポートのターゲットであるグループを移動し、その警告やレポートを移動しないと、そのグループは警告やレポートのターゲットから削除されます。 ▶ ベースラインを使用してしきい値を設定したモニタをコピーまたは移動する場合、ベースラインしきい値は一緒にコピーまたは移動されません。

SiteScope オブジェクト	操作と説明
モニタ	コピー/貼り付け: モニタ（警告、レポートを含む）を同じまたは別のモニタ・グループにコピーします。 切り取り/貼り付け: モニタ（警告、レポートを含む）を別のモニタ・グループに移動します。 テンプレートにコピー。 モニタ（警告、レポートを含む）をテンプレートにコピーします。 注: ▶ 警告やレポートのターゲットであるモニタを移動し、その警告やレポートを移動しないと、そのモニタは警告やレポートのターゲットから削除されます。 ▶ モニタをコピーしたら、通常はモニタが対象とするシステムまたはアプリケーションを変更する必要があります。変更しない場合、コピーされたモニタは元のモニタ・インスタンスの監視アクションを複製します。 ▶ ベースラインを使用してしきい値を設定したモニタをコピーまたは移動する場合、ベースラインしきい値は一緒にコピーまたは移動されません。
リモート・サーバ	テンプレートにコピー: リモート・サーバ・プロファイルをテンプレートにコピーします。
テンプレート・コンテナ	貼り付け: テンプレートをテンプレート・コンテナに貼り付けます。
テンプレート	コピー/貼り付け。 テンプレート（グループ、モニタ、警告、レポートを含む）をテンプレート・コンテナにコピーします。
テンプレート・グループ	コピー/貼り付け: テンプレート・グループ（サブグループ、モニタ、警告、レポートを含む）をテンプレート（テンプレートにまだテンプレート・グループが含まれていない場合）またはテンプレート・グループにコピーします。
テンプレート・モニタ	コピー/貼り付け: テンプレート・モニタ（警告、レポートを含む）をテンプレート・グループにコピーします。
警告	コピー/貼り付け: 警告定義を（[警告] タブから）モニタ・ツリーまたはテンプレート・ツリーの同じまたは別の場所（グループまたはモニタ）にコピーします。
レポート	コピー/貼り付け: レポート定義を（[レポート] タブから）モニタ・ツリーまたはテンプレート・ツリーの同じまたは別の場所（グループまたはモニタ）にコピーします。

注：また、モニタ・ツリー・ツールバーの「**モニタとグループの管理**」ボタン  をクリックしても、複数のモニタとグループをターゲット・グループに移動またはコピーできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、67 ページ「**[モニタとグループの管理]** ダイアログボックス」を参照してください。

SiteScope オブジェクトのコピーと移動の詳細については、63 ページ「SiteScope ユーザ・インタフェースの操作」で関連する SiteScope ビューのコンテキスト・メニュー・オプションを展開してください。

参照情報

SiteScope キーボード・ショートカット

次のコマンドは、モニタ・ツリー、テンプレート・ツリー、リモート・サーバ・ツリーで対応するショートカット・キーを押して実行できます。

UI 要素	説明
CTRL+A	[新規警告] ダイアログ・ボックスが開き、新規警告を作成できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1294 ページ「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
CTRL+C	選択した項目をクリップボードにコピーします。
CTRL+D	選択した項目を削除します。
CTRL+F	[新規フィルタ] ダイアログ・ボックスが開き、新規フィルタを作成できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、113 ページ「[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
CTRL+G	[新規グループ] ダイアログ・ボックスが開き、新規グループを作成できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、315 ページ「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
CTRL+J	[テンプレートの選択] / [グループの選択] ダイアログ・ボックスが開き、デプロイするテンプレート、またはテンプレートのデプロイ先にするグループを選択できます。[テンプレートの選択] のユーザ・インタフェースの詳細については、413 ページ「[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。[グループの選択] のユーザ・インタフェースの詳細については、924 ページ「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
CTRL+M	[新規モニタ] ページが開き、新規モニタを作成できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、372 ページ「新規モニタ・ページ」を参照してください。
CTRL+R	[フィルタ] ダイアログ・ボックスで設定したフィルタをクリアします。ユーザ・インタフェースの詳細については、113 ページ「[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

UI 要素	説明
CTRL+V	クリップボードの内容を選択した場所に貼り付けます。
CTRL+X	選択した項目を切り取ってクリップボードに置きます。
DELETE	選択内容を削除します。
F5	ツリーを最新の表示に更新します。

SiteScope ユーザ・インタフェースの操作

本項の内容

- ▶ ツリー・ツールバーのボタン (64 ページ)
- ▶ [モニタとグループの管理] ダイアログボックス (67 ページ)
- ▶ モニタ・ツリー (71 ページ)
- ▶ リモート・サーバ・ツリー (82 ページ)
- ▶ テンプレート・ツリー (83 ページ)
- ▶ プリファレンス・メニュー (92 ページ)
- ▶ サーバ統計メニュー (95 ページ)
- ▶ [ツール] メニュー (97 ページ)
- ▶ [警告] タブのショートカット・メニュー・オプション (101 ページ)
- ▶ [レポート] タブのショートカット・メニュー・オプション (102 ページ)



ツリー・ツールバーのボタン

ツリー・ツールバーから、さまざまな SiteScope ビューで共通の機能を実行できます。

アクセス方法	[モニタ] / [リモート サーバ] / [テンプレート] コンテキストを選択します。ツリー・ツールバーが左上の表示枠に表示されます。
重要な情報	SiteScope ビューによっては使用できないツールバー・ボタンがあります。
関連情報	▶ 71 ページ「モニタ・ツリー」 ▶ 82 ページ「リモート・サーバ・ツリー」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
	新規 : SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、警告、リモート・サーバ、テンプレート）を関連するツリーに追加する。追加できるオブジェクトはコンテキストによって異なります。
	テスト 。サーバとの接続をテストする。 注 : リモート・サーバ・ツリーのツールバーでのみ使用できます。
	詳細テスト : リモート・サーバの実行コマンドの結果を表示するテストを実行する。このテストにより、定義済みユーザの権限を確認できます。 注 : UNIX サーバのリモート・サーバ・ツリーのツールバーでのみ使用できます。
	切り取り : 選択したオブジェクトをツリー内の別の場所に移動する。
	コピー 。選択したオブジェクトのコピーを作成する。
	貼り付け : オブジェクトをツリー内の選択した場所にコピーまたは移動する。
	削除 。選択したオブジェクトをツリーから削除する。

UI 要素	説明
	フィルタ：モニタ・ツリーをフィルタし、定義した基準を満たす SiteScope オブジェクトのみを表示する。 フィルタ・オプションを次から選択します。 ▶ 新規フィルタ。フィルタを作成できる [新規フィルタ] ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、113 ページ「[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ フィルタをクリア。フィルタ設定をクリアする。 ▶ <既存のフィルタのリスト>：既存のフィルタのリストを表示する。次のオプションを指定できます。 ▶ 適用。左側のツリー表示枠にフィルタを適用する。 ▶ 編集。フィルタを編集できる [フィルタの編集] ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、113 ページ「[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ 削除：フィルタ・リストからフィルタを削除する。 注：モニタ・ツリーのツールバーでのみ使用できます。
	モニタとグループの管理：モニタ・ツリー内の複数のグループおよびモニタに対するアクション（コピー、移動、削除、モニタの実行、モニタの有効化 / 無効化、関連する警告の有効化 / 無効化）を実行できる。また、モニタ・ツリー内のオブジェクトのリストをフィルタできます。[モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックスの詳細については、67 ページ「[モニタとグループの管理] ダイアログボックス」を参照してください。 注：モニタ・ツリーのツールバーでのみ使用できます。
	更新。ツリーのデータを更新する。
	すべて折りたたみ：ツリーの分岐をすべて折りたたむ。 注：モニタおよびテンプレート・ツリーのツールバーでのみ使用できます。
	すべて展開：ツリーの分岐をすべて展開する。 注：モニタおよびテンプレート・ツリーのツールバーでのみ使用できます。

UI 要素	説明
	パネルを表示 / 非表示 : ツリーを表示または非表示にし、右側の表示枠を展開または縮小する。
	クリックしてコンテキスト・ボタンの表示を設定する。次のオプションを指定できます。 ▶ Show More Buttons. クリックすると、次に表示率の高い SiteScope コンテキスト・ボタンが左側の表示枠に表示される。このボタンは、一部のコンテキスト・ボタンが表示されていない場合にのみ表示されます。 ▶ Show Fewer Buttons. クリックすると、表示率の最も低い SiteScope コンテキスト・ボタンが左側の表示枠で非表示になる。このボタンは、少なくとも 1 つのコンテキスト・ボタンが表示されている場合にのみ表示されます。 ▶ オプション : SiteScope コンテキスト・ボタンを表示する順序を選択する。順序を並べ替えるには、[上へ移動] ボタンと [下へ移動] ボタンを使用します。左側の表示枠でボタンを非表示にするには、コンテキストのチェック・ボックスをクリアします。標準設定では、すべてのコンテキスト・ボタンが選択されます (左側の表示枠に表示されます)。 ▶ Add or Remove Buttons. コンテキスト・ボタンの表示 / 非表示の状態を表示する。標準設定では、すべてのコンテキスト・ボタンが選択されます (左側の表示枠に表示されます)。ボタンを非表示にするには、コンテキストのチェック・マークをクリアします。

[モニタとグループの管理] ダイアログボックス

このダイアログ・ボックスでは、1 つ以上のグループ、モニタ、または両方を選択し、選択したオブジェクトに対するアクション（コピー、移動、削除、モニタの実行、モニタの有効化/無効化、関連する警告の有効化/無効化）を実行できます。また、フィルタ・オプションを使用して、フィルタ基準に基づいてフィルタを適用したグループとモニタのリストを作成するか、モニタ・ツリー・フィルタで以前定義した既存のフィルタを選択することもできます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーのツールバーで、[モニタとグループの管理]  ボタンをクリックします。
重要な情報	▶ ツールバー・アクションは、ユーザ権限と選択したオブジェクトに従って使用できる。 ▶ 状況コンテナは削除できない。
関連タスク	▶ 311 ページ「グループの管理方法」 ▶ 343 ページ「モニタのデプロイ方法」 ▶ 109 ページ「新しい検索/フィルタ・タグの作成および定義方法」
関連情報	58 ページ「複数のグループやモニタに対するアクションの実行」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
 	フィルタ：モニタ・ツリーをフィルタし、定義した基準を満たす SiteScope オブジェクトのみを表示できる。フィルタを適用した後に、フィルタの名前がボタンに表示されます（フィルタを「モニタとグループの管理」ダイアログ・ボックスで作成した場合はカスタム、それ以外の場合は、モニタ・ツリー・フィルタで定義したフィルタの名前です）。 [フィルタ] ボタン矢印をクリックして、フィルタ・オプションを選択します。 ▶ 新規フィルタ：フィルタを作成できる「新規フィルタ」ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、113 ページ「[新規フィルタ] / [フィルタの編集]ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ フィルタをクリア：フィルタ設定をクリアする。 ▶ <既存のフィルタのリスト>：モニタ・ツリー・フィルタで以前定義した既存のフィルタのリストを表示する。
	すべて選択：リストされたすべての SiteScope オブジェクトを選択する。
	選択を解除：選択をクリアします。
	切り取り：選択したオブジェクトを宛先グループに移動する。 注： ▶ 特定のモニタに定義された警告は、モニタと一緒に転送される。 ▶ モニタを移動すると、モニタ履歴が再起動し、モニタに生成されるレポートはモニタを移動した時点から開始される。履歴データはログ・ファイルに残りますが、モニタの移動後はそのモニタのレポートからアクセスできなくなります。グループの移動は、履歴に影響しません。 ▶ モニタを移動すると、グループとモニタの依存関係が壊れる可能性がある。移動するモニタの状態に依存するグループが 1 つ以上ある場合、モニタの移動後に依存関係を更新します。

UI 要素	説明
	コピー ：宛先グループに貼り付けるために選択したオブジェクトのコピーを作成する。
	貼り付け。選択したオブジェクトを宛先グループに貼り付ける。SiteScope オブジェクトのコピーを作成し、その名前がコンテナ内の既存のオブジェクトと同じである場合、SiteScope では自動的にサフィックス（数字）がオブジェクト名の最後に追加されます。 例：モニタ Mail Flow のコピーを作成し、同じモニタ・グループ内に貼り付けると、SiteScope では自動的に名前が Mail Flow(1) に変更されます。
	削除 ：選択したオブジェクトをモニタ・ツリーから削除する。
	モニタの実行 。選択したモニタ、またはグループ内に設定されている任意のモニタを実行する。結果を表示する情報ウィンドウが開きます。
	モニタの有効化/無効化：モニタ・プロパティの設定に関係なく、選択したモニタまたはグループ内のすべてのモニタを有効化または無効化する [モニタの有効化/無効化] ダイアログ・ボックスを開きます。[無効化] を選択すると、このダイアログ・ボックスに戻って [有効化] を選択するまでモニタは無効になります。ユーザ・インタフェースの詳細については、1163 ページ「[グループ内のモニタの有効化/無効化] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

UI 要素	説明
	関連する警告の有効化/無効化：選択したモニタまたはグループ内のすべてのモニタに関連付けられたすべての警告を有効化または無効化する [関連する警告の有効化/無効化] ダイアログ・ボックスを開く。詳細については、407 ページ「関連する警告の有効化/無効化」を参照してください。
<SiteScope オブジェクト>	アクションは、ツリーのチェック・ボックスを使用して選択したすべてのモニタとグループに適用される。ツリーの表示は、ダイアログ・ボックスへのアクセスおよび関連するアクション全体にわたって保存されます。 ▶ オブジェクトを選択するには、オブジェクト名の左側にあるチェック・ボックスを選択する。グループまたはモニタの任意の組み合わせを選択できます。グループの左側に表示される  アイコンは、そのグループ内に含まれるモニタおよびサブグループのすべてが選択されていないことを示します。 ▶ オブジェクトのコピー先または移動先を選択するには、(チェック・ボックスではなく) オブジェクト名をクリックする。 標準設定値：最上位レベルのグループが表示されるが、オブジェクトは選択されない。

モニタ・ツリー

モニタ・ツリーは、ネットワーク環境内のシステムとサービスの体系を表します。ツリーには、インフラストラクチャ内のコンテナとオブジェクトが含まれます。「ショートカット・メニュー・オプション」では、モニタ・ツリーの各オブジェクトで利用できるさまざまなショートカット・メニュー・オプションについて説明します。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーが左側の表示枠に表示されます。
重要な情報	▶ ツリーのルート・ノードは SiteScope コンテナである。モニタ・ツリーには、SiteScope ノードが 1 つだけ存在します。SiteScope ノードの下にツリーにその他の要素をすべて追加します。 ▶ ノードを選択し、ポップアップ検索ボックスに検索する文字を入力して、モニタ・ツリー内のオブジェクトを検索できる。検索ボックスを閉じるには、ESC キーをクリックします。
関連情報	319 ページ「 SiteScope モニタを使った作業」

モニタ・ツリー・オブジェクト

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
 SiteScope	個々の SiteScope サーバを表す。 親：エンタープライズ・ノードまたはコンテナ。 ツリーへの追加方法：空の SiteScope プロファイルをインポートまたは追加する。
 	SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ（有効化されたモニタを含む，モニタを含まない，または有効化されたモニタがない）を表す。 モニタ・グループまたはサブグループに警告が設定されている場合，グループ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。 モニタ・グループまたはサブグループに管理レポートが設定されている場合，グループ・アイコンの横にレポート  記号が表示されます。 親：SiteScope または SiteScope グループ。 ツリーへの追加方法：グループが定義されている SiteScope を使用して作成，またはインポートする。

UI 要素	説明
	SiteScope モニタ（有効/無効）を表す。 モニタに警告が設定されている場合、モニタ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。 モニタに管理レポートが設定されている場合、モニタ・アイコンの横にレポート  記号が表示されます。 親： SiteScope グループまたはサブグループ，テンプレート，またはソリューション・テンプレート。 ツリーへの追加方法： モニタが設定されている SiteScope を使用して作成，またはインポートする。
	SiteScope モニタの適切な機能をチェックするためにデプロイされる使用可能な状況モニタの集合を表す。 親： SiteScope。 ツリーへの追加方法： SiteScope オブジェクトを使用して自動的に追加される。

SiteScope ショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

メニュー項目	説明
ベースライン設定	SiteScope の下にあるすべてのモニタで、応答時間の変動やインフラストラクチャのパフォーマンスの監視に使用するベースラインを作成できる。 ▶ 計算。 モニタを選択し、ベースラインの計算に使用する関連時間とスケジュールを指定する。また、ベースラインの順守レベルを選択、微調整し、境界を定義できます。 ▶ レビューと有効化。 計算したモニタとベースライン・データのサマリを表示する。現在のモニタ設定の保存、失敗した操作の表示と再試行、ベースライン測定値グラフの表示、ベースライン設定の適用もできます。 ▶ 削除。 ベースラインしきい値を削除、またはベースラインを計算した後に再計算できる。 ▶ 状態レポート。 SiteScope の下にあるすべてのモニタのベースラインの状態に関する情報を表示する。 このトピックの詳細については、333 ページ「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」を参照してください。
テンプレートのデプロイ	グループにデプロイするテンプレートを選択できる [テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、413 ページ「[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
CSV を使用してテンプレートをデプロイ	CSV ファイルを使用してグループにデプロイするテンプレートを選択できる [テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、413 ページ「[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
すべて展開	SiteScope の下のすべてのサブツリーを開く。

メニュー項目	説明
グローバル検索と置換	[グローバル検索と置換] ウィザードを開く。このウィザードでは、モニタ、警告、グループ、プリファレンス、警告アクション、レポートのプロパティのグローバル検索と置換を実行できます。このトピックの詳細については、196 ページ「[グローバル検索と置換] ウィザード」を参照してください。
モニタ・デプロイメント・ウィザード	このメニュー項目は、BSM のシステム可用性管理 (SAM) から SiteScope にアクセスするユーザのみが使用できる。[モニタ デプロイメント ウィザード] が開きます。このトピックの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「モニタ・デプロイメント・ウィザード」を参照してください。
[新規作成] > [警告]	SiteScope の新しい警告を定義できる [新規警告] ウィンドウを開く。このトピックの詳細については、1249 ページ「SiteScope 警告」を参照してください。
[新規作成] > [グループ]	新しい SiteScope グループを定義できる新規グループ・ウィンドウを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、315 ページ「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
貼り付け	選択した（事前にコピーまたは切り取った）SiteScope オブジェクトを SiteScope ノードに貼り付ける。
別の SiteScope から貼り付ける	このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合にシステム可用性管理からのみ使用できる。別の SiteScope から選択した（事前にコピーまたは切り取った）SiteScope オブジェクトを SiteScope ノードに貼り付けます。
[レポート] > [管理/クイック/モニタ/警告]	定義する SiteScope レポートのタイプを選択できる。これらのレポートの詳細については、1331 ページ「SiteScope レポート」を参照してください。
[レポート] > [BSM 設定変更レポート]	このメニュー項目は、SiteScope が BSM に接続されている場合にシステム可用性管理からのみ使用できる。BSM の設定変更のログが表示されます。詳細については、1334 ページ「SiteScope レポート・タイプ」を参照してください。

グループのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

メニュー項目	説明
ベースライン設定	グループ内のすべてのモニタで、応答時間の変動やインフラストラクチャのパフォーマンスの監視に使用するベースラインを作成できる。 ▶ 計算：グループからモニタを選択し、ベースラインの計算に使用する関連時間とスケジュールを指定できます。また、ベースラインの順守レベルを選択、微調整し、境界を定義できます。 ▶ レビューと有効化：グループの計算したモニタとベースライン・データのサマリを表示します。現在のモニタ設定の保存、失敗した操作の表示と再試行、ベースライン測定値グラフの表示、ベースライン設定の適用もできます。 ▶ 削除：ベースラインしきい値を削除、またはベースラインを計算した後に再計算できる。 ▶ 状態レポート：グループ内のすべてのモニタのベースラインの状態に関する情報を表示します。 このトピックの詳細については、333 ページ「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」を参照してください。
コピー	グループとその内容（モニタ、警告、レポート）をモニタ・グループまたはテンプレートにコピーする。 注：ベースラインしきい値が設定されているモニタを含むグループをコピーすると、ベースラインしきい値は静的しきい値（現在のパーセンタイル値）に置換され、モニタはベースライン・モードではなくなります。
別の SiteScope にコピーする	このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合にシステム可用性管理からのみ使用できる。別の SiteScope のグループとその内容（モニタ、警告、レポート）を SiteScope ノードのモニタ・グループまたはテンプレートにコピーします。

メニュー項目	説明
テンプレートにコピー	グループとその内容（モニタ、警告、レポート）をテンプレート・グループにコピーする。このトピックの詳細については、872 ページ「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」を参照してください。
切り取り	グループとその内容（モニタ、警告、レポート）またはモニタとその内容（警告とレポート）をモニタ・グループに移動する。 注： ベースラインしきい値が設定されているモニタを含むグループを移動すると、ベースラインしきい値は静的しきい値（現在のパーセンタイル値）に置換され、モニタはベースライン・モードではなくなります。
削除	グループを削除する。 注： コンテナ・レベルで依存する警告またはレポートがある場合、グループは削除できません。依存関係があるグループを削除するには、各依存関係の [警告ターゲット] と [レポートのターゲット] からグループを削除してから、グループを削除する必要があります。子レベルの依存関係があるグループは削除できます。
テンプレートのデプロイ	グループにデプロイするテンプレートを選択できる [テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、413 ページ「[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
CSV を使用してテンプレートをデプロイ	CSV ファイルを使用してグループにデプロイするテンプレートを選択できる [テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、413 ページ「[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
すべて展開	グループの下のすべてのサブツリーを開く。
グローバル検索と置換	[グローバル検索と置換] ウィザードを開く。このウィザードでは、モニタ、警告、グループ、プリファレンス、警告アクション、レポートのプロパティのグローバル検索と置換を実行できます。このトピックの詳細については、196 ページ「[グローバル検索と置換] ウィザード」を参照してください。

メニュー項目	説明
モニタ・デプロイメント・ウィザード	このメニュー項目は、BSM のシステム可用性管理から SiteScope にアクセスするユーザのみが使用できる。[モニタ デプロイメント ウィザード] が開きます。このトピックの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「モニタ・デプロイメント・ウィザード」を参照してください。
[新規作成] > [警告]	グループの新しい警告を定義できる [新規警告] ウィンドウを開く。このトピックの詳細については、1249 ページ「SiteScope 警告」を参照してください。
[新規作成] > [グループ]	新しい SiteScope グループを定義できる新規グループ・ウィンドウを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、315 ページ「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
[新規作成] > [モニタ]	新しい SiteScope モニタを定義できる新規モニタ・ウィンドウを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、372 ページ「新規モニタ・ページ」を参照してください。
貼り付け	選択したグループとその内容（モニタ、警告、レポート）またはモニタとその内容（警告とレポート）を指定したモニタ・グループに貼り付ける。
別の SiteScope から貼り付ける	このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合にシステム可用性管理からのみ使用できる。別の SiteScope から選択したグループとその内容（モニタ、警告、レポート）またはモニタとその内容（警告とレポート）を指定したモニタ・グループに貼り付けます。
レポート	定義する SiteScope レポートのタイプを選択できる。このトピックの詳細については、1331 ページ「SiteScope レポート」を参照してください。
モニタの実行	グループ内に設定されている任意のモニタを実行し、結果を表示する情報ウィンドウを開く。

モニタのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

メニュー項目	説明
ベースライン設定	特定のモニタの応答時間の変動やインフラストラクチャのパフォーマンスの監視に使用するベースラインを作成できる。 ▶ 計算：モニタを選択し、ベースラインの計算に使用する関連時間とスケジュールを指定できます。また、ベースラインの順守レベルを選択、微調整し、境界を定義できます。 ▶ レビューと有効化：計算したモニタのベースライン・データのサマリを表示します。現在のモニタ設定の保存、失敗した操作の表示と再試行、ベースライン測定値グラフの表示、ベースライン設定の適用もできます。 ▶ 削除：ベースラインしきい値を削除、またはベースラインを計算した後に再計算できる。 ▶ 状態レポート：モニタのベースラインの状態に関する情報を表示します。 このトピックの詳細については、333 ページ「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」を参照してください。
コピー	モニタとその内容（警告とレポート）をモニタ・グループまたはテンプレートにコピーする。 注：ベースラインしきい値が設定されているモニタをコピーすると、ベースラインしきい値は静的しきい値（現在のパーセンタイル値）に置換され、モニタはベースライン・モードではなくなります。
別の SiteScope にコピーする	このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合にシステム可用性管理からのみ使用できる。別の SiteScope のモニタとその内容（警告とレポート）をモニタ・グループまたはテンプレートにコピーします。

メニュー項目	説明
テンプレートにコピー	モニタとその内容（警告とレポート）をテンプレート・グループにコピーする。このトピックの詳細については、872 ページ「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」を参照してください。
切り取り	モニタとその内容（警告とレポート）をモニタ・グループに移動する。 注： ベースラインしきい値が設定されているモニタを移動すると、ベースラインしきい値は静的しきい値（現在のパーセンタイル値）に置換され、モニタはベースライン・モードではなくなります。
削除	モニタを削除する。 注： コンテナ・レベルで依存する警告またはレポートがある場合、モニタは削除できません。依存関係があるモニタを削除するには、各依存関係の 「警告ターゲット」 と 「レポートのターゲット」 からモニタを削除してから、モニタを削除する必要があります。子レベルの依存関係があるモニタは削除できます。
グローバル検索と置換	[グローバル検索と置換] ウィザードを開く。このウィザードでは、モニタ、警告、グループ、プリファレンス、警告アクション、レポートのプロパティのグローバル検索と置換を実行できます。このトピックの詳細については、196 ページ「[グローバル検索と置換]ウィザード」を参照してください。
「新規作成」 > 「警告」	モニタの新しい警告を定義できる 「新規警告」 ウィンドウを開く。このトピックの詳細については、1249 ページ「SiteScope 警告」を参照してください。
貼り付け	選択したモニタのコンテキスト・オブジェクトを指定したモニタに貼り付ける。
別の SiteScope から貼り付ける	このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合にシステム可用性管理からのみ使用できる。別の SiteScope から選択したモニタのコンテキスト・オブジェクトを指定したモニタに貼り付けます。
レポート	定義する SiteScope レポートのタイプを選択できる。このトピックの詳細については、1331 ページ「SiteScope レポート」を参照してください。

メニュー項目	説明
モニタの実行	モニタを実行し、結果を表示する情報ウィンドウを開く。

SiteScope 状況のショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

メニュー項目	説明
ログ記録の無効化	SiteScope 状況のログ記録を無効にする。詳細については、1181 ページ「SiteScope サーバの状況」を参照してください。
ログ記録の有効化	SiteScope 状況のログ記録を有効にする。詳細については、1181 ページ「SiteScope サーバの状況」を参照してください。
すべて展開	SiteScope 状況の下のすべてのサブツリーを開く。
【新規作成】 > 【警告】	状況の新しい警告を定義できる [新規警告] ウィンドウを開く。このトピックの詳細については、1249 ページ「SiteScope 警告」を参照してください。
【新規作成】 > 【グループ】	新しい SiteScope グループを定義できる新規グループ・ウィンドウを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、315 ページ「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
【新規作成】 > 【モニタ】	新しい SiteScope モニタを定義できる新規モニタ・ウィンドウを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、372 ページ「新規モニタ・ページ」を参照してください。
貼り付け	モニタおよびモニタ・グループを状況コンテナに貼り付ける。
欠落している状況モニタの再作成	状況コンテナから削除された状況モニタを復元できる。
レポート	定義する SiteScope レポートのタイプを選択できる。このトピックの詳細については、1331 ページ「SiteScope レポート」を参照してください。
モニタの実行	状況モニタを実行し、結果を表示する情報ウィンドウを開く。



リモート・サーバ・ツリー

モニタ・ツリーは、ネットワーク環境内に設定されているリモート・サーバを表します。「ショートカット・メニュー・オプション」では、リモート・サーバ・ツリーの各オブジェクトで利用できるさまざまなショートカット・メニュー・オプションについて説明します。

アクセス方法	[リモート サーバ] コンテキストを選択する。リモート・サーバ・ツリーが左側の表示枠に表示されます。
関連情報	▶ 503 ページ「リモート・サーバを使った作業」 ▶ 520 ページ「リモート・サーバのプロパティ・ページ」

リモート・サーバ・ツリー・オブジェクト

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
	リモート・サーバ・ビューの Windows/UNIX リモート・サーバ・コンテナを表す。
	Windows/UNIX リモート・サーバを表す。 親 : Windows / UNIX リモート・サーバ・コンテナ。 追加方法 : Windows / UNIX リモート・サーバ・コンテナまたはテンプレート・ツリーで作成する。

リモート・サーバのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

メニュー項目	説明
新規 Microsoft Windows/UNIX リモート・サーバ	新規 Microsoft Windows サーバまたは UNIX サーバを定義できる新規サーバ・ウィンドウを開く。

リモート・サーバのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

メニュー項目	説明
テンプレートにコピー	リモート・サーバをテンプレート・グループにコピーする。このトピックの詳細については、872 ページ「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」を参照してください。
削除	リモート・サーバを削除する。
詳細テスト (UNIX サーバのみ)	リモート・ホストで実行中のコマンドをテストし、定義されたユーザの権限を確認できる。UNIX サーバでのみ使用できます。
テスト	リモート・サーバへの接続をテストできる。

テンプレート・ツリー

モニタ・ツリーには、モニタ・グループへのデプロイメントに使用できる SiteScope ソリューション・テンプレート・セット、テンプレートの例、モニタデプロイメント ウィザードのテンプレート、ユーザ定義のテンプレートが表示されます。「ショートカット・メニュー・オプション」では、テンプレート・ツリーの各オブジェクトで利用できるさまざまなショートカット・メニュー・オプションについて説明します。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーが左側の表示枠に表示されます。
関連情報	▶ 837 ページ「SiteScope テンプレート」 ▶ 969 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレート」 ▶ 893 ページ「SiteScope [テンプレート] ページ」 ▶ 895 ページ「テンプレート・ツリー - [警告] タブ」

テンプレート・ツリー・オブジェクト

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
 SiteScope	個々の SiteScope サーバを表す。 親: エンタープライズ・ノードまたはコンテナ。 ツリーへの追加方法: 空の SiteScope プロファイルをインポートまたは追加する。
	ソリューション・テンプレート・コンテナを表す（使用可能 / 使用不能）。使用可能アイコンのあるライセンスが供与されたソリューション・テンプレートのみを設定できます。 親: SiteScope。
	テンプレート・コンテナを表す。テンプレート・コンテナは、デプロイメントの設定テンプレートの整理に使用されます。 親: SiteScope。 テンプレート・ツリーへの追加方法: テンプレート・コンテナが定義された SiteScope を使用して作成，またはインポートする。
	SiteScope オブジェクトのデプロイ用のテンプレート設定を表す。 親: テンプレート・コンテナ。 テンプレート・ツリーへの追加方法: 作成する。
	SiteScope テンプレート・グループまたはサブグループ（モニタが有効/モニタなしまたはモニタが無効）を表す。 警告がテンプレート・グループまたはサブグループに設定されている場合，グループ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。 管理レポートがテンプレート・グループまたはサブグループに設定されている場合，グループ・アイコンの横にレポート  記号が表示されます。 親: テンプレート。 ツリーへの追加方法: テンプレート・グループが定義された SiteScope を使用して作成，またはインポートする。

UI 要素	説明
	SiteScope テンプレート・モニタを表す（有効/無効）。 警告がテンプレート・モニタに設定されている場合、モニタ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。 管理レポートがテンプレート・モニタに設定されている場合、モニタ・アイコンの横にレポート  記号が表示されます。 親：テンプレート・グループまたはサブグループ、テンプレート、またはソリューション・テンプレート。 ツリーへの追加方法：テンプレート・モニタが設定された SiteScope を使用して作成、またはインポートする。
	Windows / UNIX リモート・サーバを表す。 親：テンプレート。 追加方法：リモート・サーバ・ツリーまたはテンプレート・ツリーで作成する。
	テンプレートのデプロイ時に入力促すプレースホルダとして使用する変数を表す。 親：テンプレート。 テンプレート・ツリーへの追加方法：作成する。

SiteScope ショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

メニュー項目	説明
すべて展開	SiteScope の下のすべてのサブツリーを開く。
[新規作成] > [テンプレート コンテナ]	新しいテンプレート・コンテナを定義できる [新規テンプレート コンテナ] ウィンドウを開く。

ソリューション・テンプレート・コンテナのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

メニュー項目	説明
すべて展開	コンテナ内のすべてのソリューション・テンプレートを表示するように、ソリューション・テンプレート・コンテナを展開します。

ソリューション・テンプレートのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

メニュー項目	説明
コピー	ソリューション・テンプレートをコピーします。テンプレート・ツリーのテンプレート・コンテナにソリューション・テンプレートを貼り付けられます。
テンプレートのデプロイ	ソリューション・テンプレートをデプロイするグループを選択できる [グループの選択] ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、924 ページ「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
CSV を使用してテンプレートをデプロイ	CSV ファイルを使用してテンプレートをデプロイするグループを選択できる [グループの選択] ダイアログ・ボックスを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、924 ページ「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
すべて展開	コンテナ内のすべてのソリューション・テンプレートを表示するように、ソリューション・テンプレート・コンテナを展開します。
XML の生成	ソリューション・テンプレートを自動的にデプロイするために使用する XML ファイルを作成できる自動デプロイメント XML の生成ウィンドウを開きます。このトピックの詳細については、931 ページ「自動テンプレート・デプロイメント」を参照してください。ユーザ・インタフェースの詳細については、929 ページ「自動デプロイメント XML の生成」を参照してください。

テンプレート・コンテナのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

メニュー項目	説明
コピー	テンプレート・コンテナとその内容をコピーします。 SiteScope ルートの下のテンプレート・コンテナ、またはテンプレート・ツリー内で選択したテンプレート・コンテナを貼り付けられます。
切り取り	テンプレート・コンテナとその内容を移動します。SiteScope ルートの下のテンプレート・コンテナ、またはテンプレート・ツリー内で選択したテンプレート・コンテナを貼り付けられます。
削除	テンプレート・コンテナを削除します。
すべて展開	コンテナ内のすべてのテンプレート・オブジェクトを表示するように、テンプレート・コンテナを展開します。
エクスポート	テンプレート・ファイルをエクスポートできるテンプレートのエクスポート・ウィンドウを開きます。
XML の生成	コンテナ内のテンプレートを自動的にデプロイするために使用する XML ファイルを作成できる自動デプロイメント XML の生成ウィンドウを開きます。
インポート	テンプレート・ファイルをインポートできるテンプレートのインポート・ウィンドウを開きます。
[新規作成] > [テンプレート]	新しいテンプレートを定義できる [新規テンプレート] ウィンドウを開きます。
[新規作成] > [テンプレート コンテナ]	新しいテンプレート・コンテナを定義できる [新規テンプレート コンテナ] ウィンドウを開く。
貼り付け	テンプレート・コンテナにテンプレートを貼り付けます。

テンプレートのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

メニュー項目	説明
コピー	テンプレートとその内容をコピーします。テンプレートを、テンプレート・ツリー内のテンプレート・コンテナに貼り付けられます。
切り取り	テンプレートとその内容を移動します。テンプレートを、テンプレート・ツリー内のテンプレート・コンテナに貼り付けられます。
削除	テンプレートを削除します。
テンプレートのデプロイ	テンプレートをデプロイするグループを選択できる [グループの選択] ダイアログ・ボックスを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、924 ページ「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
CSV を使用してテンプレートをデプロイ	CSV ファイルを使用してテンプレートをデプロイするグループを選択できる [グループの選択] ダイアログ・ボックスを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、924 ページ「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
すべて展開	テンプレートのすべてのサブツリーを開きます。
[新規作成] > [グループ]	新しいテンプレート・グループを定義できる新規グループ・ウィンドウを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、315 ページ「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 注: このメニュー項目は、テンプレートにテンプレート・グループが含まれていない場合にのみ使用できます。
[新規作成] > [新規 UNIX リモートサーバ]	新しいリモート UNIX テンプレートを定義できる [新規テンプレート UNIX リモートサーバ] ウィンドウを開きます。 注: このメニュー項目は、テンプレートにリモート・サーバが含まれていない場合にのみ使用できます。

メニュー項目	説明
[新規作成] > [変数]	新しいテンプレート変数を定義できる [新規変数] ウィンドウを開きます。
[新規作成] > [新規 Microsoft Windows リモート サーバ]	新しいリモート NT テンプレートを定義できる [新規テンプレート Microsoft Windows リモート サーバ] ウィンドウを開きます。 注: このメニュー項目は、テンプレートにリモート・サーバが含まれていない場合にのみ使用できます。
貼り付け	テンプレートにテンプレート・グループ、モニタ、または警告を貼り付けます。
変更の適用	テンプレート変更適用ウィザードが開き、デプロイしたグループのテンプレート・コンプライアンスをチェックします。また、テンプレートを更新するたびにテンプレートによってデプロイされる SiteScope オブジェクトを更新できます。

テンプレート変数のショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

メニュー項目	説明
コピー	テンプレート変数をコピーします。テンプレート変数を、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。
切り取り	テンプレート変数を移動します。テンプレート変数を、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。
削除	テンプレート変数を削除します。

テンプレート・リモートのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

メニュー項目	説明
コピー	テンプレート・リモート・サーバをコピーします。テンプレート・リモート・サーバを、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。 注: 1 つのテンプレートに追加できるのは 1 つのテンプレート・リモート・サーバのみです。これは、古いバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートには適用されません。
切り取り	テンプレート・リモート・サーバを移動します。テンプレート・リモート・サーバを、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。 注: 1 つのテンプレートに追加できるのは 1 つのテンプレート・リモート・サーバのみです。これは、古いバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートには適用されません。
削除	テンプレート・リモートを削除します。

テンプレート・グループのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

メニュー項目	説明
コピー	テンプレート・グループとその内容（モニタ、警告、およびサブグループ）をコピーします。テンプレート・グループを、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。
切り取り	テンプレート・グループとその内容（モニタ、警告、およびサブグループ）を移動します。テンプレート・グループを、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。
削除	テンプレート・グループを削除します。
すべて展開	テンプレート・グループのすべてのサブツリーを開きます。
【新規作成】 > 【警告】	テンプレート・グループの新しい警告を定義できる「新規警告」ウィンドウを開きます。このトピックの詳細については、1249 ページ「SiteScope 警告」を参照してください。

メニュー項目	説明
【新規作成】 > 【グループ】	新しいテンプレート・サブグループを定義できる新規グループ・ウィンドウを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、315 ページ「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
【新規作成】 > 【モニタ】	テンプレート・グループの新しい SiteScope モニタを定義できる新規モニタ・ウィンドウを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、372 ページ「新規モニタ・ページ」を参照してください。
貼り付け	選択したテンプレート・グループとその内容（モニタ、警告、およびサブグループ）をテンプレートに貼り付けます。

テンプレート・モニタのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

メニュー項目	説明
コピー	テンプレート・モニタとその内容（警告）をコピーします。テンプレート・モニタを、テンプレート・ツリー内のテンプレート・グループに貼り付けられます。
切り取り	テンプレート・モニタとその内容（警告）を移動します。テンプレート・モニタを、テンプレート・ツリー内のテンプレート・グループに貼り付けられます。
削除	テンプレート・モニタを削除します。
【新規作成】 > 【警告】	テンプレート・モニタの新しい警告を定義できる「新規警告」ウィンドウを開きます。このトピックの詳細については、1249 ページ「SiteScope 警告」を参照してください。
貼り付け	選択したテンプレート・モニタとその内容（警告）をテンプレート・グループに貼り付けます。

 プリファレンス・メニュー

プリファレンス・メニューは、SiteScope で使用できる大部分の管理タスクに関連する特定のプロパティと設定を設定できるプリファレンス・タイプを表します。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキストを選択します。[プリファレンス] メニュー・オプションが左側の表示枠に表示されます。
重要な情報	管理者、または「< プリファレンス・タイプ >の 編集 」権限を付与されたユーザのみが、SiteScope プリファレンスを作成または変更できます。

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<プリファレンスのタイプ>	SiteScope のプリファレンスのタイプは次のとおりです。 ▶ 一般プリファレンス : 標準と任意指定の SiteScope ライセンス・キーの入力, 表示機能の制御, セキュリティ・オプションの設定など, さまざまな設定後のタスクの実行に使用します。詳細については, 611 ページ「一般プリファレンス」を参照してください。 ▶ インフラストラクチャ・プリファレンス : SiteScope の実行方法を決定するグローバル設定の値の定義に使用します。詳細については, 627 ページ「インフラストラクチャ・プリファレンス」を参照してください。 ▶ 統合プリファレンス : SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定するために使用します。詳細については, 659 ページ「統合プリファレンス」を参照してください。 ▶ ログ・プリファレンス : モニタのデータ・ログの累積と保管の制御に使用します。詳細については, 699 ページ「ログ・プリファレンス」を参照してください。 ▶ 電子メール・プリファレンス : SiteScope 電子メール警告と状態レポートに使用される, 電子メール・サーバの設定とプロファイルの定義に使用します。詳細については, 707 ページ「電子メール・プリファレンス」を参照してください。 ▶ ページャ・プリファレンス : SiteScope でのページャ警告の送信に使用する設定と追加のページャ・プロファイルの設定に使用します。詳細については, 717 ページ「ページャ・プリファレンス」を参照してください。 ▶ SNMP プリファレンス : 管理コンソールへのデータ送信時に SiteScope SNMP トラップ警告で使用する設定の定義に使用します。詳細については, 727 ページ「SNMP プリファレンス」を参照してください。

UI 要素	説明
<プリファレンスのタイプ> (つづき)	▶ 共通イベント・マッピング : SiteScope ランタイム・データと、HPOM/BSM サーバに送信されるイベント属性値間のイベント・マッピング・インスタンスを作成するために使用します。詳細については、735 ページ「共通イベント・マッピング」を参照してください。 ▶ スケジュール・プリファレンス : SiteScope モニタと警告の操作を、特定の時間でのみ、または特定の期間中にのみ実行するようにカスタマイズするために使用します。詳細については、749 ページ「スケジュール・プリファレンス」を参照してください。 ▶ ユーザ管理プリファレンス : ほかのユーザが SiteScope にアクセスする方法を制御するユーザのログイン・プロファイルの定義と管理に使用します。詳細については、759 ページ「ユーザ管理プリファレンス」を参照してください。 ▶ 資格情報のプリファレンス : SiteScope リソースの資格情報の作成と管理に使用します。詳細については、785 ページ「資格情報のプリファレンス」を参照してください。 ▶ タグの検索/フィルタ : SiteScope で定義されたタグの検索/フィルタの管理に使用します。コンテキスト・ツリーとプリファレンス・プロファイルの 1 つ以上の項目にタグを割り当て、そのタグをフィルタのオブジェクトとして使用できます。詳細については、797 ページ「タグの検索/フィルタ」を参照してください。 ▶ 証明書管理 : 各証明書で操作を変更した後に SiteScope を再起動せずに、サーバの証明書の追加と削除、およびキーストアの再読み込みを行うために使用します。詳細については、801 ページ「証明書管理」を参照してください。
<プリファレンス>	プリファレンスを表します。追加するには、特定のプリファレンス・コンテナにプリファレンスを作成するか、プリファレンスが定義された SiteScope をインポートします。

 サーバ統計メニュー

[サーバ統計] メニューでは、いくつかの主要な SiteScope サーバのパフォーマンス統計の概要を表示できます。この概要には、SiteScope サーバの負荷、現在実行中と最近実行したモニタと状態データのリスト、Perfex プールのプロセス・マネージャ・サマリと統計、SSH 統計と接続サマリ、Telnet 統計と接続サマリ、SiteScope ログ・ファイルが含まれます。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキストを選択します。[サーバ統計] メニューのオプションが左側の表示枠に表示されます。
重要な情報	管理者、または「 サーバ統計の表示 」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。
関連タスク	1219 ページ「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1212 ページ「サーバ統計の使用」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<メニュー・オプション>	SiteScope で使用可能なモニタ・パフォーマンス・データ・オプションは次のとおりです。 ▶ 一般 : SiteScope サーバ統計を表示します。SiteScope サーバの負荷（実行中モニタ数、待機中モニタ数、実行モニタ数/分）、タイプごとの実行中モニタ数のリストが含まれます。詳細については、1233 ページ「[一般] ページ」を参照してください。 ▶ 実行中のモニタ数 : 実行中の SiteScope モニタ、最近実行されたモニタ、実行された時間、実行で返された状態のリストを表示します。詳細については、1234 ページ「[実行中モニタ] ページ」を参照してください。 ▶ Perfex プロセス・プール : プロセス・マネージャ・サマリ、各プールのプール統計と状態テーブルを表示します。詳細については、1236 ページ「[Perfex プロセス プール] ページ」を参照してください。 ▶ SSH 接続 : リモート UNIX または Windows サーバへの接続にセキュア・シェル (SSH) を使用した場合の SSH 統計と SSH 接続のサマリを表示します。詳細については、1238 ページ「[SSH 接続] ページ」を参照してください。 ▶ Telnet 接続 : リモート UNIX または Windows サーバへの接続に Telnet を使用した場合の Telnet 統計を表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1241 ページ「[Telnet 接続] ページ」を参照してください。 ▶ ログ・ファイル : SiteScope のパフォーマンスの問題の理解、モニタと警告の問題のトラブルシューティング、SiteScope の管理アクションの確認に役立つ、SiteScope のログ・ファイルのリストを表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1242 ページ「[ログ ファイル] ページ」を参照してください。

[ツール] メニュー

[ツール] メニューには、SiteScope の問題のトラブルシューティングに役立ち、モニタ設定を容易にする診断ツールのリストが表示されます。

アクセス方法	[ツール] コンテキストを選択します。[ツール] メニューのオプションが左側の表示枠に表示されます。
重要な情報	▶ 左側の表示枠の [ツール] コンテキストでツールを表示または使用するには、SiteScope の管理者、または「ツールを使用」権限を付与されたユーザである必要があります。 ▶ また、特定のモニタの設定または編集時にも、一部のツールが使用可能です (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限を付与されたユーザのみ)。モニタの設定または編集時にツールが使用可能な場合、次の方法でツールにアクセスできます。 ▶ 新規モニタの設定時に新規モニタのダイアログ・ボックスで、または既存のモニタの設定時にモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールの実行中に、SiteScope ダッシュボードのツールバーで [ツール]  ボタンをクリックします。この操作で、入力にモニタの既存のデータを使用したツールが開いて実行され、[結果] 表示枠にテスト結果が表示されます。 ▶ SiteScope クライアントで SiteScope サーバと異なるマルチバイトのロケールを使用する場合の文字セットの問題を避けるには、master.config ファイルの _httpCharset 設定の値を UTF-8 に設定します。標準設定では、_httpCharset の値は空で、標準設定のサーバのロケールが使用されます。
関連情報	210 ページ「SiteScope ツールの概要」

含まれているツールは次のとおりです (ラベルのない UI 要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
[アプリケーション ツール]	
[Microsoft Windows Media Player ツール]	Microsoft Windows Media Player のストリーミングをテストします。詳細については、237 ページ「Microsoft Windows Media Player ツール」を参照してください。
[ニュース サーバ ツール]	ニュース・サーバが使用可能かどうかをチェックします。詳細については、240 ページ「ニュース・サーバ・ツール」を参照してください。
[Real Media Player ツール]	Real Media Player のストリーミングをテストします。詳細については、247 ページ「Real Media Player ツール」を参照してください。
[共通ユーティリティ ツール]	
[正規表現ツール]	監視する内容のサンプルに対して一致する内容の正規表現をテストします。詳細については、249 ページ「正規表現ツール」を参照してください。
[XSL 変換ツール]	参照可能な XML モニタで監視する XML データのカスタム XSL 変換をテストします。詳細については、273 ページ「XSL 変換ツール」を参照してください。
[データベース ツール]	
[データベース接続ツール]	JDBC または ODBC データベース接続の接続性と設定をチェックします。詳細については、215 ページ「データベース接続ツール」を参照してください。
[データベース情報ツール]	製品とドライバのバージョン、SQL の互換性レベル情報、サポートされている SQL 関数などのデータベース・サーバ・メタデータを取得、表示します。詳細については、219 ページ「データベース情報ツール」を参照してください。
[LDAP 認証状態ツール]	ユーザ認証を要求して LDAP サーバをテストします。詳細については、230 ページ「LDAP 認証ツール」を参照してください。

UI 要素	説明
[メール ツール]	
[メールの送受信 ツール]	テスト・メッセージを送受信してメール・サーバをテストします。詳細については、233 ページ「メールの送受信ツール」を参照してください。
[ネットワーク ツール]	
[DNS ツール]	DNS サーバでドメイン名を解決できるかどうかをテストします。詳細については、222 ページ「DNS 参照ツール」を参照してください。
[ネットワーク状態 ツール]	サーバのネットワーク・インタフェースの状態とアクティブな接続を表示します。詳細については、239 ページ「ネットワーク状態ツール」を参照してください。 注：このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
[Ping ツール]	ネットワーク全体で Ping の送受信テストを実行します。詳細については、243 ページ「Ping ツール」を参照してください。
[トレース ルート ツール]	サーバから別の場所へのトレースルートを実行します。詳細については、262 ページ「トレース・ルート・ツール」を参照してください。
[オペレーティング システム ツール]	
[イベント ログ ツール]	ローカルまたはリモート・サーバの Windows イベント・ログの一部を表示します。詳細については、224 ページ「イベント・ログ・ツール」を参照してください。 注：このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
[パフォーマンス カウンタ ツール]	Win NT パフォーマンス・カウンタのレジストリへの接続性と値をチェックします。詳細については、241 ページ「パフォーマンス・カウンタ・ツール」を参照してください。 注：このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
[プロセス ツール]	ローカルまたはリモート・サーバで現在実行中のプロセスのリストを表示します。詳細については、245 ページ「プロセス・ツール」を参照してください。

UI 要素	説明
[サービス ツール]	現在実行中の Windows サービスのリストを表示します。詳細については、251 ページ「サービス・ツール」を参照してください。 注：このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
[SNMP ツール]	
[SNMP ブラウザ ツール]	SNMP MIB を参照して使用可能な OID を表示します。詳細については、254 ページ「SNMP ブラウザ・ツール」を参照してください。
[SNMP ツール]	指定した SNMP ホストに対して SNMP の get コマンドを実行して OID のリストを取得します。詳細については、258 ページ「SNMP ツール」を参照してください。
[SNMP トラップ ツール]	SNMP が使用可能なデバイスから SiteScope が受信した SNMP トラップのログを表示します。詳細については、260 ページ「SNMP トラップ・ツール」を参照してください。
[Web ツール]	
[FTP ツール]	FTP サーバの可用性と、ファイルを取得可能かどうかをチェックします。詳細については、227 ページ「FTP サーバ・ツール」を参照してください。
[URL ツール]	サーバから URL を要求して、返されたデータを印刷します。詳細については、263 ページ「URL ツール」を参照してください。
[Web サービス ツール]	SOAP が使用可能な Web サービスの可用性をテストします。詳細については、266 ページ「Web サービス・ツール」を参照してください。

[警告] タブのショートカット・メニュー・オプション

[警告] タブのショートカット・メニュー・オプションには、警告で使用可能なさまざまなコンテキスト・メニュー・オプションの説明が含まれます。

アクセス方法	[モニタ] / [テンプレート] コンテキストを選択します。 [警告] タブが右側の表示枠に表示されます。
関連タスク	1276 ページ「警告の設定方法」
関連情報	1249 ページ「SiteScope 警告」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

メニュー項目	説明
コピー	モニタ・ツリーの選択した場所に警告をコピーします。 注： [モニタの警告] / [グループの警告] テーブルの警告でのみ使用可能です。
別の SiteScope にコピーする	このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合にシステム可用性管理 からのみ使用できる。モニタ・ツリーの選択した場所に、別の SiteScope からの警告をコピーします。
削除	警告を削除します。
この警告を無効化する	警告を無効にします。
警告の編集	警告を編集するウィンドウが開き、警告の設定を編集できます。
この警告を有効化する	警告を有効にします。
新規警告	[新規警告] ダイアログ・ボックスが開き、新規警告の定義を作成できます。このタスクの実行方法の詳細については、1276 ページ「警告の設定方法」を参照してください。 注： [モニタの警告] / [グループの警告] テーブルの警告でのみ使用可能です。

メニュー項目	説明
貼り付け	選択した警告を貼り付けます。 注： [モニタの警告] / [グループの警告] テーブルの警告でのみ使用可能です。
すべての子孫の警告を表示	選択したノードのすべての子孫の警告を表示します。
子の警告を表示	選択したノードの直接の子の警告のみを表示します。
テスト	[警告のテスト] ダイアログ・ボックスが開き、警告をテストできます。



[レポート] タブのショートカット・メニュー・オプション

[レポート] タブのショートカット・メニュー・オプションには、モニタ・ツリーの管理レポートで使用可能なさまざまなオプションの説明が含まれます。

説明	[モニタ] または [テンプレート] コンテキストを選択します。[レポート] タブが右側の表示枠に表示されます。
関連タスク	1338 ページ「レポートの作成方法」
関連情報	1331 ページ「SiteScope レポート」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

メニュー項目	説明
選択を解除	選択をクリアする。
レポートのコピー	モニタ・ツリーの選択した場所にレポートをコピーします。 注： [モニタのレポート] / [グループのレポート] テーブルのレポートでのみ使用可能です。
レポートの新規作成	作成する SiteScope レポートのタイプを選択できます。このトピックの詳細については、1334 ページ「SiteScope レポート・タイプ」を参照してください。 注： ▶ [モニタのレポート] / [グループのレポート] テーブルのレポートでのみ使用可能です。 ▶ 管理レポートのみが [レポート] タブに追加されます。
レポートを削除	レポートを削除します。
レポートの編集	レポートを編集するウィンドウが開き、レポートの設定を編集できます。
レポートを生成	レポートを生成します。
レポートの貼り付け	選択したレポートを貼り付けます。 注： [モニタのレポート] / [グループのレポート] テーブルのレポートでのみ使用可能です。
すべて選択	表示されたレポートをすべて選択します。
すべての子孫レポートの表示	選択したノードのすべての子孫レポートを表示します。
子レポートの表示	選択したノードの直接の子レポートのみを表示します。

3

SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理の概要 (106 ページ)
- ▶ フィルタ設定の定義と管理 (107 ページ)
- ▶ 検索/フィルタ・タグを使った作業 (108 ページ)

タスク

- ▶ 新しい検索/フィルタ・タグの作成および定義方法 (109 ページ)

参照情報

- ▶ [タグの検索/フィルタ] のユーザ・インタフェース (112 ページ)

概念

SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理の概要

モニタのデプロイメントを管理するときに、追加されたすべてのオブジェクトを表示する広範囲なツリーの管理が困難な場合があります。SiteScope では、さまざまなフィルタ条件に基づいて表示するツリー内のオブジェクトを選択できます。さまざまな設定タスクに適用できる、異なる条件を使用した複数のフィルタを定義できます。

たとえば、CPU 使用率とディスク領域を監視する SiteScope モニタのみを表示するフィルタを作成できます。このフィルタの結果として、エンタープライズ・ノードのすぐ下に、CPU およびディスク領域モニタのすべての種類を示すツリーが表示されます。

また、コンテキスト・ツリー内の任意のオブジェクトとプリファレンス・プロファイルに検索/フィルタ・タグを割り当て、これらのタグを使用して表示を検索またはフィルタできます。たとえば、特定のオペレーティング・システムで実行されているすべてのモニタにタグを定義できます。

また、ノードを選択し、ポップアップ検索ボックスに検索する文字を入力して、モニタ・ツリー内のオブジェクトを検索することもできます。SiteScope では、検索文字列の最初の 1 字を入力すると同時に検索が開始され、文字列内の文字が最初に一致したオブジェクトが強調表示されます。検索ボックスを閉じるには、Esc キーをクリックします。

フィルタの詳細については、107 ページ「フィルタ設定の定義と管理」を参照してください。

タグの詳細については、108 ページ「検索/フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。

フィルタ設定の定義と管理

[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックスで設定するグローバル・フィルタを作成および使用して、ビューを定義、管理します。

次を使用してフィルタを定義できます。

- ▶ **モニタ名**：ワイルド・カード ("*") と OR 表現を使用して、ツリーに表示される SiteScope オブジェクトをモニタ名でフィルタします。
- ▶ **モニタ タイプ**：たとえば、プロパティに関係なく、すべての CPU モニタを含むフィルタを定義できます。このビューでは、モニタ・ツリーには SiteScope で定義されているすべての CPU モニタが表示されます。
- ▶ **ターゲット サーバ**：たとえば、同じホストが定義されている SiteScope モニタをすべて含むフィルタを定義し、選択したホストを監視するモニタのみを表示できます。
- ▶ **フィルタ・タグ**。特定のタグの値を使用する SiteScope オブジェクトをすべて含むフィルタを定義できます。たとえば、Windows, Linux, AIX, Solaris という値のプラットフォーム・タグがある場合、AIX というタグの値が割り当てられたすべてのオブジェクトをフィルタできます。
- ▶ **モニタの状態（有効 / 無効）**。有効または無効の SiteScope モニタのみを含むフィルタを定義できます。
- ▶ **BSM ログ記録**：BSM へのレポート・データの設定に基づいてモニタを含めるフィルタを定義できます。

注：特定の共通するプロパティに基づいてフィルタを作成するには、グローバル検索と置換を使用します。詳細については、187 ページ「グローバル検索と置換」を参照してください。

定義済みのフィルタがある場合は、モニタ・ツリーの上のドロップダウン・フィルタ・リストに表示されます。リストからフィルタを選択すると、フィルタ選択で定義したオブジェクトのみがツリーに表示されます。

検索/フィルタ・タグを使った作業

左側のツリー表示枠の表示で SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）をフィルタするために使用するカスタム検索タグまたはカスタム・フィルタ・タグを作成します。タグとその値を定義し、それらをエンタープライズ内のさまざまな要素に割り当てます。

たとえば、「Critical」、「High」、「Medium」、「Low」という値を使用する **Priority** というタグを定義します。これらのタグの値をインフラストラクチャ内のさまざまな要素に割り当てます。お客様からのアクセスを 24 時間年中無休でサポートする Web サーバおよびデータベースのモニタには、「**Priority: Critical**」のカテゴリ値を割り当てることができます。新しいフィルタ設定を追加するときには、[フィルタ オプション] セクションで [**タグ**] を選択し、オブジェクトの値に「**Priority:Critical**」を入力して、[**保存**] をクリックします。このフィルタにより、このタグと値が割り当てられている要素のみが表示されます。

タグは、<tag> 属性を使用して警告テンプレートでも使用できます。

<tag:[tagName]> プロパティを使用することで、フィルタ・タグ内の値を警告内のパラメータとして含めることができます。この方法により、SiteScope 10.00 で削除されたカスタム・プロパティ・メカニズムに似た機能を提供できます。

たとえば、値 **Apache** がモニタに割り当てられた **AppServer** というタグあり、モニタ用に設定された警告テンプレートに<tag:AppServer>を含めます。警告がトリガされた場合、警告テキストの新しいプロパティが **Apache** に置き換えられます。警告テンプレート・プロパティの詳細については、1283 ページ「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。

タスク

新しい検索/フィルタ・タグの作成および定義方法

このタスクでは、新しい検索/フィルタ・タグを定義し、コンテキスト・ツリー内の 1 つ以上の要素に割り当てる手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 109 ページ「検索/フィルタ・タグの作成」
- ▶ 109 ページ「SiteScope ツリー要素への検索/フィルタ・タグの割り当て」
- ▶ 110 ページ「フィルタ設定のタグの定義」

1 検索/フィルタ・タグの作成

検索/フィルタ・タグを追加するには、SiteScope オブジェクトの **[タグの検索/フィルタ]** 表示枠を使用します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、409 ページ「タグの検索/フィルタ」を参照してください。

タグの追加の詳細については、119 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

2 SiteScope ツリー要素への検索/フィルタ・タグの割り当て

ビュー・フィルタの一部としてタグを使用するには、まずコンテキスト・ツリー内の 1 つ以上の要素またはプリファレンス・プロファイルにタグを割り当てる必要があります。タグは、コンテナ、モニタ、グループ、警告など、ツリー内の任意の項目に割り当てることができます。

タグの割り当ては、コンテキスト・ツリー・オブジェクトまたはプリファレンス・プロファイルを追加、インポート、または編集するときに行います。タグは、コンテキスト・ツリー内のすべての種類のオブジェクトのプロパティとして含まれます。

モニタ・ツリー内のオブジェクトの詳細については、71 ページ「モニタ・ツリー」を参照してください。

テンプレート・ツリー内のオブジェクトの詳細については、83 ページ「テンプレート・ツリー」を参照してください。

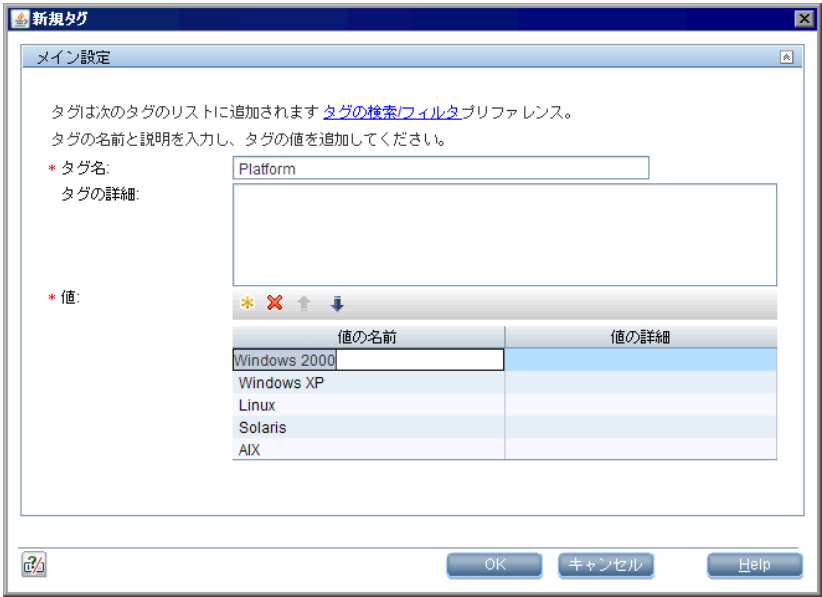
3 フィルタ設定のタグの定義

コンテキスト・ツリーまたはプリファレンス・プロファイルの 1 つ以上の項目にタグを割り当てたら、フィルタのオブジェクトとしてタグを使用できます。

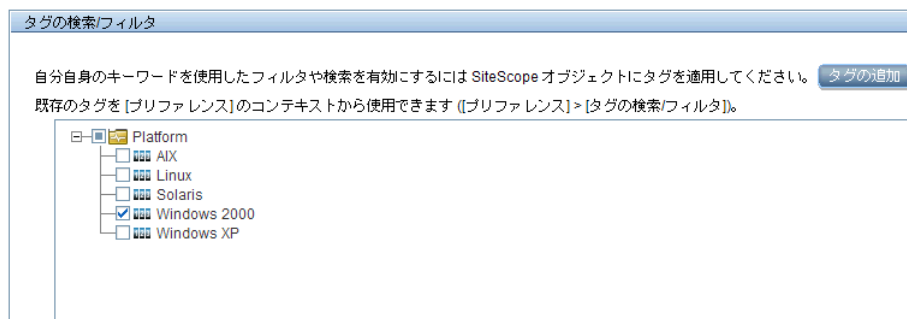
ユーザ・インタフェースでのフィルタの詳細については、113 ページ「[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

例：

モニタが実行されているオペレーティング・システムの種類を示すタグを作成します。タグ **Operating Systems** には、Windows 2000, Windows XP, Solaris, Linux などの値を設定します。



グループの検索/フィルタ設定を開き、**Operating Systems** タグの値として **Windows 2000** を選択し、グループなどのモニタ・ツリーの要素にタグを割り当てます。



この新しいタグを使用して、**Windows** マシンで実行されているモニタのみが表示されるように、モニタ・ツリーのフィルタ設定を定義できます。

参照情報

[タグの検索/フィルタ] のユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ [新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス (113 ページ)
- ▶ [新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス (119 ページ)

[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス

モニタ・ツリーまたは [モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックスで作業中に、このダイアログ・ボックスで新規フィルタの追加、または既存のフィルタの編集ができます。

アクセス方法	コンテキスト・ツールバー（左側のツリー表示枠の上）で、 [フィルタ]  ボタンの横の矢印をクリックして [新規フィルタ] を選択するか、既存のフィルタを選択して [編集] をクリックします。フィルタが適用されたら、フィルタ・アイコンは  として表示されます。フィルタ・オプションは、[モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックスでも利用できます。
関連情報	▶ 106 ページ「SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理の概要」 ▶ 107 ページ「フィルタ設定の定義と管理」 ▶ 64 ページ「ツリー・ツールバーのボタン」

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
[一般設定] (この表示枠は、[モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックスからフィルタにアクセスした場合は表示されません)	
[フィルタ名]	フィルタ名。この名前は、 [フィルタ] 矢印をクリックしたときに選択できるフィルタのリストに表示されます。
[フィルタの説明]	フィルタの詳細。この詳細は、フィルタを編集するときに表示されます。 注： このフィールドは任意指定です。
[パブリック フィルタ]	フィルタの権限を表します。フィルタが公開用の場合、すべてのユーザがフィルタを表示、使用、編集できますが、公開フィルタの所有者のみがこのフィルタを非公開フィルタに変更できます。 公開用以外のフィルタは、現在のユーザのみが表示、使用できます。

UI 要素	説明
[フィルタ オプション]	
[正規表現]	モニタ・ツリーのフィルタに標準の正規表現を使用できます。 選択すると、フィルタ・リストからモニタ名、モニタ・タイプ、タグの値は選択できません。チェック・ボックスをクリアすると、フィルタでは POSIX 正規表現形式が使用されます。 標準設定値： 選択済み
[モニタ名]	ツリーに表示されるオブジェクトをモニタ名でフィルタするには、モニタ名を入力します。 ▶ モニタ名は、モニタの設定時に [一般設定] 領域の [名前] ボックスに入力した文字列です。 ▶ フィルタを拡張するには、正規表現を入力できます。 モニタ・ツリーには、グループ内で、入力した文字列に一致したモニタとそれらのモニタを含むグループのみが表示されます。 例： 表現 <code>/URL Monitor.*¥.gov/</code> は、ドメイン <code>.gov</code> を含むアドレスを使用する文字列 <code>URL Monitor</code> を含むモニタ名すべてに一致します。 注： このフィールドでは大文字と小文字が区別されます。
[モニタ タイプ]	ツリーに表示されるオブジェクトをモニタ・タイプでフィルタするには、モニタ・タイプを入力するか、ブラウズ  ボタンをクリックして [モニタ] リストからフィルタするモニタ・タイプを選択します。 [モニタ タイプのフィルタ] のユーザ・インタフェースの詳細については、116 ページ「[モニタ タイプのフィルタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 注： ▶ 複数のモニタを入力する場合は、カンマ (",") で区切ります。 ▶ モニタ・タイプを入力するときには、正規表現を入力できます。 例： <code>SAP* or CPU*</code>

UI 要素	説明
[ターゲット サーバ]	ツリーに表示されるオブジェクトをターゲット・サーバでフィルタするには、サーバ名を入力するか、ブラウズ・... ボタンをクリックしてターゲット・リストからフィルタするリモート・サーバを選択します。 ▶ ターゲット名は、モニタの設定時に [モニタ設定] 領域の [サーバ] ボックスに入力した文字列です。 ▶ フィルタを拡張するには、正規表現を入力できます。 ツリーには、グループ内で、入力した文字列に一致したターゲット・サーバのモニタとそれらのモニタを含むグループのみが表示されます。 [ターゲット サーバのフィルタ] のユーザ・インタフェースの詳細については、117 ページ「[ターゲット サーバのフィルタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 注: 複数のターゲットを入力する場合は、カンマ (",") で区切ります。
[タグ]	タグの値を入力するか、ブラウズ・... ボタンをクリックしてタグ・リストからフィルタするタグの値を選択します。[フィルタ タグ] のユーザ・インタフェースの詳細については、118 ページ「[フィルタ タグ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 注: ▶ 複数のタグ値を入力する場合は、カンマ (",") で区切ります。 ▶ タグ値のフィルタには、ワイルドカード文字 ("*") と or 表現を使用できます。
[モニタの有効化/無効化]	フィルタするモニタの状態 (有効/無効)。 標準設定値: なし
[HP BSM ログ記録]	フィルタする BSM ログ記録オプション。 ログ記録オプションの詳細については、392 ページ「HP 統合設定」を参照してください。

 [モニタ タイプのフィルタ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスで、SiteScope オブジェクトをフィルタするモニタ・タイプを選択できます。

アクセス方法	コンテキスト・ツールバーで、[フィルタ]  ボタンの横の矢印をクリックして [新規フィルタ] を選択するか、既存のフィルタを選択して [編集] をクリックします。[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックスで、[モニタ タイプ] の横の ブラウズ・... ボタンをクリックします。
関連情報	▶ 106 ページ「SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理の概要」 ▶ 107 ページ「フィルタ設定の定義と管理」 ▶ 113 ページ「[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[使用可能なモニタ タイプ]	使用可能なモニタ・タイプが表示されます。 フィルタに含めるモニタ・タイプを選択し、 [選択されたモニタ タイプへ移動] ボタンをクリックします。選択したモニタ・タイプが [選択されたモニタ タイプ] リストに移動されます。
[選択されたモニタ タイプ]	このフィルタに現在選択されているモニタ・タイプが表示されます。 このリストからモニタ・タイプを削除するには、モニタ・タイプを選択し、 [使用可能なモニタ タイプへ移動] ボタンをクリックします。測定値が [使用可能なモニタ タイプ] リストに移動されます。

[ターゲット サーバのフィルタ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、SiteScope で設定されている選択したサーバ・ターゲットによって SiteScope オブジェクトをフィルタできます。

アクセス方法	コンテキスト・ツールバーで、[フィルタ]  ボタンの横の矢印をクリックして [新規フィルタ] を選択するか、既存のフィルタを選択して [編集] をクリックします。[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックスで、[ターゲット サーバ] の横のブラウズ・  ボタンをクリックします。
関連情報	▶ 106 ページ「SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理の概要」 ▶ 107 ページ「フィルタ設定の定義と管理」 ▶ 113 ページ「[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[使用可能なターゲット サーバ]	SiteScope で使用可能なリモート・サーバが表示されます。フィルタに含めるリモート・サーバを選択し、[選択されたターゲット サーバへ移動] ボタンをクリックします。選択したリモート・サーバが [選択されたターゲット サーバ] リストに移動されます。
[選択されたターゲット サーバ]	このフィルタに現在選択されているリモート・サーバが表示されます。 このリストからリモート・サーバを削除するには、リモート・サーバを選択し、[使用可能なターゲット サーバへ移動] ボタンをクリックします。測定値が [使用可能なターゲット サーバ] リストに移動されます。

 [フィルタ タグ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスで、SiteScope オブジェクトをフィルタするタグの値を選択できます。

アクセス方法	コンテキスト・ツールバーで、[フィルタ]  ボタンの横の矢印をクリックして [新規フィルタ] を選択するか、既存のフィルタを選択して [編集] をクリックします。[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックスで、[タグ] の横の ブラウズ・... ボタンをクリックします。
関連情報	▶ 106 ページ「SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理の概要」 ▶ 107 ページ「フィルタ設定の定義と管理」 ▶ 113 ページ「[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	タグが作成されている場合は、タグの名前と値が表示されます。フィルタに含めるタグの横にあるチェック・ボックスを選択して、[保存] をクリックします。 概念の詳細については、108 ページ「検索/フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。

[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しい検索/フィルタ・タグを追加できます。

アクセス方法	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、テンプレート、またはプリファレンス・プロファイル）を選択し、[プロパティ] タブまたはプリファレンス・プロファイル・ページの [タグの検索 / フィルタ] 表示枠を開きます。[タグの追加] ボタンをクリックします。
重要な情報	▶ [プリファレンス] コンテキスト（[プリファレンス] > [タグの検索 / フィルタ]）で既存のタグを編集できます。このトピックの詳細については、798 ページ「タグの検索/フィルタの概要」を参照してください。 ▶ SiteScope オブジェクトで参照されている場合、検索/フィルタ・タグまたはタグの値は削除できません。削除するには、すべての SiteScope オブジェクトからタグまたはタグの値を削除する必要があります。 ▶ タグは、<tag> 属性を使用して警告テンプレートでも使用できます。詳細については、1283 ページ「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。
関連タスク	109 ページ「新しい検索/フィルタ・タグの作成および定義方法」
関連情報	108 ページ「検索/フィルタ・タグを使った作業」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
	新規: タグの値を追加します。新しい行がタグの値リストの末尾に追加されます。
	削除: 選択した値をタグから削除します。
	タグ値を高くする: タグ値のリスト内で、選択したタグ値を上に移動します。この方法を使用すると、アルファベット順ではなく、タグ値順に並べ替えることができます。
	タグ値を低くする: タグ値のリスト内で、選択したタグ値を下に移動します。この方法を使用すると、アルファベット順ではなく、タグ値順に並べ替えることができます。

UI 要素	説明
[タグ名]	検索/フィルタ・タグの名前。 最大文字数 : 255 文字
[タグの詳細]	検索/フィルタ・タグの詳細。
[値]	タグに含まれる値。
[値の名前]	タグに含まれる値の名前。各タグには、少なくとも 1 つの値を含める必要があります。モニタ・ツリー内のすべてのオブジェクトのタグ設定を定義または編集するときに、各値はタグ名の子オブジェクトとして表示されます。
[値の詳細]	各値の詳細。この詳細は、タグを編集するときに表示されます。

4

Business Service Management (BSM) と の連携

本章 の内容

概念

- ▶ SiteScope と BSM の通信方法について (122 ページ)
- ▶ 接続の設定 (123 ページ)
- ▶ SiteScope データと BSM の構成アイテムとの統合 (126 ページ)
- ▶ BSM への検出トポロジのレポート (135 ページ)
- ▶ CI のダウンタイム (138 ページ)

タスク

- ▶ IT リソースのパフォーマンスに関するデータの収集方法 (140 ページ)
- ▶ SiteScope-BSM 通信のための SSL の使用方法 (144 ページ)
- ▶ トポロジ・レポートの設定方法 (145 ページ)

参照情報

- ▶ 標準設定で CI タイプが定義されていないモニタ (148 ページ)
- ▶ コンピュータ以外の標準設定の CI タイプがあるモニタ (149 ページ)
- ▶ 測定値ごとの CI をレポートするモニタ (150 ページ)

注意事項と制限事項 (151 ページ)

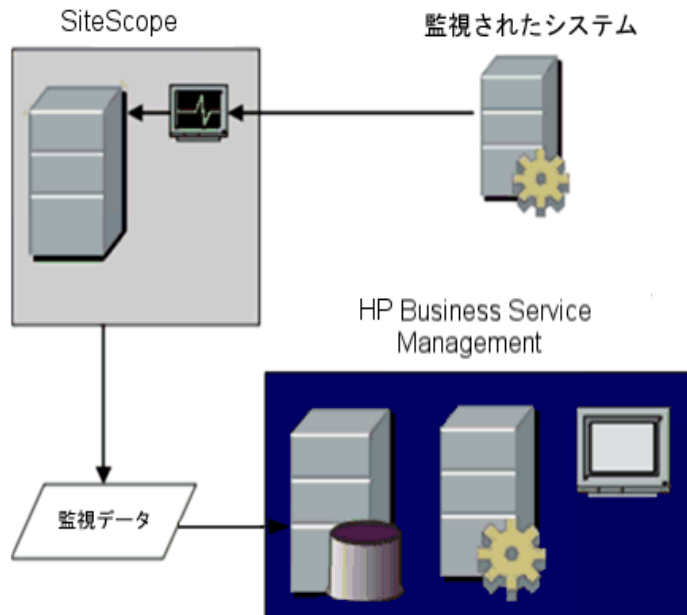
概念

SiteScope と BSM の通信方法について

スタンドアロン・アプリケーションとしての SiteScope は、IT インフラストラクチャのパフォーマンスと可用性を監視するエージェントレス・ソリューションです。SiteScope は、BSM のデータ・コレクタとして使用される場合もあります。BSM では、エンド・ユーザ、ビジネス・プロセス、システムのデータが収集されます。

BSM に対するデータ・コレクタとして設定する場合、SiteScope モニタによって収集されるデータおよび測定値を BSM に渡してレポートおよび分析に使用できます。監視データは、すべてのモニタの監視データ、または選択したモニタの監視データを送信することができます。

次に、SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして使用した図を示します。



BSM には、[システム可用性管理] ページがあります。この機能により、1 つ以上の SiteScope サーバの SiteScope モニタ設定を中央コンソールで管理できます。このレベルの SiteScope の統合は、SiteScope 監視データと BSM の統合とは区別されます。

次の表に、SiteScope 11.00 と互換性のある BSM リリースを示します。

SiteScope のバージョン	Business Service Management のバージョン				
	9.00	8.0x	8.00	7.5x	7.0x
SiteScope 11.00	推奨	サポート	サポート	サポート	サポートされていません

接続の設定

SiteScope および BSM 間の接続を有効にするには、SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定する必要があります。これには、SiteScope を BSM の [システム可用性管理] ページに追加する作業も含まれます。このタスクの詳細については、140 ページ「IT リソースのパフォーマンスに関するデータの収集方法」を参照してください。

接続する BSM サーバが、SiteScope のデータのレポート先となる BSM サーバとは異なるマシン上にある場合、SiteScope の [統合プリファレンス] の [BSM 統合のメイン設定] または [システム可用性管理] の [新規 SiteScope] ページの [分散設定] で、両方のサーバの接続情報を入力する必要があります。

BSM に登録する前に SiteScope で作成されたモニタは、ログ記録オプションが [BSM への測定値レポートを無効化する] に設定されます。BSM にレポートするデータ・コレクタとして SiteScope を設定した後に SiteScope で作成された新しいモニタの場合、標準設定では監視データのログは BSM に記録されます。

ログ記録オプションを変更するには、モニタのプロパティ・ページの **[HP 統合設定]** パネルで、特定のモニタを編集して関連するオプションを選択します。詳細については、392 ページ「**HP 統合設定**」を参照してください。[グローバル検索と置換] ウィザードを使用して、統合を確立する前に作成したモニタのログ記録オプションを更新できます。このウィザードの詳細については、187 ページ「**グローバル検索と置換**」を参照してください。

BSM へのデータのレポートに関するトラブルシューティングの詳細については、151 ページ「**注意事項と制限事項**」を参照してください。

統合プリファレンスの詳細については、675 ページ「**統合プリファレンス・ページ**」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 124 ページ「**SiteScope-BSM 通信のための SSL の使用**」
- ▶ 125 ページ「**SiteScope のデータ送信先となるゲートウェイ・サーバの変更**」

SiteScope-BSM 通信のための SSL の使用

Secure Sockets Layer (SSL) を使用して、SiteScope から BSM サーバにデータを転送できます。ルート認証局で署名された証明書を BSM サーバにインストールしている場合、SiteScope サーバで必要な設定はありません。BSM サーバに自己署名証明書があり、その証明書を使用して SiteScope との通信のセキュリティを保護する場合、144 ページ「**SiteScope-BSM 通信のための SSL の使用方法**」に説明されている手順を実行する必要があります。

注：

- ▶ BSM マシンにインストールされている証明書がルート認証局 (CA) で署名されていない場合にのみ、これらの設定を指定する必要があります。たとえば、Verisign などの認証局によって署名されている証明書を使用している場合、これらの設定を変更する必要はありません。
 - ▶ ほかの SiteScope モニタで使用しているキーストア・ファイルに自己署名証明書をインポートできますが、必須ではありません。BSM サーバの証明書のキーストアは、個別に作成できます。
-

SiteScope のデータ送信先となるゲートウェイ・サーバの変更

SiteScope のデータのレポート先となるゲートウェイ・サーバを変更できます。通常、これは、コンポーネントが複数のサーバにインストールされている BSM デプロイメントでの作業にのみ適用されます。この変更を行うには、[統合プリファレンス] ページの [Business Service Management マシン名/IP アドレス] ボックスに必要なゲートウェイ・サーバの名前または IP アドレスを入力します。また、[システム可用性管理] でゲートウェイ・サーバ名を使用して SiteScope 設定を更新する必要もあります。

注： この機能は、特定の BSM インストールにすでに登録されている SiteScope のゲートウェイ・サーバを変更する場合にのみ使用できます。新しい SiteScope を追加する場合や、異なる BSM システムに SiteScope を接続する場合には、この機能は使用できません。

SiteScope データと BSM の構成アイテムとの統合

データを BSM にレポートする SiteScope にモニタ・インスタンスを追加すると、そのモニタによって、ODB の対応する構成アイテム (CI) が作成されます。構成アイテムの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『ODB Administration Guide』(英語版) の「Configuration Items (CI)」を参照してください。

ODB を設定する SiteScope モニタには、実際のモニタおよびモニタの作成先となるグループがあります。

- ▶ ODB では、実際のモニタ・インスタンスはモニタ CI として表されます。モニタ CI は対応する SiteScope モニタ・インスタンスからデータを受信し、SiteScope モニタ測定値に割り当てられているヘルス・インジケータ (HI) やイベント・タイプ・インジケータ (ETI) とともにそのデータを使用して、キー・パフォーマンス・インジケータ・ステータスを計算します。インジケータには、構成アイテム (CI) の状況の詳細ビューが表示されます。インジケータの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『サービス状況』(PDF) の「状況インジケータ、KPI、KPI のドメイン」を参照してください。
- ▶ ODB では、SiteScope グループはグループ CI として表され、実行しているモニタで作成されたモニタ CI から KPI ステータスを受信します。

本項の内容

- ▶ 127 ページ「モニタ・タイプおよびトポロジ・レポート」
- ▶ 128 ページ「モニタおよび CI 間の関係の作成」
- ▶ 129 ページ「ODB の CI のエイジング」
- ▶ 130 ページ「システム可用性管理のインジケータ割り当て管理」
- ▶ 132 ページ「SiteScope 測定値のインジケータへの割り当て」
- ▶ 133 ページ「状況インジケータを作成する場合」
- ▶ 133 ページ「ディスカバリ・スクリプトとパッケージ・マネージャ」
- ▶ 134 ページ「トポロジ・レポートの制限」

モニタ・タイプおよびトポロジ・レポート

モニタのタイプおよび選択したモニタのオプションに応じて、さまざまなレベルのトポロジ・データが SiteScope から ODB にレポートされます。モニタのタイプは次のとおりです。

- ▶ **テクノロジー統合モニタ**：これらのモニタでは、選択および編集するモニタのトポロジ設定スクリプトに基づいてデータがレポートされます。レポートされるデータは、BSM と密接に統合されています。カスタム・トポロジを作成するか、定義済みスクリプトを使用して、関連するデータを転送できます。これらのモニタの詳細や、トポロジ設定の操作方法の詳細については、450 ページ「テクノロジー統合モニタのトポロジ設定」を参照してください。
- ▶ **サポート対象環境のモニタ**：これらのサポート対象環境では、SiteScope は、モニタの作成時またはその設定の変更時にディスカバリ・プローブのように機能します。[HP 統合設定] 表示枠の [レポート トポロジ] オプションが選択されている場合、SiteScope によってアプリケーションのトポロジが自動的に検出され、関連する CI およびモニタ CI で ODB が設定されます。サポート対象環境の詳細およびリストについては、135 ページ「BSM への検出トポロジのレポート」を参照してください。

これらのモニタ（CI タイプが測定値ごとになっているモニタは除く）のカスタム・トポロジを作成することもできます（150 ページ「測定値ごとの CI をレポートするモニタ」を参照してください）。トポロジの作成の詳細については、145 ページ「トポロジ・レポートの設定方法」を参照してください。

- ▶ **CI タイプが定義されているモニタ**：これらは、テクノロジー統合モニタまたはサポート対象環境のモニタに含まれておらず、定義済み CI タイプを使用してトポロジ・データを BSM に転送できるモニタです。これらのモニタには、SiteScope によってホスト・トポロジが転送されるホストのモニタ（SiteScope では監視対象のホストごとのコンピュータの CI レポートする）や、ホスト以外の標準設定のトポロジがあるモニタなどがあります（これらのモニタのリストについては、149 ページ「コンピュータ以外の標準設定の CI タイプがあるモニタ」を参照してください）。[HP 統合設定] 表示枠の [レポート トポロジ] オプションが選択されている場合、SiteScope によってモニタ CI データとともにトポロジが BSM に転送されます。このオプションの詳細については、392 ページ「HP 統合設定」を参照してください。

また、CI Type が定義されているモニタのカスタム・トポロジを作成することもできます。トポロジの作成の詳細については、145 ページ「トポロジ・レポートの設定方法」を参照してください。

- ▶ **標準設定で CI タイプが定義されていないモニタ** : SiteScope にはホストまたはサーバをレポートしないモニタがあるため、監視する CI タイプを事前に知ることができません。BSM へのレポート時にこれらのモニタのトポロジ・データを含めるには、CI タイプを選択して CI タイプのキー属性を定義し、モニタ・タイプに関連する測定値を特定のインジケータにマップする必要があります。これにより、SiteScope によって ODB にモニタの CI が作成され、モニタ CI データが BSM に転送されます。

標準設定のトポロジが定義されていないモニタのリストについては、148 ページ「標準設定で CI タイプが定義されていないモニタ」を参照してください。これらのモニタのトポロジを作成する方法の詳細については、145 ページ「トポロジ・レポートの設定方法」を参照してください。

モニタおよび CI 間の関係の作成

SiteScope モニタ CI および ODB の既存の CI 間の関係を作成することもできます。この関係を使用すれば、SiteScope から転送されるトポロジで CI が作成されていない場合でも、モニタは関連付けられている CI に KPI ステータスを渡すことができます。

この関係は、次の場所で作成できます。

- ▶ **システム可用性管理** : ODB の既存の CI プロパティ・データを使用する [**モニタ デプロイメント ウィザード**] を使用して、SiteScope のモニタ、グループ、リモート・サーバをデプロイします。このウィザードの使用の詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』(PDF) の「モニタ・デプロイメント・ウィザードの概要」を参照してください。
- ▶ **モデリング・スタジオ** : SiteScope によってホスト・データが BSM に送信され、モデリング・スタジオの [**Monitored by**] 関係を使用してこれらのホストが接続されます。これにより、CI およびモニタ CI 間の論理的な依存関係が作成されます。詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『Modeling』(英語版) ガイドの「Working with Relationships」を参照してください。
- ▶ **SiteScope** : モニタ・インスタンスの編集時に [**HP 統合設定**] の [**CI タイプ**] オプションを手動で選択します。サポート対象環境のモニタと、定義済みトポロジがあるモニタの CI タイプは標準設定で定義されています。詳細については、392 ページ「HP 統合設定」を参照してください。

ODB の CI のエイジング

ODB では、長期間活動のない CI はデータベースから削除されます。SiteScope データから作成された CI も、このエイジング・ポリシーの影響を受けます。ただし、SiteScope により、BSM に送信された CI は BSM に送信されるデータの同期で削除されなくなります。この同期が発生すると、これらの CI のデータが更新され、CI の活動が作成されます。

トポロジの同期間隔の設定の詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』(PDF) の「トポロジ設定」を参照してください。エイジング・メカニズムの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『Modeling』(英語版) ガイドの「Working with CIs」を参照してください。

注：

- ▶ 測定値のフィールドのマッピングを使用する EMS 統合モニタによって作成された総合的なモニタおよびグループは、同期に関係なくエイジング・プロセスの影響を受けます。
 - ▶ エイジングが有効な場合、EMS 統合モニタの CI が ODB から削除されないようにするために、SiteScope のハード同期時に EMS トポロジが再送信されます。また、プロパティ `_reportEmsCIsAsPartOfAntiAging=true` を `master.config` ファイルに追加することで、エイジング対策プロセスでトポロジの再送信を有効化できます。
 - ▶ ODB から CI を削除する場合、([統合プリファレンス] で) SiteScope の再同期またはハード同期を実行するか、SiteScope が再起動して ODB の CI が元に戻るまで待機する必要があります。これは、SiteScope によって未変更の CI が 2 回送信されることを回避する SiteScope の CI キャッシュに起因します。詳細については、682 ページ「BSM プリファレンス利用可能操作」を参照してください。
-

システム可用性管理のインジケータ割り当て管理

注：このセクションは、SiteScope を BSM 9.00 以降に接続するユーザのみを対象としています。

インジケータ・マッピングは、BSM のシステム可用性管理のインジケータ割り当てリポジトリに格納されます。リポジトリには、次の利点があります。

- ▶ BSM では測定値のマッピングを中央管理できる。これにより、大量の SiteScope およびモニタを管理しやすくなります。インジケータ割り当てリポジトリは、[システム可用性管理] の [**メトリクスとインジケータ**] タブから編集できます。
- ▶ モニタ・タイプごとに異なる SiteScope モニタからインジケータに測定値をマッピングできる。特定のモニタ・タイプのインジケータ割り当てを作成、編集、削除できます。
- ▶ 新しいインジケータ割り当てが追加される場合、またはインジケータ割り当てリポジトリで既存の割り当てが変更される場合、BSM に接続されるすべての SiteScope にこれらの変更が適用されます。これにより、SiteScope で作成された新しいモニタ・インスタンスのインジケータが、中央管理されている最新の割り当てに対応するようになります。現在のバージョンの SiteScope に含まれている標準設定の割り当てに戻すには、モニタ・プロパティの [**HP 統合設定**] > [**インジケータ設定**] セクションの [**標準設定にセット**] ボタンをクリックします。

注：ローカルの SiteScope サーバでのインジケータ割り当てを変更する（モニタ測定値のマッピングが変更された）場合：

- ▶ SiteScope によって更新されたマッピングがダウンロードされた場合は、これらの割り当ては中央管理されている割り当てによって上書きされません。
- ▶ 割り当てがインジケータ割り当てリポジトリから削除された場合、ローカル割り当ては自動的に削除されません。また、SiteScope により BSM に古いインジケータの値を送信し続けます。この場合、モニタ測定値に対してほかのインジケータ割り当てを選択する必要があります。
- ▶ インジケータがインジケータ・リポジトリから削除された場合、そのマッピングを使用するモニタ測定値に対してそのほかのインジケータ割り当てを選択する必要があります。

-
- ▶ 以前の SiteScope の測定値をインジケータにマッピングすることで、以前のバージョンの SiteScope との互換性が確保される。
 - ▶ SiteScope でハード同期が実行されると、すべてのインジケータのマッピングが BSM からダウンロードされます。

中央管理されているインジケータの割り当てを「システム可用性管理」で編集する方法の詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』（PDF）の「インジケータ割り当ての設定」を参照してください。

SiteScope 測定値のインジケータへの割り当て

注：このセクションは、SiteScope を BSM 9.00 以降に接続するユーザのみを対象としています。

モニタ・インスタンスを設定する場合は、測定値をインジケータにマッピングすることもできます。SiteScope モニタ測定値は、次のようなモニタ・タイプに基づいてインジケータにマッピングされます。

- ▶ サポート対象環境のモニタおよび定義済みトポロジがあるモニタの場合、標準設定で測定値にインジケータが割り当てられています。これらのモニタの詳細については、127 ページ「モニタ・タイプおよびトポロジ・レポート」を参照してください。標準設定のインジケータ割り当てについては、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』(PDF) の「インジケータ・マッピングの整合」を参照してください。
- ▶ 定義済みトポロジがない SiteScope モニタの場合、さまざまな CI タイプにリンクする可能性があり、1 つのマッピングを設定できないため標準設定のインジケータのマッピングはありません。これらのモニタでは、モニタにリンクする CI タイプの適切なインジケータに測定値をマッピングできます。定義済みトポロジがないモニタのリストについては、148 ページ「標準設定で CI タイプが定義されていないモニタ」を参照してください。

SiteScope で標準設定の測定値のマッピングを変更できます。インジケータのマッピングがローカルの SiteScope で変更されている場合、SiteScope によって BSM から最新のマッピングがダウンロードされても、これらのマッピングは中央管理されているリポジトリのマッピングで上書きされません。これにより、次のことが可能になります。

- ▶ モニタ・インスタンスのインジケータまたはモニタの一部の測定値の上書き。インジケータへの SiteScope 測定値のマッピングの詳細については、147 ページ「インジケータのモニタへのマッピング」を参照してください。ユーザ・インタフェースの詳細については、398 ページ「インジケータ設定」を参照してください。
- ▶ テンプレートで標準設定以外のインジケータの設定。カスタム・トポロジの CI タイプおよび測定値のマッピングは、テンプレートの変数では設定できません（これらは、テンプレートで事前に定義しておく必要があります）。

- ▶ 警告用のインジケータの設定：トリガされた警告の CI タイプは、警告（グループの警告や測定値ごとの CI をレポートするモニタの警告）の設定時に毎回わかっているわけではないので、手動でイベント・タイプ・インジケータを入力したり、警告のイベント・タイプの状態を入力することができます。詳細については、1299 ページ「HP Operations Manager 統合設定」を参照してください。

状況インジケータを作成する場合

- ▶ SiteScope のイベントは、SiteScope のモニタ測定値の状態の変更とトリガされた警告に基づきます。最初のイベントが CI に到着後イベントが作成されます。詳細については、163 ページ「イベントの生成」を参照してください。
- ▶ モニタ・トポロジが ODB に報告されるときに測定値が作成されます。詳細については、135 ページ「BSM への検出トポロジのレポート」を参照してください。

ディスカバリ・スクリプトとパッケージ・マネージャ

注：このセクションは、Business Availability Center バージョン 8.00 以降を統合するユーザを対象としています。トポロジ・データを以前のバージョンの BSM と統合する場合、SiteScope では、SiteScope サーバに保存されている従来のスクリプトが使用されます。

SiteScope がディスカバリ・プローブとして機能できるようにするスクリプトは、BSM サーバの **SiteScope** パッケージに保存されています。アプリケーションのトポロジを検出するように SiteScope が設定されている場合、SiteScope によって BSM サーバから適切なスクリプトがダウンロードされます。アプリケーションの監視時にこのスクリプトを使用してディスカバリが実行されます。

SiteScope パッケージには、スクリプトのほかにビューやエンリッチメントなど、SiteScope に関連する ODB リソースが含まれています。BSM のこのパッケージには、**[管理]** > **[ODB 管理]** > **[設定]** > **[パッケージ マネージャ]** からアクセスできます。パッケージはファクトリ・パッケージです。つまり、パッケージの用意済みの設定で SiteScope のディスカバリを実行できます。パッケージを使った作業の詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『Modeling』（英語版）ガイドの「Package Administration Overview」を参照してください。

注：上級ユーザは、パッケージ内のトポロジ・スクリプトを変更できます。**SiteScope** パッケージでは、**SiteScope** と **データ・フロー管理** で共有している可能性のあるほかのパッケージのスクリプトが使用されます。パッケージのスクリプトの変更は、**データ・フロー管理** にも影響する可能性があります。

BSM へのトポロジのレポート方法に影響するトポロジ・スクリプトを変更すると、それらのトポロジを使用するすべてのアプリケーション (**BSM** のアプリケーションや **オペレーション管理** など) に影響を与える可能性があります。

トポロジ・レポートの制限

BSM にレポートできる **SiteScope** のグループおよびモニタの詳細の文字数は 600 文字に制限されます。グループまたはモニタの詳細の文字数が 600 文字よりも多い場合、**SiteScope** によって最初の 600 文字まで詳細が切り捨てられます。

BSM への検出トポロジのレポート

注：このセクションは、BSM を SiteScope に接続するユーザのみを対象としており、SiteScope から Business Availability Center バージョン 7.50 以降にレポートする場合にのみ該当します。

SiteScope は、ディスカバリ・プローブとして機能でき、選択した環境の監視対象エンティティの階層を検出できます。これらの階層は、SiteScope から BSM にレポートされるトポロジで表されます。トポロジ内の CI は、SiteScope によって監視されるホスト、サーバ、アプリケーションに対応しており、ODB の BSM に作成されます。モニタおよび測定値の CI も作成され、SiteScope によってそのステータスが BSM にレポートされます。CI 間の関係は、SiteScope によってレポートされるトポロジで定義されます。

この機能を有効にするには、モニタ・インスタンスの作成時または設定時に **[HP 統合設定]** 表示枠の **[レポート トポロジ]** オプションを選択します。このオプションがクリアされている場合、ODB で作成された CI は自動的に削除されることはありません。CI に活動がない場合、最終的にエージングによってデータベースから削除されます。または、手動で削除する必要があります。

[トポロジ設定] のユーザ・インタフェースの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』(PDF) の「トポロジ設定」を参照してください。

サポート対象環境

SiteScope および BSM 間の直接接続は、選択した環境の特定のバージョンの BSM でのみ使用できます。SiteScope によってレポートされるモニタの特定のトポロジの詳細については、次を参照してください。

データベース環境：

(Business Availability Center バージョン 8.00 以降を統合する場合に使用可能)

- ▶ SiteScope ヘルプ の『Monitor Reference』(英語版) の「DB2 8.x and 9.x Topology Settings」
- ▶ SiteScope ヘルプ の『Monitor Reference』(英語版) の「Microsoft SQL Server Topology Settings」
- ▶ SiteScope ヘルプ の『Monitor Reference』(英語版) の「Oracle Database Topology Settings」

ERP/CRM アプリケーション環境：

(Business Availability Center バージョン 7.50 以降を統合する場合に使用可能)

- ▶ SiteScope ヘルプ の『Monitor Reference』(英語版) の「SAP CCMS Topology Settings」
- ▶ SiteScope ヘルプ の『Monitor Reference』(英語版) の「SAP Work Processes Topology Settings」
- ▶ SiteScope ヘルプ の『Monitor Reference』(英語版) の「Siebel Application Server Topology Settings」
- ▶ SiteScope ヘルプ の『Monitor Reference』(英語版) の「Siebel Web Server Topology Settings」

SOA 環境 :

(Business Availability Center バージョン 7.50 以降を統合する場合に使用可能)

- ▶ SiteScope ヘルプ の『Monitor Reference』(英語版) の「Web Service Topology Settings」

Web サーバ環境 :

(Business Availability Center バージョン 7.50 以降を統合する場合に使用可能)

- ▶ SiteScope ヘルプ の『Monitor Reference』(英語版) の「Microsoft IIS Server Topology Settings」
- ▶ SiteScope ヘルプ の『Monitor Reference』(英語版) の「WebLogic Application Server Topology Settings」
- ▶ SiteScope ヘルプ の『Monitor Reference』(英語版) の「WebSphere Application Server Topology Settings」

仮想化環境 :

(Business Availability Center バージョン 8.02 以降を統合する場合に使用可能)

- ▶ SiteScope ヘルプ の『Monitor Reference』(英語版) の「Solaris Zones Topology Settings」
- ▶ SiteScope ヘルプ の『Monitor Reference』(英語版) の「VMware Performance Topology Settings」

CI のダウンタイム

ダウンタイムは [プラットフォーム] (管理) の [ダウンタイムの管理] ページを使用して BSM で定義および管理します。ダウンタイム設定の詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『Platform Administration』(英語版) の「Downtime Management - Overview」を参照してください。

SiteScope モニタ、SiteScope 測定値、SiteScope グループ、またはプロファイル CI が BSM がダウンタイム中に検出したダウンタイムの CI に直接リンクしている場合、SiteScope はダウンタイムによる影響を受けます。

現在ダウンタイム状態にある CI の影響を受けるモニタは、すぐにはダウンタイム状態にはなりません。モニタがダウンタイム状態になるまでの時間は次の 2 つのパラメータに影響されます。

- ▶ ダウンタイム要求のための BSM に対する SiteScope によるクエリの間隔 (標準設定のダウンタイム取得頻度値は 15 分)。これは、SiteScope の [プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [一般設定] > [BSM ダウンタイム取得頻度 (分)] で変更できます。
- ▶ BSM での SiteScope のダウンタイム・キャッシュの更新の間隔 (標準設定値は 5 分)。これは、BSM の [管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [インフラストラクチャ設定] で変更できます。
 - ▶ [アプリケーション] を選択します。
 - ▶ [エンド ユーザ/システム可用性管理] を選択します。
 - ▶ [ダウンタイム] テーブルで、[SiteScope ダウンタイム キャッシュ更新間隔 (分)] を見つけます。この値を必要なキャッシュ更新間隔に変更します。

ダウンタイム時に SiteScope で実行されるアクションは、BSM のダウンタイムの設定によって異なります。ダウンタイムは次の情報に対して実行できます。

- ▶ 警告 : ダウンタイムに関連付けられている CI に対して警告は送信されません。
- ▶ レポート : レポートが更新されず、CI のダウンタイムが表示されます。
- ▶ KPI : CI に添付される KPI は更新されず、サービス状況 の CI のダウンタイムが表示されます。
- ▶ 監視 : ダウンタイムに関連付けられているすべての CI に対して SiteScope 監視が停止します。

ダウンタイムになっているモニタは、SiteScope ダッシュボードの [サマリ] 列に "disabled by <Downtime Name> from BSM" と表示されます。モニタに関連付けられていて、現在実行中のダウンタイムの詳細は、[モニタの有効化/無効化] 表示枠の [Monitor Downtime] テーブルに表示されます。詳細については、404 ページ「モニタの有効化/無効化」を参照してください。

モニタが現在ダウンタイムになっている CI の影響を受けていて、モニタの関連付けられている警告にダウンタイムが適用されている場合、ダウンタイムの詳細は [関連する警告の有効化/無効化] 表示枠の [Associated Alerts Downtime] テーブルに表示されます。詳細については、407 ページ「関連する警告の有効化/無効化」を参照してください。

注意事項および制限事項

- ▶ SiteScope から BSM にダウンタイムの要求が行われると、ダウンタイム期間（最大 24 時間）のダウンタイムを取得します。レコードは、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs ディレクトリの audit.log に書き込まれます。このファイルには、新しいダウンタイム、既存のダウンタイムへの変更、削除されたダウンタイムが含まれます。
- ▶ SiteScope が BSM 9.00 に接続されている場合、ダウンタイムのメカニズムは標準設定で有効です。標準設定を変更するには、[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [一般設定] の [ダウンタイム メカニズムの有効化] チェックボックスをクリアします。
- ▶ SPA, Siebel, SOA トポロジではダウンタイムはサポートされていません (Application Management for Siebel/SAP ライセンスがインストールされているかどうかは無関係)。
- ▶ 測定値ごとの CI をレポートするモニタでは、測定値に接続されている CI がダウンタイムにある場合、測定値がダウンタイムに属するモニタに送信されます。これは、『Monitor Reference』（英語版）の「VMware Performance Monitor」および「Solaris Zones Monitor」に適用されます。
- ▶ ダウンタイム情報は システム可用性管理レポートでは使用できません。

タスク

IT リソースのパフォーマンスに関するデータの収集方法

このタスクでは、SiteScope を設定および使用して、IT インフラストラクチャ・コンポーネントのパフォーマンスに関するデータを収集する方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 140 ページ「前提条件」
- ▶ 141 ページ「SiteScope のダウンロードおよびインストール」
- ▶ 141 ページ「インストールした SiteScope の BSM への接続」
- ▶ 142 ページ「SiteScope-BSM 通信オプションのための SSL の設定（任意指定）」
- ▶ 142 ページ「SiteScope の監視構造の作成」
- ▶ 142 ページ「BSM の権限の割り当て」
- ▶ 143 ページ「接続設定の変更（任意指定）」

1 前提条件

データを収集する特定の IT インフラストラクチャ・リソースの緻密な計画を立てる準備をします。指定したインフラストラクチャ・コンポーネントの影響を受けるビジネス・プロセスの情報を含めます。たとえば、SiteScope モニタの実行先となるアプリケーション・サーバ上で実行されている Business Process Monitor が監視しているビジネス プロセスなどです。

2 SiteScope のダウンロードおよびインストール

BSM で、[管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] に移動し、[ダウンロード] をクリックします。SiteScope インストール・ファイル (Windows または Solaris 用) をダウンロードしてローカル・ドライブまたはネットワーク・ドライブに保存します。

SiteScope データ・コレクタを実行するマシンに SiteScope をインストールします。複数のプラットフォームで複数の SiteScope を実行できます。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) を参照してください。

3 インストールした SiteScope の BSM への接続

BSM で、[管理] > [システム可用性管理] に移動します。

SiteScope を [システム可用性管理] に追加します。ユーザ・インタフェースの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「[新規 SiteScope]」ページを参照してください。

概念の詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』(PDF) の「システム可用性管理の概要」を参照してください。

注：

- ▶ BSM からアクセスできない SiteScope を使って作業する場合 (HP Software-as-a-Service など)、接続するには [システム可用性管理] で空のプロファイルの作成し、SiteScope で BSM 用の統合プリファレンスを作成する必要があります。タスクの詳細については、669 ページ「アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法」を参照してください。
 - ▶ 高負荷下で作業している場合は、初めて BSM に接続する前に全モニタを一時停止してください。
-

4 SiteScope-BSM 通信オプションのための SSL の設定（任意指定）

タスクの詳細については、144 ページ「SiteScope-BSM 通信のための SSL の使用方法」を参照してください。

5 SiteScope の監視構造の作成

デプロイするモニタを整理するためのグループおよびサブグループを作成し、これらのグループにモニタを作成します。モニタの設定時に、必要に応じて [BSM Logging] 設定が設定されていることを確認します。監視構造の作成の詳細については、47 ページ「SiteScope の監視用の設定方法」を参照してください。

また、モニタ デプロイメント ウィザードを使用して ODB の既存の CI にモニタをデプロイすることもできます。概念の詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』(PDF) の「モニタ・デプロイメント・ウィザードの概要」を参照してください。

定義が完了したら、SiteScope とそのグループ、およびモニタが CI として ODB に追加され、関連する監視ビューに自動的に関連付けられます。これらは、このビューから別のビューに追加できます。[システム可用性管理] でモニタを編集する場合、[HP BSM Integration Settings] を使用して、既存の CI にモニタを関連付けることができます。たとえば、CPU が監視されているマシンを表す既存の論理 CI に CPU モニタを関連付けることができます。

SiteScope のデータは、サービス状況およびサービス・レベル管理で使用できます。

6 BSM の権限の割り当て

BSM で、[管理] > [プラットフォーム] > [ユーザおよび権限] に移動し、[ユーザ管理] をクリックします。

定義されているユーザごとに、システム可用性管理レポートおよびカスタム・レポートの SiteScope グループとそのサブグループを表示できる権限を割り当てます。詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『Platform Administration』(英語版) の「System Availability Management」を参照してください。

権限の適用方法の詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリにある『システム可用性管理の使用』の「SiteScope へのアクセスと権限モデルの作成」を参照してください。

7 接続設定の変更（任意指定）

接続を作成したら、変更する設定に応じて SiteScope または BSM のいずれかで設定を変更できます。

- ▶ BSM で、[管理] > [システム可用性管理] を選択します。SiteScope のリストで、関連する SiteScope を右クリックして、コンテキスト・メニューから [SiteScope の編集] を選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』（PDF）の [新規 SiteScope] ページを参照してください。
- ▶ SiteScope で、[プリファレンス] コンテキストを開き、[統合プリファレンス] を選択します。BSM の統合プリファレンスを編集します。ユーザ・インタフェースの詳細については、678 ページ「BSM 統合プリファレンス・ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注：BSM への接続を保護するには(認証用に BSM のユーザ名およびパスワードは使用しないため)、SiteScope の基本認証または双方向 SSL のいずれかを設定することをお勧めします。BSM を基本認証を使用するように設定している場合、BSM へのデータおよびトポロジ両方のレポート時に SiteScope の[**認証ユーザ名**] フィールドおよび [認証パスワード] フィールドに入力した同じユーザ名とパスワードが使用されます。BSM が基本認証を使用するように設定されていない場合、送信された資格情報は無視されます。

SiteScope-BSM 通信のための SSL の使用方法

このタスクでは、自己署名証明書を使用して SiteScope および BSM 間のセキュリティ保護された通信を有効にする手順について説明します。

- 1 DER でエンコードされたバイナリ X.509 形式で保存されている自己署名証明書のコピーを、BSM サーバから取得します。通常、証明書ファイルの拡張子は *.cer になります。
- 2 『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) の「SSL を使用するための SiteScope の設定」に説明されている手順を使用して、SiteScope サーバのキーストアに証明書をインポートします。

注：すでに証明書があるため、証明書要求ファイルを作成する必要はありません。

- 3 <SiteScope のルート・ディレクトリ>%groups にある master.config ファイルを、テキスト・エディタを使用して編集します。指定のデータを使用して次の 3 つのエントリを追加します。

```
_sslTrustedCertKeyStoreFile=<path>%<filename>
_sslTrustedCertKeyStorePassword=<keystorepassword>
_sslAcceptAllUntrustedCerts=<boolean>
```

たとえば、master.config ファイルに追加されるエントリは次のようになります。

```
_sslTrustedCertKeyStoreFile=c:%keystores%topaz.keystore
_sslTrustedCertKeyStorePassword=sUp3rS3cr3tP@ssw0RD
_sslAcceptAllUntrustedCerts=false
```

- 4 変更点をファイルに保存します。
- 5 SiteScope サーバを再起動します。

トポロジ・レポートの設定方法

注：CI およびインジケータ に関する十分な知識がある上級ユーザ以外は、インジケータのマッピングの編集や、測定値へのマッピングの追加は行わないでください。

このタスクでは、モニタのトポロジ設定を設定する方法について説明します。また、CI タイプの選択または変更の方法、インジケータへの測定値のマッピング方法についても説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 145 ページ「前提条件」
- ▶ 146 ページ「CI タイプの選択」
- ▶ 147 ページ「インジケータのモニタへのマッピング」
- ▶ 147 ページ「BSM にイベントまたは測定値データをレポートするための設定を選択する（任意指定）」
- ▶ 147 ページ「結果」

1 前提条件

モニタ CI データとともにホスト・トポロジを SiteScope から BSM に転送するには、モニタ・プロパティの **[HP 統合設定]** 表示枠の **[レポート トポロジ]** オプションを選択する必要があります。サポート対象環境のモニタと標準設定で CI タイプが定義されているモニタの場合、このオプションは標準設定で選択されています。

ユーザ・インタフェースの詳細については、393 ページ「BSM 統合データとトポロジ設定」を参照してください。

2 CI タイプの選択

標準設定でトポロジをレポートするモニタの場合（モニタに関連付けられている CI タイプは **[CI タイプ]** フィールドの横の丸括弧内に表示されます），標準設定の選択を使用することも，CI タイプを変更してキー属性を入力し，標準設定の選択を上書きすることもできます。

標準設定でトポロジをレポートしないモニタの場合，**[BSM 統合データとトポロジ設定]** セクションでモニタの **[CI タイプ]** を選択し，CI タイプのキー属性の値を入力します。標準設定でトポロジがレポートされないモニタのリストについては，148 ページ「標準設定で CI タイプが定義されていないモニタ」を参照してください。

注：

- ▶ CI タイプが測定値ごとのモニタ（モニタのリストについては，150 ページ「測定値ごとの CI をレポートするモニタ」を参照）では，CI タイプを変更することはできません。また，CI キー属性は表示されません。
- ▶ モニタのトポロジ設定を変更してから 10 分以内に BSM を再起動した場合，SiteScope の再同期を実行することをお勧めします。これを行うには，**[プリファレンス]** > **[統合プリファレンス]** > **[BSM 統合]** > **[BSM プリファレンス利用可能操作]** を選択し，**[再同期化]** をクリックします。

ユーザ・インタフェースの詳細については，393 ページ「BSM 統合データとトポロジ設定」を参照してください。

3 インジケータのモニタへのマッピング

CI タイプが選択されている場合、[インジケータ 設定] セクションのテーブルは、選択した CI タイプのインジケータ設定が表示されるようにフィルタされます。サポート対象環境のモニタおよび定義済みトポロジがあるモニタの場合、標準設定で測定値にインジケータがマッピングされています。新しい測定値のマッピングを追加することも、既存のマッピングの設定を編集することもできます。

標準設定のインジケータの測定値のマッピングがないモニタの場合、モニタにリンクする CI タイプの適切なインジケータに測定値をマッピングできます。標準設定のインジケータ割り当てについては、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』(PDF) の「インジケータ・マッピングの整合」を参照してください。

トピックの詳細については、132 ページ「SiteScope 測定値のインジケータへの割り当て」を参照してください。

ユーザ・インタフェースの詳細については、398 ページ「インジケータ設定」を参照してください。

4 BSM にイベントまたは測定値データをレポートするための設定を選択する (任意指定)

[BSM 統合データとトポロジ設定] セクションで、[Report metrics to HP Operations agent] および [イベント送信] の両方を選択している場合、SiteScope によりモニタの測定値またはイベントのインジケータを BSM に送信するかどうかを選択できます (両方が サービス状況に影響する可能性があるため)。**[BSM Service Health Prioritization]** セクションでデータ・レポート設定を選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、403 ページ「BSM サービス状況データ・プリファレンス」を参照してください。

5 結果

トポロジ設定を設定したら、[保存] をクリックします。SiteScope によって ODB にモニタの CI が作成され、モニタ CI データが BSM に転送されます。

参照情報

標準設定で CI タイプが定義されていないモニタ

次に、ホストまたはサーバのステータスを監視しないモニタのリストを示します。これらのモニタで CI 情報を BSM にレポートするには、CI タイプを選択して必要な CI のキー属性を入力し、モニタにリンクしている CI タイプに関連するインジケータを選択する必要があります。該当するモニタを次に示します。

- ▶ コンポジット・モニタ
- ▶ ディレクトリ・モニタ
- ▶ e ビジネス・トランザクション・モニタ
- ▶ ファイル・モニタ
- ▶ フォーミュラ・コンポジット・モニタ
- ▶ HP NonStop イベント・ログ・モニタ
- ▶ JMX モニタ (WebLogic を監視しない場合)
- ▶ リンク・チェック・トランザクション・モニタ
- ▶ ログ・ファイル・モニタ
- ▶ Microsoft Windows ダイアルアップ・モニタ
- ▶ Microsoft Windows Media Player モニタ
- ▶ マルチ・ログ・ファイル・モニタ
- ▶ ネットワーク帯域幅モニタ
- ▶ Real Media Player モニタ
- ▶ スクリプト・モニタ
- ▶ SNMP トラップ・モニタ

- ▶ URL モニタ
- ▶ URL 内容モニタ
- ▶ URL リスト・モニタ
- ▶ URL シーケンス・モニタ
- ▶ XML 測定値モニタ

コンピュータ以外の標準設定の CI タイプがあるモニタ

次に、コンピュータ以外の CI タイプを使用して CI 情報を BSM にレポートするモニタのリストを示します。

モニタ	CI タイプ
DB2 8.x および 9.x	db2
JMX	weblogic
Microsoft IIS サーバ	Microsoft-IIS
Microsoft SQL Server	sqlserver
Oracle データベース	oracle
Web サービス	webservice
WebSphere アプリケーション・サーバ	websphere

測定値ごとの CI をレポートするモニタ

次のモニタは、測定値ごとの CI をレポートします。これらのモニタには複数の CI があるため、これらのモニタについて CI とインジケータのマッピングは変更できません。

- ▶ SAP CCMS
- ▶ SAP Work Processes
- ▶ Siebel アプリケーション・サーバ
- ▶ Siebel Web サーバ
- ▶ Solaris ゾーン
- ▶ VMware パフォーマンス

注：モニタのカスタム・トポロジ・ノードを定義し、そのホスト名を指定することができます。この BSM に接続されている SiteScope にリモート・サーバがある場合、リモート・サーバの環境に応じて、CI は Unix または Windows CI タイプに自動的に変更されます。

注意事項と制限事項

このセクションでは、BSM との統合のトラブルシューティングおよび制限事項について説明します。

BSM へのデータのレポート

監視のデプロイメントやネットワーク通信の複雑さによっては、SiteScope が一時的に BSM サーバと通信できなくなることがあります。SiteScope の状況の監視には、BSM サーバへの接続およびデータ転送を監視する複数のモニタが含まれています。

SiteScope が BSM サーバに接続できない場合、SiteScope は引き続き監視データ・ファイルをローカルに記録して保存します。データ・ファイル数が指定したしきい値を超えると、SiteScope は構文 `<SiteScope_root>%cache%persistent%topaz%data<index>.old` を使用してデータ・ファイルをキャッシュ・フォルダに保存します。

注：標準設定では、データ・ファイル数のしきい値が 1,000 ファイルに設定されています。この設定を変更するには、**master.config** ファイルの **_topazMaxPersistenceDirSize** プロパティを変更します。

SiteScope とエージェント・サーバ間の接続が復旧したら、これらのフォルダから **<SiteScope ルート・ディレクトリ>%cache%persistent%topaz%data** フォルダに手動でファイルをコピーする必要があります。大量のアップロード・データによるシステムの過負荷を避けるため、これらのファイルはデータ・フォルダが空の場合にのみコピーすることをお勧めします。**data.old** フォルダの数が指定したしきい値（標準設定は 10 フォルダ）を超えると、最も古いフォルダが削除されます。

注：保持する **data.old** フォルダの数を設定するには、**master.config** ファイルの **_topazMaxOldDirs** プロパティを変更します。

5

Operations Manager 製品との連携

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope が Operations Manager 製品と通信する方法について (154 ページ)
- ▶ イベントの送信 (160 ページ)
- ▶ HP Operations Agent を使用した測定値のレポート (167 ページ)

タスク

- ▶ SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法 (171 ページ)
- ▶ SiteScope を使用して HP Operations Agent に測定値をレポートする方法 (179 ページ)

参照情報

- ▶ SiteScope-Operations エージェントの測定値の整合 (182 ページ)

概念

SiteScope が Operations Manager 製品と通信する方法について

注：このセクションは、SiteScope を BSM 内の オペレーション管理、または HP Operations Manager (HPOM) に接続するユーザのみを対象としており、SiteScope から HPOM または BSM バージョン 9.00 以降にレポートする場合にのみ該当します。

スタンドアロン・アプリケーションとしての SiteScope は、IT インフラストラクチャのパフォーマンスと可用性を監視するエージェントレス・ソリューションです。また、SiteScope は HP Operations Manager (HPOM)、HP Performance Manager、または BSM レポート製品と連動して、エージェントレスとエージェント・ベースのインフラストラクチャ管理の強力な組み合わせも可能にします。

SiteScope では、SiteScope サーバにインストールされた HP Operations Agent を使用して、HPOM、HP Performance Manager、または BSM 製品と通信できます。HP Operations Agent を使用して、SiteScope でイベント・データや測定値データを統合できます。

- ▶ HP Operations Agent は、イベント・データを HPOM 管理サーバまたは、BSM 内のオペレーション管理 に送信します。SiteScope のイベントは、SiteScope のモニタ測定値の状態の変更とトリガされた警告に基づきます。イベント・レポートの有効化の詳細については、160 ページ「イベントの送信」を参照してください。
- ▶ HP Operations Agent は、SiteScope で収集された測定値データのデータ・ストレージとしても機能します。このため、SiteScope で収集された測定値データは、HP Performance Manager および BSM レポート製品から直接使用できます。測定値レポートの有効化の詳細については、167 ページ「HP Operations Agent を使用した測定値のレポート」を参照してください。

注：

- ▶ HP Operations Manager との測定値統合を, SiteScope モニタ測定値と BSM との統合と混同しないでください (詳細は 121 ページ「Business Service Management (BSM) との連携」を参照)。
 - ▶ SiteScope は, バージョン 8.60 以降の HP Operations Agent をサポートしています。
 - ▶ HPOM および オペレーション管理 との統合は, Windows および UNIX プラットフォームで実行される SiteScope でサポートされます。
-

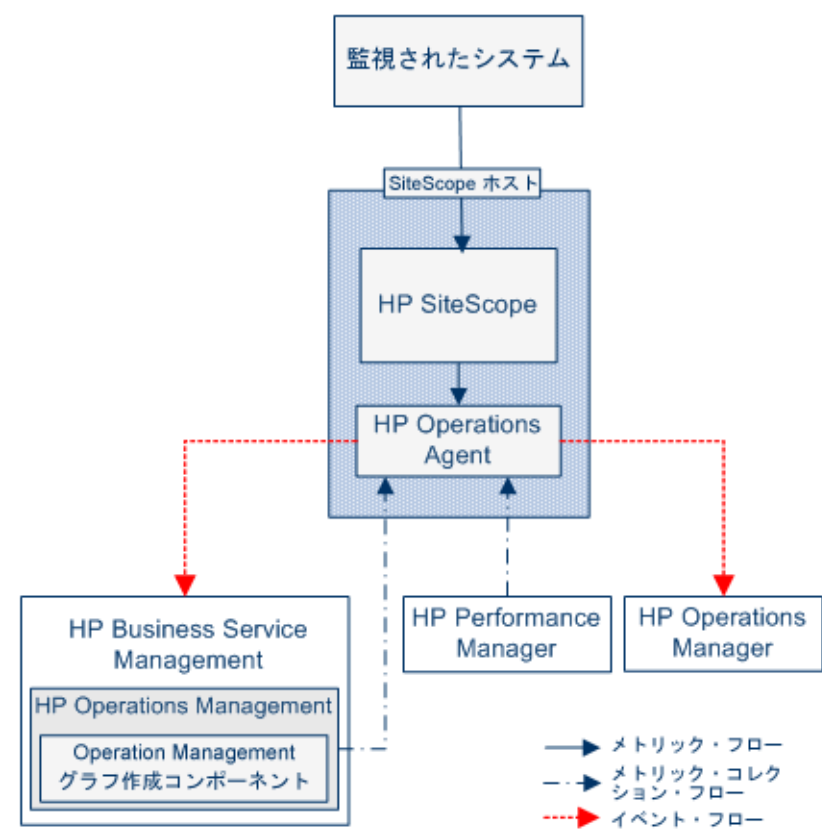
SiteScope と HPOM の機能を組み合わせることで, IT 処理の状態をより包括的かつ詳細に操作することを可能にする, 強力で徹底した監視ソリューションを使用できます。HPOM の使用方法の詳細については, HPOM のマニュアルを参照してください。

本項の内容

- ▶ 156 ページ「イベントおよび測定値のフロー図」
- ▶ 157 ページ「SiteScope-HP Operations Manager サポート・マトリックス」
- ▶ 158 ページ「HP Operations Agent トポロジ」
- ▶ 159 ページ「SiteScope フェールオーバー と Operations Manager の統合」

イベントおよび測定値のフロー図

次の図は, SiteScope とさまざまな HPOM または BSM 製品との間の測定値データとイベントの流れを示しています。



SiteScope-HP Operations Manager サポート・マトリックス

次の表に、SiteScope 11.00 と互換性のある HP Operations Manager のバージョンを示します。

HP SiteScope バージョン	HP Operations Manager for UNIX	HP Operations Manager for Windows
	9.0x	8.1x
SiteScope 11.00	サポート	サポート

注：HP Operations Agent は、次の環境で動作する SiteScope ではサポートされていません（したがって、SiteScope と HPOM または BSM との統合はサポートされていません）。

- RedHat ES/AS Linux 4, 4.3 (32 ビットおよび 64 ビット)。ただし、32 ビット・バージョンのエージェントを使用している場合、Linux 4 および 4.3 (64 ビット) はサポートされます。
 - VMware ESX 2.x, 3.0, 4.0
 - VMware ESX 2.5 via VirtualCenter 2.x
 - VMware ESX 3.x via VirtualCenter 3.x
 - VMware vCenter Server 4.0
 - VMware ESXi 4.0
-

HP Operations Agent トポロジ

SiteScope が HPOM に接続される場合と、HPOM が BSM に接続される場合には、HP Operations エージェント CI が作成されます。

SiteScope が BSM に直接接続される際には、SiteScope の通常のトポロジ・フローに沿ってエージェント CI が作成されます。また、SiteScope によってそのメイン・トポロジ（プロファイル CI）が送信される場合と、HP Operations Manager とのアクティブなイベント統合または測定値統合が存在する場合も、エージェント・トポロジが送信されます。

注：

- ▶ エージェント CI が削除されるのは、イベント統合と測定値統合の両方が削除される場合だけです。
 - ▶ SiteScope が BSM から切断されるときに、エージェント CI は削除されません。これは、接続が HPOM と BSM のどちらを使用して行われているのかを SiteScope が認識しないためです（最終的にはエイジング・プロセスによりエージェント CI は消滅する）。
-

SiteScope フェールオーバー と Operations Manager の統合

SiteScope フェールオーバー を使用してバックアップ監視を行う場合は、HP Operations Agent をフェールオーバー・マネージャ上にインストールする必要があります。これは、プライマリ SiteScope が停止している場合に HPOM 管理 / BSM ゲートウェイ・サーバとの統合のために HP Operations Agent がイベントの送信または測定値データの格納を行えるようにするためです。このエージェントは、SiteScope フェールオーバー のインストール時にインストールすることも、あるいは SiteScope フェールオーバー をインストールした後で SiteScope 設定ツールを使用してインストールすることもできます。

- ▶ **イベント統合の場合** : プライマリ SiteScope が停止した場合、SiteScope フェールオーバー インスタンスがアクティブになり、このインスタンスによってイベントが引き続き HPOM/BSM に送信されます。

注 : この統合を実現するには、フェールオーバーおよびプライマリ SiteScope サーバ上のエージェントを HPOM に接続するとともに、HPOM 内のエージェント・ノードに SiteScope ポリシーをアップロードしてインストールする必要があります。設定の詳細については、『HP SiteScope Failover Guide』を参照してください。

- ▶ **測定値統合の場合** : HPOM レポート・ツールと BSM レポート・ツールを使用し、プライマリ SiteScope とグラフ作成用の SiteScope フェールオーバーの両方を選択することによって、データを継続的にグラフ化できます。

注 : HP Operations Manager および BSM とのイベント統合と HP Operations Manager との測定値統合は、プライマリ SiteScope 上で設定できますが、Microsoft Cluster Service を使用してフェールオーバー監視を行っている場合、これらの統合は高可用性についてサポートされません。

SiteScope フェールオーバー の使用の詳細については、『HP SiteScope Failover Guide』を参照してください。

イベントの送信

注：このセクションは、SiteScope を BSM 内の オペレーション管理、または HP Operations Manager (HPOM) に接続するユーザのみを対象としており、SiteScope から HPOM または BSM バージョン 9.00 以降にレポートする場合にのみ該当します。

SiteScope を使用して、HPOM 管理サーバと、BSM 内の オペレーション管理 に イベントを直接送信できます。SiteScope のイベントは、SiteScope のモニタ測定値の状態の変更とトリガされた警告に基づきます。

SiteScope を使用してイベントを送信するには、HP Operations Agent が SiteScope サーバにインストールされている必要があります。このエージェントは、SiteScope のインストール中に SiteScope インストール・メディアからインストールすることも、あるいは SiteScope をインストールした後で設定ツールを使用してインストールすることもできます。また、HPOM 管理サーバから手動でインストールすることも可能です。ただし、このエージェントが SiteScope に 付属しているものと同じバージョンであるか、付属しているものよりも新しいバージョンでないかぎり、この方法はお勧めできません。

エージェントがインストールされたら、SiteScope の [統合プリファレンス] で 設定する必要があります。この設定では、エージェントのインストール・パス と HPOM 管理 / BSM ゲートウェイ・サーバのホスト名または IP アドレスを入力し、エージェントを HPOM または BSM に接続します。この結果、このエージェントによって接続要求が、証明書要求に応じる HPOM / BSM に送信されます (このクライアントを自動的に受け入れるように HPOM 管理サーバを設定できます)。

HPOM 管理 / BSM ゲートウェイ・サーバで証明書要求が認められた時点で、設定済みのログ・ファイル・ポリシーを SiteScope サーバのエージェント・インストール上にインストールし、署名する必要があります。この処理が完了すると、設定済みの Operations Manager ポリシーが SiteScope によってローカルで自動的に署名されるようになります。このポリシーは SiteScope に付属しており、SiteScope の [統合プリファレンス] にある [HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスからデプロイされます。

イベントがトリガされると、SiteScope によって

HPSiteScopeOperationsManagerIntegration.log ファイルにイベントが書き込まれます。このファイルは、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>%logs** ディレクトリにあります。各イベントはログの個別の行に書き込まれます。ログ・ファイル・ポリシーにより、このファイルを読み取り、HPOM / BSM に送信されるイベント・メッセージを作成するようにエージェントに指示が出されます。

イベント属性の形式は、イベント・マッピング・テンプレートを使用して決定されます。このテンプレートでは、イベントのトリガ時に HPOM 管理 / BSM サーバに送信されたイベント属性値に SiteScope ランタイム・データをマップします。イベント・マッピングの詳細については、736 ページ「共通イベント・マッピングの概要」を参照してください。

データがイベントに変換された後、エージェントによって HPOM 管理 / BSM サーバにイベントが送信されます。イベントは、BSM のオペレーション管理 Event Browser に表示されます(イベント管理ファウンデーションを保有している場合)。オペレーション管理 が BSM インストールに含まれていない場合は、[サービス状況] 内の状況インジケータを介して、CI 状態に影響を及ぼすイベントを表示できます。

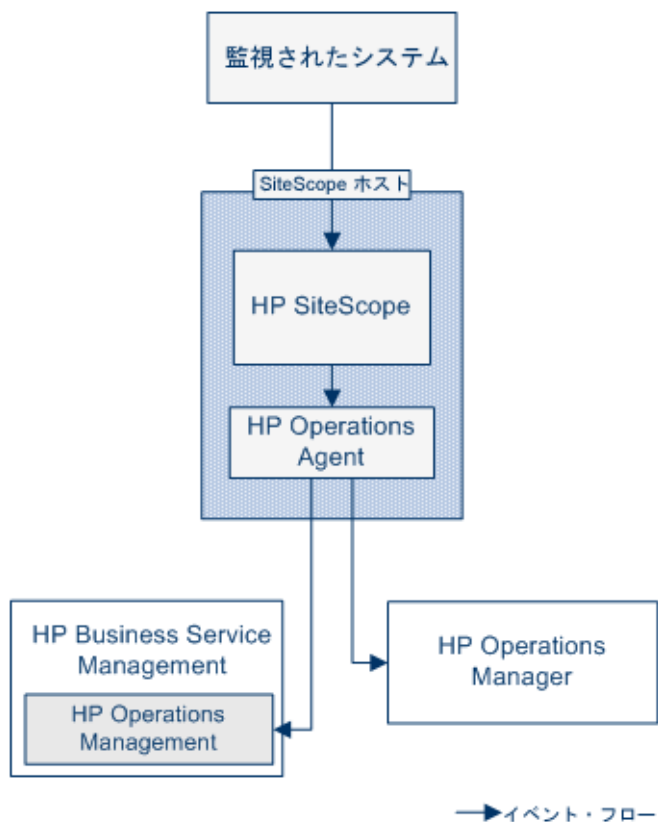
イベントを送信するように SiteScope を設定する方法の詳細については、171 ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 162 ページ「イベントの統合図」
- ▶ 163 ページ「イベントの生成」
- ▶ 165 ページ「ディスカバリ・スクリプトと、HPOM イベントを表示するドリル・ダウン・ユーザ」
- ▶ 166 ページ「トラブルシューティングと制限事項」

イベントの統合図

次の図は、イベントのデータ・フローを示します。



注： HP Operations Agent を、HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ・サーバにレポートするように設定できます（両方にレポートするようには設定できない）。

イベントの生成

モニタの測定値の状態が変更されたとき、または SiteScope 警告がトリガされたときに、イベントを生成して HPOM 管理サーバまたは BSM 内の オペレーション管理 に送信するように設定できます。

- ▶ **状態の変更**：すべての測定値またはカウンタの状態の変更はイベントとなります（たとえば、CPU 使用率のカウンタの状態が「正常」から「エラー」に変更された場合）。モニタのプロパティで、測定値の状態の変更でイベントがトリガされるかどうかを選択できます。標準設定では、モニタ・インスタンスの各測定値の状態の変更に対して SiteScope からイベントが送信されます。

イベントがトリガされたときに使用する、イベントとイベントの属性値を送信する標準設定を変更できます。イベントの属性値は、モニタのプロパティを使用したイベント設定マッピングに従って入力されます。イベント・マッピングの詳細については、736 ページ「共通イベント・マッピングの概要」を参照してください。

モニタのプロパティを送信するだけでなく、SiteScope ではモニタ・インスタンスのヘルス・インジケータまたはイベント・タイプ・インジケータ（インジケータ）も送信します。イベントはインジケータに従って分類されます。BSM イベント・マネージャでは、インジケータを使用して、管理対象の IT 環境における発生タイプ（CPU 負荷など）に従ってイベントを分類します。続いて、CI 状態情報を提供するインジケータが、CI の計算に使用されます。

注：状態の変更は、モニタのしきい値の設定で設定された測定値にのみ適用されます。

- ▶ **警告：** すべての警告がイベントとなります。警告はモニタごとにトリガされるため、警告によってトリガされたイベントはモニタのプロパティを使用できますが、特定の測定値に関連付けられたインジケータは使用できません。このため、イベント警告を設定する際には、警告によってイベントがトリガされるときにレポートされるインジケータを手動で選択できます。この結果インジケータは汎用的に使用されることが多いため、BSM 内の状況インジケータに影響を与えないインジケータを選択する必要があります。警告イベントは、オペレーション管理 で通知目的に限定して使用することをお勧めします。

警告によって HPOM / BSM にイベントを送信するかどうかを、[HP Operations Manager 統合設定] 表示枠の警告定義で選択できます。

注：

- ▶ 警告とモニタの両方にイベント送信を設定すると、SiteScope 警告がトリガされる際に 2 つのイベントが生成される可能性があります。警告にイベント送信を設定する場合は、モニタにはイベント送信を設定しないようにします。
 - ▶ SiteScope では、HPOM に送信される警告にしきい値情報も含められます。SiteScope と BSM の以前のバージョンでは、モニタ用に作成されたしきい値を警告に含めることはできませんでした。
-

ディスカバリ・スクリプトと、HPOM イベントを表示するドリル・ダウン・ユーザ

SiteScope を HPOM と統合すると、HPOM 管理サーバ上のホストとモニタに対して、次の SiteScope-OM 検出ポリシーがアクティブに設定されます。

- ▶ **ノード検出ポリシー**：SiteScope を HPOM に接続すると、SiteScope によって監視されるホストごとに自動的にノードが 1 つ作成され、HPOM 内に登録されます。この結果、SiteScope はその監視対象であるすべてのホストを HPOM にレポートできるようになります。この検出ポリシーを介して HPOM に送信されるのは、イベントをレポートするモニタのホストだけです。
- ▶ **モニタ検出ポリシー**：このポリシーをアクティブにすると（アクティブ化は任意であり、HPOM から手動でアクティブにする必要がある）、SiteScope が HPOM に接続される際に SiteScope によって SiteScope-OM モニタ検出スクリプトが実行されます。この結果、OM Service Navigator で OM サービス・マップ内の SiteScope グループおよびモニタを表示できるようになります。

これらの検出ポリシーはどちらも、SiteScope 内の**統合ビューア・ユーザ**に依存します。これは、HPOM イベントからのドリルダウン用として SiteScope に用意されているユーザです。このユーザには、表示権限と、グループとモニタをリフレッシュする権限が与えられています。ユーザとユーザ権限の詳細については、759 ページ「ユーザ管理プリファレンス」を参照してください。

注：

- ▶ [ユーザ管理プリファレンス] から統合ビューア・ユーザを削除した場合、SiteScope の起動時にこのユーザが自動的に作成されます。
 - ▶ 統合ビューア・ユーザ・プロパティを変更した場合は、SiteScope を再起動してユーザ・プロパティ・ファイルを更新する必要があります。または、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>%conf%siteconnection.properties** ファイル内のユーザ・プロパティを手動で更新することもできます。統合ビューア・ユーザ・プロパティを手動で変更する場合は、SiteScope 暗号化ツールを使用してユーザのログイン名とパスワードを暗号化する必要があります。暗号化ツールの詳細については、946 ページ「テキストの暗号化方法」を参照してください。
-

HPOM 管理サーバで検出ポリシーをデプロイする方法の詳細については、HPOM のマニュアルを参照してください。

トラブルシューティングと制限事項

- ▶ 以前の SiteScope-OM イベント統合 (SiteScope 11.00 よりも前のもの) のアップグレードは、サポートされていません。
- ▶ SiteScope 10.x バージョンは HPOM イベント統合をサポートしていますが、11.00 よりも前の SiteScope バージョンで生成されたイベントは BSM 9.00 内の [サービス状況] と [サービス・レベル管理] に影響しません。
- ▶ HP Operations Agent を使用した HPOM へのイベント送信は、BSM 9.00 の新機能です。HPOM 管理サーバ上に SiteScope Adaptor をインストールする、以前の HPOM 統合ソリューションは現在もサポートされていますが、HP Operations Agent を使用して新しい実装にアップグレードすることをお勧めします。
- ▶ 現在、HPOM と SiteScope を併用しており、HPOM を BSM にアップグレードする計画がある場合、このアップグレードを行うには SiteScope を直接 BSM に接続する必要があります。この接続の結果、SiteScope でトポロジを BSM にレポートできるようになります。SiteScope を BSM に接続する方法の詳細については、121 ページ「Business Service Management (BSM) との連携」を参照してください。
- ▶ モニタ測定値がどのしきい値とも一致しないイベントが SiteScope で送信されると、インジケータ重大度「**正常域**」が HPOM 管理 / BSM ゲートウェイ・サーバに送信されます。
- ▶ SiteScope を BSM に接続すると、新しいホスト上でモニタが作成された後、関連する CI の値を含めずにそのイベントが オペレーション管理 に送信されます (イベントはトポロジが BSM にレポートされる前にトリガされる)。次のイベントが送信されるまで待機しないように設定するには、モニタの [HP 統合設定] > [HP Operations Manager 統合設定] で [最初のイベントを手動で送信] チェック・ボックスを選択します。この処理は、[グローバル検索と置換] を使用してグローバルに実行できます。

- ▶ 次の状況下で SiteScope が監視を停止すると、イベントは（HPOM および BSM との関連において）閉じられず、インジケータ状態は（BSM との関連において）削除されません。
 - ▶ 関連する SiteScope モニタがスキップされたか、あるいは（永久的にまたはスケジューラによって）無効にされたか、中断された
 - ▶ 関連する SiteScope モニタが削除された
 - ▶ SiteScope が BSM へのレポートを停止した（たとえば SiteScope が切断された場合など）

無効に設定されたモニタのインジケータを [サービス状況] または [サービス レベル管理] から除外するためには、BSM 9.00 の [ダウンタイムの管理] を使用することをお勧めします。詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『プラットフォームの管理』（英語版）の「ダウンタイムの管理」を参照してください。

HP Operations Agent を使用した測定値のレポート

注：このセクションは、SiteScope を BSM 内の オペレーション管理 または HP Operations Manager (HPOM) に接続するユーザのみを対象としており、HP Operations Agent を使用して SiteScope から HPOM または BSM バージョン 9.00 以降にレポートする場合にのみ該当します。

SiteScope では、HP Operations Agent を使用して測定値データを HP Performance Manager と BSM (オペレーション管理 のグラフ作成コンポーネント) のレポート製品で使用可能にします。SiteScope を使用して測定値をレポートするには、HP Operations Agent が SiteScope サーバにインストールされている必要があります。

測定値は HP Operations Agent によって収集されるため、HP Operations Agent と HPOM/BSM サーバ間の接続状態に関係なく HP Operations Manager との測定値統合をアクティブ化できます。

SiteScope によって測定値データが収集され、SiteScope ホストにインストールされたエージェント・データ・ストアにそのログが記録されます。

Performance Manager 内でユーザがグラフの描画または設計を行う場合、SiteScope で監視されている Performance Manager で選択されているノードのエージェント・データ・ストアから Performance Manager によって測定値データが収集され、グラフが描かれます。エージェントレス・グラフ作成は、Performance Manager 9.0 でサポートされます。Performance Manager の詳細については、Performance Manager のマニュアルを参照してください。

SiteScope から収集される測定値データは、BSM の一部である オペレーション管理 のグラフ作成コンポーネントでも使用できます。

測定値名の整合、つまり SiteScope の測定値名を HPOM / BSM で使用された名前と合わせるプロセスは、最もよく使用されるいくつかのモニタで実行されています。詳細については、182 ページ「SiteScope-Operations エージェントの測定値の整合」を参照してください。

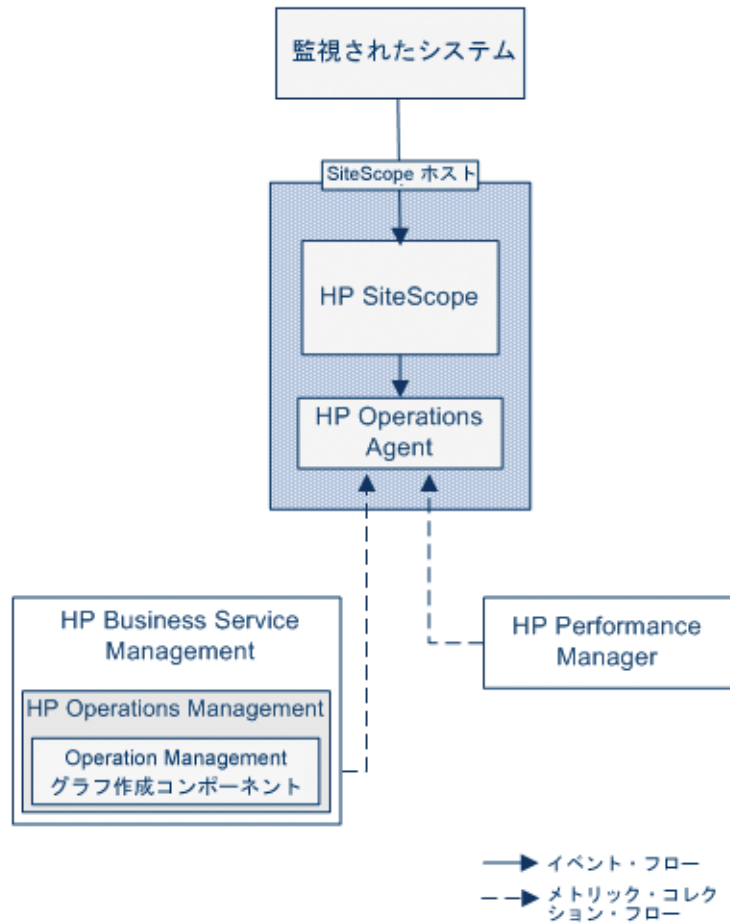
測定値の統合設定の詳細については、179 ページ「SiteScope を使用して HP Operations Agent に測定値をレポートする方法」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 169 ページ「測定値データのフロー図」
- ▶ 170 ページ「トラブルシューティングと制限事項」

測定値データのフロー図

次の図は、測定値のデータ・フローを示します。



トラブルシューティングと制限事項

- ▶ このエージェント・データ・ストアで SiteScope メトリック名に使用できる文字としてサポートされるのは、英数字とアンダースコア (_) だけです。ほかの文字は、サポートされている文字に変換されます (測定値表示名 (見出し) は SiteScope スタイルのままになる)。
- ▶ Web スクリプト・モニタ・データは、オペレーション管理 または HPOM にレポートできません。
- ▶ Performance Manager をオペレーション管理 (BSM 内) のグラフ作成コンポーネントにアップグレードして SiteScope を BSM に接続した後は、履歴レポート・データのアップグレードは行えません。これは、グラフ作成コンポーネントに CI ベースのレポート機能が存在しないためです (履歴レポート・データを古い Performance Manager の方法で表示することは可能)。
- ▶ オペレーション管理 の「manager of managers」構成 (複数の HPOM サーバが オペレーション管理 に接続され、複数の SiteScope が HPOM サーバに接続されるとともにオペレーション管理 に間接的に接続されている状態) では、SiteScope から送信されたデータは オペレーション管理 のグラフ作成コンポーネントでサポートされません。これは、SiteScope がトポロジを オペレーション管理 に送信しないためです。オペレーション管理 のデプロイメント構成の詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『オペレーション管理の使用』(英語版) の「サーバの接続」を参照してください。

タスク

SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法

注：このセクションは、SiteScope を BSM 内の オペレーション管理、または HP Operations Manager (HPOM) に接続するユーザのみを対象としており、SiteScope から HPOM または BSM バージョン 9.00 以降にレポートする場合にのみ該当します。

このタスクでは、SiteScope を使用して HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ・サーバにイベントを送信する方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 172 ページ「前提条件」
- ▶ 172 ページ「SiteScope サーバに HP Operations Agent をインストールする」
- ▶ 173 ページ「接続要求がデータ処理サーバに渡されるように設定する（分散環境の BSM の場合のみ）」
- ▶ 174 ページ「SiteScope サーバでエージェントの接続設定を設定する」
- ▶ 175 ページ「エージェントの接続要求を HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ / Web 処理サーバで受け入れる」
- ▶ 176 ページ「SiteScope サーバにログ・ポリシーをインストールする」
- ▶ 176 ページ「接続状態をチェックして SiteScope サーバからテスト・メッセージを送信（任意指定）」
- ▶ 176 ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する」
- ▶ 177 ページ「モニタ・インスタンスと警告のイベントの送信を有効化 / 無効化」
- ▶ 177 ページ「モニタと警告のイベント・マッピングの設定（任意指定）」
- ▶ 178 ページ「結果」

1 前提条件

SiteScope の管理者、または「**統合プリファレンスの編集**」権限と「**共通イベント マッピングの編集**」権限を付与されたユーザのみが、統合プリファレンスと共通イベント・マッピングを作成または変更できます。詳細については、759 ページ「ユーザ管理プリファレンス」を参照してください。

2 SiteScope サーバに HP Operations Agent をインストールする

HP Operations Agent は、SiteScope のインストール中に SiteScope インストール・メディアからインストールすることも、あるいは SiteScope をインストールした後で設定ツールを使用してインストールすることもできます。このエージェントによって、SiteScope から HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ・サーバにイベント・データを送信できるようになります。

SiteScope のインストール中にエージェントをインストールする方法の詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』（PDF）の「完全インストールの実行」を参照してください。

設定ツールを使用してエージェントをインストールする方法の詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』（PDF）の「SiteScope 設定ツールの使用」を参照してください。

サポート対象環境のリストについては、157 ページ「SiteScope-HP Operations Manager サポート・マトリックス」を参照してください。

注：HP Operations Agent は、リモート HPOM 管理サーバからもインストールできます。ただしこの方法は、インストールされるエージェントのバージョンが現在の SiteScope バージョンに含まれるものと同じであるか、そのバージョンよりも新しいバージョンであることが前提となります。詳細については、HPOM のマニュアルを参照してください。

3 接続要求がデータ処理サーバに渡されるように設定する（分散環境の BSM の場合のみ）

BSM が別々のゲートウェイ・サーバとデータ処理サーバを使用する場合は、次の手順で、ゲートウェイ・サーバで受け取った要求がデータ処理サーバに渡されるようにします。

- a BSM で、[管理] > [プラットフォーム] > [インフラストラクチャ設定] を選択します。
 - [アプリケーション] を選択します。
 - [オペレーション管理] を選択します。
 - [証明書サーバの設定] で、[証明書サーバ ホスト] を見つけます。値を BSM データ処理マシンの名前に変更します。
- b データ処理サーバおよびゲートウェイ・サーバ上でコマンド・プロンプトを開き、次のコマンドを（次に示す順序で）実行します。

ゲートウェイ・サーバ	データ処理サーバ
(1) ovconfchg -ns sec.cm.client -set CERTIFICATE_SERVER <処理サーバ>	
(2) ovcert -certreq	
	(3) ovcm -listpending -l
	(4) ovcm -grant <要求 ID>
(5) ovcert -list	
(6) bbcutil -ping <処理サーバ>	
	(7) bbcutil -ping <ゲートウェイ・サーバ>

4 SiteScope サーバでエージェントの接続設定を設定する

SiteScope の [統合プリファレンス] で、HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ・サーバへの HP Operations Agent の接続設定を設定します。

- a [プリファレンス] > [統合プリファレンス] を選択し、[HP Operations Manager 統合] をクリックして新しい統合を作成するか既存の統合を選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、675 ページ「統合プリファレンス・ページ」を参照してください。
- b [HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで、[HP Operations Agent 接続設定] 表示枠を展開し、エージェントのインストール・パスと HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ・サーバのホスト名または IP アドレスを入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、694 ページ「[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- c [接続] をクリックしてエージェントを HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ・サーバに接続します。エージェントから HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ・サーバに接続要求が送信されます。

ヒント：[分析] ボタンをクリックすると、プロセスの各段階が正常に完了したかを検証できます。分析結果に表示される情報を、問題分析とトラブルシューティングに使用します。たとえば、bbcutil 接続プロトコルを検証することで、エージェントとサーバ間の接続を確認できます。

5 エージェントの接続要求を HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ/Web 処理サーバで受け入れる

▶ HPOM の場合：

HPOM ユーザ・インタフェースで、SiteScope ノードを設定し、証明書要求をこのノードにマップして、証明書要求を受け入れる必要があります。詳細については、HPOM のマニュアルを参照するか、HPOM 管理者にお問い合わせください。

▶ BSM の場合：

BSM をゲートウェイ・サーバ上でのみ実行している場合は、その BSM ゲートウェイ・サーバ上で次の操作を行ってください。BSM を分散環境で実行している場合は、データ処理サーバ上で次の操作を行ってください。

- a (任意) OV 証明書サーバ・プロセスが実行されているかどうかを確認するには、コマンド・ライン **run ovc -status** を実行します。このプロセスが実行されていない場合は、コマンド **ovc -start** を実行するか、BSM 管理者にお問い合わせください。
- b **ovcm -listpending** を実行して、保留中の証明書要求 ID を表示します。
- c **ovcm -grant <要求 ID>** を実行して、証明書要求を承諾します。
- d (任意) 要求番号が使用しているエージェントに一致しているかを確認するには、**ovcm -listpending -l** を実行します。これにより、保留中の要求の詳細リストが返されます。ID ごとに、エージェント・コアの ID が表示されます。
- e 受け入れる予定の要求 ID がエージェントのコア ID に対応していることを確認します。エージェントのコア ID を取得するには、SiteScope で [HP Operations Manager 統合] の [分析] ボタンをクリックするか、SiteScope サーバ上でエージェントの **ovcoreid** コマンドを実行します。

6 SiteScope サーバにログ・ポリシーをインストールする

[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスの [HP Operations Agent 接続設定] 表示枠で、[ポリシーのインストール] をクリックします。事前に設定されたログ・ファイル・ポリシーがエージェント上にインストールされ、署名されます。

7 接続状態をチェックして SiteScope サーバからテスト・メッセージを送信（任意指定）

接続に問題がある場合は、問題の分析を実行してエージェントと証明書要求の状態をチェックできます。[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで、[HP Operations Agent 接続設定] 表示枠を展開して [分析] をクリックします。

エージェントが HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ・サーバに接続されていてメッセージを送信できることをチェックするには、[テスト メッセージ テキスト] ボックスにメッセージを入力し、[テスト メッセージ送信] をクリックします。テストが成功すると、HPOM コンソールにテキスト・メッセージが表示されます。このメッセージは、基本的な `opcmmsg` ポリシー・コマンドによって生成されます。

8 SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する

- a [HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで、[Event Integration Settings] 表示枠を展開して [共通イベント統合の有効化] を選択し、SiteScope で HPOM / BSM にイベントを送信できるようにします。
- b エージェントが HPOM / BSM にイベントを送信できることをチェックするには、[テスト イベント送信] をクリックします。SiteScope によってログにテスト・イベントが書き込まれ、エージェントによってこのログが HPOM / BSM に送信されます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、697 ページ「共通イベント設定」を参照してください。

9 モニタ・インスタンスと警告のイベントの送信を有効化 / 無効化

標準設定では、新たに作成された各モニタ・インスタンスは、各測定値状態変更のイベントを送信するように設定されます。また、新しい警告はそれぞれ、トリガ時にイベントを送信するように設定されます。旧バージョンの SiteScope からアップグレードされたモニタと警告は、イベントを送信するように設定されません。

- ▶ モニタ・インスタンスのイベントの送信を無効にするには、選択したモニタ・インスタンスのモニタ・プロパティで **[HP 統合設定] > [HP Operations Manager 統合設定]** を展開して、**[イベント送信]** チェック・ボックスをクリアします。ユーザ・インタフェースの詳細については、400 ページ「HP Operations Manager 統合設定」を参照してください。
- ▶ 警告のイベントの送信を無効にするには、**[新規警告]** または **[警告の編集]** ダイアログ・ボックスで **[HP Operations Manager Integration Settings]** 表示枠を展開して、**[イベント送信]** チェック・ボックスをクリアします。ユーザ・インタフェースの詳細については、1299 ページ「HP Operations Manager 統合設定」を参照してください。

注：**[イベント送信]** 設定は、**[HP Operations Manager 統合]** ダイアログ・ボックスの **[Event Integration Settings]** 表示枠で **[共通イベント統合の有効化]** が選択されている場合にのみアクティブになります。

10 モニタと警告のイベント・マッピングの設定（任意指定）

モニタ・インスタンスと警告は、イベントがトリガされたときに使用する共通イベント・マッピングに割り当てられます。これは SiteScope ランタイム・データと送信されるイベントの属性値との間のマッピングです。

モニタまたは警告に関連付けられた標準設定のイベント・マッピングを使用するか、異なるイベント・マッピングを選択するか（存在する場合）、**[プリファレンス] > [共通イベント マッピング]** で新規イベント・マッピングを作成できます。あるいは、警告の場合、その警告をトリガしたモニタに関連付けられたイベント・マッピング・テンプレートを使用できます。

[共通イベント マッピング] ユーザ・インタフェースの詳細については、741 ページ「**[新規イベント・マッピング] / [イベント・マッピングの編集]** ダイアログ・ボックス」を参照してください。

11 結果

SiteScope でモニタの測定値の状態が変更されるか、警告がトリガされると、共通イベント・マッピングのモニタ・インスタンスまたは警告に選択された形式で統合ログ・ファイルにイベントが書き込まれます。

エージェントによってログ・ファイルが監視されてイベントが作成され、HPOM または BSM に送信されます。イベントは、BSM のオペレーション管理 Event Browser に表示されます（イベント管理ファウンデーション・ライセンスを保有している場合）。オペレーション管理 が BSM インストールに含まれていない場合は、[サービス状況] 内の状況インジケータを介して、CI 状態に影響を及ぼすイベントを表示できます。

SiteScope を使用して HP Operations Agent に測定値をレポートする方法

注：このセクションは、SiteScope を BSM 内の オペレーション管理, または HP Operations Manager (HPOM) に接続するユーザのみを対象としており、SiteScope から HPOM または BSM バージョン 9.00 以降にレポートする場合にのみ該当します。

このタスクでは、SiteScope を使用してレポート製品 HPOM と BSM に測定値データをレポートする方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 179 ページ「前提条件」
- 180 ページ「SiteScope サーバに HP Operations Agent をインストールする」
- 180 ページ「SiteScope を使用して測定値を送信する」
- 181 ページ「モニタ・インスタンスによる測定値を送信する」
- 181 ページ「結果」

1 前提条件

- SiteScope の管理者または「**統合プリファレンスの編集**」権限を付与されたユーザのみが、このタスクを実行する権限があります。詳細については、759 ページ「ユーザ管理プリファレンス」を参照してください。
- Performance Manager 管理者は、SiteScope インスタンスがデータをログ記録する SiteScope ノードに接続するように Performance Manager を設定する必要があります。詳細については、Performance Manager のマニュアルを参照してください。

2 SiteScope サーバに HP Operations Agent をインストールする

SiteScope のインストール中またはインストール後に、SiteScope インストール・メディアから HP Operations Agent をインストールできます。このエージェントによって、SiteScope は、SiteScope で収集された測定値データのデータ・ストレージとして機能します。

エージェントのインストールの詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』（PDF）の「完全インストールの実行」を参照してください。

サポート対象環境のリストについては、157 ページ「SiteScope-HP Operations Manager サポート・マトリックス」を参照してください。

注： エージェントは、リモート HPOM サーバからインストールすることもできます。ただし、エージェントが機能するのは、インストールされるバージョンが SiteScope に付属しているものと同じであるか、付属しているものより新しい場合だけです。

3 SiteScope を使用して測定値を送信する

[プリファレンス] > [統合プリファレンス] で、既存の Operations Manager 統合を選択するか、[HP Operations Manager 統合] をクリックして新しい統合を作成します。[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで、[HP Operations Manager Metric Integration] 表示枠を展開して [Enable HP Operations Manager metrics integration] を選択します。

注： 測定値は HP Operations Agent によって収集されるため、HP Operations Agent と HPOM/BSM サーバ間の接続状態に関係なく HP Operations Manager との測定値統合をアクティブ化できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、697 ページ「HP Operations Manager 測定値統合」を参照してください。

4 モニタ・インスタンスによる測定値を送信する

測定値データをエージェント・データ・ストレージにレポートする各モニタ・インスタンスごとに、モニタ・プロパティの **[HP 統合設定]** を展開し、**[HP Operations Manager 統合設定]** セクションの **[Report metrics to HP Operations agent]** を選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、400 ページ「HP Operations Manager 統合設定」を参照してください。

ヒント：各モニタ・インスタンスのモニタ・プロパティで **[Report metrics to HP Operations agent]** を選択することなく、すべてのメモリ、CPU、ディスク領域、Windows リソースについて測定値のレポートを有効にできます。これを実行するには、**[統合プリファレンス]** > **[HP Operations Manager 統合]** > **[HP Operations Manager Metric Integration]** 表示枠で、**[Enable metrics reporting for existing Memory, CPU, Disk Space, and Windows Resources monitors]** を選択します。

5 結果

各モニタの測定値は、SiteScope ホスト・ノード上のエージェントによって、時間とホストのインスタンス識別を含めたインスタンス識別子としてログに記録されます。測定値データは HPOM と BSM によってエージェント・データ・ストレージから収集され、さまざまなレポート製品で使用できます。

測定値エラー・データは、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>%logs** ディレクトリにある **oa_metric_integration.log** ファイルに書き込まれます。ログ・ファイルの使用の詳細については、1242 ページ「[ログ ファイル] ページ」を参照してください。

参照情報

SiteScope-Operations エージェントの測定値の整合

測定値名の整合は、SiteScope の測定値名を、Operations Manager の Performance Agent (PA) で使用される名前と合わせるプロセスです。測定値名の整合は、次に示すように使用される測定値で実行されています。

注 : Performance Agent で提供される測定値の詳細については、Performance Agent 5.0 ドキュメント (http://support.openview.hp.com/selfsolve/document/KM864772/binary/PA5_MetricHelpView.html?searchIdentifier=-65c7a852:127e60d1b54:6921&resultType=document) の HP Performance Agent Metric Help Viewer を参照してください。HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使用してログインする必要があります。

PA 測定値名 (表示名)	SiteScope 測定値名
BYCPU_CPU_TOTAL_UTIL (CPU 使用率合計)	Windows : ➤ CPU モニタ : ¥utilization (cpu #1, cpu #2 など) ➤ Microsoft Windows リソース・モニタ ¥Processor¥{instance}%¥ Processor Time Linux : UNIX リソース・モニタ : ¥Processor¥{instance}¥System HP-UX : N/A Solaris : N/A AIX : UNIX リソース・モニタ : ¥Processor¥{instance}¥%sys

PA 測定値名 (表示名)	SiteScope 測定値名
BYNETIF_IN_BYTE_RATE (受信 KB 速度)	Windows : Microsoft Windows リソース・モニタ ¥Network Interface¥{instance}¥Bytes Received¥sec Linux : UNIX リソース・モニタ : ¥Network Interface¥ReceiveBytes HP-UX : N/A Solaris : UNIX リソース・モニタ : ¥Network Interface¥obytes AIX : N/A
BYNETIF_OUT_BYTE_RATE (送信 KB 速度)	Windows : Microsoft Windows リソース・モニタ ¥Network Interface¥{instance}¥Bytes Sent¥sec Linux : UNIX リソース・モニタ : ¥Network Interface¥TransmitBytes HP-UX : N/A Solaris : UNIX リソース・モニタ : ¥¥Network Interface¥rbytes AIX : N/A
BYDSK_PHYS_READ_BYTE_RATE (物理的な読み取り KB 速度)	Windows : Microsoft Windows リソース・モニタ ¥Physical Disk¥{instance}¥% Disk Read Bytes¥sec Linux : N/A HP-UX : N/A Solaris : UNIX リソース・モニタ : ¥PhysicalDisk¥nread AIX : N/A
BYDSK_PHYS_WRITE_BYTE_RATE (物理的な書き込み KB 速度)	Windows : Microsoft Windows リソース・モニタ ¥Physical Disk¥{instance}¥% Disk Write Bytes¥sec Linux : N/A HP-UX : N/A Solaris : UNIX リソース・モニタ : ¥PhysicalDisk¥nwritten AIX : N/A
BYDSK_REQUEST_QUEUE (要求キュー)	Windows : Microsoft Windows リソース・モニタ ¥Physical Disk¥{instance}¥Avg. Disk Queue Length Linux : N/A HP-UX : N/A Solaris : N/A AIX : N/A

PA 測定値名 (表示名)	SiteScope 測定値名
BYDSK_UTIL (ディスク %)	Windows : Microsoft Windows リソース・モニタ ¥Physical Disk¥{instance}¥% Disk Time Linux : N/A HP-UX : UNIX リソース・モニタ : ¥Block device activity¥<デバイス>¥%busy Solaris : UNIX リソース・モニタ : ¥Block device activity¥<デバイス>¥%busy AIX : UNIX リソース・モニタ : ¥Block device activity¥<デバイス>¥%busy
FS_SPACE_UTIL (容量 %)	Windows : ディスク容量モニタ : ¥percent full Linux : ディスク容量モニタ : ¥percent full HP-UX : ディスク容量モニタ : ¥percent full Solaris : ディスク容量モニタ : ¥percent full AIX : ディスク容量モニタ : ¥percent full
GBL_CPU_TOTAL_UTIL (CPU %)	Windows : ▶ CPU モニタ : ¥utilization (avgas) ▶ Microsoft Windows リソース・モニタ : ¥Processor¥_Total¥ % Processor Time Linux : UNIX リソース・モニタ : ¥Processor¥Total¥System HP-UX : N/A Solaris : N/A AIX : UNIX リソース・モニタ : ¥Processor¥Total¥%sys
GBL_MEM_PAGEOUT_RATE (ページ書き出し速度)	Windows : Microsoft Windows リソース・モニタ : ¥Memory¥Pages Output/sec Linux : N/A HP-UX : N/A Solaris : UNIX リソース・モニタ : ¥Page-out memory and memory freeing activities¥ppgout/s AIX : N/A

PA 測定値名 (表示名)	SiteScope 測定値名
GBL_MEM_UTIL (メモリ %)	Windows : メモリ ・ モニタ : ¥percent used Linux : メモリ ・ モニタ : ¥percent used HP-UX : メモリ ・ モニタ : ¥ percent used Solaris : メモリ ・ モニタ : ¥percent used AIX : N/A
GBL_SWAP_SPACE_UTIL (スワップ %)	Windows : Microsoft Windows リソース ・ モニタ : ¥Memory¥ % Committed Bytes In Use Linux : N/A HP-UX : N/A Solaris : N/A AIX : N/A

6

グローバル検索と置換

本章の内容

概念

- ▶ グローバル検索と置換の概要 (188 ページ)

タスク

- ▶ グローバル検索と置換の実行方法 (191 ページ)

参照情報

- ▶ [グローバル検索と置換] ウィザード (196 ページ)

概念

グローバル検索と置換の概要

[グローバル検索と置換] ウィザードでは、モニタ、警告、警告アクション、グループ、プリファレンス、レポートのプロパティを変更できます。オブジェクト・タイプに基づいてオブジェクトを選択し、システム可用性管理で、SiteScope または複数の SiteScope 全体の選択オブジェクトのプロパティをグローバルに置換できます。

本項の内容

- ▶ 188 ページ「影響を受けるオブジェクトをフィルタ」
- ▶ 189 ページ「置換および検索と置換」
- ▶ 189 ページ「しきい値設定」

影響を受けるオブジェクトをフィルタ

[影響を受けるオブジェクトをフィルタ] オプションでは、検索操作の選択オブジェクトをさらに絞り込みます。特定のプロパティを選択して、オブジェクトに属する値を選択または入力できます。これにより、置換する値ではなく選択オブジェクトを制限できます。

置換操作の実行中に、[影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ページで選択したプロパティに一致するオブジェクトのみで、置換する値のみが置換されます。たとえば、頻度を 5 分に設定したすべてのモニタを選択してそのすべてのモニタのモニタ依存関係の設定を置換するか、特定のサーバを監視するモニタのみを選択して、フィルタで入力したサーバの値に一致するモニタ・インスタンスのみのしきい値設定を置換します。

置換および検索と置換

置換メソッドでは、フィールドの値を検索してその値を新しい値に置換します。たとえば、[モニタの実行設定] 領域の[頻度] チェック・ボックスを選択して、頻度の値を 10 分から 15 分に更新することで、選択したモニタのモニタ実行頻度の標準設定を変更します。

検索と置換メソッドでは、特定の設定とプロパティ値を検索して、入力した設定または値を含むオブジェクトのみを置換します。文字列、値、または正規表現パターンを検索して、その文字列のみを置換できます。置換はフィルタ条件に一致する場合にのみ実行されます。たとえば、現在使用されていないサーバ名が名前の値に含まれるすべてのモニタを検索し、その古いサーバを示す文字列を、更新されたサーバを示す新しい文字列で置換します。

しきい値設定

モニタのしきい値の設定を置換する場合、標準設定では次のすべてを共有する設定のみが置換されます。

- ▶ 同じ条件（「**エラー条件**」，「**警告条件**」，または「**良好条件**」）
- ▶ 同じスケジュールの設定
- ▶ 同じ演算子タイプ（< <=, > >=, ==, !=, 含む, !含む）を使用

注: <（より小さい）と <=（より小さいか等しい）は、>（より大きい）と >=（より大きい等しい）と同じ演算子タイプとみなされます。

使用された演算子と設定されたスケジュールに関係なく、条件（「**エラー条件**」，「**警告条件**」，または「**良好条件**」）が同じすべての既存のしきい値設定を上書きするオプションもあります。このオプションは[カテゴリーの上書き]と呼ばれ、ウィザードの[タイプの選択]で[モニタ]を選択した場合に、[しきい値の設定]領域のウィザードの[変更の入力]ページに表示されます。

たとえば、すべての CPU モニタの「**エラー条件**」のしきい値を 85% より大きい設定に変更するとします。ウィザードで、[タイプの選択]ページの[モニタ]，[サブタイプの選択]ページの[CPU]を選択し、[変更の入力]ページの[しきい値の設定]領域を展開します。

「**新規エラー条件**」の状態に 85% より大きい条件を選択して「**カテゴリの上書き**」オプションを選択すると、すべての CPU モニタの既存の「**エラー条件**」の設定がすべて上書きされ、ウィザードの完了時に 85% より大きい値に変更されます。

このオプションをクリアしたままにすると、ウィザードで選択した 85% より大きい「**エラー条件**」の設定は、< (より大きい) と <= (より大きいか等しい) 演算子を使用してすべての CPU モニタに同スケジュールを設定した「**エラー条件**」の設定のみと置換されます。

しきい値の設定の詳細については、328 ページ「状態のしきい値の設定」を参照してください。

タスク

グローバル検索と置換の実行方法

このタスクでは、[グローバル検索と置換] ウィザードを使ってオブジェクトのグローバル検索と置換を実行する方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 191 ページ「[グローバル検索と置換] ウィザードの実行の開始」
- ▶ 192 ページ「オブジェクト・タイプの選択」
- ▶ 193 ページ「検索と置換オブジェクト」
- ▶ 194 ページ「影響を受けるオブジェクトのチェック」
- ▶ 195 ページ「置換したオブジェクトの確認」

1 [グローバル検索と置換] ウィザードの実行の開始

グローバル置換を実行するモニタ・ツリーの **SiteScope** ルート、グループ、モニタのいずれかを右クリックします。プリファレンス・オブジェクトを置換するには、**SiteScope** ルートを右クリックします。警告オブジェクトを置換するには、**SiteScope** ルート、または関連グループかモニタ・オブジェクトを右クリックします。ショートカット・メニューから **[グローバル検索と置換]** を選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、196 ページ「[グローバル検索と置換] ウィザード」を参照してください。

2 オブジェクト・タイプの選択

「**タイプの選択**」ページと「**サブタイプの選択**」ページで、置換を実行するオブジェクトと、必要に応じてサブタイプを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、197 ページ「**タイプの選択**」ページ および198 ページ「**サブタイプの選択**」ページを参照してください。

例：

すべての CPU モニタのしきい値の境界を変更します。

オブジェクト・タイプとして「**モニタ**」を選択します。

▶ **タイプの選択**
サブタイプの選択
置換モード
変更の入力
影響を受けるオブジェクト
サマリの確認
サマリ

タイプの選択

置換を実行するオブジェクト タイプを選択します。

☒ モニタ

☐ グループ

☐ プリファレンス

特定のモニタ・タイプとして「**CPU**」を選択します。

タイプの選択
▶ サブタイプの選択
置換モード
変更の入力
影響を受けるオブジェクト
サマリの確認
サマリ

サブタイプの選択

置換を実行するタイプを選択します。

☒ CPU

☐ メモリ

3 検索と置換オブジェクト

[置換モード] ページで、置換のタイプを選択します。[置換] を選択してオブジェクトをグローバルに置換するか、[検索と置換] を選択してオブジェクトの特定のインスタンスを置換します。[変更の入力] ページで、置換するプロパティまたは値を選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、198 ページ「[置換モード] ページ」および200 ページ「[変更の入力] ページ」を参照してください。

例 - 指定した電子メール・アドレスに警告メッセージを送信する警告アクションの設定：

指定した電子メール・アドレスに警告メッセージを送信する、警告アクションを設定します。ただし、警告の受信に設定した電子メール・アドレスの 1 つを変更して、新しい電子メール・アドレスに警告メッセージを送信するとします。変更した電子メール・アドレスのみを更新します。

オブジェクト・タイプとして [警告アクション] を選択したら、[置換モード] ページの [検索と置換] を選択します。

タイプの選択 サブタイプの選択 ▶ 置換モード 変更の入力 影響を受けるオブジェクト サマリの確認 サマリ	置換モード フィールドを新しい値で置換する場合は、[置換] を選択します。 フィールドを含む文字列を検索して新しい値で置換する場合は、[検索と置換] を選択します。 ☐ 置換 ☒ 検索と置換

[変更の入力] ページで、[次を検索] フィールドに古い電子メール・アドレス、[次で置換] フィールドに新しい電子メール・アドレスを入力します。

タイプの選択 サブタイプの選択 置換モード ▶ 変更の入力 影響を受けるオブジェクト サマリの確認 サマリ	変更の入力 実行する変更を入力します。マークされたプロパティが入力された値で置換されます。 次を検索: @yahoo.com 次で置換: @hotmail.com

4 影響を受けるオブジェクトのチェック

「**影響を受けるオブジェクト**」ページで影響を受けるオブジェクトを表示し、必要に応じて置換操作対象のオブジェクトをクリアまたは選択します。必要に応じて、「**影響を受けるオブジェクトをフィルタ**」ダイアログ・ボックスを開いてオブジェクトのプロパティでフィルタできます。このダイアログ・ボックスで、置換操作を実行するオブジェクトを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、203 ページ「**影響を受けるオブジェクト**」ページ」を参照してください。

例 - 特定のサーバのモニタ実行の頻度の低減：

会社の特定のサーバで、モニタを実行する頻度を低減するとします。

「**変更の入力**」ページで、指定したサーバを監視する 1 日 1 回の新しい頻度を入力します。

タイプの選択 サブタイプの選択 置換モード ▶ 変更の入力 影響を受けるオブジェクト サマリの確認 サマリ	変更の入力 実行する変更を入力します。マークされたプロパティが入力された値で置換されます。 一般設定 モニタ設定 モニタの実行設定 ☒ 頻度: 1 日

「**影響を受けるオブジェクトをフィルタ**」ページの選択を、指定したサーバを監視するモニタのみを含むようにフィルタします。

影響を受けるオブジェクトをフィルタ	
一般設定	
モニタ設定	
☒ サーバ:	SQL_Server サーバの参照 リモートサ
モニタの実行設定	

5 置換したオブジェクトの確認

[**サマリの確認**] ページで、置換操作の結果を確認し、[**完了**] をクリックしてウィザードを完了します。[**サマリ**] ページで変更のサマリを表示して、正常に実行された変更と発生したエラーを参照できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、205 ページ「[サマリの確認] ページ」および206 ページ「[サマリ] ページ」を参照してください。

参照情報

[グローバル検索と置換] ウィザード

このウィザードでは、グループ、モニタ、プリファレンス、警告、警告アクション、レポートのプロパティを変更できます。これらの変更は、システム可用性管理で作業中に SiteScope または複数の SiteScope 全体で実行できます。

アクセス方法	グローバル置換を実行するモニタ・ツリーの SiteScope ルート、グループ、モニタのいずれかを右クリックします。プリファレンス・オブジェクトを置換するには、 SiteScope ルートを右クリックします。警告オブジェクトを置換するには、 SiteScope ルート、または関連グループかモニタ・オブジェクトを右クリックします。ショートカット・メニューから [グローバル検索と置換] を選択します。 注： ウィザードのページで [ヘルプ] ボタンをクリックすると、ユーザのログイン資格情報の入力を求められる場合があります。
関連タスク	191 ページ「グローバル検索と置換の実行方法」
ウィザード・マップ	このウィザードには、次のページが含まれています。 [タイプの選択] ページ > [サブタイプの選択] ページ > [置換モード] ページ > [変更の入力] ページ > [影響を受けるオブジェクト] ページ > ([影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス) > [サマリの確認] ページ > [サマリ] ページ。

[タイプの選択] ページ

このウィザード・ページでは、置換を実行するオブジェクト・タイプを選択できます。

重要な情報	▶ このウィザードに関する一般情報は、196 ページ「[グローバル検索と置換] ウィザード」で入手できます。 ▶ 選択したノードで使用可能なオブジェクトのタイプのみが表示されます。
ウィザード・マップ	[グローバル検索と置換] ウィザードには、次のページが含まれています。 [タイプの選択] ページ > [サブタイプの選択] ページ > [置換モード] ページ > [変更の入力] ページ > [影響を受けるオブジェクト] ページ > ([影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス) > [サマリの確認] ページ > [サマリ] ページ。

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
[警告] [警告アクション] [グループ] [モニタ] [プリファレンス] [レポート]	各置換操作に対して 1 つのオブジェクト・タイプのみ選択できます。SiteScope に存在するオブジェクトのみが表示されます。

 【サブタイプの選択】 ページ

このウィザード・ページでは、置換を実行するオブジェクト・タイプのプロパティを選択できます。

重要な情報	▶ このウィザードに関する一般情報は、196 ページ「[グローバル検索と置換] ウィザード」で入手できます。 ▶ このページは、ウィザードの [タイプの選択] ページでオブジェクト・タイプとして [警告アクション]、[モニタ]、または [プリファレンス] を選択した場合にのみ表示されます。 ▶ [グループ]、[警告]、または [レポート] のオブジェクト・タイプを選択した場合は、このページは表示されません。
ウィザード・マップ	[グローバル検索と置換] ウィザードには、次のページが含まれています。 [タイプの選択] ページ > 【サブタイプの選択】 ページ > [置換モード] ページ > [変更の入力] ページ > [影響を受けるオブジェクト] ページ > ([影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス) > [サマリの確認] ページ > [サマリ] ページ。

 【置換モード】 ページ

このウィザード・ページでは、置換のタイプ（グローバル置換またはフィルタ条件に基づいた置換）を選択できます。

重要な情報	このウィザードに関する一般情報は、196 ページ「[グローバル検索と置換] ウィザード」で入手できます。
ウィザード・マップ	[グローバル検索と置換] ウィザードには、次のページが含まれています。 [タイプの選択] ページ > [サブタイプの選択] ページ > 【置換モード】 ページ > [変更の入力] ページ > [影響を受けるオブジェクト] ページ > ([影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス) > [サマリの確認] ページ > [サマリ] ページ。

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[置換]	すべての一致するオブジェクトを新しい文字列または値とグローバルに置換します。
[検索と置換]	文字列または正規表現に一致するプロパティの対象オブジェクトを検索し、一致するパターンのみを置換値と置換する場合に選択します。 この置換メソッドには特定の設定とプロパティ値の検索が含まれ、入力した設定または値を含むオブジェクトのみを置換します。値の一部のみを選択して、その文字列のみを置換できます。 例：現在使用されていないサーバ名が名前の値に含まれるすべてのモニタを検索します。その古いサーバを示す文字列を更新されたサーバを示す新しい文字列で置換します。 注： ➤ このオプションを選択した場合、値に文字列を含めることができる設定のみが 「変更の入力」 ページの設定領域で使用可能で、検索と置換アクションに選択できます。 ➤ この設定は、置換する対象の選択と値の指定に使用します。置換する値ではなく選択オブジェクトを制限する方法の 「詳細フィルタ」 オプションとは異なります。



【変更の入力】 ページ

このウィザード・ページでは、グローバル置換の置換対象を選択できます。ウィザードには、前のページで選択したオブジェクト・タイプの変更可能な設定とプロパティのみが表示されます。フィルタ条件は、[タイプ] ページ、[サブタイプ] ページ、[詳細フィルタ] ページの選択内容から作成されます。

重要な情報	▶ このウィザードに関する一般情報は、196 ページ「[グローバル検索と置換] ウィザード」で入手できます。 ▶ 表示されるサブタイプのプロパティは、SiteScope でモニタ、警告、プリファレンスなどを編集するときに表示されるプロパティとは異なる可能性があります。 例：[電子メールのプリファレンス] は [グローバル検索と置換] ユーティリティではドロップダウン・リストではなくテキスト・ボックスで、[依存] プロパティは [グローバル検索と置換] ユーティリティに表示されません。 ▶ [サーバ] プロパティは、CPU・モニタ、ディスク領域モニタ、メモリ・モニタ、Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタ、Web サーバ・モニタ、サービス・モニタのグループからモニタが選択されている場合にのみ使用できます。そのほかのモニタの場合、[サブタイプの選択] ページので特定のモニタのサブタイプを選択することによってのみサーバ属性を変更できます。たとえば、Web サーバ・モニタで CPU モニタを選択している場合は、サーバ・プロパティを使用できます。このグループ以外のモニタも選択している場合、サーバ・プロパティは使用できません。
ウィザード・マップ	[グローバル検索と置換] ウィザードには、次のページが含まれています。 [タイプの選択] ページ > [サブタイプの選択] ページ > [置換モード] ページ > 【変更の入力】 ページ > [影響を受けるオブジェクト] ページ > ([影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス) > [サマリの確認] ページ > [サマリ] ページ。

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<設定領域>	この領域には、選択したオブジェクトの設定が含まれています。これらの設定の詳細については、選択したオブジェクトの設定ページを参照してください。 ▶ [置換モード] ページで [検索と置換] を選択した場合、設定領域で設定のみ選択します。[次を検索] / [次で置換] ボックスに置換する古い値と新しい値を入力します。 ▶ [置換モード] ページで [置換] を選択した場合、設定領域で設定と新しい値を選択します。 注： ▶ [タイプの選択] ページで [モニタ] を選択した場合、[しきい値の設定] 領域に [カテゴリの上書き] オプションが表示されます。このオプションを選択すると、選択したモニタ・インスタンスで同じしきい値条件（「エラー条件」，「警告条件」，または 「良好条件」）のしきい値を、ここで置換操作として入力した設定に上書きできます。このオプションがクリアされている場合、ここで入力した設定は、モニタ・インスタンスの演算子タイプ (<, <=, >, >=, !=, ==, contains, doesNotContain) と設定したスケジュールが同じ設定のみと置換されます。条件が同じで演算子タイプまたはスケジュールが異なるその他の設定はそのままとなり、変更されません。このオプションの詳細と例については、189 ページ「しきい値設定」を参照してください。 ▶ [タイプの選択] ページで [警告] を選択した場合、[フィルタ設定] の [モニタ タイプの一致] フィールドは表示されず、ウィザードで値を置換できません。

UI 要素	説明
[検索] [次で置換]	[置換モード] ページで [検索と置換] オプションを選択した場合、テキスト・ボックス [次を検索] と [次で置換] がこのページの上部に追加されます。 ▶ [次を検索] ボックスに、置換する設定またはプロパティの検索文字列、値、または正規表現パターンを入力します。 ▶ [次で置換] ボックスに、すべての一致するパターンで変更する文字列または値を入力します。 注： [モニタの実行設定] で [頻度] を選択した場合、[次を検索] と [次で置換] テキスト・ボックスに入力する値は秒単位で入力する必要があります。たとえば、頻度が 10 分のモニタを検索して頻度を 20 分に変更するとします。[次を検索] テキスト・ボックスに「600」と入力し、[次で置換] テキスト・ボックスに「1200」と入力します。 フィルタ条件に合うオブジェクトが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。フィルタ条件を再度選択します。

 [影響を受けるオブジェクト] ページ

このウィザード・ページでは、変更を選択したオブジェクトを表示できます。ページには、ツリー形式で選択オブジェクトが表示されます。[影響を受けるオブジェクト] ツリーのオブジェクトは、置換操作にクリアまたは選択できます。

重要な情報	▶ このウィザードに関する一般情報は、196 ページ「[グローバル検索と置換] ウィザード」で入手できます。 ▶ 表示されるオブジェクトは、ユーザがオブジェクトへの変更権限があるかどうかによって異なります。SiteScope スタンドアロンでは、権限は [プリファレンス] > [ユーザ管理プリファレンス] で設定します。 ▶ [置換モード] ページで [検索と置換] を選択した場合、置換はフィルタ条件に一致する場合にのみ実行されます。[置換] を選択した場合、置換はすべての選択オブジェクトで実行されます。
ウィザード・マップ	[グローバル検索と置換] ウィザードには、次のページが含まれています。 [タイプの選択] ページ > [サブタイプの選択] ページ > [置換モード] ページ > [変更の入力] ページ > [影響を受けるオブジェクト] ページ > ([影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス) > [サマリの確認] ページ > [サマリ] ページ。

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
	影響を受けるオブジェクトをフィルタ 。必要に応じて、クリックしてダイアログ・ボックスを開き、選択をさらに絞り込みます。ユーザ・インタフェースの詳細については、204 ページ「[影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
< [影響を受けるオブジェクト] ツリー >	[影響を受けるオブジェクト] ツリーには、ウィザードの前のページで選択したさまざまなフィルタ条件に一致するすべてのオブジェクトが含まれます。 置換操作の必要に応じてオブジェクトを選択またはクリアします。



【影響を受けるオブジェクトをフィルタ】ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、オブジェクト・タイプのみでなく、特定の設定に基づいてオブジェクトを選択できます。たとえば、危険域の定義済みカテゴリがあるすべての警告を選択して、その警告の任意の設定を置換できます。また、特定のモニタまたはグループに設定した依存関係があるすべてのグループを選択して、そのグループの任意の設定を置換することもできます。

アクセス方法	[影響を受けるオブジェクト] ページの [フィルタ] ボタン  をクリックします。
重要な情報	▶ このウィザードに関する一般情報は、196 ページ「[グローバル検索と置換] ウィザード」で入手できます。 ▶ このオプションは置換の選択の絞り込みのみに使用し、置換の対象は指定しません。
ウィザード・マップ	[グローバル検索と置換] ウィザードには、次のページが含まれています。 [タイプの選択] ページ > [サブタイプの選択] ページ > [置換モード] ページ > [変更の入力] ページ > [影響を受けるオブジェクト] ページ > ([影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス) > [サマリの確認] ページ > [サマリ] ページ。

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<設定領域>	選択したオブジェクトに関する設定領域が表示されます。これらの設定の詳細については、選択したオブジェクトの設定ページを参照してください。プロパティを選択し、選択オブジェクトをフィルタする値を入力します。

[サマリ の確認] ページ

このウィザード・ページでは、置換操作を実行するオブジェクトをプレビューできます。システム可用性管理で複数の SiteScope で作業している場合、各 SiteScope のテーブルが表示され、そのテーブルの上に SiteScope 名が表示されます。

重要な情報	▶ このウィザードに関する一般情報は、196 ページ「[グローバル検索と置換] ウィザード」で入手できます。 ▶ グローバル置換で影響を受けるオブジェクト数が、テーブルの上に表示されます。 ▶ 各テーブル・列は、列タイトルを右クリックすると昇順または降順に並べ替えられます。上矢印または下矢印は、並べ替え順序を示します。 ▶ このページで [適用] をクリックすると、置換操作は元に戻せません。
ウィザード・マップ	[グローバル検索と置換] ウィザードには、次のページが含まれています。 [タイプの選択] ページ > [サブタイプの選択] ページ > [置換モード] ページ > [変更の入力] ページ > [影響を受けるオブジェクト] ページ > ([影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス) > [サマリの確認] ページ > [サマリ] ページ。

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
	列タイトルの上矢印と下矢印をクリックして、列の並べ替え順序を変更します。 標準設定値：[完全名] 列は、上から下へのアルファベット順です。
[完全名]	値が置換されるモニタ名とモニタのプロパティのツリーを表示します。

UI 要素	説明
[以前の値]	置換操作の結果として変更される現在の値。 注： 置換される値がクリアされていたチェック・ボックスで、現在は値が選択されている場合、チェック・ボックスの以前の値（クリアされていた値）は表示されない可能性があります。
[新しい値]	[変更の入力] ページで入力した新しい値。

[サマリ] ページ

[サマリ] ページでは、正常に実行された変更とエラーが発生した変更がレポートされます。ページには、テーブル形式で変更が表示されます。システム可用性管理で複数の SiteScope で作業している場合、各 SiteScope のテーブルが表示され、そのテーブルの上に SiteScope 名が表示されます。

重要な情報	▶ このウィザードに関する一般情報は、196 ページ「[グローバル検索と置換] ウィザード」で入手できます。 ▶ 置換操作で実行した変更は元に戻せません。 ▶ グローバル置換で影響を受けるオブジェクト数が、テーブルの上に表示されます。 ▶ 各テーブル・列は、列タイトルを右クリックすると昇順または降順に並べ替えられます。上矢印または下矢印は、並べ替え順序を示します。
ウィザード・マップ	[グローバル検索と置換] ウィザードには、次のページが含まれています。 [タイプの選択] ページ > [サブタイプの選択] ページ > [置換モード] ページ > [変更の入力] ページ > [影響を受けるオブジェクト] ページ > ([影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス) > [サマリの確認] ページ > [サマリ] ページ。

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
	列タイトルの上矢印と下矢印をクリックして、列の並べ替え順序を変更します。 標準設定値： [完全名] 列は、上から下へのアルファベット順です。
[完全名]	値が変更されるモニタ名とモニタのプロパティのツリーを表示します。
[以前の値]	グローバル置換操作で置換された値。
[新しい値]	グローバル置換操作の結果となる新しい値。
	印刷。 テーブルを印刷するときにクリックします。サマリの各テーブルにこのアイコンが表示されます。
[完了]	ウィザードを閉じます。SiteScope ダッシュボードに戻ります。

7

SiteScope ツール

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope ツールの概要 (210 ページ)

タスク

- ▶ モニタの設定時または編集時のツールの使用方法 (212 ページ)

参照情報

- ▶ SiteScope ツールのユーザ・インタフェース (214 ページ)

概念

SiteScope ツールの概要

SiteScope には、監視環境のテストに便利な多数の診断ツールがあります。これらのツールでは、モニタの設定前に問題を特定してモニタの設定を容易にできます。また、モニタの設定後に問題のトラブルシューティングや診断を行うこともできます。

これらのツールを使用して、監視対象となるシステムのさまざまな要求やクエリを作成し、アクションの詳細な結果を表示します。要求には、ネットワーク接続のテストや、外部のデータベースまたはサービスにアクセスするためのログイン認証の検証などがあります。

特定のモニタ・タイプを設定する場合に使用して、容易にモニタ設定ができるようにするツールもあります。データをツールのフィールドに入力し、SiteScope でデータをテストします。データのテストが完了したら、テスト済みデータをモニタ設定フォームに直接適用できます。たとえば、DNS モニタを設定する前に DNS 参照ツールを使用してドメイン名を IP アドレスに変換できます。名前の変換後、SiteScope でそのデータを新規モニタに適用できます。

使用可能な SiteScope ツールのリストについては、97 ページ「[ツール] メニュー」を参照してください。

ユーザ権限

SiteScope ツールを使用するには、次の権限が必要です。

- ▶ **ツールを使用**：左側の表示枠にある「**ツール**」コンテキストのツールを表示および使用するには、SiteScope の管理者、または「**ツールを使用**」権限が付与されたユーザである必要があります。
- ▶ **モニタ・ツールを使用**：モニタの設定時または編集時にツールを使用するには（該当のモニタに対応するツールが使用可能な場合）、SiteScope の管理者、または「**モニタ・ツールを使用**」権限が付与されたユーザである必要があります。
- ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの「**プロパティ**」タブで、「**ツールを使用**」ボタンをクリックします。

- ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行する場合、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。

タスク

モニタの設定時または編集時のツールの使用方法

このタスクでは、SiteScope ツールを使用して、モニタの設定やトラブルシューティングをサポートする手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 212 ページ「前提条件」
- ▶ 212 ページ「モニタの追加と設定」
- ▶ 213 ページ「テストの設定と実行」
- ▶ 213 ページ「モニタのフィールドへのテスト済みデータの適用」
- ▶ 213 ページ「ツールを使用したモニタ・プロパティの編集またはテスト（任意指定）」

1 前提条件

- ▶ 左側の表示枠にある [ツール] コンテキストのツールを表示および使用するには、SiteScope の管理者、または「**ツールを使用**」権限が付与されたユーザである必要があります。
- ▶ 特定のモニタの設定時に使用可能なツールを使用するには、SiteScope の管理者、または「**モニタ・ツールを使用**」権限を付与されたユーザである必要があります。

2 モニタの追加と設定

[**新規作成**] > [**モニタ**] を選択し、[新規モニタ ページ] から新規モニタを追加します。モニタの設定をサポートするツールが使用できる場合は、新規モニタのダイアログ・ボックスの下部にある [**ツールを使用**] ボタンをクリックします。

3 テストの設定と実行

必要な情報をツールのダイアログ・ボックスに入力し、ツールを実行します。サーバ側の検証エラーが結果の表示枠に表示されます。

4 モニタのフィールドへのテスト済みデータの適用

設定データのテストが正常に完了したら、[Apply to New Monitor] ボタン（既存のモニタを編集している場合は [モニタに適用] ボタン）をクリックして、SiteScope でデータをモニタ設定に適用します。

5 ツールを使用したモニタ・プロパティの編集またはテスト（任意指定）

SiteScope ツール（使用可能な場合）を使用して、既存のモニタの設定プロパティを編集またはテストすることもできます。

- ▶ モニタの設定プロパティを編集するには、モニタの [プロパティ] タブの [ツールを使用] ボタンをクリックし、手順 3 および 4 を実行します。
- ▶ ツールを開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。結果をファイルに保存するには、[ファイルに保存] ボタンをクリックします。

参照情報

SiteScope ツールのユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ データベース接続ツール (215 ページ)
- ▶ データベース情報ツール (219 ページ)
- ▶ DNS 参照ツール (222 ページ)
- ▶ イベント・ログ・ツール (224 ページ)
- ▶ FTP サーバ・ツール (227 ページ)
- ▶ LDAP 認証ツール (230 ページ)
- ▶ メールの送受信ツール (233 ページ)
- ▶ Microsoft Windows Media Player ツール (237 ページ)
- ▶ ネットワーク状態ツール (239 ページ)
- ▶ ニュース・サーバ・ツール (240 ページ)
- ▶ パフォーマンス・カウンタ・ツール (241 ページ)
- ▶ Ping ツール (243 ページ)
- ▶ プロセス・ツール (245 ページ)
- ▶ Real Media Player ツール (247 ページ)
- ▶ 正規表現ツール (249 ページ)
- ▶ サービス・ツール (251 ページ)
- ▶ SNMP ブラウザ・ツール (254 ページ)
- ▶ SNMP ツール (258 ページ)
- ▶ SNMP トラップ・ツール (260 ページ)
- ▶ トレース・ルート・ツール (262 ページ)
- ▶ URL ツール (263 ページ)

- ▶ Web サービス・ツール (266 ページ)
- ▶ XSL 変換ツール (273 ページ)

 データベース接続ツール

このツールでは、SiteScope と外部の ODBC または JDBC 互換データベース間の接続をテストおよび検証できます。この診断ツールでは、次の点がチェックされます。

- ▶ 指定したデータベース・ドライバが検出およびロードできる
- ▶ データベースに接続できる
- ▶ 任意指定の SQL クエリを実行して結果を表示できる
- ▶ データベースの接続とリソースを閉じることができる

このツールは、データベース・モニタ、データベース警告、データベース・ログ記録の設定に必要な接続パラメータ値を検証する場合に便利です。

アクセス方法	▶ [ツール] コンテキスト > [データベース ツール] > [データベース接続ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ データベース・カウンタ・モニタ、データベース・クエリ・モニタ、DB2 8.x および 9.x モニタ、テクノロジー・データベース統合モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。

重要な情報	▶ テスト中に例外またはエラーが発生した場合，トラブルシューティングに役立つ推奨アクションとともにその情報が出力されます。 ▶ データベース接続ツールを使用して，データベース・クエリ・モニタまたはテクノロジ・データベース統合モニタにプロパティを適用する場合，資格情報データを手動で入力する必要があります（資格情報プロファイルを選択すると資格情報データは失われます）。
関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[データベース接続 URL]	モニタの設定時に使用するデータベース接続 URL : Oracle 軽量ドライバを使用する場合、データベース接続 URL の形式は jdbc:oracle:thin:@<サーバ名または IP アドレス>:<ポート>:<database sid> のようになります。 例 : ポート 1521 を使用しているマシンの ORCL データベースに接続するには、 「jdbc:oracle:thin:@206.168.191.19:1521:ORCL」と入力します。前の例のようにコロン記号 (:) を含める必要があります。一般的なデータベース接続 URL のほかの例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」を参照してください。 注 : Windows 認証を使用してデータベースにアクセスする場合、接続 URL として「jdbc:mercury:sqlserver://<サーバ名または IP アドレス>:1433;DatabaseName=<データベース名>;AuthenticationMethod=type2」を、データベース・ドライバとして「com.mercury.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver」を入力します。現在ログオンしている Windows ユーザの資格情報 (SiteScope サービスを実行中のアカウント) を使用してデータベースへの接続が確立されるように、[ユーザ名] および [パスワード] ボックスは空のままにします。
[データベースドライバ]	SiteScope で使用する JDBC または ODBC ドライバ : .jar ファイル、または .class ファイルが含まれるライブラリは、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%lib%ext ディレクトリにインストールする必要があります。jdbc:odbc:orders 以外のデータベースを使用するには、ドライバ・ファイルを適切なディレクトリにインストールして SiteScope で使用できるようにする必要があります。 標準設定値 : sun.jdbc.odbc.JdbcOdbcDriver 例 : 一般的なデータベース・ドライバ設定の例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」セクションを参照してください。

UI 要素	説明
[資格情報]	指定したデータベースでアクセス用の名前およびパスワードが必要な場合に資格情報を許可するためのオプション。 ▶ ユーザ名およびパスワードを使用 : 手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。 [ユーザ名] ボックスにユーザ名を、[パスワード] ボックスにパスワードを入力してデータベースにアクセスします。 ▶ 事前定義された資格情報を選択 : データベース用の定義済みユーザ名およびパスワードを SiteScope で自動的に設定する場合に、このオプションを選択します (標準設定のオプション)。 [資格情報プロファイル] ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、[資格情報の追加] をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、789 ページ「資格情報のプリファレンスの設定方法」を参照してください。
[クエリ]	データベースで実行する SQL クエリ (任意指定)。SQL クエリ文字列を入力しない場合、ドライバがロードされてデータベースへの接続がテストされますが、クエリは実行されません。
[結果セットの最大カラム数]	SQL クエリを入力した場合にクエリ結果セットに表示される最大列数。 標準設定値 : 10
[結果セットの最大行数]	SQL クエリを入力した場合にクエリ結果セットに表示される最大行数。 標準設定値 : 10
[ツールの実行]	接続テストを実行します。接続結果は [結果] 表示枠に表示されます。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。

例

次に、成功したデータベース接続から SQL クエリで返されるデータの例を示します（1 行のみ）。

サーバ名	group ID	frameindex	フレーム ID	設定名	settingLine	行チャンク	chunk Value
10.0.0.157	master.config	1	_config	_database Max Summary	1	1	200

 データベース情報ツール

このツールでは、データベース・サーバ・メタデータ（製品およびドライバのバージョン、SQL 互換性レベル情報、サポートされている SQL 機能など）を表示できます。

アクセス方法	[ツール] コンテキスト > [データベース ツール] > [データベース情報ツール] を選択します（「ツールを使用」権限が必要です）。
重要な情報	データベース・ドライバやユーザ名によって、表示される情報が大幅に変わります。
関連情報	➤ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ➤ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[データベース接続 URL]	モニタの設定時に使用するデータベース接続 URL : Oracle 軽量ドライバを使用する場合、データベース接続 URL の形式は <code>jdbc:oracle:thin:@<サーバ名または IP アドレス>:<ポート>:<database sid></code> のようになります。 例 : ポート 1521 を使用しているマシンの ORCL データベースに接続するには、 「<code>jdbc:oracle:thin:@206.168.191.19:1521:ORCL</code>」と入力します。前の例のようにコロン (:) とアットマーク (@) 記号を含める必要があります。一般的なデータベース接続 URL のほかの例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」を参照してください。
[データベースドライバ]	SiteScope で使用する JDBC または ODBC ドライバ : .jar ファイル、または .class ファイルが含まれるライブラリは、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%lib%ext ディレクトリにインストールする必要があります。<code>jdbc:odbc:orders</code> 以外のデータベースを使用するには、ドライバ・ファイルを適切なディレクトリにインストールして SiteScope で使用できるようにする必要があります。 標準設定値 : <code>sun.jdbc.odbc.JdbcOdbcDriver</code> 例 : 一般的なデータベース・ドライバ設定の例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」セクションを参照してください。

UI 要素	説明
[資格情報]	指定したデータベースでアクセス用の名前およびパスワードが必要な場合に資格情報を許可するためのオプション。 ▶ ユーザ名およびパスワードを使用。 手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。 [ユーザ名] ボックスにユーザ名を、[パスワード] ボックスにパスワードを入力してデータベースにアクセスします。 ▶ 事前定義された資格情報を選択。 データベース用の定義済みユーザ名およびパスワードを SiteScope で自動的に設定する場合に、このオプションを選択します（標準設定のオプション）。[資格情報プロファイル] ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、[資格情報の追加] をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、789 ページ「資格情報のプリファレンスの設定方法」を参照してください。
[ツールの実行]	ツールを実行し、データベース情報を表示します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。



DNS 参照ツール

このツールでは、ドメイン・ネーム・サーバにある名前を参照してドメイン名に対応する IP アドレスを表示できます。また、ドメインのネーム・サーバの情報も表示されます。

このユーティリティを使用して、DNS サーバからサーバの正しいアドレスが返されることを確認できます。また、このユーティリティでは、外部ドメインのアドレスを参照できることを確認できます。

アクセス方法	▶ [ツール] コンテキスト > [ネットワーク ツール] > [DNS ツール] を選択します（「ツールを使用」権限が必要です）。 ▶ DNS モニタを設定または表示する場合も使用できます（SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合）。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[DNS サーバ]	DNS サーバの IP アドレスまたはホスト名。空のままにすると、ローカル DNS サーバが使用されます。
[解決するホスト名]	IP アドレスに変更するドメイン名。
[ツールの実行]	テストを実行します。ツールによって要求が [DNS サーバ] ボックスに入力した DNS サーバに送信され, [解決するホスト名] ボックスに入力したホスト名に対応する IP アドレスが表示されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。



イベント・ログ・ツール

このツールでは、Windows イベント・ログの一部をローカルまたはリモート・サーバで表示できます。

アクセス方法	▶ [ツール] コンテキスト > [オペレーティング システム ツール] > [イベント ログ ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ Microsoft Windows イベント・ログ・モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
重要な情報	▶ データベース・ドライバやユーザ名によって、表示される情報が大幅に変わります。 ▶ このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[サーバ]	イベント・ログを監視するサーバ。サーバのリスト (SiteScope で設定したリモート・サーバのみが表示されます) からサーバを選択します。または、[サーバの参照] ボタンをクリックしてローカル・ドメインからサーバを選択するか、[リモート サーバの追加] をクリックして新しいサーバを追加します。 標準設定値 : SiteScope サーバ (SiteScope がインストールされているサーバ)
[サーバの参照]	監視対象のサーバを選択します。 ▶ サーバの参照 : ローカル・ドメインに表示されるサーバのドロップダウン・リストからサーバを選択します。 ▶ サーバ名の入力 : 監視対象サーバがネットワークで認識されていない、または [リモート サーバ] で設定されていないために、監視対象サーバがサーバのリストに表示されない場合、監視対象サーバの IP アドレスまたは名前を入力します。[サーバ名の入力] で入力したマシン名の先頭に、2 つの円記号 (“¥¥”) が自動的に追加されます。 注 : ドメインの権限が付与されているか、Windows リモート・サーバへのアクセスが認証されている必要があります。リモート Windows サーバの設定方法の詳細については、506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
[リモート サーバの追加]	リモート・サーバを追加および設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、523 ページ「新規 Microsoft Windows リモート・サーバ/Microsoft Windows リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。

UI 要素	説明
[ログ名]	表示するログ・ファイルのタイプを選択します。 ➤ アプリケーション ➤ ディレクトリ・サービス ➤ DNS ➤ ファイル・レプリケーション・サービス ➤ セキュリティ ➤ システム 標準設定値 : システム
[表示イベント数]	該当のイベント・ログの表示エントリ数。ログの最新のエントリが最初に表示されます。 標準設定値 : 10
[ツールの実行]	テストを実行し、ログ・エントリのリストを更新します。ログ・エントリは [結果] 表示枠に表示されます。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。

 FTP サーバ・ツール

このツールでは、FTP サーバにアクセスして SiteScope (FTP クライアントとして機能) と FTP サーバのやり取りを表示できます。たとえば、FTP サーバが正常に機能していないことを示す警告を SiteScope から受信した場合、まずこのツールを使用して問題を特定します。

アクセス方法	▶ [ツール] コンテキスト > [Web ツール] > [FTP ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ FTP モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[基本 FTP 設定]	
[FTP サーバ]	テストする FTP サーバの IP アドレスまたは名前。 例 : 206.168.191.22 または ftp.thiscompany.com
[ファイル]	取得するファイル名。 例 : ¥pub¥docs¥mydoc.txt
[ユーザ名]	FTP サーバにログオンするために使用する名前。
[パスワード]	FTP サーバにログオンするために使用するパスワード。
[パッシブ モード]	SiteScope では、パッシブ FTP 接続を使用します。通常これは、ファイアウォール経由で FTP サーバにアクセスする場合に必要です。
[HTTP プロキシ設定]	
[HTTP プロキシ]	FTP テストにプロキシ・サーバを使用する場合のプロキシ名または IP アドレス。
[プロキシのユーザ名]	プロキシ・サーバにログインするために使用する名前。
[プロキシ パスワード]	プロキシ・サーバにログインするために使用するパスワード。
[ツールの実行]	テストを実行します。テスト結果が [結果] 表示枠に表示されていることを確認します。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。

次に、FTP サーバのチェック・ツールのサンプル出力を示します。このサンプルでは、FTP サーバで問題なくログオンが許可され、サーバが実行されて要求が受け入れられています。要求されたファイル (file.txt) をサーバで特定できなかったために失敗が発生しています。欠落しているファイルを置換するか、ファイルの場所を確認すればこの問題は簡単に解決します。

```
Received:220 public Microsoft FTP Service (Version 2.0).  
Sent: USER anonymous  
Received:331 Anonymous access allowed, send identity (e-mail name) as password.  
Sent: PASS anonymous  
Received:230 Anonymous user logged in.  
Sent: PASV  
Received:227 Entering Passive Mode (206,168,191,1,5,183).  
Connecting to server 206.168.191.1 port 1463  
Sent: RETR file.txt  
Received: 550 file.txt: The system cannot find the file specified.  
Sent: QUIT  
Received: 221
```



LDAP 認証ツール

このツールでは、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) サーバで単純な認証を実行してユーザを認証できるかどうかを確認できます。

アクセス方法	▶ [ツール] コンテキスト > [データベース ツール] > [LDAP 認証状態ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ LDAP モニタや Active Directory レプリケーション・モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[セキュリティ プリンシパル]	サービスの呼び出し側を認証するプリンシパルの ID を指定するための、環境プロパティの名前を保持する定数。プリンシパルの形式は、認証スキームによって異なります。このプロパティを指定しない場合は、サービス・プロバイダによって動作が決定されます。これは、 uid=testuser,ou=TEST,o=mydomain.com の形式になります。 注： SiteScope では、等号 ("="), セミコロン (";"), 引用符 (""") の 1 つ以上の文字がユーザ名に使用されているユーザはサポートされません。
[セキュリティ資格情報]	サービスの呼び出し側を認証するプリンシパルの資格情報を指定するための、環境プロパティの名前を保持する定数。プロパティの値は、認証スキームによって異なります。たとえば、ハッシュ化されたパスワード、クリア・テキスト・パスワード、鍵、証明書などになります。このプロパティを指定しない場合は、サービス・プロバイダによって動作が決定されます。
[LDAP サービス プロバイダ]	使用するサービス・プロバイダの設定情報を指定するための、環境プロパティの名前を保持する定数。プロパティの値には URL 文字列が含まれます。このプロパティは、アプレット・パラメータ、システム・プロパティ、リソース・ファイルで指定できます。これらのソースで指定しない場合は、サービス・プロバイダによって標準設定が決定されます。 例： ldap://<somehost>:389
[オブジェクト クエリ]	標準設定のユーザ dn オブジェクト以外の LDAP オブジェクトを参照するためのオブジェクト・クエリ。LDAP フィルタを使用する場合、このテキスト・ボックスに有効なオブジェクト・クエリを入力する必要があります。検索フィルタの詳細については、後述の説明を参照してください。 例： 上記で入力した dn オブジェクトに関連付けられている電子メール・アドレスをチェックするためのメール・オブジェクトを入力します。

UI 要素	説明
[LDAP フィルタ]	フィルタ条件を使用して LDAP を検索します。LDAP フィルタの構文は、論理演算子が引数の前にくる前置表記法の論理式になります。 例：項目 sn=Freddie は、sn 属性の属性値が Freddie になる必要があることを意味しています。 複数の項目をフィルタ文字列に含めるには、(sn=Freddie) のように各項目を括弧で囲み、& (結合演算子) などの論理演算子で結合して論理式を作成します。 例：フィルタの構文 (& (sn=Freddie) (mail=*)) では、Freddie の sn 属性と任意の mail 属性がある LDAP エントリが要求されます。
[ツールの実行]	テストを実行します。LDAP 認証テストの結果は [結果] 表示枠に表示されます。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。

 メールの送受信ツール

このツールでは、ネットワークを使用してメール・サーバをチェックし、メール・サーバで要求が受け入れられているかどうかや、メッセージの送受信ができるかどうかを確認できます。SMTP を使用して標準的なメール・メッセージを送信し、次に POP ユーザ・アカウントを使用してそのメッセージを取得します。SiteScope によって送信される各メッセージには、不正なメッセージを取得していないかや、誤った肯定読み取りを返していないかをチェックするための一意の鍵が含まれています。

アクセス方法	▶ [ツール] コンテキスト > [メール ツール] > [メールの送受信ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ メール・モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[基本メール設定]	
[アクション]	実行するアクションを選択します。 ▶ 送信と受信。 テスト・メッセージを SMTP サーバに送信して POP3 または IMAP4 サーバから受信し、メール・サーバが起動および動作していることを確認できます (標準設定のオプション)。 ▶ 受信のみ。 以前に送信したメッセージの受信用メール・サーバ (POP3 または IMAP4) をチェックします。このチェックは、以前に送信したメッセージの内容を照合して行われます。 ▶ 送信のみ。 受信用メール・サーバでメッセージが受信されたかどうかをチェックします。
[送信元電子メールサーバ (SMTP)]	テスト・メール・メッセージを送信する SMTP メール・サーバのホスト名。 例 : mail.thiscompany.com
[送信先アドレス]	テスト・メッセージを送信するメール・アドレス。
[受信プロトコル]	受信用メール・サーバで使用されるプロトコル。送信したメッセージの POP3 メール・サーバをチェックするには、POP3 オプションを使用します。送信したメッセージの IMAP メール・サーバをチェックするには、IMAP4 オプションを使用します。 標準設定値 : POP3
[電子メール受信サーバ]	テスト・メッセージを受信する POP メール・サーバのホスト名。これは、テスト・メッセージを送信したメール・サーバと同じにすることができます。 例 : mail.thiscompany.com

UI 要素	説明
[電子メール受信サーバのユーザ名]	POP ユーザ・アカウント名。このアカウントにテスト電子メール・メッセージが送信され、アカウントにログインしてメッセージが受信されたことが確認されます。このアカウントのほかのメールは検出されません。このアカウントには、個人用メール・アカウントまたは別の既存のアカウントを使用できます。 注：サーバからのメッセージを自動的に受信して削除する電子メール・リーダーを使用する場合、メールの送受信ツールでメール・メッセージが表示されずにエラーがレポートされる可能性があります。
[電子メール サーバパスワード]	必要な場合に使用するテスト・メール・アカウントのパスワード。
[内容が一致するもののみ受信]	受信メッセージの内容を照合するためのテキスト文字列。受信メッセージにこのテキストが含まれていない場合、メールの送受信でエラーがレポートされます。これは、受信専用オプション（Subject:MySubject など）が対象となります。検索では大文字と小文字は区別されます。 HTML タグはテキスト・ドキュメントの一部であるため、検索するテキストに HTML タグが含まれている場合は HTML タグも対象となります（“< B> Hello< /B> World” など）。これは、XML ページにも当てはまります。 文字列をスラッシュで囲んで正規表現による照合を実行できます。最後のスラッシュの後に i を付けると、照合で大文字と小文字が区別されます。たとえば、“/href=Doc%d+%.html/” や “/href=doc%d+%.html/i” のようになります。 特定のテキスト部分を保存して状態の一部として表示する場合、正規表現に括弧を使用します（/Temperature: (%d+)/）など。これにより、ページに表示されるときに該当の温度が返されます。
[詳細メール設定]	
[タイムアウト (秒単位)]	メール・メッセージの受信を待機する秒数。この秒数を超えるとタイムアウトになります。 標準設定値： 300 秒

UI 要素	説明
[POP チェックの 遅延 (秒)]	SiteScope によってテスト・メッセージが送信された直後に、メール・アカウントにログインしてメッセージが受信されたことが確認されます。メッセージが受信されていない場合、SiteScope では再チェック前に自動的に 10 秒間待機します。待機時間は、このボックスに別の秒数を指定して調整できます。 標準設定値 : 10 秒
[NTLM 認証]	電子メール・サーバで NTLM 認証が使用される場合の NTLM のバージョン (バージョン 1 または 2)。 標準設定値 : なし
[詳細表示]	送受信テストの詳細が表示されます。
[ツールの実行]	テストを実行します。メール・サーバのテスト結果が「結果」表示枠に表示されていることをチェックします。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。



Microsoft Windows Media Player ツール

このツールでは、Microsoft Windows Media Player のストリーミングをテスト
できます。

アクセス方法	▶ [ツール] コンテキスト > [アプリケーション ツール] > [Microsoft Windows Media Player ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ Microsoft Windows Media Player モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[URL]	テストするメディア・ファイルまたはストリーミング・ソースの URL。メディア・ファイルの URL である必要があります。 例 : mms:// <サーバ名> /sample.asf (ユニキャスト・ストリームの場合) または http://<サーバ名>/stationid.nsc (Windows Media Server マルチキャスト・ステーション・プログラムを使用したマルチキャスト・ストリームの場合) 注 : このモニタでは .asx または .mov 形式はサポートされていません。
[継続時間 (ミリ秒)]	ツールで使用するメディア・ファイルまたはソースの再生を継続する時間。この継続時間の値は、ファイルに含まれているメディアの継続時間に一致している必要はありません。 テストするファイルまたはソースのメディア・コンテンツが、テストに選択した継続時間の値よりも短い場合、モニタではメディア・コンテンツがすべて再生され、その結果がレポートされます。この結果にはメディア・コンテンツの再生に要した時間が含まれます。
[ツールの実行]	テストを実行します。メール・サーバのテスト結果が [結果] 表示枠に表示されていることをチェックします。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。

ネットワーク状態ツール

このツールでは、現在のネットワーク・インタフェースの統計情報がレポートされ、アクティブなネットワーク接続が表示されます。この情報は、ネットワーク・インタフェースの状況を判断するのに役立つ場合があります。また、ネットワーク接続が開いたまま残されていたり、接続が閉じられることなく次々と開かれていくといった暴走状態などの問題を追跡できます。

アクセス方法	[ツール] コンテキスト > [ネットワーク ツール] > [ネットワーク状態ツール] を選択します（「ツールを使用」権限が必要です）。
重要な情報	このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[ツールの実行]	ネットワーク状態ツールを実行し、ネットワーク情報をレポートします。データは [結果] 表示枠に表示されます。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。



ニュース・サーバ・ツール

このツールを使用して、ニュース・サーバにアクセスし、SiteScope（ニュース・クライアントとして機能）とニュース・サーバの間の NNTP 相互通信を表示できます。

アクセス方法	▶ [ツール] コンテキスト > [アプリケーション ツール] > [ニュース サーバ ツール] を選択します（「ツールを使用」権限が必要です）。 ▶ ニュース・モニタを設定または表示する場合も使用できます（SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合）。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[ニュース サーバ]	news.sitescope.com または news.sitescope.com:7777 という形式のニュース・サーバ名。
[ニュース グループ]	ニュース・グループ名（任意指定）。複数のニュース・グループ名はカンマ（“,”）で区切ります。
[ユーザ名]	上記で指定したニュース・サーバへのアクセスに名前およびパスワードが必要な場合に使用するユーザ名。
[パスワード]	上記で指定したニュース・サーバへのアクセスに名前およびパスワードが必要な場合に使用するパスワード。

UI 要素	説明
[ツールの実行]	テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。

パフォーマンス・カウンタ・ツール

このツールを使用して、Windows NT/2000 ネットワーク内の特定のマシンのパフォーマンス・カウンタをチェックできます。このツールは、SiteScope の一部として供給される **perfex.exe** 実行ファイルへのインタフェースを提供します。

アクセス方法	▶ [ツール] コンテキスト > [オペレーティング システム ツール] > [パフォーマンス カウンタ ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ CPU モニタ、ディスク領域モニタ、メモリ・モニタ、Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタを設定または表示するときにも使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
重要な情報	このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[サーバ]	監視する Windows パフォーマンス・カウンタのオブジェクトが実行されているサーバ。サーバのリスト (SiteScope で設定したリモート・サーバのみが表示されます) からサーバを選択します。または, [サーバの参照] ボタンをクリックしてローカル・ドメインからサーバを選択するか, [リモート サーバの追加] をクリックして新しいサーバを追加します。 標準設定値: SiteScope サーバ (SiteScope がインストールされているサーバ)
[サーバの参照]	[HP SiteScope サーバの検索] ダイアログ・ボックスが開き, 監視対象のサーバを選択できます。 ▶ サーバの参照: ローカル・ドメインに表示されるサーバのドロップダウン・リストからサーバを選択します。 ▶ サーバ名の入力: 監視対象サーバがネットワークで認識されていない, または [リモート サーバ] で設定されていないために, 監視対象サーバがサーバのリストに表示されない場合, 監視対象サーバの IP アドレスまたは名前を入力します。[サーバ名の入力] で入力したマシン名の先頭に, 2 つの円記号 (“¥¥”) が自動的に追加されます。 注: ドメインの権限が付与されているか, Windows リモート・サーバへのアクセスが認証されている必要があります。リモート Windows サーバの設定方法の詳細については, 506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
[リモート サーバの追加]	[Microsoft Windows リモートを追加] ダイアログ・ボックスが開き, 追加するリモートのタイプ (Windows または UNIX) を選択して設定の詳細を入力できます。 Microsoft Windows リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については, 523 ページ「新規 Microsoft Windows リモート・サーバ/Microsoft Windows リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。 UNIX リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については, 531 ページ「新規 UNIX リモート・サーバ/UNIX リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。

UI 要素	説明
[カウンタ]	個々のパフォーマンス・カウンタおよび選択したカウンタ・オブジェクトの対応する値を表示する、カウンタ・オブジェクトを選択します。
[ツールの実行]	ツールを実行し、個々の Windows パフォーマンス・カウンタおよび選択したカウンタ・オブジェクトの対応する値を表示します。この情報は [結果] 表示枠に表示されます。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。

Ping ツール

このツールでは、往復時間とパスが表示されます。このツールによってパケットが別の場所に送信され、送信者に返されます。ネットワークに問題がある場合、ping を使用して別の場所に到達できるかどうかわかります。Ping ツールでは、現在のサーバから別の場所に ping を行います。

アクセス方法	➤ [ツール] コンテキスト > [ネットワーク ツール] > [Ping ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ➤ Ping モニタやポート・モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ➤ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ➤ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。

関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[解決するホスト名]	ping するホストのドメイン名または IP アドレス。 例 : demo.thiscompany.com または 206.168.112.53
[ツールの実行]	ドメイン名または IP アドレスに Ping します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。



プロセス・ツール

このツールでは、SiteScope がインストールされているサーバで実行中のプロセスが表示されます。これは、重要なプロセスが使用可能であることを確認する場合に便利です。

アクセス方法	[ツール] コンテキスト > [オペレーティング システム ツール] > [プロセス ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。
関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[サーバ]	監視対象プロセスが実行されているサーバ。サーバのリスト (SiteScope で設定したリモート・サーバのみが表示されます) からサーバを選択します。または、[サーバの参照] ボタンをクリックしてローカル・ドメインからサーバを選択するか、[リモート サーバの追加] をクリックして新しいサーバを追加します。 標準設定値 : SiteScope サーバ (SiteScope がインストールされているサーバ)

UI 要素	説明
[サーバの参照]	[HP SiteScope サーバの検索] ダイアログ・ボックスが開き、監視対象のサーバを選択できます。 ▶ サーバの参照：ローカル・ドメインに表示されるサーバのドロップダウン・リストからサーバを選択します。 ▶ サーバ名の入力：監視対象サーバがネットワークで認識されていない、または [リモート サーバ] で設定されていないために、監視対象サーバがサーバのリストに表示されない場合、監視対象サーバの IP アドレスまたは名前を入力します。[サーバ名の入力] で入力したマシン名の先頭に、2 つの円記号 (“¥¥”) が自動的に追加されます。 注：ドメインの権限が付与されているか、Windows リモート・サーバへのアクセスが認証されている必要があります。リモート Windows サーバの設定方法の詳細については、506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
[リモート サーバの追加]	[リモート フォームの追加] ダイアログ・ボックスが開き、追加するリモートのタイプ (Windows または UNIX) を選択して設定の詳細を入力できます。 Microsoft Windows リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については、523 ページ「新規 Microsoft Windows リモート・サーバ/Microsoft Windows リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。 UNIX リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については、531 ページ「新規 UNIX リモート・サーバ/UNIX リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。
[ツールの実行]	テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。

 Real Media Player ツール

このツールでは、Real Media Player のストリーミングをテストできます。

アクセス方法	▶ [ツール] コンテキスト > [アプリケーション ツール] > [Real Media Player ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ Real Media Player モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[URL]	テストするメディア・ファイルまたはストリーミング・ソースの URL。メディア・ファイルの URL である必要があります。 注： ▶ このツールでは、（音声ではなく）ビデオ・ストリームのみをテストできます。 ▶ このツールでは、.smi 形式などのメタデータ・ファイルはサポートされていません。
[継続時間 (ミリ秒)]	ツールで使用するメディア・ファイルまたはソースの再生を継続する時間。この継続時間の値は、ファイルに含まれているメディアの継続時間に一致している必要はありません。 テストするファイルまたはソースのメディア・コンテンツが、テストに選択した継続時間の値よりも短い場合、モニタではメディア・コンテンツがすべて再生され、その結果がレポートされます。この結果にはメディア・コンテンツの再生に要した時間が含まれます。
[ツールの実行]	テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。

正規表現ツール

このツールを使用すると、正規表現の照合を実行できます。

アクセス方法	[ツール] コンテキスト > [共通ユーティリティ ツール] > [正規表現ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。
関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[テキスト]	正規表現の照合を実行する文字列または値を含むテキストの一部をコピーして、このボックスに貼り付けます。 正規表現を効率よく作成するために、照合する対象データまたはパターンに先行する内容をすべて含める必要があります。たとえば、Web ページの内容を照合するための正規表現を作成する場合、URL ツールを使用して HTTP ヘッダを含む HTTP の内容全体を取得する必要があります。
[正規表現]	入力したテキストの一部を照合するには、正規表現をスラッシュ (／／) で囲んで入力します。 注： 復帰改行および行送りが含まれる複数行の内容の場合、表現の最後に s 検索修飾子を追加して内容を 1 行のテキストとして扱うことを検討してください。 例： /value:¥W[¥d]{2,6}/s
[ツールの実行]	テストを実行します。照合テストの結果は [結果] 表示枠に表示されます。正規表現に問題がある場合、エラー・メッセージが表示されます。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。

解析された括弧および一致文字列テーブル

本項で説明するテーブルには、正規表現内の括弧のペアによって保持された値または逆参照として要求される一致が表示されます。表現に括弧が含まれていない場合、このテーブルは空です。解析された括弧テーブルには次の列があります。

UI 要素	説明
[左から数えた括弧の数]	左から数えた、正規表現内の括弧で区切られたパターンが表示されます。
[一致テキスト]	左側の列に表示された、括弧でマークされたパターンに一致したテキストが表示されます。
[スラッシュの間と完全一致]	テーブルの下にあるテキスト領域。[検索対象となるテキスト] ボックスに入力された内容全体がそのまま表示されます。このなかで正規表現内のパターンに一致した内容が、通常は青いフォントで強調表示されます。これは、.* パターンのようなワイルドカード表現を使用して、一致する内容が多すぎる場合などに起こり得る問題を表示するのに便利です。また、内容に重複したパターンがあるという問題を明らかにすることもできます。この場合、内容の必要な部分に一致させるために別の固有パターンを表現に追加する必要があります。

サービス・ツール

このツールでは、SiteScope がインストールされているサーバ上で実行中のサービスが表示されます。これは、重要なサービスが使用可能であることを確認する場合に便利です。リモート UNIX マシンが定義されている場合、ドロップダウン・メニューに表示されます。

アクセス方法	▶ [ツール] コンテキスト > [オペレーティング システム ツール] > [サービス ツール] を選択します ([ツールを使用] 権限が必要です)。 ▶ サービス・モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または [モニタ・ツールを使用] 権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
重要な情報	このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[サーバ]	監視対象サービスが実行されているサーバ。サーバのリスト (SiteScope で設定したリモート・サーバのみが表示されます) からサーバを選択します。または, [サーバの参照] ボタンをクリックしてローカル・ドメインからサーバを選択するか, [リモート サーバの追加] をクリックして新しいサーバを追加します。 標準設定値: SiteScope サーバ (SiteScope がインストールされているサーバ)
[サーバの参照]	[HP SiteScope サーバの検索] ダイアログ・ボックスが開き, 監視対象のサーバを選択できます。 ▶ サーバの参照: ローカル・ドメインに表示されるサーバのドロップダウン・リストからサーバを選択します。 ▶ サーバ名の入力: 監視対象サーバがネットワークで認識されていない, または [リモート サーバ] で設定されていないために, 監視対象サーバがサーバのリストに表示されない場合, 監視対象サーバの IP アドレスまたは名前を入力します。[サーバ名の入力] で入力したマシン名の先頭に, 2 つの円記号 (“¥¥”) が自動的に追加されます。 注: ドメインの権限が付与されているか, Windows リモート・サーバへのアクセスが認証されている必要があります。リモート Windows サーバの設定方法の詳細については, 506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
[リモート サーバの追加]	[リモート フォームの追加] ダイアログ・ボックスが開き, 追加するリモートのタイプ (Windows または UNIX) を選択して設定の詳細を入力できます。 Microsoft Windows リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については, 523 ページ「新規 Microsoft Windows リモート・サーバ/Microsoft Windows リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。 UNIX リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については, 531 ページ「新規 UNIX リモート・サーバ/UNIX リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。

UI 要素	説明
[ツールの実行]	テストを実行します。テスト結果は「結果」表示枠に表示されます。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。



SNMP ブラウザ ツール

このツールは、SNMP エージェントの MIB の XML 表現を提供します。SNMP エージェントの接続プロパティの検証や、そのエージェントが実装する MIB の詳細情報の取得に使用できます。

アクセス方法	▶ [ツール] コンテキスト > [SNMP ツール] > [SNMP ブラウザ ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ Cisco Works モニタ, F5 Big-IP モニタ, MIB による SNMP モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者, または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで, 既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで, [ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには, SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより, ツールが開き, モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
重要な情報	▶ このツールは, 特定のエージェント上にあるすべての OID を横断し, <SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.mib ディレクトリの MIB 情報を使用して OID の XML 表現を作成します。XML ツリーに含まれるのは, OID のテキスト名および数値名, その説明 (使用可能な場合), 横断時点の値です。 ▶ XML は, 別個の [結果] 表示枠に表示されます。この表示枠では行番号が表示され, 個別の XML が強調表示されます。MIB 横断中にエラーが発生した場合, 問題を説明するエラー・メッセージが [結果] 表示枠に出力されます。
関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[SNMP 接続設定]	
[サーバ]	SNMP エージェントが実行されている, 監視対象のデバイスのホスト名または IP アドレス。
[SNMP のバージョン]	ツールがエージェントへの接続時に使用する SNMP のバージョン。 標準設定値 : V1
[コミュニティ]	バージョン 1 または 2 接続で SNMP エージェントに接続するときに使用するコミュニティ文字列。 標準設定値 : public
[タイムアウト (秒単位)]	すべての SNMP 要求 (再試行を含む) が完了するまで SiteScope が待機する合計時間 (秒単位)。 標準設定値 : 5 秒
[再試行]	SiteScope が SNMP GET 要求を失敗とみなすまで各 SNMP GET 要求を再試行する回数。 標準設定値 : 1
[ポート]	SNMP エージェントが監視するポート。 標準設定値 : 161

UI 要素	説明
[開始 OID]	このモニタのカウンタを選択する場合に、このオプションを使用します。モニタが SNMP エージェントのツリーの取得を試みるときは、ここで入力した OID 値から開始します。標準設定値は 1 で、一般的に使用され、ほとんどのアプリケーションに適用できます。1 から開始する OID を処理しないアプリケーションから値の取得を試みる場合のみ、このボックスを編集する必要があります。標準設定値の 1 ではどのカウンタも取得できなかった場合、異なる値の入力が必要になることがあります。
[MIB ファイル]	表示する MIB。[すべての MIB] を選択した場合、MIB 横断時に取得されたすべてのデータが表示されます。特定の MIB を選択した場合、その MIB 内の OID のみが表示されます。この MIB のリストを更新または拡張するには、新しい MIB ファイルを <SiteScope のルート・ディレクトリ>\ templates.mib ディレクトリに置きます。 標準設定値 : すべての MIB
[V3 SNMP 設定] (この表示枠は、[SNMP のバージョン] フィールドで V3 が選択された場合にのみ有効になります)	
[SNMP V3 認証タイプ]	バージョン 3 接続に使用する認証のタイプ。 標準設定値 : MD5
[SNMP V3 ユーザ名]	バージョン 3 接続のユーザ名。
[SNMP V3 認証パスワード]	バージョン 3 接続の認証に使用するパスワード。
[SNMP V3 プライバシーパスワード]	バージョン 3 接続の DES プライバシー暗号化で使用するパスワード。プライバシーが不要な場合はこのボックスを空白のままにします。

UI 要素	説明
[SNMP V3 コンテキスト エンジン ID]	この接続に使用するコンテキスト・エンジン ID を表す 16 進文字列。これは SNMP V3 にのみ適用されます。
[SNMP V3 コンテキスト 名]	この接続に使用するコンテキスト名。これは SNMP V3 にのみ適用されます。
[ツールの実行]	テストを実行します。テスト結果は「結果」表示枠に表示されます。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。



SNMP ツール

このツールでは、SNMP 管理情報ベース（MIB）に問い合わせで OID のセットを取得できます。

アクセス方法	▶ [ツール] コンテキスト > [SNMP ツール] > [SNMP ツール] を選択します（「ツールを使用」権限が必要です）。 ▶ SNMP モニタを設定または表示する場合も使用できます（SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合）。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[ホスト名]	問い合わせる SNMP MIB をホストするサーバの IP アドレス。
[オブジェクト ID]	取得される次のオブジェクトの ID。
[インデックス]	SNMP オブジェクトのインデックス。OID の値は、スカラ値またはインデックス（配列）値のいずれかです。スカラ OID の場合、インデックス値を 0 に設定する必要があります。インデックス値の場合、必要な値を含む要素にインデックス（1 で始まる正の整数）を指定する必要があります。 例：OID 1.3.6.1.2.1.2.2.1.17 は、4 つの要素を含むインデックス値です。この OID の 2 番目の要素にアクセスするには、このテキスト・ボックスに 2 のインデックスを入力します。 標準設定値： 0
[コミュニティ]	SNMP デバイスのコミュニティ文字列。 標準設定値： public
[SNMP のバージョン]	テストする SNMP ホストで使用される SNMP のバージョン。SiteScope では SNMP のバージョン 1 およびバージョン 2 の両方がサポートされています。 標準設定値： V1
[取得するレコード数]	取得する OID レコード数。 標準設定値： 1
[ツールの実行]	テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。



SNMP トラップ・ツール

このツールでは、SiteScope の SNMP リスナで受信される SNMP トラップを表示できます。このツールは、すでに 1 つ以上の SNMP トラップ・モニタを作成している場合にのみ有効になります。SNMP トラップ・モニタを作成することで、SiteScope の SNMP トラップ・ログが有効になります。

アクセス方法	▶ [ツール] コンテキスト > [SNMP ツール] > [SNMP トラップ ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ SNMP トラップ・モニタまたはテクノロジー SNMP トラップ統合モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
重要な情報	SNMP トラップ・ログがアクティブでない場合、「SNMP トラップの受信がアクティブではありません」というメッセージがツール・ページの上部に表示されます。
関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[内容の照合]	SNMP トラップ・ログのエントリの照合に使用する任意のテキスト文字列または正規表現。内容の照合は、OID、コミュニティ、エージェントなどのログの列から実行できます。 SiteScope の SNMP トラップ・ログの SNMP トラップは、[SNMP トラップ ログ] テーブルに表示されます。検索条件と一致するトラップ数が、ページの下部にある [SNMP トラップ ログ] テーブルのタイトルに表示されます。
[表示するトラップ数]	表示する SNMP トラップ数。トラップ数は、平均トラップ長に基づいて計算されます。トラップ・テキストが平均よりも長いまたは短い場合、表示されるトラップ数は選択した値と異なる場合があります。SiteScope が受信した最新の SNMP トラップが最初に表示されます。 標準設定値 : 10
[ツールの実行]	テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。



トレース・ルート・ツール

このツールは、2 つの場所を結ぶネットワーク経路を調べるためのツールで、経路上の各ホップに到達するまでの時間を示します。ネットワークに問題があれば、多くの場合にトレースルートを使用することで問題が生じている箇所を絞り込むことができます。このツールは、サーバから別の場所までのトレースルートを実行します。

このユーティリティを使用して、ホストの接続性を確認し、ホストがインターネットに接続する方法を決定できます。サーバから指定したホストへの経路を決定することもできます。これにより、インターネットのほかの場所にあるホストへの接続を試みる場合に、パケット損失が発生している可能性のある箇所を確認できます。

アクセス方法	[ツール] コンテキスト > [ネットワーク ツール] > [トレース ルート ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。
重要な情報	このツールでは、Windows プラットフォームでのみトレースルートを実行できます。UNIX の場合、SiteScope プロセスを停止し、トレースルート・ユーティリティのパス (/usr/sbin/traceroute など) を [インフラストラクチャ プリファレンス] の [トレースルート コマンド] ボックスに追加してから SiteScope を再起動する必要があります。
関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[解決するホスト名]	解決するほかの場所のドメイン名または IP アドレス。 例 : demo.thiscompany.com または 206.168.112.53

UI 要素	説明
[ツールの実行]	テストを実行します。テスト結果は「結果」表示枠に表示されます。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。

URL ツール

このツールを使用すると、Web サーバから項目を取得できます。URL には接続するサーバと返す項目を指定します。SiteScope には要求した URL の内容が表示されるため、このツールは URL 内容のチェック機能としても使用できます。このユーティリティを使用して、特定の URL が Web サーバからアクセスできることを確認できます。また、ページが返されるまでにかかる時間の確認にも使用できます。

アクセス方法	▶ [ツール] コンテキスト > [Web ツール] > [URL ツール] を選択します（「ツールを使用」権限が必要です）。 ▶ URL モニタ、URL 内容モニタ、Oracle 9i アプリケーション・サーバ・モニタを設定または表示する場合も使用できます（SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合）。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの「プロパティ」タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの「ツール」ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は「結果」表示枠に表示されます。
関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[メイン設定]	
[URL]	テストする URL。 例 : http://demo.company.com
[内容の照合]	返されたページまたはフレーム・セット内でチェックするテキスト文字列。ページにこのテキストが含まれていない場合、内容の照合は失敗します。検索では大文字と小文字は区別されます。HTML タグはテキスト・ドキュメントの一部であるため、検索するテキストに HTML タグが含まれている場合はその HTML タグを含める必要があります ("< B> Hello< /B> World" など)。
[エラーの内容の照合]	返されたページまたはフレーム・セット内でチェックするテキスト文字列。ページにこのテキストが含まれている場合、テストはエラー状況を示します。検索では大文字と小文字は区別されます。
[HTTP 設定]	
[URL 内容のエンコード]	内容の書き込みに使用するエンコーディング。エンコーディングは次のいずれからでも検出できます。 ▶ HTTP ヘッダ : Content-Type: text/html; charset=UTF-8 ▶ HTML メタ・タグ : <meta http-equiv="Content-Type" content="text/html; charset=US-ASCII"> ▶ XML :<?xml version="1.0" encoding="ISO-8859-1"?> ドロップダウン・リストからエンコーディング・タイプを選択します。 例 : UTF-8, UTF-16, US-ASCII, ISO-8859-1 標準設定値 : サーバ応答からのエンコーディング
[画像を取得]	SiteScope には、要求した URL にリンクするグラフィック、ロゴなどの画像が表示されます。
[フレームを取得]	SiteScope には、要求した URL にリンクするフレームの HTML コードが表示されます。

UI 要素	説明
[認証設定]	
[資格情報]	指定した URL でアクセス用の名前とパスワードが必要な場合に資格情報を許可するためのオプション。 ▶ ユーザ名およびパスワードを使用：手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。 [ユーザ名] ボックスにユーザ名を、[パスワード] ボックスにパスワードを入力して URL にアクセスします。 ▶ 事前定義された資格情報を選択：URL 用の定義済みユーザ名およびパスワードを SiteScope で自動的に設定する場合に、このオプションを選択します（標準設定のオプション）。[資格情報プロファイル] ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、[資格情報の追加] をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、789 ページ「資格情報のプリファレンスの設定方法」を参照してください。
[NTLM V2]	ユーザ・ログオンの認証に NTLM (Windows NT LAN Manager) バージョン 2 を使用します。
[プロキシ設定]	
[HTTP プロキシ]	URL へのアクセスに使用する HTTP プロキシ・サーバのアドレスまたはドメイン名とポート。
[プロキシ サーバのユーザ名]	プロキシ・サーバにログオンするために使用する名前。
[プロキシ サーバのパスワード]	プロキシ・サーバにログオンするために使用するパスワード。
[Proxy NTLM V2]	プロキシでユーザ・ログオンの認証に NTLM (Windows NT LAN Manager) バージョン 2 を使用します。
[ツールの実行]	テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。結果には、URL 取得の統計情報と URL 内容のテキスト表現が含まれます。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。



Web サービス・ツール

このツールを使用すると、SOAP (Simple Object Access Protocol) に対応する Web サービスの可用性や安定性のチェック、または実際の SOAP 応答の表示を行うことができます。失敗した Web サービス要求の診断や、特定の Web サービス・モニタで使用する照合文字列の選択にも便利です。Web サービス・テストは、SOAP 要求をサーバに送信し、HTTP 応答コードをチェックしてサービスが応答していることを確認します。実際の SOAP 応答が表示されますが、返されたメッセージについてそれ以上の検証は行われません。

SOAP は、あるオペレーティング・システム下で実行されているプログラムが同じまたは別のオペレーティング・システム下で実行されている別のプログラムと通信する手段です (Linux ベースのプログラムと通信する Windows 2000 プログラムなど)。SOAP は分散環境のサービスとの情報交換に HTTP (Hypertext Transfer Protocol) と XML (Extensible Markup Language) を使用します。

アクセス方法	▶ [ツール] コンテキスト > [Web ツール] > [Web サービス ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ Web サービス・モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。

重要な情報	▶ 現在サポートされている仕様の機能は、WSDL 1.2, SOAP 1.1, XML Schema 2001 に基づく Simple Type および Complex Type, HTTP (S) プロトコルのみを使用した SOAP バインディングです。SOAP with Attachments はサポートされていません。 ▶ SOAP および WSDL テクノロジーは進化しています。そのため、WSDL ドキュメントによっては正確に解析されない場合があります。また、SOAP 要求によっては、やり取りできない Web サービス・プロバイダがある場合もあります。
関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[WSDL 設定]	
[WSDL の場所]	次のいずれかの WSDL の場所を選択します。 ▶ ファイル。使用する WSDL ファイルを選択します。このリストには、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\¥templates.wsdl/*.wsdl を検索して見つかったファイルが反映されます。WSDL ファイルには拡張子 .wsdl が必要です。 ▶ URL。テストする Web サービスの URL を入力します。
[データの取得]	メソッド引数に指定した WSDL ファイルを取得して分析します。結果のページには、使用できる測定値が表示されます。
[サービス名]	呼び出すサービスの名前。初期セットアップ時、この名前が WSDL ファイルから抽出されます。
[ポート名]	呼び出すポートの名前。初期セットアップ時、この名前が WSDL ファイルから抽出されます。

UI 要素	説明
[メソッド名]	呼び出すメソッドの名前。初期セットアップ時、この名前が WSDL ファイルから抽出されます。
[メソッド名前空間]	SOAP 要求内のメソッドの XML 名前空間。初期セットアップ時、この値が WSDL ファイルから抽出されます。
[スキーマ名前空間]	SOAP 要求内のスキーマの XML 名前空間。初期セットアップ時、この値が WSDL ファイルから抽出されます。
[SOAP アクション]	Web サービスへの SOAP 要求のヘッダに含まれる SOAP アクションの URL。初期セットアップ時、この名前が WSDL ファイルから抽出されます。

UI 要素	説明
[引数の名前]	前述の指定したメソッドへの引数とそのタイプ。Simple Type パラメータは形式 parm-name(parm-type) = value で指定します。<param-name> および <param-type> は、WSDL ファイルのサービス・メソッド仕様と完全に一致する必要があります。<value> は <param-type> と一致する必要があります。一致しない場合、要求は失敗します。空白が埋め込まれた文字列は、二重引用符 ("") で囲みます。各パラメータは、各値の最後に復帰改行を追加して別個の行に置く必要があります。 例 : stockSymbol (string) = MERQ numShares (int) = 10 Complex Type パラメータは、1 つの長い文字列として表現する必要があります (改行は読みやすくする目的にのみ使用します)。 <pre>stocksymbol[COMPLEX] = <stocksymbol xmlns:xsd="http://www.w3.org/2001/XMLSchema" xmlns:soapenc="http://schemas.xmlsoap.org/soap/encoding/" xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance" xmlns:fw100="urn:ws-stock" xsi:type="fw100:getQuote"> <ticker xsi:type="xsd:string">MERQ </ticker> </stocksymbol></pre> 注 : SiteScope は入力パラメータ・リストに対する検証を行わないため、Complex Type 値が有効で適切な形式の XML 文字列であることを確認してください。Complex Type パラメータの場合、行末以外に復帰改行を追加しないでください。 Web サービス・メソッドがパラメータを取り込まない場合、テキスト・ボックスは空のままにします。
[ユーザ定義 SOAP XML の使用]	[ユーザ SOAP XML] ボックスの XML を使用します。これにより、手動で定義した XML を使用できます。

UI 要素	説明
[ユーザ SOAP XML]	WSDL ファイルから抽出された、選択した Web サービスの SOAP XML が表示されます。標準設定の XML を変更し、 [ユーザ定義 SOAP XML の使用] チェック・ボックスを選択すると、このボックスに手動で定義した XML を使用できます。
[メイン設定]	
[要求のスキーマ]	要求のスキーマ。現在 SiteScope でサポートされているのは SOAP のみです。
[タイムアウト (秒単位)]	Web サービス要求が完了するまで SiteScope が待機する合計時間（秒単位）。 標準設定値：30 秒
[.NET SOAP の使用]	Web サービスが Microsoft .NET に基づいている場合に選択します。
[内容の照合]	返されたページまたはフレーム・セット内でチェックするテキスト。ページにこのテキストが含まれていない場合、ツールから内容の一致はないというメッセージが表示されます。 HTML タグはテキスト・ドキュメントの一部であるため、検索するテキストに HTML タグが含まれている場合は HTML タグも対象となります。これは、XML ページにも当てはまります。 例："< B> Hello< /B> World" 文字列をスラッシュで囲んで正規表現による照合を実行することもできます。最後のスラッシュの後に i を付けると、検索では大文字と小文字が区別されません。 例：/href=Doc%d+%\.html/ または /href=doc%d+%\.html/i 特定のテキスト部分を保存して状態の一部として表示する場合、Perl 正規表現に括弧を使用します。 例：/Temperature: (d+) 注：検索では大文字と小文字は区別されます。
[HTTP 設定]	
[Web サービス サーバ URL]	チェックする Web サービス・サーバの URL が表示されます。

UI 要素	説明
[HTTP ユーザ エージェント]	SOAP 要求の HTTP ユーザ・エージェント。
[HTTP コンテンツ タイプ]	HTTP 要求のコンテンツ・タイプ。
[プロキシ設定]	
[HTTP プロキシ]	URL へのアクセスに使用できるプロキシ・サーバ(任意指定)。HTTP プロキシ・サーバのドメイン名およびポートを入力します。
[プロキシ サーバの ユーザ名]	このプロキシ・サーバで URL へのアクセスに名前およびパスワードが必要な場合に使用するユーザ名。 注: これらのオプションが機能するには、プロキシ・サーバでプロキシ認証がサポートされている必要があります。
[プロキシ サーバの パスワード]	このプロキシ・サーバで URL へのアクセスに名前とパスワードが必要な場合に使用するパスワード。 注: これらのオプションが機能するには、プロキシ・サーバでプロキシ認証がサポートされている必要があります。
[ログイン設定]	
[NTLM ドメイン]	Web サービスで、資格情報の一部として（後述のユーザ名およびパスワードとともに）NTLM / チャレンジ・レスポンス認証が必要な場合の NTLM ドメイン。
[認証ユーザ名]	Web サービスへのアクセスにユーザ名およびパスワードが必要な場合に使用するユーザ名（基本、ダイジェスト、NTLM 認証）。ユーザ名を入力します。 または、このエントリを空白のままにし、[一般プリファレンス] ページの [標準設定の認証ユーザ名] ボックスにユーザ名を入力できます。共通の認証資格情報を定義する場合は、この代替の方法を使用します。

UI 要素	説明
[認証パスワード]	Web サービスへのアクセスにユーザ名およびパスワードが必要な場合に使用するパスワード（基本，ダイジェスト，NTLM 認証）。パスワードを入力します。 または，このエントリを空白のままにし，[一般プリファレンス] ページの [標準設定の認証パスワード] ボックスにパスワードを入力できます。共通の認証資格情報を定義する場合は，この代替の方法を使用します。
[ツールの実行]	テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。 テストから返されるステータス値は次のとおりです。 ▶ OK ▶ 不明なホスト名 ▶ サーバに到達できません ▶ サーバに接続できません ▶ 読み込みのタイムアウト ▶ 内容の照合エラー ▶ ドキュメントが移動しました ▶ 許可されていません ▶ 禁止されています ▶ 見つかりません ▶ プロキシ認証が必要 ▶ サーバ・エラー ▶ 実装されていません ▶ サーバが使用中です
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。



XSL 変換ツール

このツールを使用すると、XML ファイルまたは出力の変換に使用可能なユーザ定義の XSL ファイルをテストできます。これには、Web アプリケーションから取得した、パフォーマンス・メトリックス・データが含まれるファイルなどがあります。XSL 変換の使用は、参照可能な XML モニタで XML データを使用できるように許容可能な形式に処理するために必要になる場合があります。

アクセス方法	▶ [ツール] コンテキスト > [共通ユーティリティ ツール] > [XSL 変換ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ XML 測定値モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
関連タスク	212 ページ「モニタの設定時または編集時のツールの使用方法」
関連情報	▶ 210 ページ「SiteScope ツールの概要」 ▶ 97 ページ「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[メイン設定]	
[XML URL]	変換の入力である XML ファイルの URL。

UI 要素	説明
[XSL ファイル]	テストする XSL ファイルへのパス。これは、SiteScope のルート・フォルダへの相対パスです。 例： <SiteScope のルート・ディレクトリ>¥templates.applications¥XmlApp1.xml
[認証設定]	
[認証ユーザ名]	対象 XML ファイルへのアクセスに認証が必要な場合、内容へのアクセスに必要なユーザ名。
[認証パスワード]	対象 XML ファイルへのアクセスに認証が必要な場合、内容へのアクセスに必要なパスワード。
[プロキシ サーバ]	対象 XML 内容へのアクセスにプロキシ・サーバを使用する場合、プロキシ・サーバ・アドレス。
[プロキシ サーバのユーザ名/プロキシサーバのパスワード]	対象 XML 内容へのアクセスにプロキシを使用する場合、プロキシの使用に必要なユーザ名およびパスワード。
[ツールの実行]	テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
[ファイルに保存]	結果をファイルに保存します。

8

正規表現の使用

本章の内容

概念

- ▶ 正規表現の概要 (276 ページ)
- ▶ 正規表現の定義 (277 ページ)
- ▶ 文字列リテラルの照合 (279 ページ)

参照情報

- ▶ メタ文字を使用したパターンの照合 (281 ページ)
- ▶ 検索モード修飾子 (286 ページ)
- ▶ 内容の照合値の保持 (287 ページ)
- ▶ SiteScope の日付変数 (288 ページ)
- ▶ ログ・ファイル監視の例 (294 ページ)
- ▶ 正規表現の使用時に発生する問題 (302 ページ)

概念

正規表現の概要

SiteScope では、テキスト・コンテンツの照合に正規表現を利用します。いくつかの SiteScope モニタでは、モニタの要求またはアクションによって返されるテキストの内容を照合できます。この章では、SiteScope モニタで正規表現を使用してテキスト・コンテンツを照合する方法について説明します。

正規表現は、Awk や Perl などのスクリプト言語および Emacs, Visual C++, Java などのプログラミング環境で使用するために開発されたテキスト解析ツールに付けられた名前です。正規表現自体はプログラミング言語ではありません。ただし、文字や記号の特殊な組み合わせを数多く使用するため、一部のプログラミング言語よりも理解しづらくなっている場合が多くあります。このような特殊文字（メタ文字と呼ばれます）のさまざまな組み合わせによって、正規表現は、より大きなテキストに含まれている特定のテキストを解析および抽出するための非常に強力で柔軟性のあるツールとなります。

モニタの「**内容の照合**」テキスト・ボックスに正規表現を使用すると、実行時にモニタに返されるテキストが SiteScope によって解析され、正規表現で定義したパターンに一致する内容が検索されます。このドキュメントでは、SiteScope モニタの内容を照合するために正規表現で使用される構文とメタ文字の概要について説明します。

正規表現の定義

SiteScope の内容を照合するための要素は、スラッシュ (/) 文字です。SiteScope モニタの「**内容の照合**」テキスト・ボックスのエントリは、正規表現として認識されるようにスラッシュで囲む必要があります。たとえば、`/website/` という表現をモニタの「**内容の照合**」ボックスに入力すると、SiteScope によって、モニタで受信したテキスト・コンテンツから **website** というリテラル・テキスト文字列が検索されます。一致するテキスト文字列がない場合、モニタによってエラー・ステータスがレポートされます。一致するテキスト文字列がある場合、ほかのモニタ・ステータスのしきい値に対応する条件もすべて満たしていれば、モニタによって正常ステータスが返されます。スラッシュでエントリを区切らずにテキストまたはほかの文字を「**内容の照合**」ボックスに入力すると、SiteScope では、エントリは無視されるか、内容の照合エラーとしてレポートされます。

また、SiteScope の正規表現では、正規表現を囲むスラッシュ内に括弧 () を追加できます。これは非常に便利な機能です。括弧は「後方参照」を作成するために使用されます。後方参照として、SiteScope では括弧間で一致したテキストが保持され、モニタの詳細のページの「**ステータス**」フィールドにそのテキストが表示されます。これは、内容の照合のトラブルシューティングに役立ちます。この方法を使用して、一致した値をあるモニタから別のモニタに、または URL シーケンス・モニタのあるステップから同じトランザクションの次のステップに渡すこともできます。また、括弧は次に示すように選択肢の範囲を定義するためにも使用されます。

通常、SiteScope で正規表現を作成して内容を照合する場合、反復的な手法が適しています。次に、正規表現を作成して内容を照合する場合の一般的な手順とガイドラインを示します。

- ▶ 監視するデータの 1 つのサンプルに一致するリテラル文字を使用して正規表現を作成します。例 : `/value: 1022.5/`。
- ▶ 繰り返しリテラル文字を文字クラスおよびメタ文字に置き換えて、リテラルをパターンへと標準化していきます。たとえば、前述の例のリテラルは、4 つの数値、小数点、もう 1 つの数値に一致する `/value:¥s¥d¥d¥d¥d¥.¥d/` になります。
- ▶ 照合するデータのパターンが変わる可能性がある場合を考えます。予測されるまたは可能性のある対象データの変動に合わせてパターンを調整します。前の例の `/value:¥s¥d¥d¥d¥d¥.¥d/` という表現は `/value:¥s[¥d]{1, 8}¥.¥d[1,2]/` のようになります。このパターンでは、小数点前の数値の数と小数点後の数値の数の変動に対応できます。このパターンでは、小数点が存在することを想定しています。ここで使用されている文字クラスの詳細については、次のセクションを参照してください。
- ▶ 照合するリテラル文字列またはパターンがコンテンツ内に複数回出現する可能性がある場合を考えます。照合するコンテンツより前に出現する一意のコンテンツを指定してから正規表現のパターンを追加します。これにより、監視するコンテンツが照合される前に一意のコンテンツが式で照合されます。この例のパターンでは、最初のいくつかのエントリが `/value: numbers/` のようになるパターンに一致します。静的コンテンツに一致するリテラルをパターンに追加すると、特定のデータの範囲が定まり、確実に対象データに対して照合を実行できるようになります。たとえば、照合するデータが `Open Queries` というテキストの後にある場合、`/Open Queries[¥s¥W]{1,5} value:¥s[¥d]{1, 8}¥.¥d[1,2]/` のように、介在するコンテンツのパターンとともにこのリテラルをパターンに追加できます。

文字列リテラルの照合

正確な文字列またはリテラル文字列の検索と照合は、正規表現でのパターン照合の最も単純な形式です。リテラルの照合では、正規表現はワード・プロセッシング・アプリケーションの検索/置換と同様に動作します。前述の例では、**Web site** というテキストと照合しました。正規表現 **/Buy Now/** は、文字 **Buy Now** が空白も含めてこの順序で含まれるテキストがモニタに返された場合に成功します。

標準設定では、正規表現は大文字と小文字を区別したリテラルです。つまり、英数字以外の文字を含めて、大文字と小文字、および順序で内容が表現と一致する必要があります。たとえば、修飾子のない **/Website/** の正規表現は、内容に完全に一致する文字列 **Website** が含まれる場合にのみ成功し、ページに含まれる内容が **website**, **WEBSITE**, または **Web site** の場合は失敗します（最後の例では、2 つの単語の間に正規表現にはない空白があるため失敗します）。

この場合は、正規表現で使用する特別な「予約済み」メタ文字である特定の英数字以外の文字をリテラルに照合できます。一部のメタ文字は、正規表現で照合する重要なリテラルと競合する場合があります。たとえば、ピリオドやドット記号 (**.**)、アスタリスク (*****)、ドル記号 (**\$**)、バックスラッシュ (****) は正規表現内で特別な意味を持ちます。これらの文字のいずれかが検索する特定のテキスト・パターンの主要部分である場合、正規表現プロセスでこれらの文字を特別なメタ文字としてではなくリテラル文字として扱うように「エスケープ」する必要があります。文字をメタ文字ではなくリテラルとして強制的に解釈させるには、その文字の前にバックスラッシュを追加します。

たとえば、**Web** ページで文字列 **4.99** を検索する場合に、**/4.99/** という正規表現を作成したとします。この場合、文字列 **4.99** が一致しますが、ピリオド文字は特別な意味を持つため、**4599** や **4Q99** のような文字列も一致します。正規表現でピリオドをリテラルとして解釈させるには、**/4¥.99/** のようにピリオドをスラッシュでエスケープします。文字の前にバックスラッシュのエスケープ文字を追加することで、正規表現プロセスでバックスラッシュに続く文字をリテラルとして強制的に解釈させることができます。通常、句読点やその他の英数字以外の文字を照合する場合は、常にこの構文を使用します。

代替の使用

代替を使用して、複数の文字列のいずれかが内容に含まれる **either/or** 照合を構成できます。代替文字は垂直パイプ記号 ("|") です。

垂直パイプは、正規表現で代替文字を区切るために使用されます。たとえば、正規表現 `/(e-mail|e-mail|contact us)/` は、垂直パイプで区切られた 3 つの文字列のいずれかが内容に含まれる場合に成功します。ここでは、代替の区切りに括弧が使用されています。この例では、一致する必要がある代替の外側にはパターンがありません。これに対して、`/(e-mail|e-mail|contact) us/` のように正規表現を記述することもできます。この場合、括弧に囲まれた 3 つの代替のいずれかの直後に空白スペースと単語 **us** が続く場合にのみ、照合は成功します。これは前の例よりも制限がありますが、括弧によって代替が内部の 3 つの単語に限定されていることもわかります。代替の 1 つ以上が見つかったとしても次の単語が「**us**」でない場合は、照合は失敗します。

参照情報

メタ文字を使用したパターンの照合

照合が必要なテキストが正確にわからない場合や、テキスト・パターンがセッションや日によって変わることはよくあります。正規表現には、パターンの定義や文字のカテゴリ全体の照合に使用する特殊なメタ文字が多くあります。正規表現は、単なるリテラルの英数字文字の照合だけでなく、非英数字文字の照合にも使用できます。このため、正規表現では検索する内容に非英数字文字が存在することを考慮することが重要です。つまり、正規表現を作成するときには、ピリオド、カンマ、ハイフン、引用符などの文字や、空白さえも考慮する必要があります。

本項の内容

- ▶ 281 ページ「正規表現で使用するメタ文字」
- ▶ 283 ページ「文字クラスの定義」
- ▶ 284 ページ「数量詞の使用」

正規表現で使用するメタ文字

メタ文字	説明
<code>¥s</code>	汎用的な空白（つまり <code>Space</code> キー）を照合する。このメタ文字は、数量詞と組み合わせて、照合対象の単語間に発生する可変の空白数の位置を照合する場合に特に便利です。
<code>¥S</code>	空白以外の文字を照合する。 <code>¥S</code> は大文字です。一方、小文字の <code>¥s</code> は空白の照合に使用します。

メタ文字	説明
.	ピリオド（ドット文字）。通常、これはすべての文字を照合します。 SiteScope では、ドットは独自形式の文字クラスとみなされるため、文字クラスの角括弧内に含めないでください。
\n	行送り文字を照合する。
\r	復帰改行文字を照合する。
\w	空白以外の文字を照合する。文字クラス [A-Za-z0-9_] で照合するものと同じです。 \w メタ文字は、アンダースコア文字を照合しますが、ほかの句読点（ハイフン、カンマ、ピリオドなど）は照合しません。
\W	\w （小文字）で照合する文字以外の文字を照合する。句読点と非英数字文字（~!@#\$%^&*()+={[];: と行送り文字、復帰改行、空白を含む）を照合する場合に特に便利です。 \w で照合される単語構成要素とみなされるアンダースコア文字は照合しません。
\d	数字のみを照合する。これは、[0-9] 文字クラスに相当します。
\D	非数字文字（ \d で照合しない文字）とほかの文字を照合する。 \W と似ていますが、英文字も照合します。 SiteScope では、通常これは数字に遭遇するまでのすべて（複数行を含む）を照合します。
\b	照合に際し、 \b で指示した位置に単語の境界（通常は空白）が必要であることを示す。
\B	指示した位置に単語の境界があってはならないことを示す。

文字クラスの定義

文字クラスは、重要で非常に便利な正規表現構成です。文字クラスには、正規表現内の特定の位置で検出される可能性がある特定の文字セットを定義します。文字クラスを使用するのは、1 つの位置で照合する文字の範囲を定義する場合、または数量詞を追加して複数の文字や複数行を広く照合する場合などです。

文字クラスは、文字とメタ文字の任意の組み合わせを角括弧 `[]` で囲んで形成します。文字クラスでは、照合対象となる「いずれか、またはすべて」の文字のグループを作成します。文字クラス外のリテラルやメタ文字とは異なり、文字クラス内の文字やメタ文字の物理的な並びは検索や照合の順序に影響しません。たとえば、クラス `[ABC0123abc]` は `[0123abcABC]` と同じ内容を照合します。

ハイフンを使用して文字または数字の範囲を示すことで、文字クラスをさらに効率化できます。たとえば、クラス `[0-9]` には 0 から 9 までのすべての数字が含まれます。クラス `[a-z]` には a から z までのすべての小文字が含まれます。ハイフンを使用して、より限定的なクラスを作成することもできます。たとえば、`[e-tE-T]` は E から T までの大文字または小文字を照合し、`[0-5]` は 0 から 5 までの数字のみを照合します。

キャレット文字 (^) を文字クラス内で否定として使用すると、特定の文字を内容の照合から除外できます。

文字クラスの例

例	説明
<code>[a-zA-Z]</code>	文字 a から文字 z までの任意の英文字（大文字と小文字の両方）を照合する。複数の文字を照合するには、後述のように文字クラスの後に数量詞を付加します。
<code>[0-9]</code>	0 から 9 までの任意の数字を照合する。複数の数字を照合するには、後述のように文字クラスの後に数量詞を付加します。
<code>[\w\s]</code>	英数字文字または空白、あるいはその両方を照合する。
<code>[\w^[]]</code>	アンダースコアを除く、任意の英数字文字を照合する。

数量詞の使用

正規表現に、文字をカウントするオプションとして使用できるメタ文字のもう 1 つのセットです。これにより、内容の照合機能を大幅に強化して柔軟性を高めることができます。数量詞は、前述のメタ文字と文字クラスの後に付加して、先行する照合文字またはメタ文字を照合する位置を指定します。たとえば、正規表現 /(contact|about)¥s+us/ では、メタ文字 ¥s が空白を照合します。プラス記号の数量詞を ¥s の後に付けると、単語 **contact**（または **about**）と **us** の間に少なくとも 1 文字以上の空白が必要であることを示します。

次の表では、正規表現で使える数量詞について説明します。数量詞は、その直前にある 1 文字に適用されます。文字クラスと併用する場合、数量詞は文字クラスの閉じ角括弧の外側に置きます。たとえば、[a-z]+ や [0-9]* のように指定します。

数量詞	説明
?	疑問符は、先行する文字または文字クラスが 1 回だけ出現する可能性があることを示す。ただしこれは任意指定であり、指示した位置に出現しなくてもかまわない。
*	アスタリスクでは、任意の数の先行する文字または文字クラスが指定した位置に出現する必要がある。これには、0 以上の一致が含まれます。 注： この数量詞を、ドット (.) メタ文字または ¥W メタ文字を含む文字クラスと組み合わせると、想定より多くの内容が取得されて正規表現エンジンが SiteScope サーバの使用可能な CPU 時間を使い切ってしまう可能性があるため、注意してください。

数量詞	説明
+	プラス記号は、先行する文字また文字クラスが少なくとも 1 回出現する必要があることを示す。
{min,max}	波括弧は、数量詞の範囲指定に使用する。範囲列举子の数字はカンマで区切ります。この構成では、先行する文字または文字クラスの出現回数が min 列举子で指定した回数以上、 max 列举子で指定した値以下である必要があります。少なくとも min 列举子で指定した回数出現すれば、照合は成功します。ただし、照合は max 列举子で指定した回数か、それ以上一致が検出されなくなるまで続行されます。

SiteScope での内容の照合は、HTTP 応答全体に対して実行されます。これには、通常はブラウザでは表示できない HTTP ヘッダも含まれます。HTTP ヘッダには通常、数字のシーケンスと組になった単語を含む、複数行のテキストが含まれます。これにより、数字や文字の小さいセットなどの単純な内容に対する照合以外では、照合が失敗することがあります。失敗を避けるには、照合対象のテキストの近くにある固有の文字シーケンスを特定し、可能ならばそれをリテラルとして正規表現に含めます。



検索モード修飾子

SiteScope で使用する正規表現では、表現を区切るスラッシュの外側に任意指定の修飾子が含まれていることがあります。閉じるスラッシュの後にある修飾子は、照合の実行方法に影響します。たとえば、`i` 検索修飾子が追加された `/website/i` という正規表現では、照合内容での検索は大文字と小文字が区別されません。この場合、`website`、`Website`、`WEBSITE` や、`WEBSITE` でさえも一致します。

`i` 修飾子を除き、一部のメタ文字と文字クラスによって検索モード修飾子を上書きできます。特にドット (`.`) と `¥W` メタ文字は、`m` および `s` 修飾子を上書きし、これらの修飾子があっても複数行にわたって内容を照合します。

複数の修飾子を追加するには、正規表現の閉じるスラッシュの後に修飾子を連結して追加します。たとえば、`/matchpattern/ic` は `i` および `c` 修飾子を結合します。

正規表現照合モード修飾子

モード修飾子	説明
<code>/i</code>	大文字と小文字の区別を無視する。これにより、大文字と小文字に関係なく検索が行われます。これは、 <code>Web</code> ページのテキスト内容内で一致を検索する場合に特に便利なオプションです。
<code>/c</code>	一致したパターンが、検索する内容に出現してはならないことを示す。これは「補集合的」照合であり、パターンが検出されるとエラーが返され、パターンが検出されないと成功します。
<code>/m</code>	途中にある復帰改行や行送りを無視せずに複数行を照合する。この修飾子を使用した場合でも、行送りや復帰改行は、 <code>[¥w¥W]*</code> や <code>[¥s¥S¥n¥r]*</code> などの文字クラスを使用して考慮する必要があります。この修飾子を使用すると、 <code>.*</code> は復帰改行や行送りを照合しません。
<code>/s</code>	途中にある復帰改行および行送り文字を無視して内容を 1 行とみなす。この修飾子を使用した場合、 <code>[¥w¥W]*</code> 文字クラスと <code>.*</code> パターンのどちらも行送りや復帰改行をまたいで照合を行います。

内容の照合値の保持

URL モニタや URL シーケンス・モニタなど、一部のモニタには、ログに記録され、エラー・ステータスしきい値の設定に使用できる内容の照合値があります。正規表現構文で使用する括弧 / (照合パターン) / には、内容の照合値に保持されるテキストを判断するというもう 1 つの目的があります。この機能を使用して、URL モニタまたは URL シーケンス・モニタのエラーしきい値を判断するために、内容の照合値をしきい値として直接使用します。

たとえば、内容の照合表現が次のような場合を例に挙げます。

```
/Copyright (¥d*)/
```

URL リクエストによってモニタに返される内容に次の文字列が含まれているとします。

```
... Copyright 2007 by HP
```

一致した結果、保持される内容の照合値は、次のようになります。

```
2007
```

次に、モニタ設定ページ下部の **error-if** オプションの下で、**error-if** 条件をステータスの標準設定 **!= 200** から内容の照合に変更し、関係演算子を **!=** に指定し、値を **2008** に指定できます。これにより、文字列 **Copyright** の年が **2008** 以外の場合は、モニタからエラーがレポートされるようにこのモニタのエラーしきい値が設定されます。このメカニズムは、Web ページの内容が不正に変更されていないかどうかを監視するために利用できます。

Web ページにあるほかの URL へのリンクの確認は、URL シーケンス・モニタの作成において重要な部分です。Web ページのリンクの URL テキストを照合するには、次の正規表現を使用できます。

```
/a href="?([:¥/¥w¥s¥d¥.]*)"?/i
```

この表現は、`href="protocol://path/URLname.htm"` を多数の URL と照合します。疑問符修飾子を使用することによって、**HREF=** 属性を囲む引用符の指定は任意になります。**i** 修飾子により、照合パターンの大文字と小文字は区別されません。

内容の照合から保持または記憶された値は、URL シーケンス・モニタの後続ステップで参照され、入力値として使用できます。シーケンス・ステップ間での値の保持または受け渡しに使用する構文については、URL シーケンス・モニタの「**内容の照合**」を参照してください。

SiteScope の日付変数

SiteScope では、特別に定義された変数を使用して、現在の日付または時刻を照合する表現を作成します。これらの変数を内容の照合フィールドで使用すると、日付が記述された内容を検出できます。一般の日付変数は、さまざまな日付形式の部分を照合するのに便利です。言語または国に固有の日付変数を使用すると、ISO コードに基づき、月と曜日の名称に使用される言語を自動的に特定の国に拡張できます。

本項の内容

- ▶ 289 ページ「一般の日付変数」
- ▶ 291 ページ「言語または国に固有の日付変数」
- ▶ 292 ページ「モニタ URL またはファイル・パスの特殊置換」

一般の日付変数

次の表は、一般変数を示します。

変数	値の範囲
\$hour\$	0 - 23
\$minute\$	0 - 59
\$month\$	1 - 12
\$day\$	1 - 31
\$year\$	1000 - 9999
\$shortYear\$	00 - 99
\$weekdayName\$	Sun ~ Sat
\$fullWeekdayName\$	Sunday - Saturday
\$0hour\$	00 - 23
\$0minute\$	00 - 59
\$0day\$	01 ~ 31 (2 桁の日付形式)
\$0month\$	01 ~ 12 (2 桁の月形式)
\$monthName\$	Jan ~ Dec (英語の 3 文字の月形式)
\$fullMonthName\$	January - December
\$ticks\$	1970 年 1 月 1 日の午前 0 時から経過したミリ秒数。

たとえば、内容の照合検索表現を次のように定義します。

/Updated on \$0month\$¥/\$0day\$¥/\$shortYear\$¥/

リクエストによって返された内容に次の文字列が含まれているとします。

Updated on 06/01/98

この表現は、モニタが 1998 年 6 月 1 日に実行されると一致します。返された内容に現在のシステム日付と一致する文字列が含まれていない場合、または日付形式が指定した形式と異なる場合、照合は失敗します。

時間を現在時刻より前または後にする場合は、表現に **\$offsetMinutes=mmmm\$** を追加できます。これにより、置換を行う前に現在時刻が **mmmm** 分間ずらされます（時間を遡るには負の数値を指定できます）。

たとえば、現在の日付が 2007 年 6 月 1 日だとすると、検索表現は次のようになります。

/ \$offsetMinutes=1440\$ Updated on \$0month\$¥/\$0day\$¥/\$shortYear\$ /

この場合、一致する内容文字列が次のようになります。

Updated on 06/02/07

注：日付がシステム日付の 1 日後になっています。

言語または国に固有の日付変数

次の表は、国際標準の曜日および月の名称の照合で使用する SiteScope の特殊変数を示します。LL と CC という文字は、ISO 639 言語コード文字（2 文字）と ISO 3166 国コード文字（2 文字）のプレースホルダです（詳細については、表の下の説明を参照）。

変数	値の範囲
\$weekdayName_LL_CC\$	指定した言語（LL）および国（CC）の曜日の省略名称（表の下の説明を参照）
\$fullWeekdayName_LL_CC\$	指定した言語（LL）および国（CC）の曜日の正式名称
\$monthName_LL_CC\$	指定した言語（LL）および国（CC）の月の省略名称
\$fullMonthName_LL_CC\$	指定した言語（LL）および国（CC）の月の正式名称

CC : 大文字 2 文字で表記する ISO-3166 国コード。ドイツは DE, フランスは FR, 中国は CN, 日本は JP, ブラジルは BR のように表します。このコードの一覧表は、次のようなインターネット・サイトなど、多数のインターネット・サイトから入手できます。

<http://www.iso.org/iso/en/prods-services/iso3166ma/02iso-3166-code-lists/list-en1.html>（英語サイト）

LL : 小文字 2 文字で表記する ISO-639 言語コード。ドイツ語は de, フランス語は fr, 中国語は zh, 日本語は ja, ポルトガル語は pt のように表します。このコードの一覧表は、次のようなインターネット・サイトなど、多数のインターネット・サイトから入手できます。

<http://www.ics.uci.edu/pub/ietf/http/related/iso639.txt>（英語サイト）または
<http://www.dsv.su.se/~jpalme/ietf/language-codes.html>（英語サイト）

たとえば、内容の照合表現を次のように定義します。

```
/$fullWeekdayName_fr_FR$/i
```

リクエストによって返された内容に次の文字列が含まれているとします。

```
mercredi
```

この表現は、モニタが土曜日に実行されると一致します。

国に固有の言語のバリエーションを考慮する必要がない場合は、国コードを含めずに前述の任意の変数を使用できます。例：

```
/$fullWeekdayName_fr$/
```

上の表現は、`/$fullWeekdayName_fr_FR$/` と同じ内容を照合するために使用できます。

モニタ URL またはファイル・パスの特殊置換

SiteScope の日付変数は、正規表現の一部として内容を照合するのに便利です。日付変数は、特定のモニタに URL またはファイル・パスを動的に作成するために、特殊置換としても使用できます。これは、システムの日付情報に基づいて URL またはファイル・パスが自動的に更新される、日付が記述されたファイルとディレクトリを監視するのに役立ちます。SiteScope は、日付が記述されたログ・ファイルを作成するアプリケーションの一例です。ログ・ファイル名には部分的に、`File2001_05_01.log` のように何らかの形式で年月日が含まれます。

この例に基づき、新しいファイルが毎日作成されます。通常、当日のファイルの作成、サイズ、または内容を監視するには、モニタのファイル・パスまたは URL を毎日手動で変更する必要があります。SiteScope の日付変数と特殊置換を使用すると、当日のログ・ファイルのファイル・パスを自動的に更新できます。ファイルの命名に使用されるパターンを把握することによって、システム日付のプロパティの一部をファイル・パスまたは URL に代入する正規表現に似た特殊置換文字列を作成できます。

次の例はファイル・モニタにある当日のログ・ファイルの絶対ファイル・パスであるとしています。

```
D:/Production/Webapps/Logs/File2001_05_01.log
```

翌日のログ・ファイルは、次のようになります。

```
D:/Production/Webapps/Logs/File2001_05_02.log
```

次の構文を使用して、モニタで使用するファイル・パスを自動的に更新する特殊置換表現を作成できます。

```
s/D:¥/Production¥/Webapps¥/Logs¥/File$year$_$0month$_$0day$.log/
```

置換の表現は、小文字の `s` で開始し、スラッシュ `/.../` で囲む必要があります。ファイル・パスの一部として含まれるスラッシュは、上に示すようにバックスラッシュ (`¥`) 文字を追加してエスケープする必要があります。SiteScope 日付変数は、アンダースコア文字で区切ります。SiteScope では、モニタを実行するたびにシステム時刻のプロパティをチェックし、ファイルにアクセスする前に該当する値がファイル・パスまたは URL に代入されます。

特殊置換をサポートする SiteScope モニタ・タイプは、次のとおりです。

- e ビジネス・チェーン
- ファイル・モニタ
- ログ・モニタ
- URL モニタ
- URL シーケンス・モニタ
- Web サーバ・モニタ

特殊置換の構文は正規表現で使われる置換構文に似ていますが、同じではありません。内容の照合の正規表現では SiteScope の日付変数をすべて使用できるのに対し、特殊置換は内容の照合表現の一部として使用できません。

ログ・ファイル監視の例

SiteScope のログ・ファイル・モニタとファイル・モニタでは、ほかのアプリケーションで作成されたファイルのエントリがチェックされます。これらのファイルは、サードパーティ製のアプリケーションで作成したデータ・ファイルであったり、自分の環境用に特別に設計されたカスタム・システムで作成したログであったりします。ログまたはファイルが既知の予測可能な形式で記述されている場合、新しいエントリを定期的にチェックし、内容の特定の文字列と照合するように **SiteScope** を設定できます。ログ・ファイルのエントリの例とエントリのチェックに使用できる単純な正規表現パターンを次に示します。これらの例をそのまま使用するか、特定のケースに合わせて変更できます。

注：SiteScope では、正規表現をすべて 1 行で入力する必要があります。次に示す例には、このページ内に収めるために複数行にわたって記述されているものもあります。

本項の内容

- ▶ 295 ページ「ログ・ファイルのパスの検索」
- ▶ 297 ページ「カンマで区切られた値の照合」
- ▶ 298 ページ「空白で区切られた値の照合」
- ▶ 299 ページ「テキストまたは数値の行の数値の照合と保持」
- ▶ 300 ページ「整数と浮動小数点数（正または負）の照合」
- ▶ 301 ページ「日付と時刻を含むログ・エントリの照合」

ログ・ファイルのパスの検索

UNIX と Windows オペレーティング・システムとでは、ファイル名の大文字と小文字（N と n）の取り扱いに互換性がありません。Windows オペレーティング・システムでは大文字と小文字が区別されず、ファイルの検索時には大文字と小文字が無視されます。UNIX オペレーティング・システムでは大文字と小文字が区別され、名前の文字の大小の違いは常に重要です。UNIX オペレーティング・システム上のパス名の検索で正規表現を使用する場合にログ・ファイル・エラーを避けるには、パス表現の大文字と小文字を変更するマークを使用します。

マーカ	説明
\$L	\$L マーカと \$E マーカの間の文字を小文字に変更できる。
\$U	\$U マーカと \$E マーカの間の文字を大文字に変更できる。
\$E	大文字と小文字の変更に使用する終了マーカ。

例：

次のパス表現を定義するとします。

```
s/#!/tmp#!/logs#!/arcv.log.$weekdayName$/
```

Linux マシン上の /tmp/logs/arcv.log.tue ログ・ファイルの場合、SiteScope が tmp/logs/arcv.log.Tue を検出しようとし、Linux では大文字と小文字が区別されるため、ログ・ファイル・エラーが表示されます。

この問題を解決するには、パス表現を次のように定義します。

```
s/#!/tmp#!/logs#!/arcv.log.$L$weekdayName$$E/
```

モニタは、\$L から \$E の間にある文字を小文字 /tmp/logs/arcv.log.tue に変換します。

反対に, SiteScope でマーカ間の文字を大文字に変更できるようにするには, \$U と \$E を使用します。たとえば, 次のパス表現を定義するとします。

```
s/¥/tmp¥/logs¥/arcv.log.$L$weekdayName$$E/
```

モニタは, パスを /tmp/logs/arcv.log.TUE に変換します。

パス表現では, \$L と \$U を複数回使用できます。また同じ表現で両方を使用できます。

例 :

```
s/¥/tmp¥/logs-$L$weekdayName$$E¥/arcv.log.$U$weekdayName$$E/
```

上記はパスを /tmp/logs-tue/arcv.log.TUE に変換します。

```
s/¥/tmp.$L$monthName$$E¥/logs-$L$weekdayName$$E¥/arcv.log.$U$weekdayName$$E/
```

上記はパスを /tmp.mar/logs-tue/arcv.log.TUE に変換します。

カンマで区切られた値の照合

カンマで区切られた数値と文字列のログ・ファイル・エントリの例を次に示します。

```
new,open,changed,12,alerts  
new,open,changed,13,alerts  
new,open,changed,13,alerts  
new,open,changed,14,alerts
```

カンマで区切られた数値と文字列のログ・ファイル・エントリに一致する正規表現を次に示します。

```
/([¥w¥d]+,[¥w¥d]+,[¥w¥d]+,[¥w¥d]+)([¥n¥r]?)/
```

注：このファイル・エントリにアンダースコアやコロンなどの句読点が含まれる場合、[¥w¥d] クラス・パターンにその文字を明示的に追加してください。たとえば、コロンを含めるには、[¥w¥d] パターンのそれぞれを [¥w¥d:] に変更します。

空白で区切られた値の照合

空白で区切られた文字列と数値のログ・ファイル・エントリの例を次に示します。

```
requests 12 succeeded 12 failed
requests 12 succeeded 12 failed
requests 11 succeeded 11 failed
requests 12 succeeded 12 failed
requests 10 succeeded 10 failed
```

空白で区切られた文字列と数値のログ・ファイル・エントリに一致する正規表現の例を次に示します。

```
/([¥w¥d]+¥s+[¥w¥d]+¥s+[¥w¥d]+¥s+[¥w¥d]+¥s+[¥w¥d]+)(¥n¥r)?/
```

注：+ 文字を使用すると、照合パターンで 1 行に指定した数のシーケンス含めることができます。この例では、ログ・ファイル内で 5 つの単語または数値が含まれる行に一致します。このシーケンスにアンダースコアやコロンなどの句読点が含まれる場合、[¥w¥d] クラス・パターンにその文字を明示的に追加してください。たとえば、コロンを含めるには、[¥w¥d] パターンのそれぞれを [¥w¥d:] に変更します。

テキストまたは数値の行の数値の照合と保持

カンマで区切られた数字と文字が混在する文字列のログ・ファイル・エントリの例を次に示します。

```
request handle number 12.56, series 17.5, sequence reported 97.45, 15.95 and 19.51
request handle number 15.96, series 27.5, sequence reported 107.45, 25.95 and 19.52
request handle number 11.06, series 36.5, system codes 9.45, 35.95 and 19.53
log reference number 12.30, series 17.5, channel reset values 100.45, 45.95 and 19.54
```

カンマで区切られた数字と文字が混在する文字列のログ・ファイル・エントリに一致し 10 進数のデータを保持する正規表現の例を次に示します。

```
/[,¥w¥s]+(¥d+¥.¥d+)[,¥w¥s]+(¥d+¥.¥d+)[,¥w¥s]+(¥d+¥.¥d+)[,¥w¥s]+(¥d+¥.¥d+)[,¥w¥s]+
(¥d+¥.¥d+)[¥n¥r]?/.
```

注：このファイル・エントリにアンダースコアやコロンなどの句読点が含まれる場合、`[¥w¥d]` クラス・パターンにその文字を明示的に追加してください。たとえば、テキスト・シーケンスに現れるコロンを含めるには、`[¥w¥s]` パターンのそれぞれを `[,¥w¥s]` に変更します。

整数と浮動小数点数（正または負）の照合

一連の正または負の整数と浮動小数点数によるログ・ファイル・エントリの例を次に示します。

```
12.1987 -71 -199.1 145 -1.00716
13.2987 -72 -199.2 245 -1.00726
14.3987 -73 -199.3 345 -1.00736
15.4987 -74 -199.4 445 -1.00746
```

5 つの正または負の整数と浮動小数点数によるログ・ファイル・エントリに一致する正規表現の例を次に示します。各エントリの数値は 1 つまたは複数の空白で区切られている必要があります。

```
/(-?¥d+¥.¥d{0,})[¥s]+(-?¥d+¥.¥d{0,})[¥s]+(-?¥d+¥.¥d{0,})[¥s]+(-?¥d+¥.¥d{0,})[¥s]+
(-?¥d+¥.¥d{0,})[¥n¥r]?/
```


日付と時刻を含むログ・エントリの照合

多くのログ・ファイルには一定の形式の日付と時刻が各エントリに含まれます。カンマで区切られた文字列に加えて日付と時刻の情報を含むログ・ファイル・エントリの例を次に示します。

```
20/04/2003 14:29:22,ERROR,request failed
20/04/2003 14:31:09,INFO,system check complete
20/04/2003 14:35:46,INFO,new record created
```

カンマで区切られた文字列の前に日付と時刻の情報を含むログ・ファイル・エントリに一致する正規表現の例を次に示します。次の例では、SiteScope が稼動しているサーバのシステム・クロックによって示された同じ年月日に作成されたエントリのみに一致するために SiteScope の日付変数を使用しています。

```
/\$0day$¥/$0month$¥/$year$¥s+¥d+:¥d+:¥d+,[¥w¥d]+,[¥w¥d]+/
```

次の例では、SiteScope が稼動しているサーバのシステム・クロックによって示された同じ年月日および同じ時間内に作成された、より限定されたエントリのみに一致するために SiteScope の日付変数を使用しています。

```
/\$0day$¥/$0month$¥/$year$¥s+$0hour$:¥d+:¥d+,[¥w¥d]+,[¥w¥d]+)/
```

正規表現の使用時に発生する問題

このセクションでは、正規表現の使用時に発生する問題について説明します。

- ▶ *** 構成子を使用すると、内容の任意のページに膨大な一致結果が表示される。**
* 構成子を使用することで、SiteScope で使用される正規表現照合エンジンが SiteScope サーバで使用可能なすべての CPU サイクルを占有してしまうことがわかっています。この問題が発生すると、SiteScope は機能しなくなります。そのため、原因となっている正規表現を使用するモニタが実行されるたびに再起動する必要が生じ、この表現が修正されるまでこの状況が続きます。

注：正規表現の照合は、SiteScope モニタの要求に応じて返されるテキストの内容全体に対して実行されます。これには、ブラウザ・ウィンドウには通常表示されない（たとえば **[表示]** > **[ソース]** オプションでは表示されない）HTTP ヘッダが含まれます。つまり、ブラウザ・ビューに表示されないほかの情報を考慮する必要があることを意味します。これには、インターネット検索エンジンおよびクライアント側スクリプトで使用される META タグのテキストが含まれます。

- ▶ **テキストの照合は、Javascript などのクライアント側スクリプトを含む URL のスクリプトからのブラウザの出力ではなく、スクリプトのコード行に対して行われる。**つまり、スクリプトによって計算された値で Web ページ上のテキストが動的に書き込まれるか置換されると、この内容を正規表現で照合できない可能性があります。スクリプトによってテキストの変更のみが実行されると、スクリプト・コードに表示される、対応するテキスト文字列と照合できる可能性があります。さらに問題なのは、ブラウザで特定の条件が満たされるかどうかを確認しようとすると、ユーザのアクションに関係なく、一致するテキスト文字列がスクリプトの内容に表示されるということです。

- ▶ **要求した最小一致が満たされるとすぐに正規表現の照合が成功する。**1つの一致があると、それ以降の照合は行われません。そのため、正規表現は繰り返し返されるテキスト・パターンの出現数を数えるのには適していません。たとえば、項目のカタログ・リストが含まれる Web ページを確認するとします。各項目の横には **Buy Now!** というリンクがあり、少なくとも 5 つの項目が表示されることを確認する場合、`/Buy Now!/?` という正規表現では、最初の **Buy Now!** にしか一致しません。同様に、正規表現でメイン・ブラウザ画面の **catalog** という単語を検索する場合、HTML ヘッド・セクションの **META** タグとしてその単語が表示されていたり、照合しようとした項目の前に、サイト・ナビゲーション・メニューにあるハイパーリンクとして内容に表示されていたりすると、照合が成功してしまいます。
- ▶ **英数字以外の内容を考慮するのを忘れる。**正規表現は、存在する文字および存在する可能性のある文字すべてを考慮して記述する必要があります。これには、空白文字、行送り、および復帰改行が含まれます。通常、1 つの単語をリテラル照合する場合にはこれは問題になりません。不明な数の空白文字やその他の英数字以外の文字で区切られ、かつ複数行にわたる可能性のある複数の単語との照合を作成する必要があるときは、難しい場合があります。`[%s%n¥r]+` 文字クラスは、表現内で使用される単語と単語の間に使用すると便利な場合があります。一見単純そうな照合の失敗につながる可能性がある、パターンやピリオド、カンマ、ハイフンなどの特殊文字が、照合しようとしている内容の形式に含まれていないかを必ず確認してください。
- ▶ **過剰なメタ文字の使用は問題となる可能性がある。**場合によっては、`.` または `¥W` メタ文字に過度な量の数量詞を組み合わせると、リテラル文字列と照合しようとした内容が正規表現のほかの部分で取得され、照合が失敗する可能性があります。たとえば、ハイパーリンク・アンカー参照の URL 内容を照合する場合は、`/a href="([¥W¥w¥s¥*])"/` を使用できます。ただし、モニタでこの正規表現のチェックを行うと、最初に一致したパターン `/a href="...` が取得され、続いてそのページ上の最後の引用符までの複数行のテキストが一致します。ほかの一意の終了区切り文字を使用しないと、`[%W¥w¥s¥*]` クラスと数量詞の組み合わせは過剰になります。期待される文字のクラスを絞り込むには、`/a href="?([:¥/¥w¥s¥d¥.]*)"?/` という構文がより適切です。

正規表現構文の例

正規表現で使用する構文の例を次に示します。

表現の例	説明
/CUSTID¥s?=¥s? ([A-Z0-9]{20,48})/	この例では、20 文字以上の数字と大文字（スペースと非英数字は使用しない）で構成される ID 文字列を照合します。¥s? 構成子により、等号記号のどちら側でも空白文字を使用できます。文字クラスを括弧で囲むと、SiteScope では、内容の照合値としてこの値（最大 48 文字）が保持され、一致した値がモニタの詳細状態列に表示されます。
/a href="?(?:¥/¥w¥s¥d¥.)"?/i	この例では、HTML ハイパーリンク内の URL 文字列を照合します。"? 構成子により、URL 文字列のいずれの端の引用符も任意となります。括弧を使用すると、SiteScope では、この値が内容の照合値として保持され、値はモニタの状態に表示されます。i 修飾子は、検索時に大文字と小文字を同等に扱うことを示します。
/"[^"]*" /	この例では、引用符で囲まれたテキスト・シーケンスを照合します。否定のキャレット (^) を使用して、引用符以外のすべての文字の文字クラスを定義します。

プログラミング言語やスクリプト言語と同様に、ほとんどの場合、特定の照合を達成するための正規表現の構成には、複数の方法があります。正規表現の正しい作成方法は 1 つだけではありません。必要な結果が得られるまで、必要に応じて正規表現のテストと変更を行ってください。

第 III 部

モ二夕

9

SiteScope グループを使った作業

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope グループの概要 (308 ページ)

タスク

- ▶ グループの管理方法 (311 ページ)

参照情報

- ▶ [新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス (315 ページ)

概念

SiteScope グループの概要

グループ・コンテナは、モニタのデプロイメントおよび関連する警告を自分の環境や組織で管理可能かつ効果的にするために作成します。作成する各 SiteScope モニタのインスタンスは、最上位レベルのグループまたはほかのグループ・コンテナ内にネストされたサブグループのいずれかである SiteScope グループに属する必要があります。

たとえば、システムで実行されている多数のプロセスを監視する場合、それらのプロセスのすべてを「**プロセス**」という名前の 1 つのグループに含めることができます。リモート・モニタを使用して複数のマシンのプロセスを監視する場合は、監視する各リモート・マシンの名前を付けた複数のサブグループで「**プロセス**」と呼ばれるプライマリ・グループを作成できます。

新規モニタを追加するときには、既存のグループに追加するか、モニタのグループを先に作成しておく必要があります。グループは個別に SiteScope に追加できます。またはテンプレートを使用して、複数のモニタと一緒にグループをデプロイできます。

注：グループを使った作業では、SiteScope API を使用することもできます。詳細については、36 ページ「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 309 ページ「既存のグループのコピーまたは移動」
- ▶ 309 ページ「グループの警告とレポートの作成」

既存のグループのコピーまたは移動

グループの作成に加え、既存のグループを SiteScope ツリー内の新しい場所へコピーまたは移動できます。グループをコピーまたは移動すると、グループの設定とグループ内のすべてのモニタが複製されます。通常、グループをコピーまたは移動した後に、グループおよびグループ内の各モニタの設定プロパティを編集し、モニタに一意のシステムまたはアプリケーションを指定する必要があります。指定しない場合、グループ内のモニタでは元のグループの監視アクションが複製されます。

注：

- ▶ 冗長な監視につながるグループのコピーを実行する代わりに、テンプレートを使用して共通するグループおよびモニタ設定パターンをより効率的に複製することをお勧めします。テンプレートを使った作業の詳細については、「SiteScope テンプレート」を参照してください。
 - ▶ SiteScope 内のグループ識別の問題を回避するには、オブジェクト名を親コンテナ内で一意にする必要があります。モニタ・グループをまったく同じ名前の別のグループが含まれているコンテナにコピーまたは移動すると、SiteScope によって、モニタ・グループの名前の最後に自動的にサフィックス（数字）が追加されます。
 - ▶ モニタ・グループをそのサブグループに移動またはコピーすることはできません。
-

グループの警告とレポートの作成

グループを作成したら、そのグループに警告とレポートを作成できます。標準設定で、グループの警告とレポートはグループ内のすべてのモニタに関連付けられます。

警告は、グループ・コンテナに警告定義を追加して作成します。つまり、グループのいずれかのモニタで、警告に定義された状態カテゴリ（エラー、警告など）がレポートされると、グループ警告が起動されます。[警告ターゲット] 選択ツリーを使用して、グループ内の 1 つ以上のモニタを除外するようにグループ警告を設定できます。このトピックの詳細については、1251 ページ「SiteScope 警告の概要」を参照してください。

グループ・レポートは、グループ・コンテナにレポート定義を追加して作成します。[**レポート対象のモニタおよびグループ**] 選択ツリーを使用して、グループ内の 1 つ以上のモニタを除外するようにグループ・レポートを設定できます。このトピックの詳細については、1332 ページ「SiteScope レポートの概要」を参照してください。

グループを削除すると、SiteScope によって適用されるモニタ・アクションが削除され、グループに関連付けられている警告アクションが無効化されます。

タスク

グループの管理方法

このタスクでは、グループの管理に関連する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 312 ページ「SiteScope グループとサブグループの作成」
- ▶ 312 ページ「モニタ・インスタンスの作成」
- ▶ 313 ページ「グループの詳細に URL リンクを追加（任意指定）」
- ▶ 313 ページ「グループの依存関係の設定（任意指定）」
- ▶ 314 ページ「グループ警告の設定（任意指定）」
- ▶ 314 ページ「グループ・レポートの設定（任意指定）」
- ▶ 314 ページ「結果」

1 SiteScope グループとサブグループの作成

実装するモニタ階層に従ってグループを作成します。たとえば、場所、サーバ・タイプ、ネットワーク・リソースなどのグループを作成できます。

- ▶ **新しいグループを作成する。**グループを作成する SiteScope またはグループ・コンテナを右クリックして、**[新規作成]** > **[グループ]** を選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、315 ページ「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- ▶ **既存のグループをコピーまたは移動してグループを作成する。**コピーまたは移動するグループを右クリックして、**[コピー]** または **[切り取り]** をクリックします。グループ・コンテナのコピー先または移動先のモニタ・ツリー内で右クリックして、**[貼り付け]** をクリックします。

注：また、モニタ・ツリー・ツールバーの **[モニタとグループの管理]** ボタン  をクリックしても、複数のモニタとグループをターゲット・グループに移動またはコピーできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、67 ページ「[モニタとグループの管理] ダイアログボックス」を参照してください。

2 モニタ・インスタンスの作成

グループに追加するモニタ・インスタンスを選択します。

タスクの詳細については、343 ページ「モニタのデプロイ方法」を参照してください。

3 グループの詳細に URL リンクを追加（任意指定）

グループの詳細情報を追加し、ハイパーリンクの HTML タグを含めると、SiteScope ダッシュボードから URL にアクセスできるようになります。

- a ハイパーリンクを追加するには、選択したグループの [プロパティ] タブを開きます。
- b [一般設定] 表示枠を展開し、[グループの詳細] フィールドに URL を入力します。例 : `<a href="http://www.hp.com">My Link</a>`。
- c [ダッシュボード] タブをクリックします。選択したグループの [詳細] フィールドに URL が表示されます。URL を開くには、グループの [詳細] フィールドをクリックしてからリンクをクリックします。

4 グループの依存関係の設定（任意指定）

グループの依存関係を設定し、このグループ内のモニタの実行を、別のモニタの状態に依存させることができます。

概念の詳細については、325 ページ「グループの依存関係の監視」を参照してください。

例 :

[依存] ボックスで選択したモニタで、[依存条件] ボックスで選択した条件がレポートされるかぎり、設定するグループ内のモニタは通常どおりに実行されます。この例では、設定するグループは、「サービス」モニタで「正常」という状態がレポートされる場合にのみ有効になります。

The screenshot shows a dialog box titled '依存関係' (Dependencies). It contains two main fields: '依存:' (Dependency) and '依存条件:' (Dependency Condition). The '依存:' field has a text input containing 'Service: HTTP on SiteScope Server' and a small icon to its right. The '依存条件:' field has a dropdown menu currently showing '正常' (Normal).

5 グループ警告の設定（任意指定）

イベントが発生したか、インフラストラクチャの要素やシステムのステータスに変化したときに通知を送信する警告を作成します。

グループの警告を作成するには、グループを右クリックして、**[新規作成]** > **[警告]** を選択します。各警告スキームに 1 つ以上の警告アクションを作成できます。**[新規警告]** ダイアログ・ボックスで **[新規警告アクション]** をクリックすると、**[警告アクション]** ウィザードが起動します。

タスクの詳細については、1276 ページ「警告の設定方法」を参照してください。

6 グループ・レポートの設定（任意指定）

時間の経過に伴う監視対象のサーバおよびアプリケーションのパフォーマンスに関する情報を表示するレポートを作成します。

グループのレポートを作成するには、グループを右クリックして、**[レポート]** をクリックします。レポート・タイプを選択し、レポート設定を指定します。

タスクの詳細については、1338 ページ「レポートの作成方法」を参照してください。

7 結果

モニタ、警告、レポートを含むモニタ・グループが、モニタ・ツリーに追加されます。

参照情報

[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス

[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックスでは、SiteScope の新規グループ、または既存のモニタ・グループのサブグループを定義できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope コンテナまたは既存のモニタ・グループを右クリックして、[新規作成] > [グループ] を選択します。
重要な情報	▶ コンテナ・レベルで依存する警告またはレポートがある場合、モニタは削除できません。依存関係があるモニタ・グループを削除するには、各依存関係の [警告ターゲット] と [レポートのターゲット] からモニタ・グループを削除してから、モニタ・グループを削除する必要があります。子レベルの依存関係があるグループ・モニタは削除できます。 ▶ グループを使った作業では、SiteScope API を使用することもできます。詳細については、36 ページ「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。
関連タスク	311 ページ「グループの管理方法」
関連情報	▶ 308 ページ「SiteScope グループの概要」 ▶ 71 ページ「モニタ・ツリー」

[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックスに含まれている要素は次のとおりです。

一般設定

UI 要素	説明
[グループ名]	グループの内容, またはグループに追加されたモニタの目的を説明する名前。<host_name>, <business_unitresource_name>, <resource_type> など。 注 : ▶ グループ名には, sitescope または ' ; & < > / ¥ + = のいずれかを使用できません。 ▶ グループ名では大文字と小文字が区別されます。つまり, それぞれの名前の大文字と小文字の構成が異なる場合は, 同じ名前のグループを複数使用できます。
[グループの詳細]	グループの詳細。テキスト・スタイルの一般的な HTML タグ (
, <HR>, など) とハイパーリンクを含めることができます。詳細は, SiteScope ダッシュボードでグループのプロパティを表示または編集するときに表示されます。ハイパーリンクの追加の詳細については, 313 ページ「グループの詳細に URL リンクを追加 (任意指定)」を参照してください。 注 : このフィールドでは, Javascript, iframes, frames やそのほかの高度な機能はサポートされていません。このボックスに入力した HTML コードは, 有効性とセキュリティがチェックされ, コード (複数行にわたるために切り捨てられた不一致のタグやコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや Javascript が検出されると, フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。 ▶ タグ : script, object, param, frame, iframe。 ▶ on で始まる属性を含むタグは拒否される。例 : onhover。 ▶ 値に javascript が指定された属性。

UI 要素	説明
[ソース・テンプレート]	グループがテンプレートから作成された場合、ソース・テンプレートのパスを表示する。古いバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートをデプロイして使用している場合、ソース・テンプレートのパスを入力して、ルート・グループをソース・テンプレートに手動で関連付けることができます。
[クリア]	ルート・グループに関連付けられているソース・テンプレートを削除する。

依存関係

UI 要素	説明
[依存]	このモニタ・グループの実行の依存の対象とするモニタ。 [依存]  ボタンをクリックして [依存の対象モニタの選択] ダイアログ・ボックスを開き、依存関係を作成するモニタを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、412 ページ「[依存の対象モニタの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 概念の詳細については、325 ページ「グループの依存関係の監視」を参照してください。 標準設定: モニタ・グループに依存関係は設定されません。
[依存条件]	現在のモニタ・グループが通常どおりに実行されるために、依存の対象モニタが満たす必要のある依存条件。選択した条件が満たされない場合、[依存] ボックスで選択したモニタは自動的に無効になります。条件は次のとおりです。 ➤ 正常 ➤ エラー ➤ 使用可能

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、108 ページ「検索/フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
[タグの追加]	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、119 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

10

SiteScope モニタを使った作業

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope モニタの概要 (320 ページ)
- ▶ SiteScope モニタのカテゴリ (321 ページ)
- ▶ リモート・サーバの監視 (324 ページ)
- ▶ グループの依存関係の監視 (325 ページ)
- ▶ 状態のしきい値の設定 (328 ページ)
- ▶ ベースラインを使用した状態のしきい値の設定 (333 ページ)

タスク

- ▶ モニタのデプロイ方法 (343 ページ)
- ▶ ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法 (347 ページ)

参照情報

- ▶ モニタ・カテゴリ・リスト (358 ページ)
- ▶ Windows 環境にインストールされた SiteScope のみでサポートされているモニタ (363 ページ)
- ▶ Windows Management Instrumentation (WMI) をサポートしているモニタ (364 ページ)
- ▶ SiteScope の監視に使用されるポート (365 ページ)
- ▶ 廃止された SiteScope モニタのリスト (370 ページ)
- ▶ SiteScope モニタのユーザ・インタフェース (371 ページ)

概念

SiteScope モニタの概要

SiteScope モニタは、エンタープライズ・ビジネス・システムで使用する多種多様なシステムおよびアプリケーションへの接続や照会を自動的に行うツールです。さまざまなモニタ・タイプがあり、システムごとに固有のアクションを実行する汎用的な機能が装備されています。1 つのモニタ・タイプのインスタンスを 1 つ以上作成し、SiteScope に IT インフラストラクチャの特定の要素をどのように監視するかを指示できます。

たとえば、100 個のモニタ・インスタンスを作成し、SiteScope CPU モニタ・タイプをリモート・サーバに接続して CPU 使用率を測定するように指示できます。各モニタ・インスタンスには、監視対象のリモート・サーバと監視頻度を定義する異なる設定が含まれます。続いて、100 台のサーバの CPU 使用率を一定間隔で自動的に監視するように SiteScope を設定します。

作成したモニタ・インスタンスは、SiteScope モニタ・グループ・コンテナ内に追加する必要があります。グループ・コンテナを使用して、作成したモニタ・インスタンスを整理できます。

注：

- ▶ 特定の SiteScope モニタのモニタ設定の詳細については、『Monitor Reference』ガイド（英語版）のモニタ・タイプに関する説明を参照してください。
 - ▶ SiteScope モニタに設定可能なカウンタまたはメトリックスのリストと、サポート対象のアプリケーションおよびオペレーティング・システムのバージョンについては、< SiteScope > %sisdocs%pdfs%SiteScope_Monitors_Metrics.doc の『HP SiteScope Monitors and Metrics』（英語版）を参照してください。
 - ▶ モニタの操作時に SiteScope API を使用することもできます。詳細については、36 ページ「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。
-

SiteScope モニタのカテゴリ

SiteScope モニタのカテゴリは、そのカテゴリの可用性と、その機能を反映したカテゴリを示すクラスに従ってグループ化されます。SiteScope エージェントに新規モニタを追加するように選択すると、製品のインタフェースにそのエージェントについて使用可能なモニタ・タイプのリストがアルファベット順に、カテゴリで分類されて表示されます。モニタのカテゴリの可用性は、モニタのクラスによって決まります。本項では、モニタのクラスとカテゴリのリスト形式について説明します。

本項の内容

- ▶ 321 ページ「標準モニタ」
- ▶ 322 ページ「統合モニタ」
- ▶ 323 ページ「ソリューション・テンプレート・モニタ」

標準モニタ

標準モニタ・カテゴリは、SiteScope の一般ライセンスで使用可能なモニタのカテゴリです。これらのモニタのカテゴリには、汎用的なモニタのカテゴリが数多く含まれています。

- ▶ **アプリケーション・モニタ**：このカテゴリのモニタは、サードパーティ・アプリケーションを監視します。SiteScope では、これらのモニタを使用して監視対象アプリケーションにアクセスし、データを取得できます。
- ▶ **データベース・モニタ**：このカテゴリのモニタは、さまざまなタイプのデータベース・アプリケーションを監視します。特定のデータベース・アプリケーションのデータにアクセスするモニタと、どのデータベース・アプリケーションの監視でも設定可能な汎用モニタがあります。
- ▶ **汎用モニタ**：このカテゴリのモニタは、さまざまなタイプの環境を監視します。これらのモニタは、設定に応じてネットワーク、アプリケーション、データベースを監視できます。
- ▶ **ネットワーク・モニタ**：このカテゴリのモニタは、ネットワークの状況と可用性を監視します。
- ▶ **サーバ・モニタ**：このカテゴリのモニタは、サーバの状況と可用性を監視します。

- ▶ **ストリーム・モニタ**：このカテゴリのモニタは、メディア・ファイルとストリーム・データを再生するアプリケーションを監視します。
- ▶ **Web トランザクション・モニタ**：このカテゴリのモニタは、Web ベースのアプリケーションを監視します。
- ▶ **仮想化モニタ**。このカテゴリのモニタは、仮想化技術を監視します。

各モニタのカテゴリに含まれるモニタのリストを確認するには、358 ページ「モニタ・カテゴリ・リスト」を参照してください。

各モニタ・タイプの使用と設定の詳細については、『**Monitor Reference**』ガイド（英語版）のモニタ・タイプに関する説明を参照してください。

統合モニタ

HP 製品をほかの一般的に使用されているエンタープライズ・マネジメント・システムやアプリケーションと統合するには、このモニタ・タイプ・グループ（省略可能）を使用します。

これらのモニタ・タイプには、追加のライセンスが必要です。また、ほかの HP 製品の一部としてのみ使用できます。統合モニタ機能の詳細については、445 ページ「SiteScope 統合モニタを使った作業」を参照してください。

各モニタのカテゴリに含まれるモニタのリストを確認するには、358 ページ「モニタ・カテゴリ・リスト」を参照してください。

各モニタ・タイプの使用と設定の詳細については、『**Monitor Reference**』ガイド（英語版）のモニタ・タイプに関する説明を参照してください。

ソリューション・テンプレート・モニタ

ソリューション・テンプレート・モニタは、特定のアプリケーションや環境向けに新しい監視機能を有効にする特殊なクラスのモニタです。これらのモニタ・タイプは、ソリューション・テンプレートの一部としてほかの標準モニタ・タイプと一緒に自動的にデプロイされ、設定のベスト・プラクティスを取り込んだ監視ソリューションを提供します。これらのモニタ・タイプは、任意指定のライセンスによって管理されます。また、追加するには該当するソリューション・テンプレートをデプロイする必要があります。デプロイ後、ほかのモニタ・タイプと同じ手順を使用して編集または削除できます。詳細については、969 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレート」を参照してください。

次のようなモニタ・タイプでソリューション・テンプレートが使用されます。

- ▶ Active Directory (グローバル・カタログあり／なし)
- ▶ HP Service Manager
- ▶ Microsoft Exchange
- ▶ Microsoft IIS サーバ
- ▶ Microsoft SQL Server
- ▶ Microsoft Windows リソース
- ▶ Oracle データベース
- ▶ SAP アプリケーション・サーバ
- ▶ Siebel アプリケーション／ゲートウェイ／Web サーバ (UNIX および Windows 用)
- ▶ UNIX リソース
- ▶ WebLogic アプリケーション・サーバ
- ▶ WebSphere アプリケーション・サーバ

リモート・サーバの監視

一部の SiteScope モニタでは、インターネット・プロトコルを使用して Web システムおよびアプリケーションをテストします。それ以外の SiteScope モニタでは、ネットワーク・ファイル・システム・サービスおよびコマンドを使用してリモート・サーバの情報を監視します。

リモート Windows サーバの監視には、次の条件があります。

- ▶ Windows XP/2000/2003/2008 用の SiteScope が必要です。一般に、UNIX 用の SiteScope ではリモート Windows サーバを監視できません。
- ▶ SiteScope サービスは、監視対象のリモート・サーバ上にある Windows パフォーマンス・レジストリへのアクセス権限を持つユーザ・アカウントまたは管理アカウントで実行する必要があります。SiteScope アカウント・ユーザの変更方法の詳細については、512 ページ「SiteScope サービスのユーザ・アカウントの変更」を参照してください。

ネットワーク・ファイル・システム・サービスを使用してリモート・サーバ上の特定のサーバ・レベル・パラメータを監視するには、リモート・サーバ・プロファイルを作成する必要があります。サーバ・プロファイルのテーブルは、リモート・サーバ・ビューの [Microsoft Windows リモート サーバ] / [UNIX リモート サーバ] ページに表示されます。リモート・サーバ・プロファイルには、SiteScope がリモート接続するために必要なアドレスと接続情報が含まれています。リモート・サーバ・プロファイルを作成したら、リモート接続プロファイルを使用するようにモニタを設定します。リモート・プロファイルの作成と Windows または UNIX サーバのリモート監視の詳細については、504 ページ「リモート・サーバの概要」を参照してください。

リモート・サーバ上で実行されているサービスおよびアプリケーションを監視するための要件は、環境のアプリケーションやネットワーク・ポリシーに応じて変わります。SiteScope モニタによるリモート・システムへの接続方法の詳細については、506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」および518 ページ「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

リモート・サーバの監視に関するそのほかの情報については、HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報 (<http://support.openview.hp.com/selfsolve/documents>) も参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログインする必要があります。

グループの依存関係の監視

1 つのシステムの異なる側面を監視している複数のモニタから重複して警告が通知されるのを防ぐには、1 つのモニタを選択してシステムの基本的な可用性をチェックし、次にそのシステムのより詳細なテストを実行するほかのモニタを作成します。これにより依存関係が作成され、選択したモニタの状態に応じてモニタ・グループを実行できます。

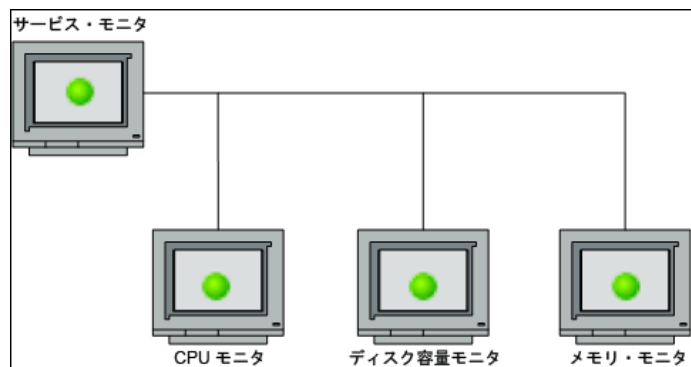
依存関係の設定の詳細については、「[依存]」および383 ページ「[依存条件]」を参照してください。

本項の内容

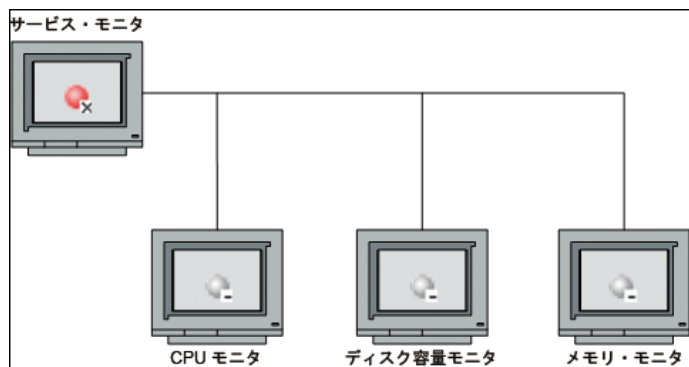
- ▶ 325 ページ「依存の対象」
- ▶ 327 ページ「依存条件」

依存の対象

別のモニタの状態に応じてモニタを実行するには、このオプションを使用します。このオプションを使用して、1 つのシステムの異なる側面を監視している複数のモニタから重複して警告が通知されるのを防ぐことができます。単純なシステム・モニタを 1 つ作成してシステムの基本的な可用性（システムのハートビート）をチェックし、次にそのシステムのより詳細なテストを実行するほかのモニタを作成します。次の図は、3 つのシステム・モニタがサービス・モニタ・インスタンスに依存している依存関係の例を示しています。



詳細テスト・モニタをハートビート・モニタの状態に依存させるには、ハートビート・モニタを選択します。依存する側のモニタは、依存条件が満たされている場合に実行されます。ハートビート・モニタが対象システムが使用不能になったことを検出すると、依存関係によって自動的にほかのモニタが無効になります。この結果、ほかのモニタで生成されていた警告が無効になるという影響があります。次の図は、依存先のモニタがエラー条件をレポートしたためにモニタが無効になった例を示しています。



標準設定では、モニタ・インスタンスに依存関係は設定されません。別のモニタの状態に応じてモニタを実行するには、依存の対象となるモニタが含まれる **SiteScope** ツリーでノードを展開し、必要なモニタの横にあるチェック・ボックスを選択します。モニタの依存関係を削除するには、必要なチェック・ボックスをクリアします。

依存条件

別のモニタの状態に応じてモニタを実行するように選択した場合（**「依存」** 設定を使用），このオプションを使用して，現在のモニタを正常に実行するために必要な **「依存」** モニタの状態カテゴリまたは条件を選択します。

次の状態カテゴリがあります。

- 正常
- エラー
- 使用可能
- 使用不能

設定対象のモニタは，**「依存」** ボックスで選択したモニタがこのボックスで選択した条件をレポートしている場合，正常に実行されます。**「使用不能」** を選択して，**「依存」** のモニタがこの状態をレポートすると，現在のモニタは無効になりません。

たとえば，**「正常」** を選択すると，このモニタは **「依存」** ボックスで選択したモニタが **「正常」** 状態をレポートしている場合に有効になります。**「依存」** ボックスで選択したモニタがこの設定で選択した条件以外のカテゴリまたは条件をレポートすると，現在のモニタは自動的に無効になります。**依存の対象** の設定例を参照してください。

状態のしきい値の設定

レポートされた各モニタ・インスタンスの状態を判別するロジック条件を設定するには、[しきい値の設定] セクションを使用します。状態は、対象システムに対するモニタ・アクションから返された結果または測定値と、そのモニタに設定したしきい値との比較に基づいています。

モニタ・インスタンスごとに状態のしきい値基準を設定して、**エラー状態**、**警告状態**、**正常状態**を判別できます。各状態のしきい値は、測定値パラメータ、ロジック比較演算、測定値で構成され、必要に応じて指定できます。パラメータと値はモニタ・タイプに応じて異なります。たとえば、CPU モニタの測定値パラメータは **CPU utilization (%)** です。

状態の条件ごとに状態のしきい値基準を 1 つ以上設定できます。ほとんどのモニタ・タイプには、3 つの状態の条件のそれぞれについて標準設定が 1 つ含まれています。モニタの標準設定のしきい値は、最初にモニタを設定するときに表示されます。

モニタ状態のしきい値設定の詳細については、384 ページ「しきい値設定」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 329 ページ「スケジュール」
- ▶ 329 ページ「可用性」
- ▶ 329 ページ「ベースラインしきい値」
- ▶ 330 ページ「しきい値の状態の影響」
- ▶ 330 ページ「複数のしきい値」
- ▶ 331 ページ「インジケータに割り当てられた SiteScope 測定値」

スケジュール

モニタ実行のしきい値に対する結果をチェックするタイミングを定義する場合、モニタ・インスタンスの状態を判別するスケジュールを選択できます。これは、モニタ実行の結果としきい値のチェックを特定の日または時間のみに制限する場合に便利です。たとえば、業務時間中に収集した結果のみに基づいたモニタの状態を必要とする場合などがあります。しきい値のスケジュール期間外の時間、モニタには**標準設定の状態**ボックスに事前定義された状態が割り当てられます。標準設定では、モニタ実行の結果は**毎日、全日**スケジュールに基づいて、しきい値に対しチェックされます。

可用性

モニタが使用可能でない場合、**使用不能な場合**ドロップダウン・リストのユーザ定義に基づいて状態が割り当てられます。モニタの状態は、**正常**、**警告**、**エラー**だけでなく、**使用不能**になることもあります。警告は、可用性または状態、あるいはその両方に従って起動されます。

ベースラインしきい値

モニタ・インスタンスごとのしきい値の設定に手動でロジック条件を設定するかわりに、SiteScope でベースラインを使用して 1 つ以上のモニタ・インスタンスのしきい値を計算することができます。このトピックの詳細については、333 ページ「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」を参照してください。

しきい値の状態の影響

状態が変化すると、イベントが通知され、モニタまたはモニタが属するグループに関連付けられた警告が起動されます。たとえば、システムが使用不能になったことをモニタが検出した場合、状態は**正常**から**エラー**に変化し、これがエラー警告への起因となります。

状態の変化はまた、モニタ間の依存関係の状態にも影響します。たとえば、**エラー**状態になる変化をモニタが検出すると、それが起因となり、そのシステムに依存するほかの 1 つ以上のモニタが無効になる場合があります。依存関係の設定の詳細については、325 ページ「グループの依存関係の監視」を参照してください。

しきい値の設定はまた、SiteScope ダッシュボードのモニタの状態にも影響します。ダッシュボードの [現在の状態] タブで SiteScope データを表示中に、モニタ・ツリーを掘り下げてモニタ、測定値の状態、可用性を表示できます。SiteScope ダッシュボードには、色付けされた状態と状態アイコンが表示されます。ダッシュボードのユーザ・インタフェースでの測定値の状態と可用性の詳細については、1146 ページ「状態および可用性のレベル」を参照してください。

複数のしきい値

3 つの設定のいずれかに複数のしきい値条件が定義されている場合、個別のしきい値基準の結果は論理 **OR** 関係として組み合わせられます。1 つの状態設定について、条件の 1 つ以上が満たされる場合（「**エラー条件**」設定に対して 2 つの条件がある場合など）、モニタの状態は対応する状態の条件に設定されます。複数の状態の条件設定について状態の条件が満たされる場合、モニタの状態は最も高い値を持つ状態の条件に設定されます。

たとえば、ある条件が「**エラー条件**」として選択され、別の条件が「**警告条件**」として選択された場合、状態は「**エラー**」としてレポートされます。これは「**エラー**」の値が最も高く、「**警告**」の値が次に高く、「**正常**」の値が最も低いからです。

インジケータに割り当てられた SiteScope 測定値

SiteScope が BSM に対してデータをレポートする際に、構成アイテム (CI) の状況の詳細ビューがインジケータによって表示されます。インジケータの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『サービス状況』(PDF) の「状況インジケータ, KPI, KPI のドメイン」を参照してください。

モニタ測定値のしきい値を設定すると、定義済みトポロジと標準設定のマッピングが存在するモニタは、その測定値状態に標準設定で割り当てられるインジケータ状態と重要度値を持つようになります。

- ▶ 各インジケータは、複数の状態を持つことができます。たとえば、CPU 負荷を測定する場合、インジケータ状態は「ボトルネック」や「ビジー」になる可能性があります。一方、メモリ負荷を測定する場合は、インジケータ状態が「ページング」や「メモリ不足」になる可能性があります。
- ▶ インジケータ重大度は、インジケータ状態に対応した重大度です。使用できるインジケータ重大度レベルは、**致命的**、**重大**、**軽微**、**警告**、**正常域**、および**不明**です。

インジケータ状態は、その測定値に関連付けられているインジケータの状態に存在する使用可能な重大度のうちの最も近い重大度に従って測定値状態に割り当てられます。選択された重大度は、SiteScope しきい値に示されます。たとえば、メモリ・モニタの使用済みパーセントを測定する場合、「エラー」しきい値内の重大度「**重大**」に測定値がマップされます。これは、インジケータ「**メモリ負荷**」には、重大度「**致命的**」を使用できないためです。Ping モニタの往復時間を測定する場合、「**警告**」しきい値内の最も近い重大度レベルは「**重大**」です。これは、このインジケータ状態には重大度レベル「**軽微**」が存在しないためです。しきい値「**正常**」は、常に重大度レベル「**正常域**」にマップされます。

インジケータ状態と重大度の関連付けは、ローカル SiteScope サーバでは変更できません。

モニタの [HP 統合設定] 表示枠で異なるインジケータ・マッピングを選択した場合、そのインジケータ状態と重大度値は [しきい値の設定] で更新されます。

注： [Indicator State (Severity)] ボックスが空の場合、自動的に割り当てられる [常に (標準設定)] の場合を除き、測定値は [サービス状況] で色付けされません。

標準設定のインジケータ割り当て (マッピング) は、システム可用性管理のインジケータ割り当て設定に保存されます。詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』(PDF) の「インジケータ割り当ての設定」を参照してください。

インジケータ割り当て設定での割り当てに変更があると、SiteScope はその変更を検出し、更新された割り当てをダウンロードします。ローカル SiteScope サーバ上のインジケータ割り当てが変更された場合、これらの割り当てがインジケータ割り当て設定によって上書きされることはありません。ユーザ・インタフェースで選択した状態が標準設定値と同じ場合のインジケータ状態についても同様です。

注：

- ▶ 重複するしきい値が設定された場合 (たとえば、エラー条件 `cpu utilization > 80%` およびエラー条件 `cpu utilization > 90%`)、最も近いしきい値にマップされたインジケータ状態と重大度値が送信されます。この例では、実際の測定値が `95%` の場合、エラー条件 `cpu utilization > 90%` にマップされたインジケータ値が送信されます。これは、しきい値が数値の場合にのみ該当します。
 - ▶ インジケータ状態と重大度は、SiteScope レポートには表示されません。
-

ベースラインを使用した状態のしきい値の設定

ベースライン・データは、ある期間のモニタ・パフォーマンス・メトリックスから収集され、許容可能な、または期待するしきい値範囲を設定するための比較に使用されます。モニタのパフォーマンスが一定の値の範囲を超えた場合（または、空きディスク容量の場合のように範囲に達しない場合）、モニタはエラーまたは警告を通知することがあります。許容可能なモニタのしきい値範囲は、現在のパフォーマンスがベースラインからどの程度離れているかによって決まります。ベースラインによって、アプリケーションの通常のパフォーマンスを把握でき、またパフォーマンスの問題が単独のインシデントなのか、重大なパフォーマンス低下傾向の兆候なのかを判別できます。

このタスクの詳細については、347 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 334 ページ「ベースラインの計算」
- ▶ 334 ページ「ベースラインのアクティブ化」
- ▶ 335 ページ「注意事項および制限事項」
- ▶ 337 ページ「ベースライン順守レベルの設定」
- ▶ 338 ページ「正常な限度とエラー限度について」
- ▶ 340 ページ「ベースラインしきい値について」

ベースラインの計算

SiteScope がベースラインの計算を開始できるようにするには、ベースライン・データの収集に使用するグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択します。ベースラインしきい値データの収集に使用するスケジュールを選択することもできます。これにより、SiteScope がベースラインの計算のデータを収集する期間を特定の曜日や時間に限定できます。たとえば、ピーク業務時間中に収集した結果のみに基づいたモニタの状態を必要とする場合があります。

順守レベルを選択してベースラインの計算の値がしきい値に影響する範囲を決定し、すべてのモニタ測定値のしきい値の限度を設定することもできます。詳細については、337 ページ「ベースライン順守レベルの設定」および 338 ページ「正常な限度とエラー限度について」を参照してください。

ベースライン・エンジンはデータ収集期間中にモニタから収集された測定値を使用して、スケジュールごとのベースラインを計算します。SiteScope は、パーセンタイル値を使用してベースラインの値を決定するパーセンタイル・アルゴリズムをベースラインの計算に使用します。ベースラインしきい値の計算方法の詳細については、340 ページ「ベースラインしきい値について」を参照してください。

ベースラインのアクティブ化

ベースラインを計算したら、[ベースラインのアクティブ化] ダイアログ・ボックスで計算したモニタのサマリを確認し、ベースライン・データを分析できます。このダイアログ・ボックスには、ベースライン計算の対象となったすべてのモニタ・インスタンス、ベースライン計算日、ベースラインしきい値が適用された場合にモニタに生成されるエラー状態および警告状態の数の減少幅が表示されます。SiteScope でモニタに対するベースラインを計算できない場合、計算が失敗した理由が表示されます。

各モニタ測定値の現在のしきい値、ベースラインしきい値、過去 24 時間におけるすべてのベースライン関連のモニタ測定値の履歴データのグラフも表示されます。グラフには注釈ツールが含まれており、表示中のグラフのスナップショットに注釈を追加して、重要な領域を強調表示できます。注釈付きのグラフは、保存、印刷、電子メールによる送信が可能です。ユーザ・インタフェースの詳細については、1381 ページ「注釈ツール」を参照してください。

ベースライン・データを確認したら、ベースラインしきい値設定をアクティブ化できます。これにより、ベースライン値が選択したモニタのしきい値に適用されます。「**データが十分ではありません。**」が理由で失敗したモニタのベースラインを、収集した限定的な測定値のサンプルを使用してアクティブ化することもできます。

ベースラインをアクティブ化した後にしきい値設定を元に戻すことはできないため、ベースラインしきい値をアクティブ化する前に、現在のモニタ設定の保存が必要かどうか検討してください。

ベースラインをアクティブ化すると、各モニタの [しきい値の設定] 領域にベースラインしきい値が表示されます。ベースライン値は、測定値に対して収集された履歴サンプルと当日の測定結果に従って毎日再計算されます。また、それに応じてベースラインしきい値が再計算、更新されます。

選択したコンテキストで、各モニタのベースラインの状態とベースラインの状態の説明を表示するベースライン・サマリ・レポートをいつでも作成できます。

注意事項および制限事項

- ▶ ベースライン機能を使用してモニタのしきい値を設定できるのは、SiteScope の管理者または「**モニタの編集**」権限を持つユーザのみです。また、設定できる対象はユーザに許可されているグループ・リストに含まれるモニタのみです。編集権限があるかどうかに関係なく、すべてのユーザがベースラインの状態レポートを表示できます。
- ▶ ベースライン計算プロセス中は、しきい値または測定値の追加や削除、モニタのコピーや移動を行うことはできません（モニタのベースラインがアクティブ化されるまで）。
- ▶ 参照可能なモニタのベースラインをアクティブにした後でそれらのモニタに対してしきい値測定値の追加、編集、または削除を行った場合は、ベースライン・モニタとしてそのモニタの計算とアクティブ化を再度行う必要があります。

- ▶ ベースラインを計算する前に、モニタを有効にして、SiteScope がベースラインを計算するのに十分なデータを蓄積できるだけの期間、モニタを実行できるようにします。この期間は、[インフラストラクチャ プリファレンス] の [ベースライン設定に必要な最小日数] および [ベースライン設定に必要な最小サンプル数] 設定に応じて変わります。詳細については、652 ページ「ベースライン設定」を参照してください。モニタに十分なデータがなくてもベースラインを計算してアクティブ化できますが、計算が不正確になる可能性があります。
- ▶ 参照可能なモニタにカウンタのセットを定義し、これらのカウンタを使用してモニタを一定期間実行した後、カウンタを変更して（既存のカウンタの削除や新規カウンタの追加など）ベースラインを計算しようとする、計算結果が不正確になる可能性があります。この原因として、すでに存在しない可能性があるカウンタ用の古いデータが新しいデータと矛盾することが考えられます。モニタの作成時点から変更されていないカウンタでも、計算が不正確になる可能性があります。この問題を避けるため、ベースラインの計算に必要な最小日数の間はモニタの参照可能なカウンタを変更しないでください。
- ▶ しきい値をベースラインを使用して作成したか手動で作成したかに関係なく、しきい値関連のプロパティは [グローバル検索と置換] を使用して変更できます。ただし、[グローバル検索と置換] を使用してモニタのベースラインしきい値をアクティブ化することはできません。
- ▶ ベースラインの計算中とベースラインのアクティブ化後は、特定のベースラインしきい値の変更のみがサポートされます。[グローバル検索と置換] を使用してしきい値関連のプロパティを変更する場合にも、同じ制限が適用されます。許可されているしきい値の変更の詳細については、391 ページ「しきい値の設定の変更」を参照してください。
- ▶ ベースラインの計算またはアクティブ化プロセスが完了する前に SiteScope が再起動された場合、再起動後に自動的にプロセスが続行されます。ほかのベースラインの状態（**計算済み**、**アクティブでない**、**アクティベーションが失敗しました**、**計算に失敗**、**アクティブ化されたベースライン**）を持つモニタは、再起動による影響を受けません。
- ▶ ベースラインの削除プロセスが完了する前に SiteScope が再起動された場合、再起動後にプロセスは続行されないため、ベースラインの削除プロセスを再度実行する必要があります。

- ▶ アクティブ化されたベースラインと一緒にグループやモニタをコピーまたは移動する場合、ベースラインしきい値がほかのグループやモニタ・オブジェクトと一緒にコピーまたは移動されることはありません。
- ▶ ベースラインの任意のダイアログ・ボックスで **[ヘルプ]** ボタンをクリックすると、ユーザ・ログイン資格情報を入力するようメッセージが表示されます。
- ▶ メモリ消費量は、ベースラインを使用して設定されたモニタのしきい値ごとに増加します。メモリ消費量を削減するには、**[ベースライン設定]** で **[累積されたベースラインデータをディスクに保存する間隔]** 設定を設定できます。詳細については、652 ページ「ベースライン設定」を参照してください。



ベースライン順守レベルの設定

しきい値の決定に使用するベースライン順守レベルを選択できます。これは、ベースライン計算の値がすべてのモニタ測定値のしきい値に与える影響の範囲を示します。**[高]**、**[中]**、**[低]** のいずれかを選択できます。順守レベルが高いほど、しきい値の範囲がモニタ測定値のベースライン値に近くなります。反対に、順守レベルが低いほど、しきい値の範囲がモニタ測定値のベースライン値から離れます。

順守レベルの選択に加え、モニタ測定値ごとに別個の順守パーセンタイルを設定して、個別のモニタ測定値の順守レベルを微調整することもできます。順守レベルは、測定値がいつエラーまたは警告になるかを決定する測定値である、順守パーセンタイルに基づきます。参照可能なモニタ測定値の場合、設定できる順守パーセンタイルは 1 セットのみで、これがすべての参照可能なモニタに使用されます。

順守レベルを手動で微調整するには、しきい値の作成方法を理解する必要があります。このトピックの詳細については、340 ページ「ベースラインしきい値について」を参照してください。

正常な限度とエラー限度について

正常な限度とエラー限度を設定すると、ベースラインしきい値の使用時に不必要なエラーや警告の発生を防止するのに役立ちます。モニタ測定値ごとの正常な限度と参照可能なモニタ・カウンタを手動で設定できます。SiteScope では、モニタ測定値ごとにエラー限度が自動的に設定されます。

注：正常な限度を設定するには、ベースラインしきい値の作成を方法を理解することが重要です。このトピックの詳細については、340 ページ「ベースラインしきい値について」を参照してください。

正常な限度

これは、既存のベースライン・パーセンタイルに従うとエラーをレポートする必要がある場合でも、エラー状態とみなされない測定値です。たとえば、CPU 使用率が常に 3% 未満である低負荷のシステムがあるとします。これらの測定値に基づいて、SiteScope は 5% のエラーしきい値を持つベースラインしきい値を計算する可能性があります。これは CPU 負荷エラーの正確な指標ではないため、誤ったエラーの生成を避けるために正常な限度として 70% の CPU 使用率を定義することができます。CPU 使用率がこの限度を下回っているかぎり、(ベースライン・エラーしきい値を上回っていても) モニタはエラー状態になりません。

正常な限度は、[順守レベルの微調整/限度の設定] ダイアログ・ボックスの [正常な限度] で設定できます。ユーザ・インターフェースの詳細については、422 ページ「[順守レベルの微調整/限度の設定]ダイアログ・ボックス」を参照してください。

エラー限度

これは、既存のベースライン・パーセンタイルに従うとエラーをレポートする必要がある場合でも、エラー状態とみなされる測定値です。測定値がある期間にわたって徐々に増加した場合（少しずつ発生するメモリ・リークなど）に発生することがあります。ベースラインしきい値は、測定値の平均が増加するのにあわせて毎日再計算されて更新されるため、測定値が新しいしきい値を上回る（下回る）ことはありません。

この問題を解決するために、**SiteScope** ではモニタ測定値ごとにエラー限度が自動的に設定されます。このために、モニタ測定値が指定した値を超えるとベースラインに関係なくエラーを誘発する制限が設定されます。たとえば、**SiteScope** が CPU 使用率 80% のエラー限度を設定すると、計算したベースライン・エラーしきい値を超えていなくても、CPU 使用率 80% を超える値はエラー状態になります。

エラー限度の計算方法の詳細については、341 ページ「**SiteScope** によるエラー限度の計算方法」を参照してください。

ベースラインしきい値について

各順守レベルのベースライン計算で使用されるパーセンタイル値の微調整や、エラー限度および正常な限度の設定（詳細については、338 ページ「正常な限度とエラー限度について」を参照してください）には、次のことを理解する必要があります。

- ▶ しきい値のタイプ
- ▶ しきい値の測定値への適用方法
- ▶ ベースラインしきい値および限度の計算での測定値の使用方法

ベースラインしきい値は、ベースラインが計算される前のモニタの測定値ごとに、モニタ設定に対して動的に追加または更新されます。ベースラインしきい値は、ベースライン・データの収集用に選択したスケジュールごとに追加されます。

一般に、しきい値にはベースラインしきい値と静的しきい値の 2 タイプがあります。ベースラインしきい値には、測定値がいつエラーまたは警告状態になるかを決定するのに使用するパーセンタイル値が設定され、静的しきい値には実際の固定値が設定されます。ベースラインしきい値の測定値には、測定方向に応じて $\geq$ または $\leq$ の条件があります。

ベースラインしきい値は、次の 2 つの条件が満たされた場合に測定値に対して変更、追加、削除されます。

- ▶ 測定値をベースラインの計算で利用できる。ベースラインの計算で使用するには、測定値は数値で、方向を持っている必要があります。ベースラインの計算に使用できない測定値の例として、URL 404 エラー・コードがあります（数値ですが方向がありません）。
- ▶ ベースラインの計算に先だって、測定値にスケジュールおよび状態カテゴリ（正常、警告、エラー）に定義された静的しきい値がある。

これらの条件を順守していない測定値は（測定値に定義されているしきい値という点では）影響を受けず、ベースラインはこれらの測定値に対して計算されません。

SiteScope でのしきい値の計算方法

SiteScope では、ベースラインの計算時に、各スケジュールのベースラインしきい値の測定値ごとにパーセンタイル値を作成します。SiteScope は、極端な測定値を調整するために、標準設定で最も極端なサンプルの 2% を破棄し（“ノイズ”測定値とみなされます）、残りの測定値に対してパーセンタイルを計算します。たとえば、サーバ上のほとんどのモニタ実行結果が CPU 使用率 20% 以下と 1 回だけのピーク値 50% を示している場合、このピーク値はベースラインの決定には使用されません。測定値サンプルから破棄するパーセンテージは、[ベースライン設定] で変更できます。

ベースライン・エンジンは、しきい値の計算にスライディング・ウィンドウ法を使用します。つまり、データ・サンプルが新しいほど、古いサンプルよりもベースライン計算に与える影響が大きく、一定期間が経過すると（標準設定では 30 日間）、履歴データは使用されなくなります。計算に含める日数は [ベースライン設定] で設定できます。

[インフラストラクチャ プリファレンス] の [ベースライン設定] の設定については、652 ページ「ベースライン設定」を参照してください。

SiteScope によるエラー限度の計算方法

SiteScope では、各測定値のエラー限度の作成にパーセンタイル値を使用します。これは、既存のベースライン・パーセンタイルに従うとエラーをレポートする必要がない場合でも、エラー状態とみなされる測定値です。詳細については、339 ページ「エラー限度」を参照してください。

SiteScope では、次のいずれかの方法でエラー限度を計算します。

- ▶ 測定値に特定のスケジュールの静的エラーしきい値がある場合、ベースラインしきい値のパーセンタイル値が実際の値に対して計算され、この値が次のように静的しきい値の値と比較されます。
- ▶ 静的エラーしきい値がベースラインしきい値より極端な場合、静的エラーしきい値がその測定値のエラーしきい値の上限として使用されます。

例：静的エラーしきい値が 100% の CPU 使用率で、計算されたベースラインしきい値が 67% の CPU 使用率の場合、静的エラーしきい値（100% の CPU 使用率）がエラー限度として使用されます。

- ▶ ベースラインしきい値が静的エラーしきい値より極端な場合、オフセット値が使用されます。オフセットは、SiteScope によってベースラインしきい値に加算（または測定値の方向によってはベースラインしきい値から減算）されるパーセンテージの値で、結果値がその測定値のエラー限度として使用されます。オフセット値は、[インフラストラクチャ プリファレンス] の [ベースライン設定] 領域で決定できます。

例：スケジュールの静的エラーしきい値が **60%** の CPU 使用率で、計算されたベースラインしきい値が **65%** の CPU 使用率の場合、エラーしきい値は次のように計算されます。

65% の CPU 使用率 * 130%（標準設定のオフセット値 0.3 を使用） = 84.5% の CPU 使用率

- ▶ ベースラインを計算する前に特定のスケジュールの測定値にエラーしきい値がなく（測定値にエラーしきい値ではなく警告しきい値または良好しきい値がある）、[ベースライン設定] で **[エラーのしきい値が定義されていない場合は、エラー限度の作成を自動化する]** オプションが選択されている場合、ベースラインしきい値のパーセンタイル値が実際の値に対して計算され、オフセット値がベースラインしきい値に加算またはベースラインしきい値から減算（測定値の方向による）されます。結果値は、測定値のエラー限度として使用されます。

注：次の場合にはエラー限度は作成されません。

- ▶ ベースラインを計算する前に特定のスケジュールの測定値にエラーしきい値がない（たとえば、測定値にエラーしきい値ではなく警告しきい値または良好しきい値がある）、さらに
- ▶ **[エラーのしきい値が定義されていない場合は、エラー限度の作成を自動化する]** オプションが選択されていない場合。

オフセット値の定義とエラー限度の作成の自動化の詳細については、652 ページ「ベースライン設定」を参照してください。

タスク

モニタのデプロイ方法

このタスクでは、モニタのデプロイに関する手順を説明します。

- ▶ 343 ページ「前提条件」
- ▶ 344 ページ「モニタ・インスタンスの作成」
- ▶ 346 ページ「モニタの警告の設定（任意指定）」
- ▶ 347 ページ「モニタ・レポートの設定（任意指定）」
- ▶ 347 ページ「結果」

1 前提条件

モニタを設定する前に、モニタ用に取得する必要があるセットアップ要件とユーザ権限があるかどうかを確認します。詳細については、『**Monitor Reference**』（英語版）で各モニタのヘルプを参照してください。

注：

- ▶ モニタは、モニタ・ツリー内のグループで作成する必要があります。タスクの詳細については、312 ページ「**SiteScope** グループとサブグループの作成」を参照してください。
 - ▶ **SiteScope** でリモート・サーバのデータを監視するには、リモート・サーバを設定する必要があります。**Windows** リモート・サーバを設定する方法の詳細については、506 ページ「リモート **Microsoft Windows** サーバを監視するための **SiteScope** の設定方法」を参照してください。**UNIX** リモート・サーバを設定する方法の詳細については、518 ページ「リモート **UNIX** サーバを管理するための **SiteScope** の設定方法」を参照してください。
-

2 モニタ・インスタンスの作成

- a 新しいモニタ・インスタンスを作成するには、モニタ・インスタンスの追加先のグループを右クリックし、[新規作成] > [モニタ] を選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、372 ページ「新規モニタ・ページ」を参照してください。

注：既存のモニタ・インスタンスをモニタ・ビュー内のグループにコピーまたは移動して、新しいモニタ・インスタンスを作成することもできます。詳細については、59 ページ「SiteScope オブジェクトのコピーと移動」を参照してください。

- b [新規モニタ ページ] から追加するモニタを選択し、そのモニタの設定を行います。モニタ設定の詳細、『Monitor Reference』（英語版）で個々のモニタのヘルプを参照してください。

- c モニタに影響するほかのプロパティを設定できます。次に例を示します。
 - ▶ **「モニタの実行設定」** タブでは、モニタ・インスタンスに定義されたアクションの実行を SiteScope が試みる頻度を設定できます。特定の日または一定のスケジュールでモニタを実行する場合は、範囲スケジュールを設定することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、379 ページ「モニタの実行設定」を参照してください。
 - ▶ **「依存関係」** タブでは、モニタの依存関係を設定することにより、このモニタの実行をほかのモニタの状態に依存させることができます。ユーザ・インタフェースの詳細については、381 ページ「依存関係」を参照してください。

例：

設定されているモニタは、**「依存」** ボックスで選択したモニタが **「依存条件」** ボックスで選択した条件をレポートしている間は通常どおり実行されます。この例では、「サービス」のモニタが「正常」の状態をレポートした場合にのみ、設定されているモニタが有効になります。

The screenshot shows a dialog box titled '依存関係' (Dependencies). It contains two main fields: '依存:' (Dependency) and '依存条件:' (Dependency Condition). The '依存:' field has a text input showing 'Service: HTTP on SiteScope Server' and a small icon to its right. The '依存条件:' field has a dropdown menu currently showing '正常' (Normal).

- ▶ **「しきい値の設定」** タブでは、レポートされた各モニタ・インスタンスの状態を判別するロジック条件を手動で設定できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、384 ページ「しきい値設定」を参照してください。

あるいは、ベースラインを使用して 1 つ以上のモニタのしきい値を設定することもできます。詳細については、347 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」を参照してください。

例：

次に、ディスク領域モニタのしきい値の標準設定を示します。

エラー条件

条件	オペレータ	値	スケジュール	Indicator State and Se...
percent full(default)	==	'n/a'	毎日、全日	Much Higher Than No...
percent full(default)	>	98	毎日、全日	Much Higher Than No...

警告条件

条件	オペレータ	値	スケジュール	Indicator State and Se...
percent full(default)	>	95	毎日、全日	Much Higher Than No...

良好条件

条件	オペレータ	値	スケジュール	Indicator State and Se...
always(default)				

使用中パーセントが 95 より小さいディスク領域は正常な状態です。使用中パーセントが 95 よりも大きく 98 よりも小さいディスク領域は警告状態です。使用中パーセントが 98 より大きい「n/a」のディスク領域はエラー状態です。

- ▶ ほかの共通モニタ・プロパティの詳細については、375 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。

3 モニタの警告の設定（任意指定）

イベントが発生したか、インフラストラクチャの要素やシステムのステータスが変化したときに通知を送信する警告を作成します。

モニタの警告を作成するには、モニタを右クリックして **[新規作成]** > **[警告]** を選択します。各警告スキームに 1 つ以上の警告アクションを作成できます。**[新規警告]** ダイアログ・ボックスで **[新規警告アクション]** をクリックすると、**[警告のアクション]** ウィザードが起動します。

タスクの詳細については、1276 ページ「警告の設定方法」を参照してください。

4 モニタ・レポートの設定（任意指定）

時間の経過に伴う監視対象のサーバおよびアプリケーションのパフォーマンスに関する情報を表示するレポートを作成します。

モニタのレポートを作成するには、モニタを右クリックして **[レポート]** をクリックします。レポート・タイプを選択し、レポート設定を指定します。

タスクの詳細については、1338 ページ「レポートの作成方法」を参照してください。

5 結果

[プロパティ] タブで指定した設定内容で、モニタ・ツリーのモニタ・グループにモニタが追加されます。

ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法

このタスクでは、ベースラインを使用したモニタしきい値の設定に関する手順を説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 348 ページ「前提条件」
- 348 ページ「ベースライン設定プリファレンスの設定（任意指定）」
- 348 ページ「ベースラインの計算」
- 352 ページ「ベースライン設定の確認」
- 353 ページ「ベースライン・モニタ測定値グラフの表示」
- 354 ページ「ベースライン設定のアクティブ化」
- 355 ページ「[ベースラインの状態レポート] でベースラインのプロパティを表示」
- 356 ページ「ベースラインしきい値の表示と変更」

1 前提条件

モニタのベースラインを計算する前に、モニタが有効になっていて、SiteScope でベースラインを計算するために必要なデータを蓄積するのに十分な長さの期間実行されていることを確認します。この期間は、[ベースライン設定] で設定したベースラインの計算に必要な日数とサンプルの最小数ごとに異なります。ユーザ・インタフェースの詳細については、652 ページ「ベースライン設定」を参照してください。

注：モニタに十分なデータがなくてもベースラインを計算してアクティブ化できますが、計算が不正確になる可能性があります。

2 ベースライン設定プリファレンスの設定（任意指定）

[インフラストラクチャ プリファレンス] のグローバル SiteScope ベースライン設定の値を表示、定義できます。これには、計算とアクティブ化の優先設定、ベースライン計算に含める履歴データの日数、エラー限度の計算に使用するオフセットが含まれます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、652 ページ「ベースライン設定」を参照してください。

3 ベースラインの計算

ベースラインを計算するモニタ測定値のしきい値を定義します。

- a ベースライン設定するモニタ・インスタンスを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、419 ページ「ベースライン計算対象のモニタの選択」を参照してください。
- b ベースライン・データの収集に使用する 1 つ以上のスケジュール範囲を選択するか、標準設定のスケジュール（毎日、全日）を受け入れます。ユーザ・インタフェースの詳細については、419 ページ「スケジュール」を参照してください。

- c ベースライン計算の値が、すべてのモニタ測定値のしきい値にどの程度影響するかを判断するためのグローバル・ベースライン順守レベルを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、420 ページ「順守レベル」を参照してください。
 - d また、**[順守レベルの微調整/限度の設定]** ボタンをクリックして次を実行できます。
 - ▶ モニタ測定値のベースライン順守レベルを個々に微調整する。
 - ▶ 各モニタ測定値の正常な限度を定義する。この限度内の測定値は、既存のベースライン・パーセンタイルに応じてエラーをレポートする必要がある場合でも、エラー状態にはなりません。
- ユーザ・インタフェースの詳細については、422 ページ「順守パーセンタイルの設定」を参照してください。

- e [計算] をクリックしてベースラインしきい値の計算を実行します。

例：

[ベースラインの計算] ダイアログ・ボックスの例です。



注： ユーザ権限に応じてユーザの表示が許可されているモニタのみが表示されます。

[順守レベルの微調整/限度の設定] ダイアログ・ボックスの例。

順守レベルの微調整/限度の設定

静的カウンタ付きモニタ

リセット  

モニタ名:測定値名	警告のパーセンタイル			エラーのパーセンタイル			正常な限度
	低	中	高	低	中	高	
CPU : utilizationPercentage	110	93	90	120	98	95	
メモリ : percentFull	110	93	90	120	98	95	
メモリ : freeSpace	110	93	90	120	98	95	
メモリ : pageFaultsPerSecond	110	93	90	120	98	95	
サービス : status	110	93	90	120	98	95	
サービス : running	110	93	90	120	98	95	
サービス : installed	110	93	90	120	98	95	
サービス : processCount	110	93	90	120	98	95	
サービス : serviceNameStatus	110	93	90	120	98	95	

ブラウザ可能なモニタ

リセット  

モニタ名:測定値名	警告のパーセンタイル			エラーのパーセンタイル			正常な限度
	低	中	高	低	中	高	
ブラウザ可能なすべてのモニタの測定値	110	93	90	120	98	95	

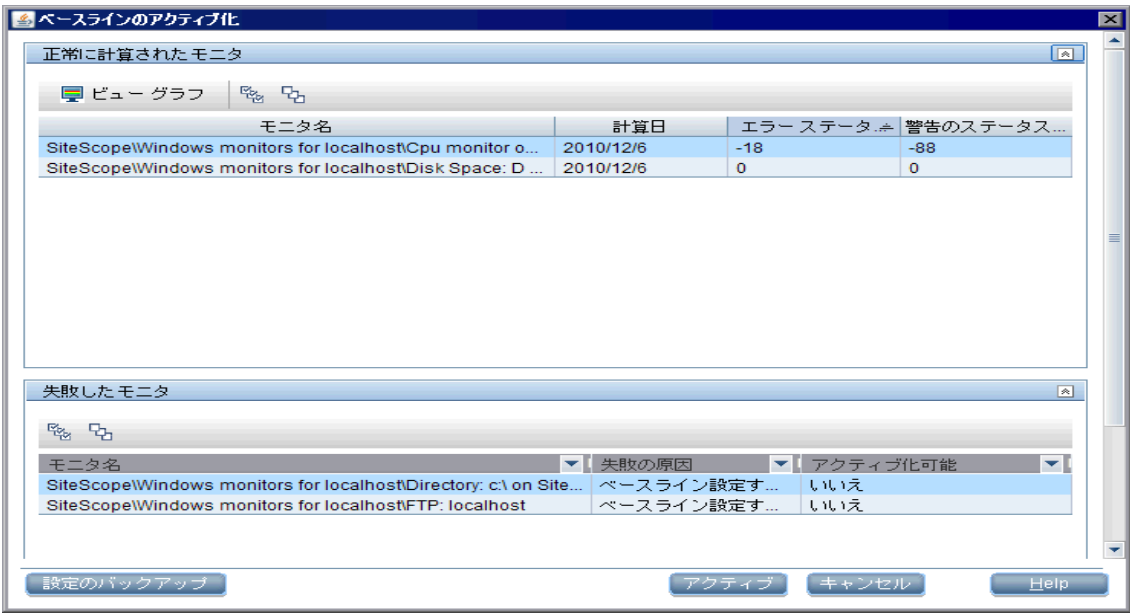
保存 キャンセル Help

4 ベースライン設定の確認

[ベースラインのアクティブ化] ダイアログ・ボックスで、計算されたモニタとベースライン・データのサマリを確認します。ユーザ権限に応じてユーザの表示が許可されているモニタのみが表示されます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、424 ページ「[ベースラインのアクティブ化] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

例：



注：ユーザ権限に応じてユーザの表示が許可されているモニタのみが表示されます。

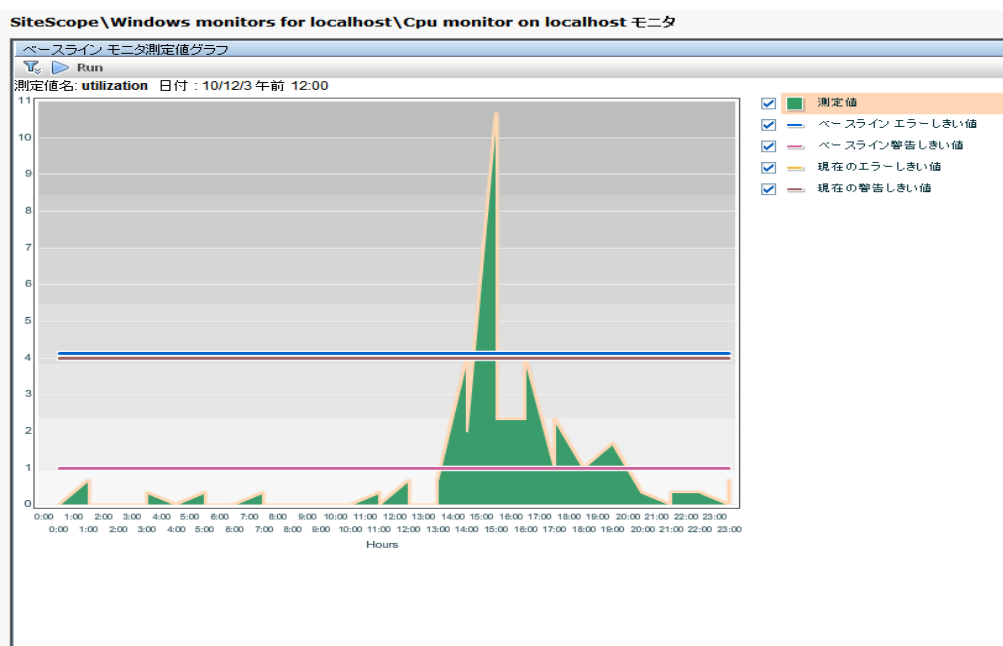
5 ベースライン・モニタ測定値グラフの表示

各モニタのベースライン処理済み測定値のグラフを表示して、選択した日のベースライン・データを分析できます。表示しているグラフのスナップショット作成に注釈ツールを使用して、重要な領域を強調表示することもできます。

ユーザ・インターフェースの詳細については、429 ページ「[ベースライン モニタ測定値グラフ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注： グラフに表示されるデータは測定値データの集計であるため、時間帯は実際にデータが収集された時間を正確に反映していない可能性があります。

例：



6 ベースライン設定のアクティブ化

ベースラインを使用してしきい値を設定するモニタを選択し、**[アクティブ]** をクリックします。計算に成功したベースラインのすべてのモニタと、**「データが十分ではありません」**という理由で失敗したモニタ (**[アクティブ化可能]** 列で **[はい]** と表示) を選択できます。モニタしきい値はベースライン計算に応じて設定され、しきい値の設定を超えた場合に状態を変更するように設定されます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、424 ページ「[ベースラインのアクティブ化] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注： 現在のモニタしきい値の設定に戻す場合は、ベースライン設定をアクティブ化する前に現在のモニタ設定を保存するオプションを選択します。

7 [ベースラインの状態レポート] でベースラインのプロパティを表示

選択したコンテキストの各モニタに関する情報を示す、一時的なレポートを作成できます。この情報には各モニタのベースラインの状態とベースラインの状態の詳細が含まれます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[433 ページ「ベースラインの状態レポート」](#)を参照してください。

モニタの [ベースライン設定] で、モニタのベースラインの状態を追跡することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、[410 ページ「ベースライン設定」](#)を参照してください。

例：

ベースラインの状態レポート			
サマリ			
5 個のモニタの合計です。			
2 個のモニタにアクティブ化されたベースラインがあります。			
3 個のモニタの計算が失敗しました。			
詳細			
モニタ名	モニタ タイプ	ベースラインの状態	ベースラインの状態の詳細
SiteScope\Lab monitors\C...	CPU	アクティブ化されたベースライン	
SiteScope\Lab monitors\M...	メモリ	アクティブ化されたベースライン	
SiteScope\Lab monitors\S...	サービス	計算に失敗	ベースライン設定する測定値がありませ...
SiteScope\Lab monitors\Port	ポート	計算に失敗	ベースライン設定する測定値がありませ...
SiteScope\Lab monitors\Di...	ディレクトリ	計算に失敗	ベースライン設定する測定値がありませ...

8 ベースラインしきい値の表示と変更

[しきい値の設定] でベースラインしきい値を表示し、しきい値が生成されたパーセンタイル値を変更することでしきい値を手動で微調整できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、384 ページ「しきい値設定」を参照してください。

例：

この例では、[エラー条件] の [percent used] しきい値が ≥ 42.81 で、[警告条件] の [percent used] しきい値が ≥ 40.77 です（これらの値は両方とも編集できません）。しきい値を変更するには、しきい値が生成されたパーセンタイル値を変更する必要があります。パーセンタイル値を変更した後の新しいしきい値を確認できるように、**パーセンタイル・テーブル**  ボタンをクリックして、各パーセンタイル範囲にマップされているしきい値を表示するパーセンタイル・テーブルを開きます。

しきい値の設定

使用不能な場合: モニタの状態をしきい値に応じて設定

標準設定の状態: 正常

内部エラーの場合: モニタの状態をしきい値に応じて設定

Add default thresholds Remove default thresholds

エラー条件

*

✖

条件	オペレータ	値	スケジュール
percent used	$\geq$	42.81	every day, 18:00-09:00
percent used(default)	$>$	90	毎日、全日
percent used	$==$	'n/a'	毎日、全日

警告条件

*

✖

条件	オペレータ	値	スケジュール
percent used	$\geq$	40.77	every day, 18:00-09:00

良好条件

*

✖

条件	オペレータ	値	スケジュール
always(default)			

356

注：「エラー条件」の「percent used (default)」> 90 のしきい値がエラー限度です。既存のベースライン・パーセンタイルに従うとエラーをレポートしない場合でも、この測定値の値はエラーの状態とみなされます。たとえば、ベースラインしきい値が「エラー条件」の「使用済みパーセント (%)」>= 96 に更新された場合、計算されたベースライン・エラーしきい値の 96 を超えなくても、90 よりも大きいすべての測定値がエラー状態になります。このトピックの詳細については、339 ページ「エラー限度」を参照してください。

参照情報

モニタ・カテゴリ・リスト

このセクションには、各モニタ・カテゴリの SiteScope モニタを表示するテーブルが含まれています。各モニタ・タイプの使用と設定の詳細については、『Monitor Reference』ガイド（英語版）のモニタ・タイプに関する説明を参照してください。

- ▶ 358 ページ「アプリケーション・モニタ」
- ▶ 360 ページ「データベース・モニタ」
- ▶ 360 ページ「汎用モニタ」
- ▶ 360 ページ「ネットワーク・モニタ」
- ▶ 361 ページ「サーバ・モニタ」
- ▶ 362 ページ「ストリーム・モニタ」
- ▶ 362 ページ「Web トランザクション・モニタ」
- ▶ 362 ページ「仮想化モニタ」
- ▶ 362 ページ「統合モニタ」

アプリケーション・モニタ

- ▶ Active Directory Replication Monitor
- ▶ Apache Server Monitor
- ▶ BroadVision Application Server Monitor
- ▶ Check Point Monitor
- ▶ Cisco Works Monitor
- ▶ Citrix Monitor
- ▶ ColdFusion Server Monitor
- ▶ COM+ Server
- ▶ F5 Big-IP Monitor

- Microsoft ASP Server Monitor
- Microsoft Exchange 2007/2010 Monitor
- Microsoft Exchange 2003 Mailbox Monitor
- Microsoft Exchange 5.5 Message Traffic Monitor
- Microsoft Exchange 2000/2003/2007 Message Traffic Monitor
- Microsoft Exchange 2003 Public Folder Monitor
- Microsoft IIS Server Monitor
- News Monitor
- Oracle 9i Application Server Monitor
- Oracle 10g Application Server Monitor
- Radius Monitor
- SAP CCMS Monitor
- SAP CCMS Alerts Monitor
- SAP Java Web Application Server Monitor
- SAP Performance Monitor
- SAP Work Processes Monitor
- Siebel Application Server Monitor
- Siebel Log File Monitor
- Siebel Web Server Monitor
- SunONE Web Server Monitor
- Tuxedo Monitor
- UDDI Monitor
- WebLogic Application Server Monitor
- WebSphere Application Server Monitor
- WebSphere MQ Status Monitor
- WebSphere Performance Servlet Monitor

データベース・モニタ

- DB2 8.x and 9.x Monitor
- Database Counter Monitor
- Database Query Monitor
- LDAP Monitor
- Microsoft SQL Server Monitor
- Oracle Database Monitor
- Sybase Monitor

汎用モニタ

- Composite Monitor
- Directory Monitor
- File Monitor
- JMX Monitor
- Log File Monitor
- Multi Log File Monitor
- Script Monitor
- Web Service Monitor
- XML Metrics Monitor

ネットワーク・モニタ

- DHCP Monitor
- DNS Monitor
- FTP Monitor
- Formula Composite Monitor
- Mail Monitor
- MAPI Monitor
- Microsoft Windows Dial-up Monitor

- Network Bandwidth Monitor
- Ping Monitor
- Port Monitor
- SNMP Monitor
- SNMP Trap Monitor
- SNMP by MIB Monitor

サーバ・モニタ

- Amazon Web Services Monitor
- Browsable Windows Performance Monitor
- CPU Monitor
- Disk Space Monitor
- HP iLO (Integrated Lights-Out) Monitor
- HP NonStop Event Log Monitor
- HP NonStop Resources Monitor
- IPMI Monitor
- Memory Monitor
- Microsoft Windows Event Log Monitor
- Microsoft Windows Performance Counter Monitor
- Microsoft Windows Resources Monitor
- Microsoft Windows Services State Monitor
- Service Monitor
- UNIX Resources Monitor
- Web Server Monitor

ストリーム・モニタ

- Microsoft Windows Media Player Monitor
- Microsoft Windows Media Server Monitor
- Real Media Player Monitor
- Real Media Server Monitor

Web トランザクション・モニタ

- e-Business Transaction Monitor
- Link Check Transaction Monitor
- URL Monitor
- URL Content Monitor
- URL List Monitor
- URL Sequence Monitor
- Web Script Monitor

仮想化モニタ

- Microsoft Hyper-V Monitor
- Solaris Zones Monitor
- VMware Performance Monitor

統合モニタ

- HP OM Event Monitor
- HP Service Manager Monitor
- NetScout Event Monitor
- Technology Database Integration Monitor
- Technology Log File Integration Monitor
- Technology SNMP Trap Integration Monitor
- Technology Web Service Integration Monitor

Windows 環境にインストールされた SiteScope のみでサポートされているモニタ

Windows バージョンで実行している SiteScope のみでサポートされているモニタを次に示します。関連性がある場合は、モニタは任意のプラットフォーム/オペレーティング・システムで実行中のリモート・サーバを監視できます。

- MAPI Monitor
- Microsoft Exchange 2003 Mailbox Monitor
- Microsoft Exchange 2003 Public Folder Monitor
- Microsoft Exchange 2000/2003/2007 Message Traffic Monitor
- Microsoft Exchange 2007/2010 Monitor
- Microsoft Exchange 5.5 Message Traffic Monitor
- Microsoft Windows Dial-up Monitor
- Microsoft Windows Media Player Monitor
- Real Media Player Monitor
- Sybase Monitor
- Tuxedo Monitor
- Web Script Monitor

Windows Management Instrumentation (WMI) をサポートしているモニタ

データ収集に Windows Management Instrumentation (WMI) メソッドをサポートしているモニタを次に示します。WMI は、Windows サーバで実行しているリモート・サーバから管理データを収集する、NetBIOS よりも安全な通信方法です。

- ▶ Citrix Monitor
- ▶ ColdFusion Server Monitor
- ▶ CPU Monitor
- ▶ Disk Space Monitor
- ▶ Memory Monitor
- ▶ Microsoft ASP Server Monitor
- ▶ Microsoft Hyper-V Monitor
- ▶ Microsoft IIS Server Monitor
- ▶ Microsoft SQL Server Monitor
- ▶ Microsoft Windows Media Server Monitor
- ▶ Microsoft Windows Resources Monitor
- ▶ Microsoft Windows Services State Monitor
- ▶ Real Media Server Monitor
- ▶ Service Monitor

リモート・マシンでの WMI の設定方法の詳細については、516 ページ「リモート監視用の WMI サービスの設定」を参照してください。

SiteScope の監視に使用されるポート

次の表に、SiteScope 監視に通常使用されるネットワーク・ポートを示します。多くの場合、環境のセキュリティ要件に応じて代替ポートを設定できます。

モニタ・タイプ	使用されるポート
Apache Server Monitor	Apache サーバ管理ページで指定されたポート。サーバ設定ファイルで変更可能。
BroadVision Application Server Monitor	監視対象の BroadVision サーバごとに、ORB (Object Request Broker) ポート番号を使用。
Check Point Monitor	SNMP モニタ。標準設定では、ポート 161。変更可能。
Cisco Works Monitor	Cisco Works のリソースは、通常、サーバの設定によってポート 161 または 162 (SNMP) よりアクセス可能。
Citrix Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。
ColdFusion Server Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。
CPU Monitor	ローカル CPU の場合、ポートは不要。 リモート・サーバの CPU の場合、Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。 Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23 (telnet), または 513 (rlogin)。
Database Query Monitor	変更可能。ODBC または JDBC ドライバおよび DB 設定によって異なる。
DB2 8.x and 9.x Monitor	標準設定では、ポート 50000。変更可能。
DHCP Monitor	標準設定では、ポート 68。

モニタ・タイプ	使用されるポート
Directory Monitor	ローカル・ディレクトリの場合、ポートは不要。 リモート・サーバのディレクトリの場合、Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。 Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23 (telnet), または 513 (rlogin)。
Disk Space Monitor	ローカル・ディスク領域の場合、ポートは不要。 リモート・サーバのディスク領域の場合、Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。 Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23 (telnet), または 513 (rlogin)。
DNS Monitor	標準設定では、ポート 53。
F5 Big-IP Monitor	SNMP を使用。変更可能。
File Monitor	ローカル・ディスク。ポートは不要。 リモート・サーバのファイルの場合、Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。 Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23 (telnet), または 513 (rlogin)。
FTP Monitor	標準設定では、ポート 21。変更可能。
LDAP Monitor	標準設定では、ポート 389。変更可能。
Link Check Transaction Monitor	標準設定では、ポート 80。変更可能。
Log File Monitor	Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。 Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23 (telnet), または 513 (rlogin)。
Mail Monitor	POP3 ではポート 110, SMTP ではポート 25, IMAP ではポート 143。

モニタ・タイプ	使用されるポート
MAPI Monitor	MAPI では、動的に割り当てられた 1024 より後のポートで NSPI (Name Service Provider Interface) を使用して、クライアント・ディレクトリ検索を実行します。
Memory Monitor	Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139 (NetBIOS), Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23 (telnet), または 513 (rlogin)。
Microsoft ASP Server Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS) を介しての Windows パフォーマンス・カウンタ。
Microsoft Hyper-V Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS) を介しての Windows パフォーマンス・カウンタ。
Microsoft IIS Server Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS) を介しての Windows パフォーマンス・カウンタ。
Microsoft SQL Server Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。
Microsoft Windows Event Log Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。
Microsoft Windows Media Player Monitor	監視するメディア・コンテンツと同じポートを使用。
Microsoft Windows Media Server Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。
Microsoft Windows Performance Counter Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。
Network Bandwidth Monitor	ポートは不要で、ローカル・マシンのみを監視。
News Monitor	標準設定では、ポート 144。変更可能。
Oracle Database Monitor	変更可能。対象となる DB によって異なる。標準設定では、ポート 1521。
Oracle 9i Application Server Monitor/Oracle 10g Application Server Monitor	変更可能。Webcaching 管理ページで指定されたポート。

モニタ・タイプ	使用されるポート
Ping Monitor	標準設定では、ポート 7。
Port Monitor	任意のポートを監視。
Radius Monitor	現在、パスワード認証プロトコル (PAP) 認証をサポートするが、チャレンジ・ハンドシェイク認証プロトコル (CHAP) および Microsoft チャレンジ・ハンドシェイク認証プロトコル (MS-CHAP) はサポートしない。Radius サーバは、PAP リクエストを受け付けるように設定する必要がある。 標準設定では、ポート 1645。Radius 仕様の最近の変更では、このポートは 1812 に変更。モニタは変更可能。
Real Media Player Monitor	SiteScope ボックスの Real Media クライアントを使用。メディア・コンテンツがストリームされるポートを使用 (URL に基づく)。
Real Media Server Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。
SAP CCMS Monitor	SAP クライアント・ソフトウェア (SAP Front End) を使用して、特定の SAP トランザクションを実行。そのため、SAP と同じポートを使用。
Script Monitor	Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。 Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23 (telnet), または 513 (rlogin)。
Service Monitor	Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。 Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23 (telnet), または 513 (rlogin)。
SNMP Monitor	標準設定では、ポート 161。変更可能。
SNMP Trap Monitor	トラップの受信には、ポート 162 を使用。変更可能。
SunONE Web Server Monitor	対象 SunONE サーバの stats-xml ファイルの URL。ポートは変更可能。

モニタ・タイプ	使用されるポート
Sybase Monitor	Adaptive Server Enterprise Monitor Server に接続するには、SiteScope が稼動しているマシン上に Sybase Central クライアントが必要。ポート番号は、Sybase クライアントと同じ。
Tuxedo Monitor	Tuxedo ワークステーション・リスナの標準設定では、ポート 65535。変更可能。
URL Monitor	通常は、ポート 80。変更可能。
Web Server Monitor	Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。 Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23 (telnet), または 513 (rlogin)。
Web Service Monitor	変更可能。
WebLogic Application Server Monitor	BEA WebLogic アプリケーション・サーバ・モニタでは、Java JMX インタフェースを使用。ポートは変更可能。
WebSphere Application Server Monitor	IBM WebSphere 管理者のコンソールと同じポートを使用。
WebSphere Performance Servlet Monitor	WebSphere パフォーマンス・サーブレット。ポートは変更可能。



廃止された SiteScope モニタのリスト

SiteScope の最近のバージョンでは、多数のモニタが廃止されてサポートされなくなりました。次の表に、廃止されたモニタと、代わりに使用できるそれぞれのモニタ（存在する場合）を示します。

廃止されたモニタ	推奨される代替モニタ
Active Directory パフォーマンス	N/A
Asset	N/A
Astra Load Test	Web スクリプト
DB2	DB2 8.x および 9.x
Dynamo	N/A
iPlanet アプリケーション・サーバ	SunONE Web サーバ
IPlanet サーバ	SunONE Web サーバ
IPlanet Web サーバ	SunONE Web サーバ
ネットワーク	ネットワーク帯域幅
Quick Test Pro	Web スクリプト
RTSP	Real Media Player
SAP	SAP パフォーマンス
SAP Portal	SAP CCMS
SilverStream サーバ	N/A
WebLogic 5.x アプリケーション・サーバ	N/A

SiteScope をアップグレードする際に、End of Life Monitor Viewer を使用して、現在の設定に廃止されたモニタが含まれるかどうかを確認できます。End of Life Monitor Viewer の使用方法の詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) の「End of Life Monitor Viewer の使用」を参照してください。

廃止されたテクノロジー統合モニタのリストについては、461 ページ「廃止された統合モニタのリスト」を参照してください。

SiteScope モニタのユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ 新規モニタ・ページ (372 ページ)
- ▶ 共通モニタ設定 (375 ページ)
- ▶ [依存の対象モニタの選択] ダイアログ・ボックス (412 ページ)
- ▶ [テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス (413 ページ)
- ▶ [テンプレート ツリーにコピー] ダイアログ・ボックス (414 ページ)
- ▶ パーセンタイル範囲マッピング・テーブル (416 ページ)
- ▶ [ベースラインの計算] ダイアログ・ボックス (418 ページ)
- ▶ [順守レベルの微調整/限度の設定] ダイアログ・ボックス (422 ページ)
- ▶ [ベースラインのアクティブ化] ダイアログ・ボックス (424 ページ)
- ▶ [設定のバックアップ] ダイアログ・ボックス (428 ページ)
- ▶ [ベースライン モニタ測定値グラフ] ダイアログ・ボックス (429 ページ)
- ▶ [ベースラインの削除] ダイアログ・ボックス (432 ページ)
- ▶ ベースラインの状態レポート (433 ページ)

 新規モニタ・ページ

[新規モニタ ページ] では、モニタ・グループで新規モニタを定義できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、グループを右クリックして [新規作成] > [モニタ] を選択します。
重要な情報	▶ モニタは SiteScope グループでのみ作成できます。 ▶ モニタにコンテナ・レベルで依存する警告またはレポートがある場合、そのモニタは削除できません。依存関係があるモニタを削除するには、各依存関係の [警告ターゲット] と [レポートのターゲット] からモニタを削除してから、モニタを削除する必要があります。子レベルの依存関係があるモニタは削除できます。 ▶ [モニタの詳細] フィールドでは、
, <HR>, などの、テキスト・スタイルの最も一般的なタグとハイパーリンクを含む HTML タグ (HTML バージョン 3.2) をサポートしています。Javascript/iframes/frames またはその他の高度な機能はサポートしていません。 ▶ モニタの操作時に SiteScope API を使用することもできます。詳細については、36 ページ「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。
関連タスク	343 ページ「モニタのデプロイ方法」
関連情報	71 ページ「モニタ・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[クイック検索]	[クイック検索] ボックスにモニタ名を入力します。検索に役立つ次の設定を選択できます。 ▶ すべて : すべての列で一致を検索します。 ▶ モニタ . [モニタ] 列のみで一致を検索します。 ▶ カテゴリ . [カテゴリ] 列のみで一致を検索します。 ▶ 大文字小文字を区別する . 大文字小文字を区別して一致を検索します。 ▶ 大文字小文字を区別しない . 大文字小文字を区別しないで一致文字列を検索します。 ▶ ワイルドカードの使用 . 検索にワイルドカード文字を使用できます。たとえば、文字列を表すアスタリスクのワイルドカード (*), または 1 文字のみを表す疑問符のワイルドカード (?) を使用します。 ▶ 先頭から照合 . 検索テキストに一致するモニタ・カテゴリを先頭から検索します。 ▶ 完全に一致 . 検索テキストに完全に一致するモニタ・カテゴリを検索します。 ▶ 部分的に一致 . 名前の一部に検索テキストを含むモニタ・カテゴリを検索します。
[最近使用されたモニタ]	最近選択された 5 つのモニタを表示します。選択したモニタ・タイプの新規モニタを作成するには、リンクをクリックします。 注 : モニタを新たに選択すると、表示されるモニター一覧が変更される可能性があります。

UI 要素	説明
[使用可能なモニタ]	使用可能なモニタとカテゴリのリストが表示されます。 モニタを選択して、使用可能なモニタのリストから、またはカテゴリ別にデプロイできます。カテゴリ別に選択するには、[カテゴリ]の見出しの右側にある矢印をクリックして、次に詳細を示すリストからモニタ・カテゴリを選択します。 表示されたモニタまたはカテゴリのアルファベット順 (昇順または降順) を変更するには、[モニタ] または [カテゴリ] 列のヘッダにある矢印をクリックします。
[カテゴリ]	次のカテゴリのいずれかを選択してそのカテゴリのモニタをクリックすることで、モニタを追加できます。 ➤ すべて (標準設定) ➤ アプリケーション ➤ データベース ➤ 汎用 ➤ 統合 ➤ ネットワーク ➤ サーバ ➤ ストリーム ➤ Web トランザクション ➤ 仮想化

共通モニタ設定

共通モニタ設定を使用して、新規モニタを設定できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。 ▶ 新規モニタの場合：モニタ・ツリーで、グループを右クリックして [新規作成] > [モニタ] を選択し、[新規モニタ ページ] からモニタを選択します。 ▶ 既存のモニタの場合：モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、[プロパティ] タブをクリックします。
関連タスク	343 ページ「モニタのデプロイ方法」
関連情報	71 ページ「モニタ・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<設定表示枠>	モニタの [プロパティ] タブにある次の設定表示枠は、すべてのモニタで共通です。特定の SiteScope モニタの設定の詳細については、そのモニタ・タイプのユーザ・インタフェース・ページを参照してください。 ▶ 377 ページ「一般設定」 ▶ 379 ページ「モニタの実行設定」 ▶ 381 ページ「依存関係」 ▶ 384 ページ「しきい値設定」 ▶ 392 ページ「HP 統合設定」 ▶ 404 ページ「モニタの有効化/無効化」 ▶ 407 ページ「関連する警告の有効化/無効化」 ▶ 409 ページ「タグの検索/フィルタ」 ▶ 410 ページ「ベースライン設定」 注： [モニタを CI にリンクする] 設定表示枠は SiteScope 11.00 で削除され、その機能は [HP 統合設定] 表示枠のカスタム・トポロジのレポート機能に置き換わりました。

UI 要素	説明
[検証および保存]	設定を保存する前に、モニタ対象のローカルとリモートサーバのモニタ設定が正しいかを検証します。SiteScope がリモート・サーバへの接続に失敗した場合、または設定に無効なプロパティがある場合、検証は失敗してエラー・メッセージが表示されます。 注： SiteScope によって接続が確立されてリモート・サーバで設定が検証されるため、検証と保存を実行する場合は、単に設定を保存する場合よりもパフォーマンスが低速になります。このパフォーマンスの問題のため、[テンプレート変更適用]、[グローバル検索と置換]などのバルク操作では保存オプションのみを使用します。
[保存]	設定のローカル検証を実行して、設定を保存します（リモート・サーバのモニタ設定が正しいかどうかは検証しません）。 注： SiteScope を使用して接続を確立してリモート・サーバで設定を検証する必要がないため、検証と設定の保存を実行する場合よりもパフォーマンスが高速になります。

🔑 一般設定

「一般設定」表示枠では、モニタ・インスタンスの名前と詳細を作成できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、[プロパティ] タブをクリックして「 一般設定 」を選択します。
重要な情報	▶ [モニタの詳細] フィールドに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コードを修正する修正アクションが行われます（たとえば、タグの不一致や、複数行にわたるため切り捨てられたコードなど）。悪意のある HTML コードや Javascript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。 ▶ すべての表示枠で共通のボタンについては、375 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。
関連タスク	343 ページ「モニタのデプロイ方法」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[名前]	監視の対象となる要素またはシステムを示す名前。ビュー・フィルタの作成とカテゴリの割り当てをより効果的にするため、すべてのモニタに有益な命名規則を使用します。 例 : <hostname:resource_type> または <business_unit resource_name monitored_element> 標準設定値 : 監視の対象となるホスト、システム、URL に基づいた標準設定の名前、またはモニタ・タイプに対して定義された標準設定の名前が SiteScope によって作成されます。

UI 要素	説明
[モニタの詳細]	モニタを説明する追加情報。テキスト・スタイルの一般的な HTML タグ (
, <HR>, など) を含めることができます。詳細は, SiteScope ダッシュボードでモニタのプロパティを表示または編集するときに表示されます。 また, HTML タグを含めることにより, SiteScope ダッシュボードから URL へのアクセスも行えます。ハイパーリンクを追加するには, URL を入力します。例: My Link。この URL は, SiteScope ダッシュボードで選択したモニタの 【詳細】 フィールドに表示されます。 注: このフィールドでは, Javascript, iframes, frames やその他の高度な機能はサポートされていません。このボックスに入力した HTML コードは, 有効性とセキュリティがチェックされ, コード (複数行にわたるために切り捨てられた不一致のタグやコードなど) を修正する修正アクションが実行されます 悪意のある HTML コードや Javascript が検出されると, フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。 ➤ タグ: script, object, param, frame, iframe。 ➤ on で始まる属性を含むタグは拒否される。例: onhover。 ➤ 値に javascript が指定された属性。

UI 要素	説明
[レポートの詳細]	モニタの動作をわかりやすくするための、このモニタの任意の詳細です。この詳細は、管理レポートの各棒グラフに表示されます。 例：ネットワーク・トラフィックまたはメイン・サーバ応答時間。 注：このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コードを修正する修正アクションが行われます（たとえば、タグの不一致や、複数行にわたるため切り捨てられたコードなど）。悪意のある HTML コードや Javascript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。 ▶ タグ : script, object, param, frame, iframe。 ▶ on で始まる属性を含むタグは拒否される。例 : onhover。 ▶ 値に javascript が指定された属性。

モニタの実行設定

[モニタの実行設定] 表示枠では、モニタの実行を設定できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、[プロパティ] タブをクリックして [モニタの実行設定] を選択します。
重要な情報	すべての表示枠で共通のボタンについては、375 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。
関連タスク	343 ページ「モニタのデプロイ方法」
関連情報	750 ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[頻度]	SiteScope によってモニタ・インスタンスに定義されたアクションの実行が試みられる頻度。各モニタの実行でモニタの状態が更新されます。ドロップダウン・リストを使用して、秒、分、時間、日のいずれかの増分を指定します。 標準設定値 : 10 分 最小値 : 15 秒 注 : テンプレートでこの設定を指定する場合、変数の値は秒単位でのみ設定できます。
[エラー時頻度]	エラー条件をレポートしたモニタの監視間隔。 例 : 通常は 10 分間隔でモニタを実行し、エラーが検出された場合は 2 分間隔で実行するように指定できます。モニタの状態がエラーでなくなると、モニタは [頻度] 設定で指定した実行間隔に戻ります。 注 : ▶ モニタの実行頻度を高くすると、モニタで生成される警告数に影響を与えます。 ▶ テンプレートでこの設定を指定する場合、変数の値は秒単位でのみ設定できます。
[エラーの検証]	エラーが検出された場合、モニタを自動的に再実行します。 注 : このオプションは小規模な監視環境のみで使用することをお勧めします。複数のモニタが同時にエラーを検証するようにスケジュールされている場合、監視が大幅に遅くなる可能性があります。 エラーの検証によるモニタの実行で返された状態が、エラーを検出した元のスケジュールの実行の状態を上書きします。検証の実行によるデータが最初のエラー状態と異なる場合、重要なパフォーマンス・データが失われる可能性があります。

UI 要素	説明
[モニタのスケジュール]	特定の日または固定スケジュールでのみモニタを実行する場合の範囲スケジュール。[スケジュール プリファレンス] で作成された範囲スケジュールがドロップダウン・リストに表示されます。モニタのスケジュールの作成の詳細については、750 ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」を参照してください。 標準設定値： 毎日、全日 注： [しきい値の設定] でしきい値のスケジュールを選択した場合、少なくとも 1 つのしきい値のスケジュールがモニタの実行スケジュールと重なる必要があります (モニタの実行スケジュールの少なくとも 1 分がしきい値のスケジュールのいずれかに含まれている必要があります)。
[更新時に実行結果を表示]	モニタの設定が変更されるたびに、モニタが実行されます。モニタの実行結果がポップアップ・ダイアログ・ボックスに表示されます。 注： 更新された実行結果は、モニタの適切な [ダッシュボード] ビューに常に表示されます。

依存関係

[依存関係] 表示枠では、モニタの実行を別のモニタの状態に依存させる依存関係を作成できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、[プロパティ] タブをクリックして [依存関係] を選択します。
重要な情報	すべての表示枠で共通のボタンについては、375 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。
関連タスク	343 ページ「モニタのデプロイ方法」
関連情報	325 ページ「グループの依存関係の監視」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[依存]	[依存]  をクリックして [依存の対象モニタの選択] ダイアログ・ボックスを開き、モニタの実行を依存させるモニタを選択します。[依存の対象モニタの選択] ダイアログ・ボックスの詳細については、412 ページ「[依存の対象モニタの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 1 つのシステムの異なる側面を監視している複数のモニタからの過剰な警告を避ける場合に、このオプションを使用します。 例：システムの基本的な可用性をチェックするシステム・モニタを作成して、システムのより詳細なテストを実行するほかのモニタを作成します。基本的な可用性をチェックするモニタの状態に依存するように、詳細テスト・モニタを設定します。 システム・モニタによって対象システムが使用不能になったことが検出されると、依存関係によってほかのモニタが自動的に無効になります。また、依存するモニタによって生成される警告も無効になります。 標準設定値：モニタ・インスタンスに設定された依存関係はありません。

UI 要素	説明
[依存条件]	[依存] 設定を使用してモニタを別のモニタの状態に依存させた場合、このオプションを使用して、現在のモニタが通常どおりに実行されるように [依存] のモニタの状態の条件を選択します。 次の状態カテゴリがあります。 ➤ 正常 ➤ エラー ➤ 使用可能 ➤ 使用不能 設定対象のモニタは、[依存] ボックスで選択したモニタがこのボックスで選択した条件をレポートしている場合、正常に実行されます。 例：[正常] を選択して、[依存] ボックスで選択したモニタが「正常」の状態をレポートする場合にのみこのモニタが有効になるようにします。[依存] ボックスで選択したモニタが「正常」以外のカテゴリまたは条件をレポートした場合、現在のモニタは自動的に無効になります。モニタがエラーを検出した場合に依存するモニタを有効にすることもできます。 標準設定値： 正常



しきい値設定

各モニタ・インスタンスのレポートされる状態を決定する条件を設定するために使用します。状態の結果は、特定の期間中に対象システムのモニタ・アクションによって返された結果または測定値に基づきます。

各モニタ・インスタンスの状態のしきい値条件は、「**エラー条件**」, 「**警告条件**」, 「**良好条件**」の状態の条件に設定できます。ベースラインを使用してモニタしきい値を設定することもできます。詳細については、333 ページ「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」を参照してください。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、[プロパティ] タブをクリックして [しきい値の設定] を選択します。
重要な情報	▶ モニタ・インスタンスごとの各状態の条件に、複数の状態のしきい値条件を適用できます。1 つのモニタ・インスタンスに、「エラー」状態を決定する 1 つ以上の条件、「警告」状態を決定する 1 つ以上の条件、「正常」状態を示す 1 つ以上の条件を設定できます。ほとんどのモニタ・タイプには、3 つの状態の条件のそれぞれについて標準設定が 1 つ含まれています。 ▶ ベースラインしきい値を設定する場合、ベースラインの計算中とベースラインがアクティブになった後に、特定のしきい値条件のみ変更できます。許可されているしきい値の変更の詳細については、391 ページ「しきい値の設定の変更」を参照してください。 ▶ [グローバル検索と置換] で作業している場合、しきい値の設定の置換を選択すると、[カテゴリの上書き] オプションが表示されます。このオプションを選択すると、選択したモニタ・インスタンスのすべてのしきい値の設定が、置換操作に入力した設定で上書きされます。このオプションがクリアされている場合にしきい値の設定の置換を選択すると、入力した設定がモニタ・インスタンスの既存のしきい値の設定に追加されます。 ▶ すべての表示枠で共通のボタンについては、375 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。

関連タスク	➤ 343 ページ「モニタのデプロイ方法」 ➤ 347 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	➤ 328 ページ「状態のしきい値の設定」 ➤ 333 ページ「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
	新規: 「エラー」, 「警告」, 「正常」状態を決定する追加しきい値を作成します。各しきい値に対して測定値と演算子を選択し, 測定値の値を入力します。 標準設定では, モニタを最初に設定するときに「エラー」状態の 2 つのしきい値と, 「警告」と「正常」状態の 1 つのしきい値が表示されます。
	削除: 選択したしきい値を削除します。

UI 要素	説明
[使用不能な場合]	モニタが使用不能な場合、次のオプションから状態を割り当てます。 ➤ モニタの状態をしきい値に応じて設定。 しきい値に応じてモニタの新しい状態を取得します。 ➤ モニタの状態を「正常」に設定： モニタが使用不能な場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「正常」に設定されます ➤ モニタの状態を「警告」に設定： モニタが使用不能な場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「警告」に設定されます ➤ モニタの状態を「エラー」に設定： モニタが使用不能な場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「エラー」に設定されます 注： モニタ・インスタンスには「使用不能」の状態および「正常」、「警告」、または「エラー」の状態を設定できます。可用性、状態、または可用性と状態の両方（警告の設定により異なる）に応じて警告が起動されます。詳細については、1251 ページ「SiteScope 警告の概要」を参照してください。
[標準設定の状態]	モニタ・インスタンスのしきい値条件を満たさない場合のモニタの状態（「正常」、「警告」、または「エラー」）。 標準設定値： 正常

UI 要素	説明
[内部エラーの場合]	設定または内部エラーが発生した場合、次のオプションからモニタの状態を割り当てます。 ▶ モニタの状態をしきい値に応じて設定。 設定または内部エラーが発生した場合、モニタの状態が現在のしきい値に応じて設定されます（標準設定）。エラーがいつ発生したか（およびしきい値が古いデータ、更新されたデータ、またはその両方に基づいているかどうか）を確認する方法はないため、しきい値に依存すると信頼性が低くなります。たとえば、モニタが実際には実行されなかった場合でも現在の状態を維持し、しきい値が不適切に定義された場合に状態が変更され、リモートが実際には接続されていない場合に使用不能として誤った警報を誘発する可能性があります。 ▶ モニタの状態を「エラー」に設定： 設定または内部エラーが発生した場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「エラー」に設定されます。 ▶ モニタの状態を「警告」に設定： 設定または内部エラーが発生した場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「警告」に設定されます。 ▶ モニタの状態を「正常」に設定： 設定または内部エラーが発生した場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「正常」に設定されます。 ▶ モニタを利用不可として扱う： 設定または内部エラーが発生した場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「使用不能」に設定されます。
[Add Default Thresholds]	しきい値の標準設定を適切な状態カテゴリのモニタ・インスタンスに追加します。標準設定のしきい値は、[(default)] ラベルで示されます。標準設定のしきい値は、[条件] フィールドから条件を選択（標準設定の条件を選択できます）した後でのみ編集できます。標準設定のしきい値の条件が変更されると、[(default)] ラベルは削除されます。

UI 要素	説明
[Remove Default Thresholds]	モニタ・インスタンスからしきい値の標準設定 ([(default)] ラベルで示される) を削除します。追加した後に変更した標準設定は削除されません。
[エラー条件]	「 エラー 」状態をレポートするモニタ・インスタンスの条件。
[条件]	モニタ・インスタンスの状態を決定する測定値パラメータ。測定値のリストは, 設定しているモニタのタイプに基づいて動的に更新されます。 標準設定値 : 多くのモニタ・タイプに存在し, モニタ・タイプごとに異なる標準設定の測定値。多くの標準設定の測定値の場合, 対応する編集不可の演算子と値の標準設定ボックスがあります。
[オペレータ]	モニタ・インスタンスの状態を決定する測定値の演算子。次の演算子を利用できます。 ➤ >= : より大きいか等しい ➤ > : より大きい ➤ == : 等しい ➤ != : 等しくない ➤ <= : より小さいか等しい ➤ < : より小さい ➤ contains : 入力した値を含む ➤ !contains : 入力した値を含まない
[値]	測定値パラメータに適用可能な値。 注 : ➤ モニタにアクティブなベースラインがある場合, その測定値は編集不可でパーセンタイル・テーブル  ボタンが表示されます。ベースラインしきい値を変更するには, ボタンをクリックしてパーセンタイル・テーブルで現在のパーセンタイル値を変更します。ユーザ・インタフェースの詳細については, 416 ページ「パーセンタイル範囲マッピング・テーブル」を参照してください。 ➤ ベースラインしきい値条件の測定値, 演算子, スケジュールは変更できません。

UI 要素	説明
[スケジュール]	しきい値に対するモニタの実行結果を確認する時期を定義する場合、モニタ・インスタンスの状態を決定する範囲スケジュール。たとえば、特定の日またはピーク時間のみでしきい値に対するモニタの実行結果を確認する場合に役立ちます。[スケジュール プリファレンス] で作成された範囲スケジュールがドロップダウン・リストに表示されます。モニタのスケジュールの作成の詳細については、750 ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」を参照してください。 標準設定値： 毎日、全日 注： しきい値のスケジュールを選択した場合、少なくとも 1 つのしきい値のスケジュールが [モニタの実行設定] の [モニタのスケジュール] と重なる必要があります (モニタの実行スケジュールの少なくとも 1 分がしきい値のスケジュールのいずれかに含まれている必要があります)。

UI 要素	説明
[Indicator State and Severity]	インジケータの状態（「ボトルネック」など）と、そのインジケータ状態に対応する重大度（「致命的」など）。 各インジケータは、複数の状態を持つことができます。たとえば、CPU 負荷を測定する場合、インジケータ状態は「ボトルネック」や「ビジー」になる可能性があります。一方、メモリ負荷を測定する場合は、インジケータ状態が「ページング」や「メモリ不足」になる可能性があります。 インジケータ状態と重大度レベルは、その測定値に関連付けられているインジケータの状態に存在する使用可能な重大度のうちの最も近い重大度に従って測定値状態にマップされます。インジケータ状態と重大度値は、[HP 統合設定] 表示枠で異なるインジケータ・マッピングが選択された場合に更新されます。 インジケータ・マッピングの詳細については、331 ページ「インジケータに割り当てられた SiteScope 測定値」を参照してください。 注： ▶ [Indicator State and Severity] カラムを表示するためには、SiteScope を BSM 9.00 以降に接続する必要があります。 ▶ インジケータ状態と重大度値は、SiteScope レポートには表示されません。 ▶ [Indicator State and Severity] ボックスが空の場合、自動的に割り当てられる [always (default)] の場合を除き、測定値は「サービス状況」で色付けされません。 ▶ インジケータ状態と重大度の関連付けは、ローカル SiteScope サーバでは変更できません。
[警告条件]	「警告」状態をレポートするモニタ・インスタンスの条件。各しきい値に対して測定値と演算子を選択し、測定値の値を入力します。
[良好条件]	「正常」状態をレポートするモニタ・インスタンスの条件。各しきい値に対して測定値と演算子を選択し、測定値の値を入力します。

しきい値の設定の変更

モニタ・インスタンスのベースラインの状態に応じて、しきい値条件を変更できます。

モニタのベースラインの状態	しきい値条件の変更	しきい値条件の追加 / 削除
ベースライン未処理	任意のしきい値の条件を変更できます。	可能
計算プロセス/アクティビ化プロセス中	静的しきい値の測定値のみ変更できます。 たとえば、エラー条件 CPU >= 70 毎日、全日の場合、70 の値のみを別の値に変更できます。	不可
ベースライン処理済み	▶ 静的しきい値の条件を変更できます。 ▶ ベースラインしきい値のみのパーセンタイル値を変更できます。	静的しきい値のみ可能



HP 統合設定

[HP 統合設定] 表示枠では、SiteScope と統合されたさまざまなアプリケーションにモニタが転送するデータを制御できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、[プロパティ] タブをクリックして [HP 統合設定] を選択します。
重要な情報	▶ すべての表示枠で共通のボタンについては 375 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。 ▶ [HP 統合設定] パネルが表示されるのは、SiteScope が BSM と統合されているか、あるいは SiteScope が HP Operations Manager (HPOM) と統合されてイベントまたは測定値の統合が有効に設定されている場合だけです。 ▶ カスタム・トポロジを使用できるのは、SiteScope がバージョン 9.00 以降の BSM に接続されている場合だけです。 ▶ インジケータ設定が行えるのは、SiteScope がバージョン 9.00 以降の BSM または HPOM に接続されている場合だけです。 ▶ HP Operations Manager の統合設定が行えるのは、OM 統合が設定され、SiteScope が HPOM に接続されている場合だけです。OM 統合の設定の詳細については、694 ページ「[HP Operations Manager統合] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
関連タスク	▶ 343 ページ「モニタのデプロイ方法」 ▶ 140 ページ「IT リソースのパフォーマンスに関するデータの収集方法」
関連情報	659 ページ「統合プリファレンス」

BSM 統合データとトポロジ設定

このセクションでは、モニタ・インスタンスの BSM ログ記録オプションとトポロジ・レポート設定を選択できます。

重要な情報	▶ BSM ログ記録オプションを使用できるのは、BSM 統合が有効に設定されている場合だけです。 ▶ [状態の変更をレポート] および [Enable reporting monitor status (no metrics)] オプションは、BSM 9.00 ではサポートされません。これは、BSM でイベント管理が導入されたためです。 ▶ BSM ログ記録の選択は、このモニタの BSM へのレポートに関連するデータの量と、BSM データベースでこのデータに使用できる領域に基づいて行う必要があります。
関連タスク	▶ 343 ページ「モニタのデプロイ方法」 ▶ 140 ページ「IT リソースのパフォーマンスに関するデータの収集方法」 ▶ 145 ページ「トポロジ・レポートの設定方法」
関連情報	659 ページ「統合プリファレンス」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
BSM ログ記録オプション	
[Disable reporting metrics to BSM]	このモニタの状態情報または測定値が BSM に転送されることを防ぐか、BSM へのモニタのレポートを一時的に無効にします。
[Enable reporting monitor status and metrics]	モニタを実行するたびにすべての監視データを BSM に送信します。このオプションは最大のデータ転送読み込みを可能にします。 標準設定値 : 選択済み
[Enable reporting monitor status (no metrics)]	モニタを実行するたびに、モニタ・カテゴリ（「エラー」、「警告」、「正常」）、状態の文字列、およびそのほかの基本的なデータのみを送信します。特定のパフォーマンス・カウンタでの情報は含まれません。

UI 要素	説明
[Enable reporting monitor status and metrics with thresholds]	モニタ・カテゴリ（「エラー」、「警告」、「正常」）、状態の文字列、およびしきい値（「エラー条件」、「警告条件」、「良好条件」など）が設定された測定値カウンタのみのパフォーマンス・カウンタ・データを送信します。データはモニタを実行するたびに送信されます。
[状態の変更をレポート]	モニタが状態の変更をレポートするときのみ、モニタ・カテゴリ（「エラー」、「警告」、「正常」）、状態の文字列、およびそのほかの基本的なデータのみを送信します。特定のパフォーマンス・カウンタでの情報は含まれません。このオプションは最小のデータ転送読み込みを可能にします。

UI 要素	説明
[トポロジ設定]	
[レポート トポロジ]	BSM の ODB にトポロジ・データがレポートされます。SiteScope から転送されるデータは、モニタ・タイプによって異なります。このオプションを使用すると、SiteScope で次のことが行えます。 ▶ サポートされる環境のグループからアプリケーションを監視するモニタのトポロジを検出し、特定の CI データを転送します。サポートされる環境の詳細およびリストについては、135 ページ「BSM への検出トポロジのレポート」を参照してください。 ▶ ホストを監視するモニタのノード CI データをレポートします (SiteScope は各監視対象ホストの Computer CI タイプを送信する)。このオプションが選択されている場合、モニタでは BSM の ODB に CI としてホストを含めるトポロジが作成されます。 ▶ ユーザ定義の CI タイプとキー属性値に基づいて CI データをレポートします。 クリアすると、モニタはトポロジを BSM にレポートしません。 SiteScope から ODB にデータをレポートする方法の詳細については、126 ページ「SiteScope データと BSM の構成アイテムとの統合」を参照してください。 注： SiteScope が BSM に接続された状態で (イベント管理ファウンデーション・ライセンスを保有しており)、イベント送信が有効になっていると、ホストはオペレーション管理経由で BSM にレポートされます。 標準設定値： ▶ サポートされる環境のモニタ、および標準設定で CI タイプが定義されるモニタの場合に選択されています。 ▶ 標準設定でトポロジが定義されていないモニタの場合には選択されていません。これらのモニタのリストについては、148 ページ「標準設定で CI タイプが定義されていないモニタ」を参照してください。

UI 要素	説明
[CI タイプ]	BSM の ODB にデータをレポートするために使用される, モニタのトポロジ。このモニタ・インスタンスと BSM の ODB 内の既存の論理構成アイテム・タイプ (CIT) をリンクできます。このリンク (関係) により, モニタでは KPI 状態をリンク先の CI に渡せます。 CI タイプは次のことを示します。 ▶ Default (<CI type>) : モニタの標準設定の CI タイプ (ほとんどのモニタでは, 標準設定の CI タイプは Computer)。標準設定の CI タイプが Computer でないモニタのリストについては, 149 ページ「コンピュータ以外の標準設定の CI タイプがあるモニタ」を参照してください。 - CI タイプには, BusinessApplication, BusinessService, DB2, InfrastructureService, JBoss AS, Node, Oracle, Oracle iAS, SQL Database, Sybase, Unix, WebLogic AS, WebSphere AS, Windows があります。 ▶ Default (Multiple) : モニタに複数の CI があります (これは CI タイプが測定値ごとに存在する場合)。これらのモニタの CI タイプは固定されていて変更できません。これらのモニタのリストについては, 150 ページ「測定値ごとの CI をレポートするモニタ」を参照してください。 ▶ None : モニタ・インスタンスが CI タイプにリンクしていません。これらのモニタのリストについては, 148 ページ「標準設定で CI タイプが定義されていないモニタ」を参照してください。ODB ビューから CI タイプを選択し, このモニタ・インスタンスにリンクできます。ビューの選択およびビューを使った作業の詳細については, HP Business Service Management 文書ライブラリにある『Modeling』(英語版) ガイドの「Working with the CI Selector」を参照してください。 注 : ▶ この設定がアクティブになるのは, [レポート トポロジ] が選択されている場合だけです。 ▶ CI タイプを選択すると, インジケータ設定テーブルがフィルタされ, 選択した CI タイプにのみ存在するマッピングが表示されます。

UI 要素	説明
<CI タイプのキー属性>	モニタ・インスタンスに選択した CI タイプに従って、CI タイプのキー属性が表示されます。選択した CI タイプのキー属性値を入力します。 ▶ サーバ: 選択した CI のコンテナ CI。この属性は、DB2, JBoss AS, Node, Oracle, Oracle iAS, SQL, Sybase, Unix, WebLogic AS, WebSphere AS, および Windows CI タイプに必要です。 ▶ 名前。 ▶ CI の名前 (BusinessApplication, BusinessService, Computer, DB2, InfrastructureService, JBoss AS, Oracle, Oracle iAS, SQL, Sybase, WebLogic AS, および WebSphere AS CI タイプ用)。 ▶ 組織タイプ: 組織内のレベルを識別するために使用される識別子。この属性は、BusinessApplication, BusinessService, および InfrastructureService CI タイプに必要です。 ▶ 組織名: 組織の名前。この属性は、BusinessApplication, BusinessService, および InfrastructureService CI タイプに必要です。 注: ▶ この設定がアクティブになるのは、[レポート トポロジ] が選択されている場合だけです。 ▶ CI キー属性は、CI タイプが測定値ごとのモニタの場合は表示されません。これらのモニタのリストについては、150 ページ「測定値ごとの CI をレポートするモニタ」を参照してください。

インジケータ設定

このセクションには、SiteScope モニタ・タイプの測定値と、その測定値の割り当て先であるヘルス・インジケータ (HI) およびイベント・タイプ・インジケータ (ETI) が表示されます。インジケータは、モニタのトポロジが BSM の ODB にレポートされるときに、構成アイテム (CI) の状況の詳細ビューを提供します。インジケータ設定テーブルはフィルタされ、選択した CI タイプのみに存在するモニタ・インスタンスのマッピングが表示されます。

重要な情報	▶ インジケータ設定が行えるのは、HP Operations Manager イベント統合または BSM 統合が有効になっている場合だけです。 ▶ すべてのモニタに標準設定の測定値とインジケータのマッピングがあるわけではありません。これらのモニタのリストについては、148 ページ「標準設定で CI タイプが定義されていないモニタ」を参照してください。 ▶ CI タイプが測定値ごとの場合、インジケータ設定の追加と削除は行えません (Default (Multiple))。これらのモニタのリストについては、150 ページ「測定値ごとの CI をレポートするモニタ」を参照してください。 ▶ SiteScope 内のインジケータ割り当てテーブルには、BSM 内のインジケータ割り当てリポジトリには存在しない割り当てが含まれることがあります。これは BSM 内で不正に定義されたマッピングは、SiteScope にダウンロードされる際に検証されないためです (一方 BSM では検証される。したがって表示はされない)。 ▶ CI およびインジケータ に関する十分な知識がある上級ユーザ以外は、インジケータのマッピングの編集や、測定値へのマッピングの追加は行わないでください。
関連タスク	▶ 343 ページ「モニタのデプロイ方法」 ▶ 145 ページ「トポロジ・レポートの設定方法」
関連情報	132 ページ「SiteScope 測定値のインジケータへの割り当て」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

	新規: モニタ・タイプに基づいて、モニタ・インスタンスに測定値とインジケータのマッピングを追加できます。
	削除: 選択されている測定値とインジケータのマッピングを削除します。

	標準設定にセット: モニタ・タイプの測定値とインジケータ・マッピングを、現在のバージョンの SiteScope に含まれている標準設定のマッピングにリセットします。インジケータ・マッピングは、BSM のシステム可用性管理 (SAM) の中央リポジトリに格納されます。SiteScope では、システム可用性管理でマッピングが変更されていないかを 5 分ごとにチェックし、変更されている場合は最新のマッピングをダウンロードします。 ローカル SiteScope サーバ上でインジケータ・マッピングが変更された場合、これらのマッピングは、トポロジが次回 BSM にレポートされるときに、中央管理されているマッピングによって上書きされません。 中央管理されているマッピングの変更の詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリにある『システム可用性管理の使用』(PDF) の「インジケータ割り当ての設定」を参照してください。
	下へ移動: 選択したインジケータ・マッピングをリスト内で下方向へ移動することにより、インジケータ・マッピングの並べ替え順序を変更できます。マッピングの順序をローカルに変更する場合は、システム可用性管理内のインジケータ・リポジトリからマッピング変更がダウンロードされる際にローカルのマッピング順序が上書きされることはありません。
	上へ移動: 選択したインジケータ・マッピングをリスト内で上方向へ移動することにより、インジケータ・マッピングの並べ替え順序を変更できます。マッピングの順序をローカルに変更する場合は、システム可用性管理内のインジケータ・リポジトリからマッピング変更がダウンロードされる際にローカルのマッピング順序が上書きされることはありません。
測定値パターン	測定値名に基づいて正規表現パターンを表示します。既存のマッピングを変更、または新規作成できます。同じ正規表現に複数の CI タイプが存在する場合は、別々の行にそれぞれが表示されます。正規表現の使用の詳細については、275 ページ「正規表現の使用」を参照してください。

CI タイプ	モニタ・インスタンスに選択した CI タイプを表示します (インジケータ設定テーブルがフィルタされ, 選択した CI タイプにのみ存在するマッピングが表示される)。 注: このフィールドは編集できません。
インジケータ	測定値のインジケータ・マッピングを表示します。ドロップダウン・リスト内で, 状況インジケータは区分線の上に表示され, イベント・タイプ・インジケータは区分線の下に表示されます。

HP Operations Manager 統合設定

このセクションでは, HP Operations Agent にイベントを送信し, 測定値をレポートするように SiteScope を設定できます。モニタ・インスタンスのイベントの送信に使用するイベント・プリファレンス・マッピングも選択できます。

重要な情報	これらの設定が行えるのは, HP Operations Agent がインストールされて Operations Manager サーバに接続されており, かつイベント/測定値統合が [HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで有効に設定されている場合だけです。
関連タスク	▶ 343 ページ 「モニタのデプロイ方法」 ▶ 171 ページ 「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」 ▶ 179 ページ 「SiteScope を使用して HP Operations Agent に測定値をレポートする方法」 ▶ 737 ページ 「共通イベント・マッピングの設定方法」
関連情報	▶ 659 ページ 「統合プリファレンス」 ▶ 735 ページ 「共通イベント・マッピング」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

Report metrics to HP Operations agent	HPOM および BSM レポート製品がデータの収集元として使用できる HP Operations Agent に対して、SiteScope からモニタ・インスタンスの測定値をレポートできます。 注：モニタ測定値がエージェントに送信されるのは、[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで測定値統合が有効に設定されている場合だけです。ユーザ・インタフェースの詳細については、697 ページ「HP Operations Manager 測定値統合」を参照してください。 標準設定値：測定値統合が有効になっている場合、選択済み（有効でない場合、この設定は行えません）。
イベント送信	モニタ・インスタンスのカウント/測定値の状態（正常、警告、エラー、使用不能）に変更があった場合に Operations Manager へのイベント送信を有効にします。状態の変更は、モニタのしきい値の設定で指定されているカウントまたは測定値にのみ適用されます。 注：この設定が行えるのは、HP Operations Agent がインストールされて Operations Manager サーバに接続されており、かつイベント統合が [HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで有効に設定されている場合だけです。ユーザ・インタフェースの詳細については 697 ページ「共通イベント設定」を参照してください。 標準設定値：イベント統合が有効になっている場合、選択済み（有効でない場合、この設定は行えません）。

イベント マッピング	モニタ・インスタンスのイベントの送信に使用するイベント・マッピング・テンプレート。このテンプレートには、SiteScope 実行時データとイベント送信に使用される属性値のマッピングが含まれます。 必要なイベント・マッピング・テンプレートを選択するか、標準設定のマッピングを使用します。[新規] または [編集] をクリックして [共通イベント マッピング] ダイアログ・ボックスを開き、新しいイベント・プリファレンスを設定するか、既存のイベント・プリファレンスを変更します。ユーザ・インタフェースの詳細については、741 ページ「[新規 イベント・マッピング] / [イベント・マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 注： ▶ この設定が行えるのは、HP Operations Agent がインストールされて Operations Manager サーバに接続されており、かつイベント統合が [HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで有効に設定されている場合だけです。ユーザ・インタフェースの詳細については、697 ページ「共通イベント設定」を参照してください。 ▶ ここでイベント・マッピングを編集すると、このテンプレートを使用しているすべてのモニタのイベント・パターンが変更されます。特定のモニタによって別の属性をレポートするためには、新しいイベント・マッピングを作成することをお勧めします。
最初のイベントを手動で送信	BSM に接続されている SiteScope で新しいモニタを作成すると、BSM にトポロジがレポートされる前に最初のイベントが起動される可能性があります。この際、このイベントはサービス状況 パースペクティブから消失します（オペレーション管理 には引き続き表示されている）。このオプションは、次のイベントが送信されるのを待機するのを避ける場合に選択してください。モニタの測定値がその状態変更条件を満たしていても、イベントは次のモニタ実行時に再送信されます。 標準設定値： 選択されていない 注： ▶ このオプションは、モニタの実行後、自動的に無効になります。 ▶ この設定は、[グローバル検索と置換] を使用してグローバルに行えます。

BSM サービス状況データ・プリファレンス

このセクションでは、SiteScope の測定値またはイベントを BSM サービス状況にレポートするようにプリファレンスを設定できます。

重要な情報	▶ この設定が行えるのは、HP Operations Agent がインストールされて Operations Manager サーバに接続されており、かつイベント/測定値統合が [HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで有効に設定されている場合だけです。 ▶ この設定が該当するのは、[BSM 統合データとトポロジ設定] で [Report metrics to HP Operations agent] と [イベント送信] の両方が選択されている場合だけです。 ▶ [イベント送信] だけが選択されている場合、プリファレンスは [イベント] に設定されます。 ▶ [Report metrics to HP Operations agent] だけが選択されている場合、プリファレンスは [Metrics] に設定されます。 ▶ 両方が選択されている場合、[Metrics] が標準設定のプリファレンスとなります。
関連タスク	▶ 343 ページ「モニタのデプロイ方法」 ▶ 145 ページ「トポロジ・レポートの設定方法」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

Use in BSM Service Health	SiteScope でモニタ測定値のインジケータとモニタ・イベントのインジケータのどちらを BSM に送信するかを選択できます（両方を送信すると サービス状況に影響を与えるため）。 [Metrics] を選択すると、測定値データのインジケータだけが BSM に送信されます（SiteScope は状態変更イベントのインジケータを BSM に送信しない）。 [イベント] を選択すると、状態変更イベントのインジケータだけが BSM に送信されます。 標準設定値 : Metrics



モニタの有効化/無効化

[モニタの有効化/無効化] 表示枠では、選択したモニタの状態（有効/無効）を設定できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で [プロパティ] タブをクリックして [モニタの有効化/無効化] を選択します。
重要な情報	▶ [モニタの詳細] フィールドに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コードを修正する修正アクションが行われます（たとえば、タグの不一致や、複数行にわたるため切り捨てられたコードなど）。悪意のある HTML コードや Javascript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。 ▶ モニタのダウンタイム・テーブルは、SiteScope が BSM に接続されていて、選択したモニタが現在ダウンタイム中の CI の影響を受ける場合にのみ表示されます。詳細については、138 ページ「CI のダウンタイム」を参照してください。 ▶ すべての表示枠で共通のボタンについては、375 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。
関連タスク	343 ページ「モニタのデプロイ方法」
関連情報	1163 ページ「[グループ内のモニタの有効化/無効化] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[モニタを有効化]	モニタがすでに無効になっている場合、モニタを有効にします。 標準設定値 ：選択済み
[モニタを無効化]	モニタを無効にします。モニタが無効になっている場合、SiteScope ではモニタの [頻度] 設定に基づいてモニタの実行が引き続きスケジュールされますが、モニタ・アクションは実行されません。SiteScope では、モニタの実行がスケジュールされたときに監視データ・ログ・エントリが記録されますが、測定値データの代わりにモニタの状態が無効とレポートされます。
[次の時間設定でモニタを無効化 : <期間>]	モニタを無効にしておく期間。[秒], [分], [時間], または [日] を選択して、適用する無効化期間を定義します。
[1 回限りのスケジュールに基づいてモニタを無効化 : <時間> ~ <時間>]	モニタを将来のある期間だけ一時的に無効にします。1 日より長い期間に設定できます。 hh:mm:ss mm/dd/yyyy の形式で無効化期間の開始時間と終了時間を入力または選択します。
[無効化の説明]	モニタ・グループ表示にモニタの状態の一部として表示される省略可能な説明テキスト。無効化状態のテキストには、モニタに無効化オプションが適用されていることを示す文字列が含まれます。たとえば、「手動で無効化されています」は、[モニタを無効化] オプションを使用してモニタが無効にされたことを示します。

UI 要素	説明
[モニタのダウンタイム・テーブル] (このテーブルは、SiteScope が BSM に接続されていて、選択したモニタが現在ダウンタイム中の CI の影響を受ける場合にのみ表示されます。詳細については、138 ページ「CI のダウンタイム」を参照してください)。	
[Downtime Name]	[BSM Downtime] ウィザードで設定されたダウンタイムの名前。
[Downtime Description]	[BSM Downtime] ウィザードで入力されたダウンタイムの詳細。
[現在オカレンスの終了日]	現在発生しているダウンタイムが終了する予定日時。

関連する警告の有効化/無効化

[関連する警告の有効化 / 無効化] 表示枠では、関連付けられている警告の状態（有効/無効）を設定できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で [プロパティ] タブをクリックして [関連する警告の有効化/無効化] を選択します。
重要な情報	▶ [モニタの詳細] フィールドに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コードを修正する修正アクションが行われます（たとえば、タグの不一致や、複数行にわたるため切り捨てられたコードなど）。悪意のある HTML コードや Javascript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。 ▶ 関連付けられた警告のダウンタイム・テーブルは、SiteScope が BSM に接続されていて、モニタが現在ダウンタイム中の CI の影響を受け、かつモニタの関連付けられた警告にダウンタイムが適用される場合にのみ表示されます。詳細については、138 ページ「CI のダウンタイム」を参照してください。 ▶ すべての表示枠で共通のボタンについては、375 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。
関連タスク	▶ 343 ページ「モニタのデプロイ方法」 ▶ 1276 ページ「警告の設定方法」
関連情報	1251 ページ「SiteScope 警告の概要」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[関連付けられたすべての警告を有効化]	このモニタに関連付けられた警告がすでに無効になっている場合は、その警告を有効にします。 標準設定値 : 選択済み
[次に関連付けられたすべての警告を無効化 : <期間>]	関連付けられた警告を無効にしておく期間。[秒], [分], [時間], または [日] を選択して、適用する無効化期間を定義します。

UI 要素	説明
[1 回限りのスケジュールに基づいて関連付けられたすべての警告を無効化： <時間> ~ <時間>]	関連付けられた警告を将来のある期間だけ一時的に無効にします。1 日より長い期間に設定できます。 hh:mm:ss mm/dd/yyyy の形式で無効化期間の開始時間と終了時間を入力します。
[無効化の説明]	省略可能な説明テキスト。
[関連付けられた警告のダウンタイム・テーブル] (このテーブルは、SiteScope が BSM に接続されていて、モニタが現在ダウンタイム中の CI の影響を受け、かつモニタに関連付けられた警告にダウンタイムが適用される場合にのみ表示されます。詳細については、138 ページ「CI のダウンタイム」を参照してください)。	
[Downtime Name]	[BSM Downtime] ウィザードで設定されたダウンタイムの名前。
[Downtime Description]	[BSM Downtime] ウィザードで入力されたダウンタイムの詳細。
[現在オカレンスの終了日]	現在発生しているダウンタイムが終了する予定日時。

タグの検索/フィルタ

[タグの検索/フィルタ] 表示枠では、新しい検索/フィルタ・タグを追加し、コンテキスト・ツリー内のオブジェクトとプリファレンス・プロファイルにタグを割り当てることができます。SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で [プロパティ] タブをクリックして [タグの検索/フィルタ] を選択します。
重要な情報	▶ [プリファレンス] コンテキスト（[プリファレンス] > [タグの検索/フィルタ]）で既存のタグを編集できます。このトピックの詳細については、798 ページ「タグの検索/フィルタの概要」を参照してください。 ▶ すべての表示枠で共通のボタンについては、375 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。
関連タスク	▶ 343 ページ「モニタのデプロイ方法」 ▶ 109 ページ「新しい検索/フィルタ・タグの作成および定義方法」
関連情報	108 ページ「検索/フィルタ・タグを使った作業」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	タグが作成されている場合は、タグの名前と値が表示されます。オブジェクトに割り当てるタグまたはタグの値を選択します。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。
[タグの追加]	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、119 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

 ベースライン設定

[ベースライン設定] 表示枠には、選択したモニタのベースラインの状態が表示されます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で [プロパティ] タブをクリックして [ベースライン設定] を選択します。
重要な情報	すべての表示枠で共通のボタンについては、375 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。
関連タスク	▶ 343 ページ「モニタのデプロイ方法」 ▶ 347 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	333 ページ「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[ベースラインの状態]	モニタのベースラインの状態：次の状態があります。 ▶ ベースライン設定するモニタが選択されていません：ベースライン設定するモニタが選択されていません。 ▶ ベースラインの計算中：ベースラインを計算中です。 ▶ 計算に失敗：ベースラインを計算できませんでした。 ▶ 計算済み、アクティブでない：モニタのベースラインが計算されましたが、まだアクティブ化されていません。 ▶ ベースラインの有効化：ベースラインを有効化しています。 ▶ アクティベーションが失敗しました：ベースラインをアクティブ化できませんでした。 ▶ アクティブ化されたベースライン：モニタのベースラインがアクティブ化されました。 ベースラインの状態が「ベースライン設定するモニタが選択されていません」以外の場合は、[ベースライン モード] チェック・ボックスが選択されています。 ベースラインしきい値の使用の詳細については、333 ページ「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」を参照してください。
[ベースラインの削除]	ベースラインしきい値を削除します。ベースラインしきい値が削除され、静的しきい値を使用してしきい値が作成されます。ベースラインを計算した後に（計算が失敗した場合でも）ベースラインを計算するには、ベースラインを削除する必要があります。 このトピックの詳細については、333 ページ「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」を参照してください。



「依存の対象モニタの選択」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、別のモニタの状態に基づいてこのモニタまたはモニタ・グループを実行するように設定できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーでモニタを選択し、[プロパティ] タブをクリックします。[依存関係] タブを展開し、[依存]  をクリックします。依存関係を作成するモニタを選択します。
関連タスク	343 ページ「モニタのデプロイ方法」
関連情報	▶ 325 ページ「グループの依存関係の監視」 ▶ 71 ページ「モニタ・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
 SiteScope	個々の SiteScope サーバを表す。
	SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ（有効化されたモニタを含む、モニタを含まない、または有効化されたモニタがない）を表す。 モニタ・グループまたはサブグループにグループ警告が設定されている場合、グループ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。
	SiteScope モニタ（有効/無効）を表す。 モニタに警告が設定されている場合、モニタ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。
	SiteScope モニタの適切な機能をチェックするためにデプロイされる使用可能な状況モニタの集合を表す。 親 : SiteScope。



[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、モニタ・グループにデプロイするテンプレートを
選択できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、テンプレートのデプロイ先のグループを右クリックして、[テンプレートのデプロイ] または [CSV を使用してテンプレートをデプロイ] を選択します。
重要な情報	▶ 子オブジェクト（サブグループ、モニタ、変数、リモート・サーバ）がまったく含まれていないテンプレートは、テンプレート・ツリーに表示されません。 ▶ ソリューション・テンプレートは [テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスには表示されず、[テンプレート] コンテキストからのみデプロイできます。詳細については、974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。
関連タスク	863 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	▶ 860 ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」 ▶ 969 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレート」 ▶ 71 ページ「モニタ・ツリー」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
 SiteScope	SiteScope ルート・グループを表します。
	テンプレート・コンテナを表す。テンプレート・コンテナは、デプロイメントの設定テンプレートの整理に使用されます。展開するとテンプレートが表示されます。
	SiteScope オブジェクトのデプロイ用のテンプレート設定を表す。デプロイするテンプレートを選択します。CTRL または SHIFT キーを使用すると複数のテンプレートを選択できます。



【テンプレート ツリーにコピー】 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートまたはテンプレート・グループに SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ）とその内容（モニタ、警告、レポート）をコピーできます。

アクセス方法	モニタ・ツリーまたはリモート・サーバ・ツリーで、テンプレートにコピーするオブジェクトを右クリックして、 [テンプレートにコピー] を選択します。[テンプレート ツリーにコピー] ダイアログ・ボックスで、テンプレート・オブジェクトのコピー先を選択します。
重要な情報	▶ テンプレートにまだグループが含まれていない場合、グループとその内容をテンプレートにコピーできます。 ▶ サーバ・モニタをテンプレートにコピーすると、SiteScope によってサーバ名が <code>\$\$SERVER_LIST\$\$</code> 変数で置換されます。この場合、モニタをテンプレートにコピーした後にテンプレートにリモート・サーバを作成し、<code>\$\$SERVER_LIST\$\$</code> 変数をこのリモート・サーバで置換することをお勧めします。 ▶ Web スクリプト・モニタはテンプレート・モードではサポートされていません。
関連タスク	863 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	▶ 71 ページ「モニタ・ツリー」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
 SiteScope	個々の SiteScope サーバを表す。
	テンプレート・コンテナを表す。テンプレート・コンテナは、デプロイメントの設定テンプレートの整理に使用されます。 テンプレート・コンテナにはテンプレートのみを格納できます。

UI 要素	説明
	SiteScope オブジェクトのデプロイ用のテンプレート設定を表す。 テンプレート・グループ (テンプレートにまだグループが含まれていない場合) またはリモート・サーバをテンプレート・グループにコピーできます。
	SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ (有効化されたモニタを含む, モニタを含まない, または有効化されたモニタがない) を表す。 テンプレート・グループまたはモニタをテンプレート・グループにコピーできます。 モニタ・グループまたはサブグループにグループ警告が設定されている場合, グループ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。

 パーセンタイル範囲マッピング・テーブル

このテーブルには、各パーセンタイル範囲にマップされている実際の値が表示されます。SiteScope ではパーセンタイル値を使用してベースライン・エラーおよび警告しきい値を定義します。このテーブルを使用して、パーセンタイル値に対応する実際の値を表示し、パーセンタイル値を手動で変更します。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、ベースラインがアクティブ化されているモニタを選択します（モニタにアクティブ化されたベースラインがあるかどうかは、グループまたはモニタを右クリックして [ベースライン設定] > [状態レポート] を選択すると確認できます）。モニタの [しきい値の設定] を展開し、パーセンタイル・テーブル ボタンをクリックします。
重要な情報	▶ このテーブルは、ベースラインがアクティブ化されているモニタのみで使用できます。 ▶ 現在のパーセンタイルは 100% より大きい値に設定できます。これにより、収集したサンプル測定値に基づいて、しきい値レベルを設定されたレベルより高くできます。たとえば、収集した CPU 使用率の測定値の範囲が 10% ~ 60% で、CPU 使用率が 80% を超えるエラーのみを取得するには、エラーしきい値レベルを望ましいレベルまで上げるパーセンタイルにパーセンタイル値を設定します。この場合は、パーセンタイルを 134%（CPU 使用率 60% * 134% = CPU 使用率 80.4%）に設定します。
関連タスク	347 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	▶ 333 ページ「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」 ▶ 384 ページ「しきい値設定」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[パーセンタイル範囲]	ベースライン・エラーおよび警告しきい値の定義に使用する実際の値に相関するパーセンタイル範囲。SiteScope のプリファレンス（[プリファレンス] > [インフラストラクチャプリファレンス] > [ベースライン設定]）で、テーブルに表示されるパーセンタイル範囲の数値を設定できます。 注：左の値は含まれず、右の値は含まれます。つまり、33 ～ 100 というパーセンタイル範囲の場合、33 より大きくて（33 は含まない）100 までのすべての値が範囲に含まれます。33 は前の範囲に含まれ、100.01 は次の範囲に含まれます。
[実際の値]	パーセンタイル範囲にマップされる実際の値。
[現在のパーセンタイル]	ベースラインしきい値の定義に使用する実際の値に相関するパーセンタイル値。



「ベースラインの計算」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ベースラインの計算に含めるグループまたはモニタ、あるいはその両方の選択、ベースライン・データ収集の時間範囲スケジュールの選択、モニタ測定サンプル値がしきい値にどの程度影響するかを判断するための順守レベルの選択と微調整、ベースラインしきい値の計算を実行できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope コンテナ、グループ、またはモニタを右クリックして、[ベースライン設定] > [計算] を選択します。
重要な情報	▶ ベースライン機能を使用してモニタのしきい値を設定できるのは、SiteScope の管理者または「モニタの編集」権限を持つユーザのみです。また、設定できる対象はユーザに許可されているグループ・リストに含まれるモニタのみです。ユーザに権限がないグループ内のモニタは、ダイアログ・ボックスに表示されません。 ▶ ベースラインしきい値の計算に必要な時間は、SiteScope サーバの処理速度とベースライン設定で選択したモニタ数に左右されます。計算プロセスを完了する前に SiteScope を再起動する必要がある場合、再起動後に自動的にプロセスが続行されます。 ▶ SiteScope でベースラインを計算するために必要なデータを蓄積するのに十分と思われる期間、モニタが実行されるようにします。この期間は、[インフラストラクチャブリファレンス] の [ベースライン設定に必要な最小日数] 設定と [ベースライン設定に必要な最小サンプル数] 設定によって異なります。詳細については、652 ページ「ベースライン設定」を参照してください。ベースラインは、モニタに十分なデータがなくても計算およびアクティブ化できますが、計算は正確でない可能性が高くなります。
関連タスク	347 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	333 ページ「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」

ベースライン計算対象のモニタの選択

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<使用可能なグループ またはモニタ、あるい はその両方のリスト>	ベースラインしきい値の計算に含めるグループまたはモニタ、あるいはその両方。リストには、現在選択されているコンテナ、およびユーザの許可されているグループ・リストに含まれるすべての子コンテナが表示されます。 標準設定値：現在のコンテナおよび選択されているすべての子要素。 注：次の場合、モニタ・インスタンスは選択できません。 ▶ ベースラインがすでにアクティブ化されている。この場合、選択チェック・ボックスは表示されません。 ▶ SiteScope に同じ名前の別のモニタがある（ファイル・パス、グループ名、モニタ名が同一）。この場合、モニタ名の横に「名前の重複」と表示されます。

スケジュール

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[スケジュール範囲名]	ベースラインしきい値データの収集に使用するスケジュール範囲。これによって、ベースラインの計算に使用する監視データの収集期間を特定の日または時間に制限できます。作成されるベースラインしきい値は、同じスケジュール範囲期間のみ有効になります。表示される範囲スケジュールは、[スケジュール プリファレンス] で作成されます。範囲スケジュールの作成の詳細については、750 ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」を参照してください。 注：CTRL または SHIFT キーを使用すると複数の範囲を選択できます。 標準設定値：スケジュール範囲が選択されていない場合、ベースラインしきい値データは全日、毎日収集されます。

順守レベル

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

説明	ベースライン計算で使用するモニタ測定サンプル値がしきい値にどの程度影響するかを判断する順守レベルを選択できます。順守レベルは、測定値がエラーまたは警告であるかを判断するためにすべてのモニタ測定値に適用されるパーセンタイル値に基づいています。また、個々のモニタ測定値の順守レベルを微調整したり、正常な限度を設定することもできます。 利用方法 : モニタ・ツリーで SiteScope コンテナ, グループ, またはモニタを右クリックして, [ベースライン設定] > [計算] を選択します。[順守レベル] 表示枠を展開します。
関連タスク	347 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	337 ページ「ベースライン順守レベルの設定」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[低]	しきい値の更新に使用される値は、ベースラインによって計算される値からより遠くなります。極端な測定値によるベースラインへの影響に対する許容度が高い場合はこのオプションを選択します。
[中]	しきい値の更新に使用される値は、ベースラインによって計算される値から中間範囲にあります（標準設定）。

UI 要素	説明
[高]	しきい値の更新に使用される値は、ベースラインによって計算される値により近くなります。極端な測定値によるベースラインへの影響に対する許容度が低い場合はこのオプションを選択します。
[順守レベルの微調整/ 限度の設定]	[順守レベルの微調整/限度の設定] ダイアログ・ボックスが開きます。このダイアログ・ボックスでベースラインの順守レベルを微調整し、選択したコンテキスト内の任意のモニタ・タイプの任意の測定値に正常な限度を定義できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、422 ページ「[順守レベルの微調整/限度の設定] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

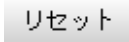


【順守レベルの微調整/限度の設定】ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスには、選択されたコンテキストにおいて各モニタ測定値の順守レベルおよび正常な限度（設定されている場合）で、ベースライン計算で使用されるパーセンタイル値が表示されます。任意のモニタ・タイプの任意の測定値のベースライン順守レベルを微調整し、正常な限度を設定できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope コンテナ、グループ、またはモニタを右クリックして、[ベースライン設定] > [計算] を選択します。[順守レベル] 表示枠を展開して、[順守レベルの微調整/限度の設定] をクリックします。
重要な情報	順守レベルのパーセンタイル値は 100% より大きく設定できます。これにより、収集したサンプル測定値に基づいて、しきい値レベルを設定されたレベルより高くできます。たとえば、収集した CPU 使用率の測定値の範囲が 10% ～ 60% で、CPU 使用率が 80% を超えるエラーのみを取得するには、[エラーのパーセンタイル] の「低」の値を、エラーしきい値レベルを望ましいレベルまで上げるパーセンタイルに設定します。この場合は、パーセンタイルを 134% (CPU 使用率 60% * 134% = CPU 使用率 80.4%) に設定します。
関連タスク	347 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	333 ページ「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
	リセット : モニタ測定値の標準設定のエラーおよび警告しきい値の順守レベル値を元に戻し、正常な限度を削除します。
	すべて選択 : リストされたすべてのモニタ測定値を選択します。
	選択を解除 : 選択をクリアします。

UI 要素	説明
[モニタ名 : 測定値名]	選択されているコンテキストの各モニタのベースライン計算で使用される測定値を表示します。また、ブラウズ可能なモニタすべての測定値を代表する 1 つの測定値が（リストの最後に）表示されます。
[警告のパーセンタイル]	警告ベースラインしきい値の計算に使用される順守レベル「低」、「中」、「高」のパーセンタイル値を表示します。このトピックの詳細については、337 ページ「ベースライン順守レベルの設定」を参照してください。 標準設定値： 「低」110, 「中」93, 「高」90
[エラーのパーセンタイル]	エラー・ベースラインしきい値の計算に使用される順守レベル「低」、「中」、「高」のパーセンタイル値を表示します。このトピックの詳細については、337 ページ「ベースライン順守レベルの設定」を参照してください。 標準設定値： 「低」120, 「中」98, 「高」95
[正常な限度]	各モニタ測定値タイプの正常な限度の実際の値を表示します。これは、既存のベースライン・パーセンタイルに従うとエラーをレポートする必要がある場合でも、エラー状態とみなされない測定値です。このトピックの詳細については、338 ページ「正常な限度とエラー限度について」を参照してください。 標準設定値： 値なし
[ブラウズ可能なすべてのモニタの測定値]	参照可能なすべてのモニタの測定値の警告およびエラー・ベースラインしきい値の計算に使用される順守レベル「低」、「中」、「高」のパーセンタイル値を表示します。 警告の標準設定値： 「低」110, 「中」93, 「高」90 エラーの標準設定値： 「低」120, 「中」98, 「高」95



【ベースラインのアクティブ化】ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスには、計算されたモニタのベースライン・データのサマリが表示され、現在のモニタ設定の保存、ベースライン測定値グラフの表示、失敗した操作の表示、ベースラインしきい値設定のアクティブ化を行えます。SiteScope でベースラインを計算できないモニタについては、失敗の原因が表示されます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope ノード、グループ、またはモニタを右クリックして、[ベースライン設定] > [レビューと有効化] を選択します。
重要な情報	▶ ベースライン機能を使用してモニタのしきい値を設定できるのは、SiteScope の管理者または「モニタの編集」権限を持つユーザのみです。また、設定できる対象はユーザに許可されているグループ・リストに含まれるモニタのみです。ユーザに権限がないグループ内のモニタは、ダイアログ・ボックスに表示されません。 ▶ 現在のモニタ設定に戻すには、バックアップ設定を作成してからベースライン設定をアクティブ化する必要があります。 ▶ ベースラインしきい値のアクティブ化に必要な時間は、SiteScope サーバの処理速度とベースライン設定で選択したモニタ数に左右されます。アクティブ化プロセスを完了する前に SiteScope を再起動する必要がある場合、再起動後に自動的にプロセスが続行されます。
関連タスク	347 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	333 ページ「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[正常に計算されたモニタ]	
 ビュー グラフ	ビュー グラフ : モニタのすべての測定値のベースライン・データがグラフで表示されます。詳細については、429 ページ「[ベースライン モニタ測定値グラフ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	すべて選択 : リストされたすべてのモニタを選択します。
	選択を解除 : 選択をクリアします。
[モニタ名]	ベースライン設定に選択された SiteScope モニタの名前。
[計算日]	ベースラインが計算された日付。
[エラー ステータスの減少]	ベースラインしきい値が適用された場合のモニタのエラー・ステータス数の減少。負の数は、提案されたベースラインしきい値が適用された場合、モニタのエラー・ステータス数の増加を示します。 例 : CPU 使用率のしきい値の状態をエラー条件 >= 65% に手動で設定し、CPU モニタに 5 つのエラー・ステータス（そのうち 3 つのエラーは 65% ~ 70% のデータ・サンプル、2 つのエラーは 70% を超えるもの）があるとします。SiteScope でベースラインを使用してしきい値を計算し、しきい値がエラー条件 >= 70% に設定されている場合、[エラー ステータスの減少] は 3 になります。 注 : [エラー ステータスの減少] の値は、計算日に収集されたデータに基づいています。計算日から 3 日以上経過している場合、ベースラインを再計算することをお勧めします。

UI 要素	説明
[警告のステータスの減少]	ベースラインしきい値が適用された場合のモニタの警告ステータス数の減少。負の数は、提案されたベースラインしきい値が適用された場合のモニタの警告ステータス数の増加を示します。 例： CPU 使用率のしきい値の状態を警告条件 $\geq 55\%$ に手動で設定し、CPU モニタに 3 つの警告のステータス（そのうち 2 つの警告は $55\% \sim 60\%$ のデータ・サンプル、1 つの警告は 60% を超えるもの）があるとしします。SiteScope でベースラインを使用してしきい値を計算し、しきい値が警告条件 $\geq 60\%$ に設定されている場合、[警告のステータスの減少] は 2 になります。 注： [警告のステータスの減少] の値は、計算日に収集されたデータに基づいています。計算日から 3 日以上経過している場合、ベースラインを再計算することをお勧めします。
[失敗したモニタ]	
	すべて選択： リストされたすべての失敗したモニタを選択します。
	選択を解除： 選択をクリアします。
[モニタ名]	SiteScope でベースラインを計算できなかったモニタの名前。

UI 要素	説明
[失敗の原因]	SiteScope でモニタのベースライン値を計算できなかった原因。次のような原因があります。 ▶ データが十分ではありません。 モニタの実行期間が、有意なベースラインしきい値を得られるデータの収集期間としては十分ではありませんでした。この期間は、[インフラストラクチャ プリファレンス] の [ベースライン設定に必要な最小日数] 設定と [ベースライン設定に必要な最小サンプル数] 設定によって異なります。ベースライン設定の詳細については、652 ページ「ベースライン設定」を参照してください。 ▶ ベースライン設定する測定値がありません。 モニタに、ベースライン計算に使用できる測定値がありません。ベースラインをアクティブ化するモニタを選択できません。 ▶ リクエストされたスケジュールのサンプルがありません。 指定された範囲スケジュールで収集されたデータ・サンプルがありません。ベースラインをアクティブ化するモニタを選択できません。 ▶ 不明。 ベースライン計算の失敗の原因が不明です。ベースラインをアクティブ化するモニタを選択できません。
[アクティブ化可能]	モニタのベースライン計算が失敗した場合でも、ベースラインをアクティブ化できることを示します。 「データが十分ではありません。」という理由以外でベースライン計算が失敗した場合、「いいえ」が表示されます。 「データが十分ではありません。」という理由でベースライン計算が失敗した場合、「はい」が表示されます。SiteScope ではベースラインを計算するために収集された限定的な測定値サンプルが使用されます。



【設定のバックアップ】ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ベースラインしきい値をアクティブ化する前に現在のモニタのしきい値設定を保存できます。設定を元に戻すには、設定ツールを使用します。設定ツールの詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) を参照してください。

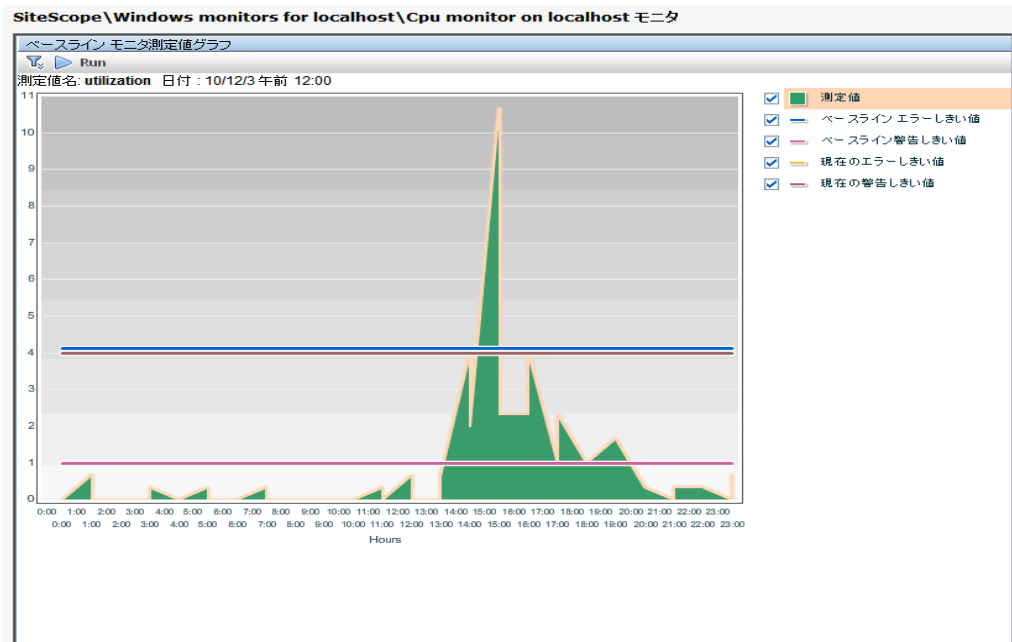
アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope ノード、グループ、またはモニタを右クリックして、[ベースライン設定] > [レビューと有効化] を選択します。[設定のバックアップ] ボタンをクリックします。
重要な情報	ベースラインをアクティブ化するときい値設定の変更は元に戻せないため、バックアップ設定を作成してからベースライン設定をアクティブ化してください。
関連タスク	347 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	333 ページ「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[ターゲット ディレクトリ を入力してください]	バックアップ設定ファイルの保存先ディレクトリ、または標準設定の SiteScope インストール・ディレクトリを使用します。 標準設定値 : C:\¥SiteScope
[バックアップ ファイル名 を入力してください]	設定バックアップ・ファイルの名前。標準設定で、ファイルには SiteScope_<MM_DD_YYYY>_<HH_MM_SS> という形式で名前が付けられます。バックアップ・ファイルは指定した場所に zip 形式で保存されます。 例 : SiteScope__11_05_2008_08_24_06

🔑 [ベースライン モニタ測定値グラフ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスには、モニタのすべての測定値のグラフが測定値ごとに表示されます。グラフを表示する標準設定の日付は、エラー減少が最大の日です。各グラフには、現在の警告およびエラーしきい値、ベースライン警告およびエラーしきい値、ベースライン関連のモニタ測定値すべての 24 時間分 (00:00 ~ 23:59) の履歴データが表示されます。



アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope ノード、グループ、またはモニタ・コンテナを右クリックして、[ベースライン設定] > [レビューと有効化] を選択します。[正常に計算されたモニタ] 表示枠で、ベースライン・データが計算されたモニタを選択して、[ビュー グラフ] ボタンをクリックします。
重要な情報	モニタ測定値グラフに表示されるデータは測定値データの集計で、その期間にはデータが実際に収集された時間が正確に反映されていない場合があります。
関連タスク	347 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	333 ページ「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」

グラフ設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
	注釈ツール : 表示しているグラフのスナップショットを作成します。また、スナップショットに図形や線を描画したりテキストを追加したりして、グラフの重要な領域を強調表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1381 ページ「注釈ツール」を参照してください。
[Historic date <日付リンク>]	カレンダーを開いてモニタ測定値グラフを作成する日付を選択できます。カレンダーには次のボタンがあります。 ▶ 戻す。前に選択したレポート日に戻ります。 ▶ 現在。カレンダーで今日の日付を選択します。 ▶ OK : 選択した日付の日付リンクを更新してカレンダーを閉じます。 ▶ キャンセル。変更せずにカレンダーを閉じます。
[生成]	日付リンクに表示された日付のレポートを作成します。

グラフの内容

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<凡例>	グラフで使用されている色分けを説明します。
[測定値名]	グラフの上に表示される測定値の名前。
日付	グラフが生成された日付と時刻。
<データ ポイント>	選択されているモニタ測定値を「 時間 」軸上に 2 時間区分で表示します。 ヒント : 測定値。
<測定値タイプ> <y 軸>	モニタの測定値タイプを表示します。
[Hours <x 軸>]	レポートを生成するときに指定した日付の時間区分単位 (0 ~ 24 時間)。
[ベースライン エラーしきい値]	エラー のステータスを判断するベースラインしきい値線を表示します。この線を越える測定値は、モニタのエラー・ベースライン・ステータスのしきい値を超えます。これは、赤の実線でグラフに表示されます。
[ベースライン警告しきい値]	警告 のステータスを判断するベースラインしきい値線を表示します。この線を越える測定値は、モニタの警告ベースライン・ステータスのしきい値を超えます。これは、オレンジ色の実線でグラフに表示されます。
[現在のエラーしきい値]	エラー のステータスを判断するしきい値線を表示します。この線を越える測定値は、モニタのエラー・ステータスのしきい値を超えます。これは、黒の点線でグラフに表示されます。
[現在の警告しきい値]	警告 のステータスを判断するしきい値線を表示します。この線を越える測定値は、モニタの警告ステータスしきい値を超えます。これは、青の点線でグラフに表示されます。



[ベースラインの削除] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ベースラインを削除するグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択できます。モニタのしきい値ベースラインを再計算するには、まずモニタの既存のベースライン計算を削除する必要があります。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope ノード、グループ、またはモニタを右クリックして、[ベースライン設定] > [削除] を選択します。
重要な情報	SiteScope の管理者または「 モニタの編集 」権限を付与されたユーザのみがベースラインを削除でき、さらに、削除できるのはユーザの許可されているグループ・リストにあるモニタのベースラインのみです。ユーザに権限がないグループ内のモニタは、ダイアログ・ボックスに表示されません。
関連タスク	347 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	333 ページ「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<グループまたはモニタ、あるいはその両方のリスト>	ベースラインしきい値計算を削除するグループまたはモニタ、あるいはその両方。リストには、現在選択されているコンテナ、およびユーザの許可されているグループ・リストに含まれるすべての子コンテナのすべてのグループまたはモニタ、あるいはその両方が表示されます。 標準設定値 ：現在のコンテナおよび選択されているすべての子要素。

ベースラインの状態レポート

このレポートには、選択されたコンテキストのすべてのモニタのベースラインの状態に関する情報が表示されます。

ベースラインの状態レポート			
サマリ			
5 個のモニタの合計です。			
2 個のモニタにアクティブ化されたベースラインがあります。			
3 個のモニタの計算が失敗しました。			
詳細			
モニタ名	モニタ タイプ	ベースラインの状態	ベースラインの状態の詳細
SiteScopeLab monitors\C...	CPU	アクティブ化されたベースライン	
SiteScopeLab monitors\W...	メモリ	アクティブ化されたベースライン	
SiteScopeLab monitors\S...	サービス	計算に失敗	ベースライン設定する測定値がありませ...
SiteScopeLab monitors\Port	ポート	計算に失敗	ベースライン設定する測定値がありませ...
SiteScopeLab monitors\Di...	ディレクトリ	計算に失敗	ベースライン設定する測定値がありませ...

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope ノード、グループ、またはモニタを右クリックして、[ベースライン設定] > [状態レポート] を選択します。
重要な情報	▶ これは一時的なレポートです。後で使用するために SiteScope 設定データに保存されるものではありません。 ▶ 列ヘッダをクリックして、モニタ・タイプを昇順または降順で並べ替えることができます。並べ替え順序の方向を示す矢印が表示されます。 ▶ 下向き矢印  をクリックして、フィルタ基準とするモニタ・タイプまたはベースラインの状態を選択すると、モニタ・タイプおよびベースラインの状態の表示をフィルタできます。フィルタをクリアするには、[(All)] を選択します。
関連タスク	347 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	333 ページ「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[モニタ名]	コンテキストによって異なる SiteScope モニタの名前とパス。 注： レポートには、ユーザにアクセス権限があるグループまたはサブグループのモニタのみが表示されます。
[モニタ タイプ]	SiteScope モニタのタイプ。
[ベースラインの状態]	モニタのベースラインの状態。次の状態があります。 ➤ ベースライン設定するモニタが選択されていません：ベースライン設定するモニタが選択されていません。 ➤ ベースラインの計算中：ベースラインを計算中です。 ➤ 計算に失敗：ベースラインを計算できませんでした。 ➤ 計算済み、アクティブでない：モニタのベースラインが計算されましたが、まだアクティブ化されていません。 ➤ ベースラインの有効化：ベースラインを有効化しています。 ➤ アクティベーションが失敗しました：ベースラインをアクティブ化できませんでした。 ➤ アクティブ化されたベースライン：モニタのベースラインがアクティブ化されました。

UI 要素	説明
[ベースラインの状態の詳細]	次の状態のモニタの追加の詳細情報を表示します。 ▶ ベースラインの計算中：モニタのベースラインの計算ステージを表示します。 ▶ 計算に失敗：ベースラインの計算が失敗した原因を表示します（「データが十分ではありません」, 「ベースライン設定する測定値がありません」）。SiteScope でベースライン期間のデータを蓄積するのに十分な期間モニタが実行された後、自動ベースライン計算では十分なデータがないために失敗したモニタが標準設定で選択されます。詳細については、424 ページ「[ベースラインのアクティブ化] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
[更新]	計算プロセス中にクリックすると、状態レポートのデータが更新されます。

11

XML ドキュメントの監視

本章の内容

概念

- ▶ XML ドキュメントの監視の概要 (438 ページ)

参照情報

- ▶ XML ドキュメントの内容の照合 (439 ページ)
- ▶ モニタ設定での XML 内容照合値の使用 (441 ページ)

概念

XML ドキュメントの監視の概要

SiteScope の内容の照合は、ネットワーク化された情報システムと内容の監視において重要な機能です。内容の照合機能を持つ SiteScope モニタでは、基本的な内容の照合は Perl 正規表現を使用して実行できます。SiteScope には、XML ドキュメントを横断してドキュメント内容を照合する機能も含まれています。たとえば、URL モニタと Web サービス・モニタを使用して XML 内容照合文字列を組み込み、XML 要素名、XML 要素の属性、要素の内容を照合することができます。この機能を使用して、XML ベースの Web ページ、SOAP または XML-RPC ドキュメント、さらに WAP 対応デバイスにサービスを提供する WML ページまでチェックできます。

参照情報

XML ドキュメントの内容の照合

XML 内容照合文字列の構文には、XML ドキュメントの階層構造が反映されます。「xml」で始まる内容照合文字列は、XML ドキュメント内の要素名として認識されます。要素名は、ルート要素との関係の順にピリオドで区切られて追加されます。たとえば、`weather.xml` というドキュメントでは、ルート要素は `<weather>` です。この要素には、`<area>`、`<skies>`、`<wind>`、`<forecast>` などの名前を持つ子要素があります。これらの XML 要素の内容またはその属性にアクセスするには、`xml.weather.area` のような構文を使用します。

特定の内容または値が存在することをチェックするには、テストする内容を持つ要素名の後に等号記号を追加し、続いて内容の値を追加します。ドキュメント内に 1 つの要素名の複数インスタンスが存在する場合、その要素の特定のインスタンスをチェックするには、ドキュメント内の要素の順序を示す数値を角括弧で囲んで追加します（例については、次の表を参照してください）。また、複数の要素または値をテストするには、個々の検索文字列をカンマで区切ります。次の表では、XML ドキュメント内の内容の照合に使用する構文の例を示します。

内容の照合の例	説明
xml.weather.temperature	ドキュメント内のいずれかの <weather> ノードに <temperature> 要素が 1 つ以上 含まれる場合、成功します。<temperature> 要素の内容がモニタから返されます。<weather> ノード内で <temperature> 要素が検出されない場合、エラーが返されます。
xml.weather.temperature=20	ドキュメント内のいずれかの <weather> ノードに、値が 20 と等しい <temperature> 要素が 1 つ以上 含まれる場合、成功します。一致が検出された場合、モニタから <temperature> 要素の内容は 返されません 。<weather> ノード内で <temperature> 要素が検出されない場合、または値 20 が含まれる <temperature> 要素がない場合、エラーが返されます。
xml.weather.forecast. [confidence]	ドキュメント内のいずれかの <weather> ノードに、confidence という名前の 属性 を持つ <forecast> 要素が含まれる場合、成功します。一致が検出された場合、モニタから confidence 属性の値が返されます。<weather> ノード内で <forecast> 要素が検出されない場合、または confidence 属性が検出されない場合、エラーが返されます。
xml.weather.forecast[3]. [confidence]=50	ドキュメント内のいずれかの <weather> ノードに 3 つ以上の <forecast> 要素があり、3 番目の <forecast> 要素に値が 50 の confidence 属性 がある場合、成功します。<weather> ノード内にある <forecast> 要素が 3 個未満の場合、または confidence 属性の値が 50 以外の場合、エラーが返されます。
xml.weather.temperature=20, xml.weather.skies=rain	ドキュメント内のいずれかの <weather> ノードに、内容が 20 と等しい <temperature> 要素が 1 つ以上 あり、 かつ 、いずれかの <weather> ノードに内容が rain と等しい <skies> 要素が 1 つ以上 含まれる場合、成功します。いずれかの照合が失敗した場合、エラーが返されます。
xml.wml.card.p.table.tr.td. anchor=Home Page	WML ドキュメントの指定されたパスにある <anchor> 要素の内容をチェックします。テーブル・セルが含まれるいずれかの <card> ノードに内容が "Home Page" と等しい <anchor> 要素が 1 つ以上 ある場合、成功します。

モニタ設定での XML 内容照合値の使用

URL モニタのようなモニタには、SiteScope モニタのデータ・ログに記録される内容照合値があり、モニタのエラー状態や警告状態のしきい値設定にも使用できます。XML 名の値はモニタの内容照合値として保存されます。

たとえば、内容照合表現が `xml.weather.temperature` で、ドキュメントがファイル `weather.xml` の内容だった場合、内容照合値は **46** になります。

次に、モニタの [詳細オプション] セクションでエラー状態、警告状態、正常状態のしきい値を設定すると、特定のしきい値を内容の照合から返された値と比較できます。

たとえば、気温の値を監視していて、気温が **72** 度を下回ったら警告を受け取る場合、モニタの状態のしきい値を次のように設定できます。

エラー条件	内容の照合 <code><= 72</code>
警告条件	内容の照合 <code>== <= 72</code>
良好条件	内容の照合 <code>>= > 72</code>

このように設定すると、モニタは温度要素の内容をチェックして、エラーおよび警告しきい値と比較します。前述の例では、温度の値が **46** 度で **72** 度を下回っているため、モニタの状態は**エラー**になります。

第 IV 部

統合モ二タ

12

SiteScope 統合モニタを使った作業

本章の内容

概念

- ▶ 統合モニタの概要 (446 ページ)
- ▶ テクノロジ統合モニタのトポロジ設定 (450 ページ)

タスク

- ▶ 統合モニタのデプロイ方法 (457 ページ)

参照情報

- ▶ 廃止された統合モニタのリスト (461 ページ)
- トラブルシューティングと制限事項 (462 ページ)

概念

統合モニタの概要

統合モニタは、SiteScope データ・コレクタによって実行され、サードパーティ・アプリケーション（通常、Enterprise Management Systems (EMS) アプリケーションおよびサーバ）のデータをキャプチャして BSM に転送するために使用されます。

注：統合モニタ・タイプにアクセスするには、SiteScope の特別な任意指定のライセンスを SiteScope サーバで入力する必要があります。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』（PDF）の「SiteScope のライセンス」を参照してください。

BSM の「EMS 統合管理」ページで EMS 統合を作成できます。詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『Solutions and Integrations』（英語版）の「EMS 統合管理」を参照してください。統合を作成する場合、モニタの作成手順で「システム可用性管理」を開いて SiteScope 統合モニタを作成できます。

データを収集して BSM にデータを転送する場合、次の 2 つのレベルの設定があります。

- ▶ **必須：**監視対象システムを適切にマッピングして必要なサンプルを収集するようにモニタを設定する必要があります。イベント、測定値、チケットの形式は関係ありません。「フィールドのマッピング」設定でサンプルのタイプを選択し、対応するスクリプト・テンプレートをテキスト・エディタで編集して、監視対象システムのフィールドのマッピングを行います。
- ▶ **任意：**データをトポロジにマッピングして、BSM の適切な CI 階層に転送することもできます。これにより、モニタから BSM 内の必要な CI に状態を正確にレポートでき、製品の別のアプリケーションで使用できるようになります。トポロジ設定は、作成するトポロジのタイプに応じてロードされる Jython スクリプトを使用して行います。

本項の内容

- ▶ 447 ページ「統合モニタのカテゴリ」
- ▶ 448 ページ「フィールドのマッピングのサンプルのタイプ」

統合モニタのカテゴリ

統合モニタは、2 つのカテゴリに分類できます。

アプリケーション固有のモニタ

これらの統合モニタは、特定の EMS アプリケーションで使用するよう設計されています。これらのモニタは、必須フィールドのマッピングおよびトポロジ設定を使用して事前に定義されています。

該当するモニタを次に示します。

- ▶ 「HP OM イベント・モニタ」（詳細については、SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』ガイド（英語版）を参照してください）
- ▶ 「HP Service Manager モニタ」（詳細については、SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』ガイド（英語版）を参照してください）
- ▶ 「NetScout イベント・モニタ」（詳細については、SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』ガイド（英語版）を参照してください）

特定の環境のニーズに合わせて、フィールドのマッピングおよびトポロジ設定の両方のスクリプトを詳細に設定できます。

注：

- ▶ SiteScope が BSM バージョン 9.00 以降に接続されている場合（SiteScope 11.00 にアップグレードされた以前のバージョンの SiteScope でモニタが作成されている場合は除きます）、HP OM イベント・モニタは使用できません。Event Management Foundation ライセンスを所有していて、HP Business Service Management 文書ライブラリの『HP Business Service Management デプロイメント・ガイド』（PDF）の手順に従って統合を設定している場合は、OM イベントを HPOM サーバから BSM 9.00 に転送できます。
 - ▶ NetScout イベント・モニタでは、トポロジ設定は使用できません。
-

汎用統合モニタ

データベース、ログ・ファイル、SNMP トラップ、Web サービス・インタフェースからデータを抽出できる大部分の EMS アプリケーションで使用するよう設計されたテクノロジー統合モニタ。

これらのモニタのフィールドのマッピングおよびトポロジ設定は、適切なスクリプトをロードし、モニタの作成時に別のテキスト・エディタで編集して設定する必要があります。

該当するモニタを次に示します。

- ▶ 「テクノロジー・データベース統合モニタ」（詳細については、SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』ガイド（英語版）を参照してください）
- ▶ 「テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタ」（詳細については、SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』ガイド（英語版）を参照してください）
- ▶ 「テクノロジー SNMP トラップ統合モニタ」（詳細については、SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』ガイド（英語版）を参照してください）
- ▶ 「テクノロジー・データベース統合モニタ」（詳細については、SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』ガイド（英語版）を参照してください）

フィールドのマッピングのサンプルのタイプ

統合モニタでは、フィールドのマッピング・スクリプトを使用して、収集するデータを BSM で認識できる形式に適切にマッピングします。汎用統合モニタの場合、必要に応じてこれらのマッピングを設定およびカスタマイズします。フィールドのマッピングのタイプを選択する場合、付属のスクリプト・エディタを使用するか、スクリプトを任意のテキスト・エディタにコピーして変更を行い、フィールドのマッピングのテキスト・ボックスに再度コピーできます。

アプリケーション固有のモニタのマッピングは、モニタの設定時に編集できません。これらのモニタにあらかじめ設定されている用意済みの統合マッピングを使用することをお勧めします。

汎用統合モニタを設定する場合、次のサンプル・スクリプトのタイプを選択します。

- ▶ **測定値。**時間ベースのデータを収集する場合に使用します。測定値のサンプルのタイプを使用する統合モニタによって収集されたデータは、一般的な SiteScope データとして BSM に統合され、SiteScope データを表示できるすべてのコンテキスト（サービス状況、サービス・レベル管理、システム可用性管理、ユーザ・レポートなど）で表示できます。
- ▶ **イベント。**特定のイベントに基づいてデータを収集する場合に使用します。イベントのサンプルのタイプを使用する統合モニタによって収集されたデータは、UDX フレームワークを使用して BSM に統合され、UDX データを表示できるコンテキスト（イベント・ログ、サービス状況、トレンド・レポート）で表示できます。BSM API を使用してデータにアクセスすることもできます。

注：EMS アプリケーションによって送信されるイベントは、イベントのサンプルです。それらのイベントは、BSM の オペレーション管理 イベントと同じではありません。

- ▶ **チケット。**チケット・システムからインシデントおよびイベントを収集する場合に使用します。チケットのサンプルのタイプを使用する統合モニタによって収集されたデータは、BSM に統合され、サービス状況およびサービス・レベル管理で表示できます。

データベース、ログ・ファイル、SNMP トラップ、Web サービスのテクノロジー統合モニタは、これらのサンプルのタイプで設定できます。特定の環境のニーズに合ったカスタム設定を作成するためのベースとして、SiteScope に同梱されているフィールドのマッピング・スクリプトのテンプレートを使用します。統合モニタを設定する場合、サンプルのタイプを選択して必要なスクリプト・テンプレートをロードし、BSM に転送するデータが収集されるようにスクリプトを編集します。

フィールドのマッピング・スクリプトのカスタマイズの詳細については、467 ページ「統合モニタのフィールドのマッピング」を参照してください。

テクノロジ統合モニタのトポロジ設定

BSM との完全な統合を確立するには、統合モニタのトポロジ・テンプレートを
選択します。これは、統合モニタの作成時に [トポロジ設定] 領域で行います。
[ホスト], [ホスト - ソフトウェア要素], [チケット] のトポロジ・テンプレ
ートは、BSM の ODB の必要な CI にデータが転送されるように、必須値を使用し
て別途設定します。

注：

- ▶ SiteScope 10.x の EMC トポロジ・テンプレートのスクリプトは、SiteScope
が BSM 9.00 に接続されている場合でも SiteScope では以前のコンテンツ言
語の形式で表示されます。たとえば、CI タイプのホストはノードではなくス
クリプト内に表示されます。
- ▶ NetScout イベント・モニタまたは HP Service Manager モニタの組織トポロ
ジをカスタマイズすることはできません。

トポロジは Jython スクリプトとして記述されます。Jython は、Python に基づ
き、Java によって強化された言語です。Jython の使用方法の詳細については、
次の Web サイトを参照してください。

▶ <http://www.jython.org> (英語サイト)

▶ <http://www.python.org> (英語サイト)

このスクリプトには、必要なトポロジ・データを監視対象アプリケーションか
ら取得するための基本機能があります。トポロジを作成するために、モニタの
フィールドのマッピングによって作成されたサンプルがスクリプトで使用され
ます。スクリプトには、取得したデータを BSM の関連する CI に転送するた
めのマッピングが含まれています。

次の場合、SiteScope によってトポロジが転送されて CI が作成または更新され
ます。

- ▶ モニタのデータ取得の結果として初めて CI が SiteScope で作成されたとき。
その CI が ODB に存在しているかどうかは関係ありません。
- ▶ CI のプロパティに変更があったとき。
- ▶ SiteScope が再起動してから最初にモニタが実行されたとき。

これにより、モニタからの CI の更新によって ODB が過負荷になることを防止できます。

本項の内容

- ▶ 451 ページ「トポロジの選択」
- ▶ 455 ページ「トポロジ・スクリプトの編集」
- ▶ 456 ページ「Jython のプロパティ・ファイル」

トポロジの選択

アプリケーション固有のモニタを使って作業する場合、トポロジを選択しないと、統合に必要なデータを使用してトポロジが事前設定されます。

汎用統合モニタを使って作業する場合、次のトポロジ設定を選択できます。

- ▶ **カスタム**。取得したデータを標準のノードまたは実行されているソフトウェアの CI ではなく特定の CI に転送する場合、独自のトポロジを作成します。

注：[**カスタム**]を選択する場合は、トポロジ・スクリプトが読み込まれず、自分で Jython 言語でトポロジ・スクリプトを作成する必要があるため、Jython 言語を十分理解している必要があります。[**ホスト**] または [**ホスト - ソフトウェア要素**] で開始して、これらのスクリプトのいずれかを編集することをお勧めします。

- ▶ **ホスト**。ノード CI と EMS モニタ CI（リーフ・ノード）が作成されます。
- ▶ **ホスト - ソフトウェア要素**：ノード CI を親 CI として、その下に実行中ソフトウェア CI、さらにその下に EMS モニタ CI が存在するトポロジが作成されます。フィールドのマッピングで定義される対象がシステムである場合、ノード CI のトポロジさらにその下に EMS モニタ CI が作成されます。

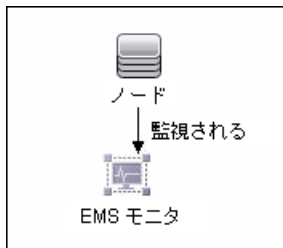
- ▶ **チケット**。BusinessService CI と EMS モニタ CI（リーフ・ノード）が作成されます。

注：トポロジ・スクリプトには、EMS モニタ CI（統合によって作成されるトポロジの最下位リーフ）が含まれている必要があります。

標準設定の統合タイプの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『Solutions and Integrations』（英語版）の「Understanding Host, Business Service, or Host-Software Element Integration Types」を参照してください。

ホスト・トポロジ

標準設定では、作成したトポロジにノード CI と EMS モニタ CI（リーフ・ノード）が含まれています。



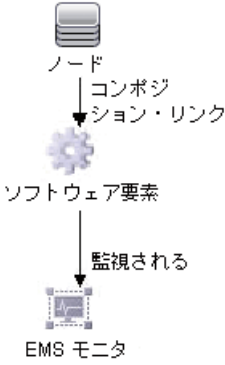
ノード CI と EMS モニタ CI には [Monitored by] 関係があります。EMS モニタ CI からノード CI に状態が渡されます。

ホスト - ソフトウェア要素トポロジ

このトポロジで監視対象システムから取得するデータ・タイプは、**ソフトウェア要素イベント**と**システム・イベント**の 2 つです。

- ▶ **ソフトウェア要素イベント**。このデータは、サービスまたはアプリケーションに影響するデータとして認識されます。これらのイベントは、関連する CI のシステム KPI にマッピングされます。これらのイベントはノード CI に伝播されません。
- ▶ **システム・イベント**。このデータは、サービスまたはアプリケーションに影響しない、管理対象アプリケーションから取得するほかのすべてのデータになります。このデータでは状態がノード CI に渡されます。システム・イベントを受信するノード CI と実行中ソフトウェア CI 間に関係がある場合、アプリケーション CI に状態を伝播できます。このイベントは、関連する CI のシステム KPI にもマッピングされます。

次の表に、それぞれのイベント・タイプ用に作成されたトポロジを示します。

ソフトウェア要素イベント用に作成されたトポロジ	システム・イベント用に作成されたトポロジ
	

イベントがサービス・イベントのカテゴリに属していない場合、イベントはシステム・イベントとみなされます。

どのデータがアプリケーション・データまたはサービス・データとみなされて、どのデータがみなされないのかを設定できます。次のようにトポロジ・スクリプトを編集して、これらの指示を設定できます。

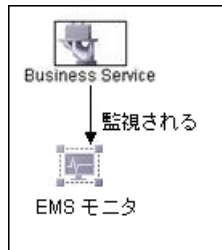
トポロジ・スクリプトの次の文字列を検索します。

if (subject != "system"):

変数 **subject** は、取得したサンプルのサブジェクト・フィールド（イベントのフィールドのマッピングで定義されます）を表します。値 **system** は、「システム」データとみなされ、実行中ソフトウェア CI に転送されないアプリケーションからのデータを表す値の一例です。この「システム」データはノード CI に転送されます。

チケット

標準設定では、作成したトポロジには **BusinessService CI** と 2 つの **EMS モニタ CI**（実行中ソフトウェアを監視するものとノードを監視するもの）が含まれています。**BusinessService CI** と **EMS モニタ CI** には [Monitored by] 関係があります。



EMS モニタ CI から **BusinessService CI** に状態が渡されます。

トポロジ・スクリプトの編集

トポロジを設定するには、統合モニタの作成時に [トポロジ設定] 領域に表示される Jython スクリプトを編集する必要があります。[トポロジ設定] フィールドのスクリプトは、SiteScope に付属するスクリプト・エディタを使用して編集できます。

[ホスト], [ホスト - ソフトウェア要素], [チケット] のトポロジは、必要な情報を使用して事前に設定されています。次に、独自のトポロジを作成する場合に使用するスクリプトの編集ガイドラインを示します。

- このスクリプトを編集する前に Jython 言語を理解しておくことをお勧めします。
- Jython 言語では、スペースやタブの有無が区別されるため、スクリプトの編集時には注意が必要です。
- `import` セクションはそのままにしておき、追加のみ行ってください。
- スクリプトの本文は必須で、次のように構成されています。

```
def DiscoveryMain(Framework)
```

この本文の機能には、Object State Holder Vector (OSHV) の結果を作成する役割があります。これには、CI データや、受信サンプルを CI にマッピングする方法が保持されています。

- 各 CI で使用できる EMS モニタ CI (リーフ・ノード) は 1 つのみです。
- イベント・スクリプトの場合、次の式がスクリプトの最後の行に必ず表示されます。

```
Framework.setUserObject("result_object",monitoredCiType)
return OSHVResult
```

変数 `monitoredCiType` は、イベントを受信する EMS モニタ CI によって監視される CI タイプです。

取得する 1 つのイベントに対して複数の EMS モニタ CI をスクリプトで作成した場合、どの CI がイベントに属し、状態を渡すのかを決定する必要があります。これを行うには、適切な値を `monitoredCiType` に割り当てます。たとえば、アプリケーション CI 用の EMS モニタ CI と、ノード CI 用の EMS モニタ CI をスクリプトで作成した場合、イベントからノード CI に状態が渡されるには、変数 `monitoredCiType` の値が "host" である必要があります。

- ▶ サンプルの到着時に組み込みの“ログ機能”を使用してトポロジ・スクリプトをデバッグします。これを行うには、ログ・ファイルにレポートする情報のレベルとタイプを変更します。次のように、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%conf%core%Tools%log4j%PlainJava%log4j.properties ファイルのログ・ファイル設定を変更します。

- a **log4j.properties** ファイルをテキスト・エディタで開き、ファイルにある次の行を特定します。

```
# Jython prints
log4j.category.PATTERNS_DEBUG=${loglevel}, integration.appender
```

次のように、**log4j.category.PATTERNS_DEBUG** の引数を **\${loglevel}** から **DEBUG** に変更します。

```
log4j.category.PATTERNS_DEBUG=DEBUG, integration.appender
```

- b ファイルを保存します。変更が有効になるまで数秒かかる場合があります。

この結果は **bac_integration.log** ファイルに記録されます。

Jython のプロパティ・ファイル

<SiteScope のルート・ディレクトリ>%discovery%discovery_agent.properties ファイルで、Jython スクリプトの特性の多くが制御されます。通常、このファイルを編集する必要はありません。このファイルには、Jython スクリプトの実行に必要なすべてのプロパティがあらかじめ含まれています。

証明書がある安全な BSM インストールで作業している場合、このファイルにあるいずれかのプロパティの編集が必要になる可能性があります。編集する場合、ファイルに次の行を挿入する必要があります。

```
appilog.agent.Probe.BasicAuth.Realm=MyPrivateFile
```

ここで、**myPrivateFile** は証明書領域の変数です。所定の URL がどの領域に属しているかを調べるには、Web ブラウザで URL を開いてポップアップ・ボックスの最初の行を確認します。

注： **jython.properties** を変更した場合、SiteScope を再起動して変更を有効にする必要があります。

タスク

統合モニタのデプロイ方法

次の場所で作業しているときに統合モニタをデプロイできます。

- [システム可用性管理] を開く BSM の [EMS 統合管理]。
- [システム可用性管理] で直接。
- BSM をレポートするスタンドアロン SiteScope。

このタスクでは、統合モニタをデプロイする手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 457 ページ「SiteScope の選択」
- 458 ページ「統合モニタのグループの作成」
- 458 ページ「統合モニタの設定」
- 459 ページ「BSM での測定値フローのインジケータ・マッピングの編集」
- 460 ページ「フィールドのマッピングとトポロジ・スクリプトの編集」

1 SiteScope の選択

システム可用性管理で、統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』（PDF）の「システム可用性管理」を参照してください。

注：この手順は、BSM から SiteScope にアクセスするユーザのみに適用されます。

2 統合モニタのグループの作成

統合モニタ専用のグループを作成することをお勧めします。これにより、BSM にレポートされるデータを統合からのデータとして簡単に識別できるようになります。

ユーザ・インタフェースの詳細については、315 ページ「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

3 統合モニタの設定

モニタを設定して、モニタの設定に必要なデータを追加する必要があります。次のアプリケーション固有の統合を選択できます。

- ▶ HP OM イベント・モニタ（詳細については、『Monitor Reference』ガイド（英語版）を参照してください）

注：SiteScope が BSM バージョン 9.00 以降に接続されている場合（SiteScope 11.00 にアップグレードされた以前のバージョンの SiteScope でモニタが作成されている場合は除きます）、HP OM イベント・モニタは使用できません。Event Management Foundation ライセンスを所有していて、HP Business Service Management 文書ライブラリの『HP Business Service Management デプロイメント・ガイド』（PDF）の手順に従って統合を設定している場合は、OM イベントを HPOM サーバから BSM 9.00 に転送できます。

- ▶ HP Service Center モニタ（詳細については、『Monitor Reference』ガイド（英語版）を参照してください）
- ▶ NetScout イベント・モニタ（詳細については、『Monitor Reference』ガイド（英語版）を参照してください）

次の汎用統合モニタを選択できます。

- ▶ テクノロジ・データベース統合モニタ（詳細については、『Monitor Reference』ガイド（英語版）を参照してください）
- ▶ テクノロジ・ログ・ファイル統合モニタ（詳細については、『Monitor Reference』ガイド（英語版）を参照してください）

- ▶ テクノロジ SNMP トラップ統合モニタ（詳細については、『Monitor Reference』ガイド（英語版）を参照してください）
- ▶ テクノロジ・データベース統合モニタ（詳細については、『Monitor Reference』ガイド（英語版）を参照してください）

4 BSM での測定値フローのインジケータ・マッピングの編集

BSM でインジケータを手動で定義し、EMS モニタの測定値にマッピングすることもできます。SiteScope モニタの測定値は、インジケータに構成アイテム (CI) の状況の詳細ビューが表示されるようにインジケータにマッピングされます。

- a BSM では、フィールド・マッピングで定義される EMS 製モニタのタイプである新しいモニタ・タイプのインジケータ割り当てを作成します。タスクの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「インジケータ割り当ての作成方法と管理方法」を参照してください。

例：

製造時のモニタ・タイプが **MyDiskMonitorType** の場合、**MyDiskMonitorType** モニタの [新規割り当て] ダイアログ・ボックスで新しいモニタ・タイプ **MyDiskMonitorType** を作成し、測定値パターンに **diskFull** を入力します（これはフィールド・マッピングで定義される測定値名です）。Disk など、この測定値をマッピングするインジケータを選択します。コンピュータの CI タイプに適切なインジケータを選択する必要があります。

- b インジケータ・マッピングの定義後は、[変更の適用] をクリックして、SiteScope にインジケータ・マッピングを適用します。
- c SiteScope で、統合モニタ・インスタンスを作成し、測定値 サンプル・タイプをロードします。
- d [フィールドのマッピング] セクションで、次を入力します。

```
MonitorName="<MyMonitor>"
TargetName="<server_name>"
MonitorState="Disk is almost full"
MonitorType="MyDiskMonitorType"
MeasurementName(1)="diskFull"
Value(1):DOUBLE=90.0
```

- e **〔保存〕** をクリックします。製造時のモニタに定義されたマッピングに応じて、トポロジ、モニタ・データ、設定サンプルで適切なインジケータが送信されます。

5 フィールドのマッピングとトポロジ・スクリプトの編集

汎用統合モニタまたは特別なカスタマイズでは、次の作業を行う必要があります。

- ▶ フィールドのマッピングを編集します。概念の詳細については、467 ページ「統合モニタのフィールドのマッピング」を参照してください。
- ▶ トポロジ設定を編集します。概念の詳細については、450 ページ「テクノロジー統合モニタのトポロジ設定」を参照してください。

参照情報

廃止された統合モニタのリスト

次の表に、廃止された統合モニタと、それぞれの代替となるテクノロジー統合モニタを示します。

廃止されたモニタ	推奨モニタ
Avalon イベント	テクノロジー SNMP トラップ
BMC Patrol イベント	テクノロジー SNMP トラップ, テクノロジー・ログ・ファイル
BMC Patrol	テクノロジー・ログ・ファイル
CA Unicenter イベント (1)	テクノロジー SNMP トラップ
Compaq Insight Manager イベント (2)	テクノロジー・データベース
HP Systems Insight Manager イベント	テクノロジー・データベース
NetCool イベント	テクノロジー SNMP トラップ
NetIQ (3)	テクノロジー・データベース
Remedy チケット発行	テクノロジー・データベース
Tivoli TEC イベント	テクノロジー・データベース
Tivoli DM	テクノロジー・データベース
WhatsUp イベント (4)	テクノロジー・ログ・ファイル

次に、テクノロジー・モニタを設定して、廃止されたモニタを置換する方法の例を示します。

- (1) CA Unicenter エージェントを設定して、テクノロジー置換モニタが設定されている SiteScope ホスト・マシンに SNMP トラップを送信します。
- (2) Compaq Insight Manager バージョン 7.0 の場合、**Notices**, **NoticeType**, **Devices**, **StringResource**, **StringTableLarge** のテーブルから読み取るように SiteScope 置換モニタを設定します。

(3) NetIQ バージョン 5.0 および 5.1 の場合、テーブル **Data**（未処理データが含まれています）および **DataHeader**（NetIQ で監視するオブジェクトのメタデータが含まれています）に対してクエリを実行するように SiteScope 置換モニタを設定します。

(4) WhatsUp バージョン 8.0 の場合、ログ・ファイル **EV-＜日付＞.tab** から読み取るように SiteScope 置換モニタを設定します。

注：モニタ設定ファイル **main.config** は、SiteScope 8.x から使用されなくなりました。**main.config** でサポートされていたすべての機能は、現在 **event.config** でサポートされており、[フィールドのマッピング] 設定で使用できます。

トラブルシューティングと制限事項

このセクションでは、SiteScope 統合モニタを使って作業する場合のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- ▶ 462 ページ「統合モニタのログ」
- ▶ 463 ページ「そのほかのログおよびトラブルシューティングの問題」
- ▶ 464 ページ「トラブルシューティングの追加情報」

統合モニタのログ

統合モニタの活動は、＜SiteScope のルート・ディレクトリ＞¥logs¥**RunMonitor.log** および＜SiteScope のルート・ディレクトリ＞¥logs¥**bac_integration¥bac_integration.log** に記録されます。

ログ・ファイルにレポートする情報のレベルとタイプを変更するには、＜SiteScope のルート・ディレクトリ＞¥conf¥core¥Tools¥log4j¥PlainJava¥**log4j.properties** ファイルのログ・ファイル設定を変更します。ログ記録メカニズムを次のように設定できます。

- ▶ ログに記録された情報を、標準設定の詳細度よりも低いまたは高い状態でレポートする。
- ▶ 統合モニタから BSM に送信されるすべてのサンプルをログに記録する。
- ▶ 外部 EMS システムから受信したすべてのイベントをログに記録する。

ログの設定を変更するには、次の手順で行います。

- 1 **log4j.properties** ファイルをテキスト・エディタで開きます。
- 2 統合モニタから BSM に送信されるサンプルをログに記録するように指定するには、次の手順で行います。

- a ファイルの次の行を特定します。

```
log4j.category.EmsSamplePrinter=${loglevel}, integration.appender
log4j.additivity.EmsSamplePrinter=false
```

- b 次のように、**log4j.category.EmsSamplePrinter** の引数を **\${loglevel}** から **DEBUG** に変更します。

```
log4j.category.EmsSamplePrinter=DEBUG, integration.appender
```

- c ファイルを保存します。変更が有効になるまで数秒かかる場合があります。

この結果は **bac_integration.log** ファイルに記録されます。

- 3 外部 EMS システムから受信したすべてのイベントをログに記録するように指定するには、次の手順で行います。

- a ファイルの次の行を特定します。

```
log4j.category.EmsEventPrinter=${loglevel}, monitors.appender
log4j.additivity.EmsEventPrinter=false
```

- b 次のように、**log4j.category.EmsEventPrinter** の引数を **\${loglevel}** から **DEBUG** に変更します。

```
log4j.category.EmsEventPrinter=DEBUG, monitors.appender
```

- c ファイルを保存します。変更が有効になるまで数秒かかる場合があります。

この結果は **RunMonitor.log** ファイルに記録されます。

その他のログおよびトラブルシューティングの問題

- ▶ <SiteScope のルート・ディレクトリ>%logs%error.log および <SiteScope のルート・ディレクトリ>%logs%bac_integration.log でエラーを探します。

- ▶ サンプルが作成され SiteScope から送信されているが、BSM のサービス状況、イベント・ログ、SiteScope レポートにない場合、**<BSM のルート・ディレクトリ> %log%mercury_wde%** ディレクトリの **wde.logl** および **loader.logl** ファイルで文字列 **ERROR** または **WARN** を検索し、フィールドや値の欠落が原因でサンプルが削除されていないかどうかを確認します。
- ▶ **<BSM のルート・ディレクトリ>%conf%core%Tools%log4j%EJB%ble.properties** ファイルでサービス状況のログ・レベルを上げて、サービス状況でサンプルが受信されていることを確認します。次のパラメータを特定し、ログ・レベルの状態を **DEBUG** に変更します。

log4j.category.Trinity.BLE_SAMPLES=DEBUG, trinity.samples.appender

この結果は **<BSM のルート・ディレクトリ>%log%EJBContainer% TrinitySamples.log** に記録されます。

注：問題の原因を特定したら、システムが過負荷にならないようにログ・レベルを標準設定にすることをお勧めします。

トラブルシューティングの追加情報

トラブルシューティングの追加情報は、HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報 (<http://support.openview.hp.com/selfsolve/documents>) (技術情報にログインするには HP Passport ID が必要です) およびドキュメントの次の節にあります。

- ▶ テクノロジ・データベース統合モニタについては、『Monitor Reference』ガイド (英語版) の「Troubleshooting the Technology Database Integration Monitor」を参照してください。
- ▶ テクノロジ・ログ・ファイル・モニタについては、『Monitor Reference』ガイド (英語版) の「Troubleshooting the Technology Log File Integration Monitor」を参照してください。

- ▶ テクノロジ SNMP トラップ・モニタについては、『Monitor Reference』ガイド（英語版）の「Troubleshooting the Technology SNMP Trap Integration Monitor」を参照してください。
- ▶ テクノロジ Web サービス統合モニタについては、『Monitor Reference』ガイド（英語版）の「Troubleshooting the Technology Web Service Integration Monitor」を参照してください。

13

統合モニタのフィールドのマッピング

本章の内容

概念

- ▶ 統合モニタのフィールドのマッピングの概要 (468 ページ)
- ▶ フィールドのマッピングの構造について (471 ページ)

参照情報

- ▶ イベント・サンプルのフィールドのマッピングの設定 (472 ページ)
- ▶ 測定値サンプルのフィールドのマッピングの設定 (478 ページ)
- ▶ チケット・サンプルのフィールドのマッピングの設定 (484 ページ)
- ▶ イベント・ハンドラの構造 (488 ページ)

概念

統合モニタのフィールドのマッピングの概要

統合モニタとそのフィールドのマッピング・スクリプトを設定して、Enterprise Management Systems や自動サポート・システムなどの管理アプリケーションのイベントおよび測定値データをキャプチャできます。

統合モニタは、モニタの設定のユーザ・インタフェースでカスタマイズするフィールドのマッピングによって異なります。マッピングによって、受信データの処理や BSM に転送される出力サンプルが定義されます。

特定の EMS アプリケーション（HP OM, HP Service Center, NetScout など）で使用するよう設計された統合モニタは、フィールドのマッピング・スクリプトを編集しなくても設定できます。これらのマッピングは HP によって事前に定義されているため、特別なカスタマイズが必要な場合以外は変更する必要はありません。これらのフィールドのマッピング・スクリプトの編集の詳細については、デプロイするモニタのユーザ・インタフェースの各ページにあるフィールドのマッピング要素の説明を参照してください。

テクノロジー統合モニタ（テクノロジー SNMP トラップ・モニタ、テクノロジー・ログ・ファイル・モニタ、およびテクノロジー・データベース・モニタ）の場合、サンプル・タイプを選択する必要があります。必要なスクリプトのテンプレートはフィールドのマッピングのテキスト・ボックスに直接ロードされます。組織のニーズに合わせてフィールドのマッピング・スクリプトを編集する必要があります。テクノロジー Web サービス統合モニタのフィールドのマッピングもカスタマイズする必要があります。

次に、選択できるサンプル・タイプを示します。

- ▶ **イベント** : イベント・データを BSM に転送する場合に選択します。

[**イベント**] を選択し、トポロジ設定を使用して BSM に統合する場合、[**ホスト**]、[**ホスト - ソフトウェア要素**]、[**カスタム**] のトポロジ・スクリプト・テンプレートを選択できます（自分で Jython トポロジ・スクリプトを作成する必要があるので、Jython 言語を十分理解している場合に限りです）。

注 :

- ▶ EMS アプリケーションによって送信されるイベントは、イベントのサンプルです。それらのイベントは、BSM の オペレーション管理 イベントと同じではありません。
- ▶ SiteScope の 11.00 以前のバージョンを BSM 9.00 に接続している場合、モニタのトポロジ・テンプレート・スクリプトでは**ホスト・アプリケーション**のトポロジ・スクリプト・テンプレートは使用できません。**ホスト・アプリケーション**をレポートする既存の統合（BSM 8.x に接続されている SiteScope で作成）のみ、引き続き BSM 9.00 にレポートします。このスクリプト・テンプレート・タイプを使用して新しい統合を作成することはできません。

-
- ▶ **測定値** : 測定値データを BSM に転送する場合に選択します。

[**測定値**] を選択し、トポロジ設定を使用して BSM に統合する場合、次のトポロジ・スクリプト・テンプレートから選択できます。

- ▶ **SiteScope トポロジ** : SiteScope トポロジ（モニタ）を送信する場合に選択します。これは標準設定です。SiteScope ではこのデータをノード CI のサブタイプであるコンピュータ CI にレポートします。
- ▶ **トポロジなし** : トポロジを送信しない場合に選択します（ただし、データおよび設定のサンプルはまだ送信される）。
- ▶ **カスタム** : 独自のトポロジを作成できます。自分で Jython 言語でトポロジ・スクリプトを作成する必要があるので、Jython 言語を十分理解している必要があります。

注：SiteScope は、BSM で定義されたカスタムの EMS 製のモニタのインジケータ定義を使用します（コンピュータ CI タイプに適用）。別の ETI がモニタのフィールド・マッピングで指定された場合、これにより標準設定のインジケータ定義が上書きされます。

▶ **チケット：**チケット・データを BSM に転送する場合に選択します。

[**チケット**] を選択し、トポロジ設定を使用して BSM に統合する場合、[**チケット**] または [**カスタム**] のトポロジ・スクリプト・テンプレートを選択できます（自分で Jython トポロジ・スクリプトを作成する必要があるので、Jython 言語を十分理解している場合に限りです）。

トポロジ設定の選択の詳細については、450 ページ「テクノロジー統合モニタのトポロジ設定」を参照してください。

注：フィールドのマッピングを使った作業では、スクリプト・テンプレートで定義した必須フィールドおよび任意フィールドのみを使用します。詳細については、各サンプル・タイプの表を参照してください。

フィールドのマッピングの構造について

フィールドのマッピングには、データが統合モニタに到着したときの処理方法の指示が含まれています。フィールドのマッピングを構成する指示は、イベント・ハンドラにグループ化されます。イベント・ハンドラは、特定のデータに関連する指示が含まれる独立したセクションです。各イベント・ハンドラには、**一致条件**があります。SiteScope は、この条件に基づいて到着イベントに特定のイベント・ハンドラを使用するかどうかを決定できます。

イベントまたは測定値データが統合モニタに到着すると、フィールドのマッピングの各イベント・ハンドラの**一致条件**が、表示されている順序で繰り返しテストされます。一致するハンドラが検出された場合、モニタはそのハンドラの指示を使用してイベントを処理し、ハンドラに定義されたアクション（BSM への転送や破棄など）を実行します。最初に一致すると、それ以降のセクションはチェックされません。一致がない場合、イベントは破棄されます。

イベント・ハンドラ以外にも、フィールドのマッピングには統合モニタ・エンジン全体に影響を与える特別なエントリが含まれています。これらの値は `[$DEFAULT_PARAMETERS$]` セクションにグループ化されます。このセクションでは、すべてのハンドラで共通するタグの標準設定値が定義されます。フィールドのマッピングのこのセクションで任意のタグを設定できます。これは、一致するイベント・ハンドラで上書きされないかぎり、レポートされる値の作成に使用されます。受信イベントごとに、一致するイベント・ハンドラの前にこのイベント・ハンドラが必ず実行されます。

イベント・ハンドラの構造の詳細については、488 ページ「イベント・ハンドラの構造」を参照してください。

参照情報

イベント・サンプルのフィールドのマッピングの設定

イベントのサンプル・タイプは、外部システムによって収集されたイベントを抽出し、BSM にインポートするために使用されます。イベント・スクリプトをロードするには、統合モニタのフィールドのマッピングを設定するときに [**イベント**] サンプル・タイプを選択します。次に、[**フィールドのマッピング**] テキスト・ボックスの内容をコピーしてテキスト・エディタに貼り付け、設定を変更します。変更が完了したら、その内容を [フィールドのマッピング] テキスト・ボックスにコピーします。

本項の内容

- ▶ 473 ページ「イベント・スクリプトの必須値」
- ▶ 474 ページ「イベント・スクリプトの任意値」
- ▶ 476 ページ「条件式の例 1」
- ▶ 476 ページ「条件式の例 2」
- ▶ 477 ページ「イベント・スクリプトの例」

イベント・スクリプトの必須値

次の表に、イベント・スクリプトの必須値を示します。

フィールド名	タイプ	説明	例
time_stamp	DOUBLE	1970 年 1 月 1 日以降の秒単位のタイムスタンプ。	time_stamp:DOUBLE=str_to_seconds(\$time,"yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS"). time_stamp:DOUBLE=time()
severity	INT	事前に設定された次のいずれかの重大度になります（該当の整数に基づきます）。 0:SEVERITY_UNKNOWN 1:SEVERITY_INFORMATIONAL 2:SEVERITY_WARNING 3:SEVERITY_MINOR 4:SEVERITY_MAJOR 5:SEVERITY_CRITICAL	severity:INT=SEVERITY_MINOR
target_name	STRING	イベントを生成したデバイスまたはホストの名前。	target_name=\$hostName target_name=resolveHostName (String host name)
status	STRING	イベントの状態（外部 EMS での名称）。	status="OPEN" status="ASSIGNED" status="CLOSED"
subject	STRING	イベントの対象（CPU, SAP アプリケーション, ハード・ディスクなど）。イベント・ソースを表す中/高レベルの階層です。	subject="DISK"

フィールド名	タイプ	説明	例
instance	STRING	イベントを生成した対象のインスタンス（D:¥ など）。イベント・ソースを表す最下位レベルの階層です。	instance="E:¥¥"
description	STRING	イベントのテキスト説明。	description="free space on drive e is below 10%"
data_source	STRING	イベントを生成したシステム。	data_source="HP OVO"

イベント・スクリプトの任意値

次の表に、イベント・スクリプトの任意値を示します。

フィールド名	タイプ	説明	例
target_ip	STRING	イベントを生成したホストまたはデバイスの IP。	target_ip=\$IPString
object	STRING	イベント・ソースを表す階層の任意レベル。	object="OS"
event_id	STRING	該当のイベントの一意の識別子。	event_id=\$id
logical_group	STRING	該当のイベントの論理グループ。	logical_group="error messages"
monitor_group	STRING	該当のイベントをレポートしたモニタ・グループ。	monitor_group="log monitors on ¥¥hostname"
orig_severity_name	STRING	重大度（外部 EMS での名称）。	orig_severity_name="Cleared"
acknowledged_by	STRING	該当のイベントを確認したユーザの名前。	acknowledged_by=\$username
owner	STRING	該当のイベントを所有するユーザの名前。	owner="admin"

フィールド名	タイプ	説明	例
value	DOUBLE	イベントの数値を転送するために使用されます。	value=\$thresholdViolated
attr1	STRING	予備データ・スロット。	attr1=\$history
attr2	STRING	予備データ・スロット。	attr2=\$moreHistory
attr3	STRING	予備データ・スロット。	attr3="Design"
attr4	STRING	予備データ・スロット。	attr4=\$MonitorOutput
attr5	STRING	長い文字列用の予備データ・スロット。	attr5=\$Longhistory

イベント・サンプルのホスト DNS 解決

BSM 統合では、ノード CI の作成に使用するフィールドに FQDN（完全修飾ドメイン名）と有効な IP アドレスの両方が必要です。

FQDN や IP アドレスがわからない場合、フィールドのマッピングで次の関数を使用して名前を解決し、統合のソースからアクセスできます。

target_name=resolveHostName(\$SomeHost)

target_ip=resolveHostIP(\$SomeHost)

注：変数 **\$SomeHost** は、統合のソースの変数で置換される必要があります。

次の場合これらの関数は必要ありません。

- ▶ 統合でアクセスするソースから FQDN や IP アドレスを取得できる。この場合、**target_name=** の値 (FQDN) と **target_ip=** の値を、関数を使用せずに入力する必要があります。
- ▶ SiteScope サーバで、統合でアクセスするソースからサーバの FQDN や IP アドレスを解決できない。この場合、関数で有効な値を生成できない可能性があります。

条件式の例 1

```
severity:INT=$var6.equals("red") ? SEVERITY_CRITICAL  
: SEVERITY_INFORMATIONAL
```

この例では、6 番目の変数バインドの値が文字列**赤**と比較されます。変数バインドが文字列 **red** に等しい場合は **severity** タグの値が **SEVERITY_CRITICAL** に設定され、等しくない場合は **SEVERITY_INFORMATIONAL** に設定されます。

条件式の例 2

```
severity:INT=$var6.equals("red") ? SEVERITY_CRITICAL :  
$var6.equals("green") ? SEVERITY_INFORMATIONAL : $var6.equals("yellow")  
? SEVERITY_MINOR : SEVERITY_WARNING
```

この例では、条件演算子を連結して連鎖的に決定が行われます。6 番目の変数バインドに文字列 **red** が保持されている場合、**severity** タグの値は **SEVERITY_CRITICAL** になります。6 番目の変数バインドに文字列 **green** が保持されている場合、**severity** タグの値は **SEVERITY_INFORMATIONAL** になります。変数バインドに文字列 **yellow** が保持されている場合、タグの値は **SEVERITY_MINOR** になります。前述の条件に 1 つも該当しない場合、タグの値は **SEVERITY_WARNING** になります。

イベント・スクリプトの例

次の例では、状態が "OPEN" のイベントと、ユーザによってクリアされたイベントの 2 つのタイプのイベントが送信されます。データは、\$ 表記を使用して受信イベント・フィールドから取得されます。ほかのすべてのイベントは、最後のハンドラによって破棄されます。

```
[DEFAULT_PARAMETERS$]
#####
# NOTE: the following parameters are mandatory #
#####
time_stamp:DOUBLE=str_to_seconds($time,"yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS")
severity:INT= SEVERITY_UNKNOWN
target_name=$Device
status=$Status
subject="EMS X Events"
instance=$target
description=$description
data_source="EMS X"

#send an open event with the value in value fields and with the event id
[OPEN events]
$MATCH="OPEN".equals($Status)
$ACTION=TOPAZ_BUS_POST(event)
value:DOUBLE=parseDouble($threshold)
event_id=$uid

#send clear events with the event id and acknowledging username
[clear events]
$MATCH="CLEAR".equals($Status)
$ACTION=TOPAZ_BUS_POST(event)
event_id=$uid
acknowledged_by=$ClearedBy

[event sink]
$MATCH=true
$ACTION=DISCARD
```

測定値サンプルのフィールドのマッピングの設定

測定値のサンプル・タイプは、外部システムによって収集された測定値を抽出し、BSM にインポートするために使用されます。測定値スクリプトをロードするには、統合モニタのフィールドのマッピングを設定するときに **〔測定値〕** サンプル・タイプを選択します。次に、**〔フィールドのマッピング〕** テキスト・ボックスの内容をコピーしてテキスト・エディタに貼り付け、設定を変更します。変更が完了したら、その内容を **〔フィールドのマッピング〕** テキスト・ボックスにコピーします。

本項の内容

- ▶ 479 ページ「測定値スクリプトの必須値」
- ▶ 480 ページ「測定値スクリプトの任意値」
- ▶ 482 ページ「測定値スクリプトの例」

測定値スクリプトの必須値

次の表に、測定値スクリプトの必須値を示します。

フィールド名	タイプ	説明	例
TimeStamp	DOUBLE	1970 年 1 月 1 日以降の秒単位のタイムスタンプ。	TimeStamp:DOUBLE=time()
Quality	INT	品質 (SiteScope での名称) : 使用可能な値は QUALITY_ERROR, QUALITY_WARNING, QUALITY_GOOD です。	Quality:INT=QUALITY_ERROR
MonitorName	STRING	論理モニタ名。	MonitorName="NT cpu Monitor"
MonitorState	STRING	モニタの状態 (N/A, Good, Error など)。	MonitorState="Received " + \$count + " events"
MonitorType	STRING	モニタ・タイプ。	MonitorType="System Monitor"
TargetName	STRING	該当の監視の対象 (ホスト名など)。	TargetName=\$Device
Measurement Name(N)	STRING	N 番目の測定値の名前。	MeasurementName(1)="CPU Temperature"
Value(N)	DOUBLE	N 番目の測定値の値。	Value(1):DOUBLE=\$CPU Temperature

測定値スクリプトの任意値

次の表に、測定値スクリプトの任意値を示します。

フィールド名	タイプ	説明	例
Measurement ETI	STRING	ETI の表示名 : 注 : BSM 9.00 を使用する場合、統合 フィールド・マッピングに関連するインジ ケータ名を追加するか（追加しない場合、 代わりにシステム KPI が使用される）、シ ステム可用性管理でインジケータを設定 します。詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの 『システム可用性管理の使用』（PDF）の 「インジケータ割り当ての設定」を参照し てください。	MeasurementETI(1)= "インジケータの表示名"

フィールド名	タイプ	説明	例
Measurement CI Hint	STRING	監視対象の CI を特定し、測定値をそれらの CI に関連付ける場合に使用する CI 解決のヒント：SiteScope では、モニタの内部 ID に基づくフォーマットで用意済みの CI 解決のヒントを送信します。 EMS 測定値フィールド・マッピングでは、次の場合、カスタム CI 解決のヒントを送信する必要があることがあります。 ▶ カスタム・トポロジ・スクリプトを使用したモニタ CI のないカスタム・トポロジの送信する場合。 ▶ サードパーティの測定値を転送し、既存のトポロジにそれらを接続することのみが必要な場合。この場合、フィールド・マッピングを作成し、CI 解決のヒントを提供し、統合モニタの [トポロジ設定] で [トポロジなし] を選択します。 CI 解決のヒントは、次の注記に示すように BSM で認識可能な形式で指定する必要があります。	MeasurementCIHint(1)="@@SCDAM038.testlab"

注：CI 解決のヒントには次の形式を使用できます。

1 ノード CI のコンテキストに存在しないスタンドアロン CI：たとえば、ビジネス・アプリケーション、ビジネス・サービス、または Siebel Enterprise。CI 解決のヒントは CI 名である必要があります。

例：myBusinessService という名前のビジネス・サービス CI の場合、CI 解決のヒントは MeasurementCIHint(1)="myBusinessService" になります。CI 名は ODB で一意である必要があります。

2 ノード・トポロジ：CI 解決のヒントは完全修飾ドメイン名または @@ 区切り文字の後に続くノードの IP アドレスである必要があります。

例：IP アドレス 12.34.56.78 のノードをレポートする場合、CI 解決のヒントは "@@ 12.34.56.78" または "@@<マシン名>" になります。

3 ノード CI のコンテキストに存在する CI：実行中ソフトウェア、ノード要素、ネットワーク・エンティティから継承する CI タイプに属する CI など。ノード CI および @@ で区切られているノード CI に接続されている CI の両方のヒントで次のように指定する必要があります。

例：ノード CI に接続されている Oracle データベース CI の場合、CI 解決のヒントの形式は "<oraclesid>:<製品名>@@<fqdnhostname>" になります。

測定値スクリプトの例

次の例では、2 つの測定値が送信されます。最初の測定値 (MeasurementName(1)) では、**\$legend** フィールドから名前が、**\$value** フィールドから値が取得されます。2 番目の測定値 (MeasurementName(2)) では、定数名 **CPU Temperature** が使用され、**\$CPUTemp** フィールドからその値が取得されます。

```
#####
#      EMS Integration metricsconfig file  #
# use this file to send metrics to HP Business Service Management #
#####
[$DEFAULT_PARAMETERS$]
# time stamp in the seconds since Jan 1st 1970 format.
TimeStamp:DOUBLE=str_to_seconds($time,"yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS")

# quality in SiteScope terms QUALITY_ERROR, QUALITY_WARNING,
QUALITY_GOOD
Quality:INT=QUALITY_ERROR

# Logical monitor name
MonitorName=$kpName

#target, e.g. host name
TargetName=$parentMachineName

#the status string of the monitor (e.g.: "Log file read, 3 matches found")
MonitorState="The monitor status is: "+ $status

#the monitor type (e.g. "Log Monitor", "CPU Monitor")
MonitorType="NetIQ measurements"

#measurement name
MeasurementName(1)=$legend
#value as double
Value(1):DOUBLE=parseDouble($value)

#measurement name
MeasurementName(2)="CPU Temperature"
#value as double
Value(2):DOUBLE=parseDouble($CPUTemp)
#####
# To send more than one measurement per DB row #
# add pairs #
# MeasurementName ( * ) = #
# Value ( * ) :DOUBLE= #
# where * = 1,2,..,n #
# #####
[allR]
$MATCH=true
$ACTION=TOPAZ_BUS_POST(ss_t)
```

このスクリプトで複数の測定値を指定する場合は、各測定値について個別のサンプルが送られます。

注：各ファイルについて複数の測定値を指定する場合は、測定値に連続した番号を付ける必要があります。

失敗した場合は **RunMonitor.log** にエラーが表示されますが、エラーはモニタの状態に影響しません。

チケット・サンプルのフィールドのマッピングの設定

チケットのサンプル・タイプは、外部システムによって収集されたイベントを抽出し、BSM にインポートするために使用されます。チケット・スクリプトをロードするには、統合モニタのフィールドのマッピングを設定するときに **「チケット」** サンプル・タイプを選択します。次に、**「フィールドのマッピング」** テキスト・ボックスの内容をコピーしてテキスト・エディタに貼り付け、設定を変更します。変更が完了したら、その内容を **「フィールドのマッピング」** テキスト・ボックスにコピーします。

本項の内容

- ▶ 485 ページ「チケット・スクリプトの必須値」
- ▶ 486 ページ「チケット・スクリプトの任意値」
- ▶ 487 ページ「条件式の例」
- ▶ 487 ページ「チケット・スクリプトの例」

チケット・スクリプトの必須値

次の表に、チケット・スクリプトの必須値を示します。

フィールド名	タイプ	説明	例
time_stamp	DOUBLE	1970 年 1 月 1 日以降の秒単位のタイムスタンプ。	time_stamp:DOUBLE=str_to_seconds(\$time,"yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS").
severity	INT	事前に設定された次のいずれかの重大度になります（該当の整数に基づきます）。 SEVERITY_UNKNOWN SEVERITY_INFORMATIONAL SEVERITY_WARNING SEVERITY_MINOR SEVERITY_MAJOR SEVERITY_CRITICAL	("4".equals(\$severity) ? "Low" : ("3".equals(\$severity) ? "Average" : ("2".equals(\$severity) ? "High" : ("1".equals(\$severity) ? "Critical" : "Unknown"))))
target_name	STRING	チケットを生成したエンティティ（通常はサービス）の名前。	target_name="mail service"（ここに静的文字列を入力しないでください。チケットから動的に取得する必要があります）
data_source	STRING	チケットを生成したシステム。	data_source="ticketing"（この文字列は、HP ServiceCenter 統合ではなく汎用テクノロジー統合モニタ用に編集する必要があります）
ticket_id	STRING	チケットの ID。	ticket_id=112233
ticket_state	STRING	チケット・システムで定義したインシデント・ライフサイクルの状態。	"Open" / "Closed"

フィールド名	タイプ	説明	例
ticket_type	STRING	チケット・システムで定義したインシデントのタイプ。	"Incident"
orig_severity_name	STRING	重大度（外部 EMS での名称）。	orig_severity_name="Cleared"

チケット・スクリプトの任意値

スクリプトには、チケット・スクリプトで使える任意値を説明するためのコメントが含まれています。次の表に、チケット・スクリプトの任意値を示します。

フィールド名	タイプ	説明	例
subject	STRING	イベント・ソースを表す中/高レベルの階層。	CPU, SAP application, hard disk
instance	STRING	イベントを生成した対象のインスタンス。イベント・ソースを表す最下位レベルの階層です。	D:¥¥
object	STRING	チケット・ソースを表す階層の任意レベル。	object="OS"
logical_group	STRING	該当のチケットの論理グループ。	logical_group="error messages"
monitor_group	STRING	該当のチケットをレポートしたモニタ・グループ。	monitor_group="log monitors on ¥¥hostname"
elapsed_time	STRING	チケットの経過時間。	
orig_severity_name	STRING	チケット・システムで定義した重大度の名前。	
attr1	STRING	予備データ・スロット。	attr1=\$history
attr2	STRING	予備データ・スロット。	attr2=\$moreHistory

フィールド名	タイプ	説明	例
attr3	STRING	ビジネス・サービスを所有する組織の名前（ビジネス・サービス統合トポロジ・フローで使用する場合）。	Attr3="XYZ Inc"
attr4	STRING	ビジネス・サービスを所有する組織のタイプ（ビジネス・サービス統合トポロジ・フローで使用する場合）。	Attr4="department"
attr5	STRING	長い文字列用の予備データ・スロット。2000 文字までの値に使用します。	attr5=\$Longhistory

条件式の例

```
("4".equals($severity) ? "Low" : ("3".equals($severity) ? "Average" :
("2".equals($severity) ? "High" : ("1".equals($severity) ? "Critical" : "Unknown"))))
```

この例はチケット・サンプルの重大度を設定します。チケット・システムで使用されているステータス項と BSM で使用されているステータス項で照合を行います。

チケット・スクリプトの例

```
[$DEFAULT_PARAMETERS$]
time_stamp:DOUBLE=$time_stamp
ticket_id=$ticket_id
ticket_state=$ticketStatus
severity:INT=$severity
target_name=$target_name
data_source="ticketing"
ticket_type="Incident"
orig_severity_name=("4".equals($severity) ? "Low" : ("3".equals($severity) ? "Average"
: ("2".equals($severity) ? "High" : ("1".equals($severity) ? "Critical" : "Unknown"))))
```

イベント・ハンドラの構造

次に、イベント・ハンドラの構造を示します。

```
[name]
Matching condition
Action directive
Tags
```

一致条件、**アクション・ディレクティブ**、および追加ディレクティブの名前は、ドル記号（\$）で開始します。タグの名前はドル記号で開始されません。

フィールドのマッピングではコメントを使用できます。コメントは、**#**、**!**、または **;** のいずれかの文字で開始します。これらの文字から行末までがコメントになります。

注：フィールドのマッピングを使った作業では、スクリプト・テンプレートで定義した必須フィールドおよび任意フィールドのみを使用します。詳細については、次のセクションの表を参照してください。

本項の内容

- ▶ 489 ページ「一致条件」
- ▶ 493 ページ「基本的な文字列式」
- ▶ 493 ページ「基本的な条件式」
- ▶ 493 ページ「アクション・ディレクティブ」
- ▶ 494 ページ「タグ」
- ▶ 495 ページ「統合モニタのフィールドのマッピングの例」

一致条件

一致条件は有効なブール式である必要があります。式には、次の表で定義されている演算子と関数の呼び出しが含まれています。式では、ドル記号 (\$) 表記を使用して、処理されるイベントのコンテンツにアクセスできます。たとえば、受信イベントが SNMP トラップの場合、そのエンタープライズ OID に \$oid としてアクセスできます。モニタ固有の名前については、関連するモニタ・タイプのドキュメントを参照してください。

注：一致条件の式は、4,000 文字に制限されています。

一致条件の形式は次のようになります。

\$MATCH=Boolean expression

このブール式は以下の表に示す式の 1 つです。この説明では、この式はタグに値を割り当てるために使用されることもあります (494 ページ「タグ」を参照)。

式と関数	説明	例	次の場合に True
<, <=, >, >=, ==, !=	式が数値として正しいかどうかチェックします。INT または DOUBLE フィールドで使用できます。	\$MATCH=\$numberOfLines == 100	\$numberOfLines が 100 に等しい
		\$MATCH=\$numberOfColumns <= 107	\$numberOfColumns が 107 以下
equals(String)	文字列の相等性がチェックされます。	\$MATCH="ERROR".equals(\$status)	\$status が単語 ERROR に等しい
		\$MATCH=\$status.equals("ERROR")	\$status が単語 ERROR に等しい

式と関数	説明	例	次の場合に True
true, false	定数のブール値。	\$MATCH= true	常に true。
&&,	前述のブール式を結合するために使用されます。	\$MATCH= \$status.equals ("ERROR") \$numberOfLines == 100	\$status が単語 ERROR に等し いか、 \$numberOfLines が 100 に等しい
time()	1970 年 1 月 1 日 以降の現在の時刻 が秒単位で返され ます。DOUBLE フィールドで使用 できます。	\$MATCH= \$timestampField > (time()-600)	値 \$timestampField が 10 分前よりも新 しい（秒単位、 1970 年 1 月 1 日 以降）
parseInt (String), parseDouble (String),	文字列を数値に変 換する場合に使用 します。入力文字 列は、有効な整数 または浮動小数点 数である必要があ ります。 注：数値に変換で きない文字列に対 してこの関数を呼 び出すと、エラー が発生して受信イ ベントが削除され ます。 INT または DOUBLE フィールド で使用するこ とができます。	\$MATCH= parseInt(\$size) > 10	\$size の文字列値が 10 よりも大きい整 数になる。

式と関数	説明	例	次の場合に True
str_to_seconds(Str1, Str2)	2 番目の文字列の形式を使用して、最初の文字列に保持されたタイムスタンプ (秒単位, 1970 年 1 月 1 日以降) が計算されます。 DOUBLE フィールドで 사용할 수도 있습니다.	\$MATCH= str_to_seconds (\$time,"yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS") > time() 注 : 時間を表すために次の記号が使用されます。 年 - 'y' 月 - 'M' 曜日 - 'd' 時間 - 'H' 分 - 'm' 秒 - 's'	\$time で指定した yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS 形式の日付が現在の時刻よりも新しい。 詳細については, SimpleDateFormat をインターネットで検索してください.
exist(\$field)	処理されるイベントのフィールドが存在しているかどうか, およびその値が空ではないかどうかチェックされます.	\$MATCH= exist(\$status)	\$status が受信イベントに存在し, 空の文字列ではない.
isInt(String), isDouble (String)	入力文字列がそれぞれ整数または倍精度浮動小数点数に変換できるかどうかチェックされます.	\$MATCH=isDouble(\$size)	\$size の文字列値が倍精度浮動小数点数に変換できる.

式と関数	説明	例	次の場合に True
resolveHostIP (String host name)	DNS 解決を実行し、サーバからその IP アドレスを求めます。 DNS 解決が失敗した場合、この関数では unknown host という値が返されます。	target_ip= resolveHostIP (\$host)	
resolveHostName (String host name)	DNS 解決を実行し、IP アドレスから完全修飾ドメイン名を求めます。 DNS 解決が失敗した場合、この関数は元の入力ホスト名を返します。	target_name= resolveHostName (\$host)	

前述のいずれかの式を使用できます。また、式では受信イベント・フィールドを参照できます。式の値 (**true** または **false**) によって、イベント・ハンドラがイベントの処理に使用されるかどうかが決まります。

基本的な文字列式

次の表に、フィールドのマッピングで使用できる文字列式の概要を示します。

操作	説明	例
+	文字列の連結。	"trap type is " + \$trap
substring	特定の文字列の部分文字列。	\$var4.substring(3,5)
indexOf	別の文字列の indexOf 文字列を返します。	\$var4.indexOf(\$var3)

基本的な条件式

サポートされる1つの条件式は？演算子です。この演算子を使用して、3つの式を1つにまとめることができます（<Conditional part> ? <if true part> : <if false part> など）。

アクション・ディレクティブ

アクション・ディレクティブの形式は次のようになります。

\$ACTION= TOPAZ_BUS_POST または DISCARD

アクション・ディレクティブの値によって、イベントが処理されて BSM に転送されるか、破棄されるかが決まります。この値は、ハンドラの一貫条件が肯定値（**true**）として評価された場合にのみ有効になります。次の表に、さまざまなアクションの効果を示します。

操作	説明	対象
TOPAZ_BUS_POST (event)	イベントを BSM のバスおよびデータベースに送信します。	BSM
TOPAZ_BUS_POST (ss_t)	測定値を SiteScope データとして HP Universal CMDB に送信します。	BSM
DISCARD	BSM にデータを送信しません。	除外するイベント

注: 測定値マッピング TOPAZ_BUS_POST(ss_t) を使用すると、データは SiteScope データとして BSM データベースに送信され、データベースに保存されます。測定値マッピングの詳細については、478 ページ「測定値サンプルのフィールドのマッピングの設定」を参照してください。

タグ

ディレクティブに加えて、イベント・ハンドラには**タグ**が含まれます。各タグは、BSM に転送されるイベントのフィールドを表します。タグの値は、イベントが統合モニタに到着したときに評価できます。

一般的なタグの形式は **name[:type]=value** です。

<name> は、スペースやドル記号 (\$) のない任意の文字列です。<type> で、BSM にレポートされるときフィールドのタイプを指定します。タイプは、**INT**、**DOUBLE** または **STRING** のいずれかになります。標準設定のタイプは **STRING** です。

タグを定義して、BSM に転送するイベントをカスタマイズできます。したがって、これらのイベントを生成する外部アプリケーションからさらに多くの値を取得できます。たとえば、モニタで、警告のテキスト説明が含まれるデータベースのテーブル列 (**AlertText**) からデータを取得する場合、イベント・ハンドラのセクションに次の行を追加してこのデータを BSM に送信できます。

```
[event handler]
$MATCH=true
$ACTION=TOPAZ_BUS_POST(event)
text=$AlertText
```

注: タグを追加する場合、必ず **\$MATCH** と **\$ACTION** の後に追加します。

統合モニタのフィールドのマッピングの例

例 1：汎用イベント・ハンドラ

```
[post them all]
$MATCH=true
$ACTION=TOPAZ_BUS_POST(event)
severity:INT=SEVERITY_INFORMATIONAL
szAlarmText:STRING="post them all handler received an event"
```

ハンドラの **\$MATCH** ディレクティブは **true** に設定されます。これにより、すべてのイベントがこのハンドラに一致し、BSM のバスに送信されます。

例 2：重大度ごとに異なるイベント・ハンドラ

```
[Error Handler]
$MATCH= $status.equals("ERROR")
$ACTION=TOPAZ_BUS_POST(event)
severity:INT=SEVERITY_CRITICAL

[Info Handler]
$MATCH= $status.equals("INFO")
$ACTION=TOPAZ_BUS_POST(event)
severity:INT=SEVERITY_INFORMATIONAL

[post them all]
$MATCH=true
$ACTION=TOPAZ_BUS_POST(event)
severity:INT=SEVERITY_INFORMATIONAL
```

この例では、**Error Handler** イベント・ハンドラに対して受信イベントが照合されます。ハンドラの条件が **true** の場合 (状態フィールドの値が **ERROR** の場合)、**severity** というフィールドがあり、その値が **SEVERITY_CRITICAL** であるイベントは BSM に送信されます。イベントは、1 つのハンドラにのみ一致します。最初の一致で処理が停止されるため、セクションでイベントが一致すると、次のハンドラによって処理されることはありません。

最初のハンドラでイベントが一致しない場合、2 番目のハンドラが処理対象になり、そのハンドラの照合 (**INFO** 状態が検索されます) を使用して 2 番目のハンドラのアクションを実行する必要があるかどうか判断されます。イベントが 2 番目のハンドラに一致しない場合、最後に 3 番目の汎用ハンドラが評価されます。

14

HP Network Node Manager との統合

本章 の内容

概念

- ▶ Network Node Manager 統合の概要 (498 ページ)
- ▶ Network Node Manager データをエクスポートするスクリプトの記述 (499 ページ)

タスク

- ▶ Network Node Manager でのイベントの設定方法 (500 ページ)

概念

Network Node Manager 統合の概要

BSM は、HP Network Node Manager (NNM) からイベントを受け取ることができます。Network Node Manager (NNM) からのイベント・データを転送するには、BSM に転送するイベントごとにスクリプトを実行するように NNM を設定します。次のいずれかのアクションを実行するスクリプトを記述し、NNM と関連付けることができます。

- ▶ NNM データをログ・ファイルに書き込む
- ▶ SNMP トラップと NNM データと一緒に SiteScope サーバに送信する

スクリプトでデータをログに書き込む場合は、テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタを使用してデータを読み取り、BSM に転送します。SNMP トラップを SiteScope サーバに送信するスクリプトを使用する場合は、SNMP トラップを受信して BSM に転送するように設定したテクノロジー SNMP トラップ統合モニタを使用します。

Network Node Manager データをエクスポートするスクリプトの記述

使用するスクリプトは、Network Node Manager からのデータをコマンド・ライン引数として受け取り、データを BSM に転送できるように処理する必要があります。次の各項では、NNM データのエクスポートに使用可能なスクリプト例について説明します。

本項の内容

- ▶ 499 ページ「ログ・ファイルへの書き込みを行うサンプル・スクリプト」
- ▶ 499 ページ「SNMP トラップ・データを送信するサンプル・スクリプト」

ログ・ファイルへの書き込みを行うサンプル・スクリプト

次の Perl スクリプトは、コマンド・ラインからデータを受け取り、ログ・ファイル統合モニタで解析可能なカンマ区切りベクトル値としてログ・ファイルに書き込みます。

```
#!/usr/bin/perl
open LOG, ">>log1.log" or die;
print LOG (join ',', @ARGV) . "\n";
close LOG;
```

SNMP トラップ・データを送信するサンプル・スクリプト

次の Perl スクリプトは、コマンド・ラインからデータを受け取り、テクノロジー SNMP トラップ統合モニタでキャッチ可能な SNMP トラップ内のメッセージとして送信します (Network Node Manager で生成された SNMP データを使用)。第 1 パラメータとしてトラップの送信先となるホスト名を、第 2 パラメータとして警告の文字列記述を受け取ります。

```
#!/usr/bin/perl
$host = $ARGV[0];
$message = $ARGV[1];
system("snmptrap $host %\"%\"%\"%\" 6 0 5 system.sysDescr.0 \" . \"octetstringasci
$message");
```

タスク

Network Node Manager でのイベントの設定方法

要求されたイベント用のスクリプトを実行するように NNM 7.x を設定するには、次の手順を使用します。

- 1 [オプション]** メニューから、**[イベント設定]** を選択します。
- 2 [イベント設定]** ダイアログから要求されたエンタープライズおよびイベントを選択します。
- 3 [編集] > [イベント] > [イベントの変更]** ダイアログ・ボックス > **[アクション]** タブを選択します。
- 4 [自動アクションのコマンド]** テキスト・ボックスにスクリプトのコマンド・ラインを入力します。NNM 変数を使用してコマンド・ラインにデータを渡すこともできます。
- 5 [OK]** をクリックして **[イベントの変更]** ダイアログを閉じます。
- 6 [イベント設定]** ダイアログの **[ファイル]** メニューから **[保存]** を選択します。

注：NNM 及び NNMi の最新のバージョンについては、NNMi ドキュメントを参照してください。

第 V 部

リモート サーバ

15

リモート・サーバを使った作業

本章の内容

概念

- ▶ リモート・サーバの概要 (504 ページ)

タスク

- ▶ リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法 (506 ページ)
- ▶ リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法 (518 ページ)

参照情報

- ▶ リモート・サーバのユーザ・インタフェース (520 ページ)
- トラブルシューティングと制限事項 (541 ページ)

概念

リモート・サーバの概要

SiteScope では、監視するサーバへの接続を確立できる必要があります。また、Windows リモート・マシンの Windows パフォーマンス・レジストリにアクセスしたり、リモート・ユーザとして UNIX リモート・マシンでコマンド・ライン・ツールを実行するには、アカウント権限を持つユーザとして認証されている必要があります。

資格情報やプロトコルなどの接続プロパティを設定するには、[Microsoft Windows リモート サーバ] / [UNIX リモート サーバ] オプションを使用します。これにより SiteScope は、リモート環境で実行されているシステムやサービスを監視できるようになります。続いて、そのサーバのリソースとパフォーマンス・カウンタを監視するモニタを作成できます。複数のモニタで同じ接続プロファイルを使用できます。同じホスト・マシンに対して複数のリモート・サーバを作成することもできます。

注：NetBIOS 方式を使用して複数の Windows リモート・サーバを同じホスト・マシンに対して設定すると、接続は失敗します。これは、Windows NT では、複数のユーザ名を使用した同じユーザによるサーバまたは共有リソースへの複数接続が許可されていないためです（システム・エラー 1219）。

SiteScope によるリモート・サーバのデータ監視の有効化の詳細については、506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」および 518 ページ「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

ユーザ・インタフェースでこれらの設定を行う方法の詳細については、523 ページ「新規 Microsoft Windows リモート・サーバ/Microsoft Windows リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」および 531 ページ「新規 UNIX リモート・サーバ/UNIX リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。

リモート・サーバの SiteScope 監視に関するトラブルシューティングと制限事項の詳細については、541 ページ「トラブルシューティングと制限事項」を参照してください。

注：SiteScope UNIX オペレーティング・システム・アダプタを使用して、SiteScope を拡張し、標準設定ではサポートされていない UNIX のバージョンに接続してリモートで監視できます。詳細については、597 ページ「UNIX オペレーティング・システム・アダプタ」を参照してください。

タスク

リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法

このタスクでは、リモート Windows サーバのデータを監視するように SiteScope を設定する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 506 ページ「前提条件（Windows Server 2008 リモート・サーバ用）」
- ▶ 507 ページ「SiteScope でリモート Windows サーバのデータを監視できるようにする」
- ▶ 507 ページ「リモート監視用のユーザ権限を設定する」
- ▶ 508 ページ「Windows リモート・サーバの設定を行ってテストする」
- ▶ 509 ページ「結果」

1 前提条件（Windows Server 2008 リモート・サーバ用）

SiteScope では、ユーザ・アカウント制御（UAC）が有効、無効のどちらの場合も、Microsoft Windows Server 2008 のリモート・サーバの監視をサポートします。UAC が有効な場合、UAC のリモート制限を次のように無効にする必要があります。

- a [スタート] > [ファイル名を指定して実行] をクリックし、「regedit」と入力して ENTER キーを押します。
- b 次のレジストリ・サブキーを見つけてクリックします。
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Microsoft¥Windows¥CurrentVersion¥Policies¥System
- c LocalAccountTokenFilterPolicy レジストリ・エントリが存在しない場合、次の手順で行います。
 - ▶ [編集] メニューで、[新規] > [DWORD 値] を選択します。
 - ▶ 「LocalAccountTokenFilterPolicy」と入力し、ENTER キーを押します。
- d LocalAccountTokenFilterPolicy を右クリックし、[修正] をクリックします。

- e [値のデータ] ボックスで、「1」と入力し、[OK] をクリックします。
- f レジストリ・エディタを終了します。

2 SiteScope でリモート Windows サーバのデータを監視できるようにする

SiteScope でリモート Windows サーバのデータを監視するには、次のいずれかの手順を行う必要があります。

- ▶ サーバごとに個別のリモート Windows サーバ接続プロファイルを定義します。タスクの詳細については、510 ページ「リモート Windows サーバ接続プロファイルの定義」を参照してください。
- ▶ リモート・サーバへのアクセスを SiteScope に許可するドメイン・アクセス権限を設定します。モニタ設定の詳細については、511 ページ「SiteScope 監視のドメイン権限の設定」を参照してください。

3 リモート監視用のユーザ権限を設定する

SiteScope マシンのオペレーティング・システムに従って、リモート・マシンにアクセスするためのユーザ権限を設定します。モニタ設定の詳細については、513 ページ「リモート監視用のユーザ権限の設定」を参照してください。

4 Windows リモート・サーバの設定を行ってテストする

- a リモート・サーバ・ツリーでリモート Windows サーバを設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、523 ページ「新規 Microsoft Windows リモート・サーバ /Microsoft Windows リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注：

- ▶ リモート Windows サーバに SiteScope での SSH 監視を設定する場合、569 ページ「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」を参照してください。
- ▶ リモート・サーバから管理データを収集する方法として、[メイン設定] の [接続方式] フィールドで WMI を選択した場合、WMI サービスがリモート・マシンに設定されている必要があります。タスクの詳細については、516 ページ「リモート監視用の WMI サービスの設定」を参照してください。
- ▶ NetBIOS 接続方式を使用するときにリモート監視対象サーバの名前としてリテラルの IPv6 アドレスを指定する場合、IPv6 アドレスを次のようにカスタマイズする必要があります。

1. すべてのコロン (「:」) 文字をダッシュ (「-」) 文字に置き換える。
2. 「.ipv6-literal.net」というテキストを IP アドレスの最後に付加する。

たとえば、IPv6 アドレス 2004:DB8:2a:1005:230:48ff:fe73:982d は 2004-DB8-2a-1005-230-48ff-fe73-982d.ipv6-literal.net になります。

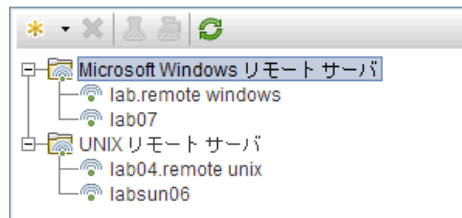
また、WMI 接続方法（サポートされている場合）に切り替えると、IPv6 アドレスを変更する必要がなくなります。

- b** SiteScope 用の Microsoft Windows リモート・サーバの定義を行ったら、該当するサーバの[テスト]  ボタンをクリックして接続をテストします。

注：リモート・カウンタを表示するときに[コンピュータに接続できません]というエラー・メッセージが表示された場合は、Microsoft Knowledge Base (<http://support.microsoft.com/kb/300702/>) を参照してください。

5 結果

リモート・サーバ・ツリーにある Windows リモート・サーバのリストにサーバが追加されます。続いて、そのサーバのリソースとパフォーマンス・カウンタを監視するモニタを作成できます。複数のモニタで同じ接続プロファイルを使用できます。



注：リモート・サーバの SiteScope 監視に関するトラブルシューティングと制限事項の詳細については、541 ページ「トラブルシューティングと制限事項」を参照してください。

リモート Windows サーバ接続プロファイルの定義

リモート Windows サーバ・データの監視には、リモート・サーバへの認証されたアクセス権が必要です。Windows サーバ接続プロファイルは、SiteScope がリモート・サーバにログオンし、そのリモート・マシンで Windows パフォーマンス・レジストリにアクセスするために必要なアドレスとログイン資格情報を提供します。

注：このタスクは上位タスクの一部です。詳細については、506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

Windows サーバ接続プロファイルを使用してリモート・サーバにログオンするには、次のいずれかを行います。

- ▶ 管理者権限を持つユーザとしてリモート・サーバにログオンします。
- ▶ リモート・サーバに、そのサーバの SiteScope 接続プロファイルで使用している接続方法とログイン権限に対応するユーザ・アカウントを作成または変更します。

SiteScope 監視のドメイン権限の設定

Windows 用の SiteScope では自動的にサーバのリストが生成され、ローカル・ドメインに表示されます。サーバにはモニタ・タイプを指定する必要があります、これらのサーバは、モニタ・タイプのサーバ・リストに表示されます。Windows で実行している SiteScope では、サーバごとに個別の接続プロファイルを作成しなくても、このリストを使用してリモート Windows サーバを監視できる場合があります。

注：このタスクは上位タスクの一部です。詳細については、506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

ドメイン権限を設定するには、次のいずれかの方法を使用します。

- ▶ **SiteScope サービスを Domain Admin グループのユーザとして実行されるように設定します。**

インストール時の標準設定では、SiteScope はローカル・システム・アカウントとして実行されるように設定されています。SiteScope サービスを、ドメイン管理権限を持つユーザとしてログオンするように設定できます。これにより、SiteScope にドメイン内のサーバ・データを監視するためのアクセス権限が付与されます。SiteScope アカウント・ユーザの変更方法の詳細については、512 ページ「SiteScope サービスのユーザ・アカウントの変更」を参照してください。

- ▶ **SiteScope が実行されているサーバを、Active Directory の Domain Admin グループに追加します（Windows 2000 以降の場合）。**

このオプションでは、SiteScope サービスは、ローカル・システム・アカウントとしてログオンするように設定されますが、SiteScope が実行されているマシンはドメイン管理権限を持つグループに追加されます。

- ▶ **非管理者アクセスを許可するように、ドメイン内のすべてのマシンのレジストリ・アクセス権を編集します。**

このオプションを使用するには、監視する各リモート・マシンでレジストリを変更する必要があります。したがって、ドメインのサーバ・リストにドメインのすべてのマシンが含まれていても、接続プロファイルなしで監視できるのは、レジストリが変更されたリモート・マシンのみです。

SiteScope サービスのユーザ・アカウントの変更

このタスクでは、SiteScope サービスのユーザ・アカウントを変更する手順について説明します。

注：このタスクは上位タスクの一部です。詳細については、511 ページ「SiteScope 監視のドメイン権限の設定」を参照してください。

SiteScope サービスのユーザ・アカウントを変更するには、次の手順で行います。

- 1** **「管理ツール」** で **「サービス」** を開き、サービスのリストから **「SiteScope」** を選択します。**「SiteScope のプロパティ」** ダイアログ・ボックスが開きます。
- 2** **「ログオン」** タブをクリックし、**「ログオン」** 領域で、リモート・サーバにアクセス可能なアカウントを入力します。
- 3** **「OK」** をクリックして設定を保存し、**「SiteScope のプロパティ」** ダイアログ・ボックスを閉じます。
- 4** **「SiteScope」** を右クリックします。**「停止」** をクリックして SiteScope サービスを停止します。
- 5** **「開始」** をクリックします。これで、SiteScope サービスで新しいアカウントが使用されます。

リモート監視用のユーザ権限の設定

SiteScope がリモート・マシンでパフォーマンス測定値を収集するには、リモート・マシンにアクセスする権限が SiteScope に必要です。本タスクでは、SiteScope マシンのオペレーティング・システムに従ってユーザ権限を設定する方法について説明します。

注：

- ▶ このタスクは上位タスクの一部です。詳細については、506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
 - ▶ Microsoft のベスト・プラクティスでは、ユーザではなくグループに権限を与えることを推奨しています。
 - ▶ レジストリを変更する前にレジストリをバックアップしてください。
-

Windows XP および Windows 2003 を設定するには、次の手順で行います。

- 1** SiteScope マシンで、[スタート] > [ファイル名を指定して実行] を選択します。[名前] テキスト・ボックスに「Regedt32.exe」と入力します。[レジストリ エディタ] ダイアログ・ボックスが開きます。
- 2** [HKEY_LOCAL_MACHINE] ウィンドウで、[SOFTWARE] > [Microsoft] > [Windows NT] > [CurrentVersion] > [Perflib] を選択します。
- 3** レジストリ・エディタのツールバーで [セキュリティ] をクリックし、[アクセス許可] を選択します。[Perflib のアクセス許可] ダイアログ・ボックスが開きます。
- 4** [名前] 表示枠で、SiteScope がリモート・マシンへのアクセスに使用するユーザを強調表示します。[アクセス許可] 表示枠で、[読み取り] の [許可] チェック・ボックスを選択します。[OK] をクリックして設定を保存し、[Perflib のアクセス許可] ダイアログ・ボックスを閉じます。

- 5 [HKEY_LOCAL_MACHINE] ウィンドウで, [SYSTEM] > [CurrentControlSet] > [Control] > [SecurePipeServers] > [winreg] を選択します。レジストリ・エディタのツールバーで [セキュリティ] をクリックし, [アクセス許可] を選択します。[Winreg のアクセス許可] ダイアログ・ボックスが開きます。
- 6 [名前] 表示枠で, SiteScope がリモート・マシンへのアクセスに使用するユーザを強調表示します。[アクセス許可] 表示枠で, [読み取り] の [許可] チェック・ボックスを選択します。[OK] をクリックして設定を保存し, [Perflib のアクセス許可] ダイアログ・ボックスを閉じます。
- 7 レジストリ・エディタのツールバーで, [レジストリ] クリックし, [終了] を選択して設定を保存し, 終了します。
- 8 SiteScope マシンを再起動します。

注: 非管理者ユーザがリモート・マシンのパフォーマンス監視を行うことができるようにする手順の詳細については, Microsoft Knowledge Base (<http://support.microsoft.com/kb/q164018/>) を参照してください。

Windows 2000 を設定するには, 次の手順で行います。

- 1 SiteScope マシンで, [管理ツール] を開き, [コンピュータの管理] を選択します。[コンピュータの管理] ダイアログ・ボックスが開きます。
- 2 [システム ツール] ツリーで, [ローカル ユーザーとグループ] ツリーを展開し, [グループ] を選択します。マシン上のすべてのグループが, 右の表示枠に表示されます。
- 3 右の表示枠で, [Administrators] グループを選択します。[Administrators のプロパティ] ダイアログ・ボックスが開きます。

- 4 SiteScope がリモート・マシンへのアクセスに使用するユーザが [メンバ] 表示枠に表示されていたら、ステップ 5 に進みます。ユーザが表示されていない場合は、[追加] をクリックします。[ユーザーまたはグループを選択] ダイアログ・ボックスが開きます。
 - a テキスト・ボックスにユーザを入力します。
 - b [OK] をクリックして設定を保存し、[ユーザーまたはグループを選択] ダイアログ・ボックスを閉じます。
- 5 [OK] をクリックして設定を保存し、[Administrators のプロパティ] ダイアログ・ボックスを閉じます。
- 6 [コンピュータの管理] ダイアログ・ボックスで、ツールバーの [ファイル] をクリックし、[終了] を選択します。
- 7 SiteScope マシンの SiteScope を再起動します。

リモート監視用の WMI サービスの設定

このタスクでは、WMI (Windows Management Instrumentation) を使用してリモート Windows サーバのデータを監視するように SiteScope を設定する手順について説明します。WMI を使用すると、パフォーマンス・ライブラリのオブジェクトのシステム・カウンタ・データにアクセスできます。これは、Perfmon ユーティリティに表示されるパフォーマンス・データと同じデータです。

注: このタスクは上位タスクの一部です。詳細については、506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 516 ページ「前提条件」
- ▶ 516 ページ「リモート・サーバに WMI サービスを設定する」
- ▶ 517 ページ「SiteScope に WMI プリファレンスを設定する (任意指定)」
- ▶ 517 ページ「モニタを設定する」

1 前提条件

SiteScope が Windows マシンにインストールされている必要があります。

2 リモート・サーバに WMI サービスを設定する

SiteScope で WMI を使用してリモート・マシンのパフォーマンス測定値を収集する場合、次の要件があります。

- ▶ リモート・マシンで WMI サービスが実行されている必要があります。WMI の使用の詳細については、WMI のドキュメントを参照してください ([http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa826517\(VS.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa826517(VS.85).aspx))。
- ▶ WMI リモート・サーバにログオンするユーザには、WMI 名前空間 **root\CIMV2** からリモートで統計情報を読み取る権限が必要です。WMI の名前空間のセキュリティの詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/295292> を参照してください。

WMI サービスの問題に関するトラブルシューティングの詳細については、548 ページ「WMI のトラブルシューティングと制限事項」を参照してください。

3 SiteScope に WMI プリファレンスを設定する（任意指定）

〔プリファレンス〕 > 〔一般プリファレンス〕 > 〔WMI プリファレンス〕では、ローカル・ホスト・マシンの Windows サーバ・リソースを監視するための接続タイプと WMI タイムアウト値を設定できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、623 ページ「WMI プリファレンス」を参照してください。

4 モニタを設定する

WMI をサポートするモニタを追加し、モニタ設定を行います。WMI をサポートするモニタのリストについては、364 ページ「Windows Management Instrumentation (WMI) をサポートしているモニタ」を参照してください。

リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法

このタスクでは、リモート UNIX サーバのデータを監視するように SiteScope を設定する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 518 ページ「SiteScope でリモート UNIX サーバのデータを監視できるようにする」
- ▶ 518 ページ「UNIX リモート・サーバの設定を行ってテストする」
- ▶ 519 ページ「結果」

1 SiteScope でリモート UNIX サーバのデータを監視できるようにする

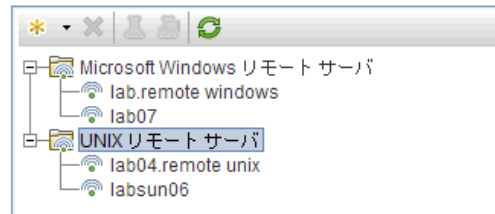
SiteScope でリモート UNIX サーバのデータを監視するには、サーバごとに個別のリモート UNIX サーバ接続プロファイルを定義します。タスクの詳細については、519 ページ「リモート UNIX サーバ接続プロファイルの定義」を参照してください。

2 UNIX リモート・サーバの設定を行ってテストする

- a リモート・サーバ・ツリーでリモート UNIX サーバを設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、531 ページ「新規 UNIX リモート・サーバ/UNIX リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b 該当するサーバの設定をテストします。
 - ▶ サーバへの接続をテストするには、[テスト]  ボタンをクリックします。
 - ▶ リモート・ホストで実行されているコマンドをテストし、定義したユーザの権限をチェックするには、[詳細テスト]  ボタンをクリックします。

3 結果

リモート・サーバ・ツリーにある UNIX リモート・サーバのリストにサーバが追加されます。続いて、そのサーバのリソースとパフォーマンス・カウンタを監視するモニタを作成できます。複数のモニタで同じ接続プロファイルを使用できます。



注：リモート・サーバの SiteScope 監視に関するトラブルシューティングと制限事項の詳細については、541 ページ「トラブルシューティングと制限事項」を参照してください。

リモート UNIX サーバ接続プロファイルの定義

リモート UNIX サーバ・データの監視には、リモート・サーバへの認証されたアクセス権が必要です。UNIX サーバ接続プロファイルは、SiteScope がリモート・サーバにログオンするために必要なアドレスとログイン資格情報を提供します。

注：このタスクは上位タスクの一部です。詳細については、518 ページ「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

UNIX サーバ接続プロファイルを使用してリモート・サーバにログオンするには、次のいずれかを行います。

- 管理者権限を持つユーザとしてリモート・サーバにログオンします。
- リモート・サーバに、そのサーバの SiteScope 接続プロファイルで使用している接続方法とログイン権限に対応するユーザ・アカウントを作成または変更します。

参照情報

リモート・サーバのユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ リモート・サーバのプロパティ・ページ (520 ページ)
- ▶ 新規 Microsoft Windows リモート・サーバ/Microsoft Windows リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス (523 ページ)
- ▶ 新規 UNIX リモート・サーバ/UNIX リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス (531 ページ)

リモート・サーバのプロパティ・ページ

このページには、ネットワーク環境に設定されたリモート・サーバに関する情報が表示されます。このページを使用して、リモート・サーバのプロファイルを追加、編集、削除できます。

アクセス方法	[リモート サーバ] コンテキストを選択する。リモート・サーバ・ツリーで、[Microsoft Windows リモート サーバ] または[UNIX リモート サーバ]コンテナをクリックします。
重要な情報	▶ SiteScope の管理者または「リモート・サーバを編集」権限が付与されたユーザのみが、[リモート サーバ] ページを表示、編集できます。 ▶ サーバがモニタから参照されている場合は、リモート・サーバのリストからそのサーバを削除できません。そのリモート・サーバを参照する各モニタの [モニタ設定] 表示枠にある [サーバ] ボックスで別のサーバを選択すると、リモート・サーバ・リストからそのリモート・サーバを削除できます。 ▶ 同じホスト・マシンに複数のリモート・サーバを作成できます。

関連タスク	➤ 506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」 ➤ 518 ページ「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」
関連情報	➤ 504 ページ「リモート・サーバの概要」 ➤ 82 ページ「リモート・サーバ・ツリー」 ➤ 541 ページ「トラブルシューティングと制限事項」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
	新規 Microsoft Windows リモート・サーバ/新規 Unix リモート・サーバ。 リモート・サーバを設定してツリーに追加できる [新規 Microsoft Windows リモート サーバ] / [新規 Unix リモート サーバ] ダイアログ・ボックスを開きます。詳細については、523 ページ「新規 Microsoft Windows リモート・サーバ/Microsoft Windows リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」および 531 ページ「新規 UNIX リモート・サーバ/UNIX リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	リモート サーバの編集： 選択したリモート・サーバのプロパティを編集できます。
	リモート サーバの削除。 選択したサーバをツリーから削除します。
	テスト。 1 つ以上のサーバとの接続をテストします。 ➤ 単一のリモート・サーバとの接続をテストする場合は、テスト結果はポップアップ・ウィンドウに表示されます。 ➤ 複数のリモート・サーバとの接続をテストする場合は、SiteScope を引き続き使用できるように、テストはバックグラウンドで実行されます。テスト結果は、[サーバ統計] > [ログ ファイル] > [その他のログ] の remotes_multi_test.log に表示されます。
	詳細テスト： UNIX リモート・サーバの実行コマンドの結果を表示するテストを実行します。このテストにより、定義済みユーザの権限を確認できます。
	すべて選択： リストされたすべてのリモート・サーバを選択します。

UI 要素	説明
	選択を解除 : 選択をクリアします。
<リモート・サーバ・リスト>	SiteScope で設定されたリモート・サーバのリストを表示します。リモート・サーバをダブルクリックすると、選択したリモート・サーバ・タイプの [リモートサーバの編集] ページが開きます。詳細については、523 ページ「新規 Microsoft Windows リモート・サーバ/Microsoft Windows リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」および 531 ページ「新規 UNIX リモート・サーバ/UNIX リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。
[名前]	SiteScope で認識されるリモート・サーバの名前。
[サーバ]	監視対象のリモート・サーバの IP アドレスまたは名前。同じホスト名のリモート・サーバを 2 つ作成できます。
[状態]	リモート・サーバの接続状態。SiteScope がリモート・サーバに接続できない場合、接続失敗の理由が示されます。
[最新のテスト]	リモート・サーバ接続が最後にテストされた日時。
[オペレーティング システム]	リモート・サーバで実行されているオペレーティング・システム。
[接続方式]	サーバ・リソース (NetBIOS, SSH, WMI, Rlogin, Telnet) を監視する接続タイプ。
[関連モニタ]	各リモート・サーバで使用されるモニタ数。各リモート・サーバで使用されるモニタ数によってテーブルを並べ替えて、未使用のリモート・サーバを削除できます (関連モニタが 0 のリモート・サーバがその後削除可能になります)。
[詳細]	リモート・サーバの詳細。

新規 Microsoft Windows リモート・サーバ/Microsoft Windows リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス

SiteScope では、各サーバにエージェント・ソフトウェアをインストールしなくても、リモート Windows サーバで実行しているシステムとサービスの多数の統計をモニタできます。これには、CPU、ディスク領域、メモリ、Windows 固有のパフォーマンス・カウンタ・データなどのサーバ・リソースの監視が含まれます。モニタの設定時に表示するサーバを選択します。SiteScope によって、リストにある各サーバ・アドレスの新しいリモート接続プロファイルが作成されます。

アクセス方法	[リモート サーバ] コンテキストを選択する。 ▶ Microsoft Windows リモート・サーバを追加するには、[Microsoft Windows リモート サーバ] コンテナを右クリックして、[新規 Microsoft Windows リモート サーバ] を選択します。 ▶ 既存の Microsoft Windows リモート・サーバを編集するには、[Microsoft Windows リモート サーバ] コンテナを展開して、編集するリモート・サーバを選択します。
重要な情報	▶ SiteScope の管理者または「リモート・サーバを編集」権限が付与されたユーザのみが、[リモート サーバ] ページを表示、編集できます。 ▶ サーバがモニタから参照されている場合は、リモート・サーバのリストからそのサーバを削除できません。そのリモート・サーバを参照する各モニタの [モニタ設定] 表示枠にある [サーバ] ボックスで別のサーバを選択すると、リモート・サーバ・リストからそのリモート・サーバを削除できます。
関連タスク	506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」
関連情報	▶ 504 ページ「リモート・サーバの概要」 ▶ 82 ページ「リモート・サーバ・ツリー」 ▶ 520 ページ「リモート・サーバのプロパティ・ページ」 ▶ 541 ページ「トラブルシューティングと制限事項」

含まれている要素は次のとおりです。

UI 要素	説明
[保存]	リモート・サーバの設定が正しいかどうかを確認せずに、設定を保存します。 注： SiteScope を使用して接続を確立してリモート・サーバで設定を検証する必要があるため、設定の保存およびテストを実行する場合よりもパフォーマンスが高速になります。
[保存およびテスト]	設定を保存して、リモート・サーバの設定が正しいかどうかを検証します。SiteScope がリモート・サーバへの接続に失敗した場合、または設定に無効なプロパティがある場合、エラー・メッセージが表示されます。 注： SiteScope によって接続が確立されてリモート・サーバで設定が検証されるため、単に設定を保存する場合よりもパフォーマンスが低速になります。

一般設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[名前]	SiteScope で認識されるリモート・マシンの名前。この名前は、接続プロファイルを使用できるモニタの [サーバ] リストに表示されます。 テンプレート・モードで作業する場合の注意事項を次に示します。 ▶ このリモート・サーバを必要とする各テンプレート・モニタに対して、テンプレート・モニタの [サーバ] ボックスにこの同じ値を入力する必要があります。 ▶ 名前が一意でない場合はデプロイメントが失敗します。
[詳細]	リモート Window サーバの詳細。このテキストは、リモートのプロパティを編集する場合にのみ表示されます。

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[サーバ]	監視対象の Windows サーバの実際の IP アドレスまたは UNC 名（仮想 IP アドレスはサポートされていません）。SiteScope サーバでホスト・ファイル、DNS、または WINS/DNS 統合を使用してこの一般名を IP アドレスに変換できる場合は、IP ホスト名も使用できます。 同じホスト・マシンに複数のリモート・サーバを作成できます。たとえば、NetBIOS プロトコルを使用する 1 つのリモート・サーバと、WMI を使用する同じホスト・マシンの別のリモート・サーバを作成し、[一般設定] で一意の名前を指定できます。 同時に複数のサーバを設定するときに同じログイン資格情報を使用するには、サーバ名またはアドレスをカンマ (,)、セミコロン (;)、または空白で区切って入力します。例：¥¥server1, ¥¥server2,¥¥。 注：プロファイルを追加した後に接続をテストするには、Windows リモート・サーバのリストで [テスト]  ボタンをクリックします。 テンプレート・モードで作業する場合の注意事項：%%host%% などのテンプレート変数でリモート・サーバ名を表します。これにより、テンプレートのデプロイ時に変数に必要な情報の入力を求められたときに各サーバを入力できます。変数にサーバ名を入力するたびに、そのサーバのモニタ・インスタンスが作成され、リモート・サーバ・ツリーにサーバが追加されます。ホスト名がその時点でサーバ名と一致しない場合、モニタは失敗します。 モニタ・テンプレートをデプロイするリモート・サーバが [リモートサーバ] にすでに存在する場合、モニタ・テンプレート内でそのサーバを参照できます。そのためには、SiteScope にアクセス可能なサーバを識別するシステム変数 \$\$SERVER_LIST\$\$ を参照します。詳細については、852 ページ「システム変数の構文」を参照してください。

UI 要素	説明
[資格情報]	リモート Windows サーバのユーザ名とパスワードを指定するオプションを次に示します。 ▶ ユーザ名およびパスワードを使用：手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。 ▶ ユーザ名：リモート・サーバのユーザ名を入力するか、ユーザ・ログイン名を表すテンプレート変数（%%user%% など）を使用します。 注：サーバが SiteScope マシンと同じドメイン内にある場合、ユーザ・ログイン名の前にドメイン名を追加します。例：<DOMAIN>%<username>。ドメイン内またはドメイン外のマシンにローカル・マシンのログイン・アカウントを使用する場合、ユーザ・ログイン名の前にそのマシン名を追加します。例：<machinename>%<username>。 ▶ パスワード：リモート・サーバのパスワードまたは SSH 鍵ファイルのパスフレーズを入力するか、パスワードを表すテンプレート変数（%%password%% など）を使用します。公開鍵/秘密鍵ベースの認証の SSH 認証を使用する場合、ID ファイルのパスフレーズをここに入力します。 ▶ 事前定義された資格情報を選択：サーバの事前に定義されたユーザ名とパスワードを SiteScope で自動的に指定する場合は、このオプションを選択します（標準設定）。[資格情報プロファイル] ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、[資格情報の追加] をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、789 ページ「資格情報のプリファレンスの設定方法」を参照してください。
[トレース]	従属サーバへのメッセージと従属サーバからのメッセージを追跡して、SiteScope の RunMonitor.log ファイルに記録します。 標準設定値：選択されていない

UI 要素	説明
[接続方式]	Windows サーバ・リソースを監視する接続タイプを次に示します。 ▶ NetBIOS。 Microsoft Windows NT と 2000 ネットワークの標準設定のサーバ間通信プロトコル。 注： NetBIOS 接続が使用され、[トレース] オプションが選択されている場合は、Windows プラットフォーム上の SiteScope を、リモート・サーバからパフォーマンス・カウンタ・データにアクセスするために必要な管理セキュリティ権限を持つアカウントで実行する必要があります。監視する複数のサーバが異なるドメインに存在する場合、異なるポリシーで管理されている場合、または SiteScope の実行に使用しているアカウントとは異なる固有のログインを必要とする場合は、リモート・サーバ・ビューの [Microsoft Windows リモート サーバ] オプションでこれらのサーバへの接続を定義する必要があります。 ▶ SSH： セキュア・シェル。Microsoft Windows NT/2000 ベースのネットワークにインストールできる、よりセキュアな通信プロトコル。通常、Perfex ベースの Windows SSH を使用していない場合、この接続方法では接続先の各サーバに SSH ライブラリをインストールする必要があります。Perfex および非 Perfex ベースの Windows SSH をサポートするモニタのリストについては、586 ページ「Perfex ベースまたは非 Perfex ベースの Windows SSH がサポートされているモニタ」を参照してください。SSH の要件の詳細については、561 ページ「SiteScope セキュア・シェル (SSH) を使用した監視」を参照してください。 ▶ WMI。 Windows Management Instrumentation。NetBIOS よりセキュアな通信プロトコルで、パフォーマンス・データの収集に perfmon を使用する Windows サーバ・モニタをサポートします。WMI をサポートするモニタのリストについては、364 ページ「Windows Management Instrumentation (WMI) をサポートしているモニタ」を参照してください。WMI サービスをリモート監視用に設定する方法の詳細については、516 ページ「リモート監視用の WMI サービスの設定」を参照してください。 注： WMI 接続方法で設定されたリモート・サーバは、WMI をサポートしないモニタの設定時には、使用可能なリモート・サーバのリストに表示されません。

UI 要素	説明
[リモート マシンのエンコード]	リモート・サーバのオペレーティング・システムのバージョンで、SiteScope が稼動するサーバと異なる文字エンコードが使用される場合の、リモート・サーバのエンコード。このエンコードによって、エンコードされた内容を SiteScope で適切に表示できます。 標準設定値 : Cp1252 エンコード

詳細設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[SSH ポート番号]	リモート SSH サーバで監視するポート。 標準設定値 : 22
[最大接続数]	SiteScope でこのリモートに許可されている開いた接続数。この接続を使用するように設定されたモニタが多数ある場合、開いた接続数を、潜在的なボトルネックを避けるのに十分な数に設定します。 標準設定値 : 3 注 : この設定はリモート・サーバの実行テストには適用されません。テストでは常に新しい接続を作成します。
[SSH 認証方式]	SSH 接続に使用する認証方法を次に示します。 ▶ パスワード : パスワードを使用して認証します（標準設定）。 ▶ 鍵ファイル : 公開鍵/秘密鍵認証を使用して認証します。このオプションを選択すると、SiteScope では認証にファイル <SiteScope のルート・ディレクトリ>%groups%identity の秘密鍵を使用します。対応する公開鍵がリモート・ホストの authorized_keys ファイルに含まれている必要があります。 SSH の要件の詳細については、561 ページ「SiteScope セキュア・シェル (SSH) を使用した監視」を参照してください。
[接続キャッシュの無効化]	このリモートの接続キャッシュを無効にします。標準設定では、SiteScope キャッシュで接続が開かれます。 標準設定値 : 選択されていない

UI 要素	説明
[SSH 接続の鍵ファイル]	この接続の秘密鍵を含むファイルのパスと名前。標準設定の鍵ファイルは、 <SiteScope のルート・ディレクトリ>¥groups¥identity です。この設定は、認証方法が鍵ファイルの場合にのみ適用されます。
[SSH バージョン 2 のみを使用]	SiteScope で強制的に SSH プロトコルのバージョン 2 のみを使用します。 標準設定値 : 選択されていない
[SSH Keep Alive メカニズム]	SSH バージョン 2 のセッションに Keep Alive メカニズムを使用します。このオプションは、統合 Java クライアントを使用する場合にのみ適用されます。 標準設定値 : 選択されていない
[プリインストール perfex を使用する SSH]	プリインストール perfex ベースの SSH を使用します。perfex ベースの SSH をサポートするモニタのリストについては、586 ページ「Perfex ベースまたは非 Perfex ベースの Windows SSH がサポートされているモニタ」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み
[ユーザ定義コマンドライン]	外部クライアントを使用するリモート・サーバのユーザ定義コマンドライン。実行する外部クライアントに特定のコマンドを渡す場合にこのオプションを使用します。有効な置換変数を次に示します。 ➤ \$user\$: リモート・サーバに入力されたユーザ名を変換します。 ➤ \$password\$: リモート・サーバに入力されたパスワードを変換します。 ➤ \$host\$: リモート・サーバに入力されたホスト名を変換します。

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、108 ページ「検索/フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
[タグの追加]	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、119 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

新規 UNIX リモート・サーバ /UNIX リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス

SiteScope では、各リモート UNIX サーバにエージェント・ソフトウェアをインストールしなくても、各サーバで実行されているシステムとサービスを監視して特定の統計情報（CPU、ディスク領域、メモリ、プロセスなど）を取得できます。表示するサーバは、UNIX モニタの設定時に選択します。SiteScope によって、リストにある各サーバ・アドレスの新しいリモート接続プロファイルが作成されます。

アクセス方法	[リモート サーバ] コンテキストを選択する。 ▶ UNIX リモート・サーバを追加するには、[UNIX リモート サーバ] コンテナを右クリックして、[新規 UNIX リモート サーバ] を選択します。 ▶ 既存の UNIX リモート・サーバを編集するには、[UNIX リモート サーバ] コンテナを展開して、編集するリモート・サーバを選択します。
重要な情報	▶ SiteScope の管理者または「リモート・サーバを編集」権限が付与されたユーザのみが、[リモート サーバ] ページを表示、編集できます。 ▶ リモート・サーバがほかのモニタから参照されている場合、リモート・サーバのリストからそのサーバを削除できません。そのリモート・サーバを参照する各モニタの[モニタ設定]表示枠にある[サーバ]ボックスで別のサーバを選択すると、リモート・サーバ・リストからそのリモート・サーバを削除できます。 ▶ HTTP は、リモート・サーバへの接続方法としてサポートされなくなりました。
関連タスク	518 ページ「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」
関連情報	▶ 504 ページ「リモート・サーバの概要」 ▶ 82 ページ「リモート・サーバ・ツリー」 ▶ 520 ページ「リモート・サーバのプロパティ・ページ」 ▶ 541 ページ「トラブルシューティングと制限事項」

含まれている要素は次のとおりです。

UI 要素	説明
[保存]	リモート・サーバの設定が正しいかどうかを確認せずに、設定を保存します。 注： SiteScope を使用して接続を確立してリモート・サーバで設定を検証する必要があるため、設定の保存およびテストを実行する場合よりもパフォーマンスが高速になります。
[保存およびテスト]	設定を保存して、リモート・サーバの設定が正しいかどうかを検証します。SiteScope がリモート・サーバへの接続に失敗した場合、または設定に無効なプロパティがある場合、エラー・メッセージが表示されます。 注： SiteScope によって接続が確立されてリモート・サーバで設定が検証されるため、単に設定を保存する場合よりもパフォーマンスが低速になります。

一般設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[名前]	SiteScope で認識されるリモート・マシンの名前。この名前は、接続プロファイルを使用できるモニタの [サーバ] リストに表示されます。
[詳細]	リモート UNIX サーバの説明。このテキストは、リモートのプロパティを編集する場合にのみ表示されます。

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[メイン設定]	
[サーバ]	監視対象サーバの実 IP アドレスまたはホスト名（仮想 IP アドレスはサポートされていません）。 同時に複数のサーバを設定するときに同じログイン資格情報を使用するには、サーバ名またはアドレスをカンマ (,)、セミコロン (;)、または空白で区切って入力します。 例：ほかのサーバへの接続に NetBIOS を使用している場合、「serveraddress1,serveraddress2,serveraddress3」のようにサーバ・アドレスをカンマで区切った文字列を入力します。 フォームへのほかの必要な入力完了すると、SiteScope によって、リスト内のサーバ・アドレスごとに新しいリモート接続プロファイルが作成されます。 注：ホストを追加した後に接続をテストするには、UNIX サーバのリストが表示されているテーブルで [テスト]  ボタンをクリックします。この場合、テストされるのはサーバへの接続のみです。リモート・ホストでのコマンドの実行結果を表示するテストを実行するには、[詳細テスト]  ボタンをクリックします。このテストにより、定義済みユーザの権限を確認できます。 テンプレート・モードで作業する場合の注意事項：リモート・サーバ名を表すテンプレート変数の名前を入力します (%%host%% など)。変数にサーバ名を入力するたびに、そのサーバのモニタ・インスタンスが作成され、リモート・サーバ・ツリーにサーバが追加されます。 モニタ・テンプレートをデプロイするリモート・サーバが [リモート サーバ] にすでに存在する場合、モニタ・テンプレート内でそのサーバを参照できます。そのためには、SiteScope にアクセス可能なサーバを識別するシステム変数 <code>\$\$\$SERVER_LIST\$\$</code> を参照します。詳細については、852 ページ「システム変数の構文」を参照してください。

UI 要素	説明
[資格情報]	リモート UNIX サーバのユーザ名とパスワードを指定するオプションを次に示します。 ▶ ユーザ名およびパスワードを使用。 手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。 ▶ ユーザ名： リモート・サーバのユーザ名を入力するか、ユーザ・ログイン名を表すテンプレート変数 (%%user%% など) を使用します。 ▶ パスワード： リモート・サーバのパスワードまたは SSH 鍵ファイルのパスフレーズを入力するか、パスワードを表すテンプレート変数 (%%password%% など) を使用します。公開鍵/秘密鍵ベースの認証の SSH 認証を使用する場合、ID ファイルのパスフレーズをここに入力します。 ▶ 事前定義された資格情報を選択： サーバの事前に定義されたユーザ名とパスワードを SiteScope で自動的に指定する場合は、このオプションを選択します (標準設定)。[資格情報プロファイル] ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、[資格情報の追加] をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、789 ページ「資格情報のプリファレンスの設定方法」を参照してください。
[トレース]	リモート・サーバとの間でやり取りされるメッセージを追跡して、RunMonitor.log ファイルに記録します。 標準設定値： 選択されていない
[オペレーティング システム]	リモート・サーバで実行されているオペレーティング・システム。これは、リモート・サーバから正しい情報を取得するために必要な情報です。リストからオペレーティング・システムを選択します。 リモート UNIX サーバの定義時にサポートされているオペレーティング・システムは、AIX, FreeBSD, HP-UX, HP/UX, HP/UX 64 ビット, Linux, MacOSX, NonStopOS, OPENSERVR, Red Hat Enterprise Linux, SCO, SGI Irix, Solaris Zone, Sun Solaris, SunOS, Tru64 5.x, Tru64 4.x 以前 (Digital) です。リストに含まれていないバージョンの UNIX を実行しているサーバについては、597 ページ「UNIX オペレーティング・システム・アダプタ」を参照してください。

UI 要素	説明
[接続方式]	UNIX サーバ・リソースを監視するための接続タイプを次に示します。 ▶ Rlogin。Rlogin プロトコルを使用して、リモート・サーバにログインします。 ▶ SSH：セキュリティが強化された通信プロトコルであるセキュア・シェルを使用してリモート・サーバにログインします。UNIX のバージョンによっては、ソフトウェアとセットアップが追加で必要になることがあります。SSH の要件の詳細については、561 ページ「SiteScope セキュア・シェル (SSH) を使用した監視」を参照してください。 ▶ Telnet。Telnet を使用してリモート・サーバにログインします。 接続方法の詳細については、540 ページ「リモート UNIX の接続方法」を参照してください。
[プロンプト]	リモート・システムがコマンドを処理できる時のプロンプト出力です。 標準設定値：#
[ログイン プロンプト]	システムがログインの入力を待っている時のプロンプト出力。 標準設定値：>
[パスワード プロンプト]	システムがパスワードの入力を待っている時のプロンプト出力。 標準設定値：Password
[二次プロンプト]	リモート・サーバへ Telnet 接続されたために、リモート・サーバが接続に関する詳細情報を要求する場合の二次プロンプト。複数のプロンプト文字列はカンマ (,) で区切ります。 例：リモート・サーバによっては、Telnet 接続でリモート・サーバから接続でエミュレートするターミナル・タイプの入力を要求される場合があります。この場合、二次プロンプトとして「Terminal type?」と入力します。二次プロンプトへの応答は、後述の「二次応答」ボックスに入力します。

UI 要素	説明
[二次応答を隠す]	二次応答をアスタリスクの背面に隠します。その後、このチェック・ボックスをクリアすると、隠されたデータは削除されます。 標準設定値 : 選択されていない
[二次応答]	該当リモート・サーバとの接続を確立するために必要な二次プロンプトへの応答。複数の応答はカンマ (,) で区切ります。
[シェル環境の初期化]	セッションの初めに実行するシェル・コマンド。複数のコマンドはセミコロン (;) で区切ります。このオプションでは、Telnet または SSH セッションを初期化した直後に、リモート・マシンで実行するシェル・コマンドを指定します。これらのコマンドは、SiteScope リモートごとのシェルのカスタマイズに使用できます。例として次のような場合があります。 ▶ リモート・シェルには、SiteScope スクリプトを実行するための正確なパスが設定されていない場合があります。コマンド <code>export PATH=\$PATH:/usr/local/sbin</code> を指定すると、リモート・マシンの現在のシェルの PATH にディレクトリ <code>/usr/local/bin</code> が追加されます。 ▶ リモート・シェルでは、疑似ターミナルが正しく初期化されない場合があります。コマンド <code>stty cols 1024;\${SHELL}</code> を入力すると、ターミナル幅が 1024 文字に増えます。 注 : シェル呼び出し後のコマンドは実行されません。 ▶ リモート Telnet サーバがコマンド・ラインを正確にエコー・バックしない場合があります。これにより、コマンド・ラインのエコーに依存するモニタが正常に動作しなくなる可能性があります。コマンド <code>stty echo</code> を入力すると、リモート・ターミナルが強制的にエコーされます。 ▶ 特定の UNIX シェルは、SiteScope と併用すると動作が不規則になることが判明しています。これには、<code>bash</code>、<code>ksh</code>、<code>csh</code> が含まれます。コマンド <code>/bin/sh</code> を入力すると、SiteScope 接続のシェルが <code>sh</code> に変更されます。

UI 要素	説明
[リモート マシンの エンコード]	リモート・サーバで実行されているオペレーティング・システムのバージョンが、SiteScope が稼働するサーバとは異なる文字エンコーディングを使用する場合、リモート・サーバのエンコーディングを設定します。このエンコードによって、エンコードされた内容を SiteScope で適切に表示できます。 標準設定値 : Cp1252 エンコード
[HP NonStop シェル設定]	
[シェル選択プロンプト]	(NonStop OS のみ) システムがシェルの選択を待っているときのプロンプト出力。 標準設定値 : >
[シェル名]	(NonStop OS のみ) 実行するシェル名。 標準設定値 : OSS

詳細設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[SSH ポート番号]	リモート SSH サーバで監視するポート。 標準設定値 : 22
[最大接続数]	SiteScope でこのリモートに許可されている開いた接続数。この接続を使用するように設定されたモニタが多数ある場合、開いた接続数を、潜在的なボトルネックを避けるのに十分な数に設定します。 標準設定値 : 3 注 : この設定はリモート・サーバの実行テストには適用されません。テストでは常に新しい接続を作成します。

UI 要素	説明
[SSH 認証方式]	SSH 接続に使用される認証方法を次に示します。 ▶ パスワード: パスワードを使用して認証します (標準設定)。 ▶ 鍵ファイル: 公開鍵/秘密鍵認証を使用して認証します。このオプションを選択すると, SiteScope では認証にファイル <SiteScope のルート・ディレクトリ> ¥groups¥identity の秘密鍵を使用します。対応する公開鍵がリモート・ホストの authorized_keys ファイルに含まれている必要があります。SSH の要件の詳細については, 561 ページ「SiteScope セキュア・シェル (SSH) を使用した監視」を参照してください。
[接続キャッシュの無効化]	このリモートの接続キャッシュを無効にします。標準設定では, SiteScope キャッシュで接続が開かれます。 標準設定値: 選択されていない
[SSH 接続の鍵ファイル]	この接続の秘密鍵を含むファイルのパスと名前。標準設定の鍵ファイルは, <SiteScope のルート・ディレクトリ> ¥groups¥identity です。この設定は, 認証方法が鍵ファイルの場合にのみ適用されます。
[SSH バージョン 2 のみを使用]	SiteScope で強制的に SSH プロトコルのバージョン 2 のみを使用します。 標準設定値: 選択されていない

UI 要素	説明
[SSH Keep Alive メカニズム]	SSH バージョン 2 のセッションに Keep Alive メカニズムを使用します。このオプションは、統合 Java クライアントを使用する場合にのみ適用されます。 標準設定値 : 選択されていない
[ユーザ定義コマンドライン]	外部クライアントを使用するリモート・サーバのユーザ定義コマンドライン。実行する外部クライアントに特定のコマンドを渡す場合にこのオプションを使用します。有効な置換変数を次に示します。 ▶ \$root\$: SiteScope ディレクトリを変換します。 ▶ \$user\$: リモート・サーバに入力されたユーザ名を変換します。 ▶ \$password\$: リモート・サーバに入力されたパスワードを変換します。 ▶ \$host\$: リモート・サーバに入力されたホスト名を変換します。

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、108 ページ「検索/フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
[タグの追加]	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、119 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

リモート UNIX の接続方法

次の表には、リモート UNIX サーバに SiteScope を接続する方法に関する情報が含まれています。

接続方法	説明
rlogin	rlogin にパスワードを要求するように、またはパスワードなしでアクセスできるように (rsh と同様)、リモート・サーバを設定できます。SiteScope ではどちらもサポートされています。
SSH	Solaris の場合、SSH アクセス方法を使用するには、SiteScope マシンに SSH クライアントがインストールされ、監視するサーバに SSH サーバがインストールされている必要があります。SiteScope が実行されるマシンの SSH クライアントへのパスは、 <code>/usr/local/bin/ssh</code> または <code>/usr/bin/ssh</code> である必要があります。SSH 要件の詳細については、561 ページ「SiteScope セキュア・シェル (SSH) を使用した監視」を参照してください。 SSH を使用するには、デジタル証明書が接続先の各サーバにインストールされている必要があります。
telnet	Telnet は、リモート UNIX サーバへの接続に広く使用される方法です。Telnet でパスワードを要求するように、またはパスワードなしでアクセスできるように (rsh と同様)、リモート・サーバを設定できます。SiteScope ではどちらも処理されます。

トラブルシューティングと制限事項

このセクションでは、リモート・サーバを使った作業でのトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- ▶ 541 ページ「リモート Windows サーバの SiteScope 監視」
- ▶ 543 ページ「Windows サーバ監視で推奨されるネットワーク設定」
- ▶ 543 ページ「Windows リモート・サーバのテスト時のエラー・コードについて」
- ▶ 544 ページ「リモート Windows サーバでの Microsoft Windows イベント・ログ・アクセス」
- ▶ 545 ページ「Perfex を使用したリモート Windows 接続」
- ▶ 548 ページ「WMI のトラブルシューティングと制限事項」
- ▶ 549 ページ「リモート UNIX サーバが英語ロケールに設定されていない」
- ▶ 549 ページ「NETBIOS を介して接続するリモート・ホストのシステム・リソース表示時に使用するシステム・エンコーディング」

リモート Windows サーバの SiteScope 監視

リモート Windows サーバの SiteScope 監視のセットアップとトラブルシューティングに関して、次の追加情報があります。

- ▶ PERFMON を使用してリモート・マシンに接続する場合。PERFMON を使用して接続できない場合、リモート・サーバ上の SiteScope アカウントに付与されているユーザ・アクセス権に関して問題がある可能性があります。SiteScope でサーバ統計を監視できるようにするには、特定の管理権限が必要です。
- ▶ セキュリティ上の理由から、SiteScope に管理者アカウントの全権限の使用が許可されない場合があります。SiteScope に制限付きの監視アクセス権を付与するには、Windows の特定のレジストリ・キーを編集します。リモート・マシンからレジストリへのアクセスの制限の詳細については、Microsoft Knowledge Base (<http://support.microsoft.com/kb/q153183/>) を参照してください。

- ▶ スタンドアロン・サーバ、または SiteScope サーバで表示可能になっているドメイン以外のサーバを監視する必要がある場合、[ログイン] ボックスにマシン名、スラッシュ (/)、ログイン名の順番で入力してください。例：
lonserver¥sitescope。
- ▶ NetBIOS 接続方式で Microsoft Windows Vista または Microsoft Windows 2008 リモート・サーバに接続できない場合は、代わりに WMI 接続を使用できます。
- ▶ Windows NT4 で稼動している SiteScope から Windows 2000 サーバを監視しようとする場合、いくつかの問題があります。多くの場合、問題にはオペレーティング・システムがサーバ間での通信に使用する DLL の非互換が関係しています。

注：

- ▶ Windows 2000, Windows NT, Windows XP でのパフォーマンス・データのセキュリティ確保の詳細については、Microsoft Knowledge Base (<http://support.microsoft.com/kb/q146906/>) を参照してください。
 - ▶ Windows 2000, Windows NT でのパフォーマンス・モニタ・カウンタに関する問題のトラブルシューティングの詳細については、Microsoft Knowledge Base (<http://support.microsoft.com/kb/152513/>) を参照してください。
-

Windows サーバ監視で推奨されるネットワーク設定

Windows ベースのサーバを監視する際、「システム エラー: 53 - ネットワークパスが見つかりません。」のようなネットワーク関連エラーを避けるために、WINS が有効ではないネットワークでは NetBios over TCP/IP を無効にすることをお勧めします。

- 1 [ネットワーク接続] を開きます。
- 2 設定するネットワーク接続を右クリックし、[プロパティ] をクリックします。
- 3 [全般] タブで、[インターネット プロトコル (TCP/IP)] をクリックし、[プロパティ] をクリックします。
- 4 [詳細設定] をクリックし、[WINS] タブをクリックして、[NetBios over TCP/IP を無効にする] オプションを選択します。

Windows リモート・サーバのテスト時のエラー・コードについて

問題：

リモート・サーバのテスト結果で、わかりやすいエラー・コードが状態文字列に含まれていない。

解決方法：

Windows ネットワーク・メッセージを説明し、問題解決情報を提供するには、`net helpmsg` コマンドを使用します。

次のコマンド・ラインを実行します。

`net helpmsg <エラー・コード番号>`

たとえば、「`net helpmsg 53`」と入力すると「ネットワーク パスが見つかりません。」と表示されます。

リモート Windows サーバでの Microsoft Windows イベント・ログ・アクセス

問題：

リモート Windows イベント・ログの表示時、またはリモート Windows マシンの監視に関する通知の受信時に、次のメッセージが表示される。

イベント ID (XXXX) (ソース XXXX 内) に関する説明が見つかりませんでした。次の文字列が含まれています。
処理が正常に完了しました。

原因：

コンピュータのイベント・ログをリモート・コンピュータから表示するとき、必要なレジストリ・キー（および参照ファイル）がリモート・コンピュータに存在しない場合、SiteScope はデータに形式を設定できず、データを汎用的な形式で表示します。

解決方法：

必要なレジストリ・エントリと DLL ファイルを、イベント・ビューア・アプリケーションを実行するリモート・コンピュータにコピーする必要があります。

リモート・レジストリ・エントリと DLL ファイルをローカル SiteScope マシンで取得するには、次の手順で行います。

- 1 SiteScope でイベントを正しく取得できないリモート・マシンのエントリを、イベント・ビューアで見つけます。ソース、イベント ID、記述の情報を書き留めます。例：

ソース：MSExchangeSA、イベント ID: 5008、説明：メッセージ追跡ログ ファイル
C:\exchsrvr\tracking.log\20020723.log を削除しました。

- 2 レジストリ設定

HKEY_LOCAL_MACHINE\System\CurrentControlSet\Services\EventLog\Application を開き、ソースをクリックします（MSExchangeSA など）。

- 3 **EventMessageFile** をクリックして、その DLL が存在するデータを書き留めます（C:\EXCHSRVR\bin\madmsg.dll など）。

- 4 リモートで DLL を見つけて、SiteScope マシンにコピーします。次のいずれかの方法でコピーできます。
 - ▶ BackOffice リソース・キット第 2 版の **Initlog.exe** ユーティリティを使用して、必要なレジストリ・エントリを Exchange Server コンピュータからリモート・コンピュータにコピーします。Exchange Server コンピュータの管理者権限を持つアカウントで Windows NT にログオンしている場合、このユーティリティを使用して必要な DLL ファイルをコピーすることもできます (Microsoft の記事 Q184719 を参照してください)。
 - ▶ FTP、電子メールなどを使用してファイルをローカル・ドライブにコピーします。
- 5 SiteScope は、ステップ 3 の **EventMessageFile** フィールドのデータを使用して、ローカル・マシンのどこに DLL があるかを判別します。このステップと同じフォルダ構造を作成して、ファイルをそのディレクトリに置く必要があります。または、ディレクトリ構造を **c:\Windows\System32** のように変更し (SiteScope は標準設定ではリモート・マシン上の **ADMIN\$** を参照します)、DLL をそのフォルダに置きます。ただし、この構造と DLL は両方のマシンに存在する必要があります。これを行う場合、ステップ 3 でレジストリを更新して、DLL が存在するディレクトリを反映する必要があります。



Perfex を使用したリモート Windows 接続

SiteScope がリモート・レジストリにアクセスしようとしたときに返されたデータを表示するには、次の手順に従います。

- 1 SiteScope サーバでコマンド・ウィンドウを開きます。
- 2 ディレクトリを **<SiteScope のルート・ディレクトリ>%tools** に変更します。
- 3 コマンド・ラインから次のように入力します。

```
perfex %MACHINE -u username -p password -d -elast "Application"
```

このコマンドでは、Application ログ内のエントリ数を返します。例：

```
Connected to %ex-srv as int-ss Next Record: 2369
```

- 4 探しているイベントを見つけるには、最後の 10 個か 12 個程度のイベントだけを表示する必要があります。この例では、コマンドは次のようになります。

```
perfx ¥¥MACHINE -u username -p password -d -elog "Application" 2355 | more
```

- 5 必要なエントリが見つかるまで各エントリを確認します。次回ステップ 3 のコマンドを使用するときに検索しやすいように、レコード ID を書き留めておきます。
- 6 この出力には、SiteScope が受信するデータが表示されています。今回の例では、通常は次のようなデータが返されます。

```
Type: Information
Time: 02:00:24 08/01/102
Source: MSExchangeMTA
ID: 298
Category: 1
Record: 2342
Machine: EX-SRV
FILE=C:¥EXCHSRVR¥res¥mtamsg.dll
REMOTE FILE=
String 835050d is: MTA
Next String 835054d is: OPERATOR
Next String 83505dd is: 34
Next String 835060d is: 0
Next String 835062d is:
File: C:¥EXCHSRVR¥res¥mtamsg.dll
Remote Path:
calling FormatMessage()
Formatted Message 142 bytes long
Raw message is: The most current routing information has been loaded by the MTA,
and a text copy was saved in the fileGWART0.MTA. [MTA OPERATOR 34 0] (12)
Message: The most current routing information has been loaded by the MTA, and a
text copy was saved in the file GWART0.MTA.[MTA OPERATOR 34 0] (12)
```

ファイル・パスはリモート・ファイルが検出された場所です。DLL を WINDOWS¥SYSTEM にコピーした場合、ファイルとリモート・ファイル・パスは次のようになります。

```
Type: Information
Time: 03:15:00 08/01/102
Source: MSExchangeIS Public
ID: 1221
Category: 6
Record: 2350
Machine: EX-SRV
FILE=C:¥WINNT¥SYSTEM32¥mdbmsg.dll
REMOTE FILE=¥¥ex-srv¥ADMIN$¥SYSTEM32¥mdbmsg.dll
String 835054d is: 0
Next String 835056d is:
File: C:¥WINNT¥SYSTEM32¥mdbmsg.dll
Remote Path: ¥¥ex-srv¥ADMIN$¥SYSTEM32¥mdbmsg.dll
LOADING LIB REMOTE: ¥¥ex-srv¥ADMIN$¥SYSTEM32¥mdbmsg.dllcalling
FormatMessage()Formatted Message 89 bytes long
Raw message is: The database has 0 megabytes of free spaceafter online
defragmentation has terminated.Message: The database has 0 megabytes of free
space afteronline defragmentation has terminated.
```

WMI のトラブルシューティングと制限事項

このセクションでは、次の WMI の問題に関するトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- ▶ 548 ページ「WMI の制限事項」
- ▶ 548 ページ「WMI データが同期されない」
- ▶ 549 ページ「WMI がカウンタを取得できない」

WMI の制限事項

- ▶ WMI 使用時に 4000 を超えるモニタを使用することはお勧めしません。
- ▶ カウンタまたはオブジェクトがリソース間で共有されていると、SiteScope はカウンタのデータを受信できず、クエリは失敗します。同じクエリではほかのカウンタが参照されている場合、それらのカウンタのデータも受信できません。詳細とトラブルシューティング情報については、<http://support.microsoft.com/kb/836802> を参照してください。

WMI データが同期されない

WMI データは、Perfmon ユーティリティと同期されている必要があります。WMI データが同期されていない場合、次の操作を行う必要があります。

- 1 WMI サービスが対象マシンで開始していることを確認します。詳細については、[http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa826517\(VS.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa826517(VS.85).aspx) を参照してください。
- 2 名前空間 **root\CIMV2** が、SiteScope WMI リモート・サーバで指定したユーザにリモート・アクセスを許可するように設定されていることを確認します。詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/295292> を参照してください。
- 3 対象マシンで、コマンド **perfmon** を実行し、必要な perfmon オブジェクトが表示されることを確認します。詳細については、[http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa645516\(VS.71\).aspx](http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa645516(VS.71).aspx) を参照してください。

これらのライブラリを再構築する方法の詳細については、<http://support.microsoft.com/?kbid=300956> を参照してください。

- 4 対象マシンで、コマンド **perfmon /wmi** を実行し、必要な perfmon オブジェクトが表示されることを確認します。詳細については、
[http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa645516\(VS.71\).aspx](http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa645516(VS.71).aspx) を参照してください。

必要な perfmon オブジェクトが表示されない場合、コマンド **perfmon wmiadap /f** を実行します。詳細については、
[http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa394528\(VS.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa394528(VS.85).aspx) を参照してください。

WMI がカウンタを取得できない

場合によっては、perfmon ではカウンタが値 0 を示しているのに WMI では同じカウンタが n/a を示すことがあります。perfmon ユーティリティを使用して選択できないカウンタは、このように動作します。perfex がこれらのカウンタの値を取得できるのは、perfmon をバイパスしてレジストリ経由でカウンタにアクセスしているためです。



リモート UNIX サーバが英語ロケールに設定されていない

問題：

標準設定で英語ロケールまたは英語言語に設定されていない UNIX リモート・サーバを使用すると、ファイル・モニタとディレクトリ・モニタで問題が発生する可能性があります。

解決方法：

"LANG=C; export LANG" を、問題が発生している UNIX リモート・サーバの [シェル環境の初期化] プロパティに追加します。



NETBIOS を介して接続するリモート・ホストのシステム・リソース表示時に使用するシステム・エンコーディング

この制限は、受信したデータの表示にリモート・ホストのエンコーディングを使用するすべてのサーバ・モニタに影響します。

SiteScope は、NETBIOS を介して接続するリモート・ホストのシステム・リソース情報を表示する際に、標準設定のシステム・エンコーディングを使用します。[リモート サーバのエンコード] フィールド（リモート・サーバの 525 ページ「メイン設定」で指定可能）は使用されません。たとえば、システム・エンコーディングが ASCII でリモートのエンコーディングが Unicode の場合、ASCII 文字は正しく表示され、Unicode 記号はサポートされません。

16

SiteScope での IP バージョン 6 のサポート

本章 の内容

概念

▶ IP バージョン 6 のサポート (552 ページ)

タスク

▶ SiteScope での IP バージョン 6 アドレスの優先の有効化方法 (556 ページ)

参照情報

▶ IP バージョン 6 アドレスがサポートされているモニタ (558 ページ)

概念

IP バージョン 6 のサポート

インターネット・プロトコル・バージョン 6 (IPv6) は、インターネットのネットワーク・レイヤの、インターネット・プロトコルの新しいバージョンです。IPv6 は、アドレスの枯渇、セキュリティ、自動構成、拡張性など、現在の IP バージョン (IPv4) が持つ問題の多くを解決するために設計されています。

IPv6 のサポートのレベルは、SiteScope がインストールされているオペレーティング・システムによって異なります。Windows Server 2008 では、IPv6 の全機能がサポートされ、標準設定でインストールおよび有効化されます。その結果、SiteScope が Windows Server 2008 以降にインストールされると、ほとんどの SiteScope モニタで IPv6 がサポートされます。Windows Server 2003 での IPv6 のサポートは限られており、多くのコア・サービスおよびネットワークング・コンポーネントではサポートされていません。また、SiteScope が IPv6 の完全サポートを提供する UNIX オペレーティング・システムにインストールされると、IPv6 が完全にサポートされます。

SiteScope では、標準設定で IPv4 アドレスを使用してリモート・サーバに接続します。ホスト名が IPv6 に解決されるように環境を設定するには、SiteScope の [インフラストラクチャ プリファレンス] で **[IP バージョン 6 アドレスを優先]** オプションを選択できます。このオプションが選択されている場合、IPv6 が IPv4 より優先されるには、次の条件を満たす必要があります。

- ▶ リモート・サーバにホスト名が指定されている。IP アドレスが指定されている場合、使用される IP バージョンは IP アドレスによって判断されるため、IPv6 の優先設定はホストには何の効果もありません。
- ▶ ホスト名が IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方に解決される。ホスト名が IPv4 アドレスのみに解決される場合は、IPv4 アドレスが使用されます。

注：

- ▶ ホスト名が指定されていて、ホスト名が IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方に解決されるが、モニタで IPv6 がサポートされていない場合、モニタは機能しません。この問題の解決方法の詳細については、554 ページ「IPv4 と IPv6 の混合環境での作業」を参照してください。IPv6 をサポートするモニタのリストについては、558 ページ「IP バージョン 6 アドレスがサポートされているモニタ」を参照してください。
- ▶ NetBIOS 接続方式を使用するときにリモート監視対象サーバの名前としてリテラルの IPv6 アドレスを指定する場合、IPv6 アドレスを次のようにカスタマイズする必要があります。

1. すべてのコロン (':') 文字をダッシュ ('-') 文字に置き換える。
2. 「.ipv6-literal.net」というテキストを IP アドレスの最後に付加する。

たとえば、IPv6 アドレス 2004:DB8:2a:1005:230:48ff:fe73:982d
は 2004-DB8-2a-1005-230-48ff-fe73-982d.ipv6-literal.net になります。

また、WMI 接続方法（サポートされている場合）に切り替えると、IPv6 アドレスを変更する必要がなくなります。

本項の内容

- ▶ 554 ページ「IPv4 と IPv6 の混合環境での作業」
- ▶ 555 ページ「サポートされているプロトコル」

IPv4 と IPv6 の混合環境での作業

IPv4 と IPv6 の両方が使用される混合環境で作業する場合、DNS サーバから IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方がホスト名に返されることがあります。解決される各ホスト名に使用する IP アドレスを SiteScope で指定するには、次の手順で行います。

- ▶ **[IP バージョン 6 アドレスを優先]** オプションを選択し、次のいずれかを実行します (IPv4 プロトコルを使用するホストの場合)。
 - ▶ 指定したリモート・サーバのホスト名の代わりに IP アドレスを入力します。
 - ▶ リモート・サーバで使用する IP アドレスにホスト名が解決されるように DNS サーバを設定します。これを行うには、指定したホストの DNS サーバから IPv6 アドレスを削除します。
- ▶ **[IP バージョン 6 アドレスを優先]** オプションをクリアし、次を実行します (IPv6 プロトコルを使用するホストの場合)。
 - ▶ 指定したリモート・サーバのホスト名の代わりに IP アドレスを入力します。
 - ▶ 指定したリモート・サーバで使用する IP アドレスにホスト名が解決されるように DNS サーバを設定します。これを行うには、指定したホストの DNS サーバから IPv4 アドレスを削除します。

SiteScope での IPv6 アドレス指定の有効化の詳細については、556 ページ「SiteScope での IP バージョン 6 アドレスの優先の有効化方法」を参照してください。

サポートされているプロトコル

Windows および UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope で IPv6 を使用するときサポートされるプロトコルは、次のとおりです。

ターゲット	Windows プラット フォームにインストー ルされた SiteScope	UNIX プラットフォー ムにインストールされ た SiteScope
Windows	NetBios WMI	SSH
UNIX	サポートされていま せん	SSH

注：

- ▶ Windows プラットフォームにインストールされた SiteScope では、Windows マシンのみを監視できます。
 - ▶ NetBIOS および WMI は、SiteScope が Windows にインストールされている場合のみサポートされます。SSH は Windows ではサポートされていません。
 - ▶ SSH は SiteScope が UNIX マシンにインストールされている場合のみサポートされます。UNIX 上で、SSH 経由で実行される SiteScope でサポートされる、Windows ベースのモニタのリストについては、586 ページ「Perfex ベースまたは非 Perfex ベースの Windows SSH がサポートされているモニタ」を参照してください。
-

タスク

SiteScope での IP バージョン 6 アドレスの優先の有効化方法

このタスクでは、リモート・サーバに接続するときに IPv4 アドレスより IPv6 アドレスが優先されるように SiteScope を設定する方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 556 ページ「SiteScope での IPv6 アドレスの優先の有効化」
- ▶ 557 ページ「リモート監視対象サーバの名前として IPv6 アドレスをカスタマイズ（特定のモニタのみ）」

1 SiteScope での IPv6 アドレスの優先の有効化

[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [サーバ設定] で、[IP バージョン 6 アドレスを優先] を選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、636 ページ「サーバ設定」を参照してください。

注：

- ▶ この設定の変更を有効にするには、SiteScope を再起動する必要があります。
 - ▶ ホスト名が指定されていて、ホスト名が IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方に解決されるが、モニタで IPv6 がサポートされていない場合、モニタは機能しません。この問題の解決方法の詳細については、554 ページ「IPv4 と IPv6 の混合環境での作業」を参照してください。
-

2 リモート監視対象サーバの名前として IPv6 アドレスをカスタマイズ (特定のモニタのみ)

IPv6 アドレス指定を使用する場合、一部のモニタには追加のカスタマイズ要件（制限）があります。

追加の IPv6 アドレス・カスタマイズが必要なモニタについては、558 ページ「IP バージョン 6 アドレスがサポートされているモニタ」を参照してください。

参照情報

IP バージョン 6 アドレスがサポートされているモニタ

次に、IPv6 がサポートされているモニタを示します。SiteScope で IPv6 アドレスをさらにカスタマイズする必要があるモニタには、アスタリスク (*) が付いています。

- ▶ *Citrix Monitor
- ▶ *ColdFusion Server Monitor
- ▶ *CPU Monitor
- ▶ Database Counter Monitor
- ▶ Database Query Monitor
- ▶ DB2 8.x and 9.x Monitor
- ▶ Disk Space Monitor
- ▶ *Log File Monitor
- ▶ *Memory Monitor
- ▶ *Microsoft ASP Server Monitor
- ▶ *Microsoft IIS Server Monitor
- ▶ *Microsoft SQL Server Monitor
- ▶ *Microsoft Windows Event Log Monitor
- ▶ *Microsoft Windows Resources Monitor
- ▶ *Microsoft Windows Media Server Monitor
- ▶ Oracle Database Monitor
- ▶ Ping Monitor
- ▶ Port Monitor
- ▶ *Real Media Server Monitor

- *Service Monitor
- UNIX Resources Monitor
- *URL Monitor
- *URL Content Monitor
- *URL List Monitor
- *URL Sequence Monitor
- *Web Service Monitor

17

SiteScope セキュア・シェル（SSH）を使用した監視

本章の内容

概念

- SiteScope および SSH の概要（562 ページ）
- SSH を使用したリモート Windows サーバの監視（566 ページ）

タスク

- リモート UNIX サーバでの SSH 監視の設定方法（568 ページ）
- リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法（569 ページ）

参照情報

- UNIX リモート・サーバの SSH 設定要件（585 ページ）
- Perfex ベースまたは非 Perfex ベースの Windows SSH がサポートされているモニタ（586 ページ）

トラブルシューティングと制限事項（587 ページ）

概念

SiteScope および SSH の概要

SiteScope では多数のセキュリティ機能をサポートしています。その 1 つに、セキュア・シェル (SSH) 接続を使用したリモート・サーバ監視のサポートがあります。SSH を使用してサーバに接続し、自動的にコマンドを送信できます。これにより、サーバでそのコマンドを実行してからサーバを切断できます。これは自動化された処理とスクリプトの作成に役立ちます。

セキュア・ソケット・シェルとも呼ばれるセキュア・シェル (SSH) は、UNIX ベースのコマンド・インタフェースで、リモート・コンピュータに安全にアクセスするためのプロトコルです。SSH は、Web やその他のサービスをリモート制御するためにネットワーク管理者によって広く使用されています。SSH コマンドは暗号化されており、いくつかの点でセキュアです。クライアント/サーバ接続の両端ではデジタル証明書を使用して認証され、パスワードは暗号化によって保護されています。セキュア・シェル・クライアント・マシンによって、リモート・マシンの SSH デーモンまたはサーバが要求されます。

SSH を使用した SiteScope での監視には、次の基本要件があります。

- 1 SSH を使用した SiteScope で監視するサーバに、SSH デーモン（またはサーバ）がインストールされてアクティブになっている。
- 2 Java SSH クライアントを統合した SiteScope。SiteScope には、Java と SiteScope アプリケーション・コード専用の言語で記述された SSH クライアントが含まれています。

本項の内容

- 563 ページ「SSH 接続オプション」
- 565 ページ「ガイドライン」

SSH 接続オプション

次の表に、現在 SiteScope でサポートされている SSH 接続オプションの概要を示します。SSH 接続の設定と管理の詳細については、565 ページ「ガイドライン」を参照してください。

Windows プラットフォームにインストールされた SiteScope の場合：

ターゲット	SiteScope クライアント・オプション	関連する接続先サーバ	コメント
Windows	Java SSH クライアントを統合した SiteScope	SSH サーバ（Cygwin OpenSSH）	▶ 非 perfex ベースの SSH。RemoteNTSSH パッケージは、非 perfex ベースの SSH をサポートするモニタには不要です。非 perfex ベースの SSH をサポートするモニタのリストについては、586 ページ「Perfex ベースまたは非 Perfex ベースの Windows SSH がサポートされているモニタ」を参照してください。 ▶ perfex ベースの SSH。リモート・サーバのホーム・ユーザ・ディレクトリに RemoteNTSSH パッケージがインストールされている必要があります。詳細については、583 ページ「SiteScope リモート Windows SSH ファイルのインストール」を参照してください。
UNIX/ Linux	Java SSH クライアントを統合した SiteScope	SSH ホスト・デーモン（独自開発または OpenSSH の sshd）	

UNIX または Linux プラットフォームにインストールされた SiteScope の場合：

ター ゲット	SiteScope クライ アント・オブ ション	関連する接続先 サーバ	コメント
Windows	▶ Java SSH クライアントを統合した SiteScope ▶ SSH クライアント (/usr/local/bin/ssh または usr/bin/ssh)	SSH サーバ (Cygwin OpenSSH)	▶ 非 perfex ベースの SSH。RemoteNTSSH パッケージは、非 perfex ベースの SSH をサポートするモニタには不要です。非 perfex ベースの SSH をサポートするモニタのリストについては、586 ページ「Perfex ベースまたは非 Perfex ベースの Windows SSH がサポートされているモニタ」を参照してください。 ▶ perfex ベースの SSH。リモート・サーバのホーム・ユーザ・ディレクトリに RemoteNTSSH パッケージがインストールされている必要があります。詳細については、583 ページ「SiteScope リモート Windows SSH ファイルのインストール」を参照してください。
UNIX/ Linux	▶ Java SSH クライアントを統合した SiteScope ▶ SSH クライアント (/usr/local/bin/ssh または usr/bin/ssh)	SSH ホスト・デーモン (独自開発または OpenSSH の sshd)	

ガイドライン

- ▶ SSH プロトコルには、バージョン 1 とバージョン 2 の 2 つの異なるバージョンがあります。バージョン 1 とバージョン 2 は異なるプロトコルで、互換性はありません。そのため、SSH クライアントと SSH ホストで同じプロトコル・バージョンを使用するように設定して通信できるようにする必要があります。多くの場合、SSH バージョン 1 (SSH1) が標準設定です。SSH バージョン 1 にはいくつかのセキュリティの脆弱性が発見されています。また、SSH1 プロトコルの開発は終了しており、SSH2 が現在の標準とみなされています。すべての SSH 接続に SSH バージョン 2 (SSH2) を使用することをお勧めします。
- ▶ インストールした SSH ユーティリティとライブラリのリリース・バージョン番号は、使用する SSH プロトコルのバージョンとは異なります。たとえば、OpenSSH リリース 3.5 は SSH1 と SSH2 プロトコルの両方をサポートしています。リリース・バージョン 3.5 のライブラリでは SSH バージョン 3.5 のプロトコルを使用するということではありません。OpenSSH ソフトウェアは SSH1 か SSH2 のいずれかを使用するように設定する必要があります。
- ▶ SSH 接続を使用して SiteScope リモート監視を設定した後に、その設定を変更するか、環境内のリモート・サーバにデプロイした SSH デーモンまたはサーバ・ソフトウェアにアップグレードした場合、SiteScope が稼動しているマシンと監視されているリモート・サーバ間の SSH 接続を再設定することが必要になる可能性があります。

SSH を使用したリモート Windows サーバの監視

SiteScope が Windows 間の接続と Windows NT/2000/2003 ネットワークでの監視に使用する標準設定のリモート接続方法は、NetBIOS です。これにより接続が容易になる一方で、いくつかの不利な点もあります。その 1 つは、NetBIOS はネットワーク・セキュリティにおいて比較的脆弱な点です。もう 1 つは、リモート実行スクリプトをサポートしていない点です。リモート・サーバでの実行コマンドは、リモート・サーバの UNC 構文を使用して記述された、リモート・マシンへのコマンドでローカルに実行されるスクリプトを必要とします。その場合でも、NetBIOS ではリモート・サーバから一部のパラメータを返しません。

注 : SiteScope では Windows Management Instrumentation (WMI) プロトコルもサポートしています。このプロトコルは、Windows サーバで稼動しているリモート・サーバからデータを収集する場合に NetBIOS よりもセキュアな通信プロトコルです。リモート・マシンで WMI サービスを設定する方法の詳細については、516 ページ「リモート監視用の WMI サービスの設定」を参照してください。

SiteScope では、SSH を使用したリモート Windows NT/2000 サーバの監視をサポートしています。このテクノロジーは、リモート・サーバに SSH サーバとしてインストールされた Cygwin (<http://www.cygwin.com/> (英語サイト) で入手可能) からの OpenSSH バイナリでテストされています。また、F-Secure から使用可能なサーバでもテストされています。SourceForge (<http://sshtwindows.sourceforge.net/> (英語サイト) で入手可能) で使用可能な OpenSSH for Windows (以前の Network Simplicity の「OpenSSH on Windows」) も使用できます。

2 つのパッケージの比較概要を次に示します。

OpenSSH パッケージ	利点	不利な点
Cygwin OpenSSH	1. Windows マシンで Windows または UNIX 形式のスクリプトにアクセス可能。 2. UNIX 形式のシステム・ツールとユーティリティにアクセス可能。 3. SiteScope から Windows リモートまたは UNIX リモート、あるいはその両方としてリモート・サーバにアクセス可能。	複雑なセットアップ手順。
OpenSSH for Windows	単純なセットアップ手順。	Windows コマンド、スクリプト、ユーティリティにのみアクセス可能。

注：

- ▶ OpenSSH for Windows と Cygwin SSH の実装は互換性がありません。この 2 つは同じマシンにインストールしないでください。
- ▶ 複数のバージョンの Cygwin ユーティリティまたは複数の SSH サーバが 1 台のマシンにインストールされている場合、SSH 接続の動作を妨げる競合が発生する可能性があります。このような競合の 1 つに、「**エントリ・ポイントが見つかりません**」のようなエラー・メッセージがあります。このエラーの可能性を確認するには、マシンで `cygwin1.dll` の複数のコピーを検索します。この問題を解決するには、ユーティリティのすべてのバージョンを削除して、1 つのバージョンのみ再インストールすることが必要な場合があります。

リモート Windows サーバを SSH 監視用に設定する方法の詳細については、569 ページ「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」を参照してください。

タスク

リモート UNIX サーバでの SSH 監視の設定方法

Solaris または Linux の SiteScope では、SSH を使用したリモート監視をサポートしています。このタスクでは、リモート UNIX サーバでの SiteScope を使用した SSH 監視の設定に関する手順を説明します。

注 : UNIX 環境で監視するリモート・サーバの SSH ホストの設定は非常に複雑で、このドキュメントではそのすべては説明されていません。OpenSSH デーモンのインストールに関する推奨リソースとして、<http://www.sunfreeware.com/openssh.html> (英語サイト) (Solaris の場合) と <http://www.redhat.com/docs/manuals/linux/RHL-7.3-Manual/ref-guide/s1-ssh-configfiles.html> (Redhat Linux の場合) があります。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 569 ページ「前提条件」
- ▶ 569 ページ「リモート・サーバに接続する SSH クライアントの設定」
- ▶ 569 ページ「SSH 接続方法を使用するための UNIX リモートの設定」

1 前提条件

UNIX 環境で SiteScope を使用して SSH 監視をリモート UNIX サーバで設定する場合の要件の詳細は、585 ページ「UNIX リモート・サーバの SSH 設定要件」を参照してください。

2 リモート・サーバに接続する SSH クライアントの設定

リモート・サーバで SSH サーバまたはデーモンを設定したら、リモート・サーバへの接続に SiteScope で使用する統合 Java SSH クライアントを設定する必要があります。詳細については、590 ページ「統合された Java SSH クライアントの概要」を参照してください。

3 SSH 接続方法を使用するための UNIX リモートの設定

SSH 接続を確認したら、SiteScope で接続方法として SSH を使用するように UNIX リモート設定を作成または設定します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、531 ページ「新規 UNIX リモート・サーバ/UNIX リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。

リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法

このタスクでは、リモート Windows サーバでの SiteScope を使用した SSH 監視の設定に関する手順を説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 570 ページ「SSH サーバのインストールと設定」
- 570 ページ「perfex を使用した Windows SSH 監視の有効化（任意指定）」
- 571 ページ「リモート・サーバに接続する SSH クライアントの設定」
- 571 ページ「SSH 接続方法を使用するための Windows リモートの設定」

1 SSH サーバのインストールと設定

SiteScope を接続する各リモート・サーバで SSH サーバをインストールして設定します。SSH 機能を可能にする、一般に入手可能な 2 つのソフトウェア・パッケージがあります。

- ▶ RedHat の <http://www.cygwin.com/> (英語サイト) から入手可能な Cygwin 環境。タスクの詳細については、572 ページ「Windows での Cygwin OpenSSH のインストール」を参照してください。
- ▶ OpenSSH for Windows で入手可能な Windows 用の OpenSSH。タスクの詳細については、580 ページ「OpenSSH for Windows のインストール」を参照してください。

注：これらのセットアップは、SSH デーモンまたはサーバを実行する各サーバで実行する必要があります。

2 perfex を使用した Windows SSH 監視の有効化（任意指定）

使用しているモニタに応じて、リモート・サーバの監視に perfex ベースまたは非 perfex ベースの Windows SSH を使用できます（サポートされているモニタのリストについては、586 ページ「Perfex ベースまたは非 Perfex ベースの Windows SSH がサポートされているモニタ」を参照してください）。

- ▶ **Perfex ベース：**プリインストール perfex を使用したリモート・サーバの SSH 監視を有効にするには、各リモート・サーバに SiteScope リモート Windows SSH ファイルをインストールして、一般的に使用されるサーバ監視機能を有効にする必要があります。タスクの詳細については、583 ページ「SiteScope リモート Windows SSH ファイルのインストール」を参照してください。
- ▶ **非 Perfex ベース：**非 perfex ベースの Windows SSH を使用する場合は、リモート Windows サーバに SiteScope リモート Windows SSH ファイルをインストールする必要はありません。モニタが perfex ベースと非 perfex ベース両方の Windows SSH をサポートしている場合、非 perfex ベースの Windows SSH の使用をお勧めします。

3 リモート・サーバに接続する SSH クライアントの設定

リモート・サーバで SSH サーバまたはデーモンを設定したら、リモート・サーバへの接続に SiteScope で使用する統合 Java SSH クライアントを設定する必要があります。詳細については、590 ページ「統合された Java SSH クライアントの概要」を参照してください。

4 SSH 接続方法を使用するための Windows リモートの設定

SiteScope とリモート・サーバ間の SSH 接続を確認したら、次のように SiteScope で Windows リモート・サーバを設定します。

- ▶ [メイン設定] で、接続方法として [SSH] を選択します。その後、SSH 接続を使用するようにモニタを設定できます。
- ▶ プリインストール **perfex** を使用したリモート・サーバの SSH 監視を有効にするには、[詳細設定] 表示枠で [**プリインストール perfex を使用する SSH**] が選択されていることを確認します（これが標準設定です）。
- ▶ 非 **perfex** ベースの Windows SSH を監視するには、[詳細設定] 表示枠で [**プリインストール perfex を使用する SSH**] チェック・ボックスをクリアします。

ユーザ・インタフェースの詳細については、523 ページ「新規 Microsoft Windows リモート・サーバ/Microsoft Windows リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。

Windows での Cygwin OpenSSH のインストール

このタスクでは、Windows サーバでの Cygwin OpenSSH サーバのインストールと設定に関する手順を説明します。

注:

- ▶ このタスクは上位タスクの一部です。詳細については、569 ページ「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」を参照してください。
- ▶ 次の手順は、マシンにほかの Cygwin または SSH ユーティリティがインストールされておらず、マシンでインターネット・アクセスが可能なことを前提としています。
- ▶ SSH デーモンのインストールと実行に使用されるユーザ・ログイン・アカウントには、必要なプログラムのインストール、いくつかのファイル・オプションの設定、Windows サービスの制御に対する適切な権限が必要です。SiteScope で従属サーバの接続に使用するアカウントである必要はありませんが、SiteScope でサーバを監視する前にそのアカウントを Cygwin インストールで設定する必要があります。

Windows NT/2000 サーバで Cygwin OpenSSH サーバをインストールして設定するには、次の手順で行います。

- 1 定義 CYGWIN = ntsec tty で新しいシステム環境変数を作成します。
- 2 文字列 ;C:¥cygwin¥bin を PATH 変数に追加します。変数への変更を保存します。
- 3 Cygwin セットアップ・プログラムを一時フォルダにダウンロードします。例: C:¥temp。セットアップ・プログラムは、Cygwin で使用可能な異なるパッケージとコンポーネントの選択、ダウンロード、インストールに使用します。
- 4 ダウンロードしたセットアップ・プログラムを実行して、ダウンロード元の選択を促すメッセージが表示されたら **[Install from Internet]** オプションを選択します。**[次へ]** をクリックして次に進みます。
- 5 選択を促すメッセージが表示されたら、Cygwin パッケージをインストールするルート・インストール・ディレクトリを選択します。このディレクトリに SSH デーモンと関連ファイルがインストールされます。例: C:¥cygwin。**[次へ]** をクリックして次に進みます。

- 6 選択を促すメッセージが表示されたら、Cygwin インストール・ファイルを保存する一時ディレクトリを選択します。例: C:\temp。[次へ] をクリックして次に進みます。
- 7 選択を促すメッセージが表示されたら、[Internet Connection] オプションを選択します。通常は [Direct Connection] を使用できます。[次へ] をクリックして次に進みます。
- 8 選択を促すメッセージが表示されたら、選択リストを使用してファイルを取得するための適切なミラー・サイトを選択します。[次へ] をクリックして次に進みます。
- 9 セットアップ・プログラムによってそのミラー・サイトにあるパッケージが確認され、パッケージ・カテゴリの階層ツリーが表示されます。ダウンロードするパッケージを表示して選択するには、カテゴリ名の左側にあるプラス記号 (+) をクリックしてパッケージ・ツリーを展開します。ダウンロードとインストールに選択したパッケージのバージョン番号が [New] 列に表示されます。特定のパッケージのバージョン番号が表示されない場合、そのパッケージはダウンロードもインストールもされていません。パッケージをダウンロード用に選択するには、パッケージ名の左側にある [Skip] をクリックします。

注： 標準設定でダウンロードに選択されている可能性のある開発ツール (Devel) とデータベース・ツール (Database) の多くは SSH デーモンの実行には不要で、ダウンロード時間とインストール領域を削減するために選択解除できます。

ダウンロードとインストールに次の各パッケージを選択します。

- [Admin] 分岐から [cygrunsrv]
- [Doc] 分岐から [cygwin-doc]
- [Shells] 分岐から [pdksh]
- [Net] 分岐から [openssh] と [openssl]
- [Editors] 分岐から任意の UNIX 形式のテキスト・エディタ (例: [vim] または [emacs])

選択を促すメッセージに従い、クリックしてファイルをダウンロードします。

- 10 指定したインストール・オプションに応じて、Cygwin セットアップで、選択したパッケージがダウンロードされてインストールされます。Cygwin ターミナル・ウィンドウへのショートカットをデスクトップまたは [Program Start] メニューに追加するかどうかの選択を促すメッセージが表示される場合があります。クリックして次に進み、インストールを完了します。
- 11 Cygwin セットアップが完了したら、デスクトップ・ショートカットまたは [Program Start] メニューの [Cygwin] をクリックして Cygwin ターミナル・ウィンドウを開きます。

注 : Windows システムのユーザ・プロファイルによっては、ターミナル・ウィンドウで開かれる標準設定のディレクトリがルート Cygwin インストール・ツリー内でない場合があります。pwd コマンドを使用して現在のディレクトリを表示します。通常は、コマンド文字列 `cd /` を入力すると、標準設定では Windows の `C:\cygwin` ディレクトリの Cygwin ルートにディレクトリが変更されます。

標準設定の Cygwin グループ・ファイルを、マシンとネットワークで使用しているグループ名で更新します。標準設定の Cygwin グループ・ファイルを、サーバとドメインで定義したグループで更新するには、mkgroup ユーティリティを使用します。コマンドの使用例を次に示します。

```
mkgroup -l >> ../etc/group
mkgroup -d >> ../etc/group
```

注：

- ▶ Cygwin にドメインとローカル・グループ・アカウントの両方を認識させるには、**mkgroup** ユーティリティをローカル・ユーザ (-l オプション) に対して 1 回、ドメイン・ユーザ (-d オプション) に対して 1 回の計 2 回実行します。ファイルへのエントリを追加する場合、> だけではなく >> の構文を使用してください。
 - ▶ ローカルとドメインの両方のオプションを使用する場合、**/etc/group** ファイルを手動で編集 (ダウンロードした UNIX 形式のテキスト・エディタを使用) して重複するグループ・エントリを削除する必要があります。必要に応じて、監視に不要なグループ・エントリや、このマシンへのアクセスを禁止するグループ・エントリも削除します。
-

標準設定の Cygwin ユーザ (passwd) ファイルを、ローカル・マシンで定義したユーザと、このマシンの Cygwin にアクセスを許可する個々のドメイン・ユーザで更新します。標準設定の Cygwin ユーザ・ファイルの更新には、**mkpasswd** ユーティリティを使用します。

コマンドの使用例を次に示します。

```
mkpasswd -l >> ../etc/passwd
mkpasswd -d -u username >> ../etc/passwd (domain users)
```

注：

- ▶ 標準設定では、Cygwin は **SYSTEM** と呼ばれるローカル・ユーザとして OpenSSH デーモンを実行するように設定されています。Cygwin にドメインとローカル・マシン・ユーザ・アカウントの両方を認識させるには、すべてのローカル・ユーザの追加に **-l** オプション、個々のドメイン・ユーザの追加に **-d** と **-u** オプションを使用して **mkpasswd** を実行します。ファイルへのエントリを追加する場合、**>** だけではなく **>>** の構文を使用してください。
 - ▶ ローカルとドメインの両方のオプションを使用する場合、**/etc/passwd** ファイルを手動で編集（ダウンロードした UNIX 形式のテキスト・エディタを使用）して重複するユーザ・エントリを削除する必要があります。必要に応じて、個々のユーザの標準設定の **/home** パスとシェルを変更します。SiteScope で使用するユーザ・アカウントの **/home/sitescopeaccount/** ディレクトリに **RemoteNTSSH** パッケージをインストールする場合に、この変更が必要な可能性があります。
-

- 12** `cd /bin` と入力して、アクティブ・ディレクトリを **/bin** ディレクトリに変更します。
- 13** 次のコマンド・ライン（末尾の空白とピリオドを含む）を入力して、Windows コマンド (CMD) ・シェルを示す **/bin** ディレクトリへのシンボリック・リンクを作成します。

```
ln -s /cygdrive/c/winnt/system32/cmd.exe .
```

- 14** いくつかの Cygwin ファイルとディレクトリの権限と所有権を変更することをお勧めします。また、SSH デーモンのログ・ファイルを作成することもお勧めします。Cygwin ターミナル・コマンド・ラインに次のコマンド・ラインを入力し、各コマンド・ラインの入力後に **Enter** キーを押します。

```
cd /  
chmod -R og-w .  
chmod og+w /tmp  
touch /var/log/sshd.log
```

注：

- ▶ 空白を含めた正確な構文が必要です。
 - ▶ ファイルとディレクトリの権限が矛盾していたり不正に割り当てられていたりしていると、SSH デーモンが開始できない、または SiteScope をリモート・サーバに接続してコマンドまたはスクリプトを実行できない可能性があります。
-

- 15** 次のコマンドを入力して、SSH デーモンを Windows サービスとして実行するように設定します。

```
ssh-host-config -y
```

CYGWIN= プロンプトが表示されたら、この操作の最初に設定した環境変数に一致させるため `ntsec tty` と入力します。通常、これにより、サーバの再起動が必要な場合に SSH デーモンまたはサービスを自動的に再起動するように設定されます。

- 16** 次のコマンドを使用して、SSH デーモンの暗号鍵とファイルを設定します。

```
ssh-user-config -y.
```

入力を促すメッセージが表示されたら、いくつかのキーストア・ファイルに必要なパスフレーズを入力します。プログラムから、確認のためにパスフレーズを再入力するように求められます。

- 17** SSH デーモンで使用するために、いくつかのファイルとフォルダの所有権を変更する必要があります。これらのファイルの権限がグループまたは「世界」レベルのユーザによって変更または実行可能な場合、プログラムは正常に実行できません。これらのファイルへのアクセスを制限するために、次のコマンド文字列を入力します。

```
chown SYSTEM:Users /var/log/sshd.log /var/empty /etc/ssh_h*  
chmod 755 /var/empty
```

- 18** [プログラム] > [管理ツール] > [サービス] パネルを使用し、CYGWIN sshd サービスの開始と停止を実行して、インストールされていることを確認します。

注 : Cygwin には、SSH デーモンを開始するサーバ・ユーティリティが含まれています。ただし、Windows の [サービス] パネルを使用した場合はサーバを起動できる場合でも、この方法ではサーバの起動に失敗する多数の状況があります。

- 19** SiteScope での監視に使用するユーザ・アカウントの標準設定のシェルまたはコマンド環境を設定します。選択したシェルは、SSH 接続を使用してリモート実行できるスクリプトまたはコマンドのタイプに影響を与えます。UNIX 形式のテキスト・エディタを使用して、`/etc/passwd` ファイルを編集します。使用する SiteScope ログイン・アカウントのエントリを検索し、次に示すように、`/bin/bash` からのシェルを使用するシェルに変更します。通常、これがそのアカウント・エントリ行の最後のエントリです。

- a** SiteScope で Windows コマンド・シェルを使用してリモート・サーバとやり取りする場合、標準設定のシェル・エントリを `/bin/cmd` に変更します。Windows 形式のバッチ・ファイルとスクリプトを使用する場合はこのオプションを使用します。この前の操作手順で説明したように、`/bin` ディレクトリの Windows `cmd.exe` カーネルへのシンボリック・リンクを含める必要もあります。
- b** SiteScope で Cygwin UNIX シェルを使用してリモート Windows サーバとやり取りする場合、標準設定のシェル・エントリを `/bin/pdksh` に変更します。SiteScope SSH クライアントでは Cygwin の標準設定の `bash` シェルを正確に解析できない可能性があります。また、リモート UNIX サーバ接続を、Cygwin SSH デーモンに接続するこの (Windows) サーバに設定する必要もあります。

変更点をファイルに保存します。

- 20** `/etc/profile` ファイル内の `PATH` と標準設定のプロンプト・コマンドを編集して、Cygwin で特定のファイルを検索して SiteScope でリモート・シェルからの出力を解析できるようにします。UNIX 形式のテキスト・エディタを使用して、`/etc/profile` ファイルを編集します。ファイルの上部にある `PATH` 定義エントリを検索します。例：

```
PATH=/usr/local/bin:/usr/bin:/bin:$PATH
```

このエントリを次のように変更します。

```
PATH=./usr/local/bin:/usr/bin:/bin:$PATH
```

- 21** 標準設定のプロンプト・コマンドを変更するには、`/etc/profile` ファイルを編集して、次のようなセクションを検索します。

```
::
sh |-sh |*/sh |¥
sh.exe |-sh.exe |*/sh.exe )
#Set a simple prompt
PS1='$ '
::
```

このエントリのすぐ下に、次を追加します。

```
::
pdksh |-pdksh |*/pdksh |¥
pdksh.exe |-pdksh.exe |*/pdksh.exe )
#Set a simple prompt
PS1='>'
::
```

- 22** 変更点をファイルに保存します。
- 23** アクティブ・ディレクトリを、SiteScope 監視用に作成した、ユーザのホーム・ディレクトリに変更します。

これらの変更を加えて SSH デーモンを起動すると、SSH クライアントを使用してサーバに接続できます。

注 : `mkpasswd -l /etc/passwd` コマンドを実行するときは常に (新規ユーザの追加時など) `/etc/passwd` ファイルを再編集して, そのユーザの標準設定のシェルが SiteScope で使用するアカウントに必要な値に設定されるようにします。

OpenSSH for Windows のインストール

このタスクでは, Windows サーバでの OpenSSH サーバのインストールと設定に関する手順を説明します。

OpenSSH for Windows パッケージは, Cygwin SSH パッケージの代替パッケージで, インストールがより簡単です。その他の多くの製品と同じく, Cygwin 製品と Open SSH for Windows は変更される可能性があります。その影響として, 一部のバージョンの Cygwin SSH サーバでは SiteScope 監視に必要なデータが返されない場合があります。OpenSSH for Windows パッケージでこの問題を解決できる場合は, Cygwin パッケージの代わりにこのパッケージを使用する必要があります。

注 : このタスクは上位タスクの一部です。詳細については, 569 ページ「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」を参照してください。

Windows NT/2000 サーバで OpenSSH for Windows サーバをインストールして設定するには, 次の手順で行います。

- 1 OpenSSH for Windows パッケージをダウンロードしてインストールします。
- 2 コマンド・プロンプトを開いてインストール・ディレクトリ (標準設定のインストール・パスは `C:\Program Files\OpenSSH`) を変更します。
- 3 アクティブ・ディレクトリを `OpenSSH\bin` ディレクトリに変更します。

- 4 標準設定のグループ・ファイルを、マシンとネットワークで使用しているグループ名で更新する必要があります。標準設定の **OpenSSH** グループ・ファイルを、サーバとドメインで定義したグループで更新するには、**mkgroup** ユーティリティを使用します。コマンドの使用例を次に示します。

```
mkgroup -l >> ../etc/%group  
mkgroup -d >> ../etc/%group
```

注：

- **OpenSSH** にドメインとローカル・グループ・アカウントの両方を認識させるには、**mkgroup** ユーティリティをローカル・ユーザ (**-l** オプション) に対して 1 回、ドメイン・ユーザ (**-d** オプション) に対して 1 回の計 2 回実行します。ファイルへのエントリを追加する場合、**>** だけではなく **>>** の構文を使用してください。
 - ローカルとドメインの両方のオプションを使用する場合、**/etc/group** ファイルを手動で編集 (ダウンロードした **UNIX** 形式のテキスト・エディタを使用) して重複するグループ・エントリを削除する必要があります。必要に応じて、不要なグループ・エントリや、このマシンへのアクセスを禁止するグループ・エントリも削除します。
-

- 5 標準設定の OpenSSH ユーザ (passwd) ファイルを、ローカル・マシンで定義したユーザと、このマシンの SSH サーバにアクセスを許可するドメイン・ユーザで更新する必要があります。標準設定のユーザ・ファイルの更新には、**mkpasswd** ユーティリティを使用します。コマンドの使用例を次に示します。

```
mkpasswd -l >> ../etc/passwd  
mkpasswd -d -u username >> ../etc/passwd
```

注：

- ▶ OpenSSH にドメインとローカル・マシン・ユーザ・アカウントの両方を認識させるには、すべてのローカル・ユーザの追加に **-l** オプション、個々のドメイン・ユーザの追加に **-d** と **-u** オプションを使用して **mkpasswd** ユーティリティを実行します。ファイルへのエントリを追加する場合、> だけではなく >> の構文を使用してください。
- ▶ ローカルとドメインの両方のオプションを使用する場合、**/etc/passwd** ファイルを手動で編集（ダウンロードした UNIX 形式のテキスト・エディタを使用）して重複するユーザ・エントリを削除する必要があります。必要に応じて、個々のユーザの標準設定の **/home** パスとシェルを変更します（次の指示を参照）。

-
- 6 [プログラム] > [管理ツール] > [サービス] パネルを使用し、**OpenSSH Server** サービスを開始して、インストールされていることを確認します。



SiteScope リモート Windows SSH ファイルのインストール

このタスクでは、操作中の SSH パッケージに応じて、各リモート Windows サーバに SiteScope リモート Windows ファイルをインストールする手順を説明します。

注：

- ▶ このタスクは上位タスクの一部です。詳細については、569 ページ「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」を参照してください。
 - ▶ SiteScope リモート Windows ファイルは、非 perfex ベースの SSH をサポートするリモート Windows サーバ・モニタにインストールする必要はありません。非 perfex ベースの SSH をサポートするモニタのリストについては、586 ページ「Perfex ベースまたは非 Perfex ベースの Windows SSH がサポートされているモニタ」を参照してください。
-

Cygwin インストールで SiteScope SSH ファイルをインストールする場合：

- 1 SSH を使用して SiteScope で監視する各マシンの **<インストール・ドライブ>:¥cygwin¥home** ディレクトリ内に **¥sitescope_login_account_name** ディレクトリが存在することを確認します。**sitescope_login_account_name** を、SSH サーバを使用しているマシンへの接続に使用するユーザ・アカウント名に置き換えます。
- 2 Windows で SSH を使用する利点の 1 つは、SSH デーモンを実行しているリモート・サーバで SiteScope からスクリプトを実行できる点です。リモート・スクリプトの実行にスクリプト・モニタを使用できるようにするには、**/home/sitescope_login_account_name** ディレクトリに **scripts** サブディレクトリを作成します。SiteScope スクリプト・モニタで実行するために作成したスクリプトは、このディレクトリ内に置く必要があります。
- 3 SiteScope がインストールされているマシンで、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥tools** ディレクトリにある **RemoteNTSSH.zip** ファイルを検索します。
- 4 このファイルを、SSH サーバまたはデーモン・ソフトウェアをインストールした各リモート Windows NT/2000 サーバの **<インストール・ドライブ>:¥cygwin¥home¥sitescope_login_account_name** ディレクトリにコピーします。

- 5 **RemoteNTSSH.zip** ファイルをリモート・サーバで展開します。zip ファイルの内容を<インストール・ドライブ>:%cygwin%home%
sitescope_login_account_name ディレクトリに移動します。この操作で<インストール・ドライブ>:%cygwin%home%
sitescope_login_account_name %scripts サブフォルダが作成されます。このサブフォルダには、SiteScope スクリプト・モニタで実行できるスクリプトを保持します。
- 6 リモート・サーバで CYGWIN sshd サービスを開始します。

OpenSSH for Windows インストールで SiteScope SSH ファイルをインストールする場合：

- 1 SiteScope がインストールされているマシンで、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%tools ディレクトリにある **RemoteNTSSH.zip** ファイルを検索します。
- 2 このファイルを、インストール済みの SSH サーバ経由でマシンにログオンした後に自動的にユーザを移動する、ユーザ・ホーム・ディレクトリにコピーします。このディレクトリは、SSH サーバまたはデーモン・ソフトウェアをインストールした各リモート Windows NT/2000 サーバのディレクトリです。
- 3 リモート・サーバの **RemoteNTSSH.zip** ファイルをユーザ・ホーム・ディレクトリに展開します。この操作で<ユーザ・ホーム・ディレクトリ>%scripts サブフォルダが作成されます。このサブフォルダには、SiteScope スクリプト・モニタで実行できるスクリプトを保持します。
- 4 リモート・サーバで OpenSSH Server サービスを開始します。

参照情報

UNIX リモート・サーバの SSH 設定要件

UNIX 環境で SiteScope を使用して SSH 監視を行う場合、リモート UNIX サーバには次の設定要件があります。

- ▶ セキュア・シェル・デーモンまたはサーバ (sshd) を、SiteScope で監視する各リモート・サーバにインストールする必要があります。
- ▶ リモート・サーバ上の SSH デーモンが実行されており、該当する通信ポートが開いている必要があります。たとえば、SSH の標準設定ではポート番号 22 です。
- ▶ SiteScope が実行されているサーバに SSH クライアントがインストールされている必要があります。この要件は、SiteScope に統合された Java SSH クライアントによって満たされます。

SiteScope を実行しているマシンから監視するリモート・マシンへの、SSH クライアントとサーバ間の接続を確認する必要があります。SiteScope で SSH を使用してリモート・サーバ接続を設定する前に、SiteScope アプリケーション外部で SSH 接続をチェックします。たとえば、SiteScope を Solaris または Linux で実行している場合、次のコマンド・ラインを使用して、サーバ <remotehost> に SSH2 を使用した SSH 接続を要求します。

```
ssh -2 <リモートホスト>
```

通常は、使用されている SSH プロトコルのバージョンを示すテキスト情報が返されます。また、現在のユーザの認証が試行されます。異なるユーザとしてログインを要求するには、`-l username` スイッチを使用します。

SSH 接続を確認したら、SSH を接続方法として使用するために、SiteScope で UNIX リモート設定を作成または設定します。

 Perfex ベースまたは非 Perfex ベースの Windows SSH がサポートされているモニタ

次に、perfex ベースおよび非 perfex ベースの Windows SSH がサポートされているモニタを示します。perfex ベースの Windows SSH をサポートするモニタはすべて、UNIX プラットフォームで実行される SiteScopes でサポートされます。

モニタ	perfex ベース の Windows SSH のサ ポート	非 perfex ベー スの Windows SSH のサ ポート
Citrix Monitor	✓	✓
ColdFusion Server Monitor	✓	✓
CPU Monitor	✓	✓
Directory Monitor	✓	
Disk Space Monitor	✓	✓
Memory Monitor	✓	✓
Microsoft ASP Server Monitor	✓	✓
Microsoft Hyper-V Monitor	✓	✓
Microsoft IIS Server Monitor	✓	✓
Microsoft SQL Server Monitor	✓	✓
Microsoft Windows Event Log Monitor	✓	
Microsoft Windows Media Server Monitor	✓	✓
Microsoft Windows Performance Counter Monitor	✓	
Microsoft Windows Resources Monitor	✓	✓
Microsoft Windows Services State Monitor	✓	
Real Media Server Monitor	✓	✓

モニタ	perfex ベース の Windows SSH のサ ポート	非 perfex ベー スの Windows SSH のサ ポート
Script Monitor	✓	
Service Monitor	✓	

トラブルシューティングと制限事項

このセクションでは、SSH を使用して監視する場合のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- ▶ 587 ページ「Windows SSH ベースのモニタでのスキップ (Linux RedHat 5)」
- ▶ 588 ページ「perfex ベースでない Windows SSH が機能しない」
- ▶ 588 ページ「perfex ベースでない SSH でカウンタを取得できない」
- ▶ 588 ページ「perfex ベースの Windows SSH が機能しない」
- ▶ 588 ページ「エラー : "resize: unknown character exiting"」

Windows SSH ベースのモニタでのスキップ (Linux RedHat 5)

Linux RedHat 5 プラットフォームで実行されている Windows SSH ベースのモニタでスキップが発生した場合、`opt/SiteScope/java/lib/security/java.security` ファイルで次の変更を行う必要があります。

「`securerandom.source=file:/ dev/urandom`」を

「`securerandom.source=file:///dev/urandom`」へ

perfex ベースでない Windows SSH が機能しない

perfex ベースの SSH は機能するが、perfex ベースでない Windows SSH が機能しない場合、次の手順を実行します。

- ▶ perfmon が正常に機能していることを確認します。対象マシンで、コマンド **perfmon** を実行し、必要な perfmon オブジェクトが表示されることを確認します。これらのライブラリを再構築する方法の詳細については、<http://support.microsoft.com/?kbid=300956> を参照してください。
- ▶ コマンド・ラインで次のコマンドを入力し、リモート・マシンで **typeperf** コマンドが機能していることを確認します。

```
typeperf "¥Processor(_Total)¥% Processor Time"
```

詳細については、<http://technet.microsoft.com/ja-jp/library/cc753182.aspx> を参照してください。

perfex ベースでない SSH でカウンタを取得できない

perfex ベースでない SSH ではカウンタに n/a と表示されるが、同じカウンタで perfmon では 0 と表示されることがあります。perfmon ユーティリティを使用して選択できないカウンタは、このように動作します。perfex がこれらのカウンタの値を取得できるのは、perfmon をバイパスしてレジストリ経由でカウンタにアクセスしているためです。

perfex ベースの Windows SSH が機能しない

perfex ベースの Windows SSH の監視の前提条件を満たしていることを確認します。詳細については、583 ページ「SiteScope リモート Windows SSH ファイルのインストール」を参照してください。

エラー : "resize: unknown character exiting"

SiteScope で SSH を使用して接続を作成できない場合、**error.log** または **runMonitor.log** に "resize: unknown character exiting" に類似するサーバ・エラー・メッセージが含まれている場合、これは、無効な bash 関連のコマンドが原因である可能性があります。SiteScope では、基本的な bash 環境のみがサポートされています。通常、bash コマンドはユーザの標準設定ディレクトリの下での **.bashrc** ファイルにあります。

18

SSH クライアントを使った作業

本章の内容

概念

- ▶ 統合された Java SSH クライアントの概要 (590 ページ)

タスク

- ▶ 統合された Java SSH クライアントの設定方法 (593 ページ)

概念

統合された Java SSH クライアントの概要

リモート UNIX または Windows サーバとの接続にセキュア・シェル (SSH) を使用する必要がある場合、接続を確立し、データを転送するには、SiteScope から SSH クライアントにアクセスする必要があります。この項では、SiteScope による監視で SSH を使用する場合のクライアント設定および問題をいくつか紹介します。

SiteScope では、Java で記述された SSH クライアントが SiteScope アプリケーションに統合されています。SSH を使用してサーバに接続するときに SiteScope で使用される必要なシステム・リソースが、このクライアントにより大幅に削減されます。Java クライアントでは、SSH バージョン 1 (SSH1) とバージョン 2 (SSH2) の両方のプロトコル、およびパスワード・ベースと鍵ベースの両方の認証がサポートされています。クライアントの SiteScope 設定は、UNIX, Linux, Windows の SiteScope で同じになります。

統合された Java SSH クライアントの設定の詳細については、593 ページ「統合された Java SSH クライアントの設定方法」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 591 ページ「統合された SSH クライアントを使った作業」
- ▶ 592 ページ「鍵ベース認証の設定」
- ▶ 592 ページ「SSH バージョン 2 プロトコルの使用」

統合された SSH クライアントを使った作業

SSH1 と SSH2 はいずれもセキュア・シェル・プロトコルですが、2 つの異なるプロトコルとみなされ、相互に互換性はありません。SSH1 にセキュリティの脆弱性が検出されたため、SSH2 が現行標準とみなされています。ほとんどの SSH ソフトウェアでは、両方のプロトコルがサポートされています。ただし、SSH 接続の要求には SSH1 ではなく、SSH2 を必ず使用してください。SSH クライアントと SSH ホスト間の通信に同じプロトコル・バージョンを使用するように、SSH クライアントと SSH ホストを設定する必要があります。多くの場合、SSH クライアントと SSH ホストの間に最低の共通基準とみなされる SSH1 が、接続に使用される標準設定のバージョンになります。

SSH2 接続を強制的に使用するには、次の 2 通りの方法があります。

- **SSH2 接続要求のみを受け入れるように、すべての SSH デーモンまたはサーバを設定する。**これは最も安全な方法ですが、各サーバのインストールおよびアクティブ化時に設定されていない場合は最も時間がかかります。
- **SSH2 のみを要求するように、SiteScope サーバの SSH クライアントを設定する。**変更が必要なのは、SiteScope サーバのクライアントのみです。統合された Java SSH クライアントの場合、これはリモート・サーバ設定ページの [詳細オプション] セクションの設定で制御されます。

鍵ベース認証の設定

SSH セキュリティのもう一つの要素は、認証です。SiteScope に統合された SSH クライアントは、2 つの認証オプションのいずれかを使用するように設定できます。

- ▶ **パスワード認証。**パスワード認証は、SiteScope で SSH 接続に使用される標準設定の方法です。
- ▶ **鍵ベース認証。**鍵ベース認証では、パスフレーズと公開鍵および秘密鍵認証の使用によってセキュリティが強化されます。

SSH リモート・サーバで鍵ベース認証を使用するには、まず公開鍵と秘密鍵のペアを作成する必要があります。公開鍵はリモート・サーバに置かれ、秘密鍵は SiteScope マシンに保管されます。Cygwin OpenSSH と OpenSSH for Windows のいずれにも、ssh-keygen と呼ばれる鍵生成ツールが含まれています。ssh-keygen ツールでは、プロトコル・バージョン 1 とバージョン 2 の両方の鍵を作成できます。内部 Java ライブラリ・クライアントを使用して UNIX または Windows リモート・サーバを設定する場合は、MindTerm と呼ばれる鍵生成ツールを使用して、RSA (バージョン 1 とバージョン 2) と DSA (バージョン 2) の公開鍵/秘密鍵ペアを作成します。

SSH バージョン 2 プロトコルの使用

SiteScope Java クライアントでは、接続しようとしているサーバで SSH1 接続が許可される場合、標準設定で SSH1 プロトコルが使用されます。この折衝に失敗すると、バージョン 2 プロトコルを使用して接続が試行されます。SiteScope Java クライアントは、SSH2 接続のみを使用するように設定できます。SiteScope マシンで変更を行うほうが、多数のリモート SSH サーバを再設定するより簡単な場合があります。

タスク

統合された Java SSH クライアントの設定方法

このタスクでは、統合された Java SSH クライアントの設定の手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 593 ページ「SSH 接続の認証オプションを選択する」
- ▶ 593 ページ「SSH2 接続のみを使用するように SiteScope Java クライアントを設定する」

1 SSH 接続の認証オプションを選択する

SiteScope に SSH クライアントを統合する認証オプションとして、パスワード認証（SiteScope の標準設定の方法）または鍵ベース認証を選択します。

SSH 接続の鍵ベース認証を設定する方法の詳細については、594 ページ「鍵ベース認証の設定」を参照してください。

2 SSH2 接続のみを使用するように SiteScope Java クライアントを設定する

Microsoft Windows/UNIX リモート・サーバでリモート・サーバ・プロファイルを設定するときに、[詳細設定] で [SSH バージョン 2 のみを使用] チェック・ボックスを選択します。

鍵ベース認証の設定

このタスクでは、MindTerm を使用して SSH リモート・サーバに鍵ベース認証を設定する手順について説明します。

注：このタスクは上位タスクの一部です。詳細については、593 ページ「統合された Java SSH クライアントの設定方法」を参照してください。

公開鍵または秘密鍵ペアを作成するには、次の手順で行います。

- 1 SiteScope サーバでコマンド・ウィンドウを開き、MindTerm を起動する次のコマンドを実行します。

```
<SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%bin%java -jar c:%<SiteScope の  
ルート・ディレクトリ>%WEB-INF%lib%mindterm.jar
```

注：SiteScope 7.9.5.x 以前の場合、コマンド <SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%bin%java -jar c:%<SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%lib%ext%mindterm.jar を入力します。

- 2 MindTerm で、[File] > [Create Keypair] > [DSA (または RSA)] を選択します。また、OpenSSH .pub 形式も選択します。
- 3 鍵ペアは、<ユーザのホーム・ディレクトリ>%mindterm ディレクトリに書き込まれます。**identity.pub** ファイルを <SiteScope のルート・ディレクトリ>%groups ディレクトリにコピーします。
- 4 **identity.pub** ファイルをリモート・マシンの<ユーザのホーム・ディレクトリ>/.ssh ディレクトリにコピーし、ファイル名を **authorized_keys** (SSH2 の場合は **authorized_keys2**) に変更します。
- 5 リモート・マシンで、<ユーザのホーム・ディレクトリ>/.ssh ディレクトリで次のコマンドを実行し、User に **authorized_keys** ファイルの読み取り、書き込み、実行の権限があり、Group と Other に読み取り権限があることを確認します。

- 6** 鍵ファイル認証と内部 Java ライブラリを使用して、リモート・サーバの SiteScope でリモート接続を作成します。

秘密鍵は<SiteScope のルート・ディレクトリ>%groups ディレクトリに置かれ、公開鍵はリモート・マシンの<ユーザのホーム・ディレクトリ>/ssh/authorized_keys ファイルに保存されます。

MindTerm から生成される鍵は、**Openssh** 形式になります。

注：サーバの鍵と MindTerm の鍵が同じレベルであることを確認する必要があります。たとえば、サーバの鍵が 768 ビットで MindTerm の鍵が 1024 ビットだと、認証手順は失敗します。

サーバで使用されているレベルを調べるには、次の手順を実行します。

- 1** リモート・サーバの sshd サービスを停止します。Red Hat Linux サーバの場合は、次のコマンドを実行します。

```
/etc/rc.d/init.d/sshd stop
```

- 2** リモート・サーバでデバッグ・モードで sshd サービスを起動します。Red Hat Linux サーバの場合は、次のコマンドを実行します。

```
/usr/sbin/sshd -d
```

Generating 768 bit RSA key に似た出力が表示されます。

注：SiteScope で [SSH 接続の鍵ファイル] ボックスを使用する場合、入力した情報の末尾にスペースがあると、「不明なエラー (-1)」による失敗の原因になります。問題を修正するには、末尾のスペースを削除します。

openSSH 鍵を SEC SSH 形式に変換するには、次の手順を実行します。

- 1** MindTerm で RSA 鍵（openSSH 鍵ペア）を作成します。
- 2** リモート・サーバで次のコマンドを実行して、openSSH 鍵を SEC SSH 形式に変換します。

```
ssh-kegen -e -f <公開鍵>
```

- 3** openSSH 形式の秘密鍵を SiteScope サーバに置いたままにします。

注：鍵ベース認証を使用する場合、提供する鍵ファイルはバージョン 2 の秘密鍵にする必要があります。

19

UNIX オペレーティング・システム・アダプタ

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope UNIX オペレーティング・システム・アダプタの概要 (598 ページ)

タスク

- ▶ アダプタの追加方法 (599 ページ)

参照情報

- ▶ SiteScope で提供される UNIX アダプタ (601 ページ)
- ▶ アダプタ・ファイルの形式 (602 ページ)
- ▶ アダプタ・コマンド・リスト (603 ページ)

概念

SiteScope UNIX オペレーティング・システム・アダプタの概要

SiteScope UNIX オペレーティング・システム・アダプタを使用して、SiteScope を拡張し、標準設定でサポートされている UNIX のバージョンおよびそれ以外のバージョンに接続してリモートで監視できます。そのためには、監視する UNIX の特定のバージョンがサポートされるようにアダプタ・ファイルを設定します。

SiteScope では、アダプタ・ファイルを使用して、異なるバージョンの UNIX オペレーティング・システムが実行されているサーバからさまざまなシステム・リソース情報を取得するために必要なコマンドを記述します。これらのアダプタ・ファイルはプレーン・テキストで記述され、<**SiteScope のルート・ディレクトリ**>/templates.os ディレクトリに保存されます。SiteScope に含まれている標準設定の UNIX アダプタのリストについては、601 ページ「SiteScope で提供される UNIX アダプタ」を参照してください。

使用している環境の特定のシステム要件に合わせて既存のアダプタ・ファイルを変更できます。また、独自のアダプタ・ファイルを作成し、SiteScope で他の UNIX バージョンを監視できます。

タスク

アダプタの追加方法

このタスクでは、UNIX の特定のバージョンにアダプタを追加する手順について説明します。

- 1 アダプタ・キットのドキュメントをよく読みます。
- 2 サポートを追加する UNIX プラットフォームが、SiteScope の標準設定でサポートされている UNIX プラットフォームのいずれかに類似する場合、その UNIX バージョンのアダプタ・ファイルのコピーを作成し、使用するアダプタの出発点として使用します。
- 3 SiteScope で接続する UNIX バージョンのコマンド・ライン要件に適合するように、アダプタ・ファイルを変更します。
- 4 アダプタ・ファイルを<SiteScope のルート・ディレクトリ>/templates.os ディレクトリに保存します。ファイル名には、.config 拡張子を使用する必要があります。
- 5 新しいアダプタ・ファイルを追加したインストール SiteScope を開きます。
- 6 左側の表示枠で [リモート サーバ] をクリックして、リモート・サーバ・ビューを表示します。
- 7 リモート・サーバ・ツリーで、[UNIX リモート サーバ] を右クリックして、[新規 UNIX リモート サーバ] を選択します。[新規 UNIX リモート サーバ] ダイアログ・ボックスが開きます。
- 8 [オペレーティング システム] ボックスで、作成した UNIX アダプタの名前を選択します。
- 9 [OK] をクリックします。SiteScope で新しいアダプタ・ファイルを使用して、リモート・サーバから該当するデータの取得が試行されます。

- 10** 1 つ以上のサーバ接続プロファイルがアダプタを使用するように設定した後にアダプタ・ファイルを変更する場合、アダプタをテストするには、[UNIX リモート サーバ] の **[詳細テスト]** オプションを使用できます。リモート・サーバを追加したら、[詳細テスト] には、リモートで **SiteScope** が実行されるコマンドの出力と、**SiteScope** による出力の解析が表示されます。

特定のテンプレートを変更するのに必要な作業量は、新しい UNIX プラットフォームが、サポートされている UNIX プラットフォームとどの程度異なるかによります。

参照情報

SiteScope で提供される UNIX アダプタ

SiteScope で提供される標準設定の UNIX アダプタは、次のとおりです。

ファイル名	説明
AIX.config	IBM AIX のアダプタ・ファイル
Digital.config	Digital Tru64 UNIX (Pre 4.x) のアダプタ・ファイル
FreeBSD.config	FreeBSD 3.x のアダプタ・ファイル
HP.config	Hewlett-Packard HP/UX のアダプタ・ファイル
HP64.config	Hewlett-Packard HP/UX 64 ビットのアダプタ・ファイル
Linux.config	Linux (Redhat など) のアダプタ・ファイル
MacOSX.config	Apple Macintosh OS X のアダプタ・ファイル
OPENSERVR.config	SCO OpenServer のアダプタ・ファイル
SCO.config	SCO UNIXWare のアダプタ・ファイル
SGI.config	Silicon Graphics Irix のアダプタ・ファイル
Sun.config	Sun Microsystems Solaris のアダプタ・ファイル
Tru64.config	Compaq Tru64 UNIX 5.x のアダプタ・ファイル

アダプタ・ファイルの形式

<SiteScope のルート・ディレクトリ>/templates.os ディレクトリに, SiteScope のリモート監視でサポートされている各 UNIX プラットフォームのアダプタ・ファイルがあります。これらのファイルには, SiteScope の標準設定ファイル形式が使用されます。

最初の設定グループ（最初の # 記号行の前の設定）にプラットフォームが記述されます。

```
id=yourPlatform
name=your Platform Name
```

id は, OS を示す SiteScope 内部の ID です。この ID は一意である必要があります。スペースを含まない英数字を使用できます。アダプタ・ファイルの名前を ID 名として使用することをお勧めします。たとえばアダプタ・ファイルの名前が **linux.config** の場合, ID は **linux** になります。

name は, リモート・サーバを追加または編集するときにドロップダウン・リストに表示する名前です。

テンプレート・ファイルの残りの部分には, # 文字の行で区切ってコマンドを 1 つずつ表す設定のグループが含まれています。たとえば, 次の設定はディスク領域のコマンドを表します。

```
id=disks
command=/usr/bin/df -k
mount=6
name=1
```

説明 :

id=disks は, SiteScope でコマンドを検索するときに使用される ID です。これは, SiteScope コマンド・セットの 1 つであることが必要です (603 ページ「アダプタ・コマンド・リスト」を参照)。このエントリでは大文字と小文字が区別されます。

command=/usr/bin/df -k は, ディスクについての情報を取得するために **usr/bin/df -k** コマンドが実行されることを意味します。

mount=6 と **name=1** は, マウント名が列 6 にあり, マウントまたはファイル・システムの名前が列 1 にあることを意味します。データ名はコマンドごとに異なり, 後述のようにドキュメント化されています。

これを次のコマンド出力に適用します。

```
ファイルシステムによって使用可能な容量が /proc 0 0 0 0% にマウントされました
/proc /dev/dsk/c0t3d0s0 73049 42404 23341 65% /
```

disks コマンドにより、(**/dev**) で始まらない行では、ファイル・システムの名前として列 1 (**/dev/dsk/c0t3d0s0**)、マウント名として列 6 ("**/**") の読み取りが自動的にスキップされます。

アダプタ・コマンド・リスト

SiteScope が正常に動作するには、次の各コマンドの設定が必要です。各コマンド記述には、ID、コマンド、データの読み取り元を指定する 1 つ以上のフィールド、および（ヘッダ行など）特定の行を排除するためにコマンド出力のフィルタに使用する修飾子セット（任意指定）が必要です。

後述の変数 **column** は、データが表示される列の数を意味します。列はスペースで区切られたデータ・セットです。

さらに、コマンド記述に任意で適用できる特定のフィールドがあります。詳細については、607 ページ「任意のアダプタ・コマンドの詳細」を参照してください。

本項の内容

- 604 ページ「ディスク一覧表示」
- 604 ページ「ディスク情報」
- 605 ページ「メモリ」
- 606 ページ「ページ障害」
- 606 ページ「CPU 使用率」
- 607 ページ「プロセス・リスト」
- 607 ページ「プロセス・リストと詳細」
- 607 ページ「任意のアダプタ・コマンドの詳細」

ディスク一覧表示

ID	説明	使用場所	フィールド
disks	システムにあるファイル・システムのリストを返します。 <code>/usr/bin/df -k</code> コマンドは、このデータを取得する標準的な方法です。返された行で <code>/dev</code> で始まらないものは自動的にスキップされます。	ディスク容量モニタ	name : ファイル・システムの名前の列。 mount : マウントの名前の列。

ディスク情報

ID	説明	使用場所	フィールド
disk	引数としてディスクを使用し、ディスクの合計、空き、使用済みパーセントを返します。	ディスク容量モニタ	total : ファイル・システムの合計容量 (キロバイト) の列。 free : ファイル・システムの空き容量(キロバイト)の列。

メモリ

ID	説明	使用場所	フィールド
メモリ	スワップ領域の使用済み量と使用可能量。	メモリ・モニタ	swapUnit : バイト数を計算するために使用済み, 空き, または合計スワップ領域に適用される乗数。 used : 使用済みのスワップ領域の量。 free : 空いているスワップ領域の量。 total : 合計スワップ領域の量。 注 : 読み込む必要があるのは, used, free, total フィールドのうちの 2 つのみです。残りは計算されます。

ページ障害

ID	説明	使用場所	フィールド
pageFault	1 秒あたりのページ障害の数。複数のページ障害行に一致した場合は、合計されます。	メモリ・モニタ	pageFaults : ページ障害の数の列。 inPageFaults : ページ読み込み障害の数の列。 outPageFaults : ページ書き出し障害の数の列。 units : ページング・データの pages (標準設定), pages/sec, または k/sec units。 pageSize : 単位が k/sec の場合, pageSize を使用してページ数が計算されます。それ以外では無視されます。 注 : データが 1 列の場合は pageFaults, ページ障害データが 2 列の場合は inPageFaults と outPageFaults を使用します。 inPageFaults と outPageFaults は、合計ページ障害数を出すために合計されます。

CPU 使用率

ID	説明	使用場所	フィールド
cpu	CPU の待ち % とアイドル % を返します。	CPU モニタ	idle : CPU のアイドル %。 wait : CPU の待ち % (任意指定)。

プロセス・リスト

ID	説明	使用場所	フィールド
process	プロセス名が長いプロセスのリスト。通常これは <code>/usr/bin/ps -ef</code> です。	サービス・モニタ	name : プロセスの名前の列。

プロセス・リストと詳細

ID	説明	使用場所	フィールド
process Detail	プロセスのサイズを表示するプロセスのリスト。通常これは <code>/usr/bin/ps -el</code> です。	サービス・モニタ ([Check Memory] オプションは有効)	name : プロセスの名前の列。 size : プロセスのサイズの列。 pageSize : システム上のページ・サイズ (任意指定)。標準設定は 8192 です。

任意のアダプタ・コマンドの詳細

次のフィールドは、コマンド記述に任意で適用できます。

プロセス・リストと詳細

ID	説明
startLine	コマンドがデータ検索を開始する行番号。
endLine	コマンドがデータ検索を終了する行番号。
skipLine	一致したら行をスキップするパターン。
matchLine	一致したらその行のデータを検索するパターン。
startMatch	一致したらデータを検索するコマンドを起動するパターン。

ID	説明
endMatch	一致したらデータを検索するコマンドを終了するパターン。
reverseLines	true の場合、コマンド・ラインは逆転され後ろから前に読み取られます。これは、コマンドの最後にデータがあり、読み取りを開始するときに操作しづらい場合に便利です。

フィールド名に **fieldnameColumnName=COLUMN** という形式がある場合、アダプタはヘッダ（最初の行）から **COLUMN** を検索し、データを含む列を記録し、それらの設定を使用して **fieldname** フィールドを読み取ります。これは、列幅が異なり、データにスペースが使用されている場合に便利です。

次のコマンド出力から **my data** 情報を読み取る場合の例を示します。

```
MEM NAME DESC
12K my data some of my data
```

コマンド記述の名前フィールドを次のように指定します。

```
nameColumnName=NAME
```

アダプタは、ヘッダ行を読み取り、**NAME** を検出し、前の列が終了した場所（この場合は **MEM**）と指定した列が終了する場所（**NAME**）を記録し、それを使用して、（この場合では）文字の列 6 ～ 22 を読み取ります。

ColumnName の実際の読み取りの例を参照するには、サポートされている UNIX プラットフォームの **process** および **processDetail** コマンドを参照してください。このメソッドを使用して、プロセス名とプロセスのサイズが取得されます。

第 VI 部

プリファレンス

20

一般プリファレンス

本章の内容

概念

- ▶ 一般プリファレンスの概要（612 ページ）

参照情報

- ▶ 一般プリファレンス・ページ（614 ページ）

概念

一般プリファレンスの概要

本項では、次の SiteScope 一般プリファレンスの主要概念について説明します。

- ▶ 612 ページ「標準設定の認証資格情報の使用」
- ▶ 613 ページ「モニタ・プロセスの一時停止」
- ▶ 613 ページ「Web スクリプト・モニタのファイル・ディレクトリ」

注：多言語化の問題に関連する一般プリファレンスの詳細については、811 ページ「多言語化（I18N）環境での SiteScope の使用」を参照してください。

標準設定の認証資格情報の使用

このセクションを使用して、特定のアプリケーションおよびシステムにログインするために SiteScope で使用する標準設定の認証資格情報を入力します。このユーザ名およびパスワードは、次の条件を満たす場合に使用されます。

- ▶ ほかの認証資格情報が個々のモニタの設定時に入力されていない。
- ▶ 認証先アプリケーションまたはシステムで認証資格情報が必要である。URL モニタ、URL シーケンス・モニタ、Web サービス・モニタでこの機能を使用できます。

モニタ・プロセスの一時停止

大規模で複雑な監視環境の場合、大量のモニタが実行されて SiteScope の負荷が高くなり、応答が遅くなる可能性があります。これは、一部のモニタで過度に監視が行われるように設定されていることや、システムが過負荷になっていることなどが原因になります。監視アクションによって SiteScope のパフォーマンスが下がっている場合、監視アクションを一時停止して設定を変更することをお勧めします。モニタを一時停止して、大規模な設定操作（一括の検索置換など）の完了に要する時間を削減できます。[**全モニタを一時停止**] オプションには、次の機能があります。

Web スクリプト・モニタのファイル・ディレクトリ

Web スクリプト・モニタでは、VuGen スクリプトを実行してパフォーマンスと Web アプリケーションのデータ内容を監視します。モニタで使用する VuGen スクリプトは、これらのスクリプト用の標準設定ディレクトリ（<**SiteScope のルート・ディレクトリ**>%templates.webscripts）に保存することも、一般プリファレンスで別のディレクトリを定義することもできます。

注：Web スクリプト・モニタは、SiteScope に直接アクセスしているユーザのみが使用できます。BSM の [システム可用性管理] を使用して SiteScope にアクセスしているユーザは使用できません。

これらのプリファレンスの設定の詳細については、614 ページ「一般プリファレンス・ページ」を参照してください。

参照情報

 一般プリファレンス・ページ

このページでは、SiteScope のライセンス情報のほかに、一般的な表示機能、任意指定の機能、アクセス・オプションを入力および表示できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [一般プリファレンス] > [メイン パネル] を選択します。
重要な情報	▶ SiteScope の管理者、または「一般プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、一般プリファレンスを作成または変更できます。 ▶ SiteScope 11.00 以降では、SiteScope は 1 日に 1 回自動的に再起動しなくなりました。
関連タスク	814 ページ「SiteScope の英語以外のロケールの設定方法」
関連情報	612 ページ「一般プリファレンスの概要」

メイン・パネル

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
[VuGen スクリプト パスのルート]	Web スクリプト・モニタで使用する VuGen スクリプトの zip ファイルを保存するディレクトリ。ここで入力したディレクトリのファイルが Web スクリプト・モニタの設定時に使用可能なスクリプトのリストに表示されます。ここで値を入力しない場合、標準設定のディレクトリ <SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.webscripts ファイルがモニタの設定時に表示されます。 モニタを使った作業の詳細については、『Monitor Reference』（英語版）の「Web Script Monitor Overview」を参照してください。
[標準設定の認証ユーザ名]	リモート・システムの認証に使用する標準設定のユーザ名。<ユーザ名>と<ドメイン>%<ユーザ名>のどちらも有効な形式です。モニタの設定時に別のユーザ名を明示的に入力しないかぎり、SiteScope ではこのユーザ名が使用されます。
[標準設定の認証パスワード]	リモート・システムの認証に使用する標準設定のパスワード。モニタの設定時に別のパスワードを明示的に入力しないかぎり、SiteScope では先の一覧表示したモニタ・タイプにこのパスワードが使用されます。
[プリエンプティブ認証]	SiteScope で認証先 URL が要求されたときに、標準設定のユーザの資格情報を認証するために使用されるオプションが表示されます。 ▶ 最初の要求を認証。 認証先サーバに対して、SiteScope によって作成される最初の要求でユーザ名とパスワードが送信されます。 ▶ 要求された場合に認証。 サーバでユーザ名とパスワードの要求があった場合に、2 番目の要求でユーザ名とパスワードが送信されます。 標準設定値：最初の要求を認証
[SiteScope 再起動スケジュール]	SiteScope の再起動のスケジュールを選択できます。[時間指定スケジュール プリファレンス] でスケジュールを定義することも、あるいは [開始後 24 時間ごと] オプションを選択することもできます。詳細については、753 ページ「時間指定スケジュール・ページ」を参照してください。 標準設定値：オフ

UI 要素	説明
[ファイルごとのバックアップ数]	保持する SiteScope 設定ファイルのバックアップ数が表示されます。この機能は、重要なモニタ、警告、一般的な SiteScope 設定情報の保持に役立ちます。この数は、保持するファイルごとのバックアップ数を表します。SiteScope では、filename.bak.1, filename.bak.2, filename.bak.# の命名規則が使用されます。ここで 1 は最新のバックアップ・ファイルになります。 例：一般的な SiteScope 設定情報が含まれるファイルを <SiteScope のルート・ディレクトリ>%groups にバックアップできます。 標準設定値： 1
[ロケール固有の日付と時間]	特定のロケール、国、文化に該当する形式で日付と時間が表示されます。別のロケール設定を使用するには、目的のロケールのコードが含まれるように SiteScope 設定ファイルを変更し、[一般プリファレンス] 設定でこのオプションを選択します。このタスクの実行方法の詳細については、814 ページ「SiteScope の英語以外のロケールの設定方法」を参照してください。 標準設定値： 選択済み（標準設定は米国形式です）

UI 要素	説明
[国際化対応版]	国際化対応文字セットが有効になります。このオプションを選択すると、すべての文字エンコーディングが SiteScope に よってサポートされます。このオプションを使用して、複数の ソースおよびオペレーティング・システムの文字エンコー ディング（外国語の Web ページなど）を SiteScope で同時 に処理できます。 選択しない場合、SiteScope がインストールされているオペ レーティング・システムの標準設定の文字セットのみがサ ポートされます。すべての URL モニタ・タイプ、ログ・ファ イル・モニタ、ファイル・モニタはこのかぎりではありません。 これらのモニタ・タイプでは、[国際化対応版] オプ ション設定に関係なく複数の文字エンコーディングがサ ポートされます。このタスクを実行する方法の詳細について は、814 ページ「SiteScope の英語以外のロケールの設定方 法」を参照してください。 標準設定値： 選択されていない
[全モニタを一時停止]	すべてのモニタの実行が一時停止されます。監視インフラス トラクチャ全体の設定を変更する場合に使用します。監視を 再アクティブ化するには、このオプションをクリアします。 注： このオプションでは、該当の SiteScope インストールで 現在定義されているすべてのモニタが無効になります。モニ タの一時停止を設定してからこのオプションをクリアして モニタを再有効化する場合、モニタの一時停止アクションの 前に無効化されていた個々のモニタは元の無効化された状 態が維持されます。 このオプションを使用すると、レポートに影響する可能性 があります。監視が一時停止されている間に実行されたモ ニタでは、レポートでその期間が空白で表示される場合が あります。 警告： SiteScope でモニタが一時停止になっていることは、 現在インタフェースには表示されません。[全モニタを一時 停止] オプションが有効になっている場合、「SiteScope は [一時停止] モードです；モニタは現在一切起動していま せん」というメッセージが表示されます。 標準設定値： 選択されていない

ライセンス

SiteScope を使用するには、有効なライセンスが必要です。この表示枠では、SiteScope へのライセンス・ファイルのインポートのほか、ライセンスの種類、状態、ポイント消費などの表示が行えます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [一般プリファレンス] > [ライセンス] を選択します。
重要な情報	▶ 有効なライセンス・ファイルがない場合、HP License Key Delivery Service サイト (https://webware.hp.com/Welcome.asp) (英語サイト) を使用して、ライセンスの更新またはアップグレードの要求を送信できます。 ▶ [OS インスタンス ライセンス使用状況] の表には、1 つ以上の OS ベース・ライセンス・モニタが定義されているホストだけが表示されます。
関連情報	『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) の「SiteScope のライセンス」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<ライセンス・サマリ>	ライセンスの種類と状態のサマリ (ライセンスされたポイントの数と使用されているポイントの数、OS ライセンス・インスタンスの合計数、使用されている OS インスタンス、OS インスタンスによって保存されているライセンス・ポイントの数など) が表示されます。一時ライセンスまたは評価ライセンスの場合、ライセンスの残余日数も含まれます。 注：これには、期限が切れているライセンスや評価ライセンス (一般ライセンスがインポートされている場合) の情報は含まれていません。
ライセンス ファイル	SiteScope ライセンス・ファイルのパスを入力するか、[選択] ボタンをクリックしてライセンス・ファイルを選択します。60 日間のトライアル期間以降も SiteScope を使用する場合はライセンスを購入する必要があります。
[インポート]	選択したライセンス・ファイルからライセンスがインポートされます。

UI 要素	説明
[ライセンスの削除]	選択したライセンスが削除されます。 注：ライセンスを削除すると、選択されているライセンス・タイプのほかのライセンスも削除される可能性があります。
[インストールされているライセンス] テーブル	
[期限切れライセンスを表示]	期限切れライセンスをテーブル内に含める場合に選択します。
[タイプ]	インポートされるライセンスのタイプ。ライセンスは次のいずれかになります。 ▶ 一般。ライセンスの一部として含まれているモニタ・ポイントの数に基づいて、SiteScope の標準的な機能を有効にします。一般ライセンスは、一時ライセンス（時間ベース）または永続ライセンスのどちらかです。 ▶ 評価。SiteScope の標準機能が有効になり、無料のトライアル期間（60 日間で500 モニタ・ポイント）中に追加モニタを使用できます。評価ライセンスは更新できません。 ▶ 拡張。任意指定の監視機能およびソリューション・テンプレートが有効になります。 ▶ OS インスタンス：使用されているモニタの数に対するポイントではなく、監視されている OS / ホスト・インスタンスの数に応じて計算される、代替ライセンス・モデル・オプションです。 ▶ フェールオーバー：プライマリ SiteScope サーバが停止した場合に SiteScope フェールオーバー の機能を有効にします。 ライセンスのタイプの詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』（PDF）の「SiteScope ライセンスのタイプについて」を参照してください。
[詳細]	ライセンスのタイプとライセンスの有効期間（永続または日数）。
[失効]	ライセンスが永久ライセンスであるか、あるいは有効期限に達している場合を除き、失効日と残余日数が表示されます。 注：評価ライセンスが通常のポイント・ライセンスによってオーバーライドされる場合、そのライセンスは「期限切れ」と表示されます。

UI 要素	説明
[数量]	購入したライセンスのモニタ・ポイントの数。一般ライセンス・キーによって管理されているモニタ・ポイントの総数が、拡張ライセンスによって増えることはありません。任意指定のモニタ・タイプを作成するために使用されるモニタ・ポイントは、一般ライセンスに含まれるモニタ・ポイントの総数から差し引かれます。評価の固定値は 500 ポイントです。 注： ▶ OS インスタンス・ライセンスの場合、この列には監視される OS/ホスト・インスタンスの数が表示されます。 ▶ 拡張ライセンスの場合、この列には常に「1」が表示されます。各モニタまたはソリューション・テンプレートには、「一般」ライセンス・ポイントから取得される、それ自体のポイント消費があります。
[OS インスタンス ライセンス使用状況] テーブル SiteScope は、使用可能な OS インスタンス・ライセンスを、最もビジーなホスト（そのサーバ上で OS インスタンス対応モニタによってのみ消費されるポイントの最多数を占めるホスト）に適用します。OS 対応モニタ・インスタンスによって消費されるポイントは適用されず、OS インスタンス・ライセンスの対象ではないほかのモニタでも使用できます。	
[Show top 20 hosts only]	テーブル内に最もビジーなホスト・サーバ 20 台だけを表示します。 標準設定値：選択済み

UI 要素	説明																						
[ホスト/OS]	OS インスタンス対応モニタが実行されているホスト・マシンの名前または IP アドレス。																						
[適用されている OS インスタンス ライセンス]	OS インスタンス・ライセンスがそのホストに適用されたかどうかを示します。OS インスタンス・ライセンスが適用されたホストの場合、保存されているポイントの数が表示されます。 次に、OS インスタンス対応のモニタ・タイプを示します。 <table border="0"> <tr> <td>➤ Amazon Web Services</td><td>➤ Microsoft</td></tr> <tr> <td>➤ CPU</td><td>Windows リソース</td></tr> <tr> <td>➤ ディレクトリ</td><td>➤ Microsoft</td></tr> <tr> <td>➤ ディスク領域</td><td>Windows サービス・ステート</td></tr> <tr> <td>➤ ファイル</td><td>➤ Ping</td></tr> <tr> <td>➤ HP NonStop イベント・ログ</td><td>➤ ポート</td></tr> <tr> <td>➤ HP NonStop リソース</td><td>➤ サービス</td></tr> <tr> <td>➤ メモリ</td><td>➤ Solaris プレーン</td></tr> <tr> <td>➤ Microsoft Hyper-V</td><td>➤ UNIX リソース</td></tr> <tr> <td>➤ Microsoft Windows イベント・ログ</td><td>➤ VMware パフォーマンス</td></tr> <tr> <td>➤ Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ</td><td></td></tr> </table> 注：このホスト上で作成されたほかのモニタ・タイプからのポイントは適用外ではありません。	➤ Amazon Web Services	➤ Microsoft	➤ CPU	Windows リソース	➤ ディレクトリ	➤ Microsoft	➤ ディスク領域	Windows サービス・ステート	➤ ファイル	➤ Ping	➤ HP NonStop イベント・ログ	➤ ポート	➤ HP NonStop リソース	➤ サービス	➤ メモリ	➤ Solaris プレーン	➤ Microsoft Hyper-V	➤ UNIX リソース	➤ Microsoft Windows イベント・ログ	➤ VMware パフォーマンス	➤ Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ	
➤ Amazon Web Services	➤ Microsoft																						
➤ CPU	Windows リソース																						
➤ ディレクトリ	➤ Microsoft																						
➤ ディスク領域	Windows サービス・ステート																						
➤ ファイル	➤ Ping																						
➤ HP NonStop イベント・ログ	➤ ポート																						
➤ HP NonStop リソース	➤ サービス																						
➤ メモリ	➤ Solaris プレーン																						
➤ Microsoft Hyper-V	➤ UNIX リソース																						
➤ Microsoft Windows イベント・ログ	➤ VMware パフォーマンス																						
➤ Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ																							

SSH プリファレンス

この表示枠では、リモート・コンピュータに安全にアクセスするためのプリファレンスを設定できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [一般プリファレンス] > [SSH プリファレンス] を選択します。

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[SSH V2 接続タイムアウト (秒)]	SiteScope で正常な応答を待機する合計秒数。この時間を超えると、接続が自動的に閉じます。 標準設定値 : 30 秒
[SSH V2 ハンドシェイク タイムアウト (秒)]	ハンドシェイク・タイムアウト (秒単位)。 標準設定値 : 30 秒
[SSH V2 キー交換タイムアウト (秒)]	SiteScope で SSH 鍵交換を待機する合計秒数。 標準設定値 : 30 秒
[SSH V2 認証段階タイムアウト (秒)]	SiteScope で SSH 認証を待機する合計秒数。 標準設定値 : 30 秒

WMI プリファレンス

この表示枠では、Windows Management Instrumentation (WMI) を使用してリモート・コンピュータにアクセスするためのプリファレンスを設定できます。WMI では、NetBIOS よりも安全な通信を使用して Windows サーバ上で動作するリモート・サーバからデータを収集できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [一般プリファレンス] > [WMI プリファレンス] を選択します。
関連タスク	516 ページ「リモート監視用の WMI サービスの設定」
重要な情報	364 ページ「Windows Management Instrumentation (WMI) をサポートしているモニタ」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[SiteScope NT ローカルホスト メソッド]	ローカルホスト・マシンにある Windows サーバのリソースを監視するための接続方法のタイプ (NetBIOS または WMI)。 標準設定値 : NetBIOS
[WMI クエリ タイムアウト (秒単位)]	各モニタの実行の WMI クエリ タイムアウト (秒単位)。このボックスが空のときは、タイムアウトが 120 秒になります。 標準設定値 : 120 秒

ダッシュボード モニタ履歴表示オプション

この表示枠では、[モニタ履歴の設定] を設定して、すべてのモニタおよびモニタ・グループのモニタ履歴を表示できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [一般プリファレンス] > [ダッシュボード モニタ履歴表示オプション]を選択します。
重要な情報	[ダッシュボード レイアウト] では、選択した条件に一致するモニタのみが表示されるように、フィルタを使用してさらにモニタを絞り込むことができます。プリファレンスは、[ダッシュボード フィルタ] 設定で保存されます。詳細については、1131 ページ「ダッシュボード・フィルタの概要」を参照してください。

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[モニタ履歴ビューを有効にする]	ダッシュボードのモニタ履歴が有効になります。このオプションが有効になっている状態で無効にすると、履歴ビューに表示されていたすべてのビュー・データが削除されます。 標準設定値 ：選択されていない
[期間中に収集されたデータを表示]	過去の実行を表示するタイム・フレーム。古い実行は削除されます。この設定は、ダッシュボードのフィルタリングより優先されます。 標準設定値 ：過去 1 時間
[モニタの実行の状態]	必要な実行の状態が表示されます。ほかの状態の実行は削除されます。この設定は、ダッシュボードのフィルタリングより優先されます。 標準設定値 ：任意
[表示する実行の最大数]	メモリの保持するデータの行数。 標準設定値 ：100000 最小値 ：1000

JDBC グローバル オプション

この表示枠では、SiteScope のデータベース・ログ機能，データベース接続ツールやデータベース情報ツール，データベース警告，データベース・モニタ (Oracle データベース，データベース・カウンタ，データベース・クエリ，DB2 8.x および 9.x, テクノロジ・データベース統合) にグローバルな JDBC オプションを適用できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [一般プリファレンス] > [JDBC グローバル オプション] を選択します。

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[接続タイムアウト]	新しい SQL 接続の作成を待機する時間 (秒/分/時/日)。すべての SQL ドライバにこの機能があるわけではありません。SQL ドライバでこの機能がサポートされていない場合、このパラメータは無視されます。 標準設定値 : 5 分
[ドライバトレース ログ ファイル]	データベース・ドライバのトラブルシューティングに使用するドライバ・トレース・ログ・ファイルが作成されます。標準設定ではこのボックスは空になっています。トラブルシューティングを行う場合にのみ使用することをお勧めします。 ログ・ファイルを作成するには、ドライバ・トレース・ファイルの完全パスまたは UNC 名を入力します (e:¥mydir¥myfile.log など)。 注 : 記録先ログ・ファイルには、ログイン情報，テーブル名，クエリなどが含まれます。

LW SSO 設定

このパネルでは、SiteScope の Lightweight シングル・サインオン (LW-SSO) 認証の文字列を変更できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [一般プリファレンス] > [LW SSO 設定] を選択します。

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[LW SSO 初期化文字列]	HP の Lightweight シングル・サインオン (LW-SSO) で統合されるすべての信頼されたアプリケーションで使用される共有文字列が含まれている必要があります。initString パラメータは、12 文字以上にすることをお勧めします。サロゲート・ブロック, FFFE, および FFFF を除く任意の Unicode 文字を使用できます。 注 : SiteScope の標準設定の初期化文字列設定は安全ではありません。安全な文字列を使用するには、initString パラメータを変更して、LW-SSO を使用して統合されるすべての HP ソフトウェア・アプリケーションの initString の標準設定値を変更します。 LW-SSO の詳細については、821 ページ「SiteScope ヘログインのための認証方法の設定」を参照してください。

21

インフラストラクチャ・プリファレンス

本章の内容

概念

- ▶ インフラストラクチャ・プリファレンスの概要 (628 ページ)

参照情報

- ▶ インフラストラクチャ・プリファレンス・ページ (629 ページ)

概念

インフラストラクチャ・プリファレンスの概要

インフラストラクチャ・プリファレンスでは、**master.config** ファイルにアクセスすることなく SiteScope のグローバル設定を表示および定義できます。インフラストラクチャ・プリファレンスは、[一般設定]，[サーバ設定]，[モニタ設定]，[モニタ設定をスキップ]，[警告設定]，[テンプレート設定]，[永続性設定]，[レポート設定]，[ベースライン設定]，[カスタム設定] のカテゴリで並べ替えられグループ化されます。

インフラストラクチャ・プリファレンスで設定値を編集したら、SiteScope によってすべての入力データの形式が正しいかどうかを検証され、SiteScope の再起動が必要な場合は警告が表示されます。[インフラストラクチャ プリファレンス] ページから SiteScope を再起動できます。

インフラストラクチャ・プリファレンスの値の設定の詳細については、629 ページ「インフラストラクチャ・プリファレンス・ページ」を参照してください。

参照情報

インフラストラクチャ・プリファレンス・ページ

このページでは、SiteScope の実行方法を決定する設定の値を定義できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [インフラストラクチャ・プリファレンス] を選択します。
重要な情報	▶ SiteScope の管理者、または「インフラストラクチャ・プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、SiteScope 設定の作成や変更、およびインフラストラクチャ・プリファレンスからの SiteScope の再起動を実行できます。 ▶ 多くのカスタム設定には、使いやすいテキスト・ラベルはなく、master.config ファイルの対応するプロパティ名のみが表示されます。
関連情報	628 ページ「インフラストラクチャ・プリファレンスの概要」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
[信頼されていない SSL 証明書を許可]	SSL の使用時に SiteScope で信頼されていない証明書を許可できるようになります。このオプションを使用しない場合、キーストア・ファイルで指定した証明書、または登録済みの CA 証明書に繋がる信頼チェーンがある証明書のみが許可されます。 標準設定値 : 選択されていない プロパティ名 : <code>_sslAcceptAllUntrustedCerts</code>
[BSM ダウンタイム取得頻度 (分)]	BSM にダウンタイムの要求を行う間の SiteScope の待機時間 (分単位)。 標準設定値 : 15 分

UI 要素	説明
[cmd.exe での引用符文字を無効化]	さまざまな作業で cmd.exe を実行するときに、引用符付きのパラメータを使用しません。 標準設定値 : 選択されていない プロパティ名 : _disableDoubleQuotesInTemplates
[DNS 名前タグ]	DNS “名前” タグとして DNS 関連の機能によって参照されるカンマ区切りのリストの値。 標準設定値 : Name; ,Nombre; ,Navn; ,Nome; ,Nom ; ,Nom¥u00FF: プロパティ名 : _dnsNameTags
[DNS サーバタグ]	DNS “サーバ” タグとして DNS 関連の機能によって参照されるカンマ区切りのリストの値。 標準設定値 : Server; ,Servidor; ,Serveur; ,Serveur¥u00FF: プロパティ名 : _dnsServerTags
[標準のしきい値を確認しない]	ユーザが選択したしきい値に対してモニタ結果がチェックされます。標準設定の SiteScope モニタしきい値に対してはチェックは行われません。 標準設定値 : 選択済み プロパティ名 : _noCheckDefaultThresholds
[電子メールの文字セット]	SiteScope の電子メール・プリファレンスおよび電子メール警告で生成される電子メールの文字セット。 標準設定値 : 値を入力しない場合は UTF-8 が使用されます。 プロパティ名 : _mailCharSet
電子メールの件名の文字セット	SiteScope の電子メール・プリファレンスおよび電子メール警告で生成される電子メールの件名の文字セット。 標準設定値 : 値を入力しない場合は UTF-8 が使用されます。 プロパティ名 : _mailSubjectCharSet

UI 要素	説明
[ダウンタイム メカニズムの有効化]	SiteScope を BSM に接続する際に、CI ダウンタイム・メカニズムを有効にします。BSM によって停止中と検知される CI に SiteScope モニタ、測定地位、グループ、またはプロファイル CI が直接リンクしている場合、SiteScope はダウンタイムによって影響を受けます。 標準設定値: 選択済み プロパティ名: _downtimeEnable
[BSM への資格情報のレポートを有効化]	選択すると、ホストの資格情報が SiteScope から BSM に送信されます。 標準設定値: 選択されていない プロパティ名: _sendCredentials
[有効化されているモニタのみログに記録]	無効になっているモニタの実行は、SiteScope によって日次ログ・ファイルには記録されません。 標準設定値: 選択されていない プロパティ名: _onlyLogEnabledMonitors
[プールごとの最大アイドル スレッド数]	スレッド・プールあたりに許可されるアイドル・スレッドの最大数。 標準設定値: 100 注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名: _threadPoolMaxIdle
[プール内のスレッドの最長アイドル時間 (ミリ秒)]	SiteScope によってアイドル・スレッド・プールが消去されるまでの待機時間 (ミリ秒単位)。 標準設定値: 600000 ミリ秒 (10 分) プロパティ名: _threadPoolMaxIdleTime
[perfex プロセスの最大アイドル時間 (分)]	SiteScope によってアイドル perfex プロセスが消去されるまでの待機時間 (ミリ秒単位)。クリーニング・プロセスにより、SiteScope マシンのメモリ・フットプリントが改善されます。 標準設定値: 60 分 プロパティ名: _perfexProcessMaxIdleTime

UI 要素	説明
[プールあたりの最大プロセス数]	プロセス・プールあたりに許可される最大プロセス数。 標準設定値 : 200 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : _processPoolMaxPerPool
[データ統合サンプルのキューの最大サイズ]	データ統合サンプルのキューの上限。この制限に達すると、古いサンプルが破棄されます。 標準設定値 : 1000 プロパティ名 : _dataSamplesQueueMaxSize
[更新間でのモニタの遅延 (ミリ秒)]	起動してからすでに実行されているモニタが再度実行されるまでの待機時間 (ミリ秒単位)。 標準設定値 : 1000 ミリ秒 プロパティ名 : _monitorDelayBetweenRefresh
[NT SSH タイムアウト (秒)]	リモート Windows サーバへの SSH 接続を待機するタイムアウト時間 (秒単位)。 標準設定値 : 0 秒 プロパティ名 : _NTSSTimeout
[ポートを開こうとする回数]	予約ポートを開こうとする最大回数。rlogin および rsh リモート・アクセス・メソッドの 811 ~ 1024 の範囲を使用します。 標準設定値 : 25 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : _localPortRetryCount
[キューが最大サイズに達したときに破棄するサンプル数]	キューの最大サイズに達した場合に破棄するサンプルの数です。 標準設定値 : 500 プロパティ名 : _ataSamplesQueueDiscardSamples

UI 要素	説明
[数値形式]	文字列表現に変換するときの数値の形式。 標準設定値 : #.## プロパティ名 : _noScientificNotation ヒント : 数値形式の詳細については、HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報 (http://support.openview.hp.com/selfsolve/document/KM305059) を参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログインする必要があります。
[perfex タイムアウト (秒)]	perfex によって接続が作成されるまで、またはモニタが実行されるまで待機するタイムアウト時間 (秒単位)。 標準設定値 : 120 秒 プロパティ名 : _perfexTimeout
[PowerShell 実行コマンド]	64 ビット・バージョンの Windows 2003, Windows 2008, または Windows XP 上で Microsoft Exchange 2007/2010 モニタの使用を有効にするには、次の処理を行います (32 ビット・アプリケーションは 64 ビット・バージョンの Windows Server 2003, 2008, または Windows XP を使用しているコンピュータ上で system32 フォルダにアクセスできないため)。 ➤ http://support.microsoft.com/?scid=kb;en-us;942589 から入手できる Microsoft Hotfix を適用する。 ➤ PowerShell 実行コマンドを入力する。例 : C:¥Windows¥Sysnative¥WindowsPowerShell¥v1.0¥powershell.exe 注 : Windows 2003 と Windows XP では、標準設定では Symlink Sysnative を使用できません。

UI 要素	説明
[プロセス プール強制終了タイムアウト (ミリ秒)]	SiteScope によって応答のないプロセスが強制終了されるまでの待機時間 (ミリ秒単位)。これにより、すべてのタイムアウトでプロセスが強制終了されることを回避できます。 標準設定値: 60000 ミリ秒 (最大でも 180000 ミリ秒にすることをお勧めします) 注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名: <code>_processPoolKillTimeout</code>
[マルチスレッドでサーバのタイムアウトを待機するプロセス]	選択すると、接続を閉じるためにサーバ・タイムアウトを待機しているか、またはプロセスをプールに戻すために回答を待機しているプロセスごとに、別のスレッドが開かれます。多数のサーバがダウンしている場合にこの設定を行うと、スレッド・カウントと使用されるメモリが増えます。この設定をクリアすると (推奨)、SiteScope はこれらのプロセスの管理にスレッドを 1 つだけ使用します。 標準設定値: 選択されていない
[回帰的' 依存対象']	モニタの [依存] ボックスで回帰を可能にします。これは、依存関係のため親グループが無効化されたとき、サブグループが無効化されることを意味します。標準設定では、依存関係が無効化されることによって、直接のグループのみが影響を受けます。 標準設定値: 選択されていない 注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名: <code>_dependsOnRecursive</code>
[リモートサーバの表示名を BSM に送信]	リモート・サーバのホスト名の代わりにリモート・サーバの表示名が BSM に送信されます。この設定は、DNS 解決が無効な場合に使用することをお勧めします。 標準設定値: 選択されていない プロパティ名: <code>_sendRemoteServerDisplayNameToBAC</code>

UI 要素	説明
[SiteScope のスリープ遅延 (ミリ秒)]	メイン・スレッドでのスリープ間隔の時間 (ミリ秒単位)。 標準設定値: 180 ミリ秒 注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名: _monitorProcessCheckDelay
[SiteScope ツリー更新レート (秒)]	SiteScope ツリーの更新間の待機時間 (秒単位)。最小値は 30 秒です。 標準設定値: 60 秒 プロパティ名: _sisTreeRefreshRateSecs
[エラー発生時のスリープ間隔 (ミリ秒)]	[エラーの検証] オプションを使用してモニタを再実行するまでに待機する時間 (ミリ秒単位)。 標準設定値: 5000 ミリ秒 プロパティ名: _verifySleepDuration
[SSH プロンプト タイムアウト (ミリ秒)]	最初のコマンドを実行する前に SiteScope が SSH 接続プロンプトの完了を待機する時間 (ミリ秒単位)。 標準設定値: 3000 ミリ秒 プロパティ名: _waitSshPromptTimeout
[タイムゾーン オフセット]	グリニッジ標準時 (GMT) のタイム・ゾーン・オフセット (時間単位) を手動で設定します。正と負、整数と非整数の両方の値を入力できます。 標準設定値: -999 (オフセットなし) 例: 米国東部 (EST) の場合、タイム・ゾーン・オフセットは GMT -5 になります。 注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名: _timeZoneOffset

UI 要素	説明
[トレースルート コマンド]	(Unix の場合) プラットフォームの標準設定を上書きするトレースルート・コマンドへのパス。 標準設定値 : 値なし プロパティ名 : <code>_tracerouteCommand</code>
[SSH 接続プロンプトを待機する]	SiteScope は、最初のコマンドの実行を開始する前に、SSH 接続プロンプトの終了を待機します。この設定は、SSH リモート・サーバの起動プロンプトが長い場合に選択してください。 標準設定値 : 選択されていない プロパティ名 : <code>_readUntilPromptFound</code>

サーバ設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[ホスト名の上書き]	BSM の SiteScope ホスト名が上書きされます。 標準設定値 : 値なし プロパティ名 : <code>_sisHostNameOverride</code>
[プロセスの強制終了]	SiteScope プロセスが停止すると子プロセスが強制終了されます。 標準設定値 : 選択済み プロパティ名 : <code>_killProcesses</code>
[モニタ プロセスの最大数]	プロセス・プール内のモニタ・プロセスの最大数。 標準設定値 : 100 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : <code>_maxMonitorProcesses</code>

UI 要素	説明
[実行中モニタの最大数]	キュー内の実行中モニタ・プロセスの最大数。 標準設定値 : 400 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : <code>_maxMonitorsRunning</code>
[最小限のモニタ実行間隔 (秒)]	最小限のモニタ頻度。この頻度に満たない頻度を指定してモニタを作成しようとする、検証エラーが表示されます。 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 標準設定値 : 15 プロパティ名 : <code>_monitorMinInterval</code>
[IP バージョン 6 アドレスを優先]	ホストが IPv6 と IPv4 の両方に解決された場合、IPv6 が使用されます。SiteScope の IPv6 のサポートの詳細については、551 ページ「SiteScope での IP バージョン 6 のサポート」を参照してください。 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 標準設定値 : 選択されていない プロパティ名 : <code>_preferIPv6Address</code>
[SiteScope ハートビート再開タイムアウト (分)]	ハートビート・イベントが検出されなくなってから SiteScope が再起動するまでの最大時間 (分単位)。 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 標準設定値 : 5 分 プロパティ名 : <code>_heartbeatRestartTimeout</code>

UI 要素	説明
[SiteScope 再起動タイムアウト (分)]	SiteScope が再起動するために許可される最大時間。 標準設定値 : 5 分 プロパティ名 : _restartTimeout
SiteScope シャットダウンタイムアウト (秒)	SiteScope でシャットダウンを待機するタイムアウト時間 (秒単位)。 標準設定値 : 60 秒 プロパティ名 : _shutdownTimeout
[起動スクリプト]	SiteScope の起動で使用するプラットフォームや手順に関係なく, SiteScope を起動するときは必ずこのスクリプトが実行されます。(空 = なし) 標準設定値 : 値なし プロパティ名 : _startupScript

モニタ設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[追加エラー トークン]	サーバ出力の解析時に失敗の兆候として処理されるキーワードの追加のリスト。 標準設定値 : 失敗しました。* エラー コード : プロパティ名 : _scriptMonitorErrorMsgs2
[参照可能な EXE タイムアウト (ミリ秒)]	カウンタ情報の取得やモニタの実行を待機する最大時間 (ミリ秒単位)。この設定は, SAP, Sybase, DB2 8.x および 9.x のモニタなど, 実行可能な参照可能モニタにのみ適用されます。 標準設定値 : 45000 プロパティ名 : _browsableExeTimeout

UI 要素	説明
[ブラウズ可能モニタ - エラー時にすべてのカウンタの状態を BSM に送信]	参照可能なモニタの状態がエラーになっている場合、エラー発生カウンタ数とその現在の値のリストのみが SiteScope から BSM に送信されます。エラーになっていない場合（モニタの状態が正常な場合）、すべてのカウンタ名と値が SiteScope から BSM に送信されます。 選択すると、エラー時でもすべてのカウンタ（エラーのカウンタと正常な状態のカウンタ）とその値が SiteScope から BSM に送信されます。 標準設定値：選択されていない プロパティ名： _isSendStatusOfAllBrowsableCountersToBAC
[100% で発生する CPU エラー]	対象マシンの CPU 使用率が 100% に達すると、CPU モニタは標準設定エラー状態に切り替わります。 標準設定値：選択済み プロパティ名：_cpuEnableErrorAt100
[CPU 最大単位数]	CPU モニタによってサポートされる最大 CPU 単位数。 標準設定値：16 プロパティ名：_cpuMaxProcessors
[DB 最大カラム数]	DB モニタによって処理される最大列数。 標準設定値：10 プロパティ名：_databaseMaxColumns
[DB 最大行数]	DB モニタによって処理される最大行数。 標準設定値：1 プロパティ名：_databaseMaxRows
[DB 値の最大長]	DB モニタによって処理されるデータの最大の長さ（文字数）。 標準設定値：200 プロパティ名：_databaseMaxSummary

UI 要素	説明
[標準精度]	モニタによって処理される浮動小数点値の標準精度。 標準設定値 : 0 (無効) プロパティ名 : <code>_defaultPrecision</code>
[ダイアルアップオプション]	Microsoft Windows ダイアルアップ・モニタから dialup.exe を実行するときのオプション。暗黙的にモデムでダイアルするには、-silent に設定します。ダイアルアップのデバッグを有効にするには、-debug に設定します。 標準設定値 : 0 プロパティ名 : <code>_dialupOptions</code>
[最終行の読み取りを空にする]	スクリプト・モニタの出力に空行の最終行が含まれます。 標準設定値 : 選択されていない プロパティ名 : <code>_enable_script_monitor_non_empty_last_line_reading</code>
[JDBC ログ記録の有効化]	リンク・チェック・モニタの JDBC 検索結果ログ記録が有効になります。 標準設定値 : 選択されていない プロパティ名 : <code>_linkMonitorJdbcEnabled</code>
[詳細の必須を有効化/無効化]	警告またはモニタを有効化/無効化するときに、詳細の追加を必須フィールドとして設定できます。 標準設定値 : 選択されていない プロパティ名 : <code>_enableDisableDescriptionMandatory</code>
[スクリプト モニタ エラー トークン]	サーバ出力の解析時に失敗の兆候として処理されるキーワードのリスト。 標準設定値 : 見つかりません, 拒否されました, そのようなファイルまたはディレクトリは実行できません プロパティ名 : <code>_scriptMonitorErrorMsgs</code>
[保存するイベント ログ メッセージ]	警告の診断テキストと同時に保存する Microsoft Windows イベント・ログの詳細の数。 標準設定値 : 10 プロパティ名 : <code>_eventLogMessagesToSave</code>

UI 要素	説明
[排他的モニタのタイムアウト (秒)]	実行前にほかのモニタの完了を排他的モニタで待機する最大時間 (秒単位)。この影響を受けるモニタは、Microsoft Windows ダイアルアップ・モニタだけです。 標準設定値: 120 秒 プロパティ名: _exclusiveMonitorTimeout
[FTP コンテンツ一致最大量]	FTP データ内容の照合に使用する最大バッファ・サイズ。 標準設定値: 50000 プロパティ名: _ftpContentMatchMax
[FTP ダウンロード制限]	各ファイルから照合のためにダウンロードする最大バイト数。 標準設定値: -1 (制限なし) プロパティ名: _ftpDownloadLimit
[FTP 最大スレッド数]	同時 FTP ワーカ・スレッド許容最大数。 標準設定値: 1 プロパティ名: _ftpMaxThreads
[HTTP 内容一致表示制限]	URL モニタの内容一致を表示するための最大バイト数。 標準設定値: 150 プロパティ名: _urlContentMatchDisplayMax
[HTTP 内容一致制限]	URL モニタの内容一致を確認するための最大バイト数。 標準設定値: 50000 プロパティ名: _urlContentMatchMax

UI 要素	説明
[初期モニタ 遅延 (秒)]	SiteScope の再起動後にモニタの更新がランダムにスケジュールされる時間 (秒単位)。 次の実行がすぐに行われるようにモニタの頻度を変更すると (たとえば, モニタが 5 分以内に実行されない場合, 頻度を 5 分より小さい値に変更します), SiteScope によって次の実行が指定した期間でランダムにスケジュールされます。 標準設定値 : 600 秒 プロパティ名 : _initialMonitorDelay
[Astra ログ ファイル を保管する]	Astra モニタで Astra ログ・ファイルの保管を許可します。 標準設定値 : 選択されていない プロパティ名 : _astraKeepLogFiles
[メール添付ファイル のコンテンツとして Base64 をサポート]	メール・モニタに対してメール添付ファイルのデータ内容送信エンコードとして Base64 がサポートされます。 標準設定値 : 選択されていない 注 : この設定を変更する場合は, SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : _mailAttachmentBase64Support
[最大 BMC カウン タ数]	モニタで取得可能な BMC Patrol カウンタの最大数。 標準設定値 : 50 プロパティ名 : _browsableBMCCContentMaxCounters
[選択されるブラウ ズ可能カウンタの 最大数]	参照可能ツリーから選択される参照可能カウンタの最大数。 標準設定値 : 100 プロパティ名 : _browsableContentMaxCounters
[アプリケーション モ ニタの最大カウンタ]	アプリケーション・モニタに選択できるカウンタの最大数。 標準設定値 : 100 プロパティ名 : _ApplicationMonitorMaxCounters=100

UI 要素	説明
[MIB モニタによる SNMP に対する最大カウンタ]	[MIB による SNMP] モニタでサポートされるカウンタの最大数。 標準設定値 : 32 プロパティ名 : _maxSNMPbyMIBCounters
[最大 Windows パフォーマンス カウンタ モニタ カウンタ数]	Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタのインスタンスごとに使用される、カウンタの最大数。 標準設定値 : 8 プロパティ名 : _NTCounterMonitorMaxCounters
[Microsoft Windows Media Server モニタ サービス名]	Microsoft Windows Media Server モニタを使用して監視するサービス名。 標準設定値 : Windows Media サービス (Windows Media Station Service や Windows Media Unicast Service など) プロパティ名 : _counterObjectsWindowsMediaMonitor
[MS Media Player 9 アカウント ブロック]	Media Player アカウントが 17999 エラーで停止する場合、このオプションを選択して、アカウント・ディレクトリ・パスを [MS Media Player 9 アカウント ディレクトリ] ボックスに追加します。 標準設定値 : 選択されていない プロパティ名 : _MediaPlayer9AccountBlocked
[MS Media Player 9 アカウント ディレクトリ]	Media Player モニタで 17999 エラーが発生した場合、Media Player アカウント・ディレクトリを入力します。 例 : C:¥Documents and Settings¥<ユーザ>¥Local Settings¥Application Data¥Microsoft¥Windows Media¥9.0 プロパティ名 : _MediaPlayer9AccountBlockedDir
[ネットワーク帯域幅 モニタ 整合性確認]	ネットワーク帯域幅モニタに対して整合性確認が実行されます。 標準設定値 : 選択済み プロパティ名 : _performNetworkBandwidthSanityCheck

UI 要素	説明
[Real Media Server モニタ サービス名]	Real Media Server モニタを使用して監視するサービス名。 標準設定値 : RMServer プロパティ名 : _counterObjectsRealMonitor
[スクリプトの実行に perfex ツールを使用]	スクリプトの実行に perfex ツールを使用します。 標準設定値 : 選択済み プロパティ名 : _scriptRunThroughPerfex
[スクリプト モニタ出力制限]	スクリプト・モニタの起動後にスクリプトの出力から保存する行数。 標準設定値 : 25 プロパティ名 : _scriptMonitorLinesToSave
[スクリプト モニタ置換文字列]	リモート・スクリプトのパラメータ・タグであるスペース区切りの文字列のリストが保存されます。スクリプト・モニタの実行時に、スクリプト・コマンドのパラメータ・タグがモニタのプリファレンスの実際のパラメータ値に置換されます。 標準設定値 : \$ % プロパティ名 : _scriptMonitorReplacementChars 例 : スクリプト・コマンドが <code>test \$ %</code> 、置換文字が <code>\$ %</code> 、パラメータが <code>Param1 Param2</code> である場合、コマンド <code>test Param1 Param2</code> がモニタで実行されます。
[同時実行 DNS モニタ]	同時に実行できる DNS モニタの最大数。これは、 roundTripTime カウンタを使用する場合にのみ関係します。NSLookup 操作で、オペレーティング・システムをロードし、値を変更できます。 標準設定値 : 0 (0 は、同時に実行できる DNS モニタの数に制限がないことを意味します) 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : _maxDnsMonitorsRunning

UI 要素	説明
[SNMP モニタの最大数]	指定の時間に実行できる SNMP モニタの最大数。 標準設定値: 10 注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名: _snmpMonitorMaximum
[SNMP セッション終了タイムアウト (ミリ秒)]	SNMP セッションを閉じる前に SiteScope が待機する最大時間 (ミリ秒単位)。 標準設定値: 30000 プロパティ名: _maxSNMPCloseSessionTimeMillis
[SNMP トラップ エンコーディング]	SNMP トラップ・モニタの SNMP トラップ・エンコーディング。空 = ISO8859-1。 標準設定値: ISO8859-1 プロパティ名: _snmpTrapEncoding
[SNMP トラップ モニタ ログ制限]	SNMP トラップ・モニタに対して SNMP トラップ・ログに記録される最大行数。このボックスは、SNMP トラップ・モニタ・ページの [警告の実行] が [すべての SNMP トラップの確認後に一度のみ] に設定されている場合にのみ入力します。 注: 制限を高く設定すると、SiteScope.log または RunMonitor.log のサイズが増加する可能性があります。 標準設定値: 1000 プロパティ名: _SNMPTrapMonitorDetailsMax
[DNS Java ライブラリを使用]	標準の perfex 設定を使用せずに、Java DNS 機能をアクティブにします。DNS 応答時間は perfex 応答よりも速い場合があります。 標準設定値: 選択されていない プロパティ名: _useDNSJava

UI 要素	説明
[MIB による SNMP に対する要求シーケンスを使用する]	[MIB による SNMP] モニタに対して新しい要求モードを有効にします。このオプションを使用すると、SiteScope はリモート・サーバに対して、モニタからの OID カウンタごとに個別の要求を実行します。 標準設定値: 選択されていない プロパティ名: _sequenceSNMP
[Web Service モニタの最大読み取り長 (バイト)]	Web サーバ・モニタのログ・ファイルから読み取る最大データ量 (バイト単位)。 標準設定値: 50000 バイト プロパティ名: _maxAmountToRead
[Web サービス モニタのタイムアウト (秒)]	Web Server モニタが実行される最大時間 (秒単位)。 標準設定値: 30 秒 プロパティ名: webServiceTimeout=30
[Web サービス モニタは共通コンテンツマッチを使用する]	Web サービス・モニタの内容照合動作は、SiteScope 10.12 で変更されました。この設定により、SiteScope 10.12 以前に定義された Web サービス・モニタは正しい値を照合するようになりました。これは、Web サービス・モニタが、内容照合が使用されるほかのモニタと同じように動作することを意味します。古い内容照合動作に戻すには、この設定をクリアしてください。 標準設定値: 選択済み

モニタ設定をスキップ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[スキップ モニタ の無効化期間 (秒)]	モニタの最大スキップ数 ([モニタの最大スキップ数] で定義されます) を超えてからモニタが無効化される期間 (秒単位)。 標準設定値 : 360 秒 プロパティ名 : _monitorDisablePeriodOnSkip
[モニタの最大スキップ数]	モニタが無効化されるまで許可されるモニタの最大連続スキップ数。 標準設定値 : 10 注 : この設定を変更する場合は, SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : _maxMonitorSkips
[スキップ後モニタが無効になった場合に管理者に電子メールを送信]	モニタの最大連続スキップ数を超えてモニタが無効化された場合, SiteScope から管理者に電子メールが送信されます。 標準設定値 : 選択されていない プロパティ名 : _emailSkipNotification
[スキップされるモニタをシャットダウン]	モニタが許容最大数を超えてスキップした場合, SiteScope がエラーを出力してシャットダウンします。 標準設定値 : 選択されていない プロパティ名 : _shutdownOnSkips

警告設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[警告試行時の遅延 (秒)]	Post 警告の送信を試行する間の待機時間 (秒単位)。 標準設定値 : 120 秒 プロパティ名 : <code>_postAttemptDelay</code>
[警告スレッドの最大数]	プール内の警告スレッドの最大数。 標準設定値 : 100 プロパティ名 : <code>_threadPoolAlertMaxThreads</code>
[Post アクションの最大実行数]	Post 警告の送信を試行する最大数。 標準設定値 : 4 プロパティ名 : <code>_postAttempts</code>
[最大スクリプト警告プロセス数]	同時に実行できるスクリプト警告プロセスの最大数。 標準設定値 : 25 プロパティ名 : <code>_maxScriptAlertProcesses</code>
[サウンド警告の最大の長さ (ミリ秒)]	サウンド警告音の最長時間 (ミリ秒単位)。 標準設定値 : 0 プロパティ名 : <code>_AudioSleepTime</code>
[ページの遅延 (秒)]	ページ信号間の遅延 (ページ警告を使用の場合)。 標準設定値 : 5 プロパティ名 : <code>_delayBetweenPages</code>

テンプレート設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する]	テンプレート内にグループを作成せずに、テンプレートの直下にモニタを追加できるようになります。 注：この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 標準設定値：選択されていない プロパティ名： _allowTemplateMonitorDirectlyUnderTemplate

永続性設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[永続差異ファイルあたりの最大変更数]	各永続差異ファイルに保持される、永続的変更の最大数。 標準設定値：51 注：この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名：_PersistencyMaxChangesInDeltaFile
[永続履歴項目の最大数]	永続的に保持される履歴項目の最大数。 標準設定値：1000 プロパティ名：_PersistencyMaxHistoryItems
[最大永続履歴サイズ]	永続的履歴の最大サイズ（バイト単位）。 標準設定値：20000 注：この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名：_PersistencyMaxHistorySize

UI 要素	説明
[永続差異ファイルの最大数]	永続的に保持される差異ファイルの最大数。この数に達すると、すべての永続オブジェクトを使用して新しいスナップショット（.ssf）ファイルが作成されます。古い .ssf ファイルは、履歴フォルダに移動されます。 標準設定値 : 100 プロパティ名 : _PersistencyMaxDeltaFiles
[最大一時ディレクトリ サイズ]	一時ディレクトリの最大サイズ（キロバイト単位）。 標準設定値 : 10000 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : _tempDirMaxSize

レポート設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[レポートの標準設定時間 (時間)]	クイック・レポートまたは警告レポートの監視データを含める標準設定期間。 標準設定値 : 1 時間 プロパティ名 : <code>_quickReportDefaultTimePeriod</code>
[レポートに <code>alert.log.old</code> を含める]	<code>alert.log.old</code> ファイルが警告レポートに含まれます。 標準設定値 : 選択済み プロパティ名 : <code>_includeAlertLogOld</code>
[モニタ履歴レポートの最大エラー数]	モニタ履歴レポートに表示される最大エラー数。 標準設定値 : 100 プロパティ名 : <code>_maxReportErrors</code>
[履歴レポートの最大サンプル数]	履歴レポートの最大サンプル数 (読み取り数または行数)。 標準設定値 : 100 プロパティ名 : <code>_reportMaxBuckets</code>
[モニタ履歴レポートの最大警告数]	モニタ履歴レポートに表示される最大警告数。 標準設定値 : 100 プロパティ名 : <code>_maxReportWarnings</code>
[レポートで詳細なサンプリングアルゴリズムを使用]	レポートのサンプル間の時間が, レポートされたすべてのモニタ頻度の最小値として定義されます。 標準設定値 : 選択されていない プロパティ名 : <code>_useReportAdvancedSamplingAlgorithm</code>

ベースライン設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[アクティベーションスレッドの優先順位]	アクティベーション・スレッドに割り当てられた優先順位。指定する場合、優先順位は 1 ～ 10 にする必要があります。指定しない場合、優先順位は 1 に設定されます。通常、優先順位が高いほど、ベースラインのアクティブ化が早くなります。SiteScope のオンライン機能を妨げないように、優先順位はできるだけ低くしてください。 標準設定値 : 1 (低い優先順位) 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : _baseliningActivationThreadPriority
[エラーのしきい値が定義されていない場合は、エラーの上限の作成を自動化する]	モニタのエラーのしきい値が定義されていない場合、エラーの上限のオフセット値を使用して、ベースラインしきい値が自動的に作成されます。 標準設定値 : 選択済み 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : _baseliningAutomateUpperBoundCreation
[計算スレッドの優先順位]	計算スレッドに割り当てられた優先順位。指定する場合、優先順位は 1 ～ 10 にする必要があります。指定しない場合、優先順位は 1 に設定されます。通常、優先順位が高いほど、ベースライン計算の完了が早くなります。SiteScope のオンライン機能を妨げないように、優先順位はできるだけ低くしてください。 標準設定値 : 1 (低い優先順位) 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : _baseliningCalculationThreadPriority

UI 要素	説明
[失敗した解析ハンドラ スレッドの優先順位]	失敗した解析スレッド・ハンドラに割り当てられた優先順位。指定する場合、優先順位は 1 ～ 10 にする必要があります。指定しない場合、優先順位は 1 に設定されます。通常、優先順位が高いほど、ベースライン計算の完了が早くなります。SiteScope のオンライン機能を妨げないように、優先順位はできるだけ低くしてください。 標準設定値: 1 (低い優先順位) 注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名: _baseliningFailedParsingHandlerThreadPriority
[今日の日を計算に含める]	現在の日のデータをベースライン計算に含めるかどうかを指定します。 標準設定値: 選択済み 注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名: _baseliningCalculationIncludesToday
[ベースライン データをディスクに保存する間隔 (分)]	メモリに累積されるベースライン・データのディスクへの保存を SiteScope が行う間隔 (分単位)。間隔が短いほどメモリの消費量が少なくなりますが、失敗による脆弱性が増加し、パフォーマンスも低下します。 標準設定値: 30 分 注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名: _baseliningSaveAccumulatedDataIntervalMinutes

UI 要素	説明
[計算に含める最大日数]	ベースライン計算に含める履歴データの日数。数値が高いほどベースライン結果の精度は高くなりますが、計算時間が長くなり、使用するディスク領域も増加します。この値よりも古いデータは計算に含まれません。計算モデルの詳細については、341 ページ「SiteScope でのしきい値の計算方法」を参照してください。 標準設定値 : 30 日 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : <code>_baseliningDaysToIncludeInCalculation</code>
[パーセンタイル範囲の最大数]	パーセンタイル範囲マッピング・テーブルに表示されるパーセンタイル範囲の数が制限されます。 標準設定値 : 8 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : <code>_baseliningMaxNumberOfPercentilesRanges</code>
[ベースライン設定に必要な最小日数]	SiteScope でベースラインを計算するためにモニタで実行する必要がある最小日数。 標準設定値 : 14 日 最小値 : 1 (1 より小さい値を入力した場合、標準設定値が使用されます)。 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : <code>_baseliningMinimumNumberOfDays</code>

UI 要素	説明
[ベースライン設定に必要な最小サンプル数]	SiteScope でベースラインを計算するために必要な最小サンプル数。 標準設定値 : 2016 (2 週間周期で実行中で 10 分ごとに実行されるモニタに対して生成されるサンプルの数) 最小値 : 1 (1 より小さい値を入力した場合、標準設定値が使用されます)。 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : _baseliningMinimumNumberOfSamples
[エラーの上限の計算に使用するオフセット]	エラー限度の計算に使用するオフセット値。次の場合、ベースラインのしきい値はこの値に乘じられます。 ▶ [エラーのしきい値が定義されていない場合は、エラーの上限の作成を自動化する] オプションが選択されている (下記参照)。 ▶ 最も上限に近い現在のエラーしきい値が、計算されたベースラインのしきい値よりも低い。 標準設定値 : 0.3 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : _baseliningUpperBoundOffset
[解析のチャンク サイズ]	ログ・ファイル・パーサによって同時に処理されるモニタの数。数値が高いほどベースライン計算は早くなりますが、使用されるファイル・ハンドラの数が増加します。 標準設定値 : 100 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : _baseliningParsingChunkSize

UI 要素	説明
[解析スレッドの優先順位]	解析スレッドに割り当てられた優先順位。指定する場合、優先順位は 1 ～ 10 にする必要があります。指定しない場合、優先順位は 1 に設定されます。通常、優先順位が高いほど、ベースライン計算の完了が早くなります。SiteScope のオンライン機能を妨げないように、優先順位はできるだけ低くしてください。 標準設定値 : 1 (低い優先順位) 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : _baseliningParsingThreadPriority
[破棄したサンプルのパーセンタイル]	ベースライン計算に含まれない最も上限に近いサンプルのパーセンタイル(“ノイズ”とみなされる測定値のサンプル)。 標準設定値 : 2.0 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : _baseliningNoiseMarginPercentile

カスタム設定

注：多くのカスタム設定には、使いやすいテキスト・ラベルはなく、**master.config** ファイルの対応するプロパティ名のみが表示されます。これらの設定はドキュメントに含まれていません。

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[自動デプロイメント チェックの頻度 (秒)]	persistence¥autodeployment ディレクトリの自動テンプレート・デプロイメント xml ファイルがデプロイされる間隔 (秒単位)。この機能の詳細については、931 ページ「自動テンプレート・デプロイメント」を参照してください。 標準設定値： 120 プロパティ名： _autoDeploymentCheckFrequency
[トポロジ解決頻度 (分)]	監視対象サーバのトポロジをチェックする間の待機時間 (分単位)。モニタの実行中にこの時間を超えると、モニタによって BSM の ODB にトポロジが再作成されます。 標準設定値： 120 分 プロパティ名： _topologyResolvingFrequencyInMinutes

22

統合プリファレンス

本章の内容

概念

- ▶ 統合プリファレンスの概要 (660 ページ)

タスク

- ▶ アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法 (669 ページ)

参照情報

- ▶ 一般データ統合の XML タグの参照情報 (671 ページ)
- ▶ [統合プリファレンス] のユーザ・インタフェース (674 ページ)

概念

統合プリファレンスの概要

[統合プリファレンス] インタフェースを使用すると、統合インスタンスを作成して、SiteScope が監視データを次のアプリケーションに報告できるようになります。

▶ HP Business Service Management

- ▶ 統合の詳細については、121 ページ「Business Service Management (BSM) との連携」を参照してください。
- ▶ 統合プリファレンスの詳細については、661 ページ「HP Business Service Management 統合プリファレンス」を参照してください。
- ▶ ユーザ・インタフェースの詳細については、678 ページ「BSM 統合プリファレンス・ダイアログ・ボックス」を参照してください。

▶ HP Diagnostics

- ▶ 統合の詳細については、664 ページ「Diagnostics 統合の概要」を参照してください。
- ▶ ユーザ・インタフェースの詳細については、689 ページ「[Diagnostics 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

▶ HP Operations Manager

- ▶ 統合の詳細については、154 ページ「SiteScope が Operations Manager 製品と通信する方法について」を参照してください。
- ▶ HP Operations Manager 統合プリファレンスの詳細については、666 ページ「HP Operations Manager の概要」を参照してください。
- ▶ ユーザ・インタフェースの詳細については、694 ページ「[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

▶ 汎用データ・アプリケーション

- ▶ 統合の詳細については、667 ページ「汎用データ統合の概要」を参照してください。
- ▶ ユーザ・インタフェースの詳細については、683 ページ「[データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。



HP Business Service Management 統合プリファレンス

SiteScope 監視データのログを BSM に記録できるようにするには、SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定する必要があります。これには、SiteScope を BSM の [システム可用性管理 (SAM)] ページに追加する作業も含まれます。SiteScope が追加され、接続が確立されたら、[統合プリファレンス] ページに、[システム可用性管理] の [新規 SiteScope] ページに入力した関連設定を含む [BSM 統合プリファレンス] が表示されます。

統合プリファレンスは次の用途に使用します。

- ▶ 使用可能な統合設定を変更する。
- ▶ BSM への全データのログ記録を無効にする。これには、トポロジ・レポートが含まれます。
- ▶ 空の SiteScope プロファイルに対して統合を作成する。[システム可用性管理] に SiteScope を追加したときに BSM から SiteScope にアクセスできなかった場合は (HP Software-as-a-Service で作業している場合など)、**アクセス不可プロファイル**を持つ SiteScope をシステム可用性管理に追加します。この後、[統合プリファレンス] で接続と統合を設定します。このタスクの詳細については、669 ページ「アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法」を参照してください。

接続先の BSM サーバが、SiteScope のデータ報告先の BSM サーバと異なるマシンにある場合、SiteScope の [統合プリファレンス] の [メイン設定]、または [システム可用性管理] の [新規 SiteScope] ページの [分散設定] で、両方のサーバについて接続情報を指定する必要があります。

本項の内容

- ▶ 662 ページ「SiteScope-BSM 通信のための SSL の使用」
- ▶ 663 ページ「SiteScope のデータ送信先となるゲートウェイ・サーバの変更」
- ▶ 663 ページ「トラブルシューティングと制限事項」
- ▶ 663 ページ「統合プリファレンスの設定」

SiteScope-BSM 通信のための SSL の使用

Secure Sockets Layer (SSL) を使用して、SiteScope から BSM サーバにデータを転送できます。ルート認証局で署名された証明書を BSM サーバにインストールしている場合、SiteScope サーバで必要な設定はありません。BSM サーバに自己署名証明書があり、その証明書を使用して SiteScope との通信のセキュリティを保護する場合、144 ページ「SiteScope-BSM 通信のための SSL の使用方法」に説明されている手順を実行する必要があります。

注：

- ▶ これらの設定は、BSM マシンにインストールされている証明書がルート認証局 (CA) によって署名されていない場合にのみ指定する必要があります。たとえば、Verisign のように認証局が署名した証明書を使用している場合、これらの設定を変更する必要はありません。
 - ▶ ほかの SiteScope モニタで使用しているキーストア・ファイルに自己署名証明書をインポートできますが、必須ではありません。BSM サーバの証明書のキーストアは、個別に作成できます。
-

SiteScope のデータ送信先となるゲートウェイ・サーバの変更

SiteScope のデータのレポート先となるゲートウェイ・サーバを変更できます。一般に、これは、複数のサーバにコンポーネントがインストールされている BSM デプロイメントで作業している場合にのみ当てはまります。この変更を行うには、[統合プリファレンス] ページの [Business Service Management マシン名/IP アドレス] ボックスに必要なゲートウェイ・サーバの名前または IP アドレスを入力します。また、SiteScope 設定を [システム可用性管理] の [ゲートウェイサーバ] の名前で更新する必要があります。

注：この機能は、特定の BSM インストールにすでに登録されている SiteScope のゲートウェイ・サーバを変更する場合にのみ使用できます。新しい SiteScope を追加する場合や、異なる BSM システムに SiteScope を接続する場合には、この機能は使用できません。

トラブルシューティングと制限事項

BSM へのデータのレポートに関するトラブルシューティングの詳細については、151 ページ「注意事項と制限事項」を参照してください。

統合プリファレンスの設定

これらのプリファレンスの設定の詳細については、675 ページ「統合プリファレンス・ページ」を参照してください。



Diagnostics 統合の概要

SiteScope は HP Diagnostics にデータを転送して、Diagnostics が監視するアプリケーション・サーバに関する包括的な情報を表示できるようにします。このデータから、アプリケーション・サーバのデプロイ先であるインフラストラクチャ・コンポーネントに関する洞察を得ることができます。

たとえば、MIB による SNMP モニタからのデータを統合すると、アプリケーション・サーバが実行されているインフラストラクチャに関する問題の判別に役立ちます。SiteScope は、グループ、モニタ、測定値に関するデータを転送します。HP Diagnostics は、SiteScope から送信されたデータを読み込み、レポートやグラフで表示できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、689 ページ「[Diagnostics 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

Diagnostics の測定単位

SiteScope では、SiteScope モニタと Diagnostics のメトリックスおよびメトリックに使用する測定単位のマッピングを制御するファイル **<SiteScope のルート・ディレクトリ>/conf/ integration/data_integration_uom.xml** を生成します。Diagnostics は、認識できる測定単位にデータが関連付けられている場合にのみ、SiteScope からのデータを受け入れます。SiteScope の単位は、監視対象のソースから取得され、場合によっては該当する Diagnostics の測定単位にマップする必要があります。SiteScope モニタで使用される測定単位は、監視対象のデータのタイプに応じて異なります。たとえば、CPU モニタに使用する測定単位はパーセンテージで、ディスク領域モニタに使用する測定単位はバイト数です。したがって、SiteScope から送られる監視データに使用する測定単位が Diagnostics で認識されるように、必要に応じて XML ファイルを変更することをお勧めします。

Diagnostics にデータを報告する新しいモニタを SiteScope に追加する場合、[Diagnostics 統合プリファレンス] を編集して、[UOM XML の生成] ボタンをクリックすることをお勧めします。SiteScope は、現在デプロイされているモニタと対応する測定値のリストを生成します。このリストは、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>/conf/ integration/data_integration_uom.xml** ファイルと結合されており、XML ファイル内の手動で変更されていない値のみが更新されています。XML ファイル内に手動で変更された値がある場合、その値は更新されず、保持されます。この測定単位に関する情報の結合は、[UOM XML の生成] ボタンをクリックするか、SiteScope を再起動するたびに行われます。



HP Operations Manager の概要

HP Operations Manager (HPOM) および BSM 製品に SiteScope のサーバおよびモニタに関する可視性を提供するには、HP Operations Agent をインストールして SiteScope サーバに設定する必要があります。HP Operations Agent は、イベント・データを HPOM 管理サーバと、BSM 内のオペレーション管理に送信します。HP Operations Agent は、SiteScope で収集された測定値データのデータ・ストレージとしても機能します。HP Operations Agent を HPOM/BSM ゲートウェイ・サーバに接続し、HP Operations Manager とのイベント統合または測定値統合を有効にする必要があります。

注：以前の統合ソリューションでは、基本的な警告スクリプト・メカニズムの使用時には、HP SiteScope アダプタを HPOM サーバにインストールする必要がありましたが、この統合により不要になります。

- ▶ **イベント統合：**SiteScope イベントがトリガされるのは、SiteScope モニタのメトリックスの状態（正常/警告/エラー）に変更があったか、SiteScope 警告がトリガされた場合です。HP Operations Agent が監視しているログ・ファイルにイベントが書き込まれると、SiteScope はイベントを送信します。HP Operations Agent はデータを読み取って共通イベントに変換し、HPOM/BSM サーバに転送します。イベント送信の詳細については、160 ページ「イベントの送信」を参照してください。
- ▶ **メトリックス統合：**SiteScope メトリックス・データは、Operations Manager が Performance Manager (PM) グラフで使用するために、また BSM が Performance Manager Insight (PMi) で使用するために、HP Operations Agent データ・ストレージから収集します。測定値のレポートの詳細については、167 ページ「HP Operations Agent を使用した測定値のレポート」を参照してください。

HP Operations Manager の統合設定の詳細については、694 ページ「[HP Operations Manager統合] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

汎用データ統合の概要

これは、別のアプリケーションへのデータの転送に使用できる汎用の統合です。アプリケーションは SiteScope が転送する XML ファイルを受信する必要があります。これらのファイルには、SiteScope のグループ、モニタ、測定値のステータスに関する情報が含まれています。

SiteScope が受信側のアプリケーションに転送する統合ファイルに含まれる XML タグ、要素、属性の詳細なリファレンスについては、671 ページ「一般データ統合の XML タグの参照情報」を参照してください。

ユーザ・インタフェースの詳細については、683 ページ「[データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 667 ページ「HTTP 要求を介した配信」
- ▶ 668 ページ「時刻同期」

HTTP 要求を介した配信

受信側のアプリケーションは、SiteScope からのデータを受信できるようになっている必要があります。つまり、アプリケーションは SiteScope サーバからの HTTP 要求を受信し、受信した XML ファイルを復号化する必要があります。

HTTP 要求には次のヘッダが含まれています。

Content-Type: text/xml

XML ファイルの内容を zip 圧縮するように選択した場合、HTTP 要求には次のヘッダが含まれます。

Content-Type: text/xml

Content-Encoding: gzip

データを zip 圧縮するかどうかは、SiteScope に統合を作成するときに [データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックスで選択します。データを zip 圧縮するように選択した場合、SiteScope が送信したファイルをアプリケーションで展開する必要があります。

時刻同期

SiteScope が時刻同期 XML ファイルを個別に転送できるようにして、SiteScope サーバの時刻をアプリケーションのサーバと同期できます。このファイルは、SiteScope での統合作成時に [データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックスの [時刻同期の間隔] フィールドで選択した間隔で、データ XML と同じように送信されます。このフィールドに値を入力すると、SiteScope はサーバの日付スタンプを、指定した間隔でデータを受信するアプリケーションに転送します。このオプションの詳細については、685 ページ「[時刻同期の間隔 (分)]」を参照してください。この XML ファイルの内容の詳細については、674 ページ「時刻同期 XML」を参照してください。

タスク

アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法

このタスクでは、BSM から SiteScope にアクセスできない場合（HP Software-as-a-Service での作業時など）に、SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 669 ページ「BSM への SiteScope プロファイルの追加」
- ▶ 669 ページ「BSM サーバへの接続パラメータの指定」
- ▶ 670 ページ「SiteScope-BSM 通信のための SSL の設定」

1 BSM への SiteScope プロファイルの追加

BSM で、[システム可用性管理] の [新規 SiteScope] ページで [アクセス不能なプロファイル] を選択して SiteScope の空のプロファイルを作成します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「[新規 SiteScope] ページ」を参照してください。

2 BSM サーバへの接続パラメータの指定

SiteScope で、新しい BSM の統合プリファレンスを [統合プリファレンス] に追加します。BSM 統合の値を入力します。統合を追加する場合、[使用可能なプロファイルの取得] ボタンをクリックし、BSM で作成した空のプロファイルを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、678 ページ「BSM 統合プリファレンス・ダイアログ・ボックス」を参照してください。

3 SiteScope-BSM 通信のための SSL の設定

BSM サーバに自己署名証明書があり、その証明書を使用して SiteScope との通信のセキュリティを確保する場合、BSM サーバから SiteScope サーバのキーストアに証明書をインポートし、SiteScope サーバの **master.config** ファイルに 3 つのエントリを追加します。

タスクの詳細については、144 ページ「SiteScope-BSM 通信のための SSL の使用方法」を参照してください。

参照情報

一般データ統合の XML タグの参照情報

SiteScope で一般データの統合のデータを転送するときには、XML ファイルが使用されます。この XML ファイルの要素と属性について次に説明します。統合の作成の詳細については、667 ページ「汎用データ統合の概要」を参照してください。ユーザ・インタフェースの詳細については、683 ページ「[データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 671 ページ「データの XML 要素および属性表」
- ▶ 674 ページ「時刻同期 XML」

データの XML 要素および属性表

親要素	要素の説明	属性	説明
performance Monitors	XML の親要素。この要素内のすべての group 要素を含む。	collectorHost	SiteScope ホスト
		collector	データを収集するアプリケーション（常に SiteScope）
group	SiteScope グループを表す。group および monitor 要素の親要素。	name	ユーザによって定義されたグループ名
		desc (任意指定)	グループの詳細(入力されている場合)
		previousName (任意指定)	グループの以前の名前(ある場合)

親要素	要素の説明	属性	説明
monitor	SiteScope モニタを表す。 counter 要素の親要素。	type	モニタ・タイプ（[新規モニタ] ダイアログ・ボックスに表示される）
		name	ユーザによって定義されたモニタ名
		target	監視対象のリモート・サーバ
		time	測定の時刻
		quality	モニタのしきい値によって判断される状態 使用可能な値： ▶ 0：データなし（しきい値が定義されていない） ▶ 1：情報（正常） ▶ 2：警告 ▶ 3：危険域
		previousName (任意指定)	モニタの以前の名前(ある場合)
		desc (任意指定)	モニタの詳細(入力されている場合)
		statusDesc (任意指定)	統合の作成時に「 追加のデータを含める 」が選択されている場合のみ含まれるモニタの状態の文字列を表す。このオプションの詳細については、685 ページ「[追加のデータを含める]」を参照してください。

親要素	要素の説明	属性	説明
counter	モニタによって収集された測定値を表す。	name	カウンタの名前
		value	カウンタの値
		quality	カウンタのしきい値によって判断されるカウンタの状態 使用可能な値： ➤ 0：データなし（しきい値が定義されていない） ➤ 1：情報（正常） ➤ 2：警告 ➤ 3：危険域
		desc (任意指定)	モニタの詳細(入力されている場合)
		status (任意指定)	この属性の値が 0 と表示される場合、カウンタは使用できない。カウンタが使用可能な場合、この属性は SiteScope から送信されず、XML には含まれない。 使用可能な値： 0：カウンタは使用できない
		units (任意指定)	カウンタの測定値の単位 (関連する場合)

時刻同期 XML

データ統合を作成するときに「時刻同期の間隔」フィールドに値を入力すると、SiteScope サーバの時刻と受信側アプリケーションの時刻を同期化するために、SiteScope によってこの XML が送信されます。

親要素	要素の説明	属性	属性の説明
performanceMonitors	XML の親要素。	collectorHost	SiteScope ホスト
		collector	データを収集するアプリケーション（常に SiteScope）
timeStamp	SiteScope サーバの時刻を提供します。	timestamp	タイムスタンプ。1970 年 1 月 1 日から経過した秒数として計算されます。

 [統合プリファレンス] のユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ 統合プリファレンス・ページ（675 ページ）
- ▶ [統合プリファレンス タイプ] ダイアログ・ボックス（676 ページ）
- ▶ BSM 統合プリファレンス・ダイアログ・ボックス（678 ページ）
- ▶ [データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス（683 ページ）
- ▶ [Diagnostics 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス（689 ページ）
- ▶ [HP Operations Manager統合] ダイアログ・ボックス（694 ページ）

統合プリファレンス・ページ

このページでは、SiteScope を BSM, HPOM, Diagnostics などのアプリケーションに統合する場合に設定を行うことができます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [統合プリファレンス] を選択します。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「 統合プリファレンスの編集 」権限を付与されたユーザのみが、統合プリファレンスを作成または変更できます。
関連タスク	669 ページ「アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法」
関連情報	▶ 660 ページ「統合プリファレンスの概要」 ▶ 151 ページ「注意事項と制限事項」

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
	新規統合 : SiteScope の新規統合を作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、676 ページ「[統合プリファレンス タイプ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	統合の編集 : SiteScope の既存の統合を編集できます。選択した統合タイプに応じた統合の編集ダイアログ・ボックスが開きます。 ▶ [BSM 統合] のユーザ・インタフェースの詳細については、678 ページ「BSM 統合プリファレンス・ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ [データ統合] のユーザ・インタフェースの詳細については、683 ページ「[データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ [Diagnostics 統合] のユーザ・インタフェースの詳細については、689 ページ「[Diagnostics 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ [HP Operations Manager 統合] のユーザ・インタフェースの詳細については、694 ページ「[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	統合の削除 : [統合プリファレンス] から選択した統合を削除します。

UI 要素	説明
	すべて選択 : 表示されたすべての統合を選択します。
	選択を解除 : 選択をクリアします。
[SiteScope のデタッチ]	(ショートカット・メニューからのみ使用可能) SiteScope を LoadRunner 統合からデタッチします。この操作で、現在の LoadRunner 統合を SiteScope 側から削除できます。SiteScope がアタッチされている場合は、モニタを LoadRunner ユーザ・インタフェースから定義できます。
[統合名]	新規統合プリファレンスの作成時に統合に割り当てられる名前の文字列。
[統合の詳細]	統合プリファレンスの作成時または編集時に割り当てられた統合の詳細。



[統合プリファレンス タイプ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、設定する統合プリファレンスのタイプを選択できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [統合プリファレンス] を選択し、[新規統合]  ボタンをクリックします。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「 統合プリファレンスの編集 」権限を付与されたユーザのみが、統合プリファレンスを作成または変更できます。
関連タスク	669 ページ「アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法」
関連情報	660 ページ「統合プリファレンスの概要」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[統合プリファレンス 名の選択]	次の統合プリファレンス・タイプを選択します。 ▶ BSM 統合。 SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定するために使用します。ユーザ・インタフェースの詳細については、678 ページ「BSM 統合プリファレンス・ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ データ統合。 一般データの統合を作成するために使用します。ユーザ・インタフェースの詳細については、683 ページ「[データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ Diagnostics 統合。 Diagnostics 統合を作成するために使用します。ユーザ・インタフェースの詳細については、689 ページ「[Diagnostics 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ HP Operations Manager 統合 : イベント測定値とレポート測定値を HPOM および BSM サーバに送信するように SiteScope を設定する場合に使用します。ユーザ・インタフェースの詳細については、694 ページ「[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックス」を参照してください。



BSM 統合プリファレンス・ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、BSM 統合設定を変更し、システム可用性管理で作成されていて SiteScope にアクセス不可プロファイル用に新しい BSM 統合を作成できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [統合プリファレンス] を選択します。[統合プリファレンス] ページで次を実行します。 ▶ [新規統合]  ボタンをクリックして [BSM 統合] を選択するか ▶ または、既存の BSM 統合を選択して [統合を編集します]  をクリックします。
重要な情報	▶ SiteScope の管理者、または「統合プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、統合プリファレンスを作成または変更できます。 ▶ BSM への接続を保護するには（認証用に BSM のユーザ名およびパスワードは使用しないため）、SiteScope の基本認証または双方向 SSL のいずれかを設定することをお勧めします。基本認証を使用するように BSM を設定している場合、SiteScope の [認証ユーザ名] フィールドと [認証パスワード] フィールドに入力した同じユーザ名とパスワードが、BSM へのデータとトポロジのレポートに使用されます。BSM が基本認証を使用するように設定されていない場合、送信された資格情報は無視されます。
関連情報	▶ 660 ページ「統合プリファレンスの概要」 ▶ 675 ページ「統合プリファレンス・ページ」 ▶ 676 ページ「[統合プリファレンス タイプ] ダイアログ・ボックス」

BSM 統合のメイン設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[Business Service Management マシン名/IP アドレス]	この SiteScope を接続する BSM サーバのマシン名または IP アドレス。 注: このフィールドは必須です。
[SiteScope エージェント マシンの場所]	BSM に接続している SiteScope サーバの場所。この特定の SiteScope サーバの場所を容易に識別できる任意の値を指定できます。 注: このフィールドは必須です。
[Business Service Management ユーザ名]	BSM 管理者レベルのユーザのユーザ名。
[Business Service Management ユーザ パスワード]	指定したユーザのパスワード。
[Business Service Management へのログ記録をすべて無効にする]	SiteScope の BSM へのデータ送信を停止します。すべてのトポロジ報告も無効になります。 ログ記録を再度有効にするには、チェック・ボックスをクリアします。 標準設定値: 選択されていない
<プロフィール>	SiteScope によって収集されたデータを BSM を使用して格納する SiteScope プロファイル。 注: プロファイルは BSM の SAM Administration で事前に設定されている必要があります。
[使用可能なプロフィールの取得]	使用可能なプロフィールのリストが表示されます。このボタンは、SAM Administration で作成された空のプロファイル (アクセス不可プロフィール) に SiteScope を登録する場合のみ使用します。

Web サーバのセキュリティ設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[認証ユーザ名]	BSM サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするユーザ名。
[認証パスワード]	BSM サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするパスワード。
[SSL を使用 (HTTPS プロトコル)]	HTTPS プロトコルが使用されるように BSM サーバを設定する場合に選択します。 標準設定値：選択されていない

プロキシ サーバ設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[アドレス]	プロキシ・サーバ・アドレス（必要な場合）。
[ユーザ名]	プロキシ・サーバのユーザ名。
[パスワード]	指定したサーバのパスワード。

トポロジ報告設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[トポロジの再同期化の時間間隔 (日)]	SiteScope で BSM のトポロジ・データと同期化する日数。 SiteScope が BSM に報告するトポロジ情報は、この時間間隔に達した後の SiteScope の再起動時に同期化されます。 標準設定値 : 7 日 最小値 : 1 日 注 : SiteScope で作成されて ODB に格納されたすべてのトポロジは、エイジング・プロセスが施されます。エイジングを避けるには、129 ページ「ODB の CI のエイジング」を参照してください。
[標準トポロジ プローブ ドメイン]	SiteScope トポロジ・プローブの標準設定のドメイン。 標準設定値 : DefaultDomain 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。
[トポロジ受信者ポート]	BSM で使用するトポロジ受信者ポート。 標準設定値 : 80 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。

UI 要素	説明
[トポロジ受信者 SSL ポート]	BSM で使用するトポロジ受信者 SSL ポート。 標準設定値 : 443 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。
[トポロジアンチエイジングオフセット (分)]	アンチエイジング・プロセスを実行する、分単位の午前 0 時からのオフセット。アンチエイジングの詳細については、129 ページ「ODB の CI のエイジング」を参照してください。 標準設定値 : 0 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 例 : 午前 1:30 にアンチエイジングを実行するには、90 のオフセットを入力します。

BSM プリファレンス利用可能操作

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[リセット]	SiteScope サーバからすべての BSM 関連の設定を削除します。すべての SiteScope 設定が BSM から削除されます。また、対応するプロファイルから SiteScope エージェントを解除するメッセージが、適切な BSM サーバに送信されます。 注 : 現在の設定のリセットを選択した場合、SiteScope の BSM への再接続に異なるプロファイルを作成または使用する必要があります。BSM では、以前使用された接続プロファイルは選択できません。

UI 要素	説明
[再同期化]	SiteScope からすべての設定データを強制的に BSM に再送信します。このデータは、すべてのグループとモニタ定義で構成されます。再同期化では、SiteScope からすべてのトポロジ・データも強制的に BSM に再送信します。 注：BSM 9.1 にアップグレードする場合（このバージョンが使用できる場合）は、[トポロジの再同期化の時間間隔] 値に基づいてトポロジ・データが BSM に送信されるのを待機せず、SiteScope を手動で再同期することをお勧めします。
[厳密な再同期化]	SiteScope からすべての設定データとトポロジ・データを強制的に BSM に再送信します。また、設定データの場合、BSM からこの SiteScope プロファイルの既存のモニタおよびグループ・データを削除します。

[データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しい一般データの統合の作成や既存のデータ統合の編集ができます。直接統合されていないアプリケーションへの SiteScope データの転送に使用できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [統合プリファレンス] を選択します。[統合プリファレンス] ページで次を実行します。 ▶ [新規統合]  ボタンをクリックして [データ統合] を選択するか ▶ または、既存のデータ統合を選択して [統合を編集します]  をクリックします。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「統合プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、統合プリファレンスを作成または変更できます。
関連情報	▶ 660 ページ「統合プリファレンスの概要」 ▶ 667 ページ「汎用データ統合の概要」 ▶ 675 ページ「統合プリファレンス・ページ」 ▶ 676 ページ「[統合プリファレンス タイプ] ダイアログ・ボックス」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[名前]	SiteScope インタフェースでこの統合の識別に使用する名前。 注： このフィールドは必須です。
[詳細]	統合の詳細。これには、SiteScope からのデータを受信するアプリケーションに関する情報が含まれる場合があります。この詳細は、SiteScope の [統合プリファレンス] ページにのみ表示されます。

データ統合プリファレンス設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[受信者 URL]	SiteScope データを受信するアプリケーション・サーバの URL。これは、サーバ、ポート、パスを含む完全な URL である必要があります。 セキュリティ保護された接続 (SSL) の場合、「https」と入力します。 構文： http または https:// <受信側のサーバの完全修飾ドメイン名>:<データを受信するポート番号>/<パス>
[エンコーディング]	受信側のアプリケーションが使用するエンコーディング。 標準設定値： UFT-8
[レポート間隔 (秒)]	SiteScope がデータの送信を終了してから次にデータの送信を開始するまでの時間間隔 (秒単位)。 標準設定値： 60 秒

UI 要素	説明
[時刻同期の 間隔 (分)]	SiteScope サーバと SiteScope データを受信するサーバの時刻を同期化するために、SiteScope ではサーバに登録されている時刻を定期的に報告できます。受信側のサーバは、SiteScope から送信されたデータ・サンプルの時刻を自分のサーバの時刻と同期化し、SiteScope データとアプリケーション自身のデータの時刻が一致するようにします。 SiteScope が、SiteScope サーバの時刻を SiteScope のデータを受信するサーバに報告する間隔を分単位で選択します。 標準設定値 : 10 分
[GZIP 圧縮]	受信側のサーバに送信するサンプル・データを圧縮します。データが圧縮されていると、データ送信にかかる時間が短縮されるためパフォーマンスが向上します。送信するデータの量と受信側のアプリケーションが圧縮データを処理できるかどうかに応じて、このフィールドを選択またはクリアします。 標準設定値 : 選択されていない
[追加のデータを含める]	クリアすると、SiteScope によって次の SiteScope オブジェクトの状態が報告されます。 ➤ グループ ➤ モニタ ➤ カウンタ 選択した場合、これらのオブジェクトの状態が、各オブジェクトの説明を含む状態文字列と一緒に報告されます。このデータを含めるとパフォーマンスが低下し、状態文字列は標準設定で送信される状態データを繰り返すため、含めないことをお勧めします。 標準設定値 : 選択されていない
[リダイレクトでエラー]	接続先 URL がリダイレクトされると、SiteScope からエラーが返されます。 標準設定値 : 選択されていない

UI 要素	説明
[要求タイムアウト (秒)]	サーバとの接続が確立されるまでのタイムアウト (秒単位)。値 0 は、タイムアウトを使用しないことを示します。 標準設定値 : 120
[接続タイムアウト (秒)]	データを待機するソケットのタイムアウト (秒単位)。タイムアウト値 0 は、タイムアウトを使用しないことを示します。 標準設定値 : 120
[再試行の回数]	SiteScope が接続の確立を試みる回数。 標準設定値 : 3
[要求された場合の認証]	SiteScope は、要求された場合、ユーザ名およびパスワードの資格情報を送信します。クリアすると、SiteScope は資格情報を転送しません。 標準設定値 : 選択済み
[統合を無効にする]	SiteScope は、データをサーバに転送しません。統合プリファレンス設定はそのまま残ります。統合を一時的に無効にする場合に使用します。 標準設定値 : 選択されていない

Web サーバのセキュリティ設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[認証ユーザ名]	サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするユーザ名。
[認証パスワード]	サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするパスワード。

プロキシ サーバ設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[アドレス]	プロキシ・サーバ・アドレス（必要な場合）。
[ユーザ名]	プロキシ・サーバのユーザ名。
[パスワード]	指定したサーバのパスワード。

レポート タグ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	SiteScope では、ここで選択したタグを使用して受信側のアプリケーションに転送するデータを決定します。統合ごとに少なくとも 1 つのタグを選択する必要があります。受信側のアプリケーションにデータを転送するグループ、サブグループ、モニタについても同じタグを選択する必要があります。 オブジェクトに対して統合タグを選択すると、そのタグがオブジェクトの子に伝搬されます。この統合タグでグループにタグ付けすると、そのすべてのサブグループとモニタが状態を受信側のアプリケーションに報告します。 例：Integration1 というタグを作成して、ここで選択します。受信側のアプリケーションに状態を報告するグループやモニタごとに、オブジェクトの [タグの検索/フィルタ] 設定でこのタグを選択します。 注：統合プリファレンスごとに複数のタグを選択できます。報告するオブジェクトに対して複数の統合タグを選択できます。
[タグの追加]	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、119 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ヒント：統合タグの作成時には、単語 Integration を使用します。統合タグは、SiteScope に対して作成されたほかのすべての検索/フィルタ・タグと一緒に表示されるため、グループやモニタで統合を有効にする際に選択するタグを識別しやすくなります。

[Diagnostics 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しい HP Diagnostics との統合の作成や既存の Diagnostics 統合の編集ができます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [統合プリファレンス] を選択します。[統合プリファレンス] ページで次を実行します。 ▶ [新規統合]  ボタンをクリックして [Diagnostics 統合] を選択するか ▶ または、既存の Diagnostics 統合を選択して [統合を編集します]  をクリックします。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「統合プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、統合プリファレンスを作成または変更できます。
関連情報	▶ 664 ページ「Diagnostics 統合の概要」 ▶ 675 ページ「統合プリファレンス・ページ」 ▶ 676 ページ「[統合プリファレンス タイプ] ダイアログ・ボックス」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[名前]	SiteScope インタフェースでこの統合の識別に使用する名前。 注：このフィールドは必須です。
[説明]	統合の詳細。SiteScope からデータを受信する Diagnostics サーバの情報が含まれる場合があります。この詳細は、SiteScope の [統合プリファレンス] ページにのみ表示されます。

Diagnostics 統合プリファレンス設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[受信者 URL]	SiteScope データを受信する Diagnostics サーバの URL。サーバ, Diagnostics でデータを受信するポート, パスを含む完全な URL を指定する必要があります。パスには常に /metricdata/siteScopeData を含める必要があります。 セキュリティ保護された接続 (SSL) の場合, 「https」と入力します。 構文 : http または https://<受信側のサーバの完全修飾ドメイン名>:<データを受信するポート番号> /metricdata/siteScopeData 例 : http://DiagnosticsServer1.hp.net:2006/metricdata/siteScopeData
[エンコーディング]	Diagnostics アプリケーションで使用するエンコーディング。 標準設定値 : UTF-8
[レポート間隔 (秒)]	SiteScope が Diagnostics サーバへデータの送信を終了してから, 次にデータを送信するまでの時間間隔 (秒単位)。この時間間隔はデータが送信されない時間間隔のため, サーバ間の通信遅延を防ぐことができます。 標準設定値 : 60
[時刻同期の間隔 (分)]	SiteScope サーバの時刻と Diagnostics サーバの時刻を同期化するために, SiteScope ではサーバに登録されている時刻を定期的に報告します。その後, Diagnostics は, SiteScope から送信されたデータ・サンプルの時刻を自分のサーバの時刻と同期化し, SiteScope データと Diagnostics データの時刻が一致するようにします。 SiteScope から Diagnostics に SiteScope サーバの時刻を報告する頻度を, 分単位で選択します。 標準設定値 : 10 分

UI 要素	説明
[GZIP 圧縮]	Diagnostics サーバに送信するサンプル・データを圧縮します。データが圧縮されていると、データ送信にかかる時間が短縮されるためパフォーマンスが向上します。Diagnostics アプリケーションで圧縮データを処理できます。送信するデータ量に応じて、このフィールドを選択またはクリアします。 標準設定値 : 選択済み
[追加のデータを含める]	クリアすると、SiteScope によって次の SiteScope オブジェクトの状態が報告されます。 ▶ グループ ▶ モニタ ▶ カウンタ 選択した場合、これらのオブジェクトの状態が、各オブジェクトの説明を含む状態文字列と一緒に報告されます。このデータを含めるとパフォーマンスが低下し、状態文字列は標準設定で送信される状態データを繰り返すため、含めないことをお勧めします。 標準設定値 : 選択されていない
[リダイレクトでエラー]	接続先 URL がリダイレクトされると、SiteScope からエラーが返されます。 標準設定値 : 選択されていない
[要求タイムアウト (秒)]	データを待機するソケットのタイムアウト (秒単位)。タイムアウト値 0 は、無制限のタイムアウトとして解釈されます。 標準設定値 : 120
[接続タイムアウト (秒)]	接続が確立されるまでのタイムアウト (秒単位)。値 0 は、タイムアウトを使用しないことを示します。 標準設定値 : 120
[再試行の回数]	SiteScope が接続の確立を試みる回数。 標準設定値 : 3

UI 要素	説明
[要求された場合の認証]	SiteScope は、要求された場合、ユーザ名およびパスワードの資格情報を送信します。クリアすると、SiteScope は資格情報を転送しません。 標準設定値 : 選択済み
[統合を無効にする]	SiteScope は、データを Diagnostics サーバに転送しません。統合プリファレンス設定はそのまま残ります。統合を一時的に無効にする場合に使用します。 標準設定値 : 選択されていない
[UOM XML の生成]	<SiteScope のルート・ディレクトリ>/conf/ integration/ data_integration_uom.xml ファイルと結合する測定単位 XML ファイルを生成します。このファイルにより、Diagnostics で SiteScope データを読み取り、適切な測定単位をデータに適用できます。Diagnostics にデータを報告するモニタ・インスタンスを追加する場合、このボタンをクリックすることをお勧めします。data_integration_uom.xml ファイルの値を手動で変更した場合、その値は変更されたまま残り、この結合ファイルでは更新されません。また、SiteScope の再起動時にも常にこの結合ファイルが生成され、XML ファイルが更新されます。詳細については、664 ページ「Diagnostics の測定単位」を参照してください。

Web サーバのセキュリティ設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[認証ユーザ名]	サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするユーザ名。
[認証パスワード]	サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするパスワード。

プロキシ サーバ設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[アドレス]	プロキシ・サーバ・アドレス（必要な場合）。
[ユーザ名]	プロキシ・サーバのユーザ名。
[パスワード]	指定したサーバのパスワード。

レポート タグ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	SiteScope では、ここで選択したタグを使用して Diagnostics に転送するデータを決定します。統合ごとに複数のタグを選択できます。Diagnostics にデータを転送するグループ、サブグループ、モニタに対して、タグを選択する必要があります。 オブジェクトに対して統合タグを選択すると、そのタグがオブジェクトの子に伝搬されます。この統合タグでグループにタグ付けすると、そのすべてのサブグループとモニタが状態を Diagnostics に報告します。 例： <code>Diagnostics_Integration1</code> というタグを作成して、ここで選択します。Diagnostics に状態を報告するグループやモニタごとに、[タグの検索/フィルタ] 設定でこのタグを選択します。
[タグの追加]	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、119 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ヒント： 統合タグの作成時には、単語 <code>Integration</code> を使用します。統合タグは、SiteScope に対して作成されたほかのすべての検索/フィルタ・タグと一緒に表示されるため、グループやモニタで統合を有効にする際に選択するタグを識別しやすくなります。



【HP Operations Manager統合】ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、SiteScope で共通イベントと測定値データを HPOM 製品と BSM 製品に送信できる HP Operations エージェント接続を設定し、イベント統合と測定値統合を設定できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト> [統合プリファレンス] を選択します。[統合プリファレンス] ページで次を実行します。 ▶ [新規統合]  ボタンをクリックして [HP Operations Manager 統合] を選択するか ▶ または、既存の HPOM 統合を選択して [統合を編集します]  をクリックします。
重要な情報	▶ SiteScope の管理者、または「統合プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、統合プリファレンスを作成または変更できます。 ▶ HP Operations Manager との測定値統合は、HP Operations エージェントと HPOM / BSM サーバ間の接続状態に関係なくアクティブ化できます。これは、測定値が HP Operations Agent によって収集されるためです。
関連タスク	171 ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」
関連情報	▶ 666 ページ「HP Operations Manager の概要」 ▶ 160 ページ「イベントの送信」 ▶ 167 ページ「HP Operations Agent を使用した測定値のレポート」 ▶ 675 ページ「統合プリファレンス・ページ」 ▶ 676 ページ「[統合プリファレンス タイプ] ダイアログ・ボックス」

HP Operations Agent 接続設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[HP Operations Agent インストールパス]	SiteScope マシンの HP Operations Agent インストールへのパス。 ➤ Windows プラットフォームでは、インストール・パスは、レジストリ内の HP Operations Agent InstallDir キーから自動的に解決され、このフィールドに表示されます。標準設定パスは、C:\Program Files\HP\HP BTO Software\です。キーが見つからない場合、このフィールドは空のままとなります。エージェントのインストール・パスを手動で入力する必要があります。 ➤ UNIX プラットフォームでは、標準設定の /opt/OV パスに HP Operations Agent がインストールされているかどうか SiteScope によって確認されます。このパスに存在しない場合、このフィールドは空のままとなります。エージェントのインストール・パスを手動で入力する必要があります。 手動で別のパスを入力した場合、SiteScope によって見つかった標準設定のインストール・パスを復元するには、[パスの解決] ボタンをクリックします。

UI 要素	説明
[HP Operations Manager/BSM ホスト]	接続する HPOM/BSM サーバのホスト名または IP アドレスを入力します。エージェントと HPOM/BSM ホスト・マシンを接続するには、[接続] ボタンをクリックします。 接続に問題がある場合は、問題の分析を実行してエージェントおよび証明書要求の状態をチェックするために[分析] ボタンをクリックします。 接続要求が送信された後、HPOM/BSM サーバは証明書要求を承諾する必要があります(このクライアントを自動的に受け入れるように HPOM/BSMサーバが設定されていない場合)。 HPOM/BSM サーバで証明書要求が承諾された後、[ポリシーのインストール] をクリックし、設定済みのログ・ファイル・ポリシー・ファイルを HP Operations Agent 上にインストールし、承認します。 注： HPOM/BSM サーバ上でいったん証明書要求が承諾された後は、SiteScope から接続の遮断または別の HPOM/BSM サーバへの接続の変更を行うことはできません。サポートが必要な場合は、HPOM/BSM の管理者にお問い合わせください。
[テスト メッセージ]	HP Operations Agent が HPOM/BSM サーバに接続されていて、メッセージを送信できることをチェックします。HPOM/BSM サーバに送信するテスト・メッセージを入力し、[テスト メッセージ送信] ボタンをクリックします。 注： このテストを実行するためには、opcmsg ログ・ポリシーのデプロイ、承認、およびインストールを手動で行うか、あるいはイベント統合をアクティブ化した後で行う必要があります。

共通イベント設定

このセクションでは、HPOM/BSM サーバにイベントを送信できます。

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[共通イベント統合の有効化]	SiteScope から HPOM/BSM サーバにイベントを送信できるようにします。 標準設定値 : 選択されていない
[テスト イベント送信]	テスト・イベントを HPOM/BSM サーバに送信します。

HP Operations Manager 測定値統合

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[Enable HP Operations Manager metrics integration]	HPOM および BSM レポート製品がデータの収集元として使用できる HP Operations Agent に対して、SiteScope から測定値をレポートできます。 注 : モニタ・プロパティ ([HP 統合設定] > [HP Operations Manager 統合設定]) で [Report metrics to HP Operations agent] を選択して、HP Operations エージェントにデータを送信する各モニタ・インスタンスを有効にする必要があります。詳細については、400 ページ「HP Operations Manager 統合設定」を参照してください。 標準設定値 : 選択されていない
[Enable metrics reporting for existing Memory, CPU, Disk Space, and Windows Resources monitors]	すべての既存のメモリ、CPU、ディスク領域、Windows リソース・モニタに対して、各モニタ・インスタンスのモニタ・プロパティで [Report metrics to HP Operations agent] を選択することなく、自動的に測定値のレポートを有効にします。 標準設定値 : 選択されていない

23

ログ・プリファレンス

本章の内容

概念

▶ ログ・プリファレンスの概要 (700 ページ)

参照情報

▶ SiteScope ログ・データベース・テーブルの構造 (701 ページ)

▶ ログ・プリファレンス・ページ (702 ページ)

トラブルシューティングと制限事項 (706 ページ)

概念

ログ・プリファレンスの概要

ログ・プリファレンスを使用すると、SiteScope サーバに蓄積して保持する監視データの量を選択できます。また、監視データを外部データベースにエクスポートするように SiteScope を設定できます。

標準設定では、SiteScope はモニタ結果、警告データ、エラー・データや、モニタから返されたそのほかの測定値をログ・ファイルに保存します。監視データの結果の場合、日付が記述されたログ・ファイルが 24 時間の監視期間ごとに作成されます。このデータはタブ区切りテキストとして保存されます。SiteScope はこのログ・ファイルを使用して、時間の経過に伴うシステムの可用性とパフォーマンスの管理レポートを作成します。

データ・ログを長期間保存していると問題が生じる場合があります。ただし、ログ・ファイルを保持する日数やデータ・ログ・ファイルの最大サイズを設定することで、SiteScope がローカル・ファイル・システムに保存するログ情報の量を制限できます。外部データベース・アプリケーションに監視データを送信することもできます。これにより SiteScope サーバで必要なデータ・ストレージ容量を削減でき、監視データをほかのレポート・ツールでも使用できるようになります。

注： SiteScope 管理レポートを作成するには、必要なレポート期間の監視ログ情報が SiteScope サーバのファイル・システムで使用できる必要があります。管理レポートの作成の詳細については、1369 ページ「管理レポート」を参照してください。

これらのプリファレンスの設定の詳細については、702 ページ「ログ・プリファレンス・ページ」を参照してください。

参照情報

SiteScope ログ・データベース・テーブルの構造

データベース・ログインが有効な場合、監視データは **SiteScopeLog** という 1 つのテーブルに格納されます。各データベース・レコードの先頭 9 フィールドは、すべてのモニタで同じです。次の 10 フィールドには、データを提供するモニタの種類に応じて異なる測定値が含まれます。テーブルのすべてのフィールドは、**VARCHAR(255)** データ型を使用します。ログ・データベース・レコードのフィールド説明とその標準設定のフィールド名を、次の表に示します。

フィールド名	データ例	説明
datex	1999-01-20 11:54:54	第 1 フィールドには、モニタを実行した日付が含まれます。
serverName	demo.sitescope.com	第 2 フィールドには、 SiteScope を実行しているサーバの名前が含まれます。
class	URLMonitor	第 3 フィールドには、モニタのタイプが含まれます。
sample	23	第 4 フィールドには、このモニタのサンプル数が含まれます。
category	正常	第 5 フィールドには、モニタのカテゴリ名が含まれます。
groupName	URL	第 6 フィールドには、モニタのグループ名が含まれます。
monitorName	ホーム・ページ	第 7 フィールドには、モニタの名前が含まれます。
status	1.01 秒	第 8 フィールドには、モニタの状態が含まれます。

フィールド名	データ例	説明
monitorID	10	第 9 フィールドには、モニタの ID が含まれます。
value1, value2, ... value10	(変数)	第 10 から第 19 フィールドには、[Log Columns] ページで記述したモニタ固有のデータが含まれます。最初の変数フィールド (value1) が、ログ・ファイルの列 7 に表示される値に対応します。

データベース・ログ記録に使用する SQL ステートメントを変更するには、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>%groups%master.config** ファイルのパラメータ `_logJdbcInsertSiteScopeLog=` を編集します。insert ステートメントを call ステートメントに置き換えると、ストアド・プロシージャを呼び出せます。たとえば、`call logit(?,?,?)` は、`logit` というストアド・プロシージャを呼び出して、最初の 3 つのパラメータを渡します。

ログ・プリファレンス・ページ

このページでは、SiteScope ログ・プリファレンスを設定できます。システム可用性を効果的に監視するには、必要な間隔の間、監視データを記録して保存する必要があります。SiteScope ログ・プリファレンスでは、監視データの蓄積と保存を制御します。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [ログ プリファレンス] を選択します。
重要な情報	▶ SiteScope の管理者、または「ログ・プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、ログ・プリファレンスを作成または変更できます。 ▶ ログ・プリファレンスの変更は、SiteScope を再起動しないと反映されません。
関連情報	▶ 700 ページ「ログ・プリファレンスの概要」 ▶ 701 ページ「SiteScope ログ・データベース・テーブルの構造」 ▶ 706 ページ「トラブルシューティングと制限事項」

SiteScope ログ・ファイル・プリファレンス

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
[日次ログ保存日数]	監視データを保持する日数。SiteScope では、1 日に 1 回、指定した日数よりも古くなったログを削除します。 標準設定値 : 40 注 : ➤ 指定したログ数または最大ログ・サイズに関係なく、常に最新の 2 つのログ (当日分と前日分) が保持されます。 ➤ 長期間監視データ・ログを保持すると、設定したモニタの総数や 1 日あたりのモニタ実行頻度によっては、SiteScope サーバでデータ・ストレージ上の問題が発生することがあります。＜SiteScope のルート・ディレクトリ＞¥logs ディレクトリにあるログ・ファイルのサイズを監視して、データ蓄積速度を見積り、必要に応じてこの設定やサーバ・リソースを調整する必要があります。
[ログ サイズの上限 (MB)]	すべての監視ログの最大許容サイズ。SiteScope では、1 日に 1 回、すべての監視ログの合計サイズをチェックし、最大サイズを超えた古いログがあれば削除します。 標準設定値 : 0 (ログ・サイズをチェックしない)

データベース ログ記録プリファレンス

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[データベース接続 URL]	データベース接続への URL。データベース接続を作成する最も簡単な方法は、ODBC を使用してデータベースへの名前付き接続を作成する方法です。 例：最初に、ODBC コントロール・パネルを使用して SiteScopeLog という接続を作成します。次に、接続 URL として「jdbc:odbc:SiteScopeLog」と入力します。 Windows 認証使用時の注意事項：Windows 認証を使用してデータベースにアクセスする場合、接続 URL として「jdbc:mercury:sqlserver://<サーバ名または IP アドレス>:1433;DatabaseName=<データベース名>;AuthenticationMethod=type2」を、データベース・ドライバとして「com.mercury.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver」を入力します。SiteScope サービスの実行元であるアカウントの Windows ユーザの資格情報を使用してデータベースへの接続が確立されるように、[データベース ユーザ名] ボックスおよび [データベース パスワード] ボックスは空のままにします。
[データベース ドライバ]	SiteScope でデータベースへの接続に使用するデータベース・ドライバ。このドライバは JDBC ドライバである必要があります。SiteScope で別のドライバを使用するには、そのドライバも <SiteScope のルート・ディレクトリ>¥WEB-INF¥lib ディレクトリにインストールし、パスとファイル名をこのボックスに入力する必要があります。 標準設定値：sun.jdbc.odbc.JdbcOdbcDriver

UI 要素	説明
[データベース ユーザ名]	データベースにログインするためのユーザ名。Microsoft SQL Server を使用する場合は、ここを空白のままにし、ODBC 接続の設定時に Windows 認証を選択します。 Windows 認証の場合、SiteScope は SiteScope サービスのログイン・アカウントを使用して接続するため、ユーザ名を指定できません。 Windows 認証使用時の注意事項： SiteScope を実行するユーザには、接続するデータベースへのアクセス権が必要です。SiteScope をローカル・システム・アカウントで実行している場合、サーバの名前を使用して接続が試みられます。
[データベース パスワード]	データベースにログインするためのパスワード。Microsoft SQL Server を使用する場合は、ここを空白のままにし、ODBC 接続の作成時に Windows 認証を選択します。 Windows 認証の場合、SiteScope は SiteScope サービスのログイン・アカウントを使用して接続するため、パスワードを指定できません。
[バックアップ データベース接続 URL]	バックアップ・データベースへの URL。プライマリ・データベースが使用不能になった場合に、SiteScope データベース・ログ記録のフェールオーバーを可能にするには、このオプションを使用します。 注： 同じデータベース・テーブル定義、データベース・ドライバ、ユーザ名、パスワードが両方のデータベース接続に適用されます。 データベースのプリファレンスへの変更を保存したら、変更を有効にするために SiteScope サービスを停止して再起動する必要があります。

トラブルシューティングと制限事項

データベース・ログ記録がアクティブになり、正しく動作すると、データベースに **SiteScopeLog** というテーブルが表示され、モニタを実行するたびにそのテーブルにレコードが追加されます。データは、フラット・ファイル形式の単独のテーブルとしてデータベースに送信されます。

SiteScopeLog テーブルが作成されていないか、空の場合、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>%logs%RunMonitor.log** ファイルと **<SiteScope のルート・ディレクトリ> %logs%Error.log** ファイルに、"jdbc" または "odbc" で始まるログ・メッセージがあるかどうかチェックします。データベース・ログ記録が正しく動作している場合、**RunMonitor.log** に次のような一連のメッセージが表示されます。

```
jdbc log, reconnect seconds=600
jdbc log, loading, driver=sun.jdbc.odbc.JdbcOdbcDriver
jdbc log, connecting, url=jdbc:odbc:SiteScopeLog,
jdbc log, logged in
jdbc log, checking log table
jdbc log, created log table
jdbc log, prepare insert, 19, INSERT INTO SiteScopeLog...
jdbc log, connected
```

これらのエントリがログ・ファイルに表示されない場合、データベース・インタフェースまたはデータベース接続の設定に問題があります。入力した [データベース接続 URL] もチェックする必要があります。このパラメータでは大文字と小文字が区別されます。接続 URL のスペルと大文字/小文字をチェックし、テキスト・ボックスの先頭や末尾に空白文字がないことを確認します。

データベース・ログ記録に関するそのほかの情報については、HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報 (<http://support.openview.hp.com/selfsolve/documents>) も参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログインする必要があります。

24

電子メール・プリファレンス

本章の内容

概念

- ▶ 電子メール・プリファレンスの概要 (708 ページ)

参照情報

- ▶ 電子メール・プリファレンスのユーザ・インタフェース (709 ページ)

概念

電子メール・プリファレンスの概要

SiteScope が外部電子メール・サーバと通信するために必要な設定を行うには、電子メール・プリファレンスを使用します。電子メール・プリファレンスは、SiteScope が警告を電子メール・メッセージとして送信するために使用する標準設定です。

[電子メール プリファレンス] ページには、電子メール警告メッセージを受信者に送信するために定義したカスタムの電子メール受信者プロファイルが表示されます。電子メール受信者プロファイルを 1 つ以上の電子メール警告に関連付けるには、該当する警告定義を編集します。

これらのプリファレンスの設定の詳細については、709 ページ「[電子メール プリファレンス] ページ」を参照してください。

参照情報



電子メール・プリファレンスのユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ [電子メール プリファレンス] ページ (709 ページ)
- ▶ [新規電子メール受信者] / [電子メール受信者の編集] ダイアログ・ボックス (711 ページ)
- ▶ [電子メール プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックス (714 ページ)



[電子メール プリファレンス] ページ

電子メールは、SiteScope によって問題が検出されたときに (SiteScope インタフェースに表示される視覚的なアイコンと状態メッセージに加えて) イベント警告を送信するための標準設定のメディアです。[電子メール プリファレンス] は、SiteScope が電子メール警告やその他の SiteScope メッセージを送信する際に使用する SMTP メール・サーバ、受信者アドレスなどの設定を指示するために使用します。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [電子メール プリファレンス] を選択します。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「 電子メール、ページャ、および SNMP のプリファレンスの編集 」権限を付与されたユーザのみが、電子メール・プリファレンスを作成または変更できます。
関連情報	▶ 708 ページ「電子メール・プリファレンスの概要」 ▶ 711 ページ「[新規電子メール受信者] / [電子メール受信者の編集] ダイアログ・ボックス」 ▶ 714 ページ「[電子メール プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
	新規電子メール受信者 ：新規の電子メール受信者プロフィールを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、711 ページ「[新規電子メール受信者] / [電子メール受信者の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	電子メール受信者の編集 ：電子メール受信者プロフィールを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、711 ページ「[新規電子メール受信者] / [電子メール受信者の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	電子メール受信者の削除 ：選択した電子メール受信者プロフィールを [電子メール プリファレンス] から削除します。
	電子メール受信者のテスト ：電子メール・アドレスにメッセージを送信できるかどうかをテストします。[電子メール] ダイアログ・ボックスにメッセージを入力し、[テスト] をクリックします。
	すべて選択 ：表示されている電子メール受信者プロフィールをすべて選択します。
	選択を解除 ：選択をクリアします。
[標準設定]	[標準設定] の横にある矢印をクリックし、次のオプションを選択します。 ▶ 編集：[電子メール プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックスが開き、[新規電子メール受信者] ダイアログ・ボックスに表示された標準設定を変更できます。この設定の詳細については、714 ページ「[電子メール プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ テスト。選択したアドレスに電子メールを送信できるかどうかをテストします。使用可能な受信者のリストからテストする電子メール受信者を選択するか、[電子メール アドレス] ボックスに電子メール・アドレスを入力します。
[名前]	新規電子メール受信者を作成する場合に設定プロフィールに割り当てる名前の文字列。
[詳細]	プロフィールの作成時または編集時に割り当てられた設定プロフィールの詳細。

UI 要素	説明
[電子メール]	警告の送信先の電子メール・アドレス。
[有効]	電子メール警告の状態。状態が「いいえ」の場合、これらの電子メール・アドレスへの電子メール警告の送信は停止されます。

[新規電子メール受信者] / [電子メール受信者の編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新規電子メール受信者プロファイルの作成や既存のプロファイルの編集ができます。SiteScope では、電子メール受信者プロファイルを使用して電子メール警告を送信します。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [電子メール プリファレンス] を選択します。[電子メール プリファレンス] ページで、次のいずれかの操作を行います。 ▶ [新規電子メール受信者]  ボタンをクリックします。 ▶ 既存の電子メール受信者プロファイルを選択して [電子メール受信者の編集]  をクリックします。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「電子メール、ページャ、および SNMP のプリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、電子メール・プリファレンスを作成または変更できます。
関連情報	▶ 708 ページ「電子メール・プリファレンスの概要」 ▶ 709 ページ「[電子メール プリファレンス] ページ」 ▶ 714 ページ「[電子メール プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックス」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[名前]	表示されているプロファイルの識別に使用する電子メール受信者プロファイル定義の名前。
[詳細]	設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (
, <HR>, および タグなど) を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。 注：ここで入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コードを修正する修正アクションが行われます（たとえば、タグの不一致や、複数行にわたるため切り捨てられたコードなど）。悪意のある HTML コードや Javascript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。 ▶ タグ : script, object, param, frame, iframe。 ▶ on で始まる属性を含むタグは拒否される。例 : onhover。 ▶ 値に javascript が指定された属性。
[電子メールの送信先]	警告の送信先の電子メール・アドレス。 例：test@mycompany.com 複数の電子メール・アドレスは、カンマで区切って入力できます。 例：test@mycompany.com, sysadmin@thiscompany.com
[無効]	設定された電子メール・アドレスへの電子メール警告の送信が停止されます。この電子メール設定が含まれる警告すべてを編集せずに、特定の電子メールを一時的に無効にする場合、このオプションを使用します。

詳細設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[テンプレート]	電子メール警告設定を定義するテンプレート。設定を定義した後は、1 つの警告がユーザとページャに送信されます。ページャには ShortMail テンプレートを使用します。
[スケジュール]	電子メールをいつ有効にするかを指定します。ドロップダウン・メニューに設定されたスケジュールから、より厳密なスケジュールを選択することもできます。 標準設定値 ：毎日、全日

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、108 ページ「検索/フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
[タグの追加]	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、119 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。



「電子メール プリファレンスの標準設定」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、電子メール受信者の標準設定値を設定できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [電子メール プリファレンス] を選択します。[電子メール プリファレンス] ページで [標準設定] -> [編集] ボタンをクリックします。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「電子メール、ページャ、および SNMP のプリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、電子メール・プリファレンスを作成または変更できます。
関連情報	▶ 708 ページ「電子メール・プリファレンスの概要」 ▶ 709 ページ「[電子メール プリファレンス] ページ」 ▶ 711 ページ「[新規電子メール受信者] / [電子メール受信者の編集] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[電子メール サーバのドメイン名]	SiteScope が電子メール・メッセージの送信時に使用する SMTP メール・サーバのドメイン名。 例 : mail.thiscompany.com メール・サーバのドメイン名がわからない場合は、システム管理者に問い合わせてください。
[管理者の電子メールアドレス]	SiteScope が状態メッセージを送信する宛先の電子メール・アドレス。 例 : sysadmin@thiscompany.com
[毎日の状態]	SiteScope は、管理者の電子メール・アドレスに要約した状態メッセージを毎日送信します。この電子メールは、毎日午前 7:07 に生成するようにスケジュール設定されます。送信する電子メールの件名には、「 SiteScope の毎日の状態 」が含まれます。電子メールの内容には、アクティブなモニタとグループの数、該当する SiteScope メイン・ページへの URL リンク、および SiteScope インストールのバージョン番号が含まれます。

UI 要素	説明
[SiteScope 開始/再開]	SiteScope は、再起動するたびに短いメッセージを送信します。再起動は、モニタ実行の問題を示唆している場合があります。詳細については、1181 ページ「SiteScope サーバの状況」を参照してください。 注： SiteScope11.00 以降、SiteScope は 1 日に 1 回自動的に再起動しなくなりました。
[送信元電子メール アドレス]	SiteScope で生成されるメールの送信元アドレスとして使用する電子メール・アドレス。電子メール・アドレスを指定すると、SiteScope から送信された電子メールの参照や並べ替えが容易になる場合があります。何も入力しないと、[送信元電子メール アドレス] は、メールの実際の送信元アドレスと同じになります。 例： sitescope@mycompany.com 注： 使用するメール・サーバが NTLM 認証を使用する場合（後述）、ここで入力する電子メール・アドレスは有効な電子メール・アドレスである必要があります。
[バックアップ電子メール サーバ ドメイン名]	SiteScope がプライマリ・メール・サーバに到達できない場合に使用する SMTP メール・サーバのドメイン名。バックアップ・メール・サーバのドメイン名がわからない場合は、システム管理者に問い合わせてください。 例： gateway.mycompany.com。
[ログイン]	SMTP サーバで要求されるユーザ名。このユーザ名は、プライマリとバックアップの両方のメール・サーバに使用します。 注： この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。
[パスワード]	SMTP サーバで要求されるパスワード。このパスワードは、プライマリとバックアップの両方のメール・サーバに使用します。 注： この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。

UI 要素	説明
[NTLM 認証]	ドロップダウン・リストから、次の NTLM 認証オプションを選択します。 ▶ なし。メール・サーバで NTLM 認証が不要な場合に選択します。 ▶ NTLMv1：メール・サーバで NTLM バージョン 1 を使用した認証が必要な場合に選択します。 ▶ NTLMv2：メール・サーバで NTLM バージョン 2 を使用した認証が必要な場合に選択します。 注：この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 標準設定値：なし
[タイムアウト (秒単位)]	SMTP サーバからの応答を待機する時間（秒単位）。タイムアウト期間内にプライマリ・メール・サーバからの応答を受信しなかった場合、SiteScope はバックアップ・メール・サーバの使用に切り替わります。 標準設定値：60 秒

25

ページャ・プリファレンス

本章の内容

概念

- ▶ ページャ・プリファレンスの概要 (718 ページ)

参照情報

- ▶ ページャ・プリファレンスのユーザ・インタフェース (719 ページ)

概念

ページャ・プリファレンスの概要

ページャ・プリファレンスは、SiteScope での外部電子ページャ・サービスとの通信に必要な設定を行うために使用します。SiteScope から電子ページャに警告を送信するために使用する標準設定です。

[ページャ プリファレンス] ページには、定義済みのカスタム・ページャ受信者プロファイルが表示されます。これらのプロファイルは、適切な警告定義を編集することで 1 つ以上のページャ警告に関連付けることができます。

ページャ受信者プロファイルは、[新規ページャ受信者] または [ページャ受信者の編集] ページで定義します。推奨ページャ接続オプションは **[モデム間接続]** です。この接続を使用する場合、メッセージが正常に送信されたことを SiteScope で確認し、通信に関する問題を記述したメッセージを受け取ることができます。別の接続オプションでは、通常はプッシュホン・ダイアルを使用して自動音声応答システムにメッセージを送信します。プッシュホン・ダイアル方式は数字のメッセージに制限され、ページャ・サービスが正常にメッセージを受け取ったことを SiteScope で確認できません。

これらのプリファレンスの設定の詳細については、719 ページ「ページャ・プリファレンス・ページ」を参照してください。

参照情報

ページャ・プリファレンスのユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ ページャ・プリファレンス・ページ (719 ページ)
- ▶ [新規ページャ受信者] / [ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス (721 ページ)

ページャ・プリファレンス・ページ

このページは、個別またはグループにページャ警告を送信するために SiteScope が使用する、ページャ受信者プロファイルと設定の定義に使用します。現在定義されているすべてのページャ受信者プロファイルが表示されます。ページャ警告は、電子メールにすぐにアクセスできない可能性のあるシステム管理者に自動通知を送信する場合、または警告エスカレーションを送信するかオフィスにいない可能性のあるサポート担当者に通知する場合に使用できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト> [ページャ プリファレンス] を選択します。
重要な情報	▶ SiteScope の管理者、または「電子メール、ページャ、および SNMP のプリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみが、[ページャ プリファレンス] を作成または変更できます。 ▶ ページャ受信者プロファイルが警告アクションから参照されている場合、そのプロファイルは削除できません。プロファイルを削除する前に、警告の受信者を変更する必要があります。
関連情報	▶ 718 ページ「ページャ・プリファレンスの概要」 ▶ 721 ページ「[新規ページャ受信者] / [ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
	新規ページャ受信者 ：新しいページャ受信者プロフィールを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、721 ページ「[新規ページャ受信者] / [ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	ページャ受信者の編集 ：ページャ受信者プロフィールを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、721 ページ「[新規ページャ受信者] / [ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	ページャ受信者の削除 ：[ページャプリファレンス] から選択したページャ受信者プロフィールを削除します。
	ページャ受信者のテスト ：ページャにメッセージを送信できるかどうかをテストします。[ページャのテスト] ダイアログ・ボックスにメッセージを入力し、[テスト] をクリックします。ページャ・メッセージに追加するプレフィックスを入力できます。メッセージを数字ページャに送信する場合、32 桁以内で入力します。
	すべて選択 ：表示されたすべてのページャ受信者プロフィールを選択します。
	選択を解除 ：選択をクリアします。
[標準設定]	[標準設定] の横にある矢印をクリックし、次のオプションを選択します。 ▶ 編集：[ページャプリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックスが開き、[新規ページャ受信者] ダイアログ・ボックスに表示された標準設定を変更できます。この設定の詳細については、721 ページ「[新規ページャ受信者] / [ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ テスト。[ページャのテスト] ダイアログ・ボックスが開き、標準設定のページャにメッセージを送信できるかどうかをテストできます。[メッセージ] ボックスにメッセージを入力し、[テスト] をクリックします。ページャ・メッセージに追加するプレフィックスを入力できます。メッセージを数字ページャに送信する場合、32 桁以内で入力します。

UI 要素	説明
[名前]	新規ページャ受信者の作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。
[詳細]	プロファイルの作成時または編集時に割り当てられた設定プロファイルの詳細。

[新規ページャ受信者] / [ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新規ページャ受信者プロファイルの作成や、既存のプロファイルの編集ができます。SiteScope では、ページャ警告の送信にページャ受信者プロファイルを使用します。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [ページャ プリファレンス] を選択します。[ページャ プリファレンス] ページで次を実行します。 ▶ [新規ページャ受信者]  ボタンをクリックするか ▶ または、既存のページャ・プロファイルを選択して [ページャ受信者の編集]  をクリックします
重要な情報	SiteScope の管理者、または「 電子メール、ページャ、および SNMP のプリファレンスの編集 」権限が付与されたユーザのみが、[ページャ プリファレンス] を作成または変更できます。
関連情報	▶ 718 ページ「ページャ・プリファレンスの概要」 ▶ 719 ページ「ページャ・プリファレンス・ページ」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[名前]	新規ページャ受信者の作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。
[モデム ポート]	モデムから SiteScope サーバに接続する通信ポート。Solaris または Linux の SiteScope の場合、モデムのパスとデバイス名を入力します。Microsoft Windows NT/2000 プラットフォームでは、SiteScope は RS-232C タイプのシリアル・ポートと USB モデム・ポートの両方に COM ポート番号を使用します。 USB タイプのモデムを使用している場合、SiteScope で USB モデムを使用できるように USB ポートに関連付けられた COM ポートを選択します。USB モデム用の COM ポート番号を確認するには、[設定] > [ネットワークとダイヤルアップ接続] メニューを使用します。目的のモデムを右クリックして、[プロパティ] をクリックします。そのモデムに関連付けられた COM ポート番号がプロパティに表示されます。 標準設定値 : COM1

UI 要素	説明
[接続速度 (ビット/秒)]	ドロップダウン・リストからページャ・サービスへの接続に使用するモデムの速度。 標準設定値 : 1200 ビット/秒
[ページャ接続オプション]	ページャ・サービスにメッセージを送信するオプション ▶ モデム間接続 (推奨) : 英数字ページャを所有し、英数字ページャ・サービスを使用する場合に選択します。 ▶ ダイヤルしてメッセージを入力します : 直通電話番号にダイヤルしてページを送信する場合に選択します。 ▶ ダイヤルし、コマンドを入力してからメッセージを入力します : 直通電話番号を所有し、ページを送信する前にコマンドを入力する必要がある場合に選択します。 ▶ ユーザ定義モデム接続 : ページャに上記のいずれの接続も使用できない場合に選択します。 選択したオプションで必要な情報の詳細については、次の表を参照してください。

ページャ接続オプション

選択したページャ接続オプションで、次の必要な情報を入力します。

UI 要素	説明
[モデム番号]	ページャ・サービス・モデムに英数字ページを送信する場合に使用する電話番号。
[モデムの PIN 番号]	英数字ページャの PIN 番号の末尾 7 桁。英数字ページャ・サービスを使用する場合、英数字ページをページャ・サービス・モデムに送信するために使用する電話番号を入力する必要があります。この番号はページャ・サービスにより提供されます。ページャ・サービスでは、この番号を TAP/IXO 番号と呼ぶ場合があります。

UI 要素	説明
[電話番号]	通常の電話からダイアルする場合と同じ電話番号。外線にダイアルする番号などの、必要に応じて使用する番号も含みます。番号を見やすくするためにハイフンを使用できます。電話番号の一部を区切るには、カンマを使用します。各カンマで、残りの番号にダイアルする前にモデル・スクリプトによって数秒間一時停止されます。 例：オフィスからページャにダイアルするときに外線番号 9 をダイアルする必要がある場合、「9, 555-6789」と入力します。
[ページ送信コマンド]	タッチ・トーン電話からダイアルする場合と同じページ・コマンド。
[ユーザ定義モデム コマンド]	ダイアル先の電話番号、必要に応じた追加の番号、\$message を含む全体のモデム・コマンド。SiteScope によって、各警告に指定したメッセージに \$message が置き換えられます。 例：ページャの会社の番号が 123-4567、ページャの PIN が 333-3333、ページャ会社によって各コマンドの後に # キーの入力が指定されている場合、コマンドは次のようになります。 ATDT 123-4567,,333-3333#,, \$message# 注：UNIX で実行している SiteScope の場合、[Modem Path] ボックスにモデムのデバイス・パスを入力します。Solaris を使用してデバイスのリストを参照するには、ls /dev/term/* コマンドを使用します。
[無効]	このユーザのページャを含むすべての警告を編集せずに、特定のページャを一時的に無効にします。 標準設定値：選択されていない

詳細設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[スケジュール]	ページャの設定を有効にする日時を指定します。ドロップダウン・リストから、より制限されたスケジュールを選択できます。 標準設定値 : 毎日, 全日
[詳細]	設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (
, <HR>, および タグなど) を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。 注 : このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コードを修正する修正アクションが行われます (たとえば、タグの不一致や、複数行にわたるため切り捨てられたコードなど)。悪意のある HTML コードや Javascript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。 ▶ タグ : script, object, param, frame, iframe。 ▶ on で始まる属性を含むタグは拒否される。例 : onhover。 ▶ 値に javascript が指定された属性。

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、108 ページ「検索/フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
[タグの追加]	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、119 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

26

SNMP プリファレンス

本章の内容

概念

- ▶ SNMP トラップ・プリファレンスの概要 (728 ページ)

参照情報

- ▶ SNMP トラップのユーザ・インタフェース (729 ページ)

概念

SNMP トラップ・プリファレンスの概要

SNMP プリファレンスは、SiteScope での外部の SNMP ホストまたは管理コンソールとの通信に必要な設定を行うために使用します。これらは、SNMP トラップ警告で使用する標準設定の SNMP パラメータです。

[SNMP プリファレンス] ページには、トラップをホストに送信するための定義済みカスタム SNMP トラップ・プロファイルまたはテンプレートが表示されます。SNMP トラップ・プロファイルは、適切な警告定義を編集することで 1 つ以上の SNMP トラップ警告に関連付けることができます。

これらのプリファレンスの設定の詳細については、729 ページ「SNMP トラップのプリファレンス・ページ」を参照してください。

参照情報

SNMP トラップのユーザ・インタフェース

本項の内容

- SNMP トラップのプリファレンス・ページ (729 ページ)
- [新規 SNMP トラップ] / [SNMP トラップの編集] ダイアログ・ボックス (731 ページ)

SNMP トラップのプリファレンス・ページ

このページでは、管理コンソールにデータを送信するときに SiteScope SNMP トラップ警告によって使用される設定を定義できます。SiteScope では、SiteScope SNMP トラップ警告タイプを使用して、SNMP ベースのネットワーク管理システムと統合します。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [SNMP プリファレンス] を選択します。
重要な情報	➤ SiteScope の管理者、または「電子メール、ページャ、および SNMP のプリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみが、[SNMP プリファレンス] を作成または変更できます。 ➤ SNMP トラップ・プロファイルが警告アクションから参照されている場合、そのプロファイルは削除できません。SNMP トラップ・プロファイルを削除する前に、警告の SNMP トラップを変更する必要があります。
関連情報	➤ 728 ページ「SNMP トラップ・プリファレンスの概要」 ➤ 731 ページ「[新規 SNMP トラップ] / [SNMP トラップの編集] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
	新規 SNMP トラップ。 新しい SNMP トラップ・プロファイルを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、731 ページ「[新規 SNMP トラップ] / [SNMP トラップの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	SNMP トラップの編集： SNMP トラップ・プロファイルを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、731 ページ「[新規 SNMP トラップ] / [SNMP トラップの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	SNMP トラップの削除： [SNMP プリファレンス] から選択した SNMP トラップ・プロファイルを削除します。
	SNMP トラップのテスト： SNMP トラップにメッセージを送信できるかどうかをテストします。[SNMP トラップのテスト] ダイアログ・ボックスにメッセージを入力し、[テスト] をクリックします。
	すべて選択： 表示されたすべての SNMP トラップ・プロファイルを選択します。
	選択を解除： 選択をクリアします。
[標準設定]	[標準設定] の横にある矢印をクリックし、次のオプションを選択します。 ▶ 編集：[SNMP トラップ プリファレンス標準設定] ダイアログ・ボックスが開き、[新規 SNMP トラップ] ダイアログ・ボックスに表示された標準設定を変更できます。この設定の詳細については、731 ページ「[新規 SNMP トラップ] / [SNMP トラップの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ テスト。[SNMP トラップのテスト] ダイアログ・ボックスが開き、標準設定の SNMP トラップにメッセージを送信できるかどうかをテストできます。[SNMP トラップのテスト] ダイアログ・ボックスにメッセージを入力し、[テスト] をクリックします。
[名前]	新規 SNMP トラップ・プロファイルの作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。
[詳細]	プロファイルの作成時または編集時に割り当てられた設定プロファイルの詳細。

UI 要素	説明
[ホスト]	すべての SNMP トラップ・メッセージを受信するマシンのドメイン名または IP アドレス。
[ポート]	トラップの送信先の SNMP ポート。

[新規 SNMP トラップ] / [SNMP トラップの編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新規 SNMP トラップ・プロファイルの作成や既存のプロファイルの編集ができます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [SNMP プリファレンス] を選択します。SNMP トラップのプリファレンス・ページで、次の操作を実行します。 ▶ [新規 SNMP トラップ]  をクリックするか ▶ または、既存の SNMP トラップ・プロファイルを選択して [SNMP トラップの編集]  をクリックします。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「電子メール、ページャ、および SNMP のプリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみが、[SNMP プリファレンス] を作成または変更できます。このトピックの詳細については、760 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連情報	▶ 728 ページ「SNMP トラップ・プリファレンスの概要」 ▶ 729 ページ「SNMP トラップのプリファレンス・ページ」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[名前]	新規 SNMP 受信者の作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。
[詳細]	設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (
, <HR>, および タグなど) を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。 注 : このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コードを修正する修正アクションが行われます (たとえば、タグの不一致や、複数行にわたるため切り捨てられたコードなど)。悪意のある HTML コードや Javascript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。 ▶ タグ : script, object, param, frame, iframe。 ▶ on で始まる属性を含むタグは拒否される。例 : onhover。 ▶ 値に javascript が指定された属性。
[送信先ホスト]	すべての SNMP トラップ・メッセージを受信するマシンのドメイン名または IP アドレス。このマシンでトラップ・メッセージを受信するには、SNMP コンソールが実行されている必要があります。 例 : snmp.mydomain.com または 206.168.191.20。
[SNMP ポート]	トラップの送信先の SNMP ポート。 標準設定値 : 162
[SNMP コミュニティ]	トラップの送信に使用される標準設定の SNMP コミュニティ名。コミュニティ文字列は、SNMP 管理コンソールで使用されるコミュニティ文字列と一致する必要があります。 標準設定値 : パブリック

UI 要素	説明
[SNMP トラップ ID]	送信するトラップのタイプ。共通する条件に複数の定義済み ID タイプがあります。 ▶ [一般 SNMP トラップ ID] ドロップダウン・リストから一般 SNMP タイプを選択します。 ▶ 企業固有の SNMP ID タイプを使用するには、[企業固有 SNMP トラップ ID] ボックスに特定のトラップ・タイプの番号を入力します。
[SNMP トラップのバージョン]	使用する標準設定の SNMP プロトコル・バージョン番号。現在、SNMP V1 および V2c がサポートされています。 標準設定値 : V1
[SNMP オブジェクト ID]	コンソールに対し、メッセージを送信したオブジェクトを識別します。 ▶ [事前設定 SNMP オブジェクト ID] ドロップダウン・リストから、いずれかの定義済みオブジェクトを選択します。 ▶ 別のオブジェクト ID を使用するには、[その他の SNMP オブジェクト ID] ボックスにほかのオブジェクト ID を入力します。

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、108 ページ「検索/フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
[タグの追加]	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、119 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

27

共通イベント・マッピング

本章の内容

概念

- ▶ 共通イベント・マッピングの概要 (736 ページ)

タスク

- ▶ 共通イベント・マッピングの設定方法 (737 ページ)

参照情報

- ▶ 共通イベント・マッピングのユーザ・インタフェース (739 ページ)

概念

共通イベント・マッピングの概要

イベントが Operations Manager (HPOM) または BSM 内のオペレーション管理に直接送信されるように SiteScope を設定できます。これを行うには、[共通イベント マッピング]を使用して、SiteScope ランタイム・データと、HPOM/BSM ゲートウェイ サーバに送信されるイベント属性値間のイベント・マッピング・インスタンスを作成します。

イベントのトリガ条件に一致すると、イベント・テンプレートを使用して、SiteScope ランタイム・データがイベント属性にマッピングされます。これらの属性にはイベント・サブシステムに渡される値があり、この値を使用して対応するイベントが作成されます (たとえば、テンプレートによってランタイム・データが HPOM/BSM のイベントに変換されます)。その後、イベントが HPOM/BSM に送信されます。

このためには、モニタや警告に関連付けられている標準設定のイベント・マッピングを使用するか、別のイベント・マッピング (存在する場合) を選択します。または、[共通イベント マッピング] で新しいイベント・マッピングを作成することもできます。あるいは、警告の場合、その警告をトリガしたモニタに関連付けられたイベント・マッピング・テンプレートを使用できます。イベント・マッピングの作成の詳細については、737 ページ「共通イベント・マッピングの設定方法」を参照してください。

イベント・マッピングのユーザ・インタフェースの詳細については、739 ページ「[イベント マッピング] ページ」を参照してください。

イベント・マッピングの属性プロパティの詳細については、1283 ページ「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。

OM サーバへのイベントの直接レポート

イベントが Operations Manager サーバに直接レポートされるように SiteScope を設定できます。詳細については、171 ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」を参照してください。

タスク

共通イベント・マッピングの設定方法

このタスクでは、[共通イベント マッピング] を使用してモニタと警告のイベント・マッピングを設定する方法について説明します。これは、SiteScope ランタイム・データと送信されるイベントの属性値との間のマッピングです。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 737 ページ「前提条件」
- 738 ページ「警告またはモニタ・インスタンスの設定の設定」
- 738 ページ「警告またはモニタ・インスタンスの共通イベント・マッピングの設定」
- 738 ページ「結果」

1 前提条件

共通イベント・マッピングを作成または変更するには、SiteScope の管理者、または「**共通イベント・マッピングの編集**」権限を付与されたユーザである必要があります。

- 警告またはモニタ・インスタンスの設定時にイベント・マッピングを選択するには、HP Operations エージェントをインストールして HPOM/BSM サーバに接続し、[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックス ([**プリファレンス**] > [**統合プリファレンス**] > [**HP Operations Manager 統合**]) で共通イベント統合を有効にする必要があります。詳細については、171 ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」を参照してください。

2 警告またはモニタ・インスタンスの設定の設定

トリガ時にイベント・システムの関連するイベントを作成する、警告またはモニタ・インスタンスを設定します。

SiteScope 警告の作成の詳細については、1276 ページ「警告の設定方法」を参照してください。

モニタ・インスタンスの作成の詳細については、343 ページ「モニタのデプロイ方法」を参照してください。

3 警告またはモニタ・インスタンスの共通イベント・マッピングの設定

共通イベント・マッピングを設定して、警告またはモニタ・インスタンスに対応するイベント属性にマッピングします。警告またはモニタのタイプごとに複数のマッピングを作成できます。

各警告またはモニタ・インスタンスで、既存のイベント・マッピングを選択することも、[共通イベント マッピング] で新しいイベント・マッピングを作成することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、741 ページ「[新規イベント・マッピング] / [イベント・マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注： イベント・マッピングのリストは、[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスの [Event Integration Settings] 表示枠で [共通イベント統合の有効化] が選択されている場合にのみアクティブになります。

4 結果

トリガされる警告またはモニタの測定値状態の変更に対応するイベントは、HPOM Console で表示できるほか、イベント管理ファウンデーション・ライセンスを保有していれば BSM の オペレーション管理 でも表示できます。オペレーション管理 が BSM インストールに含まれていない場合は、[サービス状況] 内の状況インジケータを介して、CI 状態に影響を及ぼすイベントを表示できます。

参照情報

共通イベント・マッピングのユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ [イベント マッピング] ページ (739 ページ)
- ▶ [新規イベント・マッピング] / [イベント・マッピングの編集] ダイアログ・ボックス (741 ページ)

[イベント マッピング] ページ

このページは、イベントのマッピングと設定を定義するために使用されます。このページでは、SiteScope ランタイム・データと送信するイベントの属性値間のマッピングを設定できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [共通イベント マッピング] を選択します。
重要な情報	▶ SiteScope の管理者、または「共通イベント・マッピングの編集」権限を付与されたユーザのみが、共通イベント・マッピングを作成または変更できます。 ▶ 共通イベント・マッピングがモニタまたは警告アクションで参照されている場合、その共通イベント・マッピングは削除できません。マッピングを削除するには、モニタまたは警告で参照されているイベント・マッピングを変更する必要があります。
関連タスク	▶ 171 ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」 ▶ 737 ページ「共通イベント・マッピングの設定方法」
関連情報	▶ 736 ページ「共通イベント・マッピングの概要」 ▶ 741 ページ「[新規イベント・マッピング] / [イベント・マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
	新規イベント・マッピング : 新規イベント・マッピングが作成されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、741 ページ「[新規イベント・マッピング] / [イベント・マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	イベント・マッピングの編集 : イベント・マッピングの編集ができるようになります。ユーザ・インタフェースの詳細については、741 ページ「[新規イベント・マッピング] / [イベント・マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	イベント・マッピングの削除 : 選択したイベント・マッピングが[共通イベントマッピング]のリストから削除されます。
	すべて選択 : 表示されているイベントがすべて選択されます。
	選択を解除 : 選択をクリアします。
[標準設定]	[標準設定] の横にある矢印をクリックし、次のオプションを選択します。 ▶ 標準設定モニタ・イベント・マッピングの編集: [イベント・マッピングの編集] ダイアログ・ボックスが開きます。このダイアログ・ボックスでは、標準設定のモニタのイベント・マッピング設定を変更できます。この設定の詳細については、741 ページ「[新規イベント・マッピング] / [イベント・マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ 標準設定警告イベント・マッピングの編集: [イベント・マッピングの編集] ダイアログ・ボックスが開きます。このダイアログ・ボックスでは、標準設定の警告のイベント・マッピング設定を変更できます。この設定の詳細については、741 ページ「[新規イベント・マッピング] / [イベント・マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
[名前]	新規イベントを作成する場合に設定プロファイルに割り当てる名前の文字列。
[詳細]	イベントの作成時または編集時に割り当てられたマッピングの詳細。

[新規イベント・マッピング] / [イベント・マッピングの編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しい共通イベント・マッピングの作成や既存のマッピングの編集ができます。これらは、SiteScope ランタイム・データとイベントを送信するために使用される属性値間のマッピングになります。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [共通イベント マッピング] を選択します。[共通イベント マッピング] ページで、[新規イベント・マッピング]  ボタンをクリックするか、既存のイベントを選択して [イベント・マッピングの編集]  ボタンをクリックします。 次の場合にもこのダイアログ・ボックスにアクセスします。 ▶ [警告] タブ > [新規警告] / [警告の編集] > [HP Operations Manager 統合設定] > [イベント マッピング] から警告を設定する場合。 ▶ モニタの [プロパティ] タブ > [HP 統合設定] > [HP Operations Manager 統合設定] > [イベント マッピング] からモニタ・インスタンスを設定する場合。
重要な情報	▶ SiteScope の管理者、または「共通イベント・マッピングの編集」権限を付与されたユーザのみが、共通イベント・マッピングを作成または変更できます。 ▶ 共通イベント・マッピングがモニタまたは警告アクションで参照されている場合、その共通イベント・マッピングは削除できません。マッピングを削除するには、モニタまたは警告で参照されているイベント・マッピングを変更する必要があります。 ▶ 長い説明を入力した場合や、共通イベント・マッピングのフィールドを変更した結果、フィールド名が長くなりすぎた場合には、SiteScope でイベントを送信できないことがあります。
関連タスク	▶ 171 ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」 ▶ 737 ページ「共通イベント・マッピングの設定方法」
関連情報	▶ 736 ページ「共通イベント・マッピングの概要」 ▶ 739 ページ「[イベント マッピング] ページ」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[名前]	共通イベントの識別に使用する名前。
[詳細]	共通イベントの詳細。

[共通イベント モデル設定] > [General] タブ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[General]	
[Title]	イベントで表示される項目を説明するわかりやすいテキスト。タイトルには、到達したしきい値（またはほかのトリガ条件）や現在の値の情報が含まれている必要があります。 標準設定値： ▶ 状態が変更された測定値の場合 : Metric '<<metric>>' changed status from '<<oldStatus>>' to '<<newStatus>>' ▶ 警告の場合 : Alert '<<alertName>>' was fired on monitor '<<fullMonitorName>>' status change 注：通常、テキストはイベント・ブラウザに 1 行で表示されるため、最も関連する情報を最初に配置することをお勧めします。
[Description]	イベントを説明する追加情報。 標準設定値： ▶ 状態が変更された測定値の場合 : Metric '<<metric>>' crossed '<<thresholdCrossed>>' with value '<<metricValue>>' ▶ 警告の場合 : Monitor '<<fullMonitorName>>' changed status from '<<oldStatus>>' to '<<newStatus>>'

UI 要素	説明
[Severity]	イベントに関連する項目の重大度。重大度レベルは、「不明」、「正常域」、「警告」、「軽微」、「重大」、または「致命的」です。 標準設定値 : <<severity>>。<<severity>> 属性は、選択されたモニタ測定値の [しきい値の設定] の [Indicator State and Severity] フィールドに指定される重大度に置き換わります。
[Category]	モニタ・タイプごとにイベントを編成およびグループ化するために使用される値。 標準設定値 : <<monitorType>> 例 : データベース, アプリケーション, J2EE
[Subcategory]	同じのカテゴリを持つイベントを編成およびグループ化するために使用される値。 標準設定値 : ➤ 状態が変更された測定値の場合 : <<metric>> ➤ 警告の場合 : <<fullMonitorName>> 例 : Oracle
[Log only]	履歴イベント・ブラウザに直接向かうイベントを、閉じたイベントとして送信できるようになります。このようなイベントは完全に処理されますが、[Life Cycle State] が [close from the beginning] に設定されます。 典型的な例として、HI が通常または正常な状態にリセットされるイベントや、前の問題が解消されたことを示すイベント (問題が別のイベントにレポートされた) が挙げられます。 標準設定値 : False

UI 要素	説明
[Indicator]	イベントとインジケータ間のリンク。これにより、イベントが送信されるとインジケータの情報が更新されるようになります。 標準設定値： ▶ 状態が変更された測定値の場合： <code><<etiType>>:<<etiValue>>:<<metricValue>></code> ▶ 警告の場合：<code><<etiType>>:<<etiValue>></code> 測定値の状態の変更の例： CPU Load:High:90 注： インジケータを更新する場合、このフィールドは必須です。この属性のテンプレート値の変更はお勧めできません。
[Correlation]	
[Key]	発生したイベントのタイプを表す一意の文字列。管理対象の環境で両方のイベントが同じ状況を表している場合、2 つのイベントのキーが同じになることがあります。重複イベントの数（[Number of Duplicates] の数）が増加すると重複イベントは破棄されます。 標準設定値： ▶ 状態が変更された測定値の場合： <code><Host>:<Group>:<Monitor>:<Metric>:<etiValue></code> ▶ 警告の場合： <code><<siteScopeHost>>:<<fullgroupid>>:<<monitorName>>:<<alertName>>:<<etiValue>></code> 測定値の状態の変更の例： labmachine1:OMEventIntegration:CPU Utilization on SiteScope Server:utilization:Good
[Submit close key condition]	クローズ・キー・パターンがイベント・サブシステムで評価できるようになります。選択する場合、次の [Close key pattern] ボックスにパターンを入力します。 標準設定値： 選択済み

UI 要素	説明
[Close key pattern]	(このボックスは、[Submit close key condition] を選択した場合にのみ使用できます) 送信するイベントによって、この式に一致するキー属性を持つすべてのイベントが自動的に閉じるようになります。このフィールドの値は [Key] フィールドと同じにすることをお勧めします。 注 : SiteScope のイベント統合ポリシーでは、クローズ・キー・パターンの最後に必ず "<*>" が追加されます。"<" および ">" 記号はログ・ファイル・ポリシーでは解析できないため、このボックスでは使用できません。 標準設定値 : <<siteScopeHost>>:<<fullgroupid>>:<<monitorName>>: <<metric>> 例 : labmachine1:OMEventIntegration:CPU Utilization on SiteScope Server:utilization<*>
[Advanced Parameters]	
[CI hint]	イベントに関連する CI の情報。この属性は、イベント処理で正しい関連 CI (関連 CI の ODB ID) を検出できるようにヒントを提供するために使用されます。 標準設定値 : <<ciHint>>。このフィールドの値は、SiteScope が BSM と HPOM のどちらに接続されているかによって異なります。このフィールドは編集できません。
[Host hint]	イベントをトリガされたモニタによって監視されているターゲット・ホスト。値は、HPOM 内のレガシ・ノード属性に変換されます。HPOM 内にこのノードが存在しない場合、イベントは消失します。 標準設定値 : <<targetHost>> 例 : ➤ IPv4: 15.15.12.13 ➤ DNS: host1.hp.com

UI 要素	説明
[Generating source hint]	監視アプリケーションと、対応するプローブ / エージェント（イベントに作成に関与）の情報。 標準設定値 : SiteScope@@<<siteScopeHost>> 例 : SiteScope@@host1.hp.com
[Attributes]	
<属性リスト>	使用可能な属性変数のリストが表示されます。属性を追加するには、選択したテキスト・ボックスに [Attributes] リストの属性をドラッグするか、選択した属性をコピーするセルを選択し、Ctrl キーを押しながら I キーをクリックします。 利用可能な属性変数の詳細については、1283 ページ「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。

[共通イベント モデル設定] > [Custom Attributes] タブ

このタブを使用して、カスタム属性を追加します。カスタム属性を使用して、ほかの共通イベント属性にないイベントの追加情報を提供できます。

重要な情報	定義する属性名が一意であることと、出荷時の属性のリストに存在していないことを確認してください。 カスタム属性は、キーと値で構成されます（両方とも文字列です）。値には任意の文字列を使用できます。この値は、ほかの値のように共通イベント・マッピングで使用されます。 注 : サポートされるのは、事前定義されたカスタム・マッピング属性だけです。カスタム属性名（cma1 ～ cma5）は変更できず、新しいカスタム属性名を追加することもできません。

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
	イベントの新しいカスタム属性を作成できるようになります。各イベントのカスタム属性の数に制限はありません。 ▶ 新規のキー：テーブルに新しい行が追加され、属性の名前と値を追加できるようになります。 ▶ 既知のキー。既知のキーを選択できるサブメニューがオプションとして開きます。関連するキーを選択できます。[Name/Value] テーブルで新しい行が開き、選択したキーの名前が [Name] 列に表示されます。対応する [Value] 列にキーの値を入力できます。 注：現在サポートされているのは、事前定義されたカスタム・マッピング属性だけです。カスタム属性名（cma1 ～ cma5）は変更できず、新しいカスタム属性名を追加することもできません。
	カスタム属性の削除：選択したカスタム属性がテーブルから削除されます。
<Name and Value>	各イベントのカスタム属性の数に制限はありません。カスタム属性を使用して、ほかの共通イベント属性にない、またはほかの属性に含まれていないイベントの追加情報を表示できます。各カスタム属性は、[Name] と [Value] のペアです。[Name] フィールドに属性の名前を入力し、[Value] フィールドに属性の値を入力します。 この機能は、複数のカスタマが製品の 1 つのインスタンスを使用している環境を管理する場合に使用できます。1 つのカスタム属性オブジェクトで複数のカスタマを処理できます。 例：Name = "cma1" ; Value = "XYZ 社"

UI 要素	説明
[属性]	
<属性のリスト>	使用可能な属性変数のリストが表示されます。属性を追加するには、選択したボックスに [Attributes] リストの属性をドラッグするか、選択した属性をコピーするセルを選択し、Ctrl キーを押しながら I キーをクリックします。 利用可能な属性変数の詳細については、1283 ページ「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。

28

スケジュール・プリファレンス

本章の内容

概念

- ▶ スケジュール・プリファレンスの概要 (750 ページ)

参照情報

- ▶ スケジュール・プリファレンスのユーザ・インタフェース (753 ページ)

概念

スケジュール・プリファレンスの概要

SiteScope モニタ、警告、レポートは、標準設定で 1 日 24 時間、週 7 日、1 年 365 日有効になっています。モニタが有効な間は、個別のモニタ設定で指定した更新頻度に従ってモニタが実行されます。たとえば、30 秒ごとにモニタを実行するように設定している場合、SiteScope によって終日 30 秒ごとにモニタの実行が試みられます。SiteScope がエラー状態を検出すると、時刻に関係なくモニタに関連付けられた警告がトリガされます。

場合によっては、単一イベントまたは特定の時刻に対応する特定の SiteScope アクションを有効にすると便利です。たとえば、サーバの負荷が一般的に軽い場合に、1 日 1 回のみリンク・チェック・モニタを実行するようなタイプのスケジュールをモニタに使用できます。このようなスケジュールを実行するには、時間指定スケジュールを使用します。

モニタの対象のサーバおよびシステムを担当する個人またはグループのスケジュールに基づいて、特定の SiteScope アクションを無効にすることもできます。定義した期間に従ってモニタを有効または無効にするように SiteScope に指示するには、範囲スケジュールを使用します。

本項の内容

- ▶ 751 ページ「時間指定スケジュール」
- ▶ 752 ページ「範囲スケジュール」

時間指定スケジュール

時間指定スケジュールでは、モニタを週単位で実行する特定の時間を設定できます。時間指定スケジュールは週の終わりにリセットされ、毎週繰り返されます。時間指定スケジュールは、スケジュールで指定した各時間に 1 回だけ実行するモニタをトリガします。

時間指定スケジュールは、モニタ・インスタンスに明示的に関連付けられるまで非アクティブです。時間指定スケジュールをモニタに関連付けるには、スケジュールを設定するモニタの **「モニタの実行設定」** 表示枠の **「モニタのスケジュール」** フィールドを使用します。

注：モニタが警告に関連付けられる方法によって、時間指定スケジュールが間接的に警告に関連付けられます。時間指定スケジュールで無効にしたモニタに関連付けられている警告は、そのモニタが無効な間は実質的に使用不能になります。ただし、警告が同じスケジュールで制御されないほかのモニタに関連付けられている場合、そのモニタがエラー状態を報告すると警告はトリガされます。

時間指定スケジュールのプリファレンスの設定の詳細については、753 ページ「時間指定スケジュール・ページ」を参照してください。

範囲スケジュール

範囲スケジュールを使用して、SiteScope で特定のモニタを有効または無効にする時間範囲を指定できます。モニタに有効な時間範囲を指定（そのモニタの「**モニタの実行設定**」表示枠の「**モニタのスケジュール**」フィールドを使用）した場合、SiteScope ではその時間範囲内のモニタのみ実行します。たとえば、月曜日から金曜日の午前 8 時～午後 9 時の範囲を作成した場合、その範囲スケジュールが関連付けられたモニタは、その時間内にのみ実行されます。

範囲スケジュールは、複数の管理者が呼び出しに応じる場合、それぞれの勤務シフトの時間に実行するモニタに異なるページ警告を関連付けるために一般的に使用されます。スケジュールによって、個人の勤務スケジュールに合わない時間帯にページ警告を送信することを避けられます。

範囲スケジュールのプリファレンスは、モニタ・インスタンスに明示的に関連付けられるまでは非アクティブです。範囲スケジュールのプリファレンスをモニタに関連付けるには、モニタの設定ページの「モニタの実行設定」表示枠を使用します。

注：モニタが警告に関連付けられる方法によって、範囲スケジュールが間接的に警告に関連付けられます。範囲スケジュールで無効にしたモニタに関連付けられている警告は、そのモニタが無効な間は実質的に使用不能になります。ただし、警告が同じスケジュールで制御されないほかのモニタに関連付けられている場合、そのモニタがエラー状態を報告すると警告はトリガされます。

範囲スケジュールのプリファレンスの設定の詳細については、755 ページ「範囲スケジュールのユーザ・ページ」を参照してください。

参照情報

スケジュール・プリファレンスのユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ 時間指定スケジュール・ページ (753 ページ)
- ▶ 範囲スケジュールのユーザ・ページ (755 ページ)

時間指定スケジュール・ページ

このページは、SiteScope モニタおよび警告の操作を特定の時間でのみ実行するようにカスタマイズするために使用します。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [スケジュール プリファレンス] を選択します。[スケジュール プリファレンス] ツールバーで [新規スケジュール]  ボタンをクリックし、[新規時間指定スケジュール] を選択します。
重要な情報	▶ SiteScope の管理者、または「スケジュール・プリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみが、スケジュール・プリファレンスを作成または変更できます。 ▶ 時間指定スケジュール・プロファイルが警告アクション、レポート、モニタ、モニタしきい値から参照されている場合、そのプロファイルは削除できません。プロファイルを削除するには、各依存関係からプロファイルを削除する必要があります。
関連情報	750 ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
[名前]	時間指定スケジュールの名前。この名前は、製品の表示での時間指定スケジュールの識別に使用されます。
[詳細]	設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (
, <HR>, および タグなど) を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。 注： このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コードを修正する修正アクションが行われます (たとえば、タグの不一致や、複数行にわたるため切り捨てられたコードなど)。悪意のある HTML コードや Javascript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。 ➤ タグ : script, object, param, frame, iframe。 ➤ on で始まる属性を含むタグは拒否される。例 : onhover。 ➤ 値に javascript が指定された属性。

時間指定スケジュールの設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<曜日>	曜日の横にあるボックス内の、モニタを実行する時間。時間指定スケジュールの時間の値は、それぞれの標準日の 24 時間以内に制限されています。1 日に複数の時間を入力するには、時間をカンマ (,) で区切ります。 例： 01,02:30,23:30 では、午前 1:00、午前 2:30、午後 11:30 にモニタを実行します。

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、108 ページ「検索/フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
[タグの追加]	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、119 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

範囲スケジュールのユーザ・ページ

このページは、SiteScope モニタおよび警告の操作を特定の時間範囲内でのみ実行するようにカスタマイズするために使用します。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [スケジュール プリファレンス] を選択します。[スケジュール プリファレンス] ツールバーで [新規スケジュール]  ボタンをクリックし、[新規時間範囲スケジュール] を選択します。
重要な情報	▶ SiteScope の管理者、または「スケジュール・プリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみが、スケジュール・プリファレンスを作成または変更できます。 ▶ 範囲スケジュール・プロファイルが警告アクション、レポート、モニタ、モニタしきい値から参照されている場合、そのプロファイルは削除できません。プロファイルを削除するには、各依存関係からプロファイルを削除する必要があります。
関連情報	750 ページ「スケジュール・プリファレンスの概要」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[名前]	範囲スケジュールの名前。
[詳細]	設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (
, <HR>, および タグなど) を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。 注：このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コードを修正する修正アクションが行われます (たとえば、タグの不一致や、複数行にわたるため切り捨てられたコードなど)。悪意のある HTML コードや Javascript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。 ➤ タグ : script, object, param, frame, iframe。 ➤ on で始まる属性を含むタグは拒否される。例 : onhover。 ➤ 値に javascript が指定された属性。

範囲スケジュールの設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<曜日>	モニタを実行する日と時間。範囲スケジュールの時間の値は、それぞれの標準日の 24 時間以内に制限されています。 [有効] を選択すると、指定した時間範囲内にのみモニタが実行され、[無効] を選択すると、適用可能な日の指定した時間範囲外のすべての時間でモニタを実行します。 注：範囲スケジュールには 24 時間の形式のみ使用します。 例：木曜日の午後 6:00 から翌朝の午前 8:00 までモニタを無効にするには、木曜日の [開始] に「18」, [終了] に「24」を入力し、金曜日の [開始] に「0」, [終了] に「8」を入力します。木曜日のスケジュールで [開始] に「18」, [終了] に「8」を入力した場合、スケジュールは無効になります。 1 日に複数の時間を入力するには、時間をカンマ (,) で区切ります。たとえば、午前 2 時～午前 3 時と午前 7 時～午前 8 時に無効にするには、[開始] ボックスに「2:00,7:00」, [終了] ボックスに「3:00,8:00。」と入力します。 標準設定値：有効（時間の値の指定なし）。詳細については、次の表を参照してください。

曜日

有効化設定 (有効化 / 無効化)	表示期間 (開始 / 終了)	スケジュールの効果
有効化	[開始] および [終了] 時間の値が指定済み	[開始] および [終了] の時間範囲内でのみモニタが実行されます。
有効化	(時間の値の指定なし)	適用可能な日のすべての時間でモニタが実行されます。これが 24 時間稼働の標準設定です。

有効化設定 (有効化 / 無効化)	表示期間 (開始 / 終了)	スケジュールの効果
無効化	[開始]および[終了]時間の値が指定済み	適用可能な日の [開始] および [終了] の時間範囲外のすべての時間でモニタが実行されます。
無効化	(時間の値の指定なし)	適用可能な日のすべての時間でモニタが無効になります。

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、108 ページ「検索/フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
[タグの追加]	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、119 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

29

ユーザ管理プリファレンス

本章の内容

概念

- ▶ ユーザ管理プリファレンスの概要 (760 ページ)

参照情報

- ▶ パスワード要件パラメータ (765 ページ)
- ▶ ユーザ管理のユーザ・インタフェース (765 ページ)

概念

ユーザ管理プリファレンスの概要

注： ユーザ管理プリファレンスは、SiteScope に直接アクセスしているユーザのみが使用でき、BSM のシステム可用性管理を使用して SiteScope にアクセスしているユーザは使用できません。SiteScope の権限と BSM との相互関係の詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリにある『システム可用性管理の使用』(PDF) の「SiteScope へのアクセスと権限モデルの作成」を参照してください。

SiteScope ユーザ・アカウントは [ユーザ管理プリファレンス] ページで管理します。このページでは、SiteScope へのアクセスが許可されているユーザを管理できます。ユーザ管理プリファレンスの設定の詳細については、766 ページ「[ユーザ管理プリファレンス] ページ」を参照してください。

クライアント・サーバ・ベースのアーキテクチャとして、複数のユーザが単一の SiteScope ユーザ・プロファイルに同時にアクセスできます。さまざまな対象者に異なる表示および編集権限を提供する複数の SiteScope ユーザ・アカウントを定義できます。たとえば、モニタの状態とレポートの表示を許可し、モニタ設定または警告の追加や編集はできないようにするユーザ・プロファイルを作成できます。

ユーザ・プロファイルによって、SiteScope へのアクセスは正しいユーザ名とパスワードを入力したユーザに制限されます。必要に応じて、LDAP データベースにクエリが送信されユーザ認証が処理されることもあります。SiteScope へのアクセスをより厳格に制御する方法については、614 ページ「一般プリファレンス・ページ」を参照してください。

ユーザ・プロファイルには、次の 2 つの主要コンポーネントがあります。

- ▶ ユーザ認証情報とアクセス権限
- ▶ アクション権限

該当するユーザ・プロファイル・コンテナで各ユーザ・プロファイルにこれらの設定を指定します。

本項の内容

- ▶ 761 ページ「ユーザ・タイプ」
- ▶ 762 ページ「ユーザ権限」
- ▶ 763 ページ「ユーザ・アカウントに関する注意事項」
- ▶ 764 ページ「ユーザのパスワードの変更」

ユーザ・タイプ

SiteScope には、次のユーザ・タイプがあります。

- ▶ **管理者** : SiteScope には標準で 1 人の管理者が設定されます。管理者は、SiteScope ですべてを表示および変更できます。[ユーザ管理プリファレンス] ページで他のユーザの作成やユーザ・プロフィールの変更が許可されているなど、その他にも管理者には特別なプロパティがあります。管理者アカウントは、無効にすることも削除することもできません。
- ▶ **パワー・ユーザ (スーパー・ユーザ)** : パワー・ユーザは、ユーザ管理権限が付与された正規ユーザです。パワー・ユーザは、管理者以外のユーザを作成、編集、削除できます。自分のアカウントも編集できますが、削除はできません。管理者とパワー・ユーザは、いずれもパワー・ユーザを作成できます。パワー・ユーザは複数存在する場合があります。このユーザ・タイプを有効化する方法の詳細については、770 ページ「権限」を参照してください。
- ▶ **一般ユーザ**。正規ユーザは、自分自身を含め、どのユーザも作成、削除、編集できません。管理者またはパワー・ユーザが正規ユーザに定義したすべての権限があります。標準設定で、正規ユーザには ([ユーザ管理プリファレンス] にある)「**ユーザ・プリファレンスの編集**」以外のすべての権限が付与されます。そのため、ユーザが表示できるのは、自分のユーザ・プロパティおよび権限が付与されているルート・グループに制限されます。正規ユーザは、他のユーザの設定や権限を表示または編集できません。
- ▶ **統合ビューア** : 標準設定では、SiteScope は HPOM イベントからのドリルダウンに使用する統合ビューア・ユーザを提供します。これは、表示権限と、グループとモニタをリフレッシュする権限が与えられた正規ユーザです。統合ビューア・ユーザは、ほかのユーザの設定や権限を表示または編集できません。詳細については、165 ページ「ディスカバリ・スクリプトと、HPOM イベントを表示するドリル・ダウン・ユーザ」を参照してください。

ユーザ権限

SiteScope ユーザ・アカウントを設定するときに、SiteScope の管理者またはパワー・ユーザは、さまざまなユーザに必要な権限を設定できます。権限により、ユーザがアクセスできる SiteScope の領域が制限され、SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、警告、レポート、プリファレンス、リモート・サーバ、テンプレート、ダッシュボードなど）に対して実行できるアクションのタイプが制御されます。

注：標準設定で、正規ユーザは自分のユーザ・プロパティおよび権限が付与されているルート・グループのみを表示できます。正規ユーザに「**ユーザ・プリファレンスの編集**」権限が付与されている場合（その結果、このユーザはパワー・ユーザになります）、ユーザは自分の設定と権限の編集、およびほかのユーザの設定と権限の作成および変更ができます。

SiteScope ではユーザ権限が拡張されました。各プリファレンス・タイプに特定の表示、編集、テスト権限があり、リモート・サーバには表示、編集、テスト権限があります。これによって、管理者またはパワー・ユーザは、選択したユーザのアクセスを特定のプリファレンス・タイプおよびリモート・サーバ・プロパティに制限できます。ユーザに特定のプリファレンスの表示権限がない場合、そのプリファレンスのタブは使用できません。

特定の権限と権限の間に依存関係があることを理解しておくことは、アクション・タイプの権限を選択する場合に重要です。編集権限とテスト権限は、常に対応する表示権限に依存します。たとえば、「**リモート・サーバを編集**」権限または「**リモート・サーバのテスト**」権限を選択する場合、「**リモート・サーバを表示**」権限が自動的に選択されます。反対に、「**リモート・サーバを表示**」権限をクリアすると、「**リモート・サーバを編集**」権限と「**リモート・サーバのテスト**」が自動的にクリアされます。

ユーザ権限は、[新規ユーザ] / [ユーザの編集] ダイアログ・ボックスの「**権限**」表示枠で設定します。SiteScope ユーザ権限の詳細については、770 ページ「権限」を参照してください。

注意事項および制限事項

- ▶ SiteScope 10.10 のユーザ・プリファレンス権限は、SiteScope で Business Availability Center バージョン 8.00 以前にレポートされる場合、システム可用性管理ではサポートされません。
- ▶ SiteScope の以前のバージョンから SiteScope 10.10 にアップグレードすると、新しい権限值は次のように判断されます。
 - ▶ すべてのプリファレンス・タイプに「<プリファレンス・タイプ>の表示」権限が標準設定で選択される（SiteScope の以前のバージョンでは対応するプリファレンス権限がなかったため）。
 - ▶ すべてのプリファレンス・タイプの「<プリファレンス・タイプ>の編集」権限は、SiteScope の以前のバージョンの「プリファレンスの編集」権限に従って判断される。
 - ▶ すべてのプリファレンス・タイプの「<プリファレンス・タイプ>のテスト」権限は、SiteScope の以前のバージョンの「プリファレンスのテスト」権限に従って判断される。

ユーザ・アカウントに関する注意事項

- ▶ 管理者アカウントは、SiteScope へのアクセス時に使用される標準設定のアカウントです。つまり、SiteScope が実行されているサーバ・アドレスとポート番号を要求するユーザは、標準設定で管理者アカウントにログインされます。このアカウントとその権限へのアクセスを制限するには、管理者アカウント・プロファイルを編集して、ユーザ名とログイン・パスワードを含める必要があります。これにより、SiteScope にアクセスする前にログイン・ダイアログ・ボックスが表示されるようになります。
- ▶ ユーザ・ログイン名とパスワードを必要としない名前付きユーザ・アカウントを作成できます。これを作成するには、標準形式の新しいユーザ・プロファイルを作成し（[表示ユーザ名] を指定する）、[ログイン名] と [パスワード] ボックスは空白にします。この設定では、ユーザが SiteScope にアクセスしようとする、認証ダイアログが表示されます。[ログイン名] と [パスワード] ボックスを空白のままにして [ログイン] ボタンをクリックすると、この名前付きユーザとして認証されます。このユーザは、SiteScope UI の右側上に **guest（ゲスト）** として表示されます。
- ▶ SiteScope 設定の不正な変更を防ぐため、正規ユーザ・アカウントの権限を制限する必要があります。

ユーザのパスワードの変更

ユーザのパスワードを変更するには、SiteScope のログイン・ウィンドウで [**パスワード変更**] リンクをクリックして、[パスワード変更] ダイアログ・ボックスにユーザのユーザ名、現在のパスワード、および新しいパスワードを入力します。

新しいパスワードがパスワード設定ルールに従っていない場合はエラー・メッセージが表示され、パスワードは変更されません。パスワード設定ルールについては、765 ページ「パスワード要件パラメータ」を参照してください。

注 : SiteScope のログイン・パスワードは大文字と小文字が区別されます。

参照情報

パスワード要件パラメータ

パスワード要件を設定するには、<SiteScope のルート・ディレクトリ>
¥groups¥master.config で次のパラメータを設定します。

パラメータ	説明
_adminMinimumLength = x	パスワードの長さは x 文字以上で指定する必要があります。
_adminRequireAlpha = (1,0)	▶ 0. パスワードに英字を含める必要はありません。 ▶ 1. パスワードに英字を含める必要があります。
_adminRequireNumber = (1,0)	▶ 0. パスワードに数字を含める必要はありません。 ▶ 1. パスワードに数字を含める必要があります。
_adminRequirePunctuation = (1,0)	▶ 0. パスワードに句読点を含める必要はありません。 ▶ 1. パスワードに句読点を含める必要があります。

ユーザ管理のユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ [ユーザ管理プリファレンス] ページ (766 ページ)
- ▶ [新規ユーザ プロファイル] / [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス (767 ページ)
- ▶ [ユーザの許可されているグループを選択] ダイアログ・ボックス (782 ページ)

[ユーザ管理プリファレンス] ページ

SiteScope によって提供されるデータは、すべてのユーザに完全な管理権限を付与せずに複数のユーザが利用できるようにすることができます。このページでは、さまざまな対象者に異なる表示および編集権限を提供する複数のユーザ・アカウントを作成できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [ユーザ管理プリファレンス] を選択します。
重要な情報	▶ 現在のユーザまたはそのほかのユーザのユーザ設定および権限を作成または変更できるのは、SiteScope の管理者か「ユーザ・プリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみです。標準設定で、正規ユーザには「ユーザ・プリファレンスの編集」権限がありません。つまり、自分のユーザ・プロパティしか表示できません。 ▶ 管理者アカウントは標準設定のアカウントで、製品がインストールされると有効になります。ほかのアカウントを作成するには、最初に管理者アカウント・プロフィールを編集してユーザ・ログイン名およびログイン・パスワードを含める必要があります。
関連情報	760 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
	新規ユーザ ：新しいユーザ・プロフィールを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、767 ページ「[新規ユーザ プロファイル] / [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	ユーザの編集 ：選択したユーザ・プロフィールを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、767 ページ「[新規ユーザ プロファイル] / [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	ユーザの削除 ：選択したユーザ・プロフィールを削除します。
	すべて選択 ：リストされたすべてのユーザ・プロフィールを選択します。

UI 要素	説明
	選択を解除 : 選択をクリアします。
[表示ユーザ名]	[表示ユーザ名] ボックスに入力された、このユーザ・プロフィールのタイトル。名前が入力されていない場合は、[ログイン名] の値が代わりに使用されます。
[ログイン名]	ログイン名を表示します。
[ログインを無効にする]	ログイン状態を表示します。チェック・ボックスがクリアされていると、このユーザ・プロフィールを使用した SiteScope へのアクセスは有効です。チェック・ボックスが選択されていると、このユーザ・プロフィールを使用した SiteScope へのアクセスは許可されません。
[ユーザ タイプ]	ユーザのタイプ。さまざまなユーザ・タイプの詳細については、761 ページ「ユーザ・タイプ」を参照してください。

[新規ユーザ プロファイル] / [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しいユーザ・プロフィールを作成または既存のプロファイルを編集できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [ユーザ管理プリファレンス] を選択します。[ユーザ管理プリファレンス] ページで、次の操作を実行します。 ▶ [新規ユーザ]  ボタンをクリックするか、 ▶ 既存のユーザ・プロフィールを選択して、[ユーザの編集]  をクリックします。
重要な情報	現在のユーザまたはそのほかのユーザのユーザ設定および権限を作成または変更できるのは、SiteScope の管理者か「ユーザ・プリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみです。標準設定で、正規ユーザには「ユーザ・プリファレンスの編集」権限がありません。つまり、自分のユーザ・プロパティしか表示できません。
関連情報	▶ 760 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」 ▶ 766 ページ「[ユーザ管理プリファレンス] ページ」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[表示ユーザ名]	ユーザ・プロフィールのタイトル。タイトルはユーザのリストに表示されます。タイトルを入力しない場合は、 [ログイン名] の値が表示ユーザ名として使用されます。
[ログイン名]	このプロフィールを使用して SiteScope にアクセスするための SiteScope ログイン名。 または、関連する LDAP セルに値を入力して、LDAP 認証を使用して SiteScope にログインできます。 使用可能な文字 : ラテン英数字。 注 : ユーザ・プロフィールの作成時に使用可能な文字以外の文字を入力してもエラーにはなりません。ただし、そのログイン名を使用して SiteScope にログインすることはできません。
[パスワード]	このユーザが SiteScope にログインするためのパスワード。 ユーザ認証に LDAP を使用する場合、ここにパスワードを入力する必要はありません。ユーザ・アカウントにログインする場合、ユーザは SiteScope のログイン・ダイアログ・ボックスに LDAP パスワードを入力します。 パスワード要件の詳細については、764 ページ「ユーザのパスワードの変更」を参照してください。 すべての SiteScope パスワードは、3DES (TDES (Triple Data Encryption Algorithm) と呼ばれます) を使用して暗号化されます。TDES 鍵は SiteScope に保存されますが、変更はできません。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) の「SiteScope プラットフォームのセキュリティ強化」を参照してください。 注 : SiteScope のログイン・パスワードは大文字と小文字が区別されます。
[パスワードの確認]	[パスワード] ボックスで入力したパスワードの確認。このパスワードは、新しいユーザ・プロフィールを作成するとき、または既存のユーザ・プロフィールのパスワードを変更するときに使用されます。

UI 要素	説明
[LDAP サービス プロバイダ]	SiteScope 固有のパスワードではなく、一元化された LDAP 認証を使用して SiteScope サービスにアクセスするための該当する LDAP サーバの URL。この SiteScope へのアクセスのパスワード認証は LDAP によって実行できます。 各 LDAP サービス・プロバイダのドメイン名をセミコロン (;) で区切って入力することにより、複数の LDAP サービス・プロバイダを指定できます。SiteScope は、指定された LDAP サービス・プロバイダのリストを読み取り、そのリストから使用できるプロバイダを探します。 例 : ldap://ldap.mydomain.com:389。 注 : ▶ この場合も、ユーザには定義された SiteScope ログイン名が必要です。 ▶ ユーザは、LDAP を使用して SiteScope にアクセスできますが、LDAP サーバでユーザに割り当てられたユーザ・ログインとセキュリティ・プリンシパルが必要です。
[LDAP セキュリティ プリンシパル]	LDAP 認証を使用して SiteScope サービスにアクセスするときの、このユーザのセキュリティ・プリンシパル。 例 : uid=testuser,ou=TEST,o=this-company.com 注 : LDAP サーバでは、ユーザを特殊文字で定義できます。ただし、SiteScope では、ユーザ名に等号記号 (=), セミコロン (;), 引用符 (") を含むユーザはサポートされていません。無効な文字を含むユーザ名では SiteScope にログインできません。
[ログインを無効にする]	このユーザ名とパスワードを使用した SiteScope へのアクセスを無効にします。このユーザ・プロファイルを使用したアクセスを有効にするには、チェック・ボックスをクリアします。

UI 要素	説明
[許可されているグループ]	このユーザ・プロファイルでアクセスできるグループのリストを表示します。新規  ボタンをクリックして [ユーザの許可されているグループを選択] ダイアログ・ボックスを開き、グループを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、782 ページ「[ユーザの許可されているグループを選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 グループへのユーザ・アクセスを削除するには、グループを選択し、削除  ボタンをクリックします。リスト内のすべてのグループを削除することはできません。 標準設定値：すべてのグループへのアクセスを有効にする SiteScope ノードがチェックされます。 注：このフィールドは管理者の設定では表示されません。

権限

ユーザのアクション権限を決定できます。権限を付与するには、権限または権限グループの左側にあるチェック・ボックスを選択します。

重要な情報	▶ 管理者にはすべての権限があり、またこれらの権限は変更できないため、管理者のアカウントに [権限] 表示枠は表示されません。 ▶ 現在のユーザまたはそのほかのユーザのユーザ設定および権限を作成または変更できるのは、SiteScope の管理者か「ユーザ・プリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみです。 ▶ [権限] 表示枠のすべての権限が標準設定で選択されます。ただし、「ユーザ・プリファレンスの編集」権限は、SiteScope 管理者が付与する必要があります。 ▶ 権限グループの左側に表示される  アイコンは、そのルート・グループ内に含まれる権限で選択されていない権限があることを示します。
関連情報	▶ 760 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」 ▶ 766 ページ「[ユーザ管理プリファレンス] ページ」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[グループ]	
[グループの編集]	新しいグループの追加、既存のモニタ・グループの名前変更、コピー、削除ができます。詳細については、315 ページ「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み
[グループのリフレッシュ]	スケジュールに関係なく、グループ内のすべてのモニタをリフレッシュまたは強制的に実行できます。詳細については、315 ページ「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み
[グループの無効化]	グループを無効化できます。詳細については、1163 ページ「[グループ内のモニタの有効化/無効化] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み
[モニタ]	
[モニタの編集]	新しいモニタの追加、既存のモニタ設定の編集、またはモニタの削除ができます。詳細については、319 ページ「SiteScope モニタを使った作業」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み
[モニタをリフレッシュします]	スケジュールに関係なく、個々のモニタをリフレッシュまたは強制的に実行できます。詳細については、319 ページ「SiteScope モニタを使った作業」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み
[モニタを確認します]	確認機能を使用して、グループの詳細ページにモニタの状態についてコメントできます。詳細については、1132 ページ「モニタの状態の確認」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み

UI 要素	説明
[モニタの無効化]	グループ内のモニタを無効化できます。1163 ページ「[グループ内のモニタの有効化/無効化]ダイアログ・ボックス」. 標準設定値 : 選択済み
[警告]	
[警告リストの表示]	警告リスト・ページに、現在設定されている警告定義のリストを表示できます。これは、警告を編集、テスト、無期限に無効化するために必要なルート権限です。詳細については、1292 ページ「SiteScope 警告ページ」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み
[警告の編集]	新しい警告の追加、既存の警告の編集または削除ができます。このオプションは、「 警告リストの表示 」権限に依存します。詳細については、1294 ページ「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 注 : 警告アクションは警告アクション・プリファレンスの権限によって制御されないため、この権限は「 電子メール、ページャ、および SNMP のリストの表示 」権限には依存しません。 標準設定値 : 選択済み
[警告のテスト]	既存の警告定義をテストできます。このオプションは、「 警告リストの表示 」権限に依存します。詳細については、1292 ページ「SiteScope 警告ページ」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み

UI 要素	説明
[警告を無期限に無効化]	1 つ以上の警告を無期限に無効化または有効化できます。このオプションは、「警告リストの表示」権限に依存します。詳細については、1294 ページ「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 標準設定値: 選択済み
[警告を一時的に無効化]	1 つ以上の警告を一時的に無効化または有効化できます。詳細については、1294 ページ「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 標準設定値: 選択済み
[レポート]	
[モニタ サマリ レポートの生成]	モニタの参照フォームおよびモニタ・サマリ・レポートを使用できます。詳細については、1377 ページ「モニタ・サマリ・レポート」を参照してください。 標準設定値: 選択済み
[管理レポートの生成]	定期管理レポートを手動で作成できます。詳細については、1369 ページ「管理レポート」を参照してください。 標準設定値: 選択済み
[管理レポートの編集]	新しいレポート定義の追加、既存のレポート定義の編集または削除ができます。詳細については、1369 ページ「管理レポート」を参照してください。 標準設定値: 選択済み
[クイック レポートの生成]	一時的な SiteScope 管理レポートを作成できます。詳細については、1373 ページ「クイック・レポート」を参照してください。 標準設定値: 選択済み
[警告レポートの生成]	一時的なクイック警告レポートを作成できます。詳細については、1379 ページ「警告レポート」を参照してください。 標準設定値: 選択済み

UI 要素	説明
[リモート サーバ]	
[リモート サーバのリストを表示]	SiteScope で設定されているリモート・サーバのリストを表示できます。これは、リモート・サーバを編集またはテストするために必要なルート権限です。詳細については、520 ページ「リモート・サーバのプロパティ・ページ」を参照してください。 このオプションが選択されていない場合、次のエンティティは表示されません。 ▶ [リモート サーバ] コンテキストのリモート・サーバ・ツリーおよびリモート・サーバ・ページ。 ▶ [モニタ] コンテキストの [リモート サーバの追加] ボタン。 標準設定値 : 選択済み
[リモート サーバを編集]	リモート・サーバを SiteScope に追加したり、リモート・サーバ設定を編集したりできます。このオプションは、「リモート・サーバのリストを表示」権限に依存します。詳細については、520 ページ「リモート・サーバのプロパティ・ページ」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み
[リモート サーバのテスト]	リモート・サーバの接続をテストできます。このオプションは、「リモート・サーバのリストを表示」権限に依存します。詳細については、520 ページ「リモート・サーバのプロパティ・ページ」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み

UI 要素	説明
[一般プリファレンス]	
[一般プリファレンスの表示]	一般プリファレンスを表示できます。これは、一般プリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、614 ページ「一般プリファレンス・ページ」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み
[一般プリファレンスの編集]	一般プリファレンスを編集できます。このオプションは、「一般プリファレンスの表示」権限に依存します。詳細については、614 ページ「一般プリファレンス・ページ」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み
[インフラストラクチャ プリファレンス]	
[インフラストラクチャ プリファレンスの表示]	インフラストラクチャ・プリファレンスを表示できます。これは、インフラストラクチャ・プリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、629 ページ「インフラストラクチャ・プリファレンス・ページ」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み
[インフラストラクチャ プリファレンスの編集]	インフラストラクチャ・プリファレンスを編集できます。このオプションは、「インフラストラクチャ・プリファレンスの表示」権限に依存します。詳細については、629 ページ「インフラストラクチャ・プリファレンス・ページ」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み

UI 要素	説明
[統合プリファレンス]	
[統合プリファレンスの表示]	統合プリファレンスを表示できます。これは、統合プリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、675 ページ「統合プリファレンス・ページ」を参照してください。 標準設定値：選択済み
[統合プリファレンスの編集]	統合プリファレンスを作成または編集できます。このオプションは、「統合プリファレンスの表示」権限に依存します。詳細については、675 ページ「統合プリファレンス・ページ」を参照してください。 標準設定値：選択済み
[ログ プリファレンス]	
[ログ プリファレンスの表示]	ログ・プリファレンスを表示できます。これは、ログ・プリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、702 ページ「ログ・プリファレンス・ページ」を参照してください。 標準設定値：選択済み
[ログ プリファレンスの編集]	ログ・プリファレンスを編集できます。このオプションは、「ログ・プリファレンスの表示」権限に依存します。詳細については、702 ページ「ログ・プリファレンス・ページ」を参照してください。 標準設定値：選択済み
[電子メール、 ページャ、 および SNMP のプリファレンス]	
[電子メール、 ページャ、 および SNMP のリストの表示]	電子メール、 ページャ、 および SNMP プロファイル・リストを表示できます。これは、電子メール、 ページャ、 および SNMP のプリファレンスを編集またはテストするために必要なルート権限です。 詳細については、709 ページ「[電子メール プリファレンス] ページ」、719 ページ「ページャ・プリファレンス・ページ」、729 ページ「SNMP トラップのプリファレンス・ページ」を参照してください。 標準設定値：選択済み

UI 要素	説明
[電子メール、ページ、および SNMP のプリファレンスの編集]	電子メール、ページ、および SNMP のプリファレンスを作成または編集できます。このオプションは、「電子メール、ページ、および SNMP のリストの表示」権限に依存します。 詳細については、709 ページ「[電子メール プリファレンス] ページ」、719 ページ「ページ・プリファレンス・ページ」、729 ページ「SNMP トラップのプリファレンス・ページ」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み
[電子メール、ページ、および SNMP のプリファレンスのテスト]	電子メール、ページ、SNMP などの外部サービスとの通信のプリファレンス設定をテストできます。このオプションは、「電子メール、ページ、および SNMP のリストの表示」権限に依存します。 詳細については、709 ページ「[電子メール プリファレンス] ページ」、719 ページ「ページ・プリファレンス・ページ」、729 ページ「SNMP トラップのプリファレンス・ページ」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み
[共通イベント マッピング]	
[共通イベント マッピングの表示]	共通イベント・マッピングを表示できます。これは、共通イベント・マッピングを編集するために必要なルート権限です。詳細については、735 ページ「共通イベント・マッピング」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み
[共通イベント マッピングの編集]	共通イベント・マッピングを編集できます。このオプションは、「共通イベント・マッピングの表示」権限に依存します。詳細については、735 ページ「共通イベント・マッピング」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み

UI 要素	説明
[スケジュール プリファレンス]	
[スケジュール リストの表示]	スケジュール・プリファレンスを表示できます。これは、スケジュール・プリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、753 ページ「スケジュール・プリファレンスのユーザ・インタフェース」を参照してください。 標準設定値：選択済み
[スケジュール プリファレンスの編集]	スケジュール・プリファレンスを作成または編集できます。このオプションは、「スケジュール・リストの表示」権限に依存します。詳細については、753 ページ「スケジュール・プリファレンスのユーザ・インタフェース」を参照してください。 標準設定値：選択済み
[ユーザ管理プリファレンス]	
[ユーザ プリファレンスの編集]	SiteScope 管理者ユーザ以外のすべての他のユーザのユーザ・プリファレンスを表示、編集、削除できます。パワー・ユーザは自分のアカウントを削除できません。この権限のないユーザには、新規ユーザ/ユーザの編集ダイアログ・ボックスが読み取り専用として表示され、現在のユーザが権限を持つ設定およびルート・グループが表示されます。 標準設定値：選択されていない

UI 要素	説明
[資格情報のプリファレンス]	
[資格情報リストの表示]	資格情報のプリファレンスを表示できます。これは、資格情報のプリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、791 ページ「[資格情報のプリファレンス] ページ」を参照してください。 このオプションが選択されていない場合、次のエンティティは表示されません。 ▶ [プリファレンス] コンテキストの [資格情報のプリファレンス] タブ。 ▶ [リモート サーバ] および [モニタ] コンテキストの [資格情報の追加] ボタン。 標準設定値 : 選択済み
[資格情報プリファレンスの編集]	資格情報のプリファレンスを作成または編集できます。このオプションは、「資格情報リストの表示」権限に依存します。詳細については、791 ページ「[資格情報のプリファレンス] ページ」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み
[証明書管理]	
[証明書リストの表示]	[証明書管理] ページを表示できます。これは、証明書管理を編集するために必要なルート権限です。詳細については、806 ページ「[証明書管理] のユーザ・インタフェース」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み
[証明書リストの編集]	証明書管理を使用して証明書を管理できます。このオプションは、「証明書リストの表示」権限に依存します。詳細については、806 ページ「[証明書管理] のユーザ・インタフェース」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み

UI 要素	説明
[タグ]	
[タグの表示]	定義されたタグのリストを確認するための SiteScope の新規タグ /SiteScope タグの編集ダイアログ・ボックスを表示できます。これは、タグを編集するために必要なルート権限です。詳細については、799 ページ「タグの検索/フィルタ・ページ」を参照してください。 標準設定値: 選択済み
[タグの編集]	検索/フィルタ・タグとタグ値を追加、編集、削除できます。このオプションは、「タグの表示」権限に依存します。詳細については、799 ページ「タグの検索 / フィルタ・ページ」を参照してください。 標準設定値: 選択済み
[テンプレート]	
[テンプレートの表示]	モニタ・ツリーにあるテンプレートを表示できます。これは、テンプレートを編集するために必要なルート権限です。詳細については、83 ページ「テンプレート・ツリー」を参照してください。 標準設定値: 選択済み
[テンプレートの編集]	テンプレートを追加、編集、削除できます。このオプションは、「テンプレートの表示」権限に依存します。詳細については、83 ページ「テンプレート・ツリー」を参照してください。 標準設定値: 選択済み
[ダッシュボード]	
[お気に入りの編集]	SiteScope ダッシュボード・ビューのお気に入りのビュー・リストに、項目を追加または削除できます。詳細については、1152 ページ「[ダッシュボードのお気に入りに保存] ダイアログ・ボックス」および 1153 ページ「[ダッシュボードのお気に入りの削除] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 標準設定値: 選択済み
[モニタ履歴の表示]	モニタの最近の履歴レポートを表示できます。詳細については、1149 ページ「SiteScope ダッシュボード - モニタ履歴ビュー」を参照してください。 標準設定値: 選択済み

UI 要素	説明
[その他]	
[ツールを使用]	ツール・コンテナにある SiteScope ツールを使用して、モニタ設定に関する問題のトラブルシューティングおよび診断を行えます。詳細については、209 ページ「SiteScope ツール」を参照してください。 標準設定値: 選択済み
[ログの表示]	警告によって送信された SiteScope モニタでレポートされた未処理のデータ、およびその他の SiteScope ログを表示できます。詳細については、1216 ページ「ログ・ファイルの使用」を参照してください。 標準設定値: 選択済み
[サーバ統計の表示]	SiteScope サーバのパフォーマンス、安定性、状況の分析、およびボトルネックのデバッグに使用できる SiteScope の内部データを表示できます。詳細については、1212 ページ「サーバ統計の使用」を参照してください。 標準設定値: 選択済み
[モニタ ツールを使用]	特定のモニタ・タイプを設定または編集するときに SiteScope ツールを使用できます。モニタ・タイプに診断ツールが使用できる場合は、グループの詳細ページで、そのモニタのダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  が有効になります。詳細については、209 ページ「SiteScope ツール」を参照してください。 注: ▶ 診断ツールによって、機密のシステム情報が表示される場合があります。 ▶ このオプションは、「ツールを使用」権限に依存します。 標準設定値: 選択済み



「ユーザの許可されているグループを選択」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ユーザのアクセスを許可するグループやサブグループを選択できます。個々のグループまたはサブグループの横にあるボックスを選択して、そのグループへのアクセスを可能にします。標準設定では、すべてのグループへのアクセスが許可されています。ユーザ・アクセスをいくつかのグループに制限するには、SiteScope ノードのチェック・ボックスをクリアして、アクセスを可能にする SiteScope ノードの下のグループを個別に選択します。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト> [ユーザ管理プリファレンス] を選択します。 [ユーザ管理プリファレンス] ページで、 [新規ユーザ]  ボタンをクリックするか、既存のユーザ・プロフィールを選択して [ユーザの編集]  ボタンをクリックします。 [新規ユーザ プロファイル] / [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックスで、 [許可されているグループ] 領域の 新規  ボタンをクリックします。
重要な情報	▶ 現在のユーザまたはそのほかのユーザのユーザ設定および権限を作成または変更できるのは、SiteScope の管理者か「ユーザ・プリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみです。標準設定で、正規ユーザには「ユーザ・プリファレンスの編集」権限がありません。つまり、自分のユーザ・プロパティしか表示できません。 ▶ グループが選択されている場合は、グループの各サブグループも許可されているグループのリストに追加されます。
関連情報	▶ 760 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」 ▶ 766 ページ「[ユーザ管理プリファレンス] ページ」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
 SiteScope	個々の SiteScope サーバを表します。 標準設定値： 現在のコンテナおよび選択されているすべての子要素。
	SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ（有効化されたモニタを含む，モニタを含まない，または有効化されたモニタがない）を表します。 モニタ・グループまたはサブグループに警告が設定されている場合，グループ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。 モニタ・グループまたはサブグループに管理レポートが設定されている場合，グループ・アイコンの横にレポート  記号が表示されます。
	SiteScope モニタの適切な機能をチェックするためにデプロイされる使用可能な状況モニタの集合を表します。

30

資格情報のプリファレンス

本章の内容

概念

- ▶ 資格情報のプリファレンスの概要 (786 ページ)

タスク

- ▶ 資格情報のプリファレンスの設定方法 (789 ページ)

参照情報

- ▶ [資格情報のプリファレンス] のユーザ・インタフェース (791 ページ)

概念

資格情報のプリファレンスの概要

「資格情報のプリファレンス」では、SiteScope リソースの資格情報を中央管理できます。SiteScope モニタ、テンプレート、およびリモート・ホストのユーザー名とパスワードを資格情報プロファイルとして一度入力すると、これらのリソースの設定時に SiteScope によって自動的にその情報が設定されます。

「資格情報のプリファレンス」では、次の作業ができます。

- ▶ 資格情報の作成および管理。1 つの中心的な場所から資格情報を追加、変更、および削除できます。
- ▶ 資格情報の更新。リソースの資格情報の期限が切れている場合や更新が必要な場合、資格情報プロファイルを更新すれば、SiteScope のリソースのすべての利用形態に変更が適用されます。これにより、SiteScope のリソースのすべての利用形態を検索して手動で更新する必要がなくなります。
- ▶ ユーザー資格情報の保護。「資格情報のプリファレンス」で保存したすべてのパスワードは暗号化されます。管理者、または「**資格情報プリファレンスの編集**」権限を付与されたユーザーのみが、資格情報を変更できます。
- ▶ 資格情報プロパティによる検索と置換。「グローバル検索と置換」を使用して資格情報をほかの資格情報に置換します。
- ▶ 資格情報設定がある SiteScope へのモニタのコピー。複数の SiteScope が BSM に接続されている場合、モニタをほかの SiteScope にコピーすることもできます（「システム可用性管理」を介してのみ使用できます）。モニタをコピーする SiteScope に資格情報プロファイルが存在しない場合、その SiteScope に資格情報プロファイルが作成されます。

タスクの詳細については、789 ページ「資格情報のプリファレンスの設定方法」を参照してください。ユーザー・インタフェースの詳細については、791 ページ「「資格情報のプリファレンス」ページ」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 787 ページ「資格情報プロファイルの監視」
- ▶ 788 ページ「サポートされているモニタ」
- ▶ 788 ページ「注 :」

資格情報プロファイルの監視

ユーザ資格情報が期限切れまたは変更された場合、これらの資格情報を使用しているモニタが機能しなくなり、状態が **[エラー]** になります。この状況を回避するには、認証をチェックする資格情報プロファイルごとにモニタを作成し、そのモニタ・タイプのすべてのモニタがテスト・モニタに依存するようにします。

たとえば、IPMI モニタ `IPMI_test_credentials` を作成し、サーバのログインとパスワードを手動で設定します。IPMI モニタの設定時に、[依存関係] 表示枠の **[依存]** ボックスに「`IPMI_test_credentials`」と入力し、**[依存条件]** として **[使用可能]** を選択します。`IPMI_test_credentials` モニタが何らかの理由により使用できなくなった場合、IPMI モニタは自動的に無効になります。

サポートされているモニタ

「資格情報のプリファレンス」を使用して、次のモニタの資格情報を保存できます。

モニタのカテゴリ	モニタ
アプリケーション	▶ COM+ Server ▶ SAP CCMS ▶ SAP CCMS Alert ▶ SAP Java Web Application Server ▶ SAP Performance ▶ SAP Work Processes ▶ Siebel Application Server ▶ WebSphere Application Server
データベース	▶ Database Counter ▶ DB2 8.x ▶ Oracle Database
サーバ	▶ IPMI
Web トランザクション	▶ URL ▶ URL Content ▶ URL List

注：

- ▶ モニタをほかの古いバージョンの **SiteScope** にコピーする場合、資格情報設定は **SiteScope** にコピーされません。
- ▶ 資格情報プロファイルがモニタまたはリモート・ホストで参照されている場合、その資格情報プロファイルは削除できません。資格情報プロファイルを削除するには、各依存関係から資格情報プロファイルを削除する必要があります。
- ▶ テンプレート・リモート・ホストまたはテンプレート・モニタで使用している資格情報が削除されている場合、欠落している資格情報を「資格情報のプリファレンス」に追加するか、リソースの資格情報をテンプレート・オブジェクトに手動で入力してからテンプレートをデプロイする必要があります。

タスク

資格情報のプリファレンスの設定方法

このタスクでは、ユーザ認証が必要な SiteScope オブジェクトの資格情報の設定および管理の手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 789 ページ「前提条件」
- 789 ページ「資格情報プロファイルの作成」
- 790 ページ「資格情報プロファイルを使用する SiteScope リソースの設定」
- 790 ページ「資格情報プロファイルの更新」
- 790 ページ「結果」

1 前提条件

資格情報を作成または変更するには、SiteScope の管理者、または「**資格情報プリファレンスの編集**」権限を付与されたユーザである必要があります。

ユーザ権限の詳細については、770 ページ「権限」を参照してください。

2 資格情報プロファイルの作成

ユーザ認証が必要な SiteScope リソースごとに、[資格情報のプリファレンス] で資格情報プロファイルを設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、791 ページ「[資格情報のプリファレンス] ページ」を参照してください。

サポートされているモニタのリストについては、788 ページ「サポートされているモニタ」を参照してください。

3 資格情報プロファイルを使用する SiteScope リソースの設定

資格情報プロファイルがある SiteScope リソースを設定する場合、リソースの設定領域にある **「資格情報」** ボックスでプロファイルを選択します。

- ▶ モニタ設定時のユーザ・インタフェースの詳細については、そのモニタのモニタ設定を参照してください。
- ▶ リモート・サーバの設定時のユーザ・インタフェースの詳細については、523 ページ「新規 Microsoft Windows リモート・サーバ/Microsoft Windows リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」および 531 ページ「新規 UNIX リモート・サーバ/UNIX リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。

4 資格情報プロファイルの更新

リソースの資格情報が変更された場合、資格情報プロファイルを更新するだけでよく、リソースのすべての利用形態を検索して SiteScope の各リソースを個別に更新する必要はありません。プロファイルを変更するには、**「資格情報のプリファレンス」** でプロファイルを選択して **「資格情報プロファイルの編集」** をクリックし、必要な変更を行います。ユーザ・インタフェースの詳細については、791 ページ「**「資格情報のプリファレンス」** ページ」を参照してください。

5 結果

SiteScope では、**「資格情報のプリファレンス」** で入力した資格情報を使用してリソースのログインとパスワードが認証されます。

参照情報

[資格情報のプリファレンス] のユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ [資格情報のプリファレンス] ページ (791 ページ)
- ▶ [新規資格情報プロファイル] / [資格情報プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス (793 ページ)

[資格情報のプリファレンス] ページ

このページでは、SiteScope リソースの資格情報を中央管理できます。このページでは、SiteScope モニタ、テンプレート、リモート・ホストの設定に使用する資格情報を追加、更新、および削除できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [資格情報のプリファレンス] を選択します。
重要な情報	▶ SiteScope の管理者、または「資格情報プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、資格情報のプリファレンスを作成または変更できます。 ▶ 資格情報プロファイルがモニタで参照されている場合、その資格情報プロファイルは削除できません。プロファイルを削除するには、各依存関係からプロファイルを削除する必要があります。
関連タスク	789 ページ「資格情報のプリファレンスの設定方法」
関連情報	▶ 786 ページ「資格情報のプリファレンスの概要」 ▶ 793 ページ「[新規資格情報プロファイル] / [資格情報プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
	新規資格情報プロファイル。 新規資格情報プロファイルが作成されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、793 ページ「[新規資格情報プロファイル] / [資格情報プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	資格情報プロファイルの編集。 資格情報プロファイルを編集できるようになります。ユーザ・インタフェースの詳細については、793 ページ「[新規資格情報プロファイル] / [資格情報プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	資格情報プロファイルの削除： 選択した資格情報プロファイルが [資格情報プリファレンス] から削除されます。
	すべて選択： 表示されている資格情報プロファイルがすべて選択されます。
	選択を解除： 選択をクリアします。
[名前]	新規資格情報プロファイルを作成する場合に設定プロファイルに割り当てる名前の文字列。
[ログイン]	該当の資格情報プロファイルを使用するリソースにアクセスするためのユーザ名。
[詳細]	資格情報プロファイルの作成時または編集時に割り当てられた設定プロファイルの詳細。

[新規資格情報プロファイル] / [資格情報プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新規資格情報プロファイルの作成や既存のプロファイルの編集ができます。資格情報プロファイルを使用して、SiteScope リソースの認証資格情報を保存および管理します。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [資格情報のプリファレンス] を選択します。[資格情報のプリファレンス] ページで、次の操作を行います。 ▶ [新規資格情報プロファイル]  をクリックするか ▶ 既存の資格情報プロファイルを選択して [資格情報プロファイルの編集]  をクリックします。
重要な情報	▶ SiteScope の管理者、または「資格情報プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、資格情報のプリファレンスを作成または変更できます。 ▶ このページは、ユーザ権限に応じてビュー・モードまたは編集モードで開きます。このトピックの詳細については、760 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	789 ページ「資格情報のプリファレンスの設定方法」
関連情報	▶ 786 ページ「資格情報のプリファレンスの概要」 ▶ 791 ページ「[資格情報のプリファレンス] ページ」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[名前]	資格情報プロファイルのわかりやすい名前。 最大文字数 : 50 文字
[ドメイン]	資格情報のドメイン。接続時に、<domain>¥<login> の形式でドメインがログインに追加されます。
[ログイン]	該当の資格情報プロファイルを使用するリソースにアクセスするためのユーザ名。

UI 要素	説明
[パスワード]	該当の資格情報プロファイルを使用するリソースにアクセスするためのパスワード。 すべての SiteScope パスワードは、3DES (TDES (Triple Data Encryption Algorithm) と呼ばれます) を使用して暗号化されます。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) の「SiteScope プラットフォームのセキュリティ強化」を参照してください。
[パスワードの確認]	[パスワード] ボックスで入力したパスワードの確認。これは、新規資格情報を作成するときや、既存の資格情報のパスワードを変更するときに使用されます。

詳細設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[詳細]	設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (
, <HR>, および タグなど) を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。 注: このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コードを修正する修正アクションが行われます (たとえば、タグの不一致や、複数行にわたるため切り捨てられたコードなど)。悪意のある HTML コードや Javascript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。 ➤ タグ: script, object, param, frame, iframe。 ➤ on で始まる属性を含むタグは拒否される。例: onhover。 ➤ 値に javascript が指定された属性。

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、108 ページ「検索/フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
[タグの追加]	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、119 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

タグの検索/フィルタ

本章の内容

概念

- ▶ タグの検索/フィルタの概要 (798 ページ)

参照情報

- ▶ タグの検索/フィルタ・ページ (799 ページ)

概念

タグの検索/フィルタの概要

SiteScope で定義した検索/フィルタ・タグを管理するには、タグの検索/フィルタのプリファレンスを使用します。これらのタグは、コンテキスト・ツリーまたはプリファレンス・プロファイルの項目に割り当てることができ、フィルタのオブジェクトとして使用されます。

タグの検索/フィルタのプリファレンス・ページには、検索/フィルタ・タグのリストが表示されます。このページで、検索/フィルタ・タグを追加、編集、削除できます。

これらのプリファレンスの設定の詳細については、799 ページ「タグの検索/フィルタ・ページ」を参照してください。

参照情報

タグの検索/フィルタ・ページ

このページでは、SiteScope で定義した検索/フィルタ・タグを管理できます。コンテキスト・ツリーとプリファレンス・プロファイルの 1 つ以上の項目にタグを割り当て、そのタグをフィルタのオブジェクトとして使用できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [タグの検索/フィルタ] を選択します。
重要な情報	▶ SiteScope オブジェクトで参照されている場合、検索/フィルタ・タグまたはタグの値は削除できません。削除するには、すべての SiteScope オブジェクトからタグまたはタグの値を削除する必要があります。 ▶ タグは、<tag> 属性を使用して警告テンプレートでも使用できます。詳細については、1283 ページ「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。
関連タスク	109 ページ「新しい検索/フィルタ・タグの作成および定義方法」
関連情報	▶ 108 ページ「検索/フィルタ・タグを使った作業」 ▶ 798 ページ「タグの検索/フィルタの概要」

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
	新規タグ: 新しい検索/フィルタ・タグを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、119 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	タグの編集。 検索/フィルタ・タグを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、119 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	タグの削除: タグの検索/フィルタのプリファレンスから選択したタグを削除します。

UI 要素	説明
	すべて選択 : 表示されたすべての検索 / フィルタ・タグを選択します。
	選択を解除 : 選択をクリアします。
[名前]	新しい検索 / フィルタ・タグの作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。
[詳細]	検索 / フィルタ・タグの作成時または編集時に割り当てられた設定プロファイルの詳細。

32

証明書管理

本章の内容

概念

- ▶ 証明書管理の概要 (802 ページ)

タスク

- ▶ 証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法 (804 ページ)

参照情報

- ▶ [証明書管理] のユーザ・インタフェース (806 ページ)

概念

証明書管理の概要

リモート・サーバの監視時に、対象サーバが自己署名証明書を使用している場合、その証明書を信頼されたキーストアに追加する必要があります。セキュアな接続を使用して URL, WebSphere アプリケーション・サーバ, VMware ベースのサーバを監視している場合、[証明書管理] ページで自己署名証明書を管理できます。

証明書管理を使用すると次のような利点があります。

- ▶ 標準の JVM ツール (keytool) を使用して証明書を管理する必要がありません。これにより、SiteScope マシンに対するデスクトップとシェル・セッションの要件が不要になります。
- ▶ 視覚的なキーストア管理 (証明書の追加と削除) が可能になり、証明書変更操作をするたびに SiteScope を再起動しなくても動的にキーストアを再読み込みできます。

注:

- ▶ [証明書管理] ページで証明書キーストアの表示、追加、変更を行うことができるのは、SiteScope の管理者、または「**証明書リストの表示/編集**」権限を持つユーザのみです。
 - ▶ モニタは使用するキーストアと関連付けられています。URL モニタ, WebSphere アプリケーション・サーバ・モニタ, VMware パフォーマンス・モニタの場合、キーストア **<SiteScope のルート・ディレクトリ> %java%lib%security%cacerts** を使用します。ほかのキーストアは無視されます。
 - ▶ その場合でも、必要であれば keytool による方法を使用して証明書をインポートできます。証明書の手動インポートの詳細については、各モニタ・タイプのドキュメントを参照してください。
 - ▶ 自己生成した認証局 (CA) 証明書を使用してすべてのサーバ証明書に署名する場合、CA 証明書を 1 回だけインポートする必要があります。
-

証明書管理を使用した証明書のインポートの詳細については、804 ページ「証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法」を参照してください。

ユーザ・インタフェースの詳細については、806 ページ「[証明書管理] ページ」を参照してください。

タスク

証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法

このタスクでは、証明書管理を使用して自己署名証明書をインポートする手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 804 ページ「前提条件」
- ▶ 805 ページ「サーバ証明書のインポート」
- ▶ 805 ページ「モニタのプロパティの設定」

1 前提条件

- ▶ 証明書管理を使用すると、URL、URL Content、URL List、URL Sequence、VMware Performance、WebSphere Application Server の各モニタにセキュアな接続を設定する際に必要なサーバ証明書をインポートできます。
- ▶ [証明書管理] ページで証明書キーストアの表示、追加、変更を行うことができるのは、SiteScope の管理者、または「**証明書リストの表示/編集**」権限を持つユーザのみです。

2 サーバ証明書のインポート

監視している Web サーバのプレフィックスが `https://` の場合、その接続はセキュアで暗号化されており、サーバ証明書のインポートが必要です。

- a [プリファレンス] > [証明書管理] を選択し、[証明書のインポート] ボタンをクリックします。[ファイル] または [ホスト] を選択し、ソース・サーバの詳細を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、808 ページ「[証明書のインポート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b [読み込み済み証明書] テーブルから、インポートするサーバ証明書を選択して、[インポート] をクリックします。インポートされた証明書が、[証明書管理] のキーストア・リストに追加されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、806 ページ「[証明書管理] ページ」を参照してください。

3 モニタのプロパティの設定

必要なサーバ証明書をインポートしたら、セキュアな接続を使用するモニタを作成できます。

参照情報

「証明書管理」のユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ 「証明書管理」 ページ (806 ページ)
- ▶ 「証明書のインポート」 ダイアログ・ボックス (808 ページ)
- ▶ 「証明書の詳細」 ダイアログ・ボックス (810 ページ)

「証明書管理」 ページ

このページを使用して、SiteScope URL、URL Content、URL List、URL Sequence、VMware Performance、WebSphere Application Server の各モニタで使用する証明書を管理します。「証明書管理」 ページでは、キーストアの内容を追加、削除、更新できます。

アクセス方法	「 プリファレンス 」 コンテキスト > 「 証明書管理 」 を選択します。
重要な情報	▶ 「証明書管理」 ページで証明書キーストアの表示、追加、変更を行うことができるのは、SiteScope の管理者、または「証明書リストの表示 / 編集」 権限を持つユーザのみです。 ▶ 列の並べ替え順序を変更するには、列・タイトルの矢印をクリックします。列が昇順または降順に並べ替えられていることを示す、小さい上向きまたは下向き矢印が表示されます。
関連タスク	804 ページ「証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法」
関連情報	802 ページ「証明書管理の概要」

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
	証明書のインポート。 [証明書のインポート] ダイアログ・ボックスが開きます。証明書が [証明書管理] のキーストア・リストに追加されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、808 ページ「[証明書のインポート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	証明書の削除： 選択した証明書が [証明書管理] のキーストア・リストから削除されます。
	証明書リストの再読み込み： リモート・サーバの <SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%lib%security%cacerts ファイルからキーストア証明書を再読み込みします。これにより、SiteScope を再起動しなくても、キーストアの変更を手動で再読み込みできます。
	すべて選択： 表示されているすべての証明書を選択します。
	選択を解除： 選択をクリアします。
<証明書>	インポートしたサーバ証明書のリストが表示されます。証明書をダブルクリックすると、[証明書の詳細] ダイアログ・ボックスが開き、証明書のプロパティと値が表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、810 ページ「[証明書の詳細] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
[別名]	証明書の別名。 注： インポート後の証明書の別名は変更できません (証明書のインポート操作時にのみ変更できます)。
[発行者]	証明書の発行者名。
[次まで有効]	証明書の有効期限の日時。
[バージョン]	証明書のバージョン番号。



「証明書のインポート」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスを使用して、SiteScope URL モニタ、WebSphere アプリケーション・モニタ、VMware パフォーマンス・モニタで使用する証明書を「証明書管理」のキーストア・リストに追加します。「証明書管理」ページでは、キーストアの内容を追加、削除、更新できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [証明書管理] を選択します。[証明書のインポート] ボタンをクリックします。
重要な情報	▶ 「証明書管理」ページで証明書キーストアの表示、追加、変更を行うことができるのは、SiteScope の管理者、または「証明書リストの表示 / 編集」権限を持つユーザのみです。 ▶ 列の並べ替え順序を変更するには、列・タイトルの矢印をクリックします。列が昇順または降順に並べ替えられていることを示す、小さい上向きまたは下向き矢印が表示されます。
関連タスク	804 ページ「証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法」
関連情報	802 ページ「証明書管理の概要」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[ソースの選択]	
[ファイル]	ファイルから証明書を追加します。[選択] ボタンをクリックし、証明書のインポート元のファイルに移動して、[開く] をクリックします。必要な証明書を「証明書管理」のリストに追加します。
[ホスト]	ホスト・サーバから証明書を追加します。監視対象サーバの実 IP アドレスまたはホスト名を入力します。
[ポート]	ホスト・マシンのポート番号（[ホスト] オプションが選択されている場合にのみ使用可能）。 標準設定値 : 443

UI 要素	説明
[読み込み]	[ホスト] フィールドで指定したマシンの証明書を読み込みます。証明書は [読み込み済み証明書] テーブルに表示されます。
[読み込み済み証明書]	
	すべて選択 : 表示されているすべての証明書を選択します。
	選択を解除 : 選択をクリアします。
[別名]	証明書の別名。証明書の別名を変更するには、証明書のインポート操作時に [別名] 列に新しい別名を入力します。 注 : 証明書をインポートした後に別名を変更することはできません。
[発行者]	証明書の発行者名。
[次まで有効]	証明書の有効期限の日時。
[バージョン]	証明書のバージョン番号。
[インポート]	[読み込み済み証明書] テーブルからインポートするサーバ証明書を選択して、[インポート] をクリックします。インポートした証明書が [証明書管理] ページに表示されます。



「証明書の詳細」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスには、選択したサーバ証明書のプロパティと値が表示されます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [証明書管理] を選択します。[証明書管理] ページで証明書をダブルクリックします。
重要な情報	[証明書管理] ページで証明書キーストアの表示、追加、変更を行うことができるのは、SiteScope の管理者、または「 証明書リストの表示/編集 」権限を持つユーザのみです。
関連情報	802 ページ「証明書管理の概要」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[別名]	証明書の別名。
[証明書のプロパティ]	
[フィンガープリント]	証明書のフィンガープリント。
[タイプ]	証明書のタイプ。
[バージョン]	証明書のバージョン番号。
[発行者プリンシパル]	証明書の発行者名。
[シリアル番号]	証明書のシリアル番号。
[署名アルゴリズム名]	証明書の署名アルゴリズムの名前。
[次から有効]	証明書の有効期間の開始日時。
[次まで有効]	証明書の有効期限の日時。

33

多言語化（I18N）環境での SiteScope の使用

本章の内容

概念

- ▶ 多言語ユーザ（MLU）インタフェースのサポート（812 ページ）

タスク

- ▶ SiteScope の英語以外のロケールの設定方法（814 ページ）
- ▶ 特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示（815 ページ）

参照情報

- ▶ 多言語化がサポートされているモニタ（817 ページ）

注意事項と制限事項（819 ページ）

概念

多言語ユーザ（MLU）インタフェースのサポート

SiteScope ユーザ・インタフェースは, Web ブラウザで次の言語で表示できます。

言語	Web ブラウザの言語設定
英語	英語
簡体中国語	中国語（中国）[zh-cn], 中国語（シンガポール）[zh-sg]
韓国語	韓国語 [ko]
日本語	日本語 [ja]

SiteScope の表示方法を指定するには, ブラウザの言語設定オプションを使用します。言語設定の選択は, ユーザのローカル・マシンだけに影響があり, SiteScope マシンや同じ SiteScope へのほかのユーザ・アクセスには影響しません。ユーザ・インタフェースの表示言語の設定の詳細については, 815 ページ「特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示」を参照してください。

注：言語は SiteScope へのログイン時に決定されます。ログインした後でブラウザの言語設定を変更しても, ログアウトしてログインしなおさないと有効にはなりません。

注意事項および制限事項

- ▶ 言語パックをインストールする必要はありません。表示されるすべての言語は SiteScope 多言語ユーザ・インタフェース (MLU) に統合されています。
- ▶ Web ブラウザの言語が変更されても、データは入力された言語で残されます。ローカル・マシンで Web ブラウザの言語を変更しても、モニタの定義および設定の言語は変更されません。
- ▶ サンプル・テンプレート、ソリューション・テンプレート、ビュー、および状況モニタなど、SiteScope インストールに含まれているエンティティの名前は英語のみです。
- ▶ ユーザ・インタフェースに選択されている言語が日本語の場合、SiteScope ヘルプ を日本語で表示できます。[このページのヘルプ] または [SiteScope ヘルプ] を選択すると、日本語で表示されます。この機能をアクティブ化するには、ソフトウェア・パッチをインストールする必要があります。詳細については、HP ソフトウェア・サポート (<http://www.support.openview.hp.com>) にお問い合わせください。
- ▶ [ヘルプ] ドロップダウン・リストのほかのリンク ([トラブルシューティング & ナレッジ ベース], [HP ソフトウェア・サポート], および [HP ソフトウェア Web サイト] など) も、選択したユーザ・インタフェース言語で表示されます。

タスク

SiteScope の英語以外のロケールの設定方法

このタスクでは、SiteScope を英語以外のロケールに設定する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 814 ページ「ロケールの版の設定変更」
- ▶ 814 ページ「新しいロケールの時間と日付の設定」
- ▶ 815 ページ「特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示」
- ▶ 815 ページ「結果」

1 ロケールの版の設定変更

モニタ・ツリーで、[プリファレンス] > [一般プリファレンス] を選択します。[メイン パネル] で、[国際化対応版] を選択して [保存] をクリックします。SiteScope を再起動します。これにより、SiteScope が複数の文字セットに対応するようになります。

ユーザ・インタフェースの詳細については、617 ページ「[国際化対応版]」を参照してください。

2 新しいロケールの時間と日付の設定

SiteScope の新しいロケールの時間と日付を設定できます。

- a <SiteScope ルート・ディレクトリ>%groups%master.config をテキスト・エディタで開きます。
- b `_localeCountry=` というエントリを見つけ、大文字 2 文字の ISO-3166 国コードを割り当てます。例：`_localeCountry=US`。国コードのリストは、http://www.chemie.fu-berlin.de/diverse/doc/ISO_3166.html で入手できます。
- c `_localeLanguage=` というエントリを見つけ、小文字 2 文字の ISO-639 言語コードを割り当てます。例：`_localeLanguage=en`。言語コードのリストは、<http://www.ics.uci.edu/pub/ietf/http/related/iso639.txt> で入手できます。

d ファイルを保存し、SiteScope を再起動します。

3 特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示

SiteScope ユーザ・インタフェースを表示する言語設定を選択します。

このタスクの実行方法の詳細については、815 ページ「特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示」を参照してください。

4 結果

SiteScope が複数の外国語の文字セットに対応するように設定されます。時間と日付の設定はロケール固有の形式で表示され、ユーザ・インタフェースは外国語で表示されます。

特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示

このタスクでは、SiteScope ユーザ・インタフェースを表示する言語設定を選択する方法を説明します。

注：サポートされている言語のリストについては、812 ページ「多言語ユーザ (MLU) インタフェースのサポート」を参照してください。

- 1 ローカル・マシンに必要な言語のフォントがインストールされていない場合はインストールします。フォントがインストールされていない言語を Web ブラウザで選択すると、SiteScope ユーザ・インタフェースでは、ローカル・マシンの標準設定の言語が使用されます。

たとえば、ローカル・マシンの標準設定の言語が英語である場合に、日本語を使用するように Web ブラウザを設定するとします。日本語のフォントがローカル・マシンにインストールされていない場合、SiteScope ユーザ・インタフェースは英語で表示されます。

- 2 Internet Explorer を使用する場合、ローカル・マシンの Web ブラウザを設定して、SiteScope ユーザ・インタフェースを表示する言語を選択します。詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/306872/ja-jp> を参照してください。手順 4 に進みます。
- 3 FireFox を使用する場合、ローカル・マシンで Web ブラウザを次のように設定します。
 - a [ツール] > [オプション] > [詳細] を選択します。[言語を編集] をクリックします。[言語] ダイアログ・ボックスが開きます。
 - b SiteScope を表示する言語を強調表示します。

使用する言語がダイアログ・ボックスにない場合は、[追加する言語を選択...] リストを展開して [追加] をクリックします。
 - c [上へ移動] をクリックして、選択した言語を最初の行に移動します。
 - d [OK] をクリックして設定を保存し、[言語] ダイアログ・ボックスを閉じます。
- 4 SiteScope ウィンドウ上部の [ログアウト] をクリックします。SiteScope が更新され、選択した言語でユーザ・インタフェースが表示されます。

参照情報

多言語化がサポートされているモニタ

次のモニタは多言語化がサポートされています。認定されているモニタは、アスタリスク (*) で示しています。

Windows オペレーティング・システムでサポートされているモニタ

- *CPU Monitor
- Database Counter Monitor
- *Database Query Monitor
- *Disk Space Monitor
- Link Check Transaction Monitor
- *Log File Monitor
- Microsoft IIS Server Monitor
- Microsoft SQL Server Monitor
- Microsoft Windows Event Log Monitor
- Microsoft Windows Performance Counter Monitor
- Microsoft Windows Resources Monitor
- Oracle 9i Application Server Monitor
- Oracle 10g Application Server Monitor
- *Ping Monitor
- *Script Monitor
- *Service Monitor
- SNMP Monitor
- SNMP Trap Monitor
- UDDI Monitor

- *URL Monitor
- URL Content Monitor
- URL List Monitor
- URL Sequence Monitor
- Web Script Monitor

UNIX オペレーティング・システムでサポートされているモニタ

- CPU Monitor
- Database Query Monitor
- Disk Space Monitor
- Log File Monitor
- Port Monitor
- Script Monitor
- Service Monitor
- UNIX Resources Monitor
- URL Monitor
- URL Content Monitor
- URL Sequence Monitor

注意事項と制限事項

このセクションでは、多言語化環境の SiteScope を使った作業に関連する次の問題のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- ▶ 819 ページ「I18N 環境の SiteScope を使用する場合の一般的な制限事項」
- ▶ 820 ページ「データベース環境に関する問題」
- ▶ 820 ページ「リモート UNIX サーバが英語のロケールに設定されていない場合のトラブルシューティング」

I18N 環境の SiteScope を使用する場合の一般的な制限事項

- ▶ ユーザ名、パスワード、および URL は必ず英語の文字になります。
- ▶ 新しいユーザ・インタフェースでのみ多言語化がサポートされます。
- ▶ SiteScope がインストールされているマシン (SiteScope マシン) と監視対象マシンのロケールを同じにする必要があります。標準設定のロケールは英語です。
- ▶ SiteScope マシンでは、英語と英語以外のロケールを使用できます。たとえば、監視対象マシンでドイツ語のロケールがサポートされている場合、SiteScope マシンではドイツと英語がサポートされます。英語以外のロケールの設定の詳細については、814 ページ「SiteScope の英語以外のロケールの設定方法」を参照してください。
- ▶ Web スクリプト・モニタをデプロイする場合、スクリプト名とトランザクション名も英語の文字にする必要があります。
- ▶ Redhat ES4 のスクリプト・モニタでは、英語以外の言語のパラメータはサポートされていません。

- ▶ SiteScope は、リモート UNIX マシンから取得された日付の解析に常に「en_US」ロケールを使用します（たとえば、ファイル・モニタの実行中など）。UNIX マシンの標準設定のロケールが en_US でない場合、このマシンの UNIX リモートの定義で [シェル環境の初期化] フィールドに「"LANG=C; export LANG"」が含まれている必要があります。
- ▶ SiteScope 管理レポートでは英語以外のラベルはサポートされていません。

データベース環境に関する問題

- ▶ Oracle データベースで新規の Oracle インスタンスを作成する場合は、インスタンスの文字セットを指定する必要があります。データ・ディクショナリ内のデータを含め、文字データはすべてインスタンスの文字セットを使って格納されます。
- ▶ データベース・クエリ・モニタが Oracle データベースに接続するには、Oracle のユーザ名とパスワードが英字のみを含んでいる必要があります。

リモート UNIX サーバが英語のロケールに設定されていない場合のトラブルシューティング

- ▶ 標準設定で英語ロケールまたは英語言語に設定されていない UNIX リモート・サーバを使用すると、ファイル・モニタとディレクトリ・モニタで問題が発生する可能性があります。**回避策**：問題のある UNIX リモート・サーバの [シェル環境の初期化] プロパティに "LANG=C; export LANG" を追加します。

34

SiteScope へログインのための認証方法の設定

本章の内容

概念

- ▶ Lightweight シングル・サインオンについて (822 ページ)

タスク

- ▶ SiteScope のシングル・サインオン文字列の変更 (823 ページ)
- ▶ SiteScope の Identity Management Single Sign-On (IDM-SSO) への接続方法 (823 ページ)

概念

Lightweight シングル・サインオンについて

シングル・サインオンは、一度ログオンしたユーザであれば、再びログオンせずに複数のソフトウェア・システムのリソースにアクセスできるようにするアクセス制御方法の 1 つです。設定されたソフトウェア・システムのグループに属するアプリケーションは、認証されていることを信用しているため、アプリケーションから別のアプリケーションに移動するときにさらに認証処理を行う必要がありません。

SiteScope の標準設定のシングル・サインオン認証方式は、Lightweight シングル・サインオン (LW-SSO) です。LW-SSO は、SiteScope に組み込まれており、認証処理を行う外部マシンは不要です。SiteScope の SSO 標準設定値の変更の詳細については、823 ページ「SiteScope の Identity Management Single Sign-On (IDM-SSO) への接続方法」を参照してください。

SiteScope 外で設定されたアプリケーションが LW-SSO をサポートしていない場合、またはより強力なシングル・サインオン実装が必要な場合は、Identity Management Single Sign-On (IDM-SSO) を設定できます。シングル・サインオン方式として有効にする場合、IDM-SSO も認証元として機能します。タスクの詳細については、823 ページ「SiteScope の Identity Management Single Sign-On (IDM-SSO) への接続方法」を参照してください。

制限事項、セキュリティの警告、LW-SSO の使用に関する一般的な参照情報については、825 ページ「Lightweight シングル・サインオン認証 (LW-SSO) - 一般的な参照」を参照してください。

タスク

SiteScope のシングル・サインオン文字列の変更

SiteScope のインストール後、LW-SSO を使用して統合されているすべての HP ソフトウェア・アプリケーションについて、**initString** の標準設定値を直ちに変更する必要があります。

- ▶ SiteScope 以外のアプリケーションでは、**lwssofmconf.xml** ファイルを見つけて、そのファイルの値を直接変更します。
- ▶ SiteScope では、<SiteScope ルート・ディレクトリ>%conf%\lwssofmconf.xml ファイルで（サービスの初回読み込みの前のみ）直接変更できます。[プリファレンス] > [一般プリファレンス] > [LW SSO 設定] > [LW SSO 初期化文字列] で値を変更することもできます。

SiteScope の Identity Management Single Sign-On (IDM-SSO) への接続方法

このタスクでは、SiteScope での Identity Management Single Sign-On (IDM-SSO) 認証方法の使用方法について説明します。

SiteScope を IDM-SSO に接続するには、次の手順で行います。

- 1 SiteScope を停止します。
- 2 <SiteScope のルート・ディレクトリ>%discovery ディレクトリの **discovery_agent.properties** ファイルを開きます。
- 3 IDM ユーザ名とパスワードと一緒に、次のプロパティをファイルに追加します。

```
appilog.agent.Probe.BasicAuth.Realm=mam-collectors
appilog.agent.Probe.BasicAuth.User=<IDM-SSO ユーザ名>
appilog.agent.Probe.BasicAuth.Pwd=<IDM-SSO パスワード>
```

- 4 SiteScope を再起動します。
- 5 BSM で、[管理] > [プラットフォーム] > [ユーザと権限] > [認証管理] に移動し、SiteScope プロファイルを追加します。

Lightweight シングル・サインオン認証 (LW-SSO) - 一般的な参照

本章の内容

概念

▶ LW-SSO 認証の概要 (826 ページ)

参照情報

▶ LW-SSO のシステム要件 (828 ページ)

▶ LW-SSO のセキュリティに関する警告 (829 ページ)

トラブルシューティングおよび制限事項 (831 ページ)

概念

LW-SSO 認証の概要

LW-SSO は、一度ログオンしたユーザであれば、再びログオンせずに複数のソフトウェア・システムのリソースにアクセスできるようにするアクセス制御方法の 1 つです。設定されたソフトウェア・システムのグループに属するアプリケーションは、認証されていることを信用しているため、アプリケーションから別のアプリケーションに移動するときにさらに認証処理を行う必要がありません。

このセクションの情報は、LW-SSO バージョン 2.2 および 2.3 に適用されます。

本項の内容

- ▶ 826 ページ「LW-SSO トークンの期限」
- ▶ 826 ページ「LW-SSO トークンの期限の推奨設定」
- ▶ 827 ページ「GMT 時間」
- ▶ 827 ページ「マルチドメイン機能」
- ▶ 827 ページ「URL 機能のセキュリティ・トークンの取得」

LW-SSO トークンの期限

LW-SSO トークンの期限の数値により、アプリケーションのセッションの有効性が判断されます。そのため、期限の数値は、アプリケーションのセッション期限の数値と同じか、またはそれよりも大きな値にする必要があります。

LW-SSO トークンの期限の推奨設定

LW-SSO を使用するアプリケーションごとに、トークンの期限を設定する必要があります。推奨値は 60 分です。高度なセキュリティを必要としないアプリケーションの場合、値を 300 分に設定できます。

GMT 時間

LW-SSO に統合されているアプリケーションでは, すべて同じ GMT 時間を使用し, 最大誤差を 15 分に抑える必要があります。

マルチドメイン機能

マルチドメイン機能では, LW-SSO 統合に含まれるアプリケーションを, 別の DNS ドメインのアプリケーションに統合する必要がある場合, それらすべてのアプリケーションで **trustedHosts** (または **protectedDomains**) を設定する必要があります。さらに, 設定の **lwssso** 要素に正しいドメインを追加する必要があります。

URL 機能のセキュリティ・トークンの取得

ほかのアプリケーションの URL に対する **セキュリティ・トークン** として送信された情報を取得するには, ホスト・アプリケーション設定の **lwssso** 要素で, 正しいドメインを設定する必要があります。

参照情報

LW-SSO のシステム要件

次の表に、LW-SSO の設定要件を示します。

アプリケーション	バージョン	コメント
Java	1.5 以上	
HTTP サーブレット API	2.1 以上	
Internet Explorer	6.0 以上	ブラウザで、HTTP セッション cookie と HTTP 302 リダイレクト機能を有効にする必要あり
FireFox	2.0 以上	ブラウザで、HTTP セッション cookie と HTTP 302 リダイレクト機能を有効にする必要あり
Jboss 認証	Jboss 4.0.3 Jboss 4.3.0	
Tomcat 認証	スタンドアロン Tomcat 5.0.28 スタンドアロン Tomcat 5.5.20	
Acegi 認証	Acegi 0.9.0 Acegi 1.0.4	
Spring Security 認証	Spring Security 2.0.4	
Web サービス・エンジン	Axis 1 - 1.4 Axis 2 - 1.2 JAX-WS-R1 2.1.1	

LW-SSO のセキュリティに関する警告

このセクションでは、LW-SSO 設定に関するセキュリティの警告について説明します。

- **LW-SSO の `initString` 機密パラメータ** : LW-SSO では、対称暗号化方式を使用して LW-SSO トークンを検証および作成します。設定内にある **`initString`** パラメータは、秘密鍵の初期化に使用します。アプリケーションでトークンが作成され、同じ **`initString`** パラメータを使用するアプリケーションにより、トークンが検証されます。

注意 :

- **`initString` パラメータの設定を行わずに LW-SSO を使用することはできません。**
 - **`initString` パラメータは機密情報なので、公開、転送、永続性などの点で慎重に扱う必要があります。**
 - **`initString` パラメータは、LW-SSO を使用して相互に統合されたアプリケーション間でのみ共有する必要があります。**
 - **`initString` パラメータは 12 文字以上の長さにする必要があります。**
-
- **必要な場合のみ LW-SSO を有効化** : 特に必要な場合を除き、LW-SSO を無効にする必要があります。
 - **認証セキュリティのレベル** : 最も弱いタイプの認証フレームワークを使用し、ほかの統合アプリケーションで信頼されている LW-SSO トークンを発行するアプリケーションにより、アプリケーション全体の認証セキュリティ・レベルが決まります。

強力で安全な認証フレームワークを使用するアプリケーションの場合のみ、LW-SSO トークンを発行することをお勧めします。

- ▶ **対称暗号化方式の意味** : LW-SSO では、対称暗号化方式を使用して LW-SSO トークンを発行および検証します。そのため、LW-SSO を使用するアプリケーションから、同じ **initString** パラメータを共有する、そのほかすべてのアプリケーションに信頼されたトークンを発行できます。**initString** を共有するアプリケーションが、信頼されていない場所に置かれているか、またはそのような場所からアクセスできる場合、リスクが発生する場合があります。
- ▶ **ユーザ・マッピング (同期)** : LW-SSO フレームワークでは、統合アプリケーション間のユーザ・マッピングが保証されていません。そのため、統合アプリケーションでユーザ・マッピングを監視する必要があります。すべての統合アプリケーションで、同じユーザ・レジストリ (LDAP/AD など) を共有することをお勧めします。

ユーザのマッピングに失敗すると、セキュリティ違反が発生し、さまざまなアプリケーションの複数ユーザに同じユーザ名が割り当てられるなど、アプリケーションの動作不良が発生する場合があります。

さらに、あるアプリケーション (AppA) にユーザがログオンしてから、コンテナ認証またはアプリケーション認証を使用する別のアプリケーション (AppB) にアクセスすると、ユーザのマッピングに失敗した場合に、ユーザが手動で AppB にログオンし、ユーザ名を入力する必要があります。ユーザが AppA へのログオンに使用していたのとは別のユーザ名を入力した場合、次のような動作が発生する場合があります。その後ユーザが AppA または AppB から第 3 のアプリケーション (AppC) にアクセスすると、AppA または AppB へのログオンに使用していたユーザ名で、AppC にアクセスしてしまいます。

- ▶ **ID マネージャ** : 認証目的で使用する場合、ID マネージャの保護されていないリソースは、すべて LW-SSO の **nonsecureURLs** 設定により構成する必要があります。
- ▶ **LW-SSO デモ・モード**.
 - ▶ このデモ・モードは実証目的のみに使用します。
 - ▶ デモ・モードはセキュリティが確保されていないネットワークでのみ使用してください。
 - ▶ デモ・モードは実運用環境では使用しないでください。デモ・モードと実運用モードを組み合わせ使用しないでください。

トラブルシューティングおよび制限事項

このセクションでは、LW-SSO 認証のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- ▶ 831 ページ「既知の問題」
- ▶ 832 ページ「制限事項」

既知の問題

このセクションでは、LW-SSO 認証の既知の問題について説明します。

- ▶ **セキュリティ・コンテキスト** : LW-SSO のセキュリティ・コンテキストでは、1 つの属性名につき 1 つの属性値のみがサポートされています。

そのため、SAML2 トークンから、同じ属性名の値が複数送信されても、LW-SSO フレームワークで許可される値は 1 つのみです。

同様に、IdM トークンから同じ属性名の値が複数送信されるよう設定されていても、LW-SSO フレームワークで許可される値は 1 つのみです。

- ▶ **Internet Explorer 7 を使用したマルチドメインのログアウト機能** : 次の状況では、マルチドメインのログアウトに失敗する場合があります

- ▶ ブラウザに Internet Explorer 7 を使用していて、アプリケーションのログアウト手順で、3 回連続 HTTP 302 リダイレクトの動作が呼び出される。

この場合、Internet Explorer 7 で HTTP 302 リダイレクトの応答が正しく処理されず、[**Internet Explorer ではこのページは表示できません**] というエラー・ページが表示される場合があります。

回避策として推奨されるのは、アプリケーションのログアウト手順で、できるだけリダイレクト・コマンドの数を少なくすることです。

制限事項

LW-SSO 認証を使って作業する場合は次の制限事項に注意してください。

▶ アプリケーションへのクライアント・アクセス :

ドメインが LW-SSO 設定で定義されている場合 :

- ▶ アプリケーション・クライアントは、ログイン URL で FQDN (完全修飾ドメイン名) を持つアプリケーション (例 : `http://myserver.companydomain.com/WebApp`) にアクセスする必要があります。
- ▶ LW-SSO では、IP アドレスによる URL (`http://192.168.12.13/WebApp` など) はサポートされていません。
- ▶ LW-SSO では、ドメインなしの URL (`http://myserver/WebApp` など) はサポートされていません。

ドメインが LW-SSO 設定で定義されていない場合 : ログイン URL に FQDN がない場合、クライアントはアプリケーションにアクセスできません。この場合、LW-SSO セッション cookie はドメイン情報なしで単一のマシン専用で作成されます。そのため、cookie はブラウザによってほかの cookie に委任されないで、同一の DNS ドメインにあるほかのコンピュータに渡されません。つまり、同一ドメインでは LW-SSO が機能しません。

- ▶ **LW-SSO フレームワークの統合 :** アプリケーションで LW-SSO の機能を活用できるのは、あらかじめ LW-SSO フレームワーク内に統合されている場合のみです。

▶ マルチドメインのサポート :

- ▶ マルチドメイン機能は、HTTP リファラに基づいています。そのため LW-SSO では、アプリケーション間のリンクはサポートされていますが、2 つのアプリケーションが同じドメインにある場合を除き、ブラウザ・ウィンドウへの URL の入力にはサポートされていません。
- ▶ 最初のクロス・ドメイン・リンクに **HTTP POST** を使用することはサポートされていません。

マルチドメイン機能では、最初のアプリケーションから 2 番目のアプリケーションへ **HTTP POST** を要求することはサポートされていません (**HTTP GET** 要求のみサポートされています)。たとえば、最初のアプリケーションから 2 番目のアプリケーションへの HTTP リンクがある場合、**HTTP GET** 要求はサポートされていますが、**HTTP FORM** 要求はサポートされていません。2 回目以降の要求は、すべて **HTTP POST** か **HTTP GET** のいずれかです。

▶ LW-SSO トークンのサイズ :

LW-SSO が、あるドメインのアプリケーションから別のドメインのアプリケーションに転送できる情報量は、15 グループ/ロール/属性までに制限されています (各項目は平均 15 文字長)。

▶ マルチドメイン・シナリオでの、保護されたページ (HTTPS) から保護されていないページ (HTTP) へのリンク :

保護されたページ (HTTPS) から保護されていないページ (HTTP) にリンクする場合、マルチドメインは機能しません。これはブラウザの制限事項の 1 つです。この場合、保護されたリソースから保護されていないリソースにリンクするときに、Referrer ヘッダが送信されません。具体例については、<http://support.microsoft.com/support/kb/articles/Q178/0/66.ASP> を参照してください。

▶ サードパーティ cookie の Internet Explorer での動作 :

Microsoft Internet Explorer 6 には、P3P (Platform for Privacy Preferences) プロジェクトをサポートするモジュールが含まれています。そのため、サードパーティ・ドメインの cookie は、標準設定で [インターネット] セキュリティ・ゾーンでブロックされています。IE では、セッションの cookie もサードパーティ cookie とみなされるため、セッションの cookie もブロックされてしまい、LW-SSO が機能しません。詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/323752/ja-jp> を参照してください。

この問題を解決するには、起動したアプリケーション (または *mydomian.com などの DNS ドメイン・サブセット) を、コンピュータの [ローカル イン트라ネット] または [信頼済みサイト] ゾーンに追加します (Microsoft Internet Explorer の場合、メニューから [ツール] > [インターネット オプション] > [セキュリティ] > [ローカル イン트라ネット] > [サイト] > [詳細設定] をクリックします)。こうすることで、cookie が許可されます。

注意 : LW-SSO のセッション cookie は、ブロックされているサードパーティ・アプリケーションで使用する cookie の 1 つにすぎません。

▶ SAML2 トークン :

▶ SAML2 トークンを使用する場合、ログアウト機能がサポートされません。

そのため、SAML2 トークンを使用して 2 番目のアプリケーションにアクセスすると、ユーザが最初のアプリケーションからログアウトしても 2 番目のアプリケーションからログアウトされません。

- ▶ **SAML2 トークンの期限切れは、アプリケーションのセッション管理に反映されません。**

そのため、SAML2 トークンを使用して 2 番目のアプリケーションにアクセスする場合、各アプリケーションのセッション管理は個別に処理されます。

- ▶ **JAAS Realm : Tomcat の JAAS Realm はサポートされていません。**
- ▶ **Tomcat ディレクトリでのスペースの使用。** Tomcat ディレクトリでのスペースの使用はサポートされていません。

Tomcat のインストール・パス (フォルダ) にスペースが含まれている場合 ([Program Files] など)、および LW-SSO 設定ファイルが Tomcat の **common¥classes** フォルダに置かれている場合、LW-SSO を使用できません。

- ▶ **ロード・バランサの設定 :** LW-SSO によりデプロイされたロード・バランサは、セッション維持を使用するよう設定する必要があります。
- ▶ **デモ・モード :** デモ・モードでは、LW-SSO は、アプリケーション間のリンクはサポートされていますが、ブラウザ・ウィンドウへの URL の入力サポートされていません。これは、この場合、HTTP リファラ・ヘッダがないためです。

第 VII 部

テンプレート

36

SiteScope テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope テンプレートの概要 (839 ページ)
- ▶ テンプレートについて (843 ページ)
- ▶ テンプレート例 (846 ページ)
- ▶ テンプレートの計画 (847 ページ)
- ▶ テンプレート変数を使った作業 (849 ページ)
- ▶ モニタ・テンプレートのカウンタ選択 (855 ページ)
- ▶ CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ (859 ページ)
- ▶ テンプレート・デプロイメントの更新 (860 ページ)

タスク

- ▶ テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法 (863 ページ)
- ▶ 既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法 (872 ページ)
- ▶ ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法 (874 ページ)
- ▶ CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法 (877 ページ)
- ▶ 関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法 (882 ページ)
- ▶ 正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更方法 (887 ページ)
- ▶ テンプレートのエクスポートとインポート方法 (888 ページ)

- ▶ PDF へのエクスポート時の Unicode フォントの有効化方法 (890 ページ)

参照情報

- ▶ 予約済みテンプレート・グループ・タイプ (891 ページ)
- ▶ SiteScope テンプレートのユーザ・インタフェース (892 ページ)

概念

SiteScope テンプレートの概要

インフラストラクチャ内にある、同じような特性を持つシステムをチェックする一連のモニタを迅速にデプロイするには、テンプレートを使用します。

SiteScope には、ユーザ定義テンプレート、定義済みソリューション・テンプレート、フェールオーバー監視テンプレート、モニタ デプロイメント ウィザード・テンプレートの各タイプのテンプレートがあります。この章では、ユーザ定義テンプレートについて説明します。

注：

- ▶ 定義済みソリューション・テンプレートの詳細については、969 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレート」を参照してください。
 - ▶ フェールオーバー監視テンプレートの詳細については、957 ページ「フェールオーバー監視テンプレート」を参照してください。
 - ▶ モニタ デプロイメント ウィザード・テンプレートの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリにある『システム可用性管理の使用』(PDF) の「モニタ・デプロイメント・ウィザードのテンプレートと変数」を参照してください。
-

SiteScope ユーザ定義テンプレートを使用すると、次のような利点があります。

- ▶ 組織の要件に合わせて独自のテンプレートを作成およびカスタマイズできます。
- ▶ SiteScope テンプレートは、一連のモニタ・タイプや設定を 1 つの構造にまとめて標準化するために使用します。この構造を、監視対象環境の複数の要素を対象とするモニタのグループとして、繰り返しデプロイできます。
- ▶ テンプレートによって、サーバ、アプリケーション、データベース、ネットワーク環境など、企業内のさまざまな IT 要素の監視を標準化するエンタープライズ・ソリューションを提供します。
- ▶ テンプレートを使用することで、グループ、モニタ、警告、リモート・サーバ、設定のデプロイメントを 1 回の操作で実行できるため、企業全体へのモニタのデプロイメント時間が短縮されます。
- ▶ テンプレートによって、実際の監視対象デプロイメントがテンプレートに定義されている標準化されたデプロイメントにどの程度準拠しているかを表示できます。これにより、監視対象環境に発生した変化は監視側のインフラストラクチャで迅速に更新されます。また、監視側のインフラストラクチャでは、テンプレートの標準セットへの準拠が維持されます。
- ▶ サイレント・テンプレート・デプロイメントを使用してデプロイメント要求を送信し、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。テンプレート・デプロイメント要求は、キューに入れられ、バックグラウンドで処理されます。キュー内のすべての要求が完了する前に SiteScope が再起動された場合、再起動後にデプロイメントの処理が自動的に続行されます。
- ▶ テンプレート変更適用ウィザードを使用すると、テンプレートを変更し、その変更をテンプレートによってデプロイされたすべての SiteScope オブジェクトに適用できます。しきい値の変更や、新しいモニタや警告が必要になるなど、テンプレート・オブジェクトに変更が必要な場合、テンプレートを 1 回更新すれば、各オブジェクトを個別に更新せずに変更をすべてのデプロイ済みグループに適用できます。
- ▶ ほかの SiteScope インストールでできるようにテンプレートをエクスポートおよびインポートします。これにより、標準化されたモニタ設定を企業全体で複製できます。

テンプレートの要素と機能

テンプレートは、テンプレート・ビューでテンプレート・コンテナ内に作成します。作成した要素はテンプレート・ツリーに表示され、変更やデプロイメントの際にアクセスできます。詳細については、843 ページ「テンプレートについて」を参照してください。

テンプレートを使用して、標準化した監視パターンをインフラストラクチャの複数の要素にデプロイできます。テンプレートには複数のオブジェクト・タイプを追加できるため、テンプレートを効果的にデプロイして使用するには計画が必要です。詳細については、847 ページ「テンプレートの計画」を参照してください。

テンプレートを作成するには、グループ、リモート・サーバ定義、モニタ、警告、変数をテンプレートに追加して設定します。テンプレート変数は、テンプレートをデプロイするたびに動的または対話的に変更する設定値の置換マークとして使用します。変数の作成と参照は、各テンプレートで独自に行います。詳細については、849 ページ「テンプレート変数を使った作業」を参照してください。

一部の SiteScope モニタ・タイプでは、測定カウンタ・ブラウザ機能を使用して、監視で利用できるメトリックスがあるかどうかアプリケーションとシステムを動的に照会します。これらのモニタのいずれかを手動で作成する場合、複数ステップからなる手順を使用してカウンタを表示および選択します。テンプレートをデプロイするときのカウンタの選択には、別の方法を使用します。詳細については、887 ページ「正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更方法」を参照してください。

テンプレートを作成、設定した後で、SiteScope 階層にデプロイします。テンプレートのデプロイの詳細については、870 ページ「テンプレートのデプロイ」を参照してください。その後、ソース・テンプレートを変更する場合、テンプレート変更適用ウィザードを使用すると、テンプレートによってデプロイされたすべての SiteScope オブジェクトに変更を自動的に適用できます。テンプレートの更新の詳細については、860 ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」を参照してください。

ほかの SiteScope インストールでテンプレートを使用する場合、テンプレートをファイルに保存し、エクスポート・ファイルをほかの SiteScope サーバにコピーして、使用するテンプレートが含まれるテンプレート・コンテナ・オブジェクトをインポートします。テンプレートのエクスポートおよびインポートの詳細については、888 ページ「テンプレートのエクスポートとインポート方法」を参照してください。

注：

- ▶ SiteScope テンプレートの内部プロパティの設定の詳細については、HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報 (<http://support.openview.hp.com/selfsolve/documents>) を参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログインする必要があります。
 - ▶ テンプレートの操作時に SiteScope API を使用することもできます。詳細については、36 ページ「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。
-

テンプレートについて

テンプレートは、事前定義したパターンと設定に従ってグループ、サーバ、モニタ、警告を再現するために使用するオブジェクトです。テンプレートを SiteScope 階層内の場所にコピーすることで、テンプレートに定義された項目のすべてを 1 回の操作でデプロイできます。また、テンプレート変数を使用して特定のモニタ、サーバ、警告の設定をテンプレートのデプロイ時に対話形式で行うこともできます。テンプレートを作成したら、必要に応じて何回でもモニタのデプロイに使用できます。

次の方法は、作成したテンプレートに設定を追加する場合に使用します。

- ▶ 既存のグループとモニタ階層を SiteScope からテンプレートにコピーし、それらの要素をテンプレートとして使用できるように編集します。詳細については、872 ページ「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」を参照してください。
- ▶ 企業内に適切な SiteScope モニタ要素がない場合、または新しいオブジェクトや設定を作成する場合、手動でテンプレート内にテンプレート・グループ、モニタ、サーバ、警告を作成できます。詳細については、863 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」を参照してください。

ヒント:

- ▶ SiteScope 監視がまだ設定されておらず、SiteScope モニタとグループを使った作業に慣れていない場合は、テンプレートを作成する前にサンプルのグループ、モニタ、警告を設定します。これにより、モニタの設定とモニタ、グループ、警告間の関係を理解することができます。その後、SiteScope から構造をコピーし、設定をテンプレートに変換できます。
 - ▶ テンプレートの作業を開始しやすいように、SiteScope には Windows と UNIX の環境を監視するためのテンプレート例が付属されています。詳細については、846 ページ「テンプレート例」を参照してください。
-

テンプレート・オブジェクト

テンプレートは、テンプレート・ツリーのテンプレート・コンテナ内に作成され、保存されます。テンプレートを使用して設定できるテンプレート変数定義と SiteScope オブジェクトは、テンプレート内にオブジェクトとして表示されます。

次の表では、テンプレートで使用するオブジェクトについて説明します。

アイコン	オブジェクト・タイプ	説明
	テンプレート・コンテナ	テンプレート・コンテナでは、テンプレート監視ソリューションを管理できます。テンプレートは、テンプレート・コンテナにのみ追加できます。このオブジェクトの設定の詳細については、 897 ページ 「[新規テンプレート コンテナ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	テンプレート	テンプレートには、テンプレート監視ソリューションを構成する SiteScope グループ、モニタ、リモート・サーバ、変数定義、警告が含まれています。このオブジェクトの設定の詳細については、 898 ページ 「[新規テンプレート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	テンプレート変数	変数を使用して、テンプレートのデプロイ時にユーザ入力をも促すメッセージを表示します。テンプレート変数は、ユーザ定義または事前定義されたシステム変数です。このオブジェクトの設定の詳細については、 900 ページ 「[新規変数] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	テンプレート・リモート・サーバ	テンプレート・リモート・サーバを使用して、テンプレートのデプロイ時に作成される Windows または UNIX のリモート・サーバ・プリファレンスを定義します。このオブジェクトの設定の詳細については、 903 ページ 「新規テンプレート・リモート・サーバ・ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	テンプレート・グループ	テンプレート・グループには、テンプレート・モニタと、関連付けられた警告が含まれます。テンプレート・グループを使用して、モニタおよび関連付けられた警告のインフラストラクチャへのデプロイメントを管理します。このオブジェクトの設定の詳細については、 905 ページ 「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

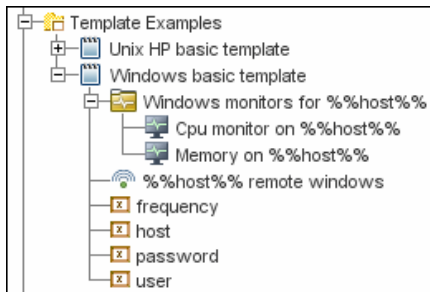
アイコン	オブジェクト・タイプ	説明
	テンプレート・モニタ	テンプレート・モニタを使用して、テンプレートのデプロイ時に作成されるモニタを定義します。このオブジェクトの設定の詳細については、908 ページ「新規テンプレート・モニタ・ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	テンプレート警告	テンプレート警告を使用して、テンプレートのデプロイ時に作成されるグループおよびモニタに関する警告を定義します。テンプレート・モニタまたはグループに警告が設定されている場合、そのモニタまたはグループ・アイコンの横に警告記号が表示されます。このオブジェクトの設定の詳細については、909 ページ「[新規警告] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

テンプレート例

SiteScope には、Windows と UNIX の環境で監視するためのテンプレート例が付属しています。これらのテンプレートは、テンプレート・ツリーの [Template Examples 11.0] フォルダから使用できます。テンプレート例を使用して、SiteScope テンプレートの使用方法を習熟できます。また、テンプレート例を使用して次のことを確認できます。

- ▶ テンプレート・グループ、モニタ、リモート・サーバの使用方法
- ▶ テンプレート・リモート・サーバとそれを使用するモニタ間の接続
- ▶ 変数値の使用方法とシステム変数の使用方法

次の例は、[Windows basic template] を示しています。テンプレートには、テンプレート・グループである [Windows monitors for %%host%%]、2 つのテンプレート・モニタ (CPU, メモリ)、4 つのユーザ定義変数 (ホスト、ユーザ、パスワード、頻度)、テンプレート・リモート・サーバが含まれています。



テンプレートの計画

SiteScope を効果的に管理するには、テンプレートの計画が重要になります。テンプレート構造内でのグループとモニタの関係とプロパティ、また、それを監視環境全体にどのように適合させるかを考慮する必要があります。

テンプレートを計画する際の考慮事項を次に示します。

オブジェクト	考慮事項
可変プロパティ	テンプレートのデプロイメントに応じて変わるモニタ設定プロパティを決定します。たとえば、監視対象のサーバ・アドレスやリソースは一般的な可変プロパティです。グループとモニタに使用する命名規則も考慮する必要があります。テンプレートをデプロイするたびに可変プロパティの値を入力または選択するには、テンプレート変数を使用します。変数を使用して設定できないモニタ設定プロパティもあります。詳細については、849 ページ「テンプレート変数を使った作業」を参照してください。
サーバ	監視対象サーバにするサーバを決定します。これは、監視対象のオブジェクトが存在する場所です。テンプレート・サーバは、テンプレートのデプロイ時に自動的に複製されます。リモート・サーバ・ツリーの [Microsoft Windows リモート サーバ] または [UNIX リモート サーバ] コンテナで手動で定義することもできます。詳細については、504 ページ「リモート・サーバの概要」を参照してください。
モニタ・タイプ	テンプレートを使用して複製するモニタ・タイプを決定します。これは、複数のシステムを監視するモニタ・タイプである必要があります。たとえば、CPU、ディスク、メモリ、サービスの各モニタ・タイプは、一般的にインフラストラクチャのサーバごとにデプロイされます。テンプレートにサービス・モニタ・タイプの複数のインスタンスを含めて、各サーバで実行されているさまざまなサービスやプロセスを監視することもできます。

オブジェクト	考慮事項
共通のプロパティ	テンプレートのデプロイメント間で同じ設定プロパティについては、値を決定する必要があります。たとえば、 [頻度] 設定は、モニタ・タイプごとに必要な設定です。標準設定は 10 分です。監視対象と全体的なモニタ負荷に応じて、この値を変更し、テンプレートを使用して作成したモニタの実行頻度を高くすることもできます。
グループ構造	モニタの整理に使用するグループ構造を決定します。テンプレート内の組織のグループとモニタには、環境内の監視を整理するための全体的な計画との互換性が必要です。使用するグループ構造は、レポートिंग、警告、監視に影響する可能性があります。
警告	テンプレートの一部として警告をデプロイするかどうかを決定します。テンプレートとモニタにどの警告のタイプとアクションを関連付けるか検討します。テンプレートの一部としてデプロイする警告の [警告ターゲット] プロパティが、テンプレート内に定義されているすべてのモニタに設定されます (1292 ページ「SiteScope 警告ページ」を参照)。たとえば、テンプレート・グループに追加したテンプレート警告は、そのグループに属するすべてのモニタに関する警告を通知します。これが計画している警告に合わない場合、デプロイメント後に警告設定を編集するか、手動で警告を追加する必要があります。

テンプレート変数を使った作業

テンプレート変数を使用しなくてもテンプレートを作成できますが、変数の使用によってテンプレートの能力とユーティリティを十分に活用できるようになります。テンプレート変数は、モニタ設定の置換マークです。テンプレートのデプロイ時にいつでも変更できるモニタ設定を使用する場合に、テンプレート変数を作成します。1 つ以上のテンプレート・モニタのテキスト・ボックスで、変数を参照します。テンプレート内のモニタまたはグループ・オブジェクトで参照された各変数によって、テンプレートのデプロイ時に対応する入力ボックスの表示が促されます。変数名がテキスト入力ボックスのラベルとして使用されます。

テンプレート変数の一般的な使用例を次に示します。

- ▶ サーバまたはホスト・アドレス
- ▶ ディスク・ドライブ指定子
- ▶ ファイルのパス
- ▶ モニタ名の詳細

テンプレート変数を有効にするために必要な手順の概要を次に示します。

1 テンプレートのテンプレート変数を作成します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、900 ページ「[新規変数] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

2 テンプレート内の 1 つ以上の設定オブジェクトで、変数を参照します。

このトピックの詳細については、853 ページ「テンプレート変数の参照」を参照してください。

注：

- ▶ テンプレート・ツリーの [Template Examples 11.0] フォルダで、テンプレートに使用する変数の例を参照できます。詳細については、846 ページ「テンプレート例」を参照してください。
 - ▶ プレフィックスまたはサフィックスの文字が追加されていない変数名 (%%hostname%% など) を使用してリモート・サーバを指定し、同じ変数をモニタのいずれかのフィールドで指定している場合、デプロイ後その値は、デプロイで指定した単なる変数値ではなく、UNIX では **Remote-##**、Windows では **¥¥<変数値>** として表示されます。これを避けるには、変数名をリモート・サーバに使用する場合は、プレフィックスまたはサフィックスの文字を変数名に追加する必要があります。
-

テンプレート変数の使用についてのガイドライン

- ▶ サーバやモニタなど他のテンプレート・オブジェクトを作成する前に、テンプレート変数の計画を立てて作成する必要があります。これにより、テンプレートにオブジェクトを追加するときに、テンプレートのモニタ、グループ、または警告に、変数への参照を入力できます。テンプレート・オブジェクトですでに参照されているテンプレート変数を削除する場合、無効なリンクをクリアするためにテンプレートから参照オブジェクトを削除する必要があります。
- ▶ 一部のモニタ設定は、テンプレート変数を使用して設定できません。リモート・サーバ選択メニューを除き、通常は選択ドロップダウンを使用して選択される設定項目は、テンプレート変数を使用して定義できません。通常はチェック・ボックスまたはラジオ選択を使用して選択される設定項目は、テンプレート変数を使用して設定できません。

- ▶ テンプレート変数は常に、その変数が存在するテンプレート・コンテナの子要素です。変数を参照して、テンプレート内のグループ、モニタ、または警告設定テンプレートの設定を定義するために使用できます。SiteScope のテンプレート変数のタイプとその固有の構文規則の詳細については、851 ページ「変数の構文」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 851 ページ「変数の構文」
- ▶ 853 ページ「テンプレート変数の参照」

変数の構文

SiteScope では、次のテンプレート変数のタイプを使用できます。

- ▶ **ユーザ定義変数。**テンプレートをデプロイする際のテキストベースの値の入力に使用します。ユーザ定義変数には、変数名の両側に「%%」記号を使用する必要があります。
- ▶ **システム変数。**SiteScope で認識されているリモート・サーバのリストとシステム時刻情報の両方にアクセスするために使用する、事前定義された変数のセット。システム変数には、変数名の両側に「\$\$」記号を使用する必要があります。

変数の各タイプには、次のセクションに記載されているように固有の構文規則があります。

ユーザ定義変数の構文

ユーザ定義のテンプレート変数には、英数字とアンダースコアのみ使用できます。変数は、必要な数だけ作成できます。

有効なテンプレート変数構文の例を次に示します。

```
description_text
DiskDrive
TARGET_URL
matchExpression
```

表示される設定パラメータを説明する変数名を選択する必要があります。変数名は、テンプレートのデプロイ時に変数の値の入力ウィンドウにある変数入力ボックスのラベルとして使用されます。

システム変数の構文

SiteScope では、いくつかの事前定義されたテンプレート変数を認識します。これらの値はシステムで認識され、SiteScope のサーバ、NetBIOS などの検出されたサーバ、およびリモート UNIX などのユーザ定義のサーバ接続プロファイルのリストを含みます。事前定義されたシステム変数の構文と詳細を次に示します。

システム変数の構文	説明
\$\$SERVER_LIST\$\$	プラットフォームで認識されるすべてのサーバのいずれかを選択するリストを返します。[サーバ] または [ホスト名] プロパティのみでリモート・サーバの選択を有効にする場合にこの変数を使用します。
\$\$SERVER_NAME\$\$	\$\$SERVER_LIST\$\$ 変数の派生。現在のサーバの名前の前に ¥¥ (バックスラッシュ) を追加して返します。ほかのボックスのサーバを参照する場合に使用します。
\$\$SERVER_NAME_BARE\$\$	\$\$SERVER_LIST\$\$ 変数の派生。現在のサーバの名前の前に ¥¥ (バックスラッシュ) を追加せずに返します。サーバの名前のみを必要とするボックスでサーバを参照する場合 (たとえば、CPU モニタをデプロイする場合または詳細「サーバ Mail のディスク領域」のサーバの名前を参照する場合) に使用します。
\$\$DATE\$\$	SiteScope を実行しているサーバのシステム日付を返します。モニタが作成された日付を名前または詳細に追加する場合に使用します。
\$\$TIME\$\$	SiteScope を実行しているサーバのシステム時刻を返します。モニタが作成された時刻を名前または詳細に追加する場合に使用します。値は、テンプレートが実際にデプロイされた時刻を表します。

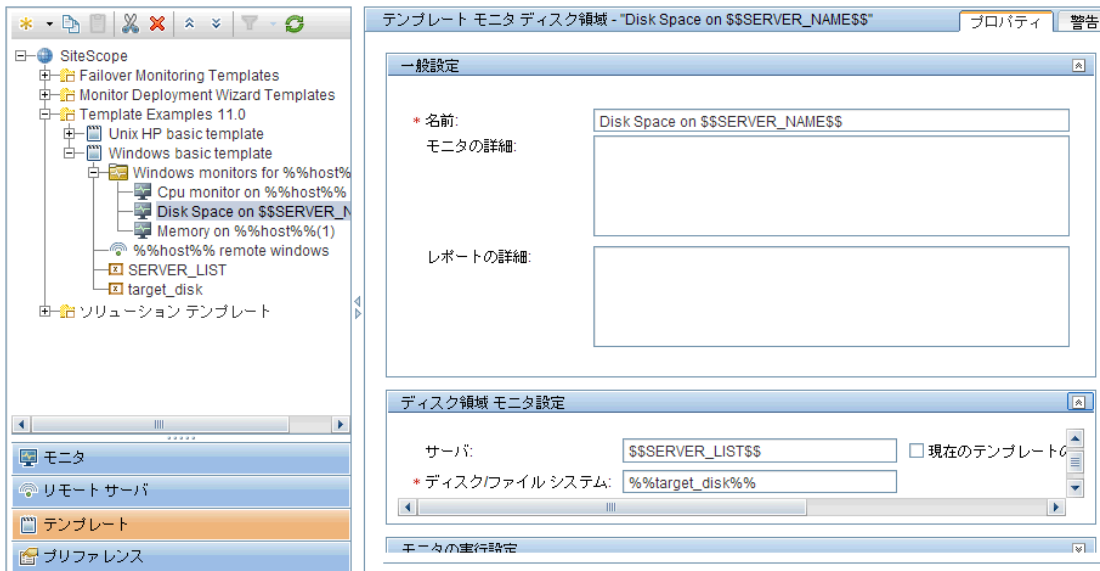
テンプレート変数の参照

テンプレート変数をテンプレートへ追加したら、モニタまたはグループ設定オブジェクトでそのテンプレート変数への参照を作成する必要があります。変数の参照に使用する構文は、変数のタイプにより異なります。

変数タイプ	構文	情報：
ユーザ定義	%%variable_name%%	参照は大文字と小文字を区別し、構文に依存します。 注：ユーザ定義のテンプレート変数は、モニタまたはグループ設定テンプレートで参照する前に作成する必要があります。テンプレート変数としてテンプレートに追加されていないテキスト文字列に %% 記号を使用した場合、一致する変数名が後から追加されたとしても、テンプレート変数への参照は作成されません。
システム	\$\$VARIABLE_NAME\$\$	参照は大文字と小文字を区別し、構文に依存します。 \$\$\$SERVER_LIST\$\$\$ 変数は、テンプレートの変数として明示的に定義する必要があります。この変数の定義後、モニタまたはグループ設定オブジェクトで直接 \$\$\$VARIABLE_NAME\$\$\$ 構文を使用して \$\$\$SERVER_NAME\$\$\$ と \$\$\$SERVER_NAME_BARE\$\$\$ 変数を参照することによって、これらの変数を設定オブジェクトで使用できます。 \$\$\$TIME\$\$\$ と \$\$\$DATE\$\$\$ 変数を直接参照することもできます。 システム変数の詳細については、851 ページ「変数の構文」を参照してください。

例 - ユーザ定義変数とシステム変数の参照

モニタ・テンプレートのユーザ定義変数, `$$$SERVER_LIST$$`, 派生システム変数を参照する方法の例を次に示します。



モニタ・テンプレートのカウンタ選択

SiteScope には、監視対象システム固有の測定値を監視するために設計された多数のアプリケーション・モニタ・タイプが含まれています。これらの参照可能なカウンタ・モニタ・タイプでは、[モニタ設定] 表示枠の [**カウンタの取得**] または [**測定値の取得**] ブラウザ機能を使用します。これらのモニタ・タイプを手動で設定する場合、モニタ・タイプの選択後に次の手順が必要です。

- ▶ 監視対象システムへの接続プロパティを指定し、SiteScope でリモート・システムから測定値カウンタを取得するように要求します。
- ▶ 監視対象のカウンタを選択し、設定に追加します。その後、モニタを SiteScope に追加できます。

テンプレートを使用したモニタのデプロイでは、カウンタ選択に独立した手順を使用しません。テンプレートを使用したこれらのモニタ・タイプのカウンタの選択を有効にするには、別のメカニズムを使用します。SiteScope では、テンプレート・デプロイメントのカウンタ選択手順を自動化するために、テキスト照合または正規表現照合を使用します。テンプレート・モニタの作成時に、カウンタ選択の手順を使用します。

テンプレートのカウンタ選択で最も簡単な方法は、モニタ・テンプレートで特定のカウンタを明示的に選択することです。この方法により、デプロイメント中に照合カウンタの選択に使用する明示的テキスト照合が作成されます。明示的に選択したカウンタを含む参照可能なカウンタ・モニタ・タイプを追加するために必要な手順の詳細については、867 ページ「テンプレート・モニタ・インスタンスの作成」を参照してください。

監視対象システムの特定のカウンタがデプロイメントによって異なる場合、監視するカウンタのタイプまたはカテゴリを表すパターンの照合に、正規表現を使用できます。詳細については、次を参照してください。

本項の内容

- ▶ 856 ページ「正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更」
- ▶ 856 ページ「正規表現を使用したカウンタ選択」

正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更

正規表現を使用するために、モニタの作成時にテンプレート・モニタのカウンタ選択文字列を変更するか、後からモニタを編集できます。正規表現カウンタ照合用にテンプレート・モニタを変更する方法の詳細については、887 ページ「正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更方法」を参照してください。

正規表現を使用したカウンタ選択

多くのアプリケーションには、実行しているシステム、システム・オプションの設定、インストールされているコンポーネントによって異なる多数の測定値カウンタがあります。この場合、モニタ・テンプレートで明示的にカウンタを選択すると、アプリケーションまたはシステムの複数のインスタンスに渡って役に立たない可能性があります。一部のシステムには、パターンが似ていてもノードの名前またはオブジェクト・コンテキストが異なる測定値カウンタがあります。複数の測定値カウンタの選択を自動化するために、モニタ・テンプレートで正規表現を使用できます。

注：この正規表現カウンタ照合機能を使用するには、監視対象のシステムのカウンタの知識が必要です。テンプレートに追加するモニタ・タイプを手動で設定し、監視対象のシステムのタイプで使用可能なカウンタを慎重に確認する必要があります。リモート・システムで多数のカウンタを照合する「欲張りな」正規表現を作成すると、SiteScope のパフォーマンスが低下する可能性があります。

正規表現を使用するテンプレート・モニタを作成する手順は、前のセクションで説明されている手順と非常に似ています。明示的に監視するためのすべてのカウンタを選択する代わりに、選択するすべてのカウンタを代表する 1 つ以上のカウンタを選択します。モニタ・テンプレートでのカウンタ選択は、テキスト文字列で保存されます。モニタのデプロイ時に、選択したカウンタとの一致を検索するために SiteScope で使用するパターンを作成するには、この文字列を編集します。

注：正規表現を使用して測定値カウンタを選択するか、しきい値を照合する場合、SiteScope では、相等性チェックを実行するのではなく、1 つの文字列が別の文字列の一部であるかどうかのみを確認します。このため、デプロイ後にモニタで誤ったカウンタおよびしきい値のセットが定義される可能性があります。たとえば、選択されているモニタのしきい値が x/y である場合、 x/yy も正規表現に一致するので、このしきい値も定義されます。

例 - 正規表現の使用

- ▶ **例 1.** テンプレートで [MIB による SNMP] モニタ・タイプのカウンタを選択する場合に、正規表現を使用する方法の簡単な例を次に示します。

インフラストラクチャの複数の SNMP エージェントから、次の 3 つのカウンタを監視するとします。

```
iso/org/dod/internet/mgmt/mib-2/system/sysDescr
iso/org/dod/internet/mgmt/mib-2/system/sysUpTime
iso/org/dod/internet/mgmt/mib-2/system/sysName
```

テンプレート・モニタで 3 つのカウンタすべてを明示的に選択できます。あるいは、いずれか 1 つを選択して、カウンタ文字列を次のような正規表現に変更できます。

```
/iso¥/org¥/dod¥/internet¥/mgmt¥/mib-2¥/system¥/sys[DUN][a-zT]*¥/
```

この例では、文字列の前後にスラッシュ (/) のペアを追加するようにカウンタ選択文字列が編集されています。この処理は、文字列が正規表現として解釈されるために必要となります。選択文字列には初期状態で複数のスラッシュ (/) が含まれているため、これらの文字のすぐ前にバックスラッシュ (¥) を追加してエスケープする必要があります。[DUN][a-zT]* 文字列には、正規表現構文で一般的に使用される 2 つの文字クラス宣言が含まれています。正規表現構文の詳細については、275 ページ「正規表現の使用」を参照してください。

- ▶ **例 2。**テンプレートで [Unix リソース] モニタ・タイプのカウンタを選択する場合に、正規表現を使用する方法の例を次に示します。

インフラストラクチャの複数の UNIX または Linux サーバで実行されているデーモン・プロセスを監視するとします。実行中のプロセスのリストに次の情報が含まれています。

```
Process¥-bash¥NUMBER RUNNING
Process¥../java/bin/java¥NUMBER RUNNING
Process¥./ns-admin¥NUMBER RUNNING
Process¥./ns-proxy¥NUMBER RUNNING
Process¥./ns-sockd¥NUMBER RUNNING
Process¥/bin/sh¥NUMBER RUNNING
Process¥/etc/init¥NUMBER RUNNING
Process¥/usr/apache/bin/httpd¥NUMBER RUNNING
Process¥/usr/lib/nfs/statd¥NUMBER RUNNING
Process¥/usr/lib/saf/sac¥NUMBER RUNNING
Process¥/usr/lib/saf/ttymon¥NUMBER RUNNING
Process¥/usr/lib/snmp/snmpdx¥NUMBER RUNNING
Process¥/usr/lib/ssh/sshd¥NUMBER RUNNING
...
```

文字「d」で終わるプロセスのみと照合する、正規表現カウンタ選択文字列を作成できます。このパターンを照合する正規表現の例を次に示します。

```
/Process[¥W¥w]{5,18}d[¥W]{1,2}NUMBER RUNNING/
```

例 1 のように、カウンタ選択文字列には、文字列が正規表現であることを示すために文字列の前後にスラッシュ (/) が含まれています。この例の UNIX サーバのプロセス文字列には、バックスラッシュ (¥) とスラッシュ (/) の組み合わせが含まれています。これらの文字は正規表現で特別な意味を持つため、エスケープする必要があります。プロセス文字列には、これらの文字やその他の記号の多くのバリエーションと組み合わせが含まれるため、エスケープが複雑になる場合があります。この例で使った正規表現では、文字

クラス宣言を使用して表現を簡素化しています。[¥W] クラスは句読点の照合に使用されています。この照合では、文字を個別にエスケープする必要がなく、一部のプロセス文字列で使用される ¥, -, :, / の文字に一致します。正規表現構文の詳細については、275 ページ「正規表現の使用」を参照してください。

CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ

テンプレートを作成、設定した後で、SiteScope 階層にデプロイします。テンプレートは、ユーザ・インタフェースから直接デプロイできます (874 ページ「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照)。または外部のカンマ区切り (CSV) ファイルからデプロイできます。CSV ファイルは、テンプレートに定義された変数値のデプロイに使用します。

SiteScope CSV テンプレート・デプロイメントを使用すると、次のような利点があります。

- ▶ 1 つの CSV ファイルですべてのテンプレート変数値の入力と更新がしやすくなるため、一括デプロイメントの実行にはユーザ・インタフェースよりも適しています。
- ▶ ユーザ・インタフェースでデプロイメントごとに変数値を手動で入力しなくても、複数のデプロイメントを 1 回で実行できます。
- ▶ テンプレートはサイレントにデプロイされます (テンプレート・デプロイメント要求はキューに送信され、デプロイメントはバックグラウンドで処理されます)。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。

注：サイレント・デプロイメントの最大キュー長は 2000 です (CSV ファイル内の各行がキュー内の 1 デプロイメントを表します)。

このタスクの実行方法の詳細については、877 ページ「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

テンプレート・デプロイメントの更新

テンプレート変更適用ウィザードを使用して、実際の監視対象のデプロイメントがテンプレートで定義された標準化デプロイメントに従う方法を表示できます。これにより、監視対象環境に発生した変化は監視側のインフラストラクチャで迅速に更新されます。また、監視側のインフラストラクチャでは、テンプレートの標準セットへの準拠が維持されます。

注：テンプレート変更適用ウィザードを実行するには「**グループの編集**」権限が必要で、[許可されているグループ] リストで権限が付与されているグループのみで実行できます。[許可されているグループ] リストに含まれていないデプロイ済みのグループは、ウィザードには表示されません。

テンプレートをデプロイすると、デプロイ済み親グループが自動的にそのテンプレートに関連付けられます。その後にそのテンプレートを変更した場合、テンプレート変更適用ウィザードを使用して、そのテンプレートでデプロイされた SiteScope オブジェクトに自動的にその変更を適用できます。このウィザードでは、各オブジェクトを個別に更新しなくても、テンプレートが更新されるたびに組織全体の関連するデプロイ済みグループを更新できます。デプロイ済みグループは、テンプレートで設定したグループ、モニタ、警告、変数、リモート・サーバで構成されます。テンプレートのデプロイ方法の詳細については、870 ページ「テンプレートのデプロイ」を参照してください。

テンプレート変更適用ウィザードでは、次の方法でデプロイ済みグループを更新できます。

- ▶ テンプレートの変更のみをデプロイ済みグループに適用できます。これにより追加オブジェクトが作成されて既存のオブジェクトの値が更新されますが、テンプレートに存在しないその他のオブジェクトは変更されません。
- ▶ テンプレートの変更をデプロイ済みグループに適用して、SiteScope で上記の変更を実行し、テンプレート・グループに含まれないグループからその他すべての SiteScope オブジェクトを削除できます。

テンプレート変更の適用方法の詳細については、882 ページ「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」を参照してください。

テンプレート変更適用ウィザードのユーザ・インタフェースの詳細については、912 ページ「テンプレート変更適用ウィザード」を参照してください。

注意事項および制限事項

- ▶ SiteScope の 9.50 より前のバージョンで作成したテンプレートによってデプロイされたグループを使用している場合、ルート・グループはソース・テンプレートに関連付けられません。これらのテンプレート・デプロイメントを更新するには、次の方法を使用します。
 - ▶ [グローバル検索と置換] を使用して、テンプレート・グループをソース・テンプレートに手動で関連付けます。
 - ▶ 現在のグループの [一般設定] にある [ソース テンプレート] ボックスで、ソース・テンプレートのパスを入力します。
- ▶ テンプレートとデプロイ済みグループは ID によって内部でリンクされています。そのため、テンプレート名またはデプロイ済みグループのルート・グループが変更された場合でも、変更を適用できます。ただし、ルート・グループの [ソース テンプレート] プロパティを使用してテンプレートにグループを手動で関連付ける場合、デプロイメントでルート・グループ名が変更されたときには変更を適用できません。
- ▶ 変更を適用するには、ルート・グループ階層のすべての変更が成功する必要があります。グループへのいずれかの変更が失敗すると、そのグループへのすべての変更がロール・バックされます。
- ▶ テンプレート変更適用ウィザードは、しきい値の設定で正規表現をサポートしません。
- ▶ [テンプレート変更適用サマリ レポート] の PDF は、Firefox 2.x ではサポートされていません。
- ▶ レポートを PDF にエクスポートするときに、ほとんどの言語で文字を表示できるようにするには、PDF の表示に使用するマシンに Arial Unicode MS フォントがインストールされている必要があります。詳細については、890 ページ「PDF へのエクスポート時の Unicode フォントの有効化方法」を参照してください。
- ▶ SiteScope がインストールされているサーバのロケールに従って、テンプレート変更適用ウィザードにプロパティが表示されます。ブラウザのロケールは、プロパティの表示には影響しません。

- ▶ テンプレート変更適用ウィザードまたは自動デプロイメント更新（939 ページ「XML を使用したテンプレート変更適用」を参照）を使用して既存の監視対象サーバを置換することはできませんが、必要に応じて監視対象サーバ自体のプロパティ値は変更できます。
- ▶ 参照可能なモニタ・カウンタでの変更をデプロイ済みグループに適用するには、モニタ・グループをデプロイするリモート・サーバに接続されている必要があります。
- ▶ SiteScope API を使用して、テンプレートでデプロイされたグループ、モニタ、警告、リモート・サーバを更新することもできます。詳細については、36 ページ「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。

タスク

テンプレートを使用した **SiteScope** 監視ソリューションの設定方法

このタスクでは、ユーザ定義のテンプレートを使用した **SiteScope** 監視ソリューションの作成に関する手順を説明します。このタスクのフローチャートを表示するには、50 ページ「テンプレートを使用した **SiteScope** 監視ソリューションの設定方法 - フローチャート」を参照してください。事前定義されたソリューション・テンプレートの使用方法の詳細については、969 ページ「**SiteScope** ソリューション・テンプレート」を参照してください。

ヒント:

- ▶ 表示されている順番でテンプレート・オブジェクトを作成することをお勧めします。不要なテンプレート・オブジェクトの手順はスキップできます。
- ▶ テンプレートの作業を開始しやすいように、**SiteScope** には Windows と UNIX の環境を監視するためのテンプレート例が付属されています。詳細については、846 ページ「テンプレート例」を参照してください。
- ▶ 標準モードでオブジェクトを設定するときにドロップダウン・リストが表示される一部のフィールドは、テンプレート・モードでのオブジェクト設定時にはテキスト・ボックスとして表示されます。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 864 ページ「前提条件」
- ▶ 864 ページ「テンプレート・コンテナの作成」
- ▶ 864 ページ「テンプレートの作成」
- ▶ 865 ページ「テンプレート変数の作成」
- ▶ 865 ページ「テンプレート・リモート・サーバの作成」
- ▶ 867 ページ「テンプレート・グループの作成」
- ▶ 867 ページ「テンプレート・モニタ・インスタンスの作成」

- ▶ 870 ページ「モニタとグループ警告の設定」
- ▶ 870 ページ「テンプレートのデプロイ」
- ▶ 871 ページ「結果」
- ▶ 871 ページ「モニタとグループ・レポートの設定（モニタ・ビューを使用）」
- ▶ 871 ページ「監視ソリューションへの変更の適用」

1 前提条件

- ▶ SiteScope に監視を設定する前に、インストール後の管理タスクの実行が終了していることを確認します。タスクの詳細については、43 ページ「SiteScope の設定および管理方法」を参照してください。
- ▶ テンプレートをデプロイするには、その内容に関わらず、デプロイ先グループの権限を編集する必要があります。テンプレート・オブジェクト（モニタ、リモート、警告）の権限は編集する必要はありません。

2 テンプレート・コンテナの作成

監視ソリューションを管理できる、テンプレート・コンテナを作成します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、897 ページ「[新規テンプレートコンテナ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

3 テンプレートの作成

テンプレートをテンプレート・コンテナに追加します。このテンプレートが監視ソリューションのコンテナとなり、監視ソリューションのグループ、モニタ、リモート・サーバ、変数、警告を作成できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、898 ページ「[新規テンプレート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注：既存のグループとモニタ階層を SiteScope からテンプレートにコピーし、テンプレートとして使用するためにその要素を編集することもできます。タスクの詳細については、872 ページ「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」を参照してください。

4 テンプレート変数の作成

テンプレートには、テンプレートをデプロイするたびにオブジェクトに異なる名前を指定できる、テンプレート変数を作成できます。グループ、モニタ、サーバ、警告を作成するときに変数が参照されるため、テンプレートでは最初に変数のオブジェクトを作成する必要があります。

ユーザ・インタフェースの詳細については、900 ページ「[新規変数] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

5 テンプレート・リモート・サーバの作成

テンプレートで、監視対象のオブジェクトが含まれるリモート Windows サーバまたはリモート UNIX サーバを定義できます。テンプレート・モニタは、テンプレートのデプロイ時にテンプレート・サーバで定義されたサーバ、またはリモート・サーバで手動で定義されたサーバで実行できます。テンプレートのデプロイ時に、[Microsoft Windows リモート サーバ]または[UNIX リモート サーバ] のリモート・サーバ・ツリーにテンプレート・サーバが追加されます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、903 ページ「新規テンプレート・リモート・サーバ・ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注: テンプレートには 1 つのリモート・サーバのみ追加できます。9.50 より前のバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートには、これは適用されません。

例：

Windows テンプレート・リモート・サーバが「%%host%% remote windows」の名前で作成されています。

一般設定

名前:

%%host%% remote windows

詳細:

メイン設定

* サーバ:

%%host%%

資格情報:

☒ ユーザ名およびパスワードを使用

ユーザ名

%%user%%

パスワード

.....

☐ 事前定義された資格情報を選択

資格情報プロファイル

資格情報の追加

☐ トレース

* 接続方式:

NetBIOS

リモート サーバのエンコード:

Cp1252 (windows-1252)

6 テンプレート・グループの作成

テンプレートで、モニタおよび関連付けられた警告のデプロイメントを組織で管理して効率的にする場合にテンプレート・グループを作成します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、905 ページ「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注：

- ▶ 標準設定では、モニタをテンプレート・グループに作成する必要があります。[テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する] を選択することで、[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [テンプレート設定] でこの設定を上書きできます。
 - ▶ テンプレートには、その直下に 1 つのテンプレート・グループ（親グループ）のみを含めることができます。9.50 より前のバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートには、これは適用されません。
-

7 テンプレート・モニタ・インスタンスの作成

- a テンプレート・グループに追加するモニタ・インスタンスを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、908 ページ「新規テンプレート・モニタ・ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b モニタのプロパティの値を入力します。テンプレート変数を使用している場合、値が変数と置き換えられるすべてのフィールドの変数の構文を入力します。これには `$$SERVER_LIST$$` システム変数の使用が含まれます。概念の詳細については、852 ページ「システム変数の構文」を参照してください。

例：

この例では、テンプレート・モニタ（SiteScope CPU モニタ）をテンプレート・リモート・サーバ「%%host%% remote windows」で実行するように設定されています。

The screenshot displays two configuration windows from the SiteScope management console. The top window, titled 'テンプレート モニタ CPU - "Cpu monitor on %%host%%"', has tabs for 'プロパティ' (Properties) and '警告' (Warnings). It contains two sections: '一般設定' (General Settings) and 'CPU モニタ設定' (CPU Monitor Settings). In the 'CPU モニタ設定' section, the 'サーバ:' (Server) field is set to '%%host%% remote windows'. A red arrow points from this field to the '名前:' (Name) field in the bottom window. The bottom window, titled 'リモート サーバの編集' (Edit Remote Server), has a '一般設定' (General Settings) tab. The '名前:' field is also set to '%%host%% remote windows', and a red arrow points to it from the top window's 'サーバ:' field. The '詳細:' (Details) field is empty.

注：

- ▶ テンプレート・モニタは、テンプレートのデプロイ時にテンプレート・サーバで定義されたサーバ、またはリモート・サーバ・ツリーのリモート・サーバ・コンテナで手動で定義されたサーバで実行できます。どちらの場合でも、[サーバ] ボックスの値は、テンプレート変数に値が代入された後のテンプレートのデプロイ時の、実際のサーバのホスト名と一致する必要があります。サーバ名が実際のサーバのホスト名と一致しない場合、監視は失敗します。テンプレート・リモート・サーバ名（作成済みの場合）を自動的に取得するには、[モニタ設定] フィールドの **[現在のテンプレートの下の、既に設定済みのテンプレート リモートを使用します]** チェック・ボックスを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、908 ページ「新規テンプレート・モニタ・ダイアログ・ボックス」を参照してください。
 - ▶ モニタの [サーバ] フィールドとリモート・サーバの [名前] と [サーバ] フィールドには、「¥¥」を使用しないでください。
 - ▶ [プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [テンプレート設定] で [テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する] を選択した場合、テンプレート・エンティティに直接モニタ・インスタンスを追加できます。
-

- c 参照可能なカウンタを含むモニタの場合、カウンタを選択して監視対象システム固有の測定値を監視します。
 - ▶ **[カウンタの取得]** ボタンをクリックして、サーバを選択するか、監視対象のサービスまたはアプリケーションを実行しているサーバの接続情報を入力します。
 - ▶ **[カウンタの取得]** ボタンを再度クリックして使用可能なカウンタを取得します。カウンタの選択ダイアログ・ボックスが更新されます。
 - ▶ 監視する測定値またはカウンタを選択します。監視対象システムの特定のカウンタがデプロイメントによって異なる場合、監視するカウンタのタイプまたはカテゴリを表すパターンを照合する正規表現を使用できます。タスクの詳細については、887 ページ「正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更方法」を参照してください。

d [プロパティ] タブで次のようなその他のモニタ設定を設定します。

- ▶ 報告される各モニタ・インスタンスの状態を決定するロジック条件を設定して、モニタのしきい値を手動で設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、384 ページ「しきい値設定」を参照してください。

注：テンプレートのデプロイ後、ベースラインを使用して 1 つ以上のモニタのしきい値を設定することもできます。タスクの詳細については、347 ページ「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」を参照してください。

- ▶ グループと主要なモニタの依存関係を作成し、過剰な警告を制御できるようにします。概念の詳細については、325 ページ「グループの依存関係の監視」を参照してください。

一般的なユーザ設定の完全なリストについては、375 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。

8 モニタとグループ警告の設定

イベントが発生したか、インフラストラクチャの要素やシステムのステータスに変化したときに通知を送信する警告を作成します。

タスクの詳細については、1276 ページ「警告の設定方法」を参照してください。

9 テンプレートのデプロイ

SiteScope 監視テンプレートの作成後、そのテンプレートをグループにデプロイします。

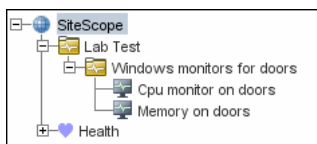
- ▶ ユーザ・インタフェースから直接テンプレートをデプロイできます。タスクの詳細については、874 ページ「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照してください。
- ▶ あるいは、SiteScope ユーザ・インタフェースの外部の CSV ファイルを使用してテンプレートをデプロイできます。概念の詳細については、859 ページ「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ」を参照してください。タスクの詳細については、877 ページ「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

10 結果

SiteScope によって、モニタ・ツリーの指定したコンテナにグループ、モニタ、警告が追加されます。

例：

テンプレートの例では、**Windows basic template** が、**Lab Test** という名前のグループ・コンテナにデプロイされています。テンプレートには **CPU モニタ** と **メモリ・モニタ** が含まれ、**doors** という名前のサーバでリソースの使用率を監視するためにデプロイされています。



11 モニタとグループ・レポートの設定（モニタ・ビューを使用）

時間の経過に伴う監視対象のサーバおよびアプリケーションのパフォーマンスに関する情報を表示するレポートを作成します。

タスクの詳細については、1338 ページ「レポートの作成方法」を参照してください。

12 監視ソリューションへの変更の適用

デプロイ済みテンプレートに対して、変更（モニタの追加や削除、モニタのプロパティの変更など）を加えることができます。この変更を実行するには、テンプレートを編集し、テンプレート変更適用ウィザードを使用して、テンプレートでデプロイされたすべての関連オブジェクトへの変更を適用します。

タスクの詳細については、882 ページ「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」を参照してください。

既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法

このタスクでは、既存のグループ、モニタ、またはリモート・サーバを SiteScope からテンプレートにコピーして、テンプレートとして使用するために要素を編集する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 872 ページ「前提条件」
- ▶ 873 ページ「テンプレートへの設定のコピー」
- ▶ 873 ページ「テンプレート変数の編集」
- ▶ 873 ページ「結果」

1 前提条件

既存の設定を SiteScope からテンプレートにコピーするには、エンティティをコピーするテンプレート・コンテナおよびテンプレートがテンプレート・ツリーに存在している必要があります。

注：既存のモニタまたはリモート・サーバをテンプレートにコピーする場合、テンプレート・グループもテンプレートに存在している必要があります。

テンプレート・コンテナ、テンプレート、およびテンプレート・グループの作成の詳細については、863 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」を参照してください。

2 テンプレートへの設定のコピー

コピーするグループ、モニタ、またはリモート・サーバを右クリックし、**[テンプレートにコピー]** を選択します。[テンプレート ツリーにコピー] ダイアログ・ボックスで、コピーした設定を追加するテンプレートまたはテンプレート・グループを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、414 ページ「[テンプレート ツリーにコピー] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

3 テンプレート変数の編集

新しいテンプレートでテンプレート変数を使用する場合、該当する設定フィールドの値を必要な変数の構文に置き換えて、コピーした各オブジェクトを編集します。

概念の詳細については、853 ページ「テンプレート変数の参照」を参照してください。

4 結果

SiteScope によって、テンプレート・ツリーの指定したテンプレートまたはテンプレート・グループにグループ、モニタ、リモート・サーバが追加されます。

ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、ユーザ・インタフェースを使用して SiteScope テンプレートをデプロイする手順について説明します。

ヒント:

- ▶ 一括デプロイメントの場合、CSV ファイルを使用してテンプレートをデプロイすることもできます。概念の詳細については、859 ページ「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ」を参照してください。
- ▶ また、SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用してテンプレートをデプロイおよび更新することもできます。トピックの詳細については、932 ページ「自動テンプレート・デプロイメントの概要」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 874 ページ「前提条件」
- ▶ 875 ページ「テンプレートのデプロイ」
- ▶ 876 ページ「結果」

1 前提条件

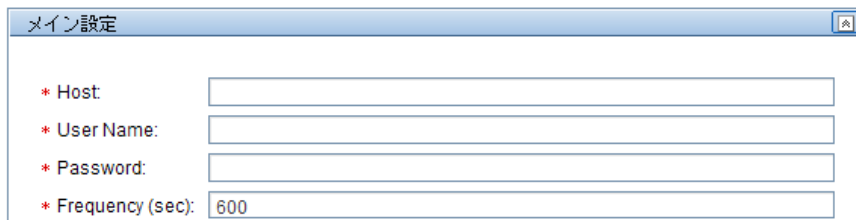
- ▶ 新しい SiteScope 監視テンプレートを作成するか、既存のユーザ定義テンプレートまたはソリューション・テンプレートをテンプレート・ツリーから選択します。タスクの詳細については、863 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」を参照してください。
- ▶ 複数のサーバにモニタを同時にデプロイする場合、テンプレート・リモート・サーバの **Host** 値として変数を使用する必要があります。デプロイメントのホスト変数に、複数のサーバ名をカンマ (",") 区切りで指定します。

2 テンプレートのデプロイ

- a テンプレートをグループにデプロイします。
- ▶ モニタ・ツリーで、テンプレートをデプロイするグループを右クリックし、**[テンプレートのデプロイ]** を選択します。[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスで、デプロイするテンプレートを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、413 ページ「[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
 - ▶ テンプレート・ツリーで、デプロイするテンプレートを右クリックし、**[テンプレートのデプロイ]** を選択します。[グループの選択] ダイアログ・ボックスで、テンプレートをデプロイするグループを選択します。または、**[新規グループ]** ボタンをクリックし、テンプレートをデプロイできる新しいグループを作成することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、924 ページ「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b 表示される入力ボックスに必要な変数値を入力します。表示される入力ボックスは、テンプレート・オブジェクトで使用するテンプレート変数に対応します。ユーザ・インタフェースの詳細については、925 ページ「[デプロイメント値] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

例：

テンプレート・ツリーの **[Template Examples 11.0]** フォルダから **[Windows basic template]** を SiteScope グループにデプロイする場合、次の入力ボックスが **[デプロイメント値]** 入力ウィンドウに表示されます。



メイン設定	
* Host	
* User Name:	
* Password:	
* Frequency (sec):	600

3 結果

テンプレート・デプロイメントのサマリが表示されます。デプロイメントが成功すると、テンプレート・オブジェクトがモニタ・ツリーに追加されます。

テンプレート・デプロイメントが失敗すると、失敗の理由を示すメッセージが表示されます。ディスク領域モニタを例に挙げると、テンプレートで指定したディスク・ドライブがデプロイするサーバに存在していない場合、テンプレート・モニタのデプロイが失敗する可能性があります。

CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、CSV ファイルを使用して SiteScope テンプレートをデプロイする手順について説明します。

ヒント:

- ▶ あるいは、ユーザ・インタフェースを使用してテンプレートをデプロイできます。詳細については、874 ページ「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照してください。
 - ▶ また、SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用してテンプレートをデプロイおよび更新することもできます。このトピックの詳細については、932 ページ「自動テンプレート・デプロイメントの概要」を参照してください。
-

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 877 ページ「前提条件」
- ▶ 878 ページ「テンプレート変数の表示順序の確認」
- ▶ 879 ページ「CSV ファイルの作成」
- ▶ 881 ページ「テンプレートのデプロイ」
- ▶ 881 ページ「結果」

1 前提条件

- ▶ 新しい SiteScope 監視テンプレートを作成するか、既存のユーザ定義テンプレートまたはソリューション・テンプレートをテンプレート・ツリーから選択します。タスクの詳細については、863 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」を参照してください。
- ▶ CSV ファイルを使用してソリューション・テンプレートをデプロイするには、最初にテンプレート・コンテナにソリューション・テンプレートのコピーを作成し、コピーしたテンプレートに次の手順の必要な変更を加えます。

- ▶ テンプレート・グループ名は、各デプロイメント・インスタンスで一意の値にする必要があります。値を一意にするには、グループ名に変数を使用し、各デプロイメントでそれぞれ異なる変数の値を入力します。[**Template Examples 11.0**] の `%%host%%` 変数を含む [**Windows basic template**] のグループ名で、この例を確認できます。

2 テンプレート変数の表示順序の確認

CSV ファイルを作成する前に、各変数のテンプレート変数の表示順序を確認します。CSV ファイルの列の順序は 0 から始まります。そのため、テンプレート変数の表示順序も 1 ではなく 0 から開始することを確認します。この確認により、デプロイメントで CSV ファイルの正しい列が変数に確実にマップされます。

テンプレート変数の表示順序を確認するには、次の手順で行います。

- a** [**テンプレート**] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、CSV ファイルを使用してデプロイするテンプレートを含むテンプレート・コンテナを展開し、テンプレートを選択します。
- b** テンプレートのデプロイ時に最初に表示するテンプレート変数を選択し、[**テンプレートでの表示順序**] の値が 0 であることを確認します。
- c** テンプレートの各変数でこの手順を繰り返し、正しい表示番号（毎回 1 ずつ増加）が使用されていることを確認します。

注： 各変数に表示順序を定義していない場合は、デプロイメントが失敗します。

3 CSV ファイルの作成

新しいテキスト・ファイルを開き、次の手順を行います。

- a デプロイメントに必要な各変数の値をカンマ (,) 区切りで入力します。テンプレートに定義したすべての変数を十分理解している必要があります。**[テンプレートでの表示順序]** フィールドに、表示される順序の値を入力します (表示順序 0 の変数から開始)。
- b 各デプロイメント・インスタンスの別の行に変数の値を追加します。

注:

- ▶ 空白はフィールドの一部とみなされるため、無視されません。
- ▶ 必須でない変数または標準設定の変数の値は、CSV ファイルに入力する必要はありません。その代わり、変数の値を示すカンマを前のカンマに続けて入力 (,,) する必要があります。
- ▶ 資格情報を使用する場合、パスワードは CSV ファイルで暗号化できないため、資格情報名の変数のみ使用することをお勧めします。

-
- c ファイルを CSV 形式で保存します。テンプレートのデプロイ後、CSV ファイルの各行にグループが作成されます。

例：

CSV ファイルを使用して **Windows basic template** をデプロイするため、変数の表示順序がホスト (0)，ユーザ (1)，パスワード (2)，頻度の変数 (3) に設定されていることを確認します。**host** テンプレート変数設定を次に示します。

次に、各デプロイメント・インスタンスに対して、CSV ファイルを作成してホスト，ユーザ，パスワード，頻度の値をカンマ区切りで入力します（これがテンプレートで使用する変数の表示順序です）。

頻度の変数はテンプレートで標準設定値が設定されているため、この変数が必須の場合でも CSV ファイルに値を入力する必要はありません（標準設定値の 600 秒を使用する場合）。

4 テンプレートのデプロイ

- a テンプレートの CSV ファイルを作成したら、そのテンプレートをグループにデプロイします。
 - ▶ モニタ・ツリーで、テンプレートをデプロイするグループを右クリックし、**[CSV を使用してテンプレートをデプロイ]** を選択します。[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスで、デプロイするテンプレートを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、413 ページ「[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
 - ▶ テンプレート・ツリーで、デプロイするテンプレートを右クリックし、**[CSV を使用してテンプレートをデプロイ]** を選択します。[グループの選択] ダイアログ・ボックスで、テンプレートをデプロイするグループを選択します。または、**[新規グループ]** ボタンをクリックし、テンプレートをデプロイできる新しいグループを作成することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、924 ページ「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b **[CSV ファイルの選択]** ダイアログ・ボックスで、テンプレート・デプロイメントに使用する CSV ファイルを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、927 ページ「[CSV ファイルの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

5 結果

デプロイメントが成功すると、テンプレート・オブジェクトがモニタ・ツリーに追加されます。モニタ・ツリーは定期的に更新されます。ツリー・ツールバーの**[更新]**をクリックしてツリーを更新し、デプロイメントを確認します。デプロイメントのサマリの **silent_deployment.log** ファイルも確認できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1242 ページ「[ログ ファイル] ページ」を参照してください。

注：入力したパスワードの値はログ・ファイルには表示されません。実際のパスワードの代わりに、一連のアスタリスク (****) が表示されます。

関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法

このタスクでは、テンプレート変更適用ウィザードを使用してテンプレートの変更を関連グループ・デプロイメントに適用する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 882 ページ「ウィザードの実行」
- ▶ 883 ページ「構造および内容の相違の表示」
- ▶ 885 ページ「新規変数の値の追加」
- ▶ 886 ページ「テンプレート変更適用の結果の確認」

1 ウィザードの実行

ウィザードを実行するには、テンプレート・ツリーでテンプレートを右クリックして、**[変更の適用]**を選択します。最初のページで、更新する関連テンプレート・グループを選択します。さらに次のオプションも選択できます。

- ▶ **[更新で削除できます]**を選択すると、ソース・テンプレートに含まれない SiteScope オブジェクトがデプロイ済みグループから削除されます。
- ▶ **[リモート サーバでテンプレートの変更を検証]**を選択すると、テンプレートのデプロイ先のリモート・サーバと比較し、選択したテンプレートのモニタ設定変更が正しいかが検証されます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、912 ページ「テンプレート変更適用ウィザード」を参照してください。

例：

デプロイ済みグループの選択

テンプレート変更を適用するデプロイ済みテンプレートと関連するグループを選択します。

☐ 更新で削除できます

(ソース テンプレートに含まれないすべての SiteScope オブジェクトをデプロイ済みテンプレートから削除できます)

☐ リモート サーバでテンプレートの変更を検証

2 構造および内容の相違の表示

テンプレートとデプロイ済みグループの構造上の相違を表示します。[整合性の確認] のユーザ・インタフェースの詳細については、914 ページ「[整合性の確認] ページ」を参照してください。

テンプレート・オブジェクトの内容の相違を表示するには、[相違の表示] リンクをクリックして [コンテンツの変更] ダイアログ・ボックスを開きます。このリンクは、内容の相違があるテンプレート・オブジェクトにのみ表示されます。[コンテンツの変更] のユーザ・インタフェースの詳細については、916 ページ「[コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

例 - [整合性の確認] ページ

整合性の確認

テンプレートとデプロイ済みグループ間の構造上の相違を表示します。
テンプレートとデプロイ済みグループオブジェクト プロパティ間の相違がある場合は、
[相違の表示] リンクをクリックして、これらの相違を表示できます。

変更を適用するデプロイ済みグループの総数: 2
2 のデプロイ済みグループに構造およびコンテンツの相違があります

グループ名	コンテンツの差異	
 SiteScope\Lab Te...		☒
 Memory on 16....		
 Cpu monitor o...		
 Unix リモート ...		
 16.148.24.2...	相違の表示	
 SiteScope\Lab Te...		☒



例 - [コンテンツの変更] ページ

コンテンツの変更

オブジェクトのプロパティに行われる内容の変更の詳細をレビューします。
タイプ: モニタ
名前: Cpu monitor on

プロパティ名	現在の値	置換する値	アクション
すべて更新	600	60	Modified
エラー条件	utilizationPercentage == ...	utilizationPercentage == 90e...	Modified
エラーの検証		on	Added

3 新規変数の値の追加

テンプレートにある新規変数に値を追加します。必須の変数値は、赤のアスタリスク (*) で示されます。既存の変数の値を編集することもできます。**[適用]** をクリックするとウィザードが完了し、テンプレートの更新が適用されます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、917 ページ「[変数の変更] ページ」を参照してください。

例 - [変数の変更] ページ

変数の変更

デプロイされたグループの新しい変数に値を追加するか既存の変数値を編集する、またはその両方を行ってください。

変更を適用するデプロイ済みグループの総数: 4

4 のデプロイ済みグループに既存の変数値があるか変数がありません

既存の値を持つ変数を持つ、あるいは変数のないデプロイ済みグループは以下の通りです。

変数値を持つグループは展開でき、必要に応じて変数値を変更できます。

変数名	変数の値	
SiteScopeLab Test 4...		☒
user*		
host		
frequency	60	
test	Cp1252	
password		
SiteScopeLab Test 1...		☒
user*		
host		
frequency	600	
test	Cp1252	
password		
SiteScopeLab Test...		☒

4 テンプレート変更適用の結果の確認

テンプレート変更適用の結果を確認し、必要な場合は、更新に失敗したデブ
ロイ済みグループに変更を再適用します。[結果サマリの適用] のユーザ・
インタフェースの詳細については、918 ページ「[結果サマリの適用] ページ」
を参照してください。

任意で、テンプレート変更適用の結果をサマリ・レポート (PDF ファイル)
にエクスポートできます。サマリ・レポートの詳細については、920 ページ
「テンプレート変更適用サマリ・レポート」を参照してください。

例 - [結果サマリの適用] ページ

結果サマリの適用

テンプレート変更による影響を受けるデブロイ済みグループのサマリを表示します。
PDF レポート アイコンをクリックして、デブロイ済みグループに行われた変更を確認してくだ
さい。

1 個のデブロイ済みグループが正常に更新されました。

1 個のデブロイ済みグループが更新されませんでした。

変更されなかったルート グループ:

グループ名	理由
SiteScopeLab monitors\Windows m...	
Memory on cinderella(1)	Parameter error occurred propertyThe fo...
Cpu monitor on cinderella	Parameter error occurred propertyThe fo...
Microsoft Windows リモート サーバ	Parameter error occurred propertyThe fo...
cinderella remote windows	更新できませんでした

正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更方法

このタスクでは、測定値カウンタの選択に正規表現を使用するためにテンプレート・モニタを変更する手順について説明します。

注：このタスクは、参照可能なカウンタを使用するモニタのみに適用されます。

- 1 テンプレート・ツリーで、変更するモニタ・テンプレートをクリックして、テンプレート・モニタの [プロパティ] ビューを開きます。
- 2 [モニタ設定] 表示枠を開き、[測定値] セクションまたは [カウンタ] セクション（モニタ・タイプによって異なる）で、モニタに設定するカウンタのパターンを表すカウンタ選択文字列を選択します。
- 3 カウンタ選択文字列の先頭と末尾にスラッシュ（"/"）文字を追加して、正規表現に変更します。必要に応じて、ほかのパターン照合構文を使用するように文字列を変更します。正規表現構文の詳細については、275 ページ「正規表現の使用」を参照してください。

注：テンプレート・モニタの設定時に、入力した正規表現を使用して照合可能なカウンタを明示的に選択している場合は、[カウンタの削除] をクリックして余分なカウンタ文字列を削除できます。



テンプレートのエクスポートとインポート方法

このタスクでは、テンプレートをエクスポートおよびインポートする手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 888 ページ「テンプレートのエクスポート」
- ▶ 889 ページ「テンプレートのインポート」
- ▶ 889 ページ「結果」

注：

- ▶ テンプレートをインポートする場合、同じテンプレート・コンテナに同じ名前のテンプレートがすでにある場合は、一意の名前に関する違反によりインポートが失敗する可能性があります。これを回避するには、既存のテンプレート・コンテナの名前を変更します。
 - ▶ インポートが失敗するか、または [ソリューションテンプレート] ツリーのソリューション・テンプレートを表示できない場合、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%export フォルダから <SiteScope のルート・ディレクトリ>%persistency%import フォルダにコピーするとこれらのテンプレートを回復できます。%export フォルダにテンプレートのサンプルおよびフェールオーバー監視テンプレートも含まれている場合、前述の一意の名前に関する違反を避けるためにテンプレート・コンテナの名前を変更する必要があります。
-

1 テンプレートのエクスポート

テンプレート・ツリーで、エクスポートするテンプレートを含むテンプレート・コンテナ・オブジェクトを右クリックして、[エクスポート] をクリックします。テンプレート・ファイルを保存する名前と場所を入力し、エクスポートするテンプレートを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、910 ページ「テンプレートのエクスポート・ダイアログ・ボックス」を参照してください。

2 テンプレートのインポート

テンプレートをエクスポートしたら、エクスポート・ファイルを別の SiteScope サーバにコピーし、使用するテンプレートを含むテンプレート・コンテナ・オブジェクトをインポートできます。テンプレート・ツリーで、テンプレートのインポート先のテンプレート・コンテナを右クリックして、**[インポート]** をクリックします。インポートするファイルの名前と場所を入力します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、911 ページ「テンプレートのインポート・ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注： SiteScope の以前のバージョンの廃止されたモニタが含まれる SiteScope にテンプレートをインポートすると、廃止されたモニタはテンプレート・ツリーに表示されません。

3 結果

ファイルに含まれているテンプレートがテンプレート・コンテナに追加されます。インポートしたテンプレートは、直接使用するか、必要に応じて変更できます。



PDF へのエクスポート時の Unicode フォントの有効化方法

このタスクでは、PDF にレポートをエクスポートするときに現在のロケールとは異なる文字を表示する Unicode フォントを設定する方法について説明します。これにより、複数の言語の文字で構成されるテキストを表示できます。

注： Microsoft Office がインストールされているマシンを使用している場合、Arial Unicode MS フォントはすでにインストールされているため、このフォントをダウンロードまたは設定する必要はありません。

フォント・ライブラリを使用して Arial Unicode MS フォントを設定するには、次の手順を実行します。

1 SiteScope サーバのフォント・ライブラリに移動します。例：

環境	フォント・ライブラリ
AIX	/usr/lpp/Acrobat3/Fonts
HPUX	/usr/contrib/xf86/xterm/fonts /usr/lib/X11/fonts/ms.st/typefaces
Linux	/usr/share/fonts/truetype /usr/share/fonts/local
UNIX	/usr/openwin/lib/X11/fonts/TrueType /usr/X11/lib/X11/fonts/TrueType /usr/X11/lib/X11/fonts/Type1
Windows	C:\Windows\Fonts C:\WINNT\Fonts

2 選択したフォント・ライブラリに Arial Unicode MS フォントをダウンロードします。フォントは、次の Web サイトから入手できます。

<http://www.microsoft.com/typography/fonts/family.aspx?FID=24>（英語サイト）。

3 HP SiteScope を再起動します。

参照情報

予約済みテンプレート・グループ・タイプ

次の表は、SiteScope アプリケーションで使用するテンプレート・タイプを示します。これらのディレクトリにあるテンプレートは予約されており、警告では使用されません。警告で使用するテンプレートのリストについては、1282 ページ「SiteScope 警告テンプレートのディレクトリ」を参照してください。

注：製品のドキュメントに記載された特定の手順に従う場合や、HP ソフトウェア・サポートから指示された場合を除き、これらのディレクトリ内のテンプレートを変更することはお勧めしません。

テンプレート・グループ	説明	場所
MIB	SNMP トラップで使用するテキスト	< SiteScope のルート・ディレクトリ >¥templates.mib
オペレーティング・システム	リモート UNIX サーバの監視時に実行するシェル・コマンド	< SiteScope のルート・ディレクトリ >¥templates.os
パフォーマンス・モニタ	NT パフォーマンスの監視に使用	< SiteScope のルート・ディレクトリ >¥templates.perfmon
サウンド	サウンド警告に使用するオーディオ・ファイル	< SiteScope のルート・ディレクトリ >¥templates.sound
ビュー	クエリおよび XML/XSL テンプレート	< SiteScope のルート・ディレクトリ >¥templates.view

SiteScope テンプレートのユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ SiteScope [テンプレート] ページ (893 ページ)
- ▶ テンプレート・ツリー - [プロパティ] タブ (894 ページ)
- ▶ テンプレート・ツリー - [警告] タブ (895 ページ)
- ▶ [新規テンプレート コンテナ] ダイアログ・ボックス (897 ページ)
- ▶ [新規テンプレート] ダイアログ・ボックス (898 ページ)
- ▶ [新規変数] ダイアログ・ボックス (900 ページ)
- ▶ 新規テンプレート・リモート・サーバ・ダイアログ・ボックス (903 ページ)
- ▶ [新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス (905 ページ)
- ▶ 新規テンプレート・モニタ・ダイアログ・ボックス (908 ページ)
- ▶ [新規警告] ダイアログ・ボックス (909 ページ)
- ▶ テンプレートのエクスポート・ダイアログ・ボックス (910 ページ)
- ▶ テンプレートのインポート・ダイアログ・ボックス (911 ページ)
- ▶ テンプレート変更適用ウィザード (912 ページ)
- ▶ [グループの選択] ダイアログ・ボックス (924 ページ)
- ▶ [デプロイメント値] ダイアログ・ボックス (925 ページ)
- ▶ [CSV ファイルの選択] ダイアログ・ボックス (927 ページ)
- ▶ 自動デプロイメント XML の生成 (929 ページ)

SiteScope [テンプレート] ページ

このページには、選択したテンプレート・コンテナの名前と詳細が表示されます。このページでは、テンプレート・コンテナを追加、または既存のテンプレート・コンテナのプロパティを編集できます（ソリューション・テンプレート以外）。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを開きます。テンプレート・ツリーで、[SiteScope] ノードを選択します。
重要な情報	テンプレートの操作時に SiteScope API を使用することもできます。詳細については、36 ページ「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。
関連タスク	863 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	83 ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
	新規テンプレート・コンテナ。 新しいテンプレート・コンテナを作成できる [新規テンプレート コンテナ] ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、897 ページ「[新規テンプレート コンテナ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	テンプレート・コンテナの編集。 選択したテンプレート・コンテナを編集できます。
	テンプレートの削除。 テンプレート・コンテナを削除します。
<SiteScope テンプレート・テーブル>	SiteScope に含まれている定義済みテンプレート（テンプレート例、モニタ デプロイメント ウィザードのテンプレート、ソリューション・テンプレート）およびユーザ定義のテンプレート・コンテナが表示されます。テンプレート・コンテナをダブルクリックすると、選択したテンプレートのテンプレート・コンテナ・ページが開きます。

UI 要素	説明
[名前]	テンプレート・コンテナに割り当てられている名前文字列。
[詳細]	テンプレート・コンテナを作成または編集したときに割り当てたテンプレート・コンテナの詳細。



テンプレート・ツリー - [プロパティ] タブ

このタブには、選択したテンプレートの名前と詳細が表示されます。このページでは、テンプレートのプロパティを編集します。テンプレート・ツリーでテンプレート・オブジェクト（テンプレート・グループ、テンプレート・モニタ、テンプレート変数）を選択して、特定のオブジェクトのプロパティを表示します。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレート・コンテナを展開して、テンプレートを 選択します。標準設定で [プロパティ] タブが表示されます。
関連タスク	863 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	83 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[名前]	テンプレートの名前。
[詳細]	テンプレートの詳細。

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、108 ページ「検索/フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
[タグの追加]	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、119 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

テンプレート・ツリー - [警告] タブ

このタブには、ソリューション・テンプレートに関連付けられている警告のリストが表示されます。このページを使用して、テンプレートに関連付けられている警告を追加、削除、編集します。テンプレート・ツリーで、選択したオブジェクトの警告を表示するテンプレート・グループまたはモニタを選択します。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、警告を表示、追加、編集するグループまたはモニタに移動します。[警告] タブをクリックします。
関連タスク	➤ 974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」 ➤ 1276 ページ「警告の設定方法」
関連情報	➤ 83 ページ「テンプレート・ツリー」 ➤ 1292 ページ「SiteScope 警告ページ」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
	新規警告。 [新規警告] ダイアログ・ボックスが開き、新しい警告を定義できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1294 ページ「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	警告の編集： [警告の編集] ダイアログ・ボックスが開き、警告を編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1294 ページ「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	警告のコピー。 警告がコピーされます。
	警告の貼り付け。 警告が貼り付けられます。
	警告の削除： 警告を削除します。
[名前]	警告定義に割り当てられている名前の文字列。
[状態]	警告の状態（有効/無効）。 ▶ 有効。 無効化された警告アクションが上書きされ、定義した条件に基づいて警告が実行されるようになります。 ▶ 無期限に無効化。 このラジオ・ボタンをクリアして警告定義を更新するまで、警告の条件に一致しても SiteScope で警告アクションが実行されないようになります。 ▶ <Time1> から <Time2> へ 1 回限定のスケジュールに基づいて無効化。 指定した期間、条件に一致しても SiteScope で警告アクションが実行されなくなります。警告は、この期間の開始時に無効になり、この期間を過ぎると再度有効になります。
[詳細]	警告の作成時または編集時に割り当てられた警告定義の詳細。
[アクション名]	警告がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告の名前ではありません。

[新規テンプレート コンテナ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しいテンプレート・コンテナを定義できます。テンプレート・コンテナは、テンプレートの格納と管理に使用します。テンプレート・コンテナでは、目的または分類別に複数のテンプレートをグループ化、整理できます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、SiteScope ノードまたは既存のテンプレート・コンテナを右クリックし、[新規作成] > [テンプレート コンテナ] を選択します。
重要な情報	▶ テンプレート・コンテナは、テンプレート・ツリーの SiteScope ノードにのみ追加できます。 ▶ テンプレートは、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。テンプレート・コンテナにはテンプレートのみを格納できます。
関連タスク	▶ 863 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」 ▶ 872 ページ「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」
関連情報	▶ 843 ページ「テンプレートについて」 ▶ 846 ページ「テンプレート例」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[名前]	テンプレート・コンテナの名前。 最大文字数 : 250 文字
[詳細]	テンプレート・コンテナの詳細。

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、108 ページ「検索/フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
[タグの追加]	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、119 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。



[新規テンプレート] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレート・コンテナにテンプレートを追加できます。個々のテンプレートは、テンプレートのデプロイ時に作成されるオブジェクトのオブジェクト定義から構成されます。テンプレートは、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレート・コンテナを右クリックして、[新規作成] > [テンプレート] を選択します。
重要な情報	▶ テンプレートには、直下にテンプレート・グループが 1 つだけあります（親グループ）。9.50 より前のバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートには、これは適用されません。 ▶ テンプレートには、グループ、サブグループ、変数、リモート・サーバを含めることができます。また、[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [テンプレート設定] で [テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する] が選択されている場合は、モニタを含めることができます。

関連タスク	➤ 863 ページ「テンプレートをを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」 ➤ 872 ページ「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」
関連情報	➤ 843 ページ「テンプレートについて」 ➤ 846 ページ「テンプレート例」 ➤ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[名前]	テンプレートの名前。入力する名前は、テンプレート・ツリーにテンプレート・コンテナの子ノードとして表示されます。 最大文字数 : 250 文字
[詳細]	テンプレートの詳細。

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、108 ページ「検索/フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
[タグの追加]	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、119 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。



【新規変数】ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートにテンプレート変数を追加できます。変数を使用することで、テンプレートのデプロイ時にユーザ入力が必要です。テンプレート変数は、ユーザ定義の変数か、SiteScope の既知のリモート・サーバ接続リストにアクセスできる定義済みシステム変数のいずれかです。テンプレート変数は、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレートを右クリックして、[新規] > [変数] を選択します。
重要な情報	[モニタの実行設定] で [頻度] と [エラー時頻度] の変数を設定する場合、変数の値は秒単位でのみ指定できます。
関連タスク	863 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	▶ 843 ページ「テンプレートについて」 ▶ 849 ページ「テンプレート変数を使った作業」 ▶ 846 ページ「テンプレート例」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[名前]	テンプレート変数の名前。入力する名前は、テンプレート・ツリーでテンプレートの変数を識別するために使用されます。これは、ほかのテンプレート・オブジェクトの変数を参照するときに使用する必要がある名前です。 注： 変数を追加した後に変数の名前の編集はできません。変数名を変更するには、その変数を削除してから、正しい名前で新しい変数を作成します。
[表示名]	デプロイ時の変数名の代わりに別の名前を表示する場合に使用する表示名。ただし、テンプレート・オブジェクトの変数を参照するときには、変数名を使用する必要があります。
[詳細]	変数の詳細。
[標準設定値]	この変数に使用する標準設定値。このボックスの値が必須である場合、値を入力しないと、テンプレートのデプロイ時に値の入力を求められます。
[テンプレートでの表示順序]	変数の表示シーケンス番号。これは、デプロイ時に変数の値の入力が要求される順序です。変数は昇順で表示されます。表示番号のない変数は最後に表示されます。 注： 表示順序によってテンプレート定義内の変数の順序が変更されることはありません。

UI 要素	説明
[パスワード変数]	標準設定値とデプロイ時に入力した値を非表示にします。 標準設定値 : 選択されていない 注 : このオプションは、名前の末尾に PASSWORD または passord が使用されている、以前のバージョンの SiteScope の変数に自動的に選択されます。
[必須変数]	変数フィールドには値が必須で、テンプレートのデプロイ時に値の入力が要求されます。変数を必須でない値として設定するには、チェック・ボックスをクリアします。このオプションがクリアされると、必須でない変数の値に空の文字列 ("") が使用されます。 標準設定値 : 選択されている

新規テンプレート・リモート・サーバ・ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートに UNIX または Windows リモート・サーバを作成できます。テンプレート・リモート・サーバは、テンプレートのデプロイ時に作成されるリモート・サーバのプリファレンスを定義するために使用されます。テンプレート・リモート・サーバは、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレートを右クリックして、[新規作成] > [新規 Microsoft Windows リモート サーバ] / [新規 UNIX リモートサーバ] を選択します。
重要な情報	▶ テンプレートのデプロイメント全体を通して一定のままであるフィールドには、実際の値を入力します。テンプレートのデプロイ時に変数値で置換される値のフィールドには、テンプレート変数を入力します。詳細については、853 ページ「テンプレート変数の参照」を参照してください。 ▶ テンプレートには 1 つのリモート・サーバのみ追加できます。9.50 より前のバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートには、これは適用されません。 ▶ サーバがテンプレート・モニタから参照されている場合は、リモート・サーバ・リストからそのサーバを削除できません。そのリモート・サーバを参照する各モニタの [モニタ設定] 表示枠にある [サーバ] ボックスで別のサーバを選択すると、リモート・サーバ・リストからそのリモート・サーバを削除できます。 ▶ 新規テンプレート・リモート・サーバ・ダイアログ・ボックスから新しい変数を追加するには、[新規変数] ボタンをクリックして、900 ページ「[新規変数] ダイアログ・ボックス」に説明されている方法で変数を設定します。 ▶ テンプレート変更適用ウィザードまたは自動デプロイメント更新 (939 ページ「XML を使用したテンプレート変更適用」を参照) を使用して既存の監視対象サーバを置換することはできませんが、必要に応じて監視対象サーバ自体のプロパティ値は変更できます。 ▶ リモート・サーバの [名前] および [サーバ] フィールド、およびモニタの [サーバ] フィールドでは、「¥¥」を使用しないでください。 ▶ 標準モードでオブジェクトを設定するときにドロップダウン・リストが表示される一部のフィールドは、テンプレート・モードではテキスト・ボックスとして表示されます。

関連タスク	863 ページ「テンプレートをを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	▶ 843 ページ「テンプレートについて」 ▶ 504 ページ「リモート・サーバの概要」 ▶ 846 ページ「テンプレート例」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

[新規 Microsoft Windows リモート サーバ] ダイアログ・ボックスの要素の詳細については, 523 ページ「新規 Microsoft Windows リモート・サーバ/Microsoft Windows リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。

[新規 UNIX リモート サーバ] ダイアログ・ボックスの要素の詳細については, 531 ページ「新規 UNIX リモート・サーバ/UNIX リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。

[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートまたはテンプレート・グループにテンプレート・グループを追加して、サブグループを作成できます。テンプレート・グループは、インフラストラクチャの複数の場所に監視のデプロイメントを複製するために使用します。テンプレート・グループは、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレートまたはテンプレート・グループを右クリックして、[新規作成] > [グループ] を選択します。
重要な情報	▶ テンプレートには、その直下に 1 つのテンプレート・グループ (親グループ) のみを含めることができます。9.50 より前のバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートには、これは適用されません。 ▶ 標準設定では、親グループまたはサブグループのみにテンプレート・モニタ、警告、サブグループを作成できます。テンプレート・エンティティの直下にテンプレート・モニタを作成する場合は、[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [テンプレート設定] で [テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する] チェック・ボックスを選択します。 ▶ [新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックスから新しい変数を追加するには、[新規変数] ボタンをクリックして、900 ページ「[新規変数] ダイアログ・ボックス」に説明されている方法で変数を設定します。
関連タスク	863 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	▶ 843 ページ「テンプレートについて」 ▶ 846 ページ「テンプレート例」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[グループ名]	テンプレート・グループの名前（テンプレート変数を使用するのが望ましい）。テンプレート変数を使用すると、テンプレートをデプロイするたびにグループに異なる名前を指定できます。グループ名に変数が含まれていない場合は、グループ名が一意でないため、同じディレクトリ内にテンプレートを複数回デプロイすると失敗します。テンプレート変数の使用の詳細については、853 ページ「テンプレート変数の参照」を参照してください。
[グループの詳細]	テンプレート・グループの詳細。テキスト・スタイルの一般的な HTML タグ（
, <HR>, など）とハイパーリンクを含めることができます。詳細は、SiteScope ダッシュボードでグループのプロパティを表示または編集するときに表示されます。ハイパーリンクの追加の詳細については、313 ページ「グループの詳細に URL リンクを追加（任意指定）」を参照してください。 注：このフィールドでは、Javascript, iframes, frames やそのほかの高度な機能はサポートされていません。このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード（複数行にわたるために切り捨てられた不一致のタグやコードなど）を修正する修正アクションが実行されます

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、108 ページ「検索/フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
[タグの追加]	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、119 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。



新規テンプレート・モニタ・ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレート・グループまたはサブグループにテンプレート・モニタを追加できます。テンプレート・モニタは、テンプレートのデプロイ時に実際のモニタの作成の土台として使用されます。テンプレート・モニタは、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレート・グループを右クリックして、[新規作成] > [モニタ] を選択します。テンプレートに設定するモニタ・タイプを選択します。
重要な情報	▶ 標準設定では、テンプレート・モニタはテンプレート・グループ内にものみ作成できます。テンプレート・エンティティの直下にテンプレート・モニタを作成するには、[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [テンプレート設定] で [テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する] チェック・ボックスを選択します。テンプレート・モニタには警告を含めることができます。 ▶ テンプレート・モニタはアクティブなモニタ・インスタンスではありません。モニタは、テンプレートをデプロイしたときにのみ、これらのテンプレート設定に基づいて作成、アクティブ化されます。 ▶ このダイアログ・ボックスから新しい変数を作成するには、[新規変数] ボタンをクリックして、900 ページ「[新規変数] ダイアログ・ボックス」に説明されている方法で変数を設定します。 ▶ [現在のテンプレートの下で、既に設定済みのテンプレート リモートを使用します] チェック・ボックスを選択すると、監視対象のサーバを選択するときに名前を入力しなくても、テンプレート・リモート・サーバ（作成されている場合）を使用できます。 ▶ モニタの [サーバ] フィールドとリモート・サーバの [名前] と [サーバ] フィールドには、「¥¥」を使用しないでください。 ▶ テンプレートからスクリプト・モニタをデプロイするときには、リモート・スクリプト名の太文字と小文字が、スクリプト・サブディレクトリ内のスクリプト名の太文字と小文字と一致する必要があります。一致しない場合、選択されたスクリプトは「なし」と表示されます。 ▶ ネットワーク帯域幅モニタの標準設定以外のしきい値は、テンプレートに正しくコピーされません。

関連タスク	863 ページ「テンプレートをを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	▶ 843 ページ「テンプレートについて」 ▶ 846 ページ「テンプレート例」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

[新規モニタ] ページの要素の詳細については、372 ページ「新規モニタ・ページ」を参照してください。

[新規警告] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレート・グループまたはテンプレート・モニタに警告を定義できます。テンプレート警告は、テンプレートのデプロイ時に作成されるモニタの警告を定義するために使用されます。テンプレート・グループまたはモニタに警告が設定されている場合、グループまたはモニタ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレート・グループまたはテンプレート・モニタを右クリックして、[新規作成] > [警告] を選択します。
重要な情報	警告テンプレートを作成するときには、[モニタの無効化/有効化] 警告アクションは選択できません。テンプレート警告は、その定義の対象であるオブジェクトに属するすべてのモニタに対して有効になります。たとえば、警告がモニタに対して定義されている場合、そのモニタのみでアクティブ化されます。警告がテンプレートに対して定義されている場合、そのテンプレートにあるすべてのモニタでアクティブ化されます。
関連タスク	863 ページ「テンプレートをを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	▶ 843 ページ「テンプレートについて」 ▶ 846 ページ「テンプレート例」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

[新規警告] ダイアログ・ボックスの要素の詳細については、1294 ページ「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。



テンプレートのエクスポート・ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ほかの SiteScope インストールで使用するためにテンプレートをエクスポートできます。これにより、標準化されたモニタ設定を企業全体で複製できます。テンプレートは、エクスポートした後もテンプレート・コンテナに残ります。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、エクスポートするテンプレートを含むテンプレート・コンテナ・オブジェクトを右クリックして、[エクスポート] を選択します。
重要な情報	▶ SiteScope テンプレートは、バイナリ・データとして保存されます。これは、SiteScope の以前のバージョンで使用されたテキストベースのモニタ・セットとは異なります。テンプレートの変更は、SiteScope インタフェースを使用して行う必要があります。 ▶ インポート先の SiteScope で正しい値が確実に使用されるようにするには、テンプレートをエクスポートする前に、スケジュール、警告、検索/フィルタ・タグ、資格情報など、すべてのプリファレンスを標準設定値に設定する必要があります。
関連タスク	888 ページ「テンプレートのエクスポートとインポート方法」
関連情報	▶ 843 ページ「テンプレートについて」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[ファイル名]	エクスポートするテンプレートのわかりやすい名前。
[パス]	エクスポートするためにテンプレート・ファイルを保存する場所。標準設定の場所をそのまま使用するか、別の場所を入力します。 標準設定値 : <SiteScope インストール・パス> ¥SiteScope¥export
[テンプレート ツリー]	エクスポートするテンプレート。 標準設定値 : テンプレート・コンテナ内のすべてのテンプレートがエクスポートされます。

テンプレートのインポート・ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ほかの SiteScope インストールからテンプレート設定をインポートできます。これにより、組織全体で標準化されたモニタ設定を効率的に複製できます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、テンプレートのインポート先のテンプレート・コンテナを右クリックして、[インポート] を選択します。
関連タスク	888 ページ「テンプレートのエクスポートとインポート方法」
関連情報	▶ 843 ページ「テンプレートについて」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[ファイル名]	インポートするファイルの名前。
[パス]	インポートするテンプレート・ファイルの場所。標準設定の場所をそのまま使用するか、別の場所を入力します。ファイルは、SiteScope サーバまたは SiteScope サーバにアクセス可能な場所にある必要があります。 標準設定値： <SiteScope インストール・パス>\export



テンプレート変更適用ウィザード

このウィザードでは、デプロイ済みグループのテンプレートの整合性を確認し、ソース・テンプレートが更新されるたびにテンプレートによってデプロイされる SiteScope オブジェクトを更新できます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、テンプレートを右クリックして [変更の適用] を選択します。
重要な情報	▶ テンプレート変更適用ウィザードを実行するには「グループの編集」権限が必要で、[許可されているグループ] リストで権限が付与されているグループのみで実行できます。[許可されているグループ] リストに含まれていないデプロイ済みのグループは、ウィザードには表示されません。 ▶ 選択したテンプレートに関連付けられたデプロイメントがある場合にのみ、ウィザードが開きます。テンプレートのデプロイの詳細については、870 ページ「テンプレートのデプロイ」を参照してください。
関連タスク	882 ページ「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」
ウィザード・マップ	このウィザードには、次のページが含まれています。 [デプロイ済みグループの選択] ページ > [整合性の確認] ページ > [コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス > [変数の変更] ページ > [結果サマリの適用] ページ > (テンプレート変更適用サマリ・レポート)
関連情報	▶ 860 ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

[デプロイ済みグループの選択] ページ

このウィザード・ページでは、テンプレートの変更を適用するソース・テンプレートに関連付けられたグループを選択できます。

重要な情報	このウィザードに関する一般情報は、912 ページ「テンプレート変更適用ウィザード」で入手できます。
ウィザード・マップ	テンプレート変更適用ウィザードには、次のページが含まれています。 [デプロイ済みグループの選択] ページ > [整合性の確認] ページ > [コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス > [変数の変更] ページ > [結果サマリの適用] ページ > (テンプレート変更適用サマリ・レポート)
関連情報	▶ 860 ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<選択済みテンプレートに関連付けられたグループのリスト>	テンプレートの変更内容を更新する選択済みテンプレートに関連付けられたグループ。 標準設定値: すべての関連付けられたグループとサブグループが選択されます。
[更新で削除できます]	ソース・テンプレートに存在しないすべての SiteScope オブジェクトをデプロイ済みグループから削除します。テンプレートの整合性を確実にするには、このオプションを選択します。 標準設定値: 選択されていない
[リモート サーバでテンプレートの変更を検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバで、選択済みテンプレートのモニタ設定の変更が正しいかを検証します。 注: このオプションを選択すると、リモート接続を使用するため更新のパフォーマンス時間が遅くなります。 標準設定値: 選択されていない

 整合性の確認 ページ

このウィザードでは、ソース・テンプレートとデプロイ済みグループ間の構造上の差異を表示可能にし、デプロイ済みグループ・オブジェクトの内容の差異へのリンクを提供します。

重要な情報	このウィザードに関する一般情報は、912 ページ「テンプレート変更適用ウィザード」で入手できます。
ウィザード・マップ	テンプレート変更適用ウィザードには、次のページが含まれています。 テンプレート変更適用ウィザード > 【整合性の確認】ページ > ([コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス) > [変数の変更] ページ > [結果サマリの適用] ページ > (テンプレート変更適用サマリ・レポート)
関連情報	860 ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[<N> のデプロイ済みグループに構造およびコンテンツの相違があります]	ソース・テンプレートとの間に構造上または内容の差異があるデプロイ済みグループとグループ・オブジェクト（サブグループ、モニタ、警告、リモート・サーバ）を表示します。
[<N> のデプロイ済みグループに構造およびコンテンツの相違がありません]	ソース・テンプレートとの構造または内容の差異がないデプロイ済みグループを表示します。デプロイメントの差異がないグループは、折りたたまれて表示されます。

UI 要素	説明
[グループ名]	デプロイ済みグループとそのすべてのオブジェクト (サブグループ、モニタ、警告、警告アクション、リモート・サーバ) の名前を表示します。オブジェクトの構造上の差異は、グループ・ツリー階層に次のテキストと色分けで表示されます。 ▶ 追加済み。 デプロイ済みグループに追加された新規オブジェクトを示します。オブジェクトは緑色で表示されます。 ▶ テンプレート内に存在しない ([更新で削除できます] オプションが [デプロイ済みグループの選択] ページで選択されていない場合のみ使用可能)。ソース・テンプレートに存在しないオブジェクトを示します。オブジェクトは青色で表示されます。 ▶ 削除 ([更新で削除できます] オプションが [デプロイ済みグループの選択] ページで選択されている場合のみ使用可能)。デプロイ済みグループから削除されるオブジェクトを示します。オブジェクトは赤色で表示されます。 ▶ 未使用。 テンプレート・リモート・サーバが使用されていないことを示します。未使用のリモート・サーバは灰色で表示されます。
[コンテンツの差異]	プロパティ、しきい値、その他の構造上以外の差異での内容の差異を含むオブジェクトでは、[相違の表示] リンクが表示されます。リンクをクリックすると [コンテンツの変更] ダイアログ・ボックスが開き、デプロイ済みグループまたはオブジェクトのプロパティ・レベルの差異が表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、916 ページ「[コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 デプロイされたテンプレート・リモート・サーバは、[Microsoft Windows リモート サーバ] または [UNIX リモート サーバ] セクションに表示されます。Microsoft Windows/UNIX リモート・サーバにリモート・サーバがすでに存在する場合、テンプレートのデプロイ時にリモート・サーバは再デプロイされません。



【コンテンツの変更】ダイアログ・ボックス

このウィザード・ページでは、更新に選択したオブジェクトのすべてのプロパティ、現在の値と置換する値、プロパティ・アクションの状態のリストを表示できます。

重要な情報	このウィザードに関する一般情報は、912 ページ「テンプレート変更適用ウィザード」で入手できます。
ウィザード・マップ	テンプレート変更適用ウィザードには、次のページが含まれています。 テンプレート変更適用ウィザード > [整合性の確認] ページ > (【コンテンツの変更】ダイアログ・ボックス) > [変数の変更] ページ > [結果サマリの適用] ページ > (テンプレート変更適用サマリ・レポート)
関連情報	860 ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[タイプ]	オブジェクト・タイプ（グループ、モニタ、警告、警告アクション、リモート）。
[名前]	選択したオブジェクトの名前。
[プロパティ名]	変更の適用で影響を受けるプロパティの名前。
[現在の値]	デプロイ済みグループの既存のプロパティ値。プロパティがデプロイ済みグループに追加される場合は、この値は空です。 注： 既存のパスワードのプロパティは暗号化されて表示されます。

UI 要素	説明
[置換する値]	テンプレートの置換するプロパティ値。プロパティがデプロイ済みグループから削除される場合は、この値は空です。 注： ➤ 置換するパスワードのプロパティは暗号化されて表示されます。 ➤ テンプレート・モニタの「依存」プロパティを変更すると、依存関係にあるテンプレート・モニタのフル・パスが表示されます（SiteScope¥tc¥template¥group¥CPU など）。
[アクション]	アクションの状態（「Modified」、「Added」、「Deleted」、「Ignored」）。ベースラインしきい値に変更がない場合、ベースライン・モニタには「Ignored」状態が使用されます。

変数の変更 ページ

このウィザードでは、デプロイ済みグループの新規変数に値を追加できます。既存の変数の値を編集することもできます。

重要な情報	このウィザードに関する一般情報は、912 ページ「テンプレート変更適用ウィザード」で入手できます。
ウィザード・マップ	テンプレート変更適用ウィザードには、次のページが含まれています。 テンプレート変更適用ウィザード > [整合性の確認] ページ > ([コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス) > [変数の変更] ページ > [結果サマリの適用] ページ > (テンプレート変更適用サマリ・レポート)
関連情報	860 ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[変数名]	デプロイ済みグループの新規または既存の変数の名前。赤色のアスタリスクは、変数の値が必須であることを示します。 注： 値が入力された変数を含むグループを展開して、必要に応じてその変数を変更できます。変数が含まれないグループは展開できません。
[変数の値]	デプロイ済みグループに追加された新規変数の値。既存の変数の値を編集することもできます。 注： ▶ リモート・サーバの変数の値は、読み取り専用で変更できません。 ▶ 変数文字列にハイパーテキストのタグが含まれていると、その文字列が切り捨てられて [変数の値] ボックスに正しく表示されません（文字列の一部がテキスト・ラベルに表示されます）。

 結果サマリの適用 ページ

このウィザード・ページでは、適用されたテンプレートの更新のサマリを表示できます。

重要な情報	このウィザードに関する一般情報は、912 ページ「テンプレート変更適用ウィザード」で入手できます。
ウィザード・マップ	テンプレート変更適用ウィザードには、次のページが含まれています。 テンプレート変更適用ウィザード > [整合性の確認] ページ > ([コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス) > [変数の変更] ページ > [結果サマリの適用] ページ > (テンプレート変更適用サマリ・レポート)
関連情報	860 ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
	エクスポート 。各ルート・グループの適用の結果を PDF ファイルにエクスポートします。詳細については、920 ページ「テンプレート変更適用サマリ・レポート」を参照してください。
[グループ名]	ルート・グループ名とグループのオブジェクト（サブグループ、モニタ）を表示します。
[理由]	SiteScope でデプロイ済みグループへの変更を適用できない場合、失敗した原因がそのグループの各モニタに表示されます。

 テンプレート変更適用サマリ・レポート

このレポートには、デプロイ済みグループに適用されるテンプレート変更に関する情報が表示されます。更新に失敗したグループ・オブジェクトの情報も表示されます。結果はオブジェクト・レベル（グループ、モニタ、警告、警告アクション、リモート・サーバ）で表示されます。

テンプレート変更適用サマリ レポート

変更を適用するデプロイ済みグループの総数: 4
更新されていないデプロイ済みグループの総数: 0
正常に更新されたデプロイ済みグループの総数: 4

正常に変更されたデプロイ済みグループ				
デプロイ済みルート グループ: SiteScope\Lab Test 4\Unix monitors for 16.16.16.16				
タイプ	名前	理由	メッセージ	
モニタ	SiteScope\ Lab Test 4\ Unix monitors for 16.16.16.16 \\Memory on 16.16.16.16	未変更		
	プロパティ 名	デプロイメント 値 (以前)	テンプレート 値 (現在)	プロパティ 値の アクション
	すべて更新	150	120	正常に変更 されました
リモート サーバ	16.16.16.16 remote unix	正常に変更 されました		

アクセス方法	[テンプレート変更適用ウィザード] の [結果サマリの適用] ページで, [レポート]  ボタンをクリックします。
重要な情報	▶ このウィザードに関する一般情報は, 912 ページ「テンプレート変更適用ウィザード」で入手できます。 ▶ テンプレート変更適用サマリ・レポートの PDF 版は, Firefox 2.x ではサポートされていません。 ▶ レポートを PDF にエクスポートするときに, ほとんどの言語で文字を表示できるようにするには, PDF の表示に使用するマシンに Arial Unicode MS フォントがインストールされている必要があります。詳細については, 890 ページ「PDF へのエクスポート時の Unicode フォントの有効化方法」を参照してください。
関連タスク	882 ページ「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」
ウィザード・マップ	テンプレート変更適用ウィザードには, 次のページが含まれています。 テンプレート変更適用ウィザード > [整合性の確認] ページ > ([コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス) > [変数の変更] ページ > [結果サマリの適用] ページ > (テンプレート変更適用サマリ・レポート)
関連情報	860 ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」

レポートの内容

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<レポートのサマリ>	変更の適用対象として選択したルート・グループの総数。変更 に成功したグループ数と失敗したグループ数を含みます。
[デプロイ済みルート グループ <グループ・ パス>]	テンプレートの変更による更新に成功または失敗した、デプ ロイ済みグループとすべてのグループ・オブジェクトの名 前。更新されなかったデプロイ済みグループが最初に表示さ れます。 注： 変更を適用するには、ルート・グループ階層のすべての 変更が成功する必要があります。グループ・オブジェクトへ のいずれかの変更が失敗すると、そのグループへのすべての 変更がロール・バックされます。
[タイプ]	オブジェクト・タイプ（グループ、モニタ、警告、警告アク ション、リモート・サーバ）。
[名前]	オブジェクトの名前とそのパス。
[理由]	オブジェクトの適用状態（「Successfully added」, 「Successfully modified」, 「Successfully deleted」, 「Failed to add」, 「Failed to modify」, 「Failed to delete」, 「Unchanged」）。

UI 要素	説明
[メッセージ]	テンプレートの変更によって更新されなかったデプロイ済みグループ・オブジェクトの、変更の適用に失敗した理由。
<プロパティの詳細>	内容が変更されたデプロイ済みグループ・オブジェクトの場合 ▶ プロパティ名。更新されたプロパティの名前。 ▶ デプロイメント値 (以前)。デプロイ済みグループの以前のプロパティ値。プロパティがデプロイ済みグループに追加された場合は、この値は空です。以前のパスワード変数は暗号化されて表示されます。 ▶ テンプレート値 (現在)。デプロイ済みグループの置換するプロパティ値。これがテンプレートの現在のプロパティ値です。プロパティがデプロイ済みグループから削除された場合は、この値は空です。置換するパスワード変数は暗号化が解除されて表示されます。 ▶ プロパティ値のアクション。プロパティ値に加えられた変更のタイプ (「正常に変更されました」、「正常に追加されました」、「正常に削除されました」)。



「グループの選択」ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、モニタ・ツリーでテンプレートのデプロイ先のグループを選択できます。または、SiteScope ノードを選択して、テンプレートのデプロイ先のグループを新規作成できます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、デプロイするテンプレートを右クリックして、[テンプレートのデプロイ] または [CSV を使用してテンプレートをデプロイ] を選択します。
関連タスク	▶ 863 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」 ▶ 882 ページ「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」 ▶ 974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	▶ 860 ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」 ▶ 969 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレート」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
 SiteScope	SiteScope ルート・グループを表します。SiteScope ルート・グループにテンプレートをデプロイするか、[新規グループ] ボタンをクリックして、テンプレートのデプロイ先のグループを新規作成できます。
	SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ（有効化されたモニタを含む，モニタを含まない，または有効化されたモニタがない）を表します。テンプレートのデプロイ先のグループを選択するか，[新規グループ] ボタンをクリックして，テンプレートのデプロイ先のグループを新規作成します。
	SiteScope モニタの適切な機能をチェックするためにデプロイされる使用可能な状況モニタの集合を表します。

[デプロイメント値] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートのデプロイ時に変数の値を入力できます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、デプロイするテンプレート（変数が含まれていること）を右クリックして、[テンプレートのデプロイ] を選択します。[テンプレートのデプロイ] ダイアログ・ボックスで、テンプレートをデプロイするグループを選択します。[デプロイメント値] ダイアログ・ボックスが開きます。
重要な情報	▶ 同時に複数のサーバにモニタをデプロイするには、サーバ名またはアドレスをカンマ (",") で区切って入力します。このとき、モニタによって参照されるテンプレート・リモート・サーバの [ホスト] プロパティの値は、変数値で構成される必要があります、かつ使用できる変数は 1 つのみです。 ▶ デプロイ先グループの編集権限がある場合は、テンプレートの内容に関係なくテンプレートをデプロイできます。モニタ、リモート、警告などのテンプレート・オブジェクトの編集権限は必要ありません。 ▶ モニタをデプロイできない場合は、エラー・メッセージが表示されます。これは、たとえば、ディスク領域モニタ・テンプレートをデプロイするときに、デプロイされるサーバにディスク・ドライバが存在しない場合に発生します。
関連タスク	▶ 863 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」 ▶ 874 ページ「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」 ▶ 882 ページ「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」
関連情報	▶ 860 ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<変数名>	テンプレートのデプロイ時に、テンプレート・オブジェクトで参照される各変数によって対応する入力ボックスが表示されます。変数名がテキスト入力ボックスのラベルとして使用されます。変数のデプロイメント値を入力します。
[サイレント デプロイメント]	テンプレートのデプロイメント要求をキューに送信し、SiteScope がバックグラウンドでデプロイメントを処理するように指定します。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値：選択されていない
[リモート サーバで モニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバと比較して、テンプレートのモニタ設定プロパティが正しいかどうかを検証します。 注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値：選択されている
[リモート サーバのテスト]	テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。 注：このオプションは、リモート・サーバを含むテンプレートをデプロイする場合にのみ表示されます。 標準設定値：選択されていない

[CSV ファイルの選択] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートのデプロイ時に使用する CSV ファイルを選択できます。

アクセス方法	次のいずれかを使用します。 ➤ [テンプレート] コンテキストを開きます。テンプレート・ツリーで、デプロイするテンプレートを右クリックして、[CSV を使用してテンプレートをデプロイ] を選択します。[グループの選択] ダイアログ・ボックスで、テンプレートのデプロイ先のグループを選択して [OK] をクリックします。 ➤ [モニタ] コンテキストを開きます。モニタ・ツリーで、テンプレートのデプロイ先のグループを右クリックして [CSV を使用してテンプレートをデプロイ] を選択します。[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスで、デプロイするテンプレートを選択して [OK] をクリックします。
関連タスク	➤ 863 ページ「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」 ➤ 877 ページ「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」
関連情報	➤ 860 ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」 ➤ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[CSV ファイル]	テンプレートで定義された変数値をデプロイするために使用するカンマ区切り値 (CSV) ファイル。[選択] ボタンをクリックして、テンプレートのデプロイメントに使用する CSV ファイルを選択します。 注: CSV 拡張子のファイルのみを使用できます。
[リモート サーバで モニタ プロパティ を検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注: このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値: 選択されている
[リモート サーバの テスト]	テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバへの接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。 注: このオプションは、リモート・サーバを含むテンプレートをデプロイする場合にのみ表示されます。 標準設定値: 選択されていない

自動デプロイメント XML の生成

このダイアログ・ボックスでは、強調表示されたテンプレート・コンテナのテンプレートを自動的にデプロイするために使用する XML ファイルを作成できます。XML ファイルを生成した後、このファイルを編集して、SiteScope ユーザ・インタフェース以外のファイル・ディレクトリからテンプレートをデプロイするために使用できます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、作成する自動デプロイ XML ファイルの対象とするテンプレート・コンテナを右クリックして、[XML の生成] を選択します。
関連タスク	942 ページ「XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ」
関連情報	▶ 932 ページ「自動テンプレート・デプロイメントの概要」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[ファイル名]	作成する XML ファイルの名前。これは、このテンプレート・コンテナ内のテンプレートを自動的にデプロイするために編集して使用できるファイルです。

UI 要素	説明
[パス]	XML ファイルの保存場所。標準設定の場所をそのまま使用するか、別の場所を入力します。パスが空の場合、XML ファイルは SiteScope がインストールされているルート・ドライブに保存されます。 標準設定値： <SiteScope インストール・パス> ¥SiteScope¥persistency¥autodeployment¥drafts 注： 以前に同じ ファイル名 と パス を使用して XML ファイルが作成されている場合、以前に保存した XML ファイルは上書きされません。以前のファイルは、_bck <バックアップ番号> を末尾に追加した名前に変更されます。たとえば、[ファイル名] に「CPUtemplate」と入力し、標準設定の場所を受け入れた場合、標準設定のフォルダにある既存のファイルは CPUtemplate.xml_bck1 となり、生成されている現在の XML ファイルは CPUtemplate.xml として保存されます。
[テンプレート ツリー]	XML ファイルを作成するテンプレート。XML ファイルの内容は、選択するテンプレートにあるオブジェクトに基づきます。生成される XML ファイルには、選択したテンプレートごとに別々のデプロイ・セクションがあります。

37

自動テンプレート・デプロイメント

本章の内容

概念

- ▶ 自動テンプレート・デプロイメントの概要 (932 ページ)
- ▶ XML ファイルの作成と操作 (933 ページ)
- ▶ XML ファイルの例および変数 (933 ページ)
- ▶ XML バリデータ (938 ページ)
- ▶ XML を使用したテンプレート変更適用 (939 ページ)
- ▶ デプロイメントの結果 (941 ページ)

タスク

- ▶ XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ (942 ページ)
- ▶ テキストの暗号化方法 (946 ページ)
- ▶ デプロイメントの更新方法 (947 ページ)

参照情報

- ▶ XML タグ参照情報 (949 ページ)

トラブルシューティングおよび制限事項 (953 ページ)

概念

自動テンプレート・デプロイメントの概要

SiteScope では、SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用して SiteScope テンプレートまたはソリューション・テンプレートを自動的にデプロイできます。XML ファイルを使用して、テンプレートで定義したオブジェクトをデプロイします。このテンプレートには親グループを含める必要があります。また、サブグループ、モニタ、リモート・サーバ (1 つ)、警告、変数定義を含めることができます。XML ファイルを編集して、変数定義を必須変数、グローバル変数、インスタンス変数に割り当てることができます。

テンプレートの作成の詳細については、839 ページ「SiteScope テンプレートの概要」を参照してください。ソリューション・テンプレートを使った作業の詳細については、970 ページ「ソリューション・テンプレートの概要」を参照してください。

自動テンプレート・デプロイメントを使用して、テンプレートの変更をデプロイ済みグループに適用することもできます。自動テンプレート・デプロイメントでは、テンプレート変更適用ウィザードと同じ機能が使用されます。このウィザードの動作の詳細については、860 ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」を参照してください。

ユーザ・インタフェースの代わりに自動テンプレート・デプロイメントを使用してテンプレートをデプロイし、テンプレートの変更をデプロイ済みグループに適用できます。スクリプトを使用して複数の SiteScope にデプロイする場合は、この方法がユーザ・インタフェースよりも適しています。これは、1 つのファイルを使用して、標準の XML スクリプトで複数の SiteScope にデプロイできるためです。

XML ファイルの作成と操作

次のいずれかの方法で XML ファイルを作成します。

- ▶ テキストがサポートされている任意のツールで XML を生成および編集します。ファイルは、SiteScope ファイル・ディレクトリにある XSD ファイルに基づいている必要があります。XSD ファイルは基本となる XML ファイルで、各自のバージョンのデプロイメント XML を作成するのに適したタグ、要素、属性がすでに含まれています。
- ▶ SiteScope インタフェースを使用して、テンプレート・コンテナまたはソリューション・テンプレートからデプロイメント XML ファイルを生成します。各テンプレート・コンテナおよびソリューション・テンプレートには、該当の自動テンプレート・デプロイメント XML ファイルを生成するためのオプションがあります。詳細については、929 ページ「自動デプロイメント XML の生成」を参照してください。

テンプレートまたはソリューション・テンプレートから生成する場合も、手動で作成する場合も、使用する XML は有効な XML で、ATD スキーマ (XSD) に適合している必要があります。専用ツールを使用して XML ファイルを検証できます。

XML ファイルのデプロイは、関連するテンプレートまたはソリューション・テンプレートがモニタ・ツリーにある対象 SiteScope によって異なります。テンプレートまたはソリューション・テンプレートをデプロイするには、関連するテンプレートまたはソリューション・テンプレートがある対象 SiteScope の永続フォルダに XML ファイルをコピーします。複数のデプロイメントを 1 つの XML ファイルにグループ化できます。

XML ファイルの例および変数

自動テンプレート・デプロイメント・ファイルに含まれているすべての XML タグ、要素、属性の詳細については、949 ページ「XML タグ参照情報」を参照してください。

各自動テンプレート・デプロイメント XML は、必ず次の宣言で始まります。

- ▶ `<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>` これは、UTF-8 文字エンコーディングの XML であることを宣言しています。
- ▶ `<sitescope:sitescopeRoot ...>` これは、スキーマの宣言です。URL が記載されますが、どのようなときでも SiteScope 外部の場所に接続することはありません。

XML ファイルの各セクションは次のいずれかのタグで始まり、そのアクションを実行するための指示があります。

- ▶ **<sitescope:templateDeployment>** テンプレートまたはソリューション・テンプレートをデプロイします。同じ XML ファイルに複数のインスタンスを含めることができます。
- ▶ **<sitescope:templateDeployUpdate>** 既存のデプロイメントに変更が適用されます。

各アクション内で、次を指定する必要があります。

- ▶ **<deploy:fullPathToTemplate>** ユーザ・インタフェースの SiteScope ツリー内のテンプレートへのパス。SiteScope ルート・ノードは含まれません。XML ファイルの例では、この値は `Templates¥Windows` になります。
- ▶ **<deploy:fullPathToDestinationGroup>** アクションを実行するデプロイ先グループの SiteScope ツリー内のパス。たとえば、XML ファイルの例では、テンプレート・グループ・オブジェクトはグループ `SiteScope¥Windows_Monitors` のサブグループとして作成されます。

本項の内容

- ▶ 935 ページ「XML ファイルの例」
- ▶ 936 ページ「変数」

XML ファイルの例

次に、自動テンプレート・デプロイメント XML ファイルの例を示します。このファイルは、ユーザ・インタフェースから生成されました。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!-- SiteScope deployment descriptor -->
<sitescope:sitescopeRoot xmlns:sitescope="." xmlns:deploy="." xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance" xsi:schemaLocation="." ./schemas/sitescope.xsd">
  <!-- To deploy use "templateDeployment", to update an existing deployment use templateDeploymentUpdate
  (this element can have the attribute enableDeleteOnUpdate with values of yes/no) -->
  <sitescope:templateDeployment>
    <!-- Path to source template in SiteScope tree (not including the root node) -->
    <deploy:fullPathToTemplate>Template Examples/Windows basic template
  </deploy:fullPathToTemplate>
    <!-- Path to destination group in SiteScope tree (not including the root node). New group will be
    created if need be -->
    <deploy:fullPathToDestinationGroup> </deploy:fullPathToDestinationGroup>
    <login user="admin99" password="(sisp)n9JRVaLxIsq="/>
    <!-- Mandatory variables names -->
    <deploy:mandatoryFields>host frequency password user</deploy:mandatoryFields>
    <!-- Global values for variables in current template -->
    <deploy:globalVariables>
      <deploy:variables encrypted="no" name="frequency" value="600"/>
      <deploy:variables encrypted="no" name="password" value="(sisp)d5JLOSwaVfe="/>
      <deploy:variables encrypted="no" name="user" value="admin"/>
    </deploy:globalVariables>
    <!-- Add here local variables for a deploy instance (overrides global variables with same name) -->
    <deploy:templateInstanceDeployVariable>
      <deploy:variables encrypted="no" name="group" value="Critical_monitors"/>
      <deploy:variables encrypted="no" name="frequency" value="600"/>
    </deploy:templateInstanceDeployVariable>
    <deploy:templateInstanceDeployVariable connectToServer="no">
      <deploy:variables encrypted="no" name="group" value="Minor_monitors"/>
      <deploy:variables encrypted="no" name="frequency" value="6000"/>
    </deploy:templateInstanceDeployVariable>
  </sitescope:templateDeployment>
</sitescope:sitescopeRoot>
```

変数

テンプレートとデプロイ先グループのパスを指定したら、XML ファイルの次のセクションでテンプレート変数と値に対応します。XML ファイルでは、変数とその値の定義、必須変数の宣言、対応する値の適用範囲（デプロイメント全体またはインスタンス単位）の決定を柔軟に行うことができます。

ユーザ・インタフェースから XML ファイルを生成し、変数に定義済みの値がある場合、その値が XML ファイルの変数に割り当てられます。

必須変数

テンプレートの必須変数の宣言は、**<deploy:mandatoryFields>** タグ内に表示されます。変数が必須変数として宣言されている場合、変数に対応する値をファイルで定義する必要があります。

ユーザ・インタフェースから XML を生成し、変数の作成時または編集時に **[Mandatory]** オプションを選択している場合、その変数は、**<deploy:mandatoryFields>** タグ内に表示されます。変数名を手動でこのリストに追加し、必須変数として宣言することもできます。

上記のファイルの例では、**group** と **frequency** が必須変数として定義されています。これらの変数の値は、**<deploy:globalVariables>** または **<deploy:templateInstanceDeployVariables>** のいずれかの **<deploy:variables>** タグ内に表示されます。

グローバル変数とインスタンス変数

任意指定の **<deploy:globalVariables>** タグには、デプロイメントの標準設定のグローバル・テンプレート変数が含まれています。グローバル・テンプレート変数を定義するかどうかは任意です。グローバル・テンプレート変数を定義する場合、ファイルのデプロイメント・インスタンス領域 (**<templateInstanceDeployVariables>** タグ) で別の変数の値を指定して変数の値を上書きできます。グローバル変数の値は、各デプロイメント・インスタンスの別の値で上書きできます。

XML ファイルの例のように、テンプレートの複数のインスタンスが同じ SiteScope の同じ場所にデプロイされる場合、各インスタンスにグループ名の変数を含める必要があります。グループ名は必須変数にし、各デプロイメント・インスタンスで異なる値を指定する必要があります。グループ・テンプレート・オブジェクトには、その値として同じ変数が定義されている必要があります。テンプレートには、名前値が変数ではないほかのグループを含めることができます。このグループは一度だけデプロイされます。

上記の XML ファイルの例では、デプロイメントのインスタンスが 2 つあるため、変数 **group** は必須変数として定義されており、各インスタンス・デプロイメントで異なる値 (**Critical_monitors** と **Minor_monitors**) が指定されています。この結果、テンプレートのグループ・オブジェクトの下に、同じモニタ・オブジェクトの 2 つのグループが作成されます。

XML ファイルの例では、次のグループがデプロイされます。

- ▶ **SiteScope/Windows_Monitors/Critical_monitors** (デプロイメントの最初のインスタンス)。
 - ▶ このグループに該当するモニタおよび警告がテンプレートで定義されます。頻度値が変数 **frequency** として定義されているテンプレート・モニタ・オブジェクトの値が 600 (10 分ごと) になります。
- ▶ **SiteScope/Windows_Monitors/Minor_monitors** (デプロイメントの 2 番目のインスタンス)。
 - ▶ このグループに該当するモニタおよび警告がテンプレートで定義されます。頻度値が変数 **frequency** として定義されているテンプレート・モニタ・オブジェクトの値が 6000 (1 時間ごと) になります。このグループには、**connectToServer="no"** 属性が追加されています。つまり、テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティは検証されません。

XML ファイルの例には、ユーザ名およびパスワード (`<login user="admin99" password="(sisp)n9JRVALxIsq=" />`) のログイン情報も含まれています。セキュリティ保護された環境を使用している場合、各デプロイメントで有効なユーザ名およびパスワードを指定する必要があります。暗号化ツールを使用してユーザ名とパスワードを暗号化できます。

注: テンプレートにシステム変数を定義している場合 (%% ではなく \$\$ で定義されます), 自動テンプレート・デプロイメント XML ファイルでは通常の変数として扱われます。テンプレートでシステム変数を使用する場合に適用される制限は, XML ファイルで使用する場合にも適用されます。

XML バリデータ

XML バリデータは, 自動テンプレート・デプロイメントで使用するスキーマに対して XML ファイルを検証するユーティリティです。SiteScope デプロイメント自体は検証されません。バリデータ・ファイルへのパスは次のとおりです。

- ▶ Windows の場合 : **<SiteScope のルート・ディレクトリ>%tools%\AutoDeployment%validate_template_xml.bat**
- ▶ UNIX の場合 : **<SiteScope のルート・ディレクトリ>%tools%\AutoDeployment%validate_template_xml.sh**

このユーティリティでは, XSD ファイルに対して XML の構造がチェックされ, ファイルの内容が有効な XML であることと, XSD に対応していることが確認されます。また, すべての必須変数に値が定義されているかどうかも検証されます。値は, グローバル変数またはデプロイメント・インスタンス変数のいずれかとして定義できます。検証に失敗すると, 失敗の理由が画面に出力されます。

XML を使用したテンプレート変更適用

自動テンプレート・デプロイメント XML を使用してテンプレートの変更を適用し、デプロイ済みグループの値または構造を更新することもできます。グループの **[ソース テンプレート]** フィールドが、XML で参照しているテンプレートとして識別される場合、自動テンプレート・デプロイメント XML を使用してグループの値およびオブジェクトを更新できます。

XML では、テンプレート変更適用ウィザードと同じ機能が使用されますが、ユーザ・インタフェースにアクセスする必要はありません。XML ファイルでは、テンプレートの変更を適用するために使用される変数に値を指定できます。ウィザードおよびテンプレートの更新機能の詳細については、860 ページ「テンプレート・デプロイメントの更新」を参照してください。

自動テンプレート・デプロイメントでは、XML を使用してグループ・デプロイメントを作成する場合と同じように、テンプレートの変更をテンプレートのデプロイ済みグループに適用できます。テンプレートを変更したら XML を作成し、編集済み XML をコピーしてデプロイ先 SiteScope マシンの永続フォルダに貼り付けます。

本項の内容

- ▶ 940 ページ「デプロイメント XML タグの更新の詳細」
- ▶ 940 ページ「テンプレート更新レポート」

デプロイメント XML タグの更新の詳細

デプロイ済みグループの値またはオブジェクトを更新する場合、XML ファイルでは `<sitescope:templateDeploymentUpdate>` タグ (テンプレートをデプロイする場合に使用する `<sitescope:templateDeployment>` タグではありません) を使用する必要があります。XML ファイルで使用する要素および属性の詳細については、949 ページ「XML タグ参照情報」を参照してください。

`<sitescope:templateDeploymentUpdate>` タグ内で、`enableDeleteOnUpdate` 属性に「**yes**」を入力し、XML ファイルを使用してデプロイメントを更新するときにデプロイ済みグループ内のオブジェクトを削除できます。自動テンプレート・デプロイメント XML で参照されるテンプレートに表示されていないオブジェクトが削除の対象になります。「**no**」を入力すると、XML ファイルで参照されるテンプレートに表示されていない場合でも、グループ内のすべてのオブジェクトがデプロイメントの更新後も保持されます。テンプレート変更適用ウィザードのこのオプションの詳細については、913 ページ「[更新で削除できます]」を参照してください。

更新を正常に実行するには、デプロイ済みグループのデプロイ先 SiteScope グループの名前を `deploy:fullPathToDestinationGroup` タグの値として定義する必要があります。`fullPathToDestination` は、デプロイメントのルート・グループ (テンプレートのルート・グループ) で終わる必要があります。デプロイメント・セクションごとに 1 つのグループが更新されるため、複数のグループがある場合はそれぞれに個別のデプロイメント更新セクションとグループ名を定義する必要があります。

テンプレート更新レポート

自動テンプレート・デプロイメントの更新を実行したら、XML 形式のレポートを使用できるようになります。このレポート・ファイルの名前には、XML ファイルの名前、タイムスタンプ、文字列 `_reports` が含まれています。これらのレポートは、`<SiteScope のルート・ディレクトリ>%persistency%autodeployment%reports` にあります。

レポートは XML 形式で、次のタグが最初に含まれています。

- ▶ `totalNumberOfDeployments`
- ▶ `totalNumberOfFailedDeployments`
- ▶ `totalNumberOfSuccessDeployments`

デプロイメント・インスタンスごとに、XML の<publishChangesSummaryPage>セクションが表示されます。ここには、更新された内容の詳細が表示されます。正常に変更されなかったデプロイメントは、ファイルの最初に表示されます。

SiteScope ユーザ・インタフェースを使用してデプロイ済みグループを更新する場合、このファイルはテンプレート変更適用ウィザードによって作成される XML バージョンの PDF ファイルになります。レポートの詳細については、920 ページ「テンプレート変更適用サマリ・レポート」を参照してください。

デプロイメントの結果

デプロイおよび更新の両方の XML ファイルをコピー先 SiteScope の永続フォルダにコピーする場合、ファイルは次の 2 つのディレクトリのいずれかにコピーされます。

- <SiteScope のルート・ディレクトリ>%persistency%autodeployment%
successHistory ディレクトリ。デプロイ済みグループのすべてのインスタンスを正常にデプロイまたは更新した XML ファイルが含まれます。
- <SiteScope のルート・ディレクトリ>%persistency%autodeployment%
failHistory ディレクトリ。デプロイ済みグループのインスタンスのデプロイまたは更新に失敗した XML ファイルが含まれます。1 つでも失敗したインスタンスがあると、ほかのすべてが成功していても XML はこのフォルダに適用されます。

XML ファイルの名前が変更されます（アンダースコアとタイムスタンプが元の XML ファイルの名前に追加されます）。たとえば、すべてのグループとインスタンスのデプロイに成功した CPUgroups.XML という名前の XML ファイルは、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%persistency%autodeployment%
successHistory ディレクトリに保存され、CPUgroups_1203951216931.xml という名前になります。

タスク

XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ

このタスクでは、自動テンプレート・デプロイメントを実行する方法について説明します。ソリューション・テンプレートをデプロイする場合も同じ手順を使用できます。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 942 ページ「前提条件」
- ▶ 943 ページ「XML ファイルの作成」
- ▶ 943 ページ「XML ファイルの編集」
- ▶ 944 ページ「ログインの詳細の指定（セキュリティ保護された環境で作業している場合に必須）」
- ▶ 944 ページ「パスワードなどのフィールドの暗号化（任意指定）」
- ▶ 944 ページ「XML ファイルの検証」
- ▶ 945 ページ「SiteScope サーバ・マシンへの検証済み XML のコピー」
- ▶ 945 ページ「デプロイメントが成功したかどうかのチェック」

1 前提条件

テンプレートを自動的にデプロイする各 SiteScope には、テンプレート・コンテナ内にそのテンプレートが含まれている必要があります。テンプレートの最上位レベルには、グループ・オブジェクトが必要です。ほかのすべてのオブジェクトはそのグループ内に作成する必要があります。テンプレートには、サブグループ、モニタ、警告、リモート・サーバ（1 つ）、変数を含めることができます。

複数の SiteScope を使った作業の場合：

- ▶ 1 つの SiteScope でテンプレートを作成したら、[テンプレート コンテナ] ショートカット・メニューの [Export/Import] オプションを使用してほかの SiteScope にエクスポートできます。タスクの詳細については、910 ページ「テンプレートのエクスポート・ダイアログ・ボックス」および 911 ページ「テンプレートのインポート・ダイアログ・ボックス」を参照してください。

- ▶ BSM を使って作業している場合、[システム可用性管理] の [SiteScope の同期] ウィザードを使用して、SiteScope 間でテンプレートをコピーできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「SiteScope の同期ウィザード」を参照してください。

2 XML ファイルの作成

次のいずれかの方法で XML ファイルを作成できます。

- ▶ テンプレート・コンテナを右クリックし、コンテキスト・メニューの [XML の生成] を選択します。ソリューション・テンプレートをデプロイする場合、このオプションはテンプレート・レベルで表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、929 ページ「自動デプロイメント XML の生成」を参照してください。
- ▶ 専用の XML アプリケーションを使用して XML ファイルを作成します。ファイルは有効な XML ファイルで、次のディレクトリにある XSD ファイルに基づいている必要があります。
 - ▶ <SiteScope のルート・ディレクトリ>%conf%\xsds\deploy.xsd
 - ▶ <SiteScope のルート・ディレクトリ>%conf%\xsds\sitescope.xsd

3 XML ファイルの編集

XML ファイルを編集して、デプロイメントに必要な値を入力する必要があります。ファイルの編集およびファイルのサンプルの詳細については、933 ページ「XML ファイルの例および変数」を参照してください。

XML ファイルのタグの詳細については、949 ページ「XML タグ参照情報」を参照してください。

注：ユーザ・インタフェースから XML が生成された場合、必須変数フィールドはテンプレートの必須変数に基づいて生成されます。XML ファイルを作成するときに、デプロイメントの成功に不可欠なフィールドがある場合、XML をデプロイする前にこれらのフィールドに値が割り当てられていることを確認する必要があります。

4 ログインの詳細の指定（セキュリティ保護された環境で作業している場合に必須）

セキュリティ保護された環境で作業している場合、各デプロイメントで有効なユーザ名およびパスワードを指定する必要があります。ログイン資格情報を **audit.log** ファイルで使用する、テンプレートを変更するユーザの ID を追跡することもできます。

API でログインをサポートできるようにするには、
(`</deploy:fullPathToDestinationGroup>` の後に) 次の行を追加します。

```
<login user="<myUserName>" password="<myPassword>" />
```

暗号化ツールを使用して、ユーザ名とパスワードの暗号化手順を実行します。タスクの詳細については、946 ページ「テキストの暗号化方法」を参照してください。

注：セキュリティ保護された環境で作業している場合、ログインを追加すれば以前のバージョンの SiteScope で生成された XML ファイルを使用できます。

5 パスワードなどのフィールドの暗号化（任意指定）

視認可能なテキスト形式で表示されないようにするフィールドが含まれているテンプレートをデプロイする場合、暗号化ツールを使用してテキストの暗号化手順を実行します。タスクの詳細については、946 ページ「テキストの暗号化方法」を参照してください。

6 XML ファイルの検証

デプロイする前に XML ファイルを検証することをお勧めします。

次のディレクトリにある検証ツールを使用します。

- ▶ Windows の場合：`<SiteScope のルート・ディレクトリ>%tools%\AutoDeployment\validate_template_xml.bat`
- ▶ UNIX の場合：`<SiteScope のルート・ディレクトリ>%tools%\AutoDeployment\validate_template_xml.sh`

概念の詳細については、938 ページ「XML バリデータ」を参照してください。

7 SiteScope サーバ・マシンへの検証済み XML のコピー

各 SiteScope マシンの **¥persistency¥autodeployment** ディレクトリ (XML 形式のテンプレートをデプロイする場所) に XML ファイルをコピーします。

標準設定では、テンプレートは 2 分ごとに自動的にデプロイされます。[インフラストラクチャ プリファレンス] の [自動デプロイメント チェックの頻度] フィールド (プロパティ名: `_autoDeploymentCheckFrequency`) で頻度を変更できます。

注: デプロイするときに XML ファイルが検証にパスしないと、デプロイメントは失敗します。XML ファイルは、SiteScope サーバ・マシンの永続ディレクトリにコピーする前に検証することをお勧めします。

8 デプロイメントが成功したかどうかのチェック

デプロイメントが成功したかどうかをチェックするには、デプロイ先 SiteScope の **<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥persistency¥autodeployment** ディレクトリを検索して、XML が **successHistory** サブディレクトリまたは **failHistory** サブディレクトリのどちらにコピーされているかを確認します。

概念の詳細については、941 ページ「デプロイメントの結果」を参照してください。

また、SiteScope のエラー・ログをチェックすることもできます。

テキストの暗号化方法

このタスクでは、視認可能なテキスト形式で表示されないようにする、パスワードなどのフィールドのテキストを暗号化する方法について説明します。このツールでは XML のフィールドのみが暗号化されます。テンプレート自体で永続ディレクトリの変数の暗号化が制御されます。

デプロイメント XML で使用するテキストを暗号化するには、次の手順で行います。

1 次のバッチ・ファイルを実行します。

- ▶ Windows の場合 : <SiteScope のルート・ディレクトリ>
¥tools¥AutoDeployment¥encrypt_password.bat
- ▶ UNIX の場合 : <SiteScope のルート・ディレクトリ>
¥tools¥AutoDeployment¥encrypt_password.sh

2 コマンド・プロンプト・ウィンドウを開きます。

- ▶ Windows の場合、ファイルをコマンド・プロンプト・ウィンドウにドラッグ・アンド・ドロップします。
- ▶ UNIX の場合、.sh ファイルをそのディレクトリから実行する必要があります。

3 スペースとパスワード値を入力します (Mypassword など)。ENTER キーを押します。

4 XML ファイルの暗号化された変数の値として、戻り文字列を使用します。属性 **encrypted** の値を **yes** に、変数属性 **value** の値を戻り文字列に変更する必要があります。

たとえば、暗号化ツールによって `<deploy:variables encrypted="yes" name="password" value="(sisp)d5JLOSWaVfE="/>` のような値が生成されます。

デプロイメントの更新方法

このタスクでは、自動テンプレート・デプロイメント XML を使用して、既存のデプロイ済みグループを更新する方法について説明します。テンプレートを変更した場合、デプロイメントの構造を更新できます。また、テンプレートで宣言されている変数に新しい値を指定してオブジェクト・プロパティを更新することもできます。

このタスクの手順は、テンプレートをデプロイする場合のタスクと同じです（ただし、この手順で挙げる例外や追加情報はあります）。デプロイメント・タスクの詳細については、942 ページ「XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- 947 ページ「前提条件」
- 947 ページ「オブジェクトおよび値を更新するための XML ファイルの作成および編集」
- 948 ページ「コピー先 SiteScope へのテンプレート更新適用 XML のコピー」
- 948 ページ「パスワードなどのテキストの暗号化（任意指定）」
- 948 ページ「テンプレート更新適用 XML の検証」
- 948 ページ「結果のレポート」

1 前提条件

更新するデプロイ済みグループの[ソース テンプレート]フィールドは、XML デプロイメント更新ファイルのテンプレートと同じである必要があります。これは、更新するテンプレートとともにデプロイ先 SiteScope に存在します。

2 オブジェクトおよび値を更新するための XML ファイルの作成および編集

XML ファイルを使って作業する場合、次の操作を実行する必要があります。

- **<templateDeployment>** タグの代わりに **<templateDeploymentUpdate>** タグを使用します。
- **<templateDeploymentUpdate>** タグの **enableDeleteOnUpdate** 属性に「yes」または「no」の値を入力します。

- ▶ **deploy:fullPathToDestinationGroup** タグを定義します。このタグの値として更新するグループ名を使用します。

これらのタグおよび更新 XML ファイルの詳細については、940 ページ「デプロイメント XML タグの更新の詳細」を参照してください。

3 コピー先 SiteScope へのテンプレート更新適用 XML のコピー

自動テンプレート・デプロイメント XML ファイルをデプロイするときのように、テンプレート更新適用 XML をコピー先 SiteScope の永続ディレクトリにコピーします。

4 パスワードなどのテキストの暗号化（任意指定）

タスクの詳細については、946 ページ「テキストの暗号化方法」を参照してください。

5 テンプレート更新適用 XML の検証

自動テンプレート・デプロイメント XML ファイルをデプロイするときのように、バリデータ・ツールを使用して編集済み XML ファイルを検証します。

6 結果のレポート

更新用の自動テンプレート・デプロイメント XML をデプロイすると、結果のレポート・ファイルが XML 形式で作成されます。これらのレポートは、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>%persistency%autodeployment%reports** にあります。

ユーザ・インタフェースの詳細については、940 ページ「テンプレート更新レポート」を参照してください。

参照情報

XML タグ参照情報

次の各表では、自動テンプレート・デプロイメント XML ファイルで使用するすべての要素と属性について説明します。

- 949 ページ「要素表」
- 951 ページ「属性表」

要素表

要素	説明
sitescope:sitescopeRoot	これは、デプロイメントを作成するための指示、使用する XML のバージョン、XSD ファイルの場所を指定する XML ファイル内の最初のタグにする必要があります。 注： これは、SiteScope に関連するすべての XML ファイルで最初の要素になります。
sitescope:template Deployment	このタグを使用すると、テンプレートまたはソリューション・テンプレートをデプロイして、デプロイ先 SiteScope に新しいグループ構造を作成できます。これは、ユーザ・インタフェースからの生成時に XML ファイルで使用される標準設定のタグです。

要素	説明
sitescope:template DeploymentUpdate	このタグを使用すると、更新したテンプレートの変更を公開できます。この変更は、XML で識別されたテンプレートと一致する [ソース テンプレート] フィールドを持つグループの監視構造に適用できます。この XML ファイルではまた、テンプレートで使用する変数の値を更新できます。 たとえば、テンプレートで作成した既存のグループに警告やモニタを追加する場合、テンプレートを変更し、このタグを使用してデプロイできます。
deploy:fullPathToTemplate	このタグは、デプロイするテンプレートまたはソリューション・テンプレートの SiteScope ツリー内でのフル・パスを示します。 構文: <テンプレート・コンテナ名>/<テンプレート名>
deploy:fullPathTo DestinationGroup	このタグは、デプロイした監視構造の作成先となるグループ名の、SiteScope ツリー内でのフル・パス位置を示します。このタグに値がない場合、デプロイメントは SiteScope ノード・レベルに作成されます。
deploy:mandatoryFields	このタグ内の値は、テンプレート作成時に必須フィールドとして選択された変数です。このタグ内に値が存在する場合、グローバル変数には <deploy:globalVariables> タグで、そのほかの変数には <deploy:variables> タグで値を指定する必要があります。これらの必須フィールドに対応する値がない場合、XML は検証に失敗します。
deploy:globalVariables	このタグは、選択したテンプレート全体にデプロイされる変数が含まれるファイルのセクションをマークします。 属性が含まれます。詳細については、951 ページ「属性表」を参照してください。

要素	説明
deploy:templateInstance DeployVariable	このタグは、選択したテンプレートのインスタンスごとにデプロイされる変数が含まれるファイルのセクションをマークします。 同じ変数が <deploy:globalVariables> に存在する場合、インスタンスの変数の値は、同じ変数が存在するインスタンスについてのみグローバル変数の値を上書きします。それ以外のすべてのインスタンスの値は、<deploy:globalVariables> セクションの入力値になります。 属性が含まれます。詳細については、951 ページ「属性表」を参照してください。
deploy:variables	このタグでは、変数とその値を定義します。 属性が含まれます。詳細については、951 ページ「属性表」を参照してください。

属性表

親要素	属性	説明
templateDeploymentUpdate	enableDeleteOnUpdate	テンプレートのデプロイメントに存在するオブジェクトのインスタンスが、デプロイメントの構造の更新に使用する XML ファイルに存在しない場合、そのインスタンスを削除するかどうかを示します。 使用可能な値 : yes, no このオプションの詳細については、913 ページ「[更新で削除できます]」を参照してください。

親要素	属性	説明
deploy:globalVariables deploy:templateInstance DeployVariable	description	デプロイメントのユーザ説明（任意指定）。
	connectToServer	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティを検証します（任意指定）。これは、（この属性が指定されていなくても）標準設定の動作です。リモート・サーバへの接続を避けるには、 connectToServer="no" を <deploy:globalVariables> または <deploy:templateInstanceDeployVariable> タグに追加します。 使用可能な値 : yes, no このオプションの詳細については、926 ページ「[リモートサーバでモニタプロパティを検証]」を参照してください。
	accessControlled	（任意）テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。 使用可能な値 : true, false
deploy:variables	encrypted	変数フィールドの値が暗号化されているかどうかを示します。 使用可能な値 : yes, no 値を暗号化するには、暗号化ツールを使用して変数の値を指定します。詳細については、946 ページ「テキストの暗号化方法」を参照してください。
	name	変数の名前。
	value	変数の値。

トラブルシューティングおよび制限事項

このセクションでは、自動テンプレート・デプロイメントを使って作業する場合のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

注：SiteScope テンプレート、ソリューション・テンプレート、テンプレート変更適用ウィザードに適用される注意事項、制限事項、トラブルシューティングの問題は、すべて自動テンプレート・デプロイメントの機能にも適用されます。

本項の内容

- ▶ 953 ページ「I18N ユーザ」
- ▶ 954 ページ「ソリューション・テンプレート」
- ▶ 954 ページ「XML で禁止されている文字」
- ▶ 954 ページ「グループのないテンプレートを自動デプロイできない」
- ▶ 955 ページ「自動テンプレート・デプロイメント XML を使用したデプロイ済みグループの更新」

I18N ユーザ

- ▶ メモ帳を使用して XML ファイルを編集しないでください。メモ帳ではファイルの先頭に余分な文字が追加されるため、XML ファイルを解析できなくなります。この文字は表示されませんが、英語以外のファイルを解析不能にします。メモ帳ではなく、ワードパッドまたは XML エディタを使用してください。
- ▶ SiteScope のルート・ディレクトリへのパスに英語以外の文字が含まれている場合、XML を SiteScope の永続ディレクトリにコピーするまでは XML の検証に検証ツールを使用できません。このため、XML が XSD に準拠しているか、必須フィールドに値があるかが検証されません。

ソリューション・テンプレート

次のソリューション・テンプレートでは変数が動的に作成され、XML ファイルで値を指定できないため、自動テンプレート・デプロイメントを実行できません。

- ▶ JBoss Application Server 4.x
- ▶ WebLogic アプリケーション・サーバ
- ▶ WebSphere 5.x アプリケーション・サーバ
- ▶ WebSphere 6.x アプリケーション・サーバ

XML で禁止されている文字

アンパサンド (&), 引用符 (“), 山括弧 (< >) 文字は、XML 属性値で禁止されているため、使用は避けてください。

不正な XML 文字をエスケープするには、一般的なエンコーディングを使用するか (& ではなく & を使用するなど)、文字を CDATA (文字データ) セクションで囲みます。詳細については、http://xmmsc-www.star.le.ac.uk/SAS/xmmsas_20070308_1802/doc/param/node24.html (英語サイト) を参照してください。

グループのないテンプレートを自動デプロイできない

親グループが定義されていないテンプレート（つまり、ルート・テンプレートの直下にモニタがあるテンプレート）を自動デプロイしようとする、デプロイメントは失敗し、次のエラーが <SiteScope のルート・ディレクトリ¥logs¥>error.log ファイルに書き込まれます。

[Autodeployment new XML detection] (XMLAutomationParser.java:294) ERROR - Prerequisites of template structure are unmet. Template must be rooted by only one group.

[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [テンプレート設定] で [テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する] を選択した場合でも、自動デプロイメントは失敗します。

回避策: テンプレートを手動でデプロイします (テンプレート・ツリーで該当するテンプレートを右クリックし、[テンプレートのデプロイ] を選択します)。

自動テンプレート・デプロイメント XML を使用したデプロイ済みグループの更新

自動テンプレート・デプロイメント XML を使用した既存のデプロイメントの更新の制限事項については、861 ページ「注意事項および制限事項」を参照してください。

38

フェールオーバー監視テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ フェールオーバー監視テンプレートの概要 (958 ページ)

タスク

- ▶ フェールオーバー監視テンプレートのデプロイ方法 (962 ページ)

参照情報

- ▶ [Failover Monitoring Template] ページ (965 ページ)

概念

フェールオーバー監視テンプレートの概要

SiteScope フェールオーバー は、自動フェールオーバー機能を備えた特殊なバージョンの SiteScope です。SiteScope マシンに障害が発生した場合、サービスをほとんど中断せずに自動的に素早く別のマシンに置き換えることで、インフラストラクチャ監視のフェールオーバー機能を実装できます。

フェールオーバー監視テンプレートは、フェールオーバー環境を監視するために設計された、事前設定済みのモニタ・セット・テンプレートです。フェールオーバー・マネージャ・テンプレートを使用すると、プライマリおよびフェールオーバー SiteScope マシンの可用性の監視が最適化された設定で、ソリューション固有の SiteScope モニタを迅速にデプロイできます。

プライマリ SiteScope がフェールオーバー・マネージャ設定ファイルに登録されている場合、SiteScope を実行しているプラットフォームに応じてフェールオーバー監視テンプレート（Windows または UNIX 用）をプライマリ SiteScope にデプロイすることをお勧めします。フェールオーバー監視テンプレートは、フェールオーバー・マネージャが監視するプライマリ SiteScope サーバごとにデプロイする必要があります。

テンプレートによってプライマリ SiteScope 上にモニタ・グループ・コンテナが作成され、その中に特別に設定されたフェールオーバー・モニタが追加されます。これらのフェールオーバー・モニタは、対象のプライマリ SiteScope の可用性とフェールオーバー・サービスを監視するために最適化された設定を持つ SiteScope ログ・モニタです。

テンプレートのデプロイ後、デプロイしたモニタに警告を設定して、プライマリ SiteScope の状態の変化や、フェールオーバーの発生時期について通知を受けることができます。たとえば、プライマリ SiteScope が停止したときに電子メール通知を受け取るようにフェールオーバー警告を設定できます。

注：SiteScope フェールオーバー の使用の詳細については、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥sisdocs¥pdfs¥SiteScopeFailover.pdf にある『HP SiteScope Failover Guide』（英語版）を参照してください。

フェールオーバー・テンプレート・モニタ

フェールオーバー監視テンプレートは、SiteScope のテンプレート・ツリーの [Failover Monitoring Templates] というコンテナにあります。すべてのモニタは、フェールオーバー・マネージャの **ha.log** ファイル内で一致する特定のテキストを検索するように設定されたログ・ファイル・モニタです。このファイルからの情報は、警告アクションをアクティブ化するためのトリガとして使用します。

監視の頻度は、フェールオーバー・モニタの [モニタの実行設定] 表示枠にある [頻度] 設定で定義します。標準設定では、各モニタを 60 秒おきに実行するように設定されています。

次の表では、フェールオーバー監視テンプレートのモニタの概要を説明します。

フェールオーバー・モニタ	説明	しきい値設定
Failed to Start SiteScope Failover	これは、プライマリ SiteScope の停止後、フェールオーバー・サービスが開始に失敗したかどうかを検出するために使用するログ・モニタです。 モニタがエラー状態の場合、フェールオーバー・マネージャは ha.log ファイルにメッセージを記録し、モニタは一致を確認します。モニタがエラー状態の場合に通知するよう警告を設定します。	一致が「n/a」または 0 以上の場合、エラー 0 の場合、正常
Failed to Stop SiteScope Failover	これは、フェールオーバー・マネージャからシャットダウンを要求された後、フェールオーバー・サービスが停止に失敗したかどうかを検出するために使用するログ・モニタです。 モニタがエラー状態の場合、フェールオーバー・マネージャは ha.log ファイルにメッセージを記録し、モニタは一致を確認します。モニタがエラー状態の場合に通知するよう警告を設定します。	一致が「n/a」または 0 以上の場合、エラー 0 の場合、正常
Primary SiteScope has Recovered	これは、プライマリ SiteScope が障害の後、回復したかどうかを検出するために使用するログ・モニタです。 モニタは、一致がある場合はエラー状態になるように設定されます。	一致が「n/a」または 0 以上の場合、エラー 0 の場合、正常

フェールオーバー・モニタ	説明	しきい値設定
Primary SiteScope is Down	これは、プライマリ SiteScope が停止したかどうかを検出するために使用するログ・モニタです。 プライマリ SiteScope が停止すると、このモニタはエラー状態になります。	一致が「n/a」または 0 以上の場合、エラー 0 の場合、正常
Primary SiteScope Status Unknown	これは、プライマリ SiteScope が不明かどうかを検出するために使用するログ・モニタです。プライマリ SiteScope の状態が不明な場合、フェールオーバーはバックアップとして起動および稼働していない必要があります。 モニタは、一致がある場合はエラー状態になるように設定されます。	一致が「n/a」または 0 以上の場合、エラー 0 の場合、正常

タスク

フェールオーバー監視テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、フェールオーバー監視テンプレートをデプロイする手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 963 ページ「フェールオーバー監視テンプレートのデプロイ」
- ▶ 963 ページ「フェールオーバー・モニタ設定のプロパティの変更（任意指定）」
- ▶ 964 ページ「警告およびレポートの設定」
- ▶ 964 ページ「フェールオーバー時の監視結果の表示」
- ▶ 964 ページ「プライマリ SiteScope 回復時の監視結果の表示」

1 フェールオーバー監視テンプレートのデプロイ

標準設定では、プライマリ SiteScope がフェールオーバー・マネージャ設定ファイルに登録されている場合、フェールオーバー監視テンプレートが自動的にプライマリ SiteScope にデプロイされます。

注：このテンプレートは、次のいずれかの方法を使用して手動でデプロイすることもできます。

- ▶ ユーザ・インタフェースのモニタまたはテンプレート・ツリーからテンプレートをデプロイする。詳細については、874 ページ「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照してください。
 - ▶ CSV ファイルを使用してテンプレートをデプロイする。詳細については、877 ページ「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照してください。
 - ▶ SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用してテンプレートをデプロイする。詳細については、942 ページ「XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ」を参照してください。
-

フェールオーバー監視テンプレートによって新しいモニタ・グループ・コンテナが作成され、その中に個々のフェールオーバー・モニタが追加されます。このモニタ・グループ・コンテナには、Failover Monitors on <プライマリ SiteScope インストール・パス> の形式で名前が割り当てられます。

フェールオーバー監視テンプレートのプロパティについては、965 ページ「[Failover Monitoring Template] ページ」を参照してください。

2 フェールオーバー・モニタ設定のプロパティの変更（任意指定）

フェールオーバー・モニタのモニタ設定のプロパティは、SiteScope のほかのモニタと同じ方法で変更できます。

たとえば、報告された各モニタ・インスタンスの状態を判別する条件は、[しきい値の設定] で変更できます。モニタしきい値の変更の詳細については、384 ページ「しきい値設定」を参照してください。

3 警告およびレポートの設定

デプロイしたフェールオーバー・モニタに警告を設定して、プライマリ SiteScope の状態の変化や、フェールオーバーの発生時期についての通知を受けます。警告の設定の詳細については、1276 ページ「警告の設定方法」を参照してください。

新しく作成したフェールオーバー・モニタのレポートを設定することもできます。レポートの設定の詳細については、1338 ページ「レポートの作成方法」を参照してください。

4 フェールオーバー時の監視結果の表示

プライマリ SiteScope が停止した場合、プライマリ SiteScope の状態の変化を通知する警告がトリガされます。フェールオーバー時の監視結果を表示するには、次の形式を使用して Web ブラウザをフェールオーバー SiteScope サーバのアドレスにリダイレクトする必要があります。

`http:// <フェールオーバー・マシン名> : <フェールオーバー・マネージャ・ポート> /SiteScope`

例 : `http://localhost:8080/SiteScope`。

5 プライマリ SiteScope 回復時の監視結果の表示

プライマリ SiteScope が回復すると、[Primary SiteScope has Recovered] モニタに警告が設定されている場合は警告がトリガされます。監視結果を表示するには、次の形式を使用して Web ブラウザをプライマリ SiteScope インスタンスのアドレスにリダイレクトします。

`http://<プライマリ SiteScope 名> : <プライマリ SiteScope ポート> /SiteScope`

参照情報

[Failover Monitoring Template] ページ

このページでは、プライマリ SiteScope サーバにフェールオーバー監視テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[Failover Monitoring Templates] コンテナを展開し、必要なテンプレートを選択します。
関連タスク	962 ページ「フェールオーバー監視テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	958 ページ「フェールオーバー監視テンプレートの概要」

Windows 用フェールオーバー監視テンプレート

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
[Failover Manager host]	フェールオーバー・マネージャ・ホストの名前。
[Failover Manager user name]	SiteScope がフェールオーバー・マネージャへの接続時に使用する管理者資格情報を持つユーザ名。
[Failover Manager password]	SiteScope がフェールオーバー・マネージャへの接続時に使用するユーザ名のパスワード。
[Failover Manager ha.log path]	フェールオーバー・マネージャの ha.log ファイルへのフル UNC パス。 標準設定値 : ¥¥<フェールオーバー・マネージャ・サーバ>¥SiteScope¥logs¥ha.log

UI 要素	説明
[Primary SiteScope installation path]	プライマリ SiteScope サーバのフル・インストール・パス。 標準設定値: ¥¥¥¥<共有フォルダ>¥¥<プライマリ・サーバ>¥¥SiteScope 構文の例外: インストール・パスにメタ文字を使用している場合、その文字に通常の意味を持たせる場合はエスケープする必要があります。メタ文字をエスケープするには、メタ文字の前に円記号 (¥) を付けます。
[ログ ファイルのエンコード]	監視するログ・ファイルの内容で、SiteScope を実行するサーバとは別のエンコーディングを使用している場合、使用するエンコーディングを入力します。これは、SiteScope が使用するコード・ページが記録先ログ・ファイルで使用する文字セットをサポートしていない場合に必要となる可能性があります。ここで指定することで、SiteScope がエンコードされたログ・ファイルの内容を正確に照合および表示できます。 標準設定値: UTF-8
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値: 選択されていない
[リモート サーバで モニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注: このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値: 選択されている

UNIX 用フェールオーバー監視テンプレート

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
[Failover Manager Host]	フェールオーバー・マネージャ・ホストの名前。
[Failover Manager User]	SiteScope がフェールオーバー・マネージャへの接続時に使用する管理者資格情報を持つユーザ名。
[Failover Manager Password]	SiteScope がフェールオーバー・マネージャへの接続時に使用するユーザ名のパスワード。
[Failover Manager HA Log]	フェールオーバー・マネージャの ha.log ファイルへのフル・パス。 標準設定値 : %opt%SiteScope%logs%ha.log
[Primary SiteScope Installation Path]	プライマリ SiteScope サーバのフル・インストール・パス。 構文の例外 : インストール・パスにメタ文字を使用している場合、その文字に通常の意味を持たせる場合はエスケープする必要があります。メタ文字をエスケープするには、メタ文字の前に円記号 (¥) を付けます。 標準設定値 : //<HA マウント>//<プライマリ・サーバ>//SiteScope
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <SiteScope のルート・ディレクトリ> %logs%silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
[リモート サーバでモニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 : 選択されている

39

SiteScope ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

▶ ソリューション・テンプレートの概要 (970 ページ)

タスク

▶ SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (974 ページ)

参照情報

▶ ソリューション・テンプレート・ページ (976 ページ)

注意事項と制限事項 (977 ページ)

概念

ソリューション・テンプレートの概要

SiteScope ソリューション・テンプレートは、一般的なエンタープライズ・アプリケーションやネットワーク・システムを監視するために設計された、事前設定済みのモニタ・セット・テンプレートです。ソリューション・テンプレートを使用すると、標準の SiteScope モニタ・タイプとソリューション固有のモニタを組み合わせ、対象アプリケーションやシステムの可用性、パフォーマンス、状況を監視するために最適化された設定により迅速にデプロイできます。たとえば、Microsoft Exchange 監視のソリューションには、パフォーマンス・カウンタ、イベント・ログ、Exchange アプリケーション固有のモニタ・タイプが含まれます。

ソリューションをデプロイすると、新しいモニタ・グループ・コンテナが作成され、その中に個々のソリューション・モニタが追加されます。ソリューション・テンプレートは、環境内のサーバごとにデプロイできます。ソリューション・テンプレートでシステム変数 `SERVER_LIST` を使用すると、複数のリモート・ホストにソリューションをデプロイできます。

本項の内容

- ▶ 971 ページ「ソリューション・テンプレートのリスト」
- ▶ 973 ページ「ソリューション・テンプレートのカスタマイズ」
- ▶ 973 ページ「注意事項および制限事項」

ソリューション・テンプレートのリスト

次の表に、SiteScope で使用可能なソリューション・テンプレートを示します。各ソリューションとソリューション固有のモニタ・タイプの詳細については、各ソリューション・テンプレートに関する章を参照してください。

ソリューション名	説明
Active Directory ソリューション・テンプレート	Microsoft ドメイン・コントローラのパフォーマンスおよび効率を監視します。
AIX Host ソリューション・テンプレート	AIX ホスト・マシンのパフォーマンス、可用性、状況を監視します。
HP Quality Center ソリューション・テンプレート	Windows および UNIX 上の HP Quality Center 9.x および 10.x アプリケーション・サーバのパフォーマンス、可用性、状況、Oracle データベース・サーバ上の HP Quality Center ライセンスの使用状況および有効期限、HP QuickTest Professional ライセンス・サーバ・アプリケーションおよびシステムの可用性を監視します。
HP Service Manager ソリューション・テンプレート	Windows および UNIX プラットフォーム上の HP Service Manager アプリケーション・サーバの可用性とシステム状態を監視します。
JBoss Application Server ソリューション・テンプレート	JBoss 環境のパフォーマンス、可用性、状況を監視します。
Linux Host ソリューション・テンプレート	Linux ホスト・マシンのパフォーマンス、可用性、状況を監視します。
Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート	Microsoft Exchange 5.5, 2000, 2003, 2007 サーバのアプリケーション状況、メッセージ・フロー、使用統計を監視するための個別のソリューション・オプションが含まれます。 注 : Microsoft Exchange 2010 サーバに対して Microsoft Exchange 2007 ソリューション・テンプレートをデプロイすることもできます。
Microsoft IIS ソリューション・テンプレート	IIS 6.0 環境のパフォーマンス、可用性、状況を監視します。
Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート	Microsoft SQL Server 2005, 2008, 2008 R2 のパフォーマンス、可用性、使用統計を監視します。

ソリューション名	説明
Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート	Microsoft Windows 2000, Windows XP, Windows Server 2003 のホスト・マシンのパフォーマンス, 可用性, 状況を監視します。
.NET ソリューション・テンプレート	Microsoft Windows 2000, Windows XP, Windows Server 2003 上の .NET アプリケーションおよび環境のパフォーマンス, 可用性, 状況を監視します。
Oracle Database ソリューション・テンプレート	Oracle 9i, 10g, 11g データベースのパフォーマンス, 可用性, 使用統計を監視します。
SAP ソリューション・テンプレート	SAP システム・コンポーネントのパフォーマンス, 可用性, 使用統計を監視します。
Siebel ソリューション・テンプレート	Windows および UNIX オペレーティング・システムにインストールされた Siebel アプリケーション・サーバのパフォーマンス, 可用性, 使用統計を監視します。
Solaris Host ソリューション・テンプレート	Solaris ホスト・マシンのパフォーマンス, 可用性, 状況を監視します。
WebLogic ソリューション・テンプレート	BEA WebLogic アプリケーション・サーバのパフォーマンス, 可用性, 使用統計を監視します。
WebSphere ソリューション・テンプレート	IBM WebSphere Server 5.x アプリケーション・サーバのパフォーマンス, 可用性, 使用統計を監視します。

ソリューション・テンプレートのカスタマイズ

ソリューション・テンプレートに適合しないシステム設定もあるため、システム要件に合わせて次のようにソリューション・テンプレートをカスタマイズできます。

- ▶ ソリューション・テンプレートをテンプレート・コンテナにコピーし、システム要件に合わせて変更して、変更後のソリューション・テンプレートをデプロイする。
- ▶ ソリューション・テンプレートをデプロイし、デプロイ後にシステムの要件に合わせて変更する。

たとえば、HP Quality Center アプリケーション・サーバ・ソリューション・テンプレートを使用して、アプリケーション・サーバとは別のホスト上にあるリポジトリのディスク変数を監視する場合、テンプレートのデプロイ後に、リポジトリのディスク使用率モニタをほかのホストを使用するように変更する必要があります。

注意事項および制限事項

- ▶ ソリューション・テンプレートを使用したモニタの作成中に検出されたエラーは、個々のモニタの実行時に返される状態とは関係ありません。つまり、モニタが正常に作成されていても、設定が不正確な場合や監視対象のシステムが使用できない場合があります。
- ▶ ソリューション・テンプレートのデプロイ後、関連するモニタが **[BSM への測定値レポートを無効化する]** の BSM レポーティング・レベルで定義されている場合があります。そのため、ソリューション・テンプレートのデプロイ後、モニタのレポーティング・レベルをチェックすることをお勧めします。デプロイされたモニタのレポーティング・レベルを変更する場合、**[グローバル検索と置換]** ウィザードを使用してレポーティング・レベル・オプションを変更できます。
- ▶ ソリューション・テンプレートでは、作成したモニタに対して自動警告やレポートは設定されません。警告定義やレポートを 1 つ以上作成し、ソリューション・テンプレートで作成したモニタまたはモニタ・グループに関連付ける場合もあります。

タスク

SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、ソリューション・テンプレートをデプロイする手順について説明します。環境内のサーバごとにソリューション・テンプレートをデプロイします。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 974 ページ「前提条件」
- ▶ 974 ページ「テンプレートのデプロイ」
- ▶ 975 ページ「テンプレート・デプロイメントの変数の値の入力」
- ▶ 975 ページ「警告およびレポートの設定」
- ▶ 975 ページ「結果」

1 前提条件

- ▶ ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- ▶ ライセンスは、[プリファレンス] > [一般プリファレンス] > [ライセンス] のライセンス・ファイルからインポートする必要があります。ユーザ・インタフェースの詳細については、614 ページ「一般プリファレンス・ページ」を参照してください。

2 テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをグループにデプロイする方法を次から選択します。

- ▶ ユーザ・インタフェースからソリューション・テンプレートを直接デプロイできます。テンプレート・ツリーで、デプロイするソリューション・テンプレートを右クリックし、[テンプレートのデプロイ] を選択します。[グループの選択] ダイアログ・ボックスで、ソリューション・テンプレートをデプロイするモニタ・グループを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、924 ページ「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

- ▶ テンプレート内に定義した変数の値が含まれる CSV ファイルを使用して、ソリューション・テンプレートをデプロイできます。概念の詳細については、859 ページ「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ」を参照してください。タスクの詳細については、877 ページ「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照してください。
- ▶ SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用してテンプレートをデプロイし、更新することもできます。概念の詳細については、932 ページ「自動テンプレート・デプロイメントの概要」を参照してください。

3 テンプレート・デプロイメントの変数の値の入力

選択したソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、各ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページを参照してください。

4 警告およびレポートの設定

新しく作成したソリューション・モニタに警告とレポートを設定します。

警告設定の詳細については、1276 ページ「警告の設定方法」を参照してください。

レポートの設定の詳細については、1338 ページ「レポートの作成方法」を参照してください。

5 結果

ソリューション・テンプレートによって新しいモニタ・グループ・コンテナが作成され、その中に個々のソリューション・モニタが追加されます。このモニタ・グループ・コンテナには、<ソリューション・テンプレート名> on <サーバ名>の形式で名前が割り当てられます。サーバ名は、[サーバ] ボックスで選択したサーバです。

これらのモニタは、SiteScope のほかのモニタと同じ方法で表示、編集、削除できます。

注: デプロイに失敗したモニタがある場合、モニタ名のリストを含むメッセージが、エラーを説明するメッセージと一緒に表示されます。

参照情報

ソリューション・テンプレート・ページ

このページには、選択したソリューション・テンプレートの名前と説明が表示されます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] コンテナを展開し、必要なテンプレートを選択します。
重要な情報	▶ ライセンスが供与され , アイコンと一緒に表示されているソリューション・テンプレートのみを設定できます。 ▶ [タグの検索/フィルタ] 表示枠は、ソリューション・テンプレート・オブジェクトのフィルタリングには使用できません。
関連タスク	974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	83 ページ「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
[名前]	ソリューション・テンプレートの名前（読み取り専用）。
[詳細]	ソリューション・テンプレートの説明（読み取り専用）。

注意事項と制限事項

このセクションでは、SiteScope ソリューション・テンプレートのトラブルシューティングおよび制限事項について説明します。

- ▶ 977 ページ「ソリューション・テンプレートの再インストール」
- ▶ 978 ページ「テンプレートのインポート」

ソリューション・テンプレートの再インストール

インストールされたソリューション・テンプレートは、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>%persistency** ディレクトリにあります。このディレクトリの内容が削除されると、ソリューション・テンプレートはテンプレート・ツリーに表示されなくなります。ソリューション・テンプレートを再インストールするには、ソリューション・テンプレート・ファイルを**永続**ディレクトリに再度コピーする必要があります。

注：永続ディレクトリを削除すると、SiteScope 設定データと BSM の履歴データ（SiteScope が BSM と統合されている場合）がすべて永続的に削除されるため、お勧めしません。

ソリューション・テンプレート・ファイルを再インストールするには、次の手順で行います。

- 1 **<SiteScope のルート・ディレクトリ>%export** でソリューション・テンプレート・ファイルを見つけます。
- 2 **<SiteScope のルート・ディレクトリ>%export** の内容を **<SiteScope のルート・ディレクトリ>%persistency%import** にコピーします。
- 3 ソリューション・テンプレートが再インストールされたことをチェックするには、テンプレート・ツリーの **[ソリューション テンプレート]** フォルダでそのソリューション・テンプレートを見つけます。

テンプレートのインポート

- ▶ テンプレートをインポートする場合、同じテンプレート・コンテナに同じ名前のテンプレートがすでにある場合は、一意の名前に関する違反によりインポートが失敗する可能性があります。これを回避するには、既存のテンプレート・コンテナの名前を変更します。
- ▶ インポートが失敗するか、または [ソリューション テンプレート] ツリーのソリューション・テンプレートを表示できない場合、**<SiteScope ルート・ディレクトリ>%export** フォルダから **<SiteScope ルート・ディレクトリ>%persistency%import** フォルダにコピーするとこれらのテンプレートを回復できます。**%export** フォルダにテンプレートのサンプルおよびフェールオーバー監視テンプレートも含む場合、前述の一意の名前に関する違反を避けるためにテンプレート・コンテナの名前を変更する必要があります。

40

Active Directory ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ Active Directory ソリューションの概要 (980 ページ)

タスク

- ▶ Active Directory ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (982 ページ)

参照情報

- ▶ Active Directory ソリューション・テンプレート・ページ (983 ページ)

概念

Active Directory ソリューションの概要

Active Directory ソリューション・テンプレートを使用して、ドメイン・コントローラのパフォーマンス、Active Directory が依存するサービス、分散 Active Directory パフォーマンスを監視できます。

Active Directory ソリューション・テンプレートでは、特定のドメイン・コントローラに対して一連のモニタがデプロイされます。これらのモニタは、Active Directory の監視のベスト・プラクティスを網羅しています。このテンプレートには、NT イベント・ログ、サービス、LDAP、パフォーマンス・カウンタ、Active Directory レプリケーションのモニタが含まれています。

Active Directory ソリューション・テンプレートでは包括的な監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ Active Directory ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ Active Directory ソリューションの詳細については、『SiteScope Active Directory Best Practices』（英語版）を参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれていて、**< SiteScope のルート・ディレクトリ>%sidsocs¥pdfs¥ SiteScope_Active_Directory_Best_Practices.pdf** にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Active Directory ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

Active Directory ソリューション・テンプレートでは、Active Directory パフォーマンスの次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- ▶ **ドメイン・コントローラのパフォーマンス。**このカテゴリの対象は、環境の各ドメイン・コントローラの低レベルの状況です。Active Directory ソリューション・テンプレートでは、ドメイン・コントローラの状況のモニタが自動的に設定されます。
- ▶ **依存するサービス。**Active Directory は、複数の重要なサービスに依存しています。これらのサービスがないと、Active Directory は反応しなくなるか、完全に機能しなくなります。Active Directory ソリューション・テンプレートでは、Active Directory パフォーマンスを左右する重要なサービスのリストのモニタが自動的に設定されます。
- ▶ **分散 Active Directory パフォーマンス。**Active Directory パフォーマンスの最も重要な側面であり、鍵となる指標は、Active Directory によってすべてのドメイン・コントローラに変更が複製される速度だと考えられます。Active Directory ソリューション・テンプレートでは、変更や更新のレプリケーションを監視およびテストするようにモニタが自動的に設定されます。

注：ソリューション・テンプレートによってデプロイされるモニタ・タイプの中には、Active Directory ソリューション・セットを使用しないと SiteScope に追加できないものもあります。詳細については、特定のモニタ・タイプのセクションを参照してください。

タスク

Active Directory ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Active Directory ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 982 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 982 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

Active Directory ソリューション・テンプレートの「デプロイメント値」ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、983 ページ「Active Directory ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

参照情報

Active Directory ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、SiteScope Active Directory ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューションテンプレート]を展開し、必要な Active Directory ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	▶ 979 ページ「Active Directory ソリューション・テンプレート」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
[ReplicatingDomain Controllers]	上記で選択したドメイン・コントローラのデータを複製するドメイン・コントローラのカンマ区切りリスト。
[LDAPSecurity Principal]	ドメイン管理者アカウントの LDAP セキュリティ・プリンシパル。Active Directory の場合、これは cn=Domain Admin User,cn=users,dc=yoursite,dc=com の形式になります。
[LogicalDrive]	該当のドメイン・コントローラで使用しているデータベースとログ・ファイルの論理ドライブ。
[PASSWORD]	上記で選択したユーザのパスワード。
[HostName]	ドメイン・コントローラのホスト名のホスト部分（完全修飾ドメイン名は含まれません）。

UI 要素	説明
[Global Catalog (AD with Global Catalog ONLY)]	ドメイン・コントローラがグローバル・カタログ・サーバである場合に選択します。
[SERVER_LIST]	監視するドメイン・コントローラ。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
[リモート サーバで モニタ プロパティ を検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 : 選択されている

41

AIX Host ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ AIX Host ソリューションの概要 (986 ページ)

タスク

- ▶ AIX Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (988 ページ)

参照情報

- ▶ AIX Host ソリューションの設定要件 (989 ページ)
- ▶ AIX Host ソリューション・テンプレート・ページ (989 ページ)

概念

AIX Host ソリューションの概要

AIX Host ソリューション・テンプレートは、標準設定の測定値で設定された一連のモニタ（AIX ホストの状況、可用性、パフォーマンスをテスト）をデプロイする場合に使用できるテンプレートです。このテンプレートでは、**SiteScope** でサポートされているバージョンの AIX がサポートされます。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) の「システム要件」を参照してください。

UNIX リソース・モニタの場合、監視対象サーバの 3 つの異なる測定値のデータが表示される、サーバ中心のレポートを作成できます。必要なモニタおよび測定値があらかじめ設定されているため、UNIX リソース・モニタを作成する場合はソリューション・テンプレートを使用することをお勧めします。サーバ中心のレポートの生成の詳細については、1166 ページ「サーバ中心のレポートの生成」を参照してください。

AIX Host ソリューション・テンプレートは包括的な AIX オペレーティング・システムの監視が可能です。**SiteScope** ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、さまざまなパフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ AIX Host ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ AIX Host ソリューションの設定の詳細については、『SiteScope Operating System Host Best Practices』（英語版）を参照してください。このドキュメントは、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>%sisdocs%pdfs %SiteScope_OS_Best_Practices.pdf** にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Operating System のホスト・ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

AIX Host ソリューション・テンプレートでは、AIX のパフォーマンスと状況の次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- ▶ CPU の状態と使用率の詳細
- ▶ メモリの状態と使用率の詳細
- ▶ ファイル・システムの状態と使用率の詳細

タスク

AIX Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定する手順と、AIX Host ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

注：AIX Host ソリューション・テンプレートでは、対象ホストごとに UNIX リソース・モニタがデプロイされます。これは、サーバ中心のレポートをサポートするために必要となる補足モニタです。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 988 ページ「AIX サーバ環境の設定」
- ▶ 988 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 988 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 AIX サーバ環境の設定

サーバ環境に関連する設定要件を実行します。概念の詳細については、989 ページ「AIX Host ソリューションの設定要件」を参照してください。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

AIX ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、989 ページ「AIX Host ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

参照情報

AIX Host ソリューションの設定要件

AIX Host ソリューション・テンプレートを使用する前に、サーバ環境に関連する多数の設定要件があります。

- ▶ SiteScope サーバから対象 AIX ホストに接続できる必要があります。
- ▶ 対象サーバを UNIX リモート・マシンとして SiteScope に追加し、UNIX リモート・テストにパスする必要があります（[リモート サーバ] > [UNIX リモート サーバ]）。詳細については、518 ページ「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
- ▶ サポートされている AIX オペレーティング・システムが SiteScope サーバで実行されている場合、そのサーバ自体を監視することもできます。
- ▶ このテンプレートでは、SiteScope でサポートされているバージョンの AIX がサポートされます。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) の「システム要件」を参照してください。

AIX Host ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、SiteScope AIX ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、[AIX Host] を選択します。
関連タスク	974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	▶ 985 ページ「AIX Host ソリューション・テンプレート」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
[SERVER_LIST]	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。UNIX 接続プロファイルを作成する手順については、518 ページ「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 ：選択されていない
[リモート サーバで モニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 ：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 ：選択されている

42

HP Quality Center ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ HP Quality Center ソリューション・テンプレートの概要 (992 ページ)

タスク

- ▶ HP Quality Center ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (995 ページ)

参照情報

- ▶ HP Quality Center ソリューション・テンプレートの設定要件 (996 ページ)
- ▶ HP Quality Center ソリューション・テンプレート・ページ (998 ページ)
- ▶ トラブルシューティングと制限事項 (1008 ページ)

概念

HP Quality Center ソリューション・テンプレートの概要

HP Quality Center ソリューション・テンプレートは、HP Quality Center 9.x および 10.x アプリケーション・サーバの可用性、HP Quality Center 9.2 および 10.0 データベース・サーバのライセンスの状態、HP QuickTest Professional ライセンス・サーバ・アプリケーションおよびシステム可用性をテストする、標準設定の測定値で設定されたモニタの収集をデプロイするために使用できるテンプレートです。

HP Quality Center ソリューション・テンプレートは、包括的な HP Quality Center による監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織がアプリケーションのエキスパートである必要はありません。また、さまざまなパフォーマンス・モニタを設定およびデプロイする時間の削減や、リアルタイムのパフォーマンス・ボトルネックと長期的な傾向の特定に役立ち、実運用システムには最小限のオーバーヘッドのみが追加されます。

注：

- ▶ HP Quality Center ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- ▶ HP Quality Center ソリューションの詳細は、『SiteScope Quality Center Best Practices』（英語版）を参照してください。このドキュメントは、SiteScope インストールに含まれており、<SiteScope のルート・ディレクトリ> `%sdocs%\pdfs\SiteScope_HP_QC_Best_Practices.pdf` にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、HP Quality Center ソリューションのライセンス・キーとともに HP から提供されます。

本項の内容

- ▶ 993 ページ「ソリューション・テンプレート・モニタ」
- ▶ 993 ページ「Quality Center のサードパーティ・アプリケーションの監視」

ソリューション・テンプレート・モニタ

HP Quality Center ソリューションには、次の主要コンポーネントを監視するソリューション・テンプレートが含まれます。

- ▶ **HP Quality Center Application Server for UNIX/Windows。** このソリューション・テンプレートは、アプリケーションがインストールされているオペレーティング・システムの HP Quality Center アプリケーション・サーバの可用性とパフォーマンスを監視するために使用します。
- ▶ **HP Quality Center 9.2/10.0 License Status :** このソリューション・テンプレートは、HP Quality Center データベース・サーバでの HP Quality Center のライセンス使用状況と有効期限を監視するために使用します（ソリューション・テンプレートは Oracle および Microsoft SQL データベースで認定されています）。
- ▶ **HP QuickTest Professional License Server :** このソリューション・テンプレートは、HP QuickTest Professional ライセンス・サーバの可用性とパフォーマンスを監視するために使用します。

Quality Center のサードパーティ・アプリケーションの監視

Quality Center がデプロイされているアプリケーション・サーバ、使用されるデータベースなど、Quality Center のサードパーティ・コンポーネントの監視には、ほかの SiteScope ソリューション・テンプレートまたはモニタ、あるいはその両方を使用することをお勧めします。

Quality Center のサードパーティ・コンポーネントの監視に推奨されるソリューションの詳細については、次の表を参照してください。

データベース・サーバの監視

データベース・タイプ	推奨ソリューション
Oracle	1073 ページ「Oracle Database ソリューション・テンプレート」
Microsoft SQL Server	1049 ページ「Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート」
LDAP	『Monitor Reference』（英語版）の「LDAP Monitor」を参照してください。

アプリケーション/Web サーバの監視

アプリケーション/Web サーバのタイプ	推奨ソリューション
Apache サーバ	『Monitor Reference』（英語版）の「Apache Server Monitor」を参照してください。
JBoss	1019 ページ「JBoss Application Server ソリューション・テンプレート」
Microsoft IIS	1043 ページ「Microsoft IIS ソリューション・テンプレート」 『Monitor Reference』（英語版）の「Microsoft IIS Server Monitor」を参照してください。
WebLogic 6.x-8.x, 9.x-10.x	1109 ページ「WebLogic ソリューション・テンプレート」
WebSphere 5.x, 6.x	1119 ページ「WebSphere ソリューション・テンプレート」
JMX アクセス (JSR 160) をサポートするその他の Web/アプリケーション・サーバ	『Monitor Reference』（英語版）の「JMX Monitor」を参照してください。

タスク

HP Quality Center ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、変数を入力する手順と HP Quality Center ソリューション・テンプレートをデプロイする手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 995 ページ「HP Quality Center サーバ環境の設定」
- ▶ 995 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 995 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 HP Quality Center サーバ環境の設定

サーバ環境に関連する設定要件を実行します。概念の詳細については、996 ページ「HP Quality Center ソリューション・テンプレートの設定要件」を参照してください。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の概要については、974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

HP Quality Center ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インターフェースの詳細については、998 ページ「HP Quality Center ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

参照情報

HP Quality Center ソリューション・テンプレートの設定要件

HP Quality Center ソリューション・テンプレートを使用するには、サーバ環境に関する設定要件がいくつかあります。

本項の内容

- ▶ 996 ページ「HP Quality Center Application Server for Windows」
- ▶ 997 ページ「HP Quality Center Application Server for UNIX」
- ▶ 997 ページ「HP Quality Center 9.2/10.0 License Status」
- ▶ 998 ページ「HP QuickTest Professional License Server」

HP Quality Center Application Server for Windows

HP Quality Center Application Server for Windows ソリューション・テンプレートをデプロイする要件は、次のとおりです。

- ▶ SiteScope サーバから Quality Center コンポーネントにアクセスできる。
- ▶ 次の情報がわかっている。
 - ▶ Quality Center アプリケーションのバージョン (9.2, 10.0)
 - ▶ アプリケーション・サーバの完全なホスト名とログイン資格情報
 - ▶ Quality Center リポジトリ・ディスクまたはリポジトリの場所 (別のホストにある場合)
 - ▶ ログイン URL で使用されるポート (通常は指定なし。つまりポート 80 が使用される)

注：このソリューション・テンプレートは UNIX プラットフォームにインストールされている SiteScope ではサポートされません。

HP Quality Center Application Server for UNIX

HP Quality Center Application Server for UNIX ソリューション・テンプレートをデプロイする要件は、次のとおりです。

- ▶ SiteScope サーバから Quality Center コンポーネントにアクセスできる。
- ▶ 次の情報がわかっている。
 - ▶ Quality Center アプリケーションのバージョン (9.2, 10.0)
 - ▶ UNIX オペレーティング・システムのタイプ
 - ▶ アプリケーション・サーバの完全なホスト名とログイン資格情報
 - ▶ システムのファイル・システム
 - ▶ Quality Center リポジトリ・ディスクまたはリポジトリの場所 (別のホストにある場合)
 - ▶ ログイン URL で使用されるポート (通常は指定なし。つまりポート 80 が使用される)
 - ▶ UNIX オペレーティング・システムで Quality Center アプリケーションを実行する java プロセス・コマンドの名前 ("ps -ef | grep java" を使用できる)。

HP Quality Center 9.2/10.0 License Status

HP Quality Center 9.2/10.0 License Status ソリューション・テンプレートをデプロイする要件は、次のとおりです。

- ▶ SiteScope サーバから Quality Center 9.2 または 10.0 コンポーネントにアクセスできる。
- ▶ Quality Center データベースに関する次の情報がわかっている。
 - ▶ データベースのホスト名
 - ▶ タイプ (Oracle, Microsoft SQL, MSDE 2000)
 - ▶ ドライバ (SiteScope に組み込まれているデータベース・ドライバの可能性あり)
 - ▶ データベース接続 URL
 - ▶ データベース・ユーザ名とパスワード

HP QuickTest Professional License Server

HP QuickTest Professional License Server ソリューション・テンプレートをデプロイする要件は、次のとおりです。

- ▶ SiteScope サーバから QuickTest Professional ライセンス・サーバにアクセスできる。
- ▶ QuickTest Professional ライセンス・サーバのホスト名とログイン資格情報がわかっている。

注：このソリューション・テンプレートは UNIX プラットフォームにインストールされている SiteScope ではサポートされません。



HP Quality Center ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、Windows および UNIX プラットフォームの HP Quality Center 9.x と 10.x アプリケーション・サーバの監視、さらに HP Quality Center 9.2 または 10.0 データベース・サーバのライセンス使用状況と有効期限の監視を行うために、HP Quality Center ソリューション・テンプレートをデプロイできます。また、これらのテンプレートで、HP QuickTest Professional ライセンス・サーバ・アプリケーションとシステムの可用性も監視できます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで [ソリューション テンプレート] を展開し、必要な HP Quality Center ソリューション・テンプレートを選択します。
重要な情報	ソリューション・テンプレートでは、Ping モニタを使用してシステムの可用性を監視します。ネットワークで Ping トラフィックがブロックされている場合は、代わりにポート・モニタを使用する必要があります。
関連タスク	974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	▶ 992 ページ「HP Quality Center ソリューション・テンプレートの概要」 ▶ 1008 ページ「トラブルシューティングと制限事項」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

HP Quality Center Application Server for Windows

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
[Application server host name]	Quality Center アプリケーション・サーバのホスト名。
[Application server user name]	Quality Center アプリケーション・サーバのホストのログイン・ユーザ名。
[Application server password]	Quality Center アプリケーション・サーバのホストのパスワード。
[System disk]	Quality Center アプリケーション・サーバがインストールされている論理ディスク・ドライブ。 標準設定値 : C
[Repository disk]	Quality Center リポジトリがインストールされている論理ディスク・ドライブ。リポジトリが別のホストにある場合は、システム・ディスク・ドライブを入力し、テンプレートをデプロイした後にリポジトリ・ディスク使用率モニタを変更します。 標準設定値 : D
[Site Administration path]	Quality Center Site Administration の URL のサフィックス。 標準設定値 : qcbin/SiteAdmin.htm。 Quality Center バージョン 9.x の場合は、これを sabin に変更します。
[Application port]	Quality Center アプリケーションへのログイン URL で使用されるポート。通常はポートが指定されません。つまり、ポート 80 が使用されます。 標準設定値 : 80
[Maximum round trip time (milliseconds)]	アプリケーション URL から応答を得るのに妥当な往復時間のエラー・ステータスしきい値として使用されるミリ秒の値。 標準設定値 : 1500 ミリ秒

UI 要素	説明
[Quality Center service name]	Quality Server サービスの名前。 標準設定値 : HP Quality Center。Quality Center バージョン 9.x の場合は、これを Mercury Quality Center に変更します。
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメント結果は、 <SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
[リモート サーバで モニタ プロパティ を検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 : 選択済み

HP Quality Center Application Server for UNIX

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
[Application server host name]	Quality Center アプリケーション・サーバのホスト名。
[Application server user name]	Quality Center アプリケーション・サーバのホストのログイン・ユーザ名。
[Application server password]	Quality Center アプリケーション・サーバのホストのパスワード。

UI 要素	説明
[UNIX operating system]	UNIX オペレーティング・システムのタイプ。Sun Solaris, Red Hat Enterprise Linux など。UNIX オペレーティング・システム・タイプのリストは、新規 UNIX リモート・サーバ/UNIX リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックスの [オペレーティング システム] フィールドに表示されます。 標準設定値 : Linux
[System file system]	Quality Center アプリケーション・サーバがインストールされているファイル・システム。
[Repository file system]	Quality Center リポジトリがあるファイル・システム。リポジトリが別のホストにある場合は、システム・ディスクのファイル・システムを入力し、テンプレートをデプロイした後にリポジトリ・ディスク使用率モニタを変更します。
[Site Administration path]	Quality Center Site Administration の URL のサフィックス。 標準設定値 : qcbn/SiteAdmin.htm。Quality Center バージョン 9.x の場合は、これを sabin に変更します。
[Application port]	Quality Center アプリケーションへのログイン URL で使用されるポート。通常はポートが指定されません。つまり、ポート 80 が使用されます。 標準設定値 : 80
[Maximum round trip time (milliseconds)]	アプリケーション URL から応答を得るのに妥当な往復時間のエラー・ステータスしきい値として使用されるミリ秒の値。 標準設定値 : 1500 ミリ秒

UI 要素	説明
[Quality Center process unique name]	システムで実行されているほかのプロセスと Quality Center の java プロセスを識別するために使用する名前。Quality Center プロセス名, または UNIX オペレーティング・システムで Quality Center アプリケーションを実行する java プロセス・コマンドの一意の部分を使用できます (ps -ef grep java を使用できます)。
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され, SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより, テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメント結果は, <SiteScope のルート・ディレクトリ> %logs%silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値: 選択されていない
[リモート サーバでモニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して, テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注: このオプションを選択すると, リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値: 選択済み

HP Quality Center 9.2/10.0 License Status

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
[Site Administration database host]	Quality Center Site Administration がインストールされているホスト名。
[Database driver]	データベースへの接続に使用するデータベース・ドライバ。カスタム・ドライバを使用する場合は、ドライバを <SiteScope のルート・ディレクトリ>%WEB-INF%lib ディレクトリにインストールする必要があります。 標準設定値 : com.inet.ora.OraDriver (Oracle データベースをサポート)。Microsoft SQL の場合は com.mercury.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver を使用します。
[Connection URL (full)]	Quality Center データベース接続 URL。 例 : jdbc:inetora:[host]:[port]:[sid] (Oracle データベースの場合) jdbc:mercury:sqlserver://labm1qcrnd05.devlab.ad:1433;DatabaseName=May22_2008_db (Microsoft SQL の場合)
[Connection URL (part 0-3)]	接続 URL がセミコロン (;) で区切られた値で構成されている場合は、全体を [Connection URL (full)] フィールドに入力し、各部分を別々のフィールドに入力します。 例 : Connection URL (part 0) = jdbc:mercury:sqlserver://labm1qcrnd05.devlab.ad:1433 Connection URL (part 1) = DatabaseName=May22_2008_db セミコロンで区切られていない場合は、次のように [Connection URL (part 0)] に接続 URL 全体を入力します。 Connection URL (part 0) = jdbc:inetora:[host]:[port]:[sid] 注 : このように分割するのは、接続 URL がスクリプト・モニタのパラメータとして使用され、セミコロン (;) 文字がセキュリティ上の理由で許可されないためです。

UI 要素	説明
[Database user]	データベースのクエリに必要なユーザ名。 指定するユーザ名には、Site Administration データベースの ADMIN と SESSION_LICENSE テーブルで SELECT クエリを実行する権限が必要です。
[Database password]	特定のユーザ名でデータベースにログインし、SELECT クエリを実行するために必要なパスワード。
[Database password - encrypted]	暗号化形式のデータベース・パスワード。暗号化されたパスワードを取得するには、パスワードに対して次のツールを実行します。 <SiteScope のルート・ディレクトリ>%tools%AutoDeployment%encrypt_password.bat <パスワード> UNIX プラットフォームの場合は、 enrypt_password.sh <パスワード> を実行します。 注： 暗号化パスワードは、スクリプト・モニタのパラメータとして使用されます。暗号化はセキュリティ上の理由から必須です。
[Admin table name]	Quality Center ADMIN テーブルの名前。 標準設定値： ADMIN (Oracle データベースをサポート)。Microsoft SQL データベースの場合は td.ADMIN を使用します。
[Session license table name]	Quality Center セッション・ライセンス・テーブルの名前。 標準設定値： SESSION_LICENSE (Oracle データベースをサポート)。Microsoft SQL データベースの場合は td.SESSION_LICENSE を使用します。
[SiteScope expiration error status (days remaining)]	ライセンス有効期限のエラーしきい値。ライセンス有効期限のステータスがデプロイされた各モニタは、ライセンスの有効期限の残り日数がここで指定した数より少なくなるとエラー・ステータスになります。 標準設定値： 7 日
[SiteScope expiration warning status (days remaining)]	ライセンス有効期限の警告しきい値。ライセンス有効期限のステータスがデプロイされた各モニタは、ライセンスの有効期限の残り日数がここで指定した数より少なくなると警告ステータスになります。 標準設定値： 30 日

UI 要素	説明
[Number of free licenses for error]	ライセンス使用状況のエラーしきい値。ライセンス使用状況のステータスがデプロイされた各モニタは、使用可能なライセンスの数がここで指定した数より少なくなるとエラー・ステータスになります。 標準設定値 : 5
[Number of free licenses for warning]	ライセンス使用状況の警告しきい値。ライセンス使用状況のステータスがデプロイされた各モニタは、使用可能なライセンスの数がここで指定した数より少なくなると警告ステータスになります。 標準設定値 : 20
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメント結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
[リモート サーバでモニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 : 選択済み

注：

- ▶ Quality Center ライセンスは、XML 形式で Site Administration データベースの ADMIN テーブルに格納されます。これには、さまざまな Quality Center モジュール（不具合、要件など）の Quality Center ライセンスの有効期限およびクォータに関する情報が含まれています。この XML 形式は、Quality Center 9.2 と Quality Center 10.0 では異なります。SESSION_LICENSE という名前の別のテーブルには、ログインした各セッションのリアルタイムのエントリと使用されているライセンス・タイプが表示されます。
 - ▶ ライセンスの使用状況と有効期限を計算するために、SiteScope ソリューション・テンプレートではスクリプト（Microsoft Windows プラットフォームの場合は **runQCLicenseTool.bat**、UNIX プラットフォームの場合は **runQCLicenseTool.sh**）を実行するスクリプト・モニタが使用されます。スクリプトによって Quality Center データベースに照会され、要求したライセンス・タイプに関する次の情報がスクリプト・モニタに返されます。
Total=<total quota>;used=<currently used of this type>;free=<total-free>;exp_days=<left days for license to expire>.
-

HP QuickTest Professional License Server

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
[QTP license server host name]	QuickTest Professional ライセンス・サーバのホスト名。
[QTP license server user name]	QuickTest Professional ライセンス・サーバ・システム・ログインのユーザ名。
[QTP license server password]	QuickTest Professional ライセンス・サーバ・システム・ログインのパスワード。
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメント結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値：選択されていない
[リモート サーバで モニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値：選択済み

トラブルシューティングと制限事項

このセクションでは、HP Quality Center 9.2/10.0 License Status ソリューション・テンプレートのトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- ▶ ソリューション・テンプレートをデプロイした後に、モニタで**内容の照合エラー**が発生した場合、使用している Quality Center ではこのライセンス・タイプがサポートされていない可能性があります。
- ▶ その場合は、サポートされていないモニタを削除する必要があります。
- ▶ モニタがサポートされている場合は、**<SiteScope のルート・ディレクトリ> %scripts%qc_license_tool.log** にあるログ・ファイルを確認してください。

デバッグするためにログ・ファイルを設定するには、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>%conf%ems%tools%conf%core%Tools%log4j%PlainJava%log4j.properties** を開いて、

次のように設定します。

loglevel=DEBUG

43

HP Service Manager ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ HP Service Manager ソリューションの概要 (1010 ページ)

タスク

- ▶ HP Service Manager ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1012 ページ)

参照情報

- ▶ HP Service Manager ソリューションの設定要件 (1013 ページ)
- ▶ HP Service Manager ソリューション・テンプレート・ページ (1015 ページ)

概念

HP Service Manager ソリューションの概要

SiteScope の HP Service Manager ソリューション・テンプレートでは、Windows および UNIX プラットフォーム上の HP Service Manager アプリケーション・サーバの可用性とシステム状態を監視し、トラブルシューティングできます。HP Service Manager のロード・バランサ状態と共有メモリの使用率を測定し、致命的エラーがないかログを監視します。水平拡張モードの HP Service Manager の監視にも使用できます。このテンプレートは Service Manager 7.11 をサポートしています。

HP Service Manager ソリューション・テンプレートは包括的な監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、さまざまなパフォーマンス・モニタの設定とデプロイにかかる時間を短縮し、リアルタイムのパフォーマンス・ボトルネックと長期的な傾向のどちらの特定にも役立ちます。

注：

- ▶ HP Service Manager ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ Service Manager ソリューション・テンプレートの詳細については、『Service Manager Best Practices』（英語版）ドキュメントを参照してください。このドキュメントは、SiteScope インストールに含まれており、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>%sisdocs%\pdfs%\SiteScope_HP_SM_Best_Practices.pdf** にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、HP Service Manager ソリューションのライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

HP Service Manager ソリューション・テンプレートは、Windows および UNIX プラットフォーム上の HP Service Manager サーバのパフォーマンスと状況を監視対象とする動的なモニタのセットを作成します。モニタの詳細については、『SiteScope HP Service Manager Server Best Practices』（英語版）ドキュメントを参照してください。

タスク

HP Service Manager ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定する手順と、HP Service Manager ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1012 ページ「HP Service Manager 環境を設定する」
- ▶ 1012 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1012 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 HP Service Manager 環境を設定する

サーバ環境に関連する設定要件を実行します。概念の詳細については、1013 ページ「HP Service Manager ソリューションの設定要件」を参照してください。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

HP Service Manager ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インターフェースの詳細については、1015 ページ「HP Service Manager ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

参照情報

HP Service Manager ソリューションの設定要件

HP Service Manager ソリューション・テンプレートを使用する前に、サーバ環境に関連する多数の設定要件があります。

- ▶ テンプレートのデプロイ時、監視対象のプロセスはすべて起動し、稼動している必要があります。SiteScope が対象モニタを作成しようとしたときにプロセスが検出されない場合、「カウンタが選択されていません」というエラーが表示され、モニタが作成されません。

回避策：稼動していないプロセスがある場合、テンプレートを独自のテンプレート・コンテナにコピーし、プロセス・モニタを削除できます。後でプロセス・モニタを手動で作成するか、プロセス・モニタのみが含まれるテンプレートの別のコピーをデプロイします。

- ▶ HP Service Manager ソリューション・テンプレートがサポートするのは Service Manager 7.11 のみです。
- ▶ HP Service Manager for Windows ソリューション・テンプレートの場合、HP Service Manager がインストールされている Microsoft Windows リモート・サーバ上で **sm-lbstatus-win-ssh.bat** および **sm-shm-win-ssh.bat** スクリプトを実行する必要があります。詳細については、この後のタスクを参照してください。

注：HP Service Manager for UNIX ソリューション・テンプレートは <SiteScope のルート・ディレクトリ> /scripts.remote にある **sm-shm.txt** および **sm-lbstatus.txt** ファイルを使用して、リモート Service Manager UNIX ホスト上でコマンドを実行します。

sm-lbstatus-win-ssh.bat および sm-shm-win-ssh.bat スクリプトの実行

スクリプトを実行するには、次の手順を行います。

- 1 SSH サーバ (OpenSSH) をインストールして設定します。詳細については、569 ページ「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」を参照してください。
- 2 SiteScope がインストールされているマシンで、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥tools ディレクトリにある RemoteNTSSH.zip ファイルを検索します。監視対象のリモート Service Manager ホスト上で RemoteNTSSH.zip ファイルを展開します。zip ファイルの内容を C:¥Documents and Settings¥Administrator フォルダに置きます。
- 3 SiteScope がインストールされているマシンで、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥tools¥ServiceManager ディレクトリにある SM_Scripts_win_ssh.zip というファイルを見つけます。このファイルを、監視対象のリモート Service Manager ホストで C:¥Documents and Settings¥Administrator¥scripts に展開します (zip ファイルには sm-lbstatus-win-ssh.bat と sm-shm-win-ssh.bat というファイルが含まれています)。両方のスクリプトに実行権限があることを確認します。Service Manager を水平拡張モードで実行している場合、これをすべてのシステムで繰り返す必要があります。
- 4 Service Manager ログ・フォルダを共有します。[logs] フォルダを右クリックし、[プロパティ] > [共有] を選択します。[このフォルダを共有する] を選択し、[共有名] を入力します。SiteScope モニタがそのマシン上でモニタの実行に使用するユーザに共有権限を設定し、[OK] をクリックします。

 HP Service Manager ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、HP Service Manager ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで [ソリューション テンプレート] を展開して、必要な HP Service Manager ソリューション・テンプレートを選択します。
重要な情報	▶ HP Service Manager を水平拡張モードで実行している場合、HP Service Manager ソリューション・テンプレートをすべてのシステムでデプロイして設定する必要があります。 ▶ テンプレートのデプロイ時、監視対象のプロセスはすべて起動し、稼動している必要があります。「カウンタが選択されていません」というエラーが表示された場合、停止しているプロセスがあることを示します。この問題を解決するには、テンプレートのコピーを作成し、エラーが発生したモニタを削除してからテンプレートをデプロイします。 ▶ ソリューション・テンプレートでは、Ping モニタを使用してシステムの可用性を監視します。ネットワークで Ping トラフィックがブロックされている場合、ポート・モニタを使用し、[グローバル検索と置換] を使用して依存関係を Ping モニタからポート・モニタに置き換えます。
関連タスク	974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	▶ 1009 ページ「HP Service Manager ソリューション・テンプレート」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

HP Service Manager for Windows

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
[SM installation partition]	HP Service Manager がインストールされているディスク・ドライブ。 標準設定値 : C
[Application server host name]	アプリケーション・サーバ・ホストの名前。
[User name]	このプロファイルを使用してアプリケーション・サーバにアクセスするためのログイン名。
[Password]	このユーザのアプリケーション・サーバ・ログイン・パスワード。
[Installation path]	HP Service Manager バイナリが実行されているディレクトリへのパス。 標準設定値 : C:\Program Files\HP\Service Manager 7.11\Server\RUN
[CPU error threshold]	CP エラーを起動するためのしきい値。 標準設定値 : 90
[CPU warning threshold]	CPU 警告を起動するためのしきい値。 標準設定値 : 80
[Memory error threshold]	メモリ・エラーを起動するためのしきい値。 標準設定値 : 2202012 KB
[Memory warning threshold]	メモリ警告を起動するためのしきい値。 標準設定値 : 1,782,580 KB

UI 要素	説明
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値：選択されていない
[リモート サーバでモニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値：選択済み

HP Service Manager for UNIX - メイン設定

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
[SM installation partition]	HP Service Manager がインストールされているディスク・ドライブ。
[Application server host name]	アプリケーション・サーバ・ホストの名前。
[User name]	このプロファイルを使用してアプリケーション・サーバにアクセスするためのログイン名。
[Password]	このユーザのアプリケーション・サーバ・ログイン・パスワード。
[UNIX operating system]	HP Service Manager が実行されている UNIX オペレーティング・システム。
[UNIX connection method]	UNIX オペレーティング・システムへの接続に使用する方法。

UI 要素	説明
[Shell prompt]	リモート・システムがコマンドを処理できる時のプロンプト出力 (Telnet および Rlogin 接続方法のみ)。
[Installation path]	HP Service Manager バイナリが実行されているディレクトリへのパス。
[CPU error threshold]	CP エラーを起動するためのしきい値。 標準設定値 : 90
[CPU warning threshold]	CPU 警告を起動するためのしきい値。 標準設定値 : 80
[Memory error threshold]	メモリ・エラーを起動するためのしきい値。 標準設定値 : 2202012 KB
[Memory warning threshold]	メモリ警告を起動するためのしきい値。 標準設定値 : 1,782,580 KB
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
[リモート サーバで モニタ プロパティ を検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 : 選択済み

44

JBoss Application Server ソリューション・ テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ JBoss Application Server ソリューションの概要 (1020 ページ)

タスク

- ▶ JBoss Application Server ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1022 ページ)

参照情報

- ▶ JBoss ソリューションの設定要件 (1023 ページ)
- ▶ JBoss ソリューション・テンプレート・ページ (1024 ページ)

概念

JBoss Application Server ソリューションの概要

JBoss Application Server ソリューション・テンプレートは、標準設定の測定値で設定された一連のモニタ（JBoss アプリケーション・サーバの状況、可用性、パフォーマンスをテストします）をデプロイする場合に使用できるテンプレートです。このテンプレートでは、JBoss アプリケーション・サーバのバージョン 4.0.x と 4.2.x がサポートされます。

JBoss Application Server ソリューション・テンプレートでは包括的な JBoss 監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、さまざまなパフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- JBoss Application Server ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - JBoss ソリューションの詳細については、『SiteScope JBoss Application Server Best Practices』（英語版）ドキュメントを参照してください。このドキュメントは、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>%sisdocs%pdfs%SiteScope_JBoss_Best_Practices.pdf** にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、JBoss Application Server ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

JBoss Application Server ソリューション・テンプレートを使用すると、JBoss アプリケーション・サーバのパフォーマンスと状況を監視対象とするモニタのセットが動的に作成されます。正確なモニタ・セットは、ソリューション・テンプレートのデプロイ時に選択したエンティティにより異なります。モニタの詳細については、『SiteScope JBoss Application Server Best Practices』（英語版）ドキュメントを参照してください。

タスク

JBoss Application Server ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、JBoss Application Server ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1022 ページ「JBoss サーバ環境の設定」
- ▶ 1022 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1022 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 JBoss サーバ環境の設定

サーバ環境に関連する設定要件を実行します。概念の詳細については、1023 ページ「JBoss ソリューションの設定要件」を参照してください。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

JBoss Application Server ソリューション・テンプレートの「デプロイメント値」ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1024 ページ「JBoss ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

参照情報

JBoss ソリューションの設定要件

JBoss Application Server ソリューションを使用する前に、サーバ環境に関連する多数の設定要件があります。

- ▶ 収集する JMX 統計情報 (JMX インスタンスのホスト名とポートなど) の URL と、JMX のユーザ名およびパスワードを把握しておく必要があります。
- ▶ SiteScope と監視対象サーバは、同じホスト上で実行できます。
- ▶ JBoss ソリューション・テンプレートでは、JBoss アプリケーション・サーバのバージョン 4.0.x と 4.2.x のみサポートされます。
- ▶ SiteScope で監視できるように、JBoss を特定の方法で開始する必要があります。詳細については、下の「JBoss の開始」を参照してください。

JBoss の開始

SiteScope で JBoss を監視するには、JBoss JVM の次のオプションを指定する必要があります。

```
-Dcom.sun.management.jmxremote.port=12345 (他のポートもちろん使用できますが、その場合は ST のデプロイメントで指定する必要があります)
-Dcom.sun.management.jmxremote.authenticate=false
-Dcom.sun.management.jmxremote.ssl=false
-Djavax.management.builder.initial=org.jboss.system.server.jmx.MBeanServerBuilderImpl
-Djboss.platform.mbeanserver
-Dcom.sun.management.jmxremote
```

次のバッチ・ファイルを使用して、この指定を実行できます。

```
@echo off
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -Dcom.sun.management.jmxremote.port=12345
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -
Dcom.sun.management.jmxremote.authenticate=false
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -Dcom.sun.management.jmxremote.ssl=false
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -
Djavax.management.builder.initial=org.jboss.system.server.jmx.MBeanServer
BuilderImpl
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -Djboss.platform.mbeanserver
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -Dcom.sun.management.jmxremote
call run.bat -b my-jboss-host
```

注：

- ▶ **run.bat** が JBoss の開始に使用される標準設定のスクリプトです。
- ▶ **-b** は、JBoss 4.2.2 を正しいネットワーク・インタフェースにバインドするオプションです（標準設定ではローカルホストにのみバインドされ、そのほかのホストからはアクセスできません）。
- ▶ UNIX 用に同様のスクリプトを作成できます。

 JBoss ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、JBoss Application Server ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

説明	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、[JBoss AS 4.x] を選択します。
関連タスク	974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	▶ 1019 ページ「JBoss Application Server ソリューション・テンプレート」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
[JMX_URL]	JMX 統計情報を収集する URL。通常、URL は <code>service:jmx:rmi:///jndi/rmi://{hostname}:{port}/jmxrmi</code> の形式です。 監視する JMX インスタンスのホスト名とポートを入力します。
[USERNAME]	JMX アプリケーションに接続するユーザ名（任意指定）。
[Password]	JMX アプリケーションに接続するパスワード（任意指定）。
[カウンタ]	このモニタでチェックするサーバのパフォーマンス・カウンタを表示します。[カウンタの取得] ボタンを使用してカウンタを選択します。
[カウンタの取得]	[カウンタの取得] ダイアログ・ボックスが開き、監視するエンティティを選択できます。各インスタンスに対して、モニタとしきい値の特定のセットが作成されます。詳細については、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%sisdocs¥pdfs¥SiteScope_JBoss_Best_Practices.pdf にある『SiteScope JBoss Application Server Best Practices Guide』（英語版）を参照してください。

UI 要素	説明
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
[リモート サーバでモニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 : 選択されている

45

Linux Host ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

▶ Linux Host ソリューションの概要 (1028 ページ)

タスク

▶ Linux Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1030 ページ)

参照情報

▶ Linux Host ソリューションの設定要件 (1031 ページ)

▶ Linux Host ソリューション・テンプレート・ページ (1031 ページ)

概念

Linux Host ソリューションの概要

Linux Host ソリューション・テンプレートは、標準設定の測定値で設定された一連のモニタ（監視対象 Linux ホストの状況、可用性、パフォーマンスをテストします）をデプロイする場合に使用できるテンプレートです。このテンプレートは、SiteScope でサポートされているバージョンの Linux がサポートされます。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) の「システム要件」を参照してください。

UNIX リソース・モニタの場合、監視対象サーバの 3 つの異なる測定値のデータが表示される、サーバ中心のレポートを作成できます。必要なモニタおよび測定値があらかじめ設定されているため、UNIX リソース・モニタを作成する場合はソリューション・テンプレートを使用することをお勧めします。サーバ中心のレポートの生成の詳細については、1166 ページ「サーバ中心のレポートの生成」を参照してください。

Linux Host ソリューション・テンプレートは包括的な Linux オペレーティング・システムの監視が可能です。SiteScope ユーザや IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、さまざまなパフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ Linux Host ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ Linux Host ソリューション設定の詳細については、『SiteScope Operating System Host Best Practices』（英語版）ドキュメントを参照してください。このドキュメントは、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>%sisdocs%pdfs%SiteScope_OS_Best_Practices.pdf** にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Operating Systemのホスト・ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

Linux Host ソリューション・テンプレートでは、Linux のパフォーマンスと状況の次の側面を監視対象とするモニタがデプロイされます。

- ▶ CPU の状態と使用率の詳細
- ▶ メモリの状態と使用率の詳細
- ▶ ファイル・システムの状態と使用率の詳細

タスク

Linux Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Linux Host ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

注：Linux Host ソリューション・テンプレートでは、対象ホストごとに UNIX リソース・モニタがデプロイされます。これは、サーバ中心のレポートをサポートするために必要となる補足モニタです。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1030 ページ「Linux サーバ環境の設定」
- ▶ 1030 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1030 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 Linux サーバ環境の設定

サーバ環境に関連する設定要件を実行します。概念の詳細については、1031 ページ「Linux Host ソリューションの設定要件」を参照してください。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

Linux Host ソリューション・テンプレートの「デプロイメント値」ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1031 ページ「Linux Host ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

参照情報



Linux Host ソリューションの設定要件

Linux Host ソリューション・テンプレートを使用する前に、サーバ環境に関連する多数の設定要件があります。

- ▶ SiteScope サーバから監視対象 Linux ホストに接続できる必要があります。
- ▶ 対象サーバを UNIX リモート・マシンとして SiteScope に追加し、UNIX リモート・テストにパスする必要があります（[リモート サーバ] > [UNIX リモート サーバ]）。詳細については、518 ページ「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
- ▶ サポートされている Linux オペレーティング・システムが SiteScope サーバで実行されている場合、そのサーバ自体を監視することもできます。
- ▶ このテンプレートは、SiteScope でサポートされているバージョンの Linux がサポートされます。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) の「システム要件」を参照してください。



Linux Host ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、Linux Host ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、[Linux Host] を選択します。
関連タスク	974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	▶ 1027 ページ「Linux Host ソリューション・テンプレート」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
[SERVER_LIST]	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。UNIX 接続プロファイルを作成する手順については、518 ページ「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値：選択されていない
[リモート サーバで モニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値：選択されている

46

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート

本章 の内容

概念

- ▶ Microsoft Exchange ソリューションの概要 (1034 ページ)

タスク

- ▶ Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1037 ページ)

参照情報

- ▶ Microsoft Exchange ソリューションの設定要件 (1038 ページ)
- ▶ [Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート・ページ (1039 ページ)]

概念

Microsoft Exchange ソリューションの概要

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートは、次のパフォーマンス、可用性、使用統計の監視を提供します。

- ▶ Microsoft Exchange 5.5 Server
- ▶ Microsoft Exchange 2000 Server
- ▶ Microsoft Exchange 2003 Server
- ▶ Microsoft Exchange 2007 Server (バージョン 8.0)
- ▶ Microsoft Exchange 2010 Server (Microsoft Exchange 2007 ソリューション・テンプレートを使用)

選択したセットに応じて、NT イベント・ログ・エントリ、MAPI 操作、システム・パフォーマンス・カウンタ、メッセージ・システムの使用統計をチェックするモニタが含まれます。

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートでは包括的な Microsoft Exchange システムの監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ Microsoft Exchange ソリューションの詳細については、『SiteScope Microsoft Exchange Best Practices』（英語版）ドキュメントを参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれており、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>%sisdocs%pdfs% SiteScope_Exchange_Best_Practices.pdf** にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Microsoft Exchange ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートでは、Microsoft Exchange のパフォーマンスと状況の次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- ▶ **基本的なサーバ / OS パフォーマンス：**このカテゴリの対象は、サーバのシステム・レベルの状況です。Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートでは、サーバ状況のモニタが自動的に設定されます。
- ▶ **アプリケーション・パフォーマンス：**アプリケーション・パフォーマンスは、特定の Exchange コンポーネントの稼働状況の指標です。Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートでは、一連の重要な Exchange アプリケーション・コンポーネントのモニタが自動的に設定されます。

- ▶ **メール・プロトコル応答時間** : Microsoft Exchange のパフォーマンスで最も重要な側面であり、主要なインジケータと言えるのがメール・プロトコル応答時間です。Microsoft Exchange では多くのプロトコルを利用できますが、Microsoft ネットワークで一般的に使用されるのは MAPI プロトコルです。
- ▶ **使用統計** : さらに、Microsoft Exchange のパフォーマンス関連のカテゴリとして使用状況があります。使用状況自体は、必ずしもパフォーマンスの主要なインジケータではありませんが、使用状況の変化が Microsoft Exchange の全体的なパフォーマンスに影響を与える可能性があります。また、Microsoft Exchange の使用統計は、IT 組織が傾向を見極め、将来の計画を立てる際に役立ちます。Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートでは、一連の重要な Microsoft Exchange 使用状況パラメータのモニタが自動的に設定されます。

注 : ソリューション・テンプレートによってデプロイされるモニタ・タイプの中には、Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートを使用しないと SiteScope に追加できないものもあります。詳細については、特定のモニタ・タイプに関するセクションを参照してください。

タスク

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1037 ページ「Microsoft Exchange サーバ環境の設定」
- ▶ 1037 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1037 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 Microsoft Exchange サーバ環境の設定

サーバ環境に関連する設定要件を実行します。概念の詳細については、1038 ページ「Microsoft Exchange ソリューションの設定要件」を参照してください。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インターフェースの詳細については、1039 ページ「[Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート・ページ]」を参照してください。

参照情報

Microsoft Exchange ソリューションの設定要件

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートをデプロイする前に、デプロイするソリューション・テンプレートに応じてさまざまな手順を実行する必要があります。

- ▶ **Microsoft Exchange 5.5, 2000, 2003 ソリューション。**これらのソリューション・テンプレートでは SiteScope MAPI モニタを使用します。このモニタ・タイプを正常にデプロイするには、メールボックス所有者と SiteScope サービスに関連して特定のセットアップが必要です。MAPI モニタのシステム要件については、『Monitor Reference』（英語版）の「MAPI Monitor Overview」を参照してください。
- ▶ **Microsoft Exchange 2007 ソリューション。**このソリューション・テンプレートは、Microsoft Exchange 2007 モニタを使用します。このモニタ・タイプを正常にデプロイするには、『Monitor Reference』（英語版）の「Microsoft Exchange 2007/2010 Monitor Overview」を参照してくださいに説明されている特定のセットアップが必要です。

注 : Microsoft Exchange 2010 サーバに対して Microsoft Exchange 2007 ソリューション・テンプレートをデプロイすることもできます。

[Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート・ページ]

このページでは、Microsoft Exchange 5.5, 2000, 2003, 2007 (バージョン 8.0), 2010 サーバを監視するための Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、必要な Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートを選択します。
重要な情報	Microsoft Exchange 2010 サーバに対して Microsoft Exchange 2007 ソリューション・テンプレートをデプロイすることもできます。
関連タスク	974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	▶ 1033 ページ「Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
[MailBox]	MAPI を使用した電子メール往復時間テストに使用するメールボックスの名前（別名）。多くの場合、これは電子メール・アカウント名ですが、別の名前にすることもあります。このソリューションに使用している電子メール・アカウントの[E-Mail Account]プロパティに表示されるメールボックス名をコピーすることをお勧めします。
[MailUser]	MAPI を使用した電子メール往復時間テストのユーザの Windows アカウント・ログイン名。

UI 要素	説明
[MailDomain] (Microsoft Exchange 5.5, 2000, 2003) [Domain] (Exchange 2007 および 2010)	使用するメールボックスの所有者と Microsoft Exchange サーバの両方が属するドメイン。 注：このソリューションで使用するメールボックスの所有者にも SiteScope を実行するマシン上の管理アカウント権限が必要です。SiteScope には、Microsoft Exchange サーバを実行するドメインへのユーザ・アカウント・アクセス権も必要です。
[MAILPASSWORD]	入力したユーザ名の Windows アカウント・ログイン・パスワード。
[SERVER_LIST]	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
[AuthenticationUser] (Microsoft Exchange 2003 のみ)	サーバにメールボックスとパブリック・フォルダの統計情報をクエリするとき使用するユーザ名。この統計情報の収集には WMI (Windows Management Instrumentation) を使用するため、ここで入力するユーザ名には WMI namespace root¥MicrosoftExchangeV2 にある WMI 統計の読み取り権限が必要です。このボックスを空白のままにすると、SiteScope を実行しているユーザが使用されます。
[AUTHENTICATION PASSWORD] (Microsoft Exchange 2003 のみ)	WMI 統計情報の収集用に入力したユーザのパスワード。ユーザ・ボックスを空白のままにした場合は、このボックスも空白にします。
[PSConsoleFile] (Microsoft Exchange 2007 および 2010 のみ)	Microsoft Exchange Management Shell PowerShell コンソール・ファイルへのパス。

UI 要素	説明
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値：選択されていない
[リモート サーバでモニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値：選択されている

47

Microsoft IIS ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ Microsoft IIS ソリューションの概要 (1044 ページ)

タスク

- ▶ Microsoft IIS ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1046 ページ)

参照情報

- ▶ Microsoft IIS ソリューションの設定要件 (1047 ページ)
- ▶ Microsoft IIS ソリューション・テンプレート (1047 ページ)

概念

Microsoft IIS ソリューションの概要

Microsoft IIS ソリューション・テンプレートは、標準設定の測定値で設定された一連のモニタ（Microsoft IIS サーバの状況、可用性、パフォーマンスをテストします）をデプロイする場合に使用できるテンプレートです。このテンプレートでは Microsoft IIS 6.0 サーバがサポートされます。

Microsoft IIS ソリューション・テンプレートでは包括的な IIS 監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、さまざまなパフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ Microsoft IIS ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ IIS ソリューションの詳細については、『SiteScope Microsoft IIS Best Practices』（英語版）ドキュメントを参照してください。このドキュメントは、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%sisdocs%\pdfs¥SiteScope_IIS_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、IIS ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

Microsoft IIS ソリューション・テンプレートでは、IIS サーバのパフォーマンスと状況の次のサービスと側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- ▶ Active Server Pages (ASP エラー, 要求, テンプレート, セッション, トランザクション)
- ▶ FTP サービス, Web サービス, SMTP サーバ, NNTP サーバ, HTTP/HTTPS サービス, MSMQ キュー・サービス, IIS サーバ, グローバル IIS の状態, インデックス・サービス
- ▶ Windows プロセスとしての IIS 統計情報

タスク

Microsoft IIS ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Microsoft IIS ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1046 ページ「Microsoft IIS サーバ環境の設定」
- ▶ 1046 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1046 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 Microsoft IIS サーバ環境の設定

サーバ環境に関連する設定要件を実行します。概念の詳細については、1047 ページ「Microsoft IIS ソリューションの設定要件」を参照してください。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

Microsoft IIS ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1047 ページ「Microsoft IIS ソリューション・テンプレート」を参照してください。

参照情報

Microsoft IIS ソリューションの設定要件

Microsoft IIS ソリューションを使用する前に、サーバ環境に関連する多数の設定要件があります。

- ▶ SiteScope サーバは、監視対象 Microsoft IIS ホストに接続できる必要があります。Microsoft Windows リソース・モニタを使用して、リモート Windows サーバからサーバのパフォーマンス統計情報を監視します。Microsoft Windows リソース・モニタに特別な設定が必要になる場合があります。詳細については、『Monitor Reference』（英語版）の「Microsoft Windows Resources Monitor Overview」を参照してください。
- ▶ 対象サーバを Windows リモート・マシンとして SiteScope に追加し、Windows リモート・テストにパスする必要があります（[リモート サーバ] > [Microsoft Windows リモート サーバ]）。詳細については、523 ページ「新規 Microsoft Windows リモート・サーバ /Microsoft Windows リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。または、ドメイン権限を設定して SiteScope からリモート・サーバへのアクセスを許可することもできます。詳細については、506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
- ▶ SiteScope と監視対象 Microsoft IIS サーバは、同じホスト上で実行できます。

Microsoft IIS ソリューション・テンプレート

このページでは、Microsoft IIS 6 ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、[Microsoft IIS 6] を選択します。
関連タスク	974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	▶ 1043 ページ「Microsoft IIS ソリューション・テンプレート」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
[SERVER_LIST]	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ> ¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 ：選択されていない
[リモート サーバで モニタ プロパティ を検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 ：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 ：選択されている

48

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ Microsoft SQL Server ソリューションの概要 (1050 ページ)

タスク

- ▶ Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1052 ページ)

参照情報

- ▶ Microsoft SQL Server ソリューションの設定要件 (1053 ページ)
- ▶ Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート・ページ (1054 ページ)

概念

Microsoft SQL Server ソリューションの概要

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートは、Microsoft SQL サーバの状況、可用性、パフォーマンスをテストする標準設定の測定値で設定されたモニタの収集をデプロイするために使用できるテンプレートです。このテンプレートでは、Microsoft SQL Server 2005, 2008, および 2008 R2 がサポートされています。

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートを使用して、Microsoft SQL サーバを包括的に監視できます。SiteScope ユーザまたは IT 組織がアプリケーションに精通している必要はありません。また、さまざまなパフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ Microsoft SQL Server ソリューションの詳細は、『SiteScope Microsoft SQL Server Best Practices』（英語版）ドキュメントを参照してください。このドキュメントは、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%sisdocs%pdfs%
SiteScope_MSSQL_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Microsoft SQL Server ソリューションのライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートでは、Microsoft SQL サーバ・パフォーマンスおよび状況の次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- ▶ CPU の状態と使用率の詳細
- ▶ メモリ状態と使用率の詳細
- ▶ ディスク使用率情報
- ▶ SQL Server オブジェクト (Buffer Manager, データベース, ロック, トランザクション)
- ▶ SQL Server リソース (使用可能なスペース, 現在接続しているユーザのパーセンテージ)

Microsoft SQL Server ソリューションでは、SiteScope データベース・カウンタ・モニタ, Microsoft SQL Server モニタ, Microsoft Windows リソース・モニタが使用されます。これらのモニタの詳細については、『Monitor Reference』(英語版)の「Database Counter Monitor Overview」,「Microsoft SQL Server Monitor Overview」,「Microsoft Windows Resources Monitor Overview」を参照してください。

タスク

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定し、Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1052 ページ「Microsoft SQL サーバ環境の設定」
- ▶ 1052 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1052 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 Microsoft SQL サーバ環境の設定

サーバ環境に関連する設定要件を実行します。概念の詳細については、1053 ページ「Microsoft SQL Server ソリューションの設定要件」を参照してください。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1054 ページ「Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

参照情報

Microsoft SQL Server ソリューションの設定要件

Microsoft SQL Server ソリューションを使用するには、サーバ環境に関するいくつかの設定要件を満たしている必要があります。

- ▶ SiteScope サーバから監視対象の Microsoft SQL ホストに接続できる必要があります。Microsoft Windows リソース・モニタを使用して、リモート Windows サーバからサーバのパフォーマンス統計情報を監視します。Microsoft Windows リソース・モニタに特別な設定が必要になる場合があります。詳細については、『Monitor Reference』（英語版）の「Microsoft Windows Resources Monitor Overview」を参照してください。
- ▶ 対象サーバを Windows リモート・マシンとして SiteScope に追加し、Windows リモート・テストにパスする必要があります（[リモート サーバ] > [Microsoft Windows リモート サーバ]）。詳細については、523 ページ「新規 Microsoft Windows リモート・サーバ /Microsoft Windows リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。または、ドメイン権限を設定して SiteScope からリモート・サーバへのアクセスを許可することもできます。詳細については、506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
- ▶ SQL Server ユーザは、SQL Server システム・ビューからデータを取得するために、監視対象の SQL Server インスタンスの **VIEW SERVER STATE** 権限が必要です。Microsoft SQL Server の権限の付与の詳細については、<http://msdn2.microsoft.com/ja-jp/library/ms186717.aspx> を参照してください。
- ▶ SiteScope と監視対象の Microsoft SQL Server は、同じホストで実行できます。

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、Microsoft SQL Server の主要コンポーネントを監視する Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで [ソリューション テンプレート] を展開し、[Microsoft SQL Server] を選択します。
関連タスク	974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	▶ 1049 ページ「Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
[Login to Microsoft SQL Server]	監視対象の Microsoft SQL Server インスタンスのユーザのログイン名。
[Microsoft SQL Server password]	監視対象の Microsoft SQL Server インスタンスのユーザのパスワード。
[Microsoft SQL Server URL]	監視対象の Microsoft SQL Server インスタンスの URL。 ▶ <code>\${host}</code> を Microsoft SQL Server が実行されているホスト名で置き換えます。これは、Windows リモート・マシンに定義されているホスト名と同じである必要があります。詳細については、523 ページ「新規 Microsoft Windows リモート・サーバ/Microsoft Windows リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ <code>\${port}</code> を Microsoft SQL Server で接続が許可されるポート番号で置き換えます。標準設定のポートは 1433 です。 例 : jdbc:mercury:sqlserver://doors:1433

UI 要素	説明
[SERVER_LIST]	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値：選択されていない
[リモート サーバで モニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値：選択済み

49

Microsoft Windows Host ソリューション・ テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ Microsoft Windows Host ソリューションの概要 (1058 ページ)

タスク

- ▶ Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1060 ページ)

参照情報

- ▶ Microsoft Windows Host ソリューションの設定要件 (1062 ページ)
- ▶ Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート・ページ (1063 ページ)

概念

Microsoft Windows Host ソリューションの概要

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートは、Windows ホストの状況、可用性、パフォーマンスをテストする標準設定の測定値で設定されたモニタの収集をデプロイするために使用できるテンプレートです。このテンプレートでは、Microsoft Windows 2000, Windows XP, Windows Server 2003, Windows Server 2008 がサポートされています。

Microsoft Windows リソース・モニタの場合は、監視対象のサーバについて 3 つの測定値のデータを表示するサーバ中心のレポートを作成できます。必要なモニタと測定値がすでに設定されているため、Microsoft Windows リソース・モニタを作成するときは、ソリューション・テンプレートを使用することをお勧めします。サーバ中心のレポートの生成の詳細については、1166 ページ「サーバ中心のレポートの生成」を参照してください。

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートを使用して、Windows オペレーティング・システムを包括的に監視できます。SiteScope ユーザまたは IT 組織がアプリケーションに精通している必要はありません。また、さまざまなパフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ Microsoft Windows Host ソリューションの設定の詳細は、『SiteScope Operating System Host Best Practices』（英語版）のドキュメントを参照してください。このドキュメントは、**< SiteScope のルート・ディレクトリ> %sdocs%pdfs%SiteScope_OS_Best_Practices.pdf** にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、オペレーティング・システムのホスト・ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートでは、Microsoft Windows のパフォーマンスおよび状況の次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- ▶ CPU の状態および使用率の詳細
- ▶ メモリの状態および使用率の詳細
- ▶ ディスク使用率情報

タスク

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定し、Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

注：Microsoft Windows Host ソリューションでは、各監視対象ホストに Microsoft Windows リソース・モニタがデプロイされます。このモニタは、サーバ中心のレポートをサポートするために必要な追加モニタです。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1061 ページ「Microsoft Windows サーバ環境の設定」
- ▶ 1061 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1061 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 Microsoft Windows サーバ環境の設定

サーバ環境に関連する設定要件を実行します。概念の詳細については、1062 ページ「Microsoft Windows Host ソリューションの設定要件」を参照してください。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートの「デプロイメント値」ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1063 ページ「Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

参照情報

Microsoft Windows Host ソリューションの設定要件

Microsoft Windows Host ソリューションを使用するには、サーバ環境に関するいくつかの設定要件を満たしている必要があります。

- ▶ **SiteScope サーバから監視対象 Windows ホストに接続できる必要があります。** Microsoft Windows リソース・モニタを使用して、リモート Windows サーバからサーバのパフォーマンス統計情報を監視します。Microsoft Windows リソース・モニタに特別な設定が必要になる場合があります。詳細については、『Monitor Reference』（英語版）の「Microsoft Windows Resources Monitor Overview」を参照してください。
- ▶ **対象サーバを Windows リモート・マシンとして SiteScope に追加し、Windows リモート・テストにパスする必要があります（[リモート サーバ] > [Microsoft Windows リモート サーバ]）。** 詳細については、523 ページ「新規 Microsoft Windows リモート・サーバ/Microsoft Windows リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。または、ドメイン権限を設定して SiteScope からリモート・サーバへのアクセスを許可することもできます。詳細については、506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
- ▶ **SiteScope がサポートされている Windows オペレーティング・システムにインストールされている場合は、SiteScope サーバの Windows オペレーティング・システムの使用状況の統計を監視できます。** 詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』（PDF）の「システム要件」を参照してください。
- ▶ **SiteScope がテンプレートでサポートされる Windows オペレーティング・システムにインストールされている場合、SiteScope と監視対象サーバは同じホストで実行できます。** このテンプレートでは、Microsoft Windows 2000, Windows XP, Windows Server 2003, Windows Server 2008 がサポートされています。

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、Microsoft Windows 2000, Windows XP, および Windows Server 2003 オペレーティング・システムを監視する Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで [ソリューション テンプレート] を展開し、[Microsoft Windows Host] を選択します。
関連タスク	974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	▶ 1057 ページ「Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
[SERVER_LIST]	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

UI 要素	説明
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値：選択されていない
[リモート サーバでモニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値：選択済み

50

.NET ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ .NET ソリューションの概要 (1066 ページ)

タスク

- ▶ .NET ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1068 ページ)

参照情報

- ▶ .NET ソリューションの設定要件 (1069 ページ)
- ▶ .NET ソリューション・テンプレート・ページ (1070 ページ)

概念

.NET ソリューションの概要

.NET ソリューション・テンプレートでは、Windows オペレーティング・システムが実行されているサーバの .NET アプリケーションを監視できます。このソリューション・テンプレートでは、Windows ホストの .NET アプリケーションおよび .NET 環境の状況、可用性、パフォーマンスをテストする一連のモニタがデプロイされます。このテンプレートでは、Windows 2000, Windows XP, Windows Server 2003 がサポートされます。

.NET ソリューション・テンプレートでは包括的な .NET 監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ .NET ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ .NET ソリューションの詳細については、『SiteScope .NET Best Practices』（英語版）ドキュメントを参照してください。このドキュメントは、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%s\docs¥pdfs¥SiteScope_NET_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは .NET ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

.NET ソリューション・テンプレートでは、.NET のパフォーマンスと状況の次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- ▶ **.NET CLR データ。**このカテゴリの対象は、共通言語ランタイム・データ (.NET アプリケーションの環境) です。このカテゴリは、選択したアプリケーションを対象として .NET CLR の複数のリソースの統計情報をチェックするように設計されています。.NET ソリューション・テンプレートでは、サーバの状況のモニタが自動的に設定されます。
- ▶ **ASP.NET。**このカテゴリは、ASP.NET の複数のリソースの統計情報をチェックするように設計されています。アプリケーションの再起動と ASP.NET システム全体の安定性に関する一般的な情報が収集されます。.NET ソリューション・テンプレートでは、サーバの状況のモニタが自動的に設定されます。
- ▶ **ASP.NET アプリケーション。**このカテゴリは、選択した ASP.NET アプリケーションの複数のリソースの統計情報をチェックするように設計されています。アプリケーションのキャッシュやエラーなどの重要な情報に関する一般的な情報が収集されます。.NET ソリューション・テンプレートでは、サーバの状況のモニタが自動的に設定されます。

タスク

.NET ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、.NET ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1068 ページ「.NET サーバ環境の設定」
- ▶ 1068 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1068 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 .NET サーバ環境の設定

サーバ環境に関連する設定要件を実行します。概念の詳細については、1069 ページ「.NET ソリューションの設定要件」を参照してください。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

.NET ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1070 ページ「.NET ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

参照情報

.NET ソリューションの設定要件

.NET ソリューションを使用する前に、サーバ環境に関連する多数の設定要件があります。

- ▶ SiteScope サーバから監視対象 Windows ホストに接続できる必要があります。Microsoft Windows リソース・モニタを使用して、リモート Windows サーバからサーバのパフォーマンス統計情報を監視します。Microsoft Windows リソース・モニタに特別な設定が必要になる場合があります。詳細については、『Monitor Reference』（英語版）の「Microsoft Windows Resources Monitor Overview」を参照してください。
- ▶ 対象サーバを Windows リモート・マシンとして SiteScope に追加し、Windows リモート・テストにパスする必要があります（[リモート サーバ] > [Microsoft Windows リモート サーバ]）。詳細については、523 ページ「新規 Microsoft Windows リモート・サーバ /Microsoft Windows リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。または、ドメイン権限を設定して SiteScope からリモート・サーバへのアクセスを許可することもできます。詳細については、506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
- ▶ SiteScope がテンプレートでサポートされている Windows オペレーティング・システムにインストールされている場合、SiteScope および対象 .NET アプリケーションを同じホストで実行できます。このテンプレートでは、Windows 2000, Windows XP, Windows Server 2003 がサポートされます。



.NET ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、.NET アプリケーションおよび .NET 環境を監視する .NET ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、必要な .NET ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	▶ 1065 ページ「.NET ソリューション・テンプレート」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
[Server]	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
[ASP.NET Application] (ASP.NET アプリケーションのみ)	監視する ASP.NET アプリケーションの名前。この名前は、タスク・マネージャに表示される名前と同じにする必要があります。
[Instance] (.NET CLR データのみ)	監視するアプリケーションの名前。この名前は、タスク・マネージャに表示される名前と同じにする必要があります。同じでない場合はシステム全体の統計情報（標準設定）になる可能性があります。

UI 要素	説明
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値：選択されていない
[リモート サーバでモニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値：選択されている

51

Oracle Database ソリューション・テンプレート

本章 の内容

概念

- ▶ Oracle Database ソリューションの概要 (1074 ページ)

タスク

- ▶ Oracle Database ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1076 ページ)

参照情報

- ▶ Oracle Database ソリューション・テンプレートの使用ガイドライン (1077 ページ)
- ▶ Oracle Database ソリューション・テンプレートのツール (1077 ページ)
- ▶ Oracle ソリューション・テンプレート・ページ (1080 ページ)

概念

Oracle Database ソリューションの概要

Oracle Database ソリューション・テンプレートを使用すると、Oracle データベースの状況、可用性、パフォーマンスをテストする一連のモニタをデプロイできます。デプロイしたモニタは、キャッシュ・ヒット率やディスク I/O などの一般的なシステム統計情報をチェックします。また、データベースの重要な側面に関する診断情報を提供するツールを備えています。このソリューションは、Oracle 9, 10g, 11g データベースに使用できます。

このソリューションは、データベース・カウンタ・モニタを使用して JDBC でアクセス可能なデータベースからパフォーマンス測定値を収集します。さらに、Oracle Database ソリューション・テンプレートを使用して標準設定の測定値が設定された一連のモニタをデプロイできます。

重要なシステム測定値は、Oracle データベースのシステム・テーブルから取得したデータを使用して計算されます。これらの測定値を作成するために、V\$SYSSTAT, V\$LATCH, V\$ROLL_STAT, V\$BUFFER_POOL_STATISTICS などの幅広い Oracle システム・テーブルを参照します。このように、Oracle Database ソリューションは、Oracle インストールにバンドルされているシステム監視スクリプトの多くと同等の機能を実装します。

Oracle Database ソリューション・テンプレートでは包括的な Oracle データベースの監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ Oracle Database ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ Oracle Database ソリューションの詳細については、『SiteScope Oracle Database Best Practices』（英語版）ドキュメントを参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれていて、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>%sisdocs%pdfs%SiteScope_Oracle_Database_Best_Practices.pdf** にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Oracle Database ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

Oracle Database ソリューション・テンプレートでは、Oracle のパフォーマンスと状況の次の側面を監視対象とするモニタがデプロイされます。

- ▶ **一般的なシステム統計情報。**最も重要な V\$SYSSTAT 統計は、Oracle Database ソリューションでデプロイされたモニタによって標準設定で監視されます。必要に応じて、これらの測定値は組み合わせられ、1 秒または 1 トランザクションあたりの差異や速度が計算されます。データベース内の V\$ テーブルから重要な測定値を監視する場合、手動で生成した SQL スクリプトの代わりに Oracle Database ソリューションを使用できます。
- ▶ **Oracle ログ。**ORA- エラーがないかどうか、重要な Oracle ログ・ファイルを監視します。データベース設定に応じて、ユーザがこれらのモニタをログ・ファイル内の特定のテキストを検索するようにカスタマイズすることも可能です。
- ▶ **データベース問題の診断。**デプロイしたモニタに加えて、Oracle ソリューションは、データベースに関する診断情報の取得に使用できる複数のツールを備えています。これらのツールでは、リソースを集中的に消費する SQL ステートメント、共有サーバ・プロセスの競合、特定のイベントを待機しているセッション数などの診断データを利用できます。

タスク

Oracle Database ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Oracle Database ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1076 ページ「前提条件」
- ▶ 1076 ページ「Oracle Database サーバ環境の設定」
- ▶ 1076 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1076 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 前提条件

Oracle Database 9i and 10g ソリューション・テンプレートを正常にデプロイするには、「CREATE SESSION」システム権限が必要です。

2 Oracle Database サーバ環境の設定

使用ガイドラインに従い、サーバ環境に関連する設定要件を実行します。概念の詳細については、1077 ページ「Oracle Database ソリューション・テンプレートの使用ガイドライン」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の概要については、974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

4 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

Oracle Database ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1080 ページ「Oracle ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

参照情報

Oracle Database ソリューション・テンプレートの使用ガイドライン

Oracle Database ソリューションをデプロイ用に設定する前に、データベース・カウンタ・モニタ（『Monitor Reference』（英語版）の「Database Counter Monitor Overview」を参照してください）とログ・ファイル・モニタ（『Monitor Reference』（英語版）の「Log File Monitor Settings」を参照してください）のドキュメントを参照し、このソリューション・テンプレートで要求される前提条件とパラメータの詳細を確認してください。たとえば、データベースとの通信に必要な Oracle JDBC ドライバのインストールや、ログ・ファイル・パス・パラメータの形式に関する詳細な情報を参照できます。

Oracle Database ソリューション・テンプレートのツール

Oracle Database ソリューション・テンプレートでは、Oracle データベースに関する診断情報の収集に使用できる複数のツールがデプロイされます。これらのツールは、ソリューション・テンプレートでデプロイしたモニタと同じグループにデプロイされます。ツールは、モニタと同じように表示されますが、無効に設定されています。これらのツールは、グループ内容テーブルの[状態]フィールドに太字で表示されたテキスト「**Solution Tool**」で識別します。ソリューション・ツールはモニタ・テーブルに表示されますが、モニタ・インスタンスではありません。ソリューション・ツールが自動的に実行されることはありません。また、アクション結果に基づいて状態が表示されたり、警告が起動されることもありません。これらのツールは事前に設定されたアクションであり、SiteScope 診断ツールを利用して Oracle データベースからパフォーマンス問題を示す特定の統計情報をチェックします。

ユーザがいずれかのソリューション・ツールをクリックすると、SiteScope はデータベース接続テスト・ツールを使用して、データベースへのカスタム SQL クエリを実行します。クエリの結果は、ページ下部にあるテーブルに表示されます。このページで[接続とクエリ実行]ボタンをクリックすることで、ツールを必要に応じて何回でも実行できます。ツールによっては、データベースに著しいオーバーヘッドが発生するため、連続して実行することはお勧めしません。

Oracle Database ソリューション・テンプレートのリスト

次に、Oracle Database ソリューションの一部としてデプロイされるツールについて説明します。

Oracle ソリューション・ツール名	説明と使用ガイドライン
Top Ten SQL Statements in Logical IOs Per Row	このツールは、データベースで実行されている SQL ステートメントのうち、最もリソースを集中的に消費するステートメントを見つけるように設計されたクエリを実行します。V\$SQL テーブルに対して、1 行あたり最も多くの論理 IO を実行する SQL ステートメント上位 10 個を求めるクエリが実行され、テーブルに表示されます。 これらの 10 個のステートメントのステートメント ID が、ステートメントごとの追加のリソース使用データとともにテーブルに表示されます。 次のような追加データがあります。 ▶ 物理 IO ブロック数。ステートメントのために実行されたディスク読み取り回数。 ▶ 論理 IO 数。ステートメントのために実行されたバッファ取得回数。 ▶ 処理された行数。ステートメント実行時に処理された行数。 ▶ 1 行あたりの論理 IO 数。ステートメント実行時に処理された 1 行あたりのバッファ取得実行回数。 ▶ 実行回数。ステートメントの実行回数。 ▶ 1 回の実行あたりの論理 IO 数。1 回のステートメント実行あたりのバッファ取得回数。 注：実行するアクションはデータベース・リソースに重大な影響を与える可能性があるため、頻繁に実行しないでください。
Number of Sessions Waiting Per Event	このツールは、応答しなくなったセッションのトラブルシューティングに使用できます。複数のセッションが応答しなくなった場合、このツールを使用して、応答しなくなったセッションがすべて同じイベントを待機しているかどうかを判別できます。ツールのアクションによって、特定のイベントを待機しているセッション数を含むテーブルが表示されます。

Oracle ソリューション・ツール名	説明と使用ガイドライン
Shared Server Process Contention (Common Queue Average Wait Time)	このツールは、共有サーバ・メッセージ・キュー (V\$QUEUE に記録された共通キュー) の平均待機時間を計算します。平均待機時間が長い場合、共有サーバ・プロセス間の競合を示している可能性があります。

Oracle Database ソリューション・ツールを実行するには、次の手順で行います。

- 1 Oracle ソリューション・モニタがデプロイされているグループのグループ名をクリックします。[Group Detail] ページが開きます。
- 2 実行するアクションに対応するソリューション・ツールを見つけます。ソリューション・ツールで実行されるアクションの説明については、そのツールの **名前** 列を参照してください。
- 3 アクションを実行するには、ツールの **名前** の右にある **ツール** リンクをクリックします。[データベース接続テスト] ページが開きます。このページで **接続とクエリ実行** ボタンをクリックすることで、ツールを必要に応じて何回でも実行できます。

注: クエリによっては、ソリューション・ツールがデータベースにとって著しいオーバーヘッドとなる場合があります。そのため、ツールを連続して実行することはお勧めしません。

[データベース接続テスト] ページの上部には、テストに使用したデータベース接続パラメータが表示されます。ツール・クエリの結果は、ページ下部近くのテーブルに表示されます。該当するツールの説明と使用ガイドラインに基づいて、結果を確認します。

Oracle ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、Oracle ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、[Oracle Database 9i and 10g] を選択します。
重要な情報	Oracle Database 9i and 10g ソリューション・テンプレートを正常にデプロイするには、「CREATE SESSION」システム権限が必要です。
関連タスク	974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	▶ 1073 ページ「Oracle Database ソリューション・テンプレート」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
[DatabaseConnection URL]	監視対象のデータベースの接続 URL。構文は、 jdbc:oracle:thin:@<サーバ名または IP アドレス>:<データベース・サーバ・ポート>;sid=<sid> になります。 例： ポート 1521 を使用してマシン上の ORCL データベースに接続するには、次の URL を使用します。 jdbc:oracle:thin:@206.168.191.19:1521:ORCL. 注： 前述の例のようにコロン (:) とアットマーク (@) 記号を含める必要があります。
[DatabaseDriver]	このモニタで使用する JDBC ドライバの名前。各ドライバがサポートするのは特定の接続 URL パターンであるため、[データベース接続 URL] に入力した URL とその URL パターンは一致する必要があります。

UI 要素	説明
[OracleAlertLogPath]	Oracle 警告ログへのフル・パス。Windows マシンの場合、これはフル UNC パスです。Oracle 警告ログへのフル・パスを入力します。このファイルへのアクセス方法については、データベース管理者に問い合わせるか、Oracle のドキュメントを参照してください。
[OracleListenerLog Path]	Oracle リスナ・ログへのフル・パス。Windows マシンの場合、これはフル UNC パスです。このファイルへのアクセス方法については、データベース管理者に問い合わせるか、Oracle のドキュメントを参照してください。
[DatabaseUserName]	SiteScope がデータベースへの接続に使用するユーザ名。
[DATABASE PASSWORD]	SiteScope がデータベースへの接続に使用するユーザ名のパスワード。
[Log File Encoding]	監視するファイル内容で、SiteScope を実行するサーバとは別のエンコーディングを使用している場合、使用するコード・ページまたはエンコーディングを入力します。これは、SiteScope が使用するコード・ページが対象ファイルで使用する文字セットをサポートしていない場合に必要となる可能性があります。ここで指定することで、SiteScope がエンコードされたファイルの内容を正確に照合および表示できます。 例 : Cp1252, Cp1251, Cp1256, Shift_JIS, EUC_JP
[SERVER_LIST]	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。接続プロファイルを作成する手順については、506 ページ「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」および 518 ページ「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

UI 要素	説明
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
[リモート サーバでモニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 : 選択済み

SAP ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ SAP ソリューションの概要 (1084 ページ)

タスク

- ▶ SAP ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1085 ページ)

参照情報

- ▶ SAP ソリューション・テンプレートの設定要件 (1086 ページ)
- ▶ SAP ソリューション・テンプレート・ページ (1087 ページ)

概念

SAP ソリューションの概要

SAP ソリューションには、次の重要な SAP コンポーネントを監視するためのソリューション・テンプレートが含まれています。

▶ SAP CCMS

▶ SAP Java Web アプリケーション・サーバ

SAP ソリューションでは、報告する可用性とパフォーマンスの測定値が設定されたモニタのコレクションのデプロイに使用する、2 つのソリューション・テンプレートを使用します。これらの監視設定は、ベスト・プラクティス・データとさまざまな情報源から得た専門知識を使用して調査されています。

SAP ソリューション・テンプレートは包括的な SAP 監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織に専門的な知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注： SAP R/3 Application Server ソリューション・テンプレートと SAP NetWeaver Application Server ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・テンプレートのライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。

SAP R/3 Application Server ソリューション・テンプレートは、SAP R/3 システムの監視のデプロイに使用します。SAP NetWeaver Application Server テンプレートは、IT 環境にコンポーネントがデプロイされている場合の SAP Java Web アプリケーション・サーバの監視に使用します。

タスク

SAP ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定する手順と、SAP ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1085 ページ「SAP サーバ環境の設定」
- ▶ 1085 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1085 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 SAP サーバ環境の設定

サーバ環境に関連する設定要件を実行します。概念の詳細については、1086 ページ「SAP ソリューション・テンプレートの設定要件」を参照してください。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

SAP ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1087 ページ「SAP ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

参照情報

SAP ソリューション・テンプレートの設定要件

このセクションでは、SAP ソリューション・テンプレートの設定要件について説明します。

- ▶ 1086 ページ「SAP R/3 Application Server ソリューション・テンプレート」
- ▶ 1087 ページ「SAP NetWeaver Application Server ソリューション・テンプレート」

SAP R/3 Application Server ソリューション・テンプレート

SiteScope SAP R/3 Application Server ソリューション・テンプレートには、SAP R/3 システムの可用性の監視、使用状況の統計、サーバ・パフォーマンスの統計に使用するツールが用意されています。このソリューション・テンプレートでは、SAP R/3 サーバの状況、可用性、パフォーマンスをテストする一連のモニタをデプロイします。

SAP R/3 Application Server ソリューション・テンプレートを使用する前に、サーバ環境に関連する多数の設定要件があります。これらの要件の概要を次に示します。

- ▶ SAP Java コネクタのライブラリを、必要な SiteScope フォルダにコピーする必要があります。
- ▶ SiteScope で SAP R/3 サーバへのログインに使用するユーザ名とパスワードが必要です。

システムと設定要件の詳細については、『Monitor Reference』（英語版）の「SAP CCMS Monitor Overview」を参照してください。このモニタは、SAP R/3 ソリューション・テンプレートの一部としてデプロイされます。

SAP NetWeaver Application Server ソリューション・テンプレート

SiteScope SAP NetWeaver Application Server ソリューション・テンプレートでは、SAP Java Web アプリケーション・サーバ・クラスタの可用性とサーバ統計情報を監視できます。

このソリューション・テンプレートでは、SAP Java Web アプリケーション・サーバの状況、可用性、パフォーマンスをテストするモニタをデプロイします。このソリューション・テンプレートを使用して、サーバ全体のリソースと測定値のモニタをデプロイできます。

SAP NetWeaver Application Server ソリューション・テンプレートを使用する前に、サーバ環境に関連する多数の設定要件があります。これらの要件の概要を次に示します。

- ▶ SAP Java Web アプリケーション・サーバのライブラリを、必要な SiteScope フォルダにコピーする必要があります。
- ▶ SiteScope で SAP Java Web アプリケーション・サーバへのログインに使用するユーザ名とパスワードが必要です。

システムと設定要件の詳細については、『Monitor Reference』（英語版）の「SAP Java Web Application Server Monitor Overview」を参照してください。このモニタは、SAP NetWeaver Application Server ソリューション・テンプレートの一部としてデプロイされます。

SAP ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、SAP CCMS と SAP Java Web アプリケーション・サーバ上の主要コンポーネントを監視する SAP ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで [ソリューション テンプレート] を展開して、必要な SAP ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	▶ 1083 ページ「SAP ソリューション・テンプレート」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

SAP R/3 アプリケーション・サーバ

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
[CLIENT_NUMBER]	SAP への接続に使用するクライアント。
[Password]	SAP サーバへの接続に必要なパスワード。
[USER_NAME]	SAP サーバへの接続に必要なユーザ名。
[SYSTEM_NUMBER]	SAP サーバのシステム番号。
[APPLICATION_SERVER]	監視する SAP サーバのアドレス。
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値：選択されていない
[リモート サーバでモニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値：選択済み

SAP NetWeaver アプリケーション・サーバ

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
[TARGET_SERVER_NAME]	監視する SAP Java Web アプリケーション・サーバのアドレス。
[USER_NAME]	SAP Java Web アプリケーション・サーバへの接続に必要なユーザ名。
[PORT]	SAP Java Web アプリケーション・サーバのポート。
[Password]	SAP Java Web アプリケーション・サーバへの接続に必要なパスワード。
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値： 選択されていない
[リモート サーバで モニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注： このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値： 選択済み

53

Siebel ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ Siebel ソリューションの概要 (1092 ページ)

タスク

- ▶ Siebel ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1094 ページ)

参照情報

- ▶ Siebel ソリューションの設定要件 (1095 ページ)
- ▶ Siebel ソリューション・テンプレート・ページ (1097 ページ)

概念

Siebel ソリューションの概要

SiteScope Siebel ソリューション・テンプレートでは、Microsoft Windows および UNIX オペレーティング・システムにインストールされている Siebel アプリケーション・サーバ、ゲートウェイ・サーバ、Web サーバのパフォーマンス、可用性、使用率の統計情報を効率的かつ詳細に監視できます。UNIX および Windows プラットフォームにインストールされているサーバに対応する個別のソリューション・テンプレートがあります。

Siebel の主なソリューション・テンプレートは、Siebel Application Server テンプレートです。このテンプレートを使用して、中核となる Siebel アプリケーションの監視をデプロイします。これらの任意指定のコンポーネントを IT 環境にデプロイする場合、Siebel Gateway Server テンプレートおよび Siebel Web Server テンプレートを使用します。

Siebel ソリューション・テンプレートは包括的な Siebel 監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、さまざまなパフォーマンス・モニタを設定およびデプロイする時間の削減や、リアルタイムのパフォーマンス・ボトルネックと長期的な傾向の特定に役立ち、実運用システムには最小限のオーバーヘッドのみが追加されます。

注：

- ▶ Siebel ソリューション・テンプレートを使用するには、該当の SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ Siebel ソリューションの詳細については、『SiteScope Siebel Best Practices』（英語版）ドキュメントを参照してください。このドキュメントは、SiteScope インストールに含まれており、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥sisdocs¥pdfs¥SiteScope_Siebel_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは Siebel ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

Siebel ソリューションには、次の重要な Siebel コンポーネントを監視するためのソリューション・テンプレートが含まれています。

- ▶ **UNIX/Windows の Siebel アプリケーション・サーバ。** SiteScope Siebel Application Server ソリューションでは、Windows および UNIX プラットフォームにインストールされている Siebel アプリケーション・サーバの可用性、使用率の統計情報、サーバ・パフォーマンス統計情報を監視できます。これらのソリューション・テンプレートでは、Siebel 6.x, 7.x, 8.x のアプリケーション・サーバの状況、可用性、およびパフォーマンスをテストする一連のモニタがデプロイされます。
- ▶ **UNIX/Windows の Siebel ゲートウェイ・サーバ。** SiteScope Siebel Gateway Server ソリューションでは、Windows および UNIX プラットフォームにインストールされている Siebel ゲートウェイ・サーバの可用性およびサーバ統計情報を監視できます。これらのソリューション・テンプレートでは、Siebel ゲートウェイ・サーバの状況、可用性、およびパフォーマンスをテストする一連のモニタがデプロイされます。これらのソリューション・テンプレートを使用して、サーバ全体のリソースと測定値のモニタをデプロイできます。
- ▶ **UNIX/Windows の Siebel Web サーバ。** SiteScope Siebel Web Server ソリューションでは、Windows および UNIX プラットフォームにインストールされている Siebel Web サーバの可用性およびサーバ統計情報を監視できます。これらのソリューション・テンプレートでは、Siebel Web サーバの状況、可用性、およびパフォーマンスをテストする一連のモニタがデプロイされます。

タスク

Siebel ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定する手順と、Siebel ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1094 ページ「Siebel サーバ環境の設定」
- ▶ 1094 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1094 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 Siebel サーバ環境の設定

サーバ環境に関連する設定要件を実行します。概念の詳細については、1095 ページ「Siebel ソリューションの設定要件」を参照してください。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

Siebel ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1097 ページ「Siebel ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

参照情報

Siebel ソリューションの設定要件

Siebel Application Server ソリューションまたは Siebel Web Server ソリューションを使用する前に、サーバ環境に関連する多数の設定要件があります。

本項の内容

- ▶ 1095 ページ「Siebel Application Server ソリューション・テンプレート」
- ▶ 1096 ページ「Siebel Web Server ソリューション・テンプレート」

Siebel Application Server ソリューション・テンプレート

- ▶ (Siebel アプリケーション・サーバが UNIX にインストールされている場合でも) Siebel サーバ・マネージャ・クライアントは、SiteScope が実行されている、または SiteScope マシンにアクセスできる Windows マシンにのみインストールする必要があります。これを行う方法はいくつかあります。詳細については、Siebel サーバ・マネージャ・モニタのドキュメントを参照してください。
- ▶ SiteScope で Siebel サーバ・マネージャ・モニタを設定するには、サーバ・マネージャ・クライアントのインストール・パスを把握しておく必要があります。SiteScope が実行されているマシンにクライアントをインストールする場合、このマシンのパスがインストール・パスになります。リモート・マシンにクライアントがインストールされている場合、そのマシンに対するクライアント実行ファイルの完全修飾パスを把握しておく必要があります。
- ▶ ネットワークで使用できる Siebel アプリケーションの名前を把握しておく必要があります。たとえば、call center や sales などです。
- ▶ Siebel データベース・マシン名、ユーザ名、パスワード、接続 URL、およびデータベース・ドライバを把握しておく必要があります。
- ▶ Siebel サーバにログインするために SiteScope で使用するユーザ名とパスワードを把握しておく必要があります。このユーザには、Siebel サーバの Siebel 管理者権限を付与する必要があります。

- ▶ 次の Siebel サーバ・コンポーネント・グループが有効であることを確認する必要があります。
 - ▶ Siebel コール・センター (CallCenter)
 - ▶ Siebel リモート (Remote)
 - ▶ システム管理 (System)
 - ▶ 補助システム管理 (SystemAux) - Siebel 8.x のみ
- ▶ Siebel システム・コンポーネントの名前とそれに対応する別名の重要なリストを把握しておく必要があります。コンポーネントの名前と別名のリストについては、1097 ページ「Siebel ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

システムと設定要件の詳細については、『Monitor Reference』（英語版）の「Siebel Web Server Monitor Overview」および「Database Query Monitor Overview」のセクションを参照してください。これらのモニタ・タイプは、Siebel Application Server ソリューション・テンプレートの一部としてデプロイされます。

Siebel Web Server ソリューション・テンプレート

- ▶ Siebel Web サーバが実行されているマシンに SiteScope サーバから接続できる必要があります。
- ▶ Siebel Web Server ソリューションは、Microsoft Windows プラットフォームで実行されている Siebel で使用するよう設計されています。
- ▶ テンプレートでは、Siebel Web サーバが Microsoft Internet Information Server (IIS) で実行されていることを想定しています。

Siebel ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、Windows および UNIX プラットフォームの Siebel 6.x, 7.x, 8.x アプリケーション・サーバ、Siebel ゲートウェイ・サーバ、Siebel Web サーバを監視するための Siebel ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで [ソリューション テンプレート] を展開して、必要な Siebel ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	▶ 1091 ページ「Siebel ソリューション・テンプレート」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

Siebel アプリケーション・サーバ

[メイン設定] には、Windows および UNIX 環境の Siebel アプリケーション・サーバ 6.x, 7.x, 8.x を監視するための次の要素があります。

UI 要素 (A-Z)	説明
[Application]	Siebel アプリケーション・サーバ・マシンの名前。
[CG_Auxiliary_System_Management_Alias] (Siebel 8.x のみ)	Siebel 補助システム管理コンポーネント・グループの別名。
[CG_Auxiliary_System_Management_Name] (Siebel 8.x のみ)	Siebel 補助システム管理コンポーネント・グループの名前。
[CG_Callcenter_Alias]	Siebel CallCenter コンポーネント・グループの別名。
[CG_Callcenter_Name]	Siebel CallCenter コンポーネント・グループの名前。
[CG_System_Management_Alias]	Siebel システム管理コンポーネント・グループの別名。
[CG_System_Management_Name]	Siebel システム管理コンポーネント・グループの名前。
[CP_Callcenter_Alias]	Siebel CallCenter コンポーネントの別名。

UI 要素 (A-Z)	説明
[CP_Callcenter_Name]	Siebel CallCenter コンポーネントの名称。
[CP_Client_Administration_Alias (Siebel 6.x ~ 7.x のみ)]	Siebel クライアント管理コンポーネントの別名。
[CP_Client_Administration_Name (Siebel 6.x ~ 7.x のみ)]	Siebel クライアント管理コンポーネントの名称。
[CP_eService_Alias]	Siebel eService コンポーネントの別名。
[CP_eService_Name]	Siebel eService コンポーネントの名称。
[CP_File_System_Manager_Alias]	Siebel ファイル・システム・マネージャ・コンポーネントの別名。
[CP_File_System_Manager_Name]	Siebel ファイル・システム・マネージャ・コンポーネントの名称。
[CP_Server_Manager_Alias]	Siebel サーバ・マネージャ・コンポーネントの別名。
[CP_Server_Manager_Name]	Siebel サーバ・マネージャ・コンポーネントの名称。
[CP_Server_Request_Broker_Alias]	Siebel サーバ要求ブローカ・コンポーネントの別名。
[CP_Server_Request_Broker_Name]	Siebel サーバ要求ブローカ・コンポーネントの名称。
[CP_Server_Request_Processor_Alias]	Siebel サーバ要求ブローカ・コンポーネントの別名。
[CP_Server_Request_Processor_Name]	Siebel サーバ要求プロセッサ・コンポーネントの名称。

UI 要素 (A-Z)	説明
[Database_Connection_URL]	データベース接続の URL。 例 : ODBC 接続の名前が test の場合、URL は jdbc:odbc:test になります。 接続するデータベースの接続 URL を入力します。構文は、jdbc:oracle:thin:@<サーバ名または IP アドレス>:<データベース・サーバ・ポート>;sid=<sid> になります。 例 : ポート 1521 を使用しているマシンの ORCL データベースに接続するには、次の接続 URL を使用します。 jdbc:oracle:thin:@206.168.191.19:1521:ORCL. 注 : 前の例のようにコロンおよび @ 記号を含める必要があります。
[Database_Driver]	データベース接続に使用するドライバ。
[Database_PASSWORD]	Siebel データベースにアクセスするために使用するユーザ名のパスワード。
[Database_Username]	Siebel データベースにアクセスするために SiteScope で使用する必要があるユーザ名。
[Enterprise]	Siebel Enterprise サーバの名前。
[Gateway]	Siebel ゲートウェイ・サーバ・マシンの名前。
[PASSWORD]	Siebel クライアントのパスワード。
[SERVER_LIST]	Siebel アプリケーション・サーバが実行されているサーバの名前。
[Server_Logical_Instance_Name]	Siebel サーバの論理名。
[Server_Manager_Path]	Siebel サーバ・マネージャ・クライアントのローカル・パス。 例 : D:¥sea703¥client¥bin.
[Siebel_Database_Machine_Name]	Siebel データベース・マシンの名前。
[Siebel_Disk]	Siebel がインストールされているディスク・ドライブの名前。

UI 要素 (A-Z)	説明
[Siebel_Root_Dir]	Siebel の共有ルート・ディレクトリのパス。 例 : Siebel 7.5.2 サーバの共有ルート・ディレクトリは sea752 になります。
[Username]	Siebel クライアントのユーザ名。
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 <SiteScope のルート・ディレクトリ>%logs%silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
[リモート サーバでモニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 : 選択済み

Siebel ゲートウェイ・サーバ

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
[Siebel_Root_Dir]	Siebel のルート・ディレクトリのパス。このディレクトリには、少なくとも管理コンソールがインストールされている必要があります。
[Siebel_Disk]	Siebel ゲートウェイ・サーバが実行されているディスク・ドライブ。
[Siebel_Logical_Instance_Name]	Siebel サーバの論理名の値 (UNIX のみ)。
[SERVER_LIST]	Siebel ゲートウェイ・サーバが実行されているサーバの名前。サーバ名の一部として、UNC パスを示す円記号 (¥¥) は入力しないでください。

UI 要素	説明
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値：選択されていない
[リモート サーバでモニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値：選択済み

Siebel Web サーバ

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
[Application]	監視する Siebel アプリケーション。 例：callcenter_enu。インストールされている Siebel アプリケーションの名前については、Siebel 管理者にお問い合わせください。
[Siebel_Disk]	Siebel Web サーバがインストールされているディスク・ドライブの名前またはドライブ文字。
[Siebel_Root_Dir]	Siebel の共有ルート・ディレクトリの名前。 例：Windows の Siebel のルート・ディレクトリは sea752 になります。
[Siebel_Logical_Instance_Name]	Siebel サーバの論理名の値（UNIX のみ）。
[Username]	Siebel Web サーバにログインするために必要な Siebel クライアントのユーザ名。

UI 要素	説明
[Password]	Siebel Web サーバにログインするために必要な Siebel クライアントのパスワード。
[SERVER_LIST]	Siebel Web サーバ・マシンの名前。選択した Siebel Web サーバを使用して、サーバ選択ページを表示します。[サーバ] ドロップダウン・メニューを使用して、Siebel Web サーバが実行されているサーバを選択します。
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値： 選択されていない
[リモート サーバでモニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注： このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値： 選択済み

54

Solaris Host ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ Solaris Host ソリューションの概要 (1104 ページ)

タスク

- ▶ Solaris Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1106 ページ)

参照情報

- ▶ Solaris Host ソリューションの設定要件 (1107 ページ)
- ▶ Solaris Host ソリューション・テンプレート・ページ (1107 ページ)

概念

Solaris Host ソリューションの概要

Solaris Host ソリューション・テンプレートは、Solaris ホストの状況、可用性、パフォーマンスをテストする標準設定の測定値で設定された、モニタの収集のデプロイに使用できるテンプレートです。このテンプレートは、SiteScope でサポートされているバージョンの Solaris をサポートしています。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) の「システム要件」を参照してください。

UNIX リソース・モニタの場合、監視対象サーバの 3 つの異なる測定値のデータが表示される、サーバ中心のレポートを作成できます。必要なモニタおよび測定値があらかじめ設定されているため、UNIX リソース・モニタを作成する場合はソリューション・テンプレートを使用することをお勧めします。サーバ中心のレポートの生成の詳細については、1166 ページ「サーバ中心のレポートの生成」を参照してください。

Solaris Host ソリューション・テンプレートを使用して、Solaris オペレーティング・システムを包括的に監視できます。SiteScope ユーザや IT 組織がアプリケーションに精通している必要はありません。また、さまざまなパフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

Solaris Host ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。

Solaris Host ソリューションの設定の詳細については、『SiteScope Operating System Host Best Practices』（英語版）ドキュメントを参照してください。このドキュメントは、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>%sdocs%pdfs%SiteScope_OS_Best_Practices.pdf** にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Operating Systemのホスト・ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。

ソリューション・テンプレート・モニタ

Solaris Host ソリューション・テンプレートでは、Solaris のパフォーマンスと状況の次の側面を対象とするモニタをデプロイします。

- ▶ CPU の状態と使用率の詳細
- ▶ メモリの状態と使用率の詳細
- ▶ ファイル・システムの状態と使用率の詳細

タスク

Solaris Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Solaris Host ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

注：Solaris Host ソリューション・テンプレートでは、各監視対象ホストの UNIX リソース・モニタをデプロイします。これは、サーバ中心のレポートをサポートするために必要となる補足モニタです。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1106 ページ「Solaris サーバ環境の設定」
- ▶ 1106 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1106 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 Solaris サーバ環境の設定

サーバ環境に関連する設定要件を実行します。概念の詳細については、1107 ページ「Solaris Host ソリューションの設定要件」を参照してください。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

Solaris Host ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1107 ページ「Solaris Host ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

参照情報

Solaris Host ソリューションの設定要件

Solaris Host ソリューション・テンプレートを使用するには、サーバ環境に関するいくつかの設定要件を満たしている必要があります。

- ▶ SiteScope サーバは、監視対象 Solaris ホストに接続できる必要があります。
- ▶ 対象サーバを UNIX リモート・マシンとして SiteScope に追加し、UNIX リモート・テストにパスする必要があります（**[リモート サーバ]** > **[UNIX リモート サーバ]**）。詳細については、531 ページ「新規 UNIX リモート・サーバ/UNIX リモート・サーバの編集ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- ▶ サポートされている Solaris オペレーティング・システムを実行している SiteScope サーバ自体を監視することもできます。
- ▶ このテンプレートは、SiteScope でサポートされているバージョンの Solaris をサポートしています。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) の「システム要件」を参照してください。

Solaris Host ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、Solaris ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開して [Solaris Host] を選択します。
関連タスク	974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	▶ 1103 ページ「Solaris Host ソリューション・テンプレート」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
[SERVER_LIST]	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。UNIX 接続プロファイルを作成する手順については、518 ページ「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値：選択されていない
[リモート サーバで モニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値：選択済み

55

WebLogic ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ WebLogic ソリューションの概要 (1110 ページ)

タスク

- ▶ WebLogic ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1112 ページ)

参照情報

- ▶ WebLogic ソリューションの使用ガイドライン (1113 ページ)
- ▶ 監視対象の WebLogic モジュールの選択 (1113 ページ)
- ▶ WebLogic ソリューション・テンプレート・ページ (1115 ページ)

概念

WebLogic ソリューションの概要

WebLogic ソリューション・テンプレートを使用すると、標準設定の測定値が設定された一連の WebLogic モニタをデプロイできます。このモニタは、WebLogic アプリケーション・サーバとデプロイしたアプリケーションおよびコンポーネントの状況、可用性、パフォーマンスをテストします。デプロイしたモニタは、サーバ全体の統計（メモリ使用率など）と、個々の J2EE コンポーネントに固有の測定値（特定の EJB のアクティブ化とパッシブ化の数など）をチェックします。

WebLogic ソリューションは、WebLogic 6.x, 7.x, 8.x, 9.x, 10.x サーバからの統計の監視に使用します。このソリューションは、重要なアプリケーション・サーバ測定値を監視する複数のグループを標準設定で自動的に作成しますが、ユーザが監視可能な個々のコンポーネントのすべてまたは一部を選択できるユーザ・インタフェースも備えています。

WebLogic ソリューション・モニタのデプロイメント・プロセスは、高度なカスタマイズが可能で、ユーザがアプリケーション・サーバ上の特定の J2EE コンポーネントを選択して SiteScope でアクティブに監視できます。

WebLogic ソリューション・テンプレートを使用して、WebLogic を包括的に監視できます。SiteScope ユーザや IT 組織が WebLogic の専門家である必要はありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ WebLogic ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ WebLogic ソリューションの詳細は、『SiteScope WebLogic Best Practices』（英語版）のドキュメントを参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれており、**<SiteScope のルート・ディレクトリ> %sisdocs%\pdfs\SiteScope_WebLogic_Best_Practices.pdf** にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、WebLogic ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

WebLogic ソリューション・テンプレートは、WebLogic のパフォーマンスと状況について次の側面を対象とするモニタをデプロイします。

- ▶ **サーバ・パフォーマンス統計。**このカテゴリは、WebLogic アプリケーション・サーバの管理インタフェースを介して公開されるサーバ全体の一連のリソースを参照します。
- ▶ **アプリケーション・パフォーマンス統計。**デプロイしたアプリケーション、EJB、Web アプリケーション、サーブレットのすべての測定値を WebLogic ソリューションを介して監視できます。モニタの自動デプロイ先となる J2EE コンポーネントは、ユーザが選択します。WebLogic ベスト・プラクティスに基づいた一連の測定値が、選択した J2EE コンポーネントごとに監視されます。
- ▶ **WebLogic ソリューションの測定値。**監視可能なコンポーネントのリストについては、『SiteScope WebLogic Best Practices』（英語版）ドキュメントを参照してください。

タスク

WebLogic ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、WebLogic ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1112 ページ「WebLogic サーバ環境の設定」
- ▶ 1112 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1112 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 WebLogic サーバ環境の設定

使用ガイドラインに従い、サーバ環境に関連する設定要件を実行します。概念の詳細については、1113 ページ「WebLogic ソリューションの使用ガイドライン」を参照してください。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

WebLogic ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページで各項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1115 ページ「WebLogic ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

参照情報

WebLogic ソリューションの使用ガイドライン

WebLogic ソリューション・テンプレートは、ユーザ・インタフェースから選択したモジュールごとに WebLogic アプリケーション・サーバ・モニタをデプロイします。このモニタは、Java JMX インタフェースを使用して WebLogic サーバのランタイム MBean にアクセスします。MBean は、パフォーマンス測定値を保持するコンテナです。SiteScope が MBean を監視できるようにするには、WebLogic サーバに特定の権限の設定が必要になる場合があります。SiteScope モニタ用の WebLogic サーバへのアクセス設定の概要については、『Monitor Reference』（英語版）の「WebSphere Application Server Monitor Overview」を参照してください。

監視対象の WebLogic モジュールの選択

WebLogic ソリューションには階層リストが表示され、そこからユーザが WebLogic モニタのデプロイ先とするモジュールを選択できます。このリストは次の 2 つのメイン・セクションに分類されています。

- ▶ サーバ単位のリソース
- ▶ アプリケーション別に編成される J2EE コンポーネント

これらのカテゴリのモジュールの中には、システムの重要なコンポーネントを表すため、標準設定で自動的に選択されるものがあります（アプリケーション・サーバの JVM 統計など）。それ以外のモジュールは、自動的に選択されません。このため、ユーザはこのソリューションのデプロイメントを、特定のアプリケーション、特定タイプの EJB、一連のサーブレットや Web アプリケーション、その他何らかのアプリケーションの側面に特化するようにカスタマイズできます。

このモジュールのリストのほとんどの部分は、直感的に編成されています。アプリケーション、EJB、Web アプリケーション、サーブレットの階層は、WebLogic 管理コンソールに表示されるこれらのエンティティの編成とよく似ています。ほとんどの場合、モジュールを選択すると、関連するすべての測定値を持つモニタが、WebLogic サーバの対応する部分にデプロイされます。ただし、監視対象の EJB を選択する場合、EJB は 3 つの測定値タイプ（プール、トランザクション、キャッシュ）に従って分類されています。これには次の 2 つの理由があります。(1) 警告と編成を目的とする場合、WebLogic モニタ単位よりも特定の EJB の 1 つの側面を監視できる方が利便性が高く、(2) すべての EJB がこれら 3 つの測定値タイプのすべてを使用できるとは限りません。

次に、EJB 監視のタイプごとに監視される測定値について簡単に説明します。

- ▶ **EJB 単位のトランザクション統計。**この EJB モニタのカテゴリには、EJB に対して実行されたトランザクションに関する測定値が含まれます。測定値には、ロールバックされたトランザクション数、タイムアウトしたトランザクション数、正常に確定されたトランザクション数などがあります。
- ▶ **EJB 単位のプール統計。**この EJB モニタのカテゴリには、EJB のプールに関連する測定値が含まれます。この見出しの下にある EJB をユーザが選択すると、プールから Bean インスタンスを取得しようとして失敗した回数、プール内で現在使用可能なインスタンス数、現在インスタンスを待機中のスレッド数、アプリケーション以外の例外が原因で Bean インスタンスが破棄された回数など、多くの有用な測定値が監視されます。
- ▶ **EJB 単位のキャッシュ統計。**キャッシュ統計には、特定の EJB のキャッシュに関する測定値が含まれます。この見出しの下にある EJB を監視対象に選択すると、キャッシュ・ヒット数とキャッシュ不在数、EJB のアクティブ化数とパッシブ化数などの測定値が監視されます。

ポップアップ・ウィンドウでモジュールを選択し終わったら、[Module Selection] ウィンドウの下部までスクロールし、[Select Modules] ボタンをクリックします。これにより、ブラウザのメイン・ウィンドウが更新され、選択したモジュールのリストが表示されます。選択したモジュールを確認し、モニタの作成対象外にするモジュールがあれば削除します。

ブラウザのメイン・ウィンドウに表示されている選択したモジュールのリストに問題がなければ、[送信] をクリックします。

WebLogic ソリューション • テンプレート • ページ

このページでは、BEA WebLogic 6.x, 7.x, 8.x, 9.x, 10.x アプリケーション・サーバを監視するための WebLogic ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、必要な WebLogic ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	▶ 1109 ページ「WebLogic ソリューション・テンプレート」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

WebLogic 9.x-10.x

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
[WEBLOGIC_URL]	WebLogic 9.x または 10.x アプリケーション・サーバの URL。標準設定値は次のとおりです。 <pre>service:jmx:rmi:///jndi/iop://<ローカル・ホスト>:7001/weblogic.management.mbeanservers.runtime</pre> <ローカル・ホスト> は、WebLogic アプリケーション・サーバ 9.x または 10.x を実行するマシンの名前です。
[カウンタ]	このモニタでチェックするサーバのパフォーマンス・カウンタを表示します。[カウンタの取得] ボタンを使用してカウンタを選択します。
[カウンタの取得]	[カウンタの取得] ダイアログ・ボックスが開き、監視対象のカウンタを選択できます。

UI 要素	説明
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%logs%silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
[リモート サーバで モニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 : 選択済み

WebLogic 6.x, 7.x, 8.x

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
[WEBLOGIC_PORT]	WebLogic サーバが応答するポート番号。 標準設定値 : 7001
[WEBLOGIC_PASSWORD]	WebLogic サーバへのログインに必要なパスワード。
[WEBLOGIC_USERNAME]	WebLogic サーバへのログインに必要なユーザ名。
[WEBLOGIC_SERVER]	WebLogic が実行されているサーバの名前またはアドレス。
[WEBLOGIC_TIMEOUT]	データ要求が WebLogic サーバに到達するまで待機する秒数。 標準設定値 : 180

UI 要素	説明
[WEBLOGIC_JAR_FILE]	SiteScope マシンの weblogic.jar ファイルへの絶対パス。このファイルは、SiteScope サーバにインストールされている必要があり、WebLogic サーバからダウンロードできます。 例 : c:\bea\weblogic7\bin\lib\ext\weblogic.jar。
[カウンタ]	このモニタでチェックするサーバのパフォーマンス・カウンタを表示します。[カウンタの取得] ボタンを使用してカウンタを選択します。
[カウンタの取得]	[カウンタの取得] ダイアログ・ボックスが開き、監視対象のカウンタを選択できます。
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\logs\silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
[リモート サーバでモニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 : 選択済み

56

WebSphere ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ WebSphere ソリューションの概要 (1120 ページ)

タスク

- ▶ WebSphere ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1122 ページ)

参照情報

- ▶ WebSphere ソリューション・テンプレート・ページ (1124 ページ)

概念

WebSphere ソリューションの概要

WebSphere ソリューション・テンプレートを使用すると、標準設定の測定値が設定された一連の WebSphere モニタをデプロイできます。このモニタは、IBM WebSphere アプリケーション・サーバ 5.x および 6.x の可用性、サーバ統計、デプロイした J2EE コンポーネントをテストします。このソリューション・テンプレートを使用して、サーバ単位のリソースと測定値（スレッド・プールや JVM の測定値など）のモニタをデプロイできます。また、このソリューション・テンプレートを使用して、デプロイした EJB、Web アプリケーション、サーブレットのモニタも作成できます。

WebSphere ソリューション・モニタのデプロイメント・プロセスは、高度なカスタマイズが可能で、ユーザがアプリケーション・サーバの特定の J2EE コンポーネントを選択して SiteScope でアクティブに監視できます。

WebSphere ソリューション・テンプレートを使用して、WebSphere を包括的に監視できます。SiteScope ユーザや IT 組織が WebSphere の専門家である必要はありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ WebSphere ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ WebSphere ソリューションの詳細は、『SiteScope WebSphere Best Practices』（英語版）のドキュメントを参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれており、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥sisdocs¥pdfs¥SiteScope_WebSphere_Best_Practices.pdf** にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、WebSphere ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

WebSphere ソリューション・テンプレートは、WebSphere のパフォーマンスと状況について次の側面を対象とするモニタをデプロイします。

- ▶ **サーバ・パフォーマンス統計。**このカテゴリは、WebSphere アプリケーション・サーバの管理インタフェースを介して公開されるサーバ単位の一連のリソースを参照します。
- ▶ **アプリケーション・パフォーマンス統計。**デプロイしたアプリケーション、EJB、Web アプリケーション、サーブレットのすべての測定値を WebSphere ソリューションを介して監視できます。モニタの自動デプロイ先となる J2EE コンポーネントは、ユーザが選択します。WebSphere ベスト・プラクティスに基づいた一連の測定値が、選択した J2EE コンポーネントごとに監視されます。
- ▶ **WebSphere アプリケーション・サーバ・ソリューションの測定値。**監視可能なコンポーネントのリストについては、『SiteScope WebSphere Best Practices』（英語版）ドキュメントを参照してください。

タスク

WebSphere ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、WebSphere ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1122 ページ「WebSphere サーバ環境の設定」
- ▶ 1123 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1123 ページ「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 WebSphere サーバ環境の設定

サーバ環境に関連する設定要件を実行します。これらの要件の概要については、[SiteScope ヘルプ] の [モニタ参照](#) にある「WebSphere Application Server Monitor Overview」を参照してください。

注：標準設定では、WebSphere 6.x アプリケーション・サーバ・ソリューション・テンプレートは内部的な JVM メカニズムを使用します。そのため、このソリューション・テンプレートを使用する場合、内部 Java を使用するよう監視環境を設定する必要があります。詳細については、『Monitor Reference』（英語版）の「Configure the WebSphere 6.0x Server Environment Using Internal Java」および「Configure the WebSphere 6.1x Server Environment Using Internal Java」を参照してください。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートのデプロイに関連する手順の詳細については、974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

WebSphere ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページで各項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1124 ページ「WebSphere ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

参照情報

 WebSphere ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、IBM WebSphere アプリケーション・サーバ 5.x および 6.x を監視するための WebSphere ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューションテンプレート]を展開し、必要な WebSphere ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	974 ページ「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	▶ 1119 ページ「WebSphere ソリューション・テンプレート」 ▶ 83 ページ「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
[WEBSPHHERE_SERVER]	WebSphere アプリケーションが実行されているサーバの名前。サーバ名の一部として UNC パスを示すために円記号 (¥¥) を入力しないでください。
[WEBSPHHERE_PORT]	WebSphere サーバのポート番号。これは、WebSphere 5.x の SOAP ポートである必要があります。 標準設定値 : 8880

UI 要素	説明
[WEBSPPHERE_USER_NAME]	SiteScope が WebSphere アプリケーション・サーバへのログインに使用するユーザ名。 WebSphere 6.x では、ソリューション・テンプレートでグローバル・セキュリティはサポートされていません。つまり、任意のテキストを入力できますが、テキスト・ボックスを空白のままにすることはできません。グローバル・セキュリティの作業が必要な場合は、このテンプレートを完成させます。WebSphere モニタを編集し、[モニタ設定] 表示枠で、グローバル・セキュリティの各ボックスを更新します ([トラストストア], [トラストストアのパスワード], [キーストア], [キーストアのパスワード])。
[WEBSPPHERE_PASSWORD]	SiteScope で WebSphere サーバへのログインに使用するパスワード。 WebSphere 6.x では、ソリューション・テンプレートでグローバル・セキュリティはサポートされていません。つまり、任意のテキストを入力できますが、テキスト・ボックスを空白のままにすることはできません。グローバル・セキュリティの作業が必要な場合は、このテンプレートを完成させます。WebSphere モニタを編集し、[モニタ設定] 表示枠で、グローバル・セキュリティの各ボックスを更新します ([トラストストア], [トラストストアのパスワード], [キーストア], [キーストアのパスワード])。
[WEBSPPHERE_CLIENT_PROPERTIES_FILE]	クライアント・プロパティ・ファイル。 標準設定値 : /properties/soap.client.props
[WEBSPPHERE_DIRECTORY]	WebSphere アプリケーション・サーバからの /java および /lib サブディレクトリが含まれる WebSphere ディレクトリへのパス。 WebSphere 6.x では、このディレクトリには /profiles サブディレクトリも含まれている必要があります。このサブディレクトリには、グローバル・セキュリティに必要なキー・ストア・ファイルとトラスト・ストア・ファイルがすべて含まれています。/profiles サブディレクトリ内のサーバ・プロファイルは、default という名前にする必要があります。サーバ・プロファイルに別の名前が付いている場合は、名前を「default」に変更します。

UI 要素	説明
[WEBSphere_USE_EXTERNAL_JVM]	外部 JVM を使用して監視が行えるようにします。標準設定では、WebSphere モニタは内部 JVM を使用します。外部 JVM は大量のリソースを消費し、起動に時間がかかる上、エラー処理が適切に行われません。 注：外部 JVM を使用する場合は、証明書管理を介して追加される証明書は使用できません。 標準設定値： false
[カウンタ]	このモニタでチェックするサーバのパフォーマンス・カウンタを表示します。[カウンタの取得] ボタンを使用してカウンタを選択します。
[カウンタの取得]	[カウンタの取得] ダイアログ・ボックスが開き、監視対象のカウンタを選択できます。
[サイレント デプロイメント]	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値： 選択されていない
[リモート サーバでモニタ プロパティを検証]	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値： 選択済み

第 VIII 部

SiteScope ダッシュボード

SiteScope ダッシュボードを使った作業

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope ダッシュボードの概要 (1130 ページ)
- ▶ ダッシュボード・フィルタの概要 (1131 ページ)
- ▶ モニタの状態の確認 (1132 ページ)
- ▶ SiteScope ツールへのアクセス (1133 ページ)

タスク

- ▶ SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法 (1134 ページ)
- ▶ SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法 (1136 ページ)

参照情報

- ▶ SiteScope ダッシュボードのユーザ・インタフェース (1139 ページ)

概念

SiteScope ダッシュボードの概要

SiteScope 監視では、システムの可用性とパフォーマンスが視覚的にリアルタイムに表示されます。SiteScope モニタを設定して、さまざまなインフラストラクチャ・コンポーネント（Web、アプリケーション、データベース、ファイアウォール・サーバなど）の測定値を収集します。次に、SiteScope サービス状況で表示するために状態と測定値が集計されます。

ダッシュボードは SiteScope モニタ・ツリー階層にリンクしています。ダッシュボードに表示されるデータは、モニタ・ツリーで選択したコンテキストを表しています。最上位レベルは、SiteScope ノードおよび適用可能なモニタ・グループです。[ダッシュボード] ビューに表示される最下位レベルの要素は、個々の SiteScope モニタとその測定値です。

ダッシュボードには、モニタ情報の表示をカスタマイズできる機能があります。この機能では、名前付きフィルタ設定を定義して、定義済みの条件に一致するデータのみを表示できます。また、さまざまなデータ表示オプションを選択することもできます。

ダッシュボードには、モニタ要素の階層の移動、モニタの手動実行、モニタの無効化、警告定義へのアクセスを行うために使用できるハイパーリンクやメニューもあります。

ダッシュボード・フィルタの概要

次の条件を使用して、モニタまたはグループをフィルタできます。

- ▶ 特定のテキスト文字列を含むモニタまたはグループの名前
- ▶ 特定のホストやサーバを監視するモニタまたはグループ
- ▶ エラーを報告するモニタまたはグループ
- ▶ 特定のテキスト文字列を含む測定値の結果

フィルタは主にモニタに適用されます。フィルタ条件は、グループ、警告、レポートには適用されません。ビュー設定を使用してほかの要素をフィルタできます。詳細については、106 ページ「SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理の概要」を参照してください。

フィルタはすべての [ダッシュボード] ビューに適用されます。つまり、フィルタ条件および選択したノードによっては、一部のモニタが表示されない可能性があります。通常、フィルタは [子孫モニタをすべて表示] ビュー・オブションとともに使用することが最適です。フィルタは、[ダッシュボードフィルタ] ウィンドウでフィルタ条件を変更またはリセットするまでアクティブな状態が維持されます。

ダッシュボード・フィルタは、SiteScope ツリー・フィルタとは異なります。ダッシュボード・フィルタまたは SiteScope ツリー・フィルタのいずれかを使用して、特定のモニタ・タイプのみが表示されるようにノードをフィルタできます。ただし、ダッシュボード・フィルタは、現在選択されているツリー・フィルタ設定の結果に適用されます。ツリー・フィルタ設定がアクティブな場合、SiteScope 環境にフィルタ条件に一致するモニタが存在していても、ダッシュボード・フィルタでこのモニタが検出されない可能性があります。

フィルタ設定を保存するには、フィルタ設定を定義して、ダッシュボードのお気に入りとしてビューを保存します。詳細については、107 ページ「フィルタ設定の定義と管理」を参照してください。

ダッシュボード・フィルタの設定の詳細については、1154 ページ「[ダッシュボードフィルタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

モニタの状態の確認

確認機能を使用して、SiteScope によって検出されたシステムおよびネットワーク・インフラストラクチャの問題の解決を追跡できます。この機能を使用すると、問題が確認された時間、実行されたアクション、実行したユーザが SiteScope によって記録されます。

この機能では、モニタの警告を一時的に無効化することもできます。これは、問題に対処している間、警告の重複を回避する場合に便利です。また、複数のユーザが SiteScope を使用してシステムの可用性を管理する場合、確認機能を単純な問題のチケット・システムとして使用することもできます。

注： 確認機能は、[ダッシュボード] ビューでのみ使用できます。確認アイコンは、ダッシュボード [詳細ビュー] にのみ表示されます。

個々のモニタまたはモニタ・グループに確認を追加できます。モニタに追加された確認は、そのモニタにのみ適用されます。確認で選択した警告の無効化条件は、そのモニタ・インスタンスにのみ適用されます。グループを確認すると、確認の詳細と警告の無効化条件がグループ内のすべてのモニタに適用されます。グループに適用された確認は、グループのモニタごとに編集または削除できます。

モニタまたはグループに適用できる確認は 1 つのみです。これはいつでも適用できます。確認のコメントとインジケータは、該当の警告の無効化スケジュールの期限が切れても、削除されるまでインタフェースに表示されたままになります。

確認のデータおよびコメントは、SiteScope マシンのログ・ファイルに書き込まれます。確認を追加、編集、削除するたびに新しいログ・エントリが作成されます。問題のモニタまたはグループが確認されるか、確認済みの状態がクリアされると、確認ログでその履歴を表示できます。現在適用されている確認がない場合でも、項目の確認ログを表示できます。

[確認応答の追加] のユーザ・インタフェースの詳細については、1150 ページ「[確認応答の追加] および [確認応答の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

SiteScope ツールへのアクセス

SiteScope には、監視環境のテストに使用できる多数のツールがあります。これらのツールを使用して、監視対象となるシステムに照会し、アクションの詳細な結果を表示できます。これには、簡単なネットワーク接続のテストや、外部のデータベースまたはサービスにアクセスするためのログイン認証の検証などがあります。これらのツールは、ダッシュボード・ツールバーにあるモニタの [ツール] ボタン  をクリックして直接実行できます（特定のモニタの診断ツールが使用できる場合）。

使用可能な各種ツールの詳細については、210 ページ「SiteScope ツールの概要」を参照してください。

注：[SiteScope ツール] オプションは、個々のモニタに対してのみ使用できます。

タスク

SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法

このタスクでは、レイアウトやフィルタを設定して SiteScope ダッシュボードの表示および内容をカスタマイズする手順や、ビューをお気に入りに入れて保存する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1134 ページ「ダッシュボード・レイアウトの設定」
- ▶ 1134 ページ「ダッシュボード・フィルタの選択および設定（任意指定）」
- ▶ 1135 ページ「お気に入りへのビューの保存」

1 ダッシュボード・レイアウトの設定

[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックスの設定を使用して、グループおよびモニタの情報の表示をカスタマイズします。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1158 ページ「[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

2 ダッシュボード・フィルタの選択および設定（任意指定）

[ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックスにあるオプションを選択して、ダッシュボード・フィルタを設定します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1154 ページ「[ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

例：



3 お気に入りへのビューの保存

ダッシュボード・フィルタおよびレイアウト設定を定義したら、[お気に入り
に保存] ダイアログ・ボックスで名前付きのお気に入りビューとして保存で
きます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1152 ページ「[ダッシュボード
のお気に入り保存] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法

このタスクでは、SiteScope ダッシュボードでデータを分析する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

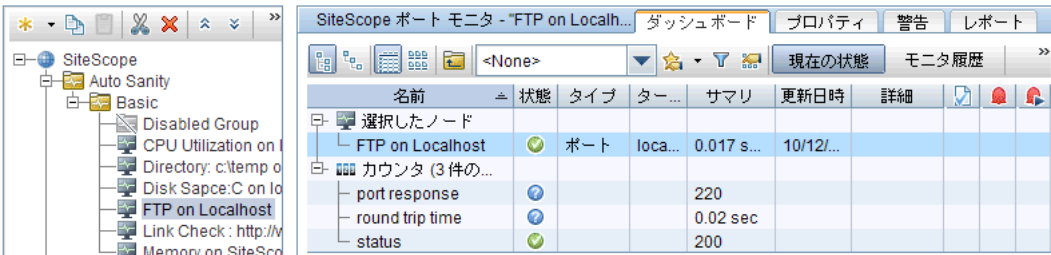
- ▶ 1136 ページ「モニタや測定値の状態および可用性を表示するためのドリルダウン」
- ▶ 1137 ページ「設定された警告および起動された警告の表示」
- ▶ 1137 ページ「モニタの確認」
- ▶ 1138 ページ「Microsoft Windows/UNIX サーバのリソースの監視」
- ▶ 1138 ページ「モニタ履歴の表示」

1 モニタや測定値の状態および可用性を表示するためのドリルダウン

ダッシュボードの「現在の状態」ビューで SiteScope データを表示中に、モニタ・ツリーをドリルダウンしてモニタや測定値の状態および可用性を表示できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1140 ページ「SiteScope ダッシュボード - 現在の状態ビュー」を参照してください。

例：



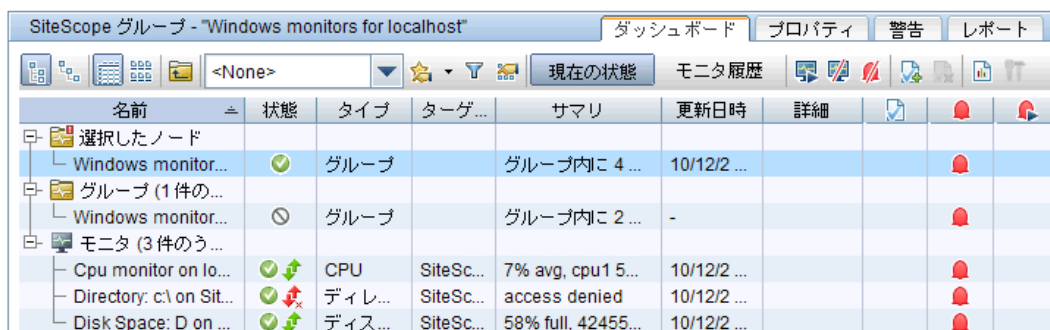
名前	状態	タイプ	ター...	サマリ	更新日時	詳細			
選択したノード									
FTP on Localhost	✓	ポート	loca...	0.017 s...	10/12/...				
カウンタ (3 件の...									
port response	?			220					
round trip time	?			0.02 sec					
status	✓			200					

2 設定された警告および起動された警告の表示

設定された警告および起動された警告の列で警告のデータを表示できます。モニタに警告が設定されている場合、**「設定された警告」** アイコン  をダブルクリックして設定された警告のリストを表示し、警告を選択して警告のプロパティを表示または編集できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1140 ページ「SiteScope ダッシュボード - 現在の状態ビュー」を参照してください。

例：



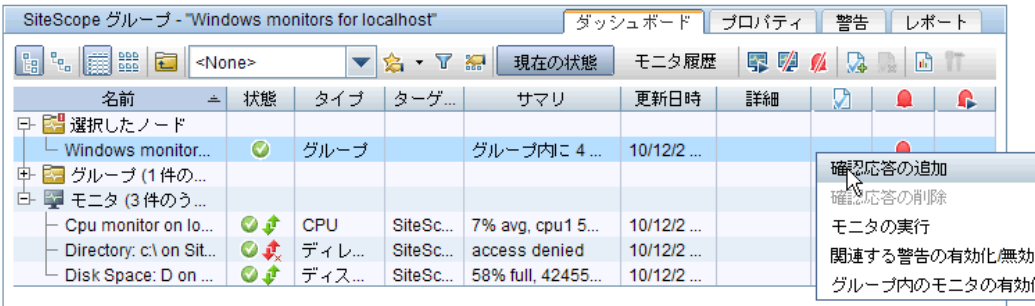
名前	状態	タイプ	ターゲット	サマリ	更新日時	詳細			
選択したノード									
Windows monitor...	✓	グループ		グループ内に 4 ...	10/12/2 ...				
グループ (1 件の...									
Windows monitor...	⊘	グループ		グループ内に 2 ...	-				
モニタ (3 件のう...									
Cpu monitor on lo...	✓	CPU	SiteSc...	7% avg, cpu1 5...	10/12/2 ...				
Directory: c:\ on Sit...	✓	ディレ...	SiteSc...	access denied	10/12/2 ...				
Disk Space: D on ...	✓	デイス...	SiteSc...	58% full, 42455...	10/12/2 ...				

3 モニタの確認

モニタの状態を確認するには、**「確認応答の追加」** アイコン  をクリックするか、コンテキスト・メニューから **「確認応答の追加」** を選択し、**「グループ内のモニタを確認」** ダイアログ・ボックスで詳細を入力します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1150 ページ「**「確認応答の追加」** および **「確認応答の編集」** ダイアログ・ボックス」を参照してください。

例：



4 Microsoft Windows/UNIX サーバのリソースの監視

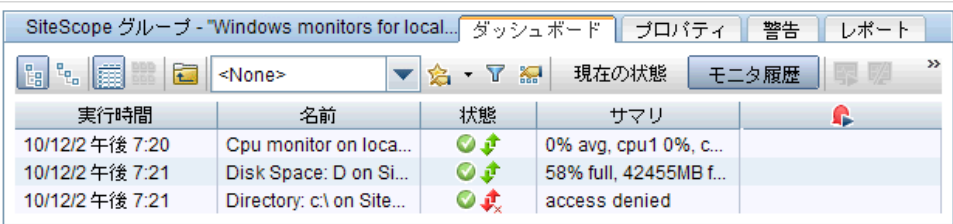
Microsoft Windows リソース・モニタまたは UNIX リソース・モニタを作成して、Windows サーバまたは UNIX サーバを監視し、サーバ中心のレポートを生成できます。タスクの詳細については、1168 ページ「サーバ中心のレポートの作成方法」を参照してください。

5 モニタ履歴の表示

[一般プリファレンス] でモニタ履歴を有効化および設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、624 ページ「ダッシュボード モニタ履歴表示オプション」を参照してください。

モニタ履歴を表示するには、SiteScope ダッシュボードの [モニタ履歴] ボタンをクリックします。ユーザ・インタフェースの詳細については、1149 ページ「SiteScope ダッシュボード - モニタ履歴ビュー」を参照してください。

例：



参照情報

SiteScope ダッシュボードのユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ SiteScope ダッシュボード - 現在の状態ビュー (1140 ページ)
- ▶ SiteScope ダッシュボード - モニタ履歴ビュー (1149 ページ)
- ▶ [確認応答の追加] および [確認応答の編集] ダイアログ・ボックス (1150 ページ)
- ▶ [ダッシュボードのお気に入りに保存] ダイアログ・ボックス (1152 ページ)
- ▶ [ダッシュボードのお気に入りの削除] ダイアログ・ボックス (1153 ページ)
- ▶ [ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックス (1154 ページ)
- ▶ [ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックス (1158 ページ)
- ▶ 診断ツール (1161 ページ)
- ▶ [グループ内のモニタの有効化/無効化] ダイアログ・ボックス (1163 ページ)

SiteScope ダッシュボード - 現在の状態ビュー

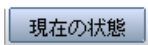
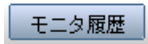
SiteScope によって監視されているインフラストラクチャ要素の現在のパフォーマンス・データが表示され、フィルタの定義に使用する機能にアクセスできます。ダッシュボードには、モニタ・ツリーで強調表示されている要素またはパスに表示されている要素のグループおよびモニタのテーブルが表示されます。各グループまたはモニタのノードをダブルクリックして、子ノードおよびモニタに移動できます。

ダッシュボードでは、サーバ中心のレポート、事前に設定されたクイック・レポート、モニタの確認の状態、モニタ・ツール、SiteScope 状況ステータス、モニタ履歴情報にアクセスできます。また、モニタや警告を有効化／無効化することもできます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーでオブジェクトを選択し、右側の表示枠の [ダッシュボード] タブをクリックします。
重要な情報	▶ 標準設定では、選択した要素の [ダッシュボード] テーブルに表示できるオブジェクトの最大数は 4000 で、[アイコン ビュー] で表示できるアイコンの最大数は 700 です。これらの数を変更するには、[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックスで値を変更します。ただし、標準設定を使用することをお勧めします。 ▶ 選択した要素の行数が、[ダッシュボード] テーブルに表示できる最大数よりも多い場合、さらに限定的なツリー・フィルタを作成するか、ダッシュボード・フィルタを設定してください。
関連タスク	▶ 1134 ページ「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」 ▶ 1136 ページ「SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法」
関連情報	1130 ページ「SiteScope ダッシュボードの概要」

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
	子グループと子モニタを表示 : 選択したノードの直接の子である要素のみが表示されます。グループおよびモニタの状態情報領域に、サブグループとモニタが個別のセクションで表示されます。
	すべての子孫モニタを表示 : 選択したノードのすべての子孫モニタが表示されます。[アイコン ビュー] オプションが選択されている場合、子孫モニタのアイコンと名前のみが表示されます。
	詳細ビュー : グループおよびモニタが表形式のリストとして表示されます。表の各行には要素の名前や状態などの情報が配置されます。
	アイコン ビュー : グループおよびモニタが一連の状態アイコンとして表示されます。アイコンの下には要素の名前が表示されます。
	上へ 。モニタ・ツリーの 1 つ上のレベルに移動します。このオプションは、SiteScope (ツリーの最上位レベル) では使用できません。
	お気に入りボックスには、ダッシュボード・フィルタとレイアウト設定の既存のお気に入りビューのドロップダウン・リストがあります。[現在の状態] ビューまたは [モニタ履歴] ビューで表示するビューを選択できます。 注 : お気に入りフィルタはモニタ・レベルで機能するため、グループはフィルタされません。[すべての子孫モニタを表示] ビューで作業している場合、フィルタに一致していない状態のグループが表示されることがあります。フィルタのモニタのみを表示するには、[すべての子孫モニタを表示] ビューを代わりに使用します。 標準設定値 : <なし>

UI 要素	説明
	お気に入りの管理：矢印をクリックして、次のオプションを選択します。 ▶ お気に入りに保存。[ダッシュボードのお気に入りに保存] ダイアログ・ボックスが開き、現在のダッシュボード・フィルタとレイアウト設定をお気に入りビューとして保存できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1152 ページ「[ダッシュボードのお気に入りに保存] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ お気に入りを削除。[ダッシュボードのお気に入りの削除] ダイアログ・ボックスが開き、既存のお気に入りビューを削除できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1153 ページ「[ダッシュボードのお気に入りの削除] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	ダッシュボード・フィルタ：[ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1154 ページ「[ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	ダッシュボードの設定：[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1158 ページ「[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	現在の状態。モニタ・ツリーで強調表示されている要素またはパスに表示されている要素のグループおよびモニタのテーブルが表示されます。
	モニタ履歴。過去 24 時間分のモニタ、モニタ・グループ、警告の情報が表示されます。時間、モニタの状態、データ・エントリ数を使用してこの情報をフィルタします。 モニタ履歴の表示の詳細については、1149 ページ「SiteScope ダッシュボード - モニタ履歴ビュー」を参照してください。
	モニタの実行。選択したモニタ、またはグループ内に設定されている任意のモニタを実行します。結果を表示する情報ウィンドウが開きます。

UI 要素	説明
	モニタの有効化/無効化：モニタ・プロパティの設定に関係なく、選択したモニタまたはグループ内のすべてのモニタを有効化または無効化する [グループ内のモニタの有効化/無効化] ダイアログ・ボックスを開きます。[モニタを無効化] を選択すると、このダイアログ・ボックスに戻って [モニタを有効化] を選択するまでモニタは無効になります。[グループ内のモニタの有効化/無効化] のユーザ・インタフェースの詳細については、1163 ページ「[グループ内のモニタの有効化/無効化] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	関連する警告の有効化/無効化：[関連する警告の有効化/無効化] ダイアログ・ボックスが開き、モニタやグループ内の全モニタに関連付けられているすべての警告を有効化または無効化できます。詳細については、407 ページ「関連する警告の有効化/無効化」を参照してください。
	確認応答の追加：[グループ内のモニタを確認] ダイアログ・ボックスが開き、確認応答をモニタに追加できます。[グループ内のモニタを確認] のユーザ・インタフェースの詳細については、1150 ページ「[確認応答の追加] および [確認応答の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	確認応答の削除：モニタの確認応答を削除します。
	クイック レポート：選択したモニタの事前に設定された設定を使用して、1 回かぎりの SiteScope 管理レポートが作成されます。レポートの詳細については、1373 ページ「クイック・レポート」を参照してください。
	ツール：選択した監視環境をテストする診断ツールが開きます。このボタンは、適切な診断ツールがあるモニタ・インスタンスでのみ使用できます。SiteScope ツールの詳細については、1161 ページ「診断ツール」を参照してください。

UI 要素	説明
	確認列 : SiteScope ユーザがモニタの現在の状態を確認したことや、そのモニタに関連付けられている警告アクションを一時的に無効化した可能性があることを示します。このアイコンは、ダッシュボード [詳細ビュー] にのみ表示されます。ポインタをアイコンの上に移動すると、ツールチップとして確認応答情報が表示されます。アイコンをダブルクリックすると、[確認応答の編集] ダイアログ・ボックスが開きます。このトピックの詳細については、1132 ページ「モニタの状態の確認」を参照してください。[Add/Edit Acknowledge] ダイアログ・ボックスの詳細については、1150 ページ「[確認応答の追加] および [確認応答の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	設定された警告列 : 1 つ以上の警告がグループまたはモニタに関連付けられていることを示します。アイコンをダブルクリックすると、設定された警告がツールチップに表示されます。リストから該当の警告定義名を選択すると、[警告の編集] ダイアログ・ボックスが開き、警告プロパティを表示または編集できます。このトピックの詳細については、1249 ページ「SiteScope 警告」を参照してください。
	トリガされた警告列 : モニタの 1 つ以上の警告が起動されたことを示します。起動された警告がない場合、アイコンは表示されません。起動された警告が 1 つの場合、特定の警告タイプを表すアイコンが表示されます。アイコンのリストについては、1296 ページ「警告アクション」を参照してください。 起動された警告が複数の場合、複数の警告を表すアイコンが表示されます。警告アイコンをクリックすると、警告の詳細が表示されます。トリガされた警告列は、テーブルにモニタが含まれている場合にのみ表示されます。このトピックの詳細については、1249 ページ「SiteScope 警告」を参照してください。
<オブジェクト・テーブル>	モニタ・ツリーで強調表示されている要素またはパスに表示されている要素のグループおよびモニタが表示されます。各グループまたはモニタのノードをダブルクリックして、子ノードおよびモニタに移動できます。モニタをダブルクリックすると、そのモニタのパフォーマンス・カウンタが表示されます。

UI 要素	説明
[名前]	モニタ・インスタンスまたはグループの表示名（別名）。新規グループを作成する場合、その名前を入力します。新規モニタを作成する場合、使用可能なモニタのリストからそのタイプを選択します。[名前] ボックスでこのタイプを上書きしない場合、モニタはそのモニタ・タイプで識別されます。このモニタを識別しやすくする別名を入力することもできます（任意指定）。
[状態]	[ダッシュボード] ビューの各ノードに色付きのアイコンが表示されます。このアイコンは、該当のコンポーネントに割り当てられている操作の状態（現在のパフォーマンス・レベルに対応します）を表しています。 また、[ダッシュボード] ビューには要素ごとに色付きの矢印也表示されます。この矢印は、モニタのデータの可用性の状態を表しています。 アイコンの上にマウス・ポインタを置くと、モニタの状態および可用性を表示できます。モニタの状態および可用性のアイコンの詳細については、後述の「状態および可用性のレベル」を参照してください。
[タイプ]	表示されるモニタのタイプ。モニタ・タイプは、モニタ・インスタンスの作成時に [新規モニタ ページ] ページで選択します。
[ターゲット]	[ターゲット] 列には、監視対象オブジェクトがあるリモート・サーバの名前が表示されます（該当するサーバが存在する場合）。たとえば、モニタ・タイプが CPU の場合、監視する CPU が搭載されているサーバの名前が対象になります。 サーバをモニタ・ツリーに追加したときに [名前] ボックスに入力した内容に応じて、[ターゲット] 列に表示される名前は、サーバのシステム ID か、ユーザが割り当てた名前（別名）のいずれかになります。 グループに Microsoft Windows リソース・モニタまたは UNIX リソース・モニタが含まれている場合、[ターゲット] 列のサーバ名はリンクとして表示されます。リンクをクリックすると、サーバのサーバ中心のレポートが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1165 ページ「サーバ中心のレポート」を参照してください。

UI 要素	説明
[サマリ]	モニタの場合、[サマリ] 列には、モニタによってレポートされた最新の測定値の結果が表示されます。モニタ・タイプによっては、複数の測定値が含まれていることがあります。モニタ・グループの場合、サマリにはグループ内のモニタの数や、エラー状態を報告したモニタの数（存在する場合）が表示されます。 モニタが無効になっている場合、無効の状態（[手動で無効化されています]、[disabled until x time]、または [disabled by <Downtime Name> from BSM]）が表示されます。
[更新日時]	グループまたはモニタで最後にイベントが発生した日時。
[詳細]	[詳細] 列には、モニタまたはグループを説明するテキストか、リンクをクリックするとさまざまなアクションが実行される HTML のいずれかが表示されます。 このフィールドにテキストが含まれている場合、そのテキストをダブルクリックすると、HTML 形式の詳細な説明が表示されるダイアログ・ボックスが開きます。 この列に情報を入力するには、モニタ・ツリーでモニタまたはグループを選択して [プロパティ] タブを選択します。開いたページで、[一般設定] を展開し、[モニタの詳細] / [グループの詳細] ボックスに詳細を入力します。

状態および可用性のレベル

アイコン	説明
	正常な状態 ：すべてのパフォーマンス測定値が「正常」のしきい値レベル内にあります。
	警告状態 ：1 つ以上のパフォーマンス測定値が「警告」の範囲内にありますが、「エラー」または「低」の範囲内の測定値はありません。

アイコン	説明
	エラー/Poor 状態。1 つ以上のパフォーマンス測定値が「エラー」または「Poor」の範囲内にあります。これは、次のいずれかを示しています。 ▶ パフォーマンス測定値に値はあるが、品質レベルが低い。 ▶ なんらかのエラーが原因で測定値がない。
	状態が定義されていません（データなし）。グループまたはモニタのデータがありません。これは、次のいずれかの理由が原因で発生します。 ▶ 新規モニタがまだ実行されていない。 ▶ モニタ・カウンタがまだ収集されていない。 ▶ グループまたはモニタが依存するモニタで「正常」状態がレポートされていない。
	しきい値がない状態。モニタ・カウンタにしきい値が定義されていないため、状態が割り当てられていません。
	手動で無効化されています。グループまたはモニタが現在無効になっているため、データの更新が受信されていません。
	データが収集されました。SiteScope からリモート・システムに接続して、個々のモニタ設定で定義されているアクションを実行できたことを示します。結果として生じるモニタの状態は、モニタ・アクションの結果を表しています。エラーまたは警告が示された場合、対象システムのパフォーマンスまたは対象リソースの可用性の正確な測定値が表示されます。
	可用性に関する警告。SiteScope で、リモート・システムとの接続に問題がある可能性が検出されたことを示します。
	データを使用できません。SiteScope からリモート・システムに接続できなかったことを示します。結果として生じる個々のモニタのエラー状態は、リモート・サーバとの接続の失敗に起因する可能性があります。これは、必ずしも対象リソースが機能していないことを表しているわけではありません。

ダッシュボードのコンテキスト・メニュー

次のオプションは、グループまたはモニタのオブジェクト行の列を右クリックすると表示されます。

UI 要素 (A-Z)	説明
[確認応答の追加]	確認ダイアログ・ボックスが開き、確認をモニタに追加できます。
[確認応答の削除]	モニタの確認応答を削除します。
[関連する警告の有効化/無効化]	[関連する警告の有効化/無効化] ダイアログ・ボックスが開き、グループ内の全モニタの警告をすべて有効化または無効化できます。無効化を選択すると、このページに戻って有効化を選択するまで警告が無効になります。詳細については、407 ページ「関連する警告の有効化/無効化」を参照してください。
[モニタの有効化/無効化] [グループ内のモニタの有効化/無効化]	[グループ内のモニタの有効化/無効化] ダイアログ・ボックスが開き、モニタまたはグループ内の全モニタを有効化または無効化できます。 [モニタを無効化] を選択すると、このページに戻って [モニタを有効化] を選択するまでモニタが無効になります。ユーザ・インタフェースの詳細については、1163 ページ「[グループ内のモニタの有効化/無効化] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
[クイック レポート]	選択したモニタの事前に設定された設定を使用して、1 回かぎりの SiteScope 管理レポートが作成されます。詳細については、1373 ページ「クイック・レポート」を参照してください。 注： このメニュー項目は、モニタの場合にのみ表示されます。
[モニタの実行]	選択したモニタまたは選択したグループ内の全モニタが実行されます。
[ツール]	モニタ設定の問題のトラブルシューティングに役立つ診断ツールが開きます。利用可能なツールの詳細については、210 ページ「SiteScope ツールの概要」を参照してください。 注： このメニュー項目は、モニタの場合にのみ表示されます。また、特定のモニタの場合にのみ使用できます。

SiteScope ダッシュボード - モニタ履歴ビュー

このビューには、過去 24 時間に収集されたモニタ、モニタ・グループ、警告の情報が表示されます。時間、モニタの状態、データ・エントリ数を使用してこの情報をフィルタします。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。ダッシュボード・ツールバーで、[モニタ履歴] ボタンをクリックします。
重要な情報	▶ この機能を有効にするには、[プリファレンス] > [一般プリファレンス] > [ダッシュボード モニタ履歴表示オプション] の [モニタ履歴ビューを有効にする] を選択します。 ▶ この機能では、保存するデータ量を厳密に決めることができるため、データベースが過負荷状態になることはありません。 ▶ 標準設定では、選択した要素の [モニタ履歴] テーブルに表示できるオブジェクトの最大数は 4000 で、[アイコンビュー] で表示できるアイコンの最大数は 70 です。これらの数を変更するには、[ダッシュボードの設定] で値を変更します（[モニタ] を選択して、[ダッシュボードの設定] ボタンをクリックし、[ダッシュボードのプロパティ] を展開する）。ただし、標準設定を使用することをお勧めします。詳細については、1158 ページ「[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ 選択した要素の行数が、[モニタ履歴] テーブルに表示できる最大数よりも多い場合、さらに限定的なツリー・フィルタを作成するか、ダッシュボード・フィルタを設定してください。
関連タスク	1134 ページ「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」
関連情報	624 ページ「ダッシュボード モニタ履歴表示オプション」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
	トリガされた警告 ：警告をトリガしたモニタの横に表示されます。
[実行時間]	モニタの実行時間。
[名前]	モニタの名前。
[状態]	実行時のモニタの状態（「エラー」、「警告」、「正常」）：ユーザ・インタフェースの詳細については、1146 ページ「状態および可用性のレベル」を参照してください。
[サマリ]	モニタの実行の詳細。

 【確認応答の追加】 および 【確認応答の編集】 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、モニタまたはモニタ・グループの確認を追加または編集できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ビューでモニタまたはグループを右クリックし、次のように選択します。 ▶ 確認を個別のモニタまたはモニタ・グループに追加するには、[確認応答の追加] を選択します。 ▶ 確認済みのモニタまたはグループの確認応答を編集するには、[確認応答の編集] を選択します。
関連タスク	1134 ページ「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」
関連情報	1132 ページ「モニタの状態の確認」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
【確認コメント】	[ダッシュボード] ビューの確認アイコンに関連付けられたヒントとして表示される確認コメント。確認ログに記録されます。新しい情報が使用可能になると、コメントを更新できます。コメントは確認が削除するまで表示されます。
【関連付けられたすべての警告を有効化】	関連付けられたすべての警告を有効にします（標準設定）。
【次に関連付けられたすべての警告を無効化 <期間>】	すぐに警告を無効にし、指定した期間、選択したモニタまたはグループに対する警告の抑止を続けます。
【1 回限りのスケジュールに基づいて関連付けられたすべての警告を無効化 開始 <時刻> 終了 <時刻>】	指定した期間、警告を無効にします。これは、監視対象のシステムが特定の期間使用不能になると予想され、その間も警告をトリガせずに監視を続ける場合に便利です。
【無効化の説明】	確認済みコンテキスト内のモニタに関連付けられた警告アイコンの説明。このテキスト説明は、[ダッシュボード] ビューでモニタに関連付けられた警告アイコンの上にポインタを置くと表示されるツールチップのテキストに追加されます。このテキストは、警告の無効化オプションが有効な間のみ表示されます。このテキストは、確認ログには書き込まれません。
【確認ログの表示】	確認応答ダイアログ・ボックスの起動元であるモニタまたはグループの確認応答エントリをすべて表示します。

 【ダッシュボードのお気に入り保存】 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ダッシュボード・フィルタとレイアウト設定（[ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックスおよび [ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックスで選択）の組み合わせを定義し、名前を付けてお気に入りビューとして保存できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。[ダッシュボード] ツールバーで、[お気に入りの管理]  ボタンの横にある矢印をクリックし、[お気に入り保存] を選択します。
重要な情報	ダッシュボードのお気に入りは、[ダッシュボード] ビューに適用可能な設定に制限されます。つまり、ダッシュボードのお気に入りには、ユーザのグローバル・ビュー設定や、お気に入りの保存時にモニタ・ツリーで選択されていたコンテキストは保存されません。
関連タスク	1134 ページ「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」
関連情報	1130 ページ「SiteScope ダッシュボードの概要」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[名前]	現在のダッシュボード・フィルタとレイアウト設定をお気に入りに保存するためのオプションを選択します。 ▶ 既存 。既存のお気に入りのいずれかを現在の設定で置き換えることができます。既存のお気に入りビューのリストが表示されます。標準設定では、リストには事前に設定されたお気に入りがすべて含まれます。 ▶ 新規 。現在の設定を、ボックスに入力した表示名を付けて新しいお気に入りビューに保存できます。

[ダッシュボードのお気に入りの削除] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、既存のお気に入りビューを削除できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。ダッシュボード・ツールバーで、[お気に入りの管理]  ボタンの横にある矢印をクリックし、[お気に入りを削除] を選択します。
関連タスク	1134 ページ「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」
関連情報	1130 ページ「SiteScope ダッシュボードの概要」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[既存のお気に入り]	現在のお気に入りビューのリストから削除するビューを選択します。標準設定では、リストには次の事前に設定されたお気に入りが含まれます。 ➤ All Objects ➤ Disabled ➤ Errors Only ➤ Errors and Warnings ➤ Good ➤ Good and Warnings ➤ No Data ➤ Warnings Only



[ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、一致基準を入力し、メニュー・オプションを選択してダッシュボード・フィルタを設定できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。ダッシュボード・ツールバーで[ダッシュボード フィルタ]  ボタンをクリックします。
重要な情報	1 つのフィルタにフィルタ・オプションの組み合わせを含めることができます。たとえば、フィルタ定義ではモニタ・タイプ、監視対象、状態の組み合わせに基づいてフィルタすることができます。
関連タスク	1134 ページ「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」
関連情報	1131 ページ「ダッシュボード・フィルタの概要」

グローバル設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[モニタ名]	1 つ以上のモニタの名前と一致するテキスト文字列または正規表現。このフィルタを [ダッシュボード] ビューに適用すると、[モニタ名] 基準に一致するモニタのみが表示されます。
[モニタ タイプ]	選択したモニタ・タイプでモニタをフィルタします。
[監視対象サーバ]	特定のホストまたは監視対象サーバのサーバ名でモニタをフィルタします。

UI 要素	説明
[状態]	報告された状態でモニタをフィルタします。状態フィルタ基準は、モニタ・カテゴリの状態に基づいて定義できます。 次の状態オプションを使用できます。 ▶ 任意の状態。状態に関係なくすべてのモニタが表示されます。これが標準設定のオプションです。このオプションを「データあり」オプションと組み合わせて使用し、接続や可用性が原因でエラー状態にあるモニタを除外できます。 ▶ 無効。無効と報告されたモニタのみが表示されます。 ▶ エラー。エラー状態を報告したモニタのみが表示されます。 ▶ 正常。正常または OK 状態を報告したモニタのみが表示されます。 ▶ 正常、警告またはエラー。無効と報告されたモニタを除く、すべてのモニタが表示されます。 ▶ 警告。警告状態を報告したモニタのみが表示されます。 ▶ 警告またはエラー。警告またはエラー状態を報告したモニタのみが表示されます。 ▶ 警告または正常。警告または正常状態を報告したモニタのみが表示されます。 例：警告またはエラーを報告したモニタのみを表示するフィルタを作成します。

UI 要素	説明
【状態】（可用性付き）	モニタ状態カテゴリとデータの可用性の状態を組み合わせ、複合フィルタを作成します。 次のデータの可用性の状態オプションを使用できます。 ▶ データあり。データが使用可能なモニタが表示されます。つまり、モニタが対象システムから測定値を取得できたことを示します。 ▶ データなし。データが使用不能なモニタが表示されます。つまり、SiteScope が対象システムから測定値を取得できなかったことを示します。 例：【エラー】 および 【データあり】 を報告したモニタのみを表示するフィルタを作成します。つまり、監視対象システムと通信できずにエラーを報告したモニタ（【データなし】）とは異なり、このフィルタを使用すると、監視対象システムからデータを受信できたもののエラー状態を示すモニタが表示されます。
【サマリ テキスト】	サマリ文字列に含まれたテキストに基づいてモニタをフィルタします。リテラル・テキスト文字列または正規表現を入力して、テキスト・パターンと照合することができます。 正規表現の詳細については、275 ページ「正規表現の使用」を参照してください。
【確認済み】	「オペレータ認知」の状態に基づいてモニタをフィルタします。確認済みのモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから【はい】を選択します。未確認のモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから【いいえ】を選択します。
【確認メモ】	【オペレータ認知】のメモに表示されるテキストに基づいてモニタをフィルタします。リテラル・テキスト文字列または正規表現を入力して、テキスト・パターンと照合することができます。 正規表現の詳細については、275 ページ「正規表現の使用」を参照してください。

UI 要素	説明
【警告設定済み】	警告が設定されているかどうかに基づいてモニタをフィルタします。1 つ以上の警告が設定されているモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから 【はい】 を選択します。警告が設定されていないモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから 【いいえ】 を選択します。
【トリガされた警告】	警告イベントをトリガしたかどうかに基づいてモニタをフィルタします。1 つ以上の警告を生成しているモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから 【はい】 を選択します。警告を生成していないモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから 【いいえ】 を選択します。

モニタ履歴の設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
【表示期間】	過去のイベントのタイム・フレーム。 標準設定値 : 過去 1 時間
【モニタの実行の状態】	必要なイベント状態、関係演算子、データ可用性。 標準設定値 : 任意



【ダッシュボードの設定】 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、[ダッシュボード] ビューでのグループおよび監視データの表示をカスタマイズできます。これにより、モニタ測定値の詳細、警告情報、確認機能の表示を有効化または非表示にできます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。ダッシュボード・ツールバーで [ダッシュボードの設定]  ボタンをクリックします。
重要な情報	レイアウト・オプションは、[詳細ビュー] にのみ適用されます。[アイコン ビュー] の使用時には無視されます。
関連タスク	1134 ページ「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」
関連情報	1131 ページ「ダッシュボード・フィルタの概要」

ダッシュボード・テーブルのレイアウト

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[列の固定]	テーブルの列の順序を固定します。設定をクリアしてテーブル・列の順序を変更するには、列・ヘッダを右または左にドラッグします。 標準設定値 : 選択されていない
[テーブル カラム]	詳細テーブルに表示される列。選択内容は、該当するすべてのグループまたはモニタの要素に適用されます。 次の列が表示可能です。 ➤ タイプ ➤ サマリ ➤ トリガされた警告 ➤ 警告設定済み ➤ 説明 ➤ 状態 ➤ ターゲット ➤ 確認 ➤ 更新済み ➤ 名前 標準設定値 : すべてのプロパティが選択されている 列の詳細については、1140 ページ「SiteScope ダッシュボード - 現在の状態ビュー」を参照してください。

ダッシュボードのプロパティ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[モニタが利用可能かを表示]	SiteScope がリモート・システムに接続できたかどうか、または接続の問題が原因でリモート・システムを使用できなかったかどうかを示す、モニタの可用性アイコンをダッシュボードに表示します。 標準設定値 : 選択されていない
[ダッシュボードオブジェクトの最大数]	選択した要素について、[ダッシュボード] テーブルに表示できるオブジェクトの最大数。 標準設定値 : 4000 注 : 選択した要素のオブジェクトが表示可能な最大数よりも多い場合、この設定を増やすのではなく、オブジェクト数を絞り込むツリー・フィルタを作成するか、ダッシュボード・フィルタを設定してください。
[ダッシュボードアイコンの最大数]	ダッシュボード・アイコン・ビューに表示できるアイコンの最大数。 標準設定値 : 700 最大推奨値 : 1500 注 : 選択した要素のアイコンが表示可能な最大数よりも多い場合、この設定を増やすのではなく、アイコン数を絞り込むツリー・フィルタを作成するか、ダッシュボード・フィルタを設定してください。
[ダッシュボードの更新間隔 (秒)]	ダッシュボードの更新間の待機時間 (秒単位)。 標準設定値 : 60 秒 最小値 : 30 秒

診断ツール

SiteScope ツールを使用すると、監視環境をテストできます。これらのツールを使用して、監視対象となるシステムのさまざまな要求やクエリを作成し、アクションの詳細な結果を表示します。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。ダッシュボードで、診断ツールを使用可能なモニタ・インスタンスを選択し、[ツール]  ボタンをクリックします。
重要な情報	[ツール] ボタンは、次のモニタ・インスタンスの設定または表示時に有効になります。 ▶ Active Directory レプリケーション・モニタ ▶ Cisco Works モニタ ▶ CPU モニタ ▶ データベース・カウンタ・モニタ ▶ データベース・クエリ・モニタ ▶ DB2 8.x および 9.x モニタ ▶ ディスク領域モニタ ▶ DNS モニタ ▶ F5 Big-IP モニタ ▶ FTP モニタ ▶ LDAP モニタ ▶ メール・モニタ ▶ メモリ・モニタ ▶ Microsoft Windows イベント・ログ・モニタ ▶ Microsoft Windows Media Player モニタ ▶ Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタ ▶ ニュース・モニタ ▶ Oracle 9i アプリケーション・サーバ・モニタ ▶ Ping モニタ ▶ ポート・モニタ ▶ Real Media Player モニタ ▶ サービス・モニタ

重要な情報 (つづき)	➤ SNMP モニタ ➤ MIB による SNMP モニタ ➤ SNMP トラップ・モニタ ➤ テクノロジ・データベース統合モニタ ➤ テクノロジ SNMP トラップ統合モニタ ➤ URL モニタ ➤ URL 内容モニタ ➤ Web サービス・モニタ ➤ XML 測定値モニタ SiteScope で使用可能な診断ツールの完全なリストについては、左下の表示枠で [ツール] ボタンをクリックします。
関連情報	210 ページ「SiteScope ツールの概要」

[グループ内のモニタの有効化/無効化] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、モニタの [プロパティ] タブの個々のモニタ設定に関係なく、モニタまたはグループ内の全モニタを有効化または無効化するオプションを選択できます。[**モニタを無効化**] を選択すると、このダイアログ・ボックスに戻って [**モニタを有効化**] を選択するまでモニタが無効になります。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。ダッシュボードで、モニタまたはグループを選択して [モニタの有効化/無効化] ボタン  をクリックします。
重要な情報	[モニタを無効化] オプションを使用してモニタまたはグループを無効化する場合、ダッシュボードには、影響を受けるオブジェクトの [サマリ] 列の状態として「 手動で無効化されています 」が表示されます。特定の期間オブジェクトを無効化するには、事前に状態が「 手動で無効化されています 」のオブジェクトを有効化する必要があります。これは、グループ・レベルでも同様です。たとえば、ある期間グループ内のモニタが無効化されていて、そのグループのサブグループに存在するモニタの状態が「 手動で無効化されています 」である場合、親グループの無効化期間が経過した後もサブグループのモニタは無効化されたままになります。
関連情報	404 ページ「モニタの有効化/無効化」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[モニタを有効化]	以前にモニタ・プロパティで無効化されている場合、モニタが有効になります。 標準設定値 : 選択されている
[一時的に無効化されたモニタのみ有効にする]	以前にモニタ・プロパティで一時的に無効化されている場合、モニタが有効になります。

UI 要素	説明
[モニタを無効化]	グループ内のモニタが無効化されている場合、SiteScope によりモニタの [頻度] 設定に基づいてモニタの実行が継続的にスケジュールされますが、モニタ・アクションは実行されません。モニタの実行がスケジュールされている場合、SiteScope によってモニタのデータ・ログ・エントリが記録されますが、測定値データの代わりに無効なモニタの状態がレポートされます。
[次の時間設定でモニタを無効化: <期間>]	モニタが無効になっている期間。 [秒] , [分] , [時間] , または [日] を選択して、適用する無効化期間を定義します。
[1 回限りのスケジュールに基づいてモニタを無効化:開始 <時刻> 終了 <時刻>]	モニタを将来のある期間だけ一時的に無効にします。1 日より長い期間に設定できます。 hh:mm:ss mm/dd/yyyy の形式で無効化期間の開始時間と終了時間を入力または選択します。
[無効化の説明]	モニタ・グループのモニタの状態とともに表示される詳細。無効化状態のテキストには、モニタに無効化オプションが適用されていることを示す文字列が含まれます。たとえば、「 手動で無効化されています 」は、 [モニタを無効化] オプションを使用してモニタが無効にされたことを示します。

58

サーバ中心のレポート

本章の内容

概念

- ▶ サーバ中心のレポートの生成 (1166 ページ)

タスク

- ▶ サーバ中心のレポートの作成方法 (1168 ページ)
- ▶ サーバ中心のレポートの作成方法 – 使用例のシナリオ (1170 ページ)

参照情報

- ▶ サーバ中心のレポートの測定値 (1175 ページ)
- ▶ サーバ中心のレポート (1176 ページ)

概念

サーバ中心のレポートの生成

Microsoft Windows および UNIX リソース・モニタの場合、監視対象のサーバに関する 3 つの異なる測定値のデータを表示できる、サーバ中心のレポートを作成できます。Microsoft Windows または UNIX リソース・モニタの作成時に、ソリューション・テンプレートをを使用することをお勧めします。ソリューション・テンプレートの詳細については、次を参照してください。

- ▶ 985 ページ「AIX Host ソリューション・テンプレート」
- ▶ 1027 ページ「Linux Host ソリューション・テンプレート」
- ▶ 1103 ページ「Solaris Host ソリューション・テンプレート」
- ▶ 1057 ページ「Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート」

モニタを手動で定義するには、『Monitor Reference』（英語版）の「Microsoft Windows Resources Monitor Settings」または「UNIX Resources Monitor Settings」を参照してくださいの説明に従って、必要な [モニタ設定] ページで [サーバ中心のレポートを有効化] を選択します。モニタを手動で定義する場合、1175 ページ「サーバ中心のレポートの測定値」に記載された表に従って、モニタに必要な測定値を選択する必要があります。

このレポートには、同じグラフ上に次の測定値が表示されます。

- ▶ **CPU 使用率。**UNIX リソース・モニタの場合、システム処理使用率、ユーザ処理使用率、入力/出力処理使用率の 3 つのカウンタの平均として、この測定値が計算されます。Microsoft Windows リソース・モニタの場合、合計処理容量のうち使用された処理容量の割合として測定値が計算されます。
- ▶ **メモリ使用率。**使用可能な合計メモリのうち使用されたメモリの割合として計算されます。
- ▶ **ネットワーク使用率。**システム固有のカウンタによって計算されます。ネットワーク使用率の計算は、Windows サーバに対してのみサポートされています。

各測定値は、グラフ上に固有の色の個別の線で表示されます。このレポートでは、異なる測定値間の相関関係を容易に表示できます。

レポートには、CPU 使用率およびメモリ消費別の上位 5 プロセスを表示するテーブルが含まれます。グラフを操作して、テーブルに表示するデータの時間を変更できます。これにより、グラフの問題のある期間に焦点を当てて、その時点で実行されていたプロセスを特定できます。サーバ中心のレポートのインタフェースの詳細については、1176 ページ「サーバ中心のレポート」を参照してください。

サーバ中心のレポートの生成方法の詳細については、1168 ページ「サーバ中心のレポートの作成方法」を参照してください。

タスク

サーバ中心のレポートの作成方法

このタスクでは、Windows および UNIX サーバを監視するモニタの作成とサーバ中心のレポートの生成に関する手順を説明します。

注：このタスクのシナリオについては、1170 ページ「サーバ中心のレポートの作成方法 – 使用例のシナリオ」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1168 ページ「Microsoft Windows または UNIX リソース・モニタの作成」
- ▶ 1169 ページ「サーバ中心のレポートの生成」
- ▶ 1169 ページ「レポート内のデータの分析」

1 Microsoft Windows または UNIX リソース・モニタの作成

Microsoft Windows または UNIX サーバを監視するには、Microsoft Windows または UNIX リソース・モニタを作成する必要があります。手動で、またはソリューション・テンプレートを使用して、モニタを作成できます。ソリューション・テンプレートには必要な測定値カウンタのすべてが含まれているため、ソリューション・テンプレートを使用してモニタを作成することをお勧めします。

ソリューション・テンプレートの詳細については、次のページを参照してください。

- ▶ 1057 ページ「Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート」
- ▶ 985 ページ「AIX Host ソリューション・テンプレート」
- ▶ 1027 ページ「Linux Host ソリューション・テンプレート」
- ▶ 1103 ページ「Solaris Host ソリューション・テンプレート」

Microsoft Windows または UNIX リソース・モニタの手動作成の詳細については、次を参照してください。

- ▶ 『Monitor Reference』（英語版）の「Microsoft Windows Resources Monitor Overview」を参照してください。
- ▶ 『Monitor Reference』（英語版）の「UNIX Resources Monitor Overview」を参照してください。

[**サーバ中心のレポートを有効化**] を選択し、必要な測定値を選択します。測定の詳細については、1175 ページ「サーバ中心のレポートの測定値」を参照してください。

2 サーバ中心のレポートの生成

サーバを監視するには、SiteScope ダッシュボードに移動して該当する Microsoft Windows または UNIX リソース・モニタのデータを表示し、使用するリソース・モニタに対応する行の [**ターゲット**] 列でサーバ名をクリックします。サーバ中心のレポートが開きます。

3 レポート内のデータの分析

このレポートでは、同じグラフでサーバの CPU 使用率、メモリ使用率、ネットワーク使用率の 3 つの異なる測定値を表示できます。CPU 使用率およびメモリ消費別の上位 5 プロセスもこのレポートに表示されます。グラフのデータ・ポイントをクリックして、特定の時間に掘り下げることができます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1176 ページ「サーバ中心のレポート」を参照してください。

サーバ中心のレポートの作成方法 – 使用例のシナリオ

この使用例のシナリオでは、サーバ中心のレポートの作成方法について説明します。

注：このシナリオに関連するタスクについては、1168 ページ「サーバ中心のレポートの作成方法」を参照してください。

このシナリオには次の手順が含まれています。

- ▶ 1171 ページ「背景情報」
- ▶ 1171 ページ「リモート・サーバの設定」
- ▶ 1172 ページ「Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1173 ページ「サーバ中心のレポートの作成」

1 背景情報

NewSoft 社の SiteScope ユーザが、監視対象サーバ Apollo の CPU 使用率、メモリ使用率、ネットワーク使用率に関するデータを表示するレポートを作成します。

2 リモート・サーバの設定

レポートの作成前に、リモート Windows サーバ Apollo を監視するように SiteScope を設定し、Microsoft Windows リモート・サーバのサーバを設定します。

メイン設定

* サーバ: \\Apollo

資格情報:

☒ ユーザ名およびパスワードを使用

ユーザ名: administrator

パスワード:

☐ 事前定義された資格情報を選択

資格情報プロファイル: [] 資格情報の追加

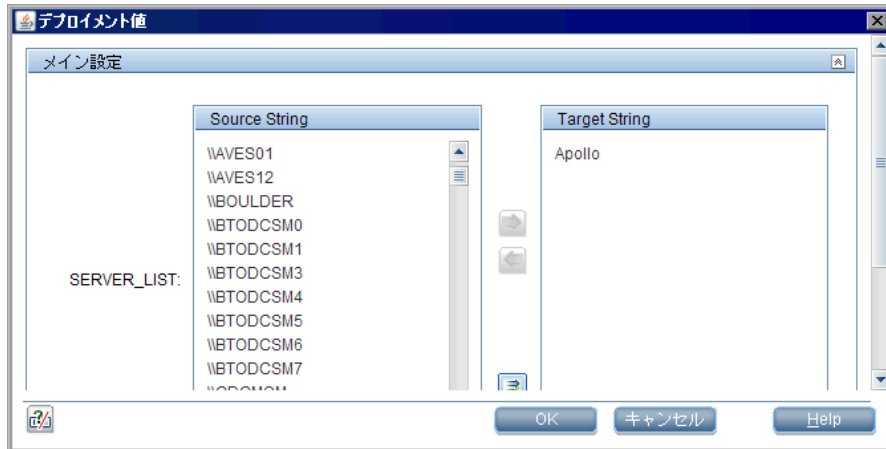
☐ トレース

* 接続方式: NetBIOS

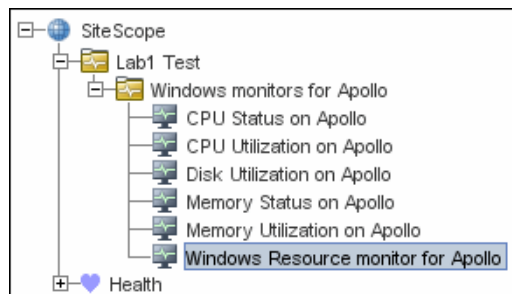
リモートサーバのエンコード: Cp1252 (windows-1252)

3 Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートのデプロイ

Apollo のデータを監視する SiteScope の有効化後、Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートを選択したグループ・コンテナにデプロイし、監視するサーバとして [Apollo] を選択します。サーバ中心のレポートの生成に必要なモニタと測定値がすでに設定されているため、Microsoft Windows リソース・モニタの作成時にソリューション・テンプレートを使用します。



ソリューション・テンプレートのデプロイ後、Microsoft Windows リソース・モニタを含む「Windows monitors for Apollo」という名前のグループが SiteScope によって作成されます。



4 サーバ中心のレポートの作成

サービス状況の「現在の状態」ビューから、Apollo のサーバ中心のレポートを生成します。

SiteScope グループ - "Windows monitors for Apollo" ダッシュボード プロパティ

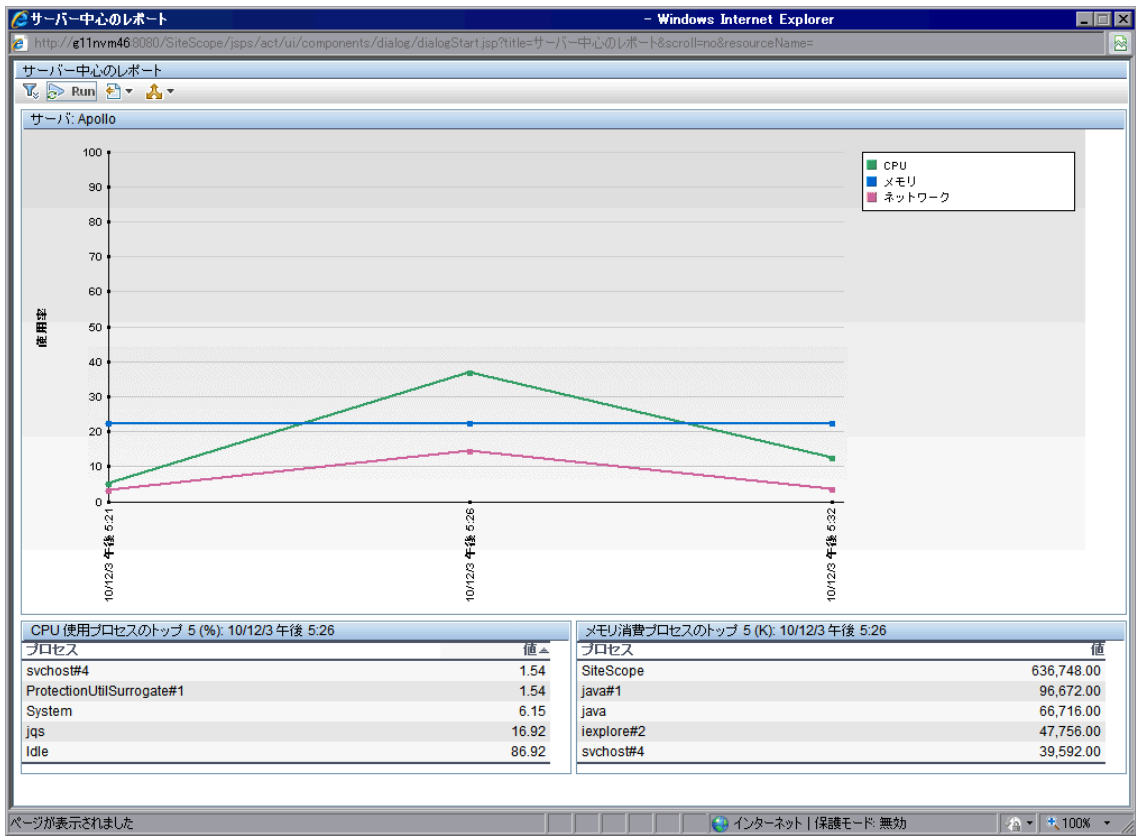
現在の状態

モニタ履歴

名前	状態	タイプ	ターゲット	サマリ	更新日時
選択したノード					
Windows monitors for Apollo		グループ		グループ内...	10/12/3 午...
グループ (0 件のうち 0 件)					
モニタ (6 件のうち 6 件)					
CPU Status on Apollo		CPU	Apollo	36% avg. cpu...	10/12/3 午...
CPU Utilization on Apollo		Microsoft Windows Resourc...	Apollo	Processor0\...	10/12/3 午...
Disk Utilization on Apollo		Microsoft Windows Resourc...	Apollo	LogicalDisk...	10/12/3 午...
Memory Status on Apollo		メモリ	Apollo	11% used, 1...	10/12/3 午...
Memory Utilization on Apollo		Microsoft Windows Resourc...	Apollo	Memory\Avail...	10/12/3 午...
Windows Resource monitor for Apo...		Microsoft Windows Resourc...	<u>Apollo</u>	Memory% C...	10/12/3 午...

第 58 章・サーバ中心のレポート

サーバ中心のレポートが開き、同じグラフに CPU 使用率、メモリ使用率、ネットワーク使用率の測定値が表示されます。このデータを使用して、異なる時間の CPU 使用率およびメモリ消費別の上位のプロセスを表示し、問題のある期間に焦点を当ててその時点で実行されていたプロセスを特定できます。



参照情報

サーバ中心のレポートの測定値

次の表に、サーバ中心のレポートのモニタを手動で定義するときを選択する必要のあるカウンタを示します。

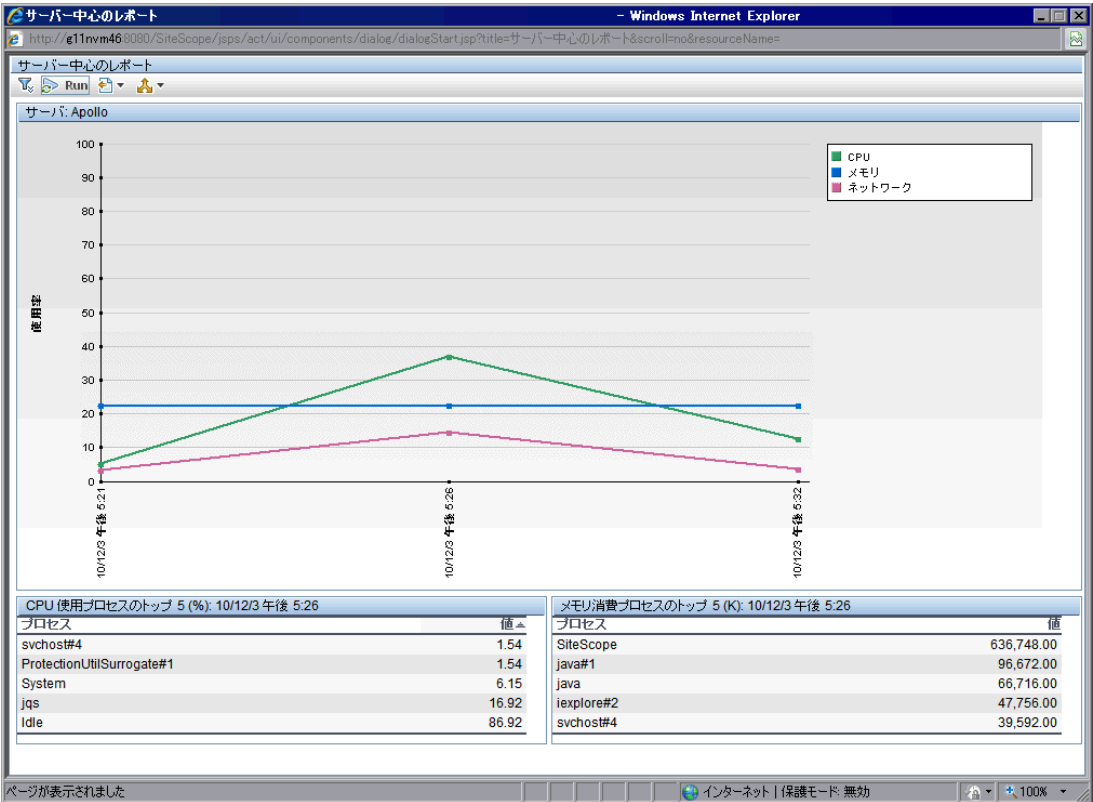
OS Type	サーバ中心の必須カウンタ
Microsoft Windows リソース・モニタのカウンタ	Memory¥% Committed Bytes In Use
	Processor¥_Total¥% Processor Time
Solaris プラットフォームの UNIX リソース・モニタのカウンタ	CPU utilization¥%sys
	CPU utilization¥%sys
	CPU utilization¥%sys
	Memory¥swap_avail
	Memory¥swap_resv
AIX プラットフォームの UNIX リソース・モニタのカウンタ	Processor¥Total¥%sys
	Processor¥Total¥%usr
	Processor¥Total¥%wio
Linux プラットフォームの UNIX リソース・モニタのカウンタ	Memory¥MemFree
	Memory¥MemTotal
	Processor¥Total¥System
	Processor¥Total¥User
	Processor¥Total¥User low

モニタ定義のカウンタの選択の詳細については、次を参照してください。

- ▶ 『Monitor Reference』（英語版）の「Microsoft Windows Resources Monitor Settings」を参照してください（Microsoft Windows リソース・モニタ・カウンタの場合）
- ▶ 『Monitor Reference』（英語版）の「UNIX Resources Monitor Settings」を参照してください（Solaris, AIX, Linux プラットフォームの場合）

🔗 サーバ中心のレポート

このレポートには，選択したサーバの CPU 使用率，メモリ使用率，ネットワーク使用率の測定値が表示されます。



アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。Microsoft Windows リソース・モニタまたは UNIX リソース・モニタの SiteScope ダッシュボードの [ターゲット] 列で、サーバ名のリンクをクリックします。
重要な情報	▶ このレポートは、レポートの実行目的で作成された専用の Microsoft Windows リソース・モニタまたは UNIX リソース・モニタによって監視されるサーバのみで使用可能です。 ▶ これらのモニタの該当するソリューション・テンプレートを使用して、モニタをデプロイすることを強くお勧めします。テンプレートは、適切な測定値カウンタとオプションが選択された状態で事前設定されています。 ▶ サーバ中心のレポートは、Firefox 2.x ではサポートされていません。 ▶ モニタに問題が発生して不適切なデータを返すと、そのデータ・ポイントはスキップされます。そのため、グラフに欠落したデータ・ポイントが含まれる場合があります。
関連タスク	1168 ページ「サーバ中心のレポートの作成方法」
関連情報	▶ 1166 ページ「サーバ中心のレポートの生成」 ▶ 1170 ページ「サーバ中心のレポートの作成方法 – 使用例のシナリオ」

レポート設定

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
	Format : レポート・データをエクスポートするファイルの形式に合わせます。ファイルの形式を選択します。印刷用, CSV, Excel, XML のオプションがあります。
	エクスポート。 レポート・データを電子メールでエクスポートします。ファイルを送信するオプションを選択します。HTML メール, HTML 添付, PDF のオプションがあります。 注 : エクスポート機能を使用するには、信頼されたサイトに SiteScope マシンを追加する必要があります。
	[フィルタ] / [Collapse] レポート・フィルタ レポートの時間範囲設定を表示または非表示にする場合にクリックします。
	戻る : 現在表示している時間枠の 1 つ前の時間枠のレポートを表示します。 例 : [表示] ボックスの値が [日] である場合、このボタンをクリックすると、現在表示しているレポートの 1 日前のデータが表示されます。
	進む。 現在表示している時間枠の 1 つ後の時間枠のレポートを表示します。 例 : [表示] ボックスの値が [日] である場合、このボタンをクリックすると、現在表示しているレポートの 1 日後のデータが表示されます。
[ビュー]	レポートを表示する時間範囲。次の時間範囲を使用できます。 ▶ カスタム (任意の範囲を設定できます) ▶ 時間, 日, 週 ▶ 過去 1 時間, 過去 1 日, 過去 1 週間

UI 要素	説明
〔開始/終了 <日付リンク>〕	〔開始〕リンクをクリックし、レポートの開始日付と時刻を設定します。〔終了〕リンクをクリックし、レポートの終了日付と時刻を設定します。カレンダーには次のボタンがあります。 ▶ OK。 選択した日付の日付リンクを更新してカレンダーを閉じます。 ▶ 戻す。 前に選択したレポート日に戻ります。 ▶ 現在。 カレンダーで今日の日付を選択します。 ▶ キャンセル。 変更せずにカレンダーを閉じます。
	日付リンクに表示された日付範囲のレポートを作成します ([フィルタ])。

レポートの内容

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<ツールチップ>	グラフのデータ・ポイント上にポインタを置くと、選択した測定値の選択した時間での使用率の値、および日付と時間を表示する、ツールチップが表示されます。
[サーバ名]	使用率グラフの上部に表示されるサーバの名前。
使用率グラフ	経過時間ごとの使用率を表示します。CPU 使用率、メモリ使用率、ネットワーク使用率が異なる色の線で表示されます。3 つのすべての測定値は、パーセント単位（つまり、100% の使用率に対する割合）です。 グラフのデータ・ポイントをクリックし、より短い時間範囲に焦点を当てることができます。データ・テーブルが更新され、選択したデータ・ポイントの時間の結果が表示されます（同じ時間の 3 つのデータ・ポイントのいずれかをクリックすると、レポートは同じように更新されます）。使用率が非常に高いポイントがある場合に、これを活用できます。そのポイントをクリックすることによって、高い使用率の原因を特定できます。 注： ネットワーク使用率は、Windows サーバに対してのみサポートされています。
[CPU 使用プロセスのトップ 5] テーブル	グラフの任意のポイントでの CPU 使用率のトップ 5 プロセスを表示します。このテーブルには、プロセス名と、使用可能な合計 CPU 処理の割合として CPU 使用率が表示されます。
[メモリ消費プロセスのトップ 5] テーブル	グラフの任意のポイントでのメモリ消費のトップ 5 プロセスを表示します。このテーブルには、プロセス名とメモリ消費の値（キロバイト）が表示されます。

59

SiteScope サーバの状況

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope 状況の概要 (1182 ページ)
- ▶ SiteScope 状況のグループ (1185 ページ)
- ▶ BSM 統合設定モニタ (1187 ページ)
- ▶ BSM 統合統計モニタ (1188 ページ)
- ▶ 接続統計モニタ (1188 ページ)
- ▶ SiteScope サーバの状況モニタ (1188 ページ)
- ▶ SiteScope ログ・イベント・モニタ (1189 ページ)
- ▶ SiteScope 負荷モニタの監視 (1189 ページ)

タスク

- ▶ SiteScope の状況監視データの分析方法 (1190 ページ)

参照情報

- ▶ SiteScope の状況のユーザ・インタフェース (1194 ページ)

概念

SiteScope 状況の概要

SiteScope 状況は、SiteScope のパフォーマンスと可用性に関する情報を表示する、特別に設計されたモニタのグループです。状況モニタでは、SiteScope のリソースの使用状況、主要なプロセス、モニタ負荷、サーバのパラメータ、および主要な構成ファイルの整合性に関するデータが取得されます。

標準設定では、毎日のモニタ・ログに SiteScope 状況の監視データが記録され、SiteScope のパフォーマンスと運用状況のレポートを作成できます。これらのログ・ファイルは、SiteScope のパフォーマンスに関する問題の把握、モニタや警告に関する問題のトラブルシューティング、SiteScope の管理アクションの確認に役立ちます。たとえば、SiteScope の監査ログには、モニタ、テンプレート、警告の作成など、新しいユーザ・インタフェースで実行された設定変更が含まれます。

SiteScope 状況の監視とともに、SiteScope 進捗レポートでは、SiteScope アプリケーションのパフォーマンスを監視するために使用する、鍵となるいくつかの指標が提供されます。

本項の内容

- ▶ 1183 ページ「スキップされるモニタ・イベント」
- ▶ 1184 ページ「データのレポートの問題」

スキップされるモニタ・イベント

スケジュールされている次の実行時までにはモニタのアクションが完了しなかった場合、SiteScope モニタはスキップとして報告されます。これは、データベースの照会、マルチページ URL シーケンスの処理、スクリプトの実行の待機、ハングアプリケーションに対する待機など、複雑なアクションが実行されるモニタで発生する場合があります。

たとえば、8 ページの一連の Web ページを通過するように設定されている URL シーケンス・モニタがあるとします。このシーケンスには、応答時間が遅い可能性がある検索の実行が含まれます。モニタは 60 秒に 1 回実行されるように設定されています。システムの応答が良好な場合、モニタの実行は 45 秒で完了できます。ただし、検索要求が長くかかる場合もあり、その場合はトランザクションが完了するまでに最長で 90 秒かかります。この場合、SiteScope でスケジュールされているモニタの次の実行時までにはモニタが完了しません。SiteScope ではこれを検出し、SiteScope の **skip_monitor.log** にイベントが記録されます。SiteScope ログ・イベント・モニタでは、これを検出し、エラー状態を知らせます。ログ・ファイルの詳細については、1243 ページ「ログ・ファイルのタイプ」を参照してください。

モニタがプロセス・プールからのプロセスを必要とするモニタ・タイプで、プロセス・プールの制限に達した場合にも、モニタがスキップされることがあります。一般に発生する可能性は高くありませんが、監視負荷が高い一部の状況で発生することがあります。SiteScope の状況ログ・イベント・モニタでは、プロセス・プール・イベントも監視されます。モニタがスキップされると、前の実行が完了していないために、または応答しないアプリケーションによってハングしたためにモニタの実行が一時停止されるときに、データの損失を引き起こす可能性があります。モニタのスキップは SiteScope の自動的な停止、再起動も引き起こし、このようなイベントも SiteScope の状況ログ・イベント・モニタによって監視されます。再起動は、問題を解消し、モニタをリセットするために行われます。ただし、これは監視範囲およびデータのギャップにつながる可能性があります。多くの場合、モニタに設定されている実行頻度を調整、または適切なタイムアウト値を指定すると、モニタのスキップの問題を修正できます。

注：

- ▶ 最大許容数を越えたためにスキップしたモニタを自動的に無効にする設定を有効にできます。これが発生すると、SiteScope はエラーを出力してシャットダウンし、無効イベントを知らせるために SiteScope 管理者にモニタのスキップについて電子メールを送信します。この設定を有効にするには、プリファレンス・ビューで [**インフラストラクチャ プリファレンス**] をクリックして、[**モニタ設定をスキップ**] 表示枠を展開します。[**スキップされるモニタをシャットダウン**] チェック・ボックスを選択します。モニタを無効にする期間も決定できます。スキップされるモニタの設定の詳細については、647 ページ「モニタ設定をスキップ」を参照してください。
 - ▶ 使用可能な最大プロセス数を制御できます。この設定は、モニタ・パフォーマンスの問題がモニタ設定の調整によって解決されない場合にのみ変更してください。初期値は 1 プールあたり 200 プロセスです（標準設定の 1 プールあたりの最大プロセス数は 20）。この設定を変更するには、プリファレンス・ビューで [**インフラストラクチャ プリファレンス**] をクリックして、[**一般設定**] 表示枠を展開します。[**プールあたりの最大プロセス数**] ボックスでプロセス数を設定します。
-

データのレポートの問題

SiteScope の状況モニタは、BSM インストールへの SiteScope モニタおよび設定データの転送に関する問題を示すイベントをレポートするように設定されています。BSM へのデータのレポートのトラブルシューティングの詳細については、151 ページ「注意事項と制限事項」を参照してください。

SiteScope 状況のグループ

SiteScope の状況モニタでは、モニタ設定の問題や SiteScope サーバ負荷の特定に役立てるために、モニタ自体の環境の主要な側面を監視できます。また SiteScope では、BSM と接続しているときのその接続および関連するデータ・イベントを監視できます。

通常のモニタと同じように、状況モニタは頻度およびしきい値を再設定するために編集できます。管理者は、追加のサーバおよび環境を対象とする新しいモニタを追加することによって状況グループを拡張できます。

状況モニタ・グループは、メインの SiteScope コンテナ内に状況アイコンとして表示されます。状況モニタ・グループの内容を表示するには、[状況] コンテナをクリックします。

SiteScope の状況の監視に含まれるモニタ・タイプは次のとおりです。

モニタ・タイプ	標準設定の名前	説明
BSM 統合設定モニタ	BSM 統合設定	SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定するときに、SiteScope と BSM の間の設定が正しいかどうかをチェックします。
BSM 統合統計モニタ	BSM 統合統計	SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定するときに、SiteScope と BSM の間のトラフィック量をチェックします。
接続統計モニタ	接続統計モニタ	リモート UNIX または Windows サーバと接続するために使用するときに、SSH および Telnet 接続の状態をチェックします。Perfex、Perfex ディスパッチャ統計、および各 perfex プールの状態もチェックします。

モニタ・タイプ	標準設定の名前	説明
SiteScope サーバの状況モニタ	SiteScope サーバの状況	SiteScope が実行されているサーバの多数のサーバ・プロセスおよびリソースをチェックします。
ログ・イベント状況モニタ	ログ・イベント・チェッカー	SiteScope エラー・ログに記録された特定のイベントをチェックします。
負荷モニタの監視	モニタ負荷チェッカー	実行中または実行待機中のモニタ数に関するデータをチェックします。
SSL 証書の状態モニタ	SSL 証書の状態	標準設定のキーストアにある SSL 証明書の状態をチェックします。

BSM 統合設定モニタ

SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして統合する場合、BSM 設定との SiteScope の統合が正しいかどうかをこの状況モニタで追跡できます。このモニタは、無効なパス、内部名、または ID が含まれる BSM にレポートされるグループ、モニタ、測定値の数を表示するのに便利です。また、重複する Topaz ID の数、および Topaz ID が (-1) のインスタンスも表示されます。

モニタの設定の詳細については、1194 ページ「[BSM 統合設定モニタ] ページ」を参照してください。

トラブルシューティングと制限事項

このセクションでは、SiteScope サーバの状況を使って作業する場合のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- ▶ 重複する BSM ID や BSM ID == (-1) を使用するオブジェクトがある場合：
 - ▶ JMX コンソール（<SiteScope のルート・ディレクトリ>%java%bin%jconsole.exe）を開き、[ポート] フィールドに「27676」と入力します。
 - ▶ [MBeans] タブで、
com.mercury.sitescope/Integration/Bac/Tools/BacIntegrationToolsJMX
を選択します。
 重複する BSM ID を使用するオブジェクトの場合は、
fixDuplicateBACConfiguration() をアクティブ化します。
 BSM ID == (-1) を使用するオブジェクトの場合は、
fixMinusOneBACConfiguration() をアクティブ化します。
 - ▶ 新しい設定を BSM を送信するために、softSync() をアクティブ化することもお勧めします。
- ▶ 測定値に誤ったカテゴリ ID が使用されている場合は、SiteScope を再起動します。

BSM 統合統計モニタ

BSM 統合統計モニタでは、BSM の状況がチェックされます。SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして統合する場合、SiteScope と BSM の間のトラフィック量をこの状況モニタで追跡できます。測定値は、SiteScope から BSM に毎分送信されます。

モニタの設定の詳細については、1196 ページ「[BSM 統合統計モニタ] ページ」を参照してください。

接続統計モニタ

接続統計モニタでは、全体的な接続ハンドルの概要が表示されます。接続統計モニタは、SSH および Telnet 接続の動作についてのデータと、Perfex および Perfex_dispatcher プールの統計情報を収集します。このモニタは、接続問題やリモート・サーバの設定問題を分析するのに便利です。

モニタの設定の詳細については、1197 ページ「[Connection Statistics Monitor] ページ」を参照してください。

SiteScope サーバの状況モニタ

SiteScope サーバの状況モニタは、SiteScope が実行されているサーバのサーバ・リソースを監視する SiteScope モニタと同じです。これには、CPU、ディスク領域、メモリ、主要プロセスのモニタが含まれます。SiteScope サーバのリソース使用率に関する問題は、設定に問題があるモニタが原因であったり、単に特定の SiteScope がパフォーマンス能力の上限に達していることを示していることもあります。たとえば、SiteScope による CPU 使用率が高い場合、実行中のモニタの総数が制限に到達しようとしていることを示す場合があります。ディスク領域使用率が高い場合、SiteScope 監視データのログが、ローカル・ディスク・ドライブの容量を超えようとしていることを示す場合があります。SiteScope データのログ記録オプションの詳細については、699 ページ「ログ・プリファレンス」を参照してください。

モニタの設定の詳細については、1201 ページ「[SiteScope サーバの状況モニタ] ページ」を参照してください。

SiteScope ログ・イベント・モニタ

ログ・イベント・モニタは、SiteScope エラー・ログ (**error.log**) に特定のイベントに関するエラーを書き込む SiteScope モニタ・グループと同じです。これらのイベントには、モニタがスキップされたことを示すログ・エントリや、別のアプリケーションへのデータのレポートで問題があったことを示すログ・エントリがあります。

モニタの設定の詳細については、1205 ページ「[ログ イベント状況モニタ] ページ」を参照してください。

SiteScope 負荷モニタの監視

負荷モニタの監視では、実行中モニタ数と実行待機中モニタ数が監視されます。監視のパフォーマンスおよび継続性を維持するためにモニタ負荷の監視は重要です。待機中モニタ数が実行中モニタ数に近づいているか超えると、待機中モニタ数を減らすためにモニタ設定を調整する必要があります。これを行うには、一般的に一部のモニタの実行頻度を減らします。

モニタの設定の詳細については、1208 ページ「[モニタ負荷モニタ] ページ」を参照してください。

タスク

SiteScope の状況監視データの分析方法

このタスクでは、SiteScope の状況監視データを分析し、SiteScope ログ・ファイルとサーバ統計を表示する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1190 ページ「前提条件」
- ▶ 1190 ページ「SiteScope の状況モニタのデプロイ」
- ▶ 1191 ページ「SiteScope の状況モニタの表示」
- ▶ 1192 ページ「SiteScope ログ・ファイルの表示」
- ▶ 1192 ページ「モニタ・パフォーマンス・データの表示」

1 前提条件

ログ・ファイルおよび進捗レポートにアクセスするには、適切なユーザ権限が必要です。

- a 左側の表示枠で **[プリファレンス]** をクリックして、**[ユーザ管理プリファレンス]** を選択します。
- b ユーザ名を右クリックして、**[ユーザの編集]** を選択します。
- c **[ユーザ プロファイルの編集]** ダイアログ・ボックスで **[権限]** を展開します。
- d **[その他]** セクションで **[サーバ統計の表示]** と **[ログの表示]** が選択されていることを確認します（これらの設定は標準設定で選択されます）。

2 SiteScope の状況モニタのデプロイ

SiteScope を BSM のシステム可用性管理にインポートするときに SiteScope の状況モニタがない場合は、モニタをデプロイする必要があります。

タスクの詳細については、1193 ページ「SiteScope の状況モニタのデプロイ」を参照してください。

注 : SiteScope の状況モニタは SiteScope がデプロイされるときに自動的に有効になるので、通常は存在します。

3 SiteScope の状況モニタの表示

SiteScope の状況モニタで収集されたデータは、SiteScope ダッシュボードで表示できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1194 ページ「SiteScope の状況のユーザ・インタフェース」を参照してください。

例 :

子グループと子モニタを表示		状態	タイプ	ターゲッ...	サマリ	更新日時	詳細			
▼ 選択したノード										
Health		✖	グループ		グルー...	10/12/3 ...				
▼ グループ (0 件のうち 0 ...										
▼ モニタ (7 件のうち 7 件)										
Log Event Checker		✖ ↕	ログイベント...		.*skippe...	10/12/3 ...				
Monitor Load Checker		✔ ↕	モニタ負荷		Current ...	10/12/3 ...				
BAC Integration Statistics		✔ ↕	BAC 統合統計		Currentl...	10/12/3 ...				
Health of SiteScope Ser...		✔ ↕	負荷モニタの...	SiteSco...	Network...	10/12/3 ...				
BAC Integration Configu...		✔ ↕	BACIntegratio...		"SiteSco...	10/12/2 ...				
SSL Certificates State		✔ ↕	SSLCertificate...		Expired ...	10/12/2 ...				

4 SiteScope ログ・ファイルの表示

[サーバ統計] コンテキストの [ログ ファイル] ページで、さまざまな SiteScope ログ・ファイルを表示できます。ユーザ・インターフェースの詳細については、1242 ページ「[ログ ファイル] ページ」を参照してください。

例：

ログ ファイル			
タイプ	ログ ファイル	サイズ	最終更新日
その他のログ	amazon_ec2_integratio...	0 バイト	10/12/2 午後 5:40
監査ログ	audit.log	26 K	10/12/3 午後 3:22
監査ログ	audit.log.2010-12-02	8 K	10/12/2 午後 8:02
その他のログ	baselining.log	0 バイト	10/12/2 午後 5:40
その他のログ	data_integration.log	0 バイト	10/12/2 午後 5:40
その他のログ	downtime.log	0 バイト	10/12/2 午後 5:40
エラー ログ	error.log	150 K	10/12/3 午後 3:30
その他のログ	ha.log	1 K	10/12/2 午後 6:19
その他のログ	HPSiteScopeOperation...	0 バイト	10/12/2 午後 5:40
その他のログ	HPSiteScopeOperation...	0 バイト	10/12/2 午後 5:40
その他のログ	jmdrv.log	0 バイト	10/12/2 午後 6:19
その他のログ	LinkReport_group.46.log	81 バイト	10/12/3 午後 3:30
その他のログ	mdrv.log	0 バイト	10/12/2 午後 6:19
その他のログ	mirror.log	0 バイト	10/12/2 午後 5:40
その他のログ	monitorCount.log	672 バイト	10/12/2 午後 6:19
その他のログ	oa_metric_integration.log	0 バイト	10/12/2 午後 5:40
その他のログ	remotes_multi_test.log	0 バイト	10/12/2 午後 5:40
その他のログ	request_statistics.log	0 バイト	10/12/2 午後 5:40
実行モニタ ログ	RunMonitor.log	48 K	10/12/3 午後 3:36
その他のログ	server_statistics.log	719 K	10/12/3 午後 3:36
その他のログ	server_statistics_raw.log	0 バイト	10/12/2 午後 5:40
その他のログ	silent_deployment.log	336 バイト	10/12/2 午後 6:19
日次ログ	SiteScope2010_12_02...	404 K	10/12/2 午後 11:59
日次ログ	SiteScope2010_12_03	1 023 MB	10/12/3 午後 3:36

5 モニタ・パフォーマンス・データの表示

[サーバ統計] コンテキストで、SiteScope サーバの負荷および最近実行されたモニタのリストを表示できます。

概念の詳細については、1211 ページ「サーバ統計の表示」を参照してください。

SiteScope の状況モニタのデプロイ

このタスクでは、SiteScope をシステム可用性管理の BSM にインポートしたときにモニタがなかった場合に、SiteScope インストールに SiteScope の状況モニタをデプロイする方法について説明します。

注：このタスクは上位タスクの一部です。詳細については、1190 ページ「SiteScope の状況監視データの分析方法」を参照してください。

SiteScope の状況モニタを SiteScope インストールにデプロイするには、次の手順で行います。

- 1 状況モニタを表示する SiteScope コンテナを開きます。SiteScope に状況モニタ・グループ・コンテナが含まれていることを確認します。

注：状況モニタ・グループ・コンテナは、状況インジケータ・アイコンで識別されます。

- 2 モニタ・ツリーで **[Health]** テンプレートを見つけます。クリックしてコンテナの内容を展開します。使用可能な状況モニタのテンプレートが表示されます。
- 3 監視対象の SiteScope が実行されているオペレーティング・システムの状況モニタ・テンプレートを選択します。次を選択できます。
 - UNIX 状況モニタ
 - Windows 状況モニタ
- 4 テンプレート・アイコンを右クリックして、ショートカット・メニューから **[コピー]** を選択します。
- 5 状況モニタのデプロイ先の SiteScope の **[Health]** モニタ・グループ・コンテナを右クリックして、**[貼り付け]** を選択します。選択したテンプレートのモニタが設定され、選択した SiteScope サーバにデプロイされます。

参照情報

SiteScope の状況のユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ [BSM 統合設定モニタ] ページ (1194 ページ)
- ▶ [BSM 統合統計モニタ] ページ (1196 ページ)
- ▶ [Connection Statistics Monitor] ページ (1197 ページ)
- ▶ [SiteScope サーバの状況モニタ] ページ (1201 ページ)
- ▶ [ログ イベント状況モニタ] ページ (1205 ページ)
- ▶ [モニタ負荷モニタ] ページ (1208 ページ)
- ▶ [SSL 証書の状態モニタ] ページ (1209 ページ)

[BSM 統合設定モニタ] ページ

このページでは、BSM 設定との SiteScope の統合が正しいかどうかをチェックできます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [Health] を展開して、[BAC Integration Configuration] をクリックします。
重要な情報	監視データは、SiteScope が BSM のデータ・コレクタとして統合される場合にのみ関係します。
関連情報	▶ 1187 ページ「BSM 統合設定モニタ」 ▶ モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については、375 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
[カウンタ]	
[Total Groups]	データを BSM にレポートするグループの総数。
[Total Monitors]	データを BSM にレポートするモニタの総数。
[Duplicate BSM ID]	BSM にレポートされた重複する BSM ID の数。すべての SiteScope オブジェクトには、一意の BSM ID があります。2 つのオブジェクトで同じ ID が使用されている場合、データを BSM に送信できるのは、これらのオブジェクトのうちの 1 つのみです。この問題のトラブルシューティングについては、1187 ページ「トラブルシューティングと制限事項」を参照してください。
[BSM ID == (-1)]	すべての SiteScope オブジェクトには、一意の BSM ID があります。SiteScope オブジェクトの ID 値が (-1) の場合、そのデータは BSM に送信されません。この問題のトラブルシューティングについては、1187 ページ「トラブルシューティングと制限事項」を参照してください。
[Group with invalid path]	SiteScope グループに有効なパスがない場合、そのグループは BSM に送信されません。
[Groups with duplicate name]	SiteScope グループに一意の内部名がない場合、そのグループは BSM に送信されません。
[Monitor with invalid path]	SiteScope モニタに有効なパスがない場合、そのモニタは BSM に送信されません。
[Monitors without internal ID]	SiteScope モニタに一意の内部 ID が含まれていない場合、そのモニタは BSM に送信されません。
[Monitors without internal name]	SiteScope モニタに有効な内部名が含まれていない場合、このモニタは BSM に送信されません。

UI 要素	説明
[Measurements with wrong category ID]	SiteScope 測定値に有効なカテゴリ ID が含まれていない場合、その測定値は BSM に送信されません。この問題のトラブルシューティングについては、1187 ページ「トラブルシューティングと制限事項」を参照してください。
[Target with BSM ID == (-1)]	すべてのリモート・ターゲットには、一意の BSM ID があります。ID 値が (-1) の場合、そのデータは BSM に送信されません。この問題のトラブルシューティングについては、1187 ページ「トラブルシューティングと制限事項」を参照してください。



[BSM 統合統計モニタ] ページ

このページでは、SiteScope と BSM の間のトラフィック量をチェックできます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [Health] を展開して、[BAC Integration Statistics] をクリックします。
重要な情報	監視データは、SiteScope が BSM のデータ・コレクタとして統合される場合にのみ関係します。
関連情報	▶ 1187 ページ「BSM 統合設定モニタ」 ▶ モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については、375 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[カウンタ]	▶ Currently Logging to Business Service Management : 現在 BSM にログ記録されている 1 分あたりの測定値の数を表示します。 ▶ Number of Topology Scripts in Queue. 実行待機中の Jython スクリプトの数を表示します。これらのスクリプトによって、BSM にトポロジ・データが転送されます。これらのスクリプトは SiteScope で設定変更があるたびに実行する必要があります。キューは、SiteScope が最初に BSM に登録されるとき、または SiteScope で多数の設定変更が行われたときに増えます。

 [Connection Statistics Monitor] ページ

このページには、全体的な接続ハンドルの概要が表示されます。接続統計モニタは、SSH および Telnet 接続の動作についてのデータと、Perfex および Perfex_dispatcher プールの統計情報を収集します。このモニタは、接続問題やリモート・サーバの設定問題を分析するのに便利です。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [Health] を展開して、[Connection Statistics Monitor] をクリックします。
関連情報	▶ 1188 ページ「接続統計モニタ」 ▶ モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については、375 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[SSH Connection Counters]	▶ 開いた合計。開いた SSH 接続の総数。この数が [現在割り当て済みのリソース] の数を大きく上回っている場合は、設定の問題を示しています。次の状況が発生していないかどうかを確認する必要があります。 ▶ 接続キャッシュが無効になった ▶ 不正なログインまたはパスワードが使用された ▶ リモート・サーバ・タイムアウトが短すぎる ▶ 閉じた合計。最後に SiteScope が再起動されてから閉じた SSH 接続の数。 ▶ V1 を開くのに失敗した合計。SSH バージョン 1 を使用して開くことに失敗した SSH 接続の数。標準設定では、V2 での接続を試みる前に、V1 を使用して接続が試行されます。この数が大きい場合は、問題が発生しているリモート・サーバで [SSH バージョン 2 のみを使用] オプションを選択することをお勧めします。 ▶ V2 を開くのに失敗した合計。SSH バージョン 2 を使用して開くことに失敗した SSH 接続の数。この数が大きい場合は、リモート・サーバで正しいログインとパスワードが使用されたことを検証し、リモート・サーバ上の SSH バージョンを検証します (V1 または V2)。 ▶ 再利用。最後に SiteScope が再起動されてから再利用された SSH 接続の数。 ▶ 現在割り当て済みのリソース。現在開いている SSH 接続の数。 ▶ 現在使用中。現在開いていて、実行中のモニタで使用されている SSH 接続の数。

UI 要素	説明
[Telnet Connection Counters]	➤ 開いた合計：最後に SiteScope が再起動されてから開いた telnet 接続の数。 ➤ 閉じた合計：最後に SiteScope が再起動されてから閉じた telnet 接続の数。 ➤ 再利用：最後に SiteScope が再起動されてから再利用された telnet 接続の数。 ➤ 現在割り当て済みのリソース：現在開いている telnet 接続の数。 ➤ 現在使用中：現在開いていて、実行中のモニタで使用されている telnet 接続の数。

UI 要素	説明
[Perfex/Perfex dispatcher Connection Counters]	➤ アイドル プロセス : 現在アイドル状態のプロセスの数。 ➤ 使用中プロセス。現在使用中状態のプロセスの数。 ➤ プロセス合計 : プロセスの総数 (アイドル・プロセスと使用中プロセスの合計)。 ➤ プロセス プール キューの長さ。使用可能な perfex の現在待機中のモニタ数。この値は、perfex で実行中のモニタ数が多すぎる、または perfex プールが小さすぎることを示す場合があります。 ➤ 空きプロセスの平均待機時間。プロセスが使用可能になるまでの平均待機時間 (ミリ秒単位)。この値が 30,000 ミリ秒 (30 秒) を超えると、それ以降のモニタが失敗します。平均待機時間が長い場合は、プールのプロセス数を増やす必要があることを示します。 ➤ 平均実行時間。perfex の実行にかかる平均時間 (ミリ秒単位)。ここでは、次を示します。 ➤ ネットワーク速度。要求を送信し、サーバから応答を受信するのにかかる時間。 ➤ perfex の可用性。実行を完了し、perfex をプールに戻すまでにかかる平均時間。 ➤ perfex を使用しているモニタ数。 ➤ サーバ タイムアウトを待機するプロセス : 呼び出しタイムアウトを過ぎたプロセス、接続を閉じるためにサーバ・タイムアウトを待機しているプロセス、またはプールに戻るために応答を待機しているプロセスの数。

 [SiteScope サーバの状況モニタ] ページ

このページでは、ローカルの SiteScope インストールの SiteScope サーバ・リソースおよびプロセス統計をチェックできます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [Health] を展開して、[Health of SiteScope Server] をクリックします。
重要な情報	▶ プロセス/perfex カウンタは、SiteScope サーバの状況モニタから削除されており、現在はサポートされていません。 ▶ テンプレート・モードで作業する場合の注意事項を次に示します。 選択できるカウンタの最大数は 100 です。SiteScope の以前のバージョンからテンプレート・モニタをインポートする場合、またはテンプレートへのコピーを実行する場合、カウンタ数に制限はありません。
関連タスク	1190 ページ「SiteScope の状況監視データの分析方法」
関連情報	▶ 1188 ページ「SiteScope サーバの状況モニタ」 ▶ モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については、375 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。

SiteScope サーバの状況モニタの設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[カウンタ] (UNIX の場合)	➤ Current Monitors Run Per Minute ➤ Current Monitors Running ➤ Current Monitors Waiting ➤ Maximum Monitors Run Per Minute ➤ Maximum Monitors Running ➤ Maximum Monitors Waiting ➤ Used Disk Space on SiteScope Drive (UNIX にインストールされている SiteScope からアクセス可能) ➤ MegaBytes Available on SiteScope Drive ➤ Physical Memory Free ➤ Physical Memory Free Megabytes ➤ Swap Free ➤ Swap Free Megabytes ➤ Load Avg 5min ➤ SiteScope Process Memory ➤ SiteScope Process Thread Count ➤ SiteScope Process Handle Count ➤ Average CPU ➤ PageIns/sec ➤ PageOuts/sec ➤ SwapIns/sec ➤ SwapOuts/sec ➤ ContextSwitches/sec ➤ Net_TotalPacketsIn/sec ➤ Net_TotalPacketsOut/sec ➤ Net_TotalCollisions/sec

UI 要素	説明
[カウンタ] (Windowsの場合)	メモリ ➤ Page Faults/sec ➤ Pool Paged Bytes ➤ Pool Nonpaged Bytes ➤ % Committed Bytes In Use ➤ Available MBytes システム ➤ Context Switches/sec ➤ File Data Operations/sec ➤ System Up Time ➤ Processor Queue Length ➤ プロセス ➤ スレッド Processor ➤ _Total ➤ % Processor Time ➤ % DPC Time Process ➤ java ➤ Thread Count ➤ Pool Paged Bytes ➤ Pool Nonpaged Bytes ➤ Handle Count

UI 要素	説明
[カウンタ] (Windows の場合)	Network Interface ➤ MS TCP Loopback interface ➤ Bytes Total/sec ➤ Current Bandwidth ➤ Bytes Received/sec ➤ Bytes Sent/sec ➤ <イーサネット・ハードウェア> (特定の SiteScope サーバに固有のハードウェア) ➤ Bytes Total/sec ➤ Current Bandwidth ➤ Bytes Received/sec ➤ Bytes Sent/sec LogicalDisk ➤ <論理ドライブ> (特定の SiteScope サーバに固有のハードウェア) ➤ % Free Space ➤ Free Megabytes ➤ Avg. Disk Bytes/Transfer ➤ _Total ➤ % Free Space ➤ Free Megabytes ➤ Avg. Disk Bytes/Transfer PhysicalDisk ➤ _Total ➤ Current Disk Queue Length ➤ Disk Transfers/sec ➤ <物理ディスク> (特定の SiteScope サーバに固有のハードウェア) ➤ Current Disk Queue Length ➤ Disk Transfers/sec

UI 要素	説明
[カウンタ] (Windows の場合)	サーバ ▶ Bytes Total/sec ▶ Errors Logon ▶ Errors Access Permissions ▶ Errors System ▶ Files Open ▶ Server Sessions

 [ログ イベント状況モニタ] ページ

このページでは、ローカルの SiteScope インストールの **error.log** ファイルで特定のイベントを監視できます。これらのイベントには、モニタがスキップされたことを示すログ・エントリや、別のアプリケーションへのデータのレポートで問題があったことを示すログ・エントリがあります。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [Health] を展開して、[Log Event Checker] をクリックします。
関連タスク	1190 ページ「SiteScope の状況監視データの分析方法」
関連情報	▶ 1189 ページ「SiteScope ログ・イベント・モニタ」 ▶ モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については、375 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。

ログ・イベント状況モニタの設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[カウンタ]	➤ skipped #1。モニタがスケジュールされていた実行を 1 回スキップしました。 ➤ skipped #2。モニタがスケジュールされていた実行を 2 回スキップしました。 ➤ skipped #3。モニタがスケジュールされていた実行を 3 回スキップしました。 ➤ skipped #4。モニタがスケジュールされていた実行を 4 回スキップしました。 ➤ skipped #5。モニタがスケジュールされていた実行を 5 回スキップしました。 ➤ SiteScope is shutting down : SiteScope がシャットダウンしました。 ➤ Reached the limit of processes in the process pool。プロセス・プールから要求されたプロセス数が、プールで使用可能なプロセス数を超えています。 ➤ Error (エラー)。data reporter failed to report chunk of data。BSM への SiteScope モニタ測定値データの転送で障害が発生しました。 ➤ Error (エラー)。config reporter failed to report chunk of data。BSM のシステム可用性管理への SiteScope 設定データの転送で障害が発生しました。 ➤ Error (エラー)。HP Business Service Management failed to process data : SiteScope から送信されたデータの処理で障害が発生したことが BSM からレポートされました。

UI 要素	説明
[カウンタ]	➤ Error (エラー)。CacheSender. Got to the max number of cached files : BSM への転送待機中にキャッシュ・データ・ファイルの最大数に達しました。これは、SiteScope と BSM の間のデータ転送が中断された場合に発生することがあります。 ➤ Error (エラー)。CacheSender. Got to the max old dir size : BSM への転送待機中にキャッシュ・データ・ファイルの最大ディレクトリ・サイズに達しました。これは、SiteScope と BSM の間のデータ転送が中断された場合に発生することがあります。 ➤ HP Business Service Management SEVERE : SEVERE ステータスのデータ転送または処理障害が BSM からレポートされました。 ➤ Commit verification failed。 ➤ Error loading monitor。 ➤ Error contacting mirror server。 ➤ Error: open SSH connections limit reached。 ➤ Error: failure in baseline process。 ➤ Error: failed to parse rule。 ➤ Topology Reporter failed to report。
[カウンタ値のリセット]	モニタのカウンタ値が 0 にリセットされます。



[モニタ 負荷モニタ] ページ

このページでは、ローカルの SiteScope インストールの進捗レポートでレポートされる SiteScope の負荷統計をチェックできます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [Health] を展開して, [Monitor Load Checker] をクリックします。
関連タスク	1190 ページ「SiteScope の状況監視データの分析方法」
関連情報	▶ 1189 ページ「SiteScope 負荷モニタの監視」 ▶ モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については, 375 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。

負荷モニタの監視の設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[カウンタ]	▶ Current Monitors Run Per Minute ▶ Current Monitors Running ▶ Current Monitors Waiting ▶ Maximum Monitors Run Per Minute ▶ Maximum Monitors Running ▶ Maximum Monitors Waiting

 [SSL 証書の状態モニタ] ページ

このページでは、標準設定のキーストア（<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥java¥lib¥security¥cacerts）にある SSL 証明書の状態を確認できます。この場所に、URL、WebSphere アプリケーション・サーバ、または VMware ベースのサーバを監視するためにインポートされたクライアント証明書が保存されます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [Health] を展開して、[SSL Certificates State] をクリックします。
関連タスク	1190 ページ「SiteScope の状況監視データの分析方法」
関連情報	▶ 801 ページ「証明書管理」 ▶ モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については、375 ページ「共通モニタ設定」を参照してください。

SSL 証書の状態モニタの設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[期限切れ残り日数]	指定の日数で証明書の期限が切れる（ただしまだ期限は切れていない）場合、[Certificates expiring soon] カウンタに追加されます。 標準設定値 ：7 日
[カウンタ]	▶ Expired certificates。すでに期限が切れている証明書のカンマ区切りリスト。 ▶ Certificates expiring soon。[期限切れ残り日数] で示される期間で期限切れになる証明書のカンマ区切りリスト。まもなく（N 日後。これはモニタ設定によって決まる固定値です）期限切れになりますが、まだ期限切れではありません。 ▶ Number of expired certificates ▶ Number of certificates expiring soon

サーバ統計の表示

本章の内容

概念

- ▶ サーバ統計の使用 (1212 ページ)
- ▶ SiteScope サーバの負荷を表す統計情報の解析 (1213 ページ)
- ▶ ログ・ファイルの使用 (1216 ページ)

タスク

- ▶ SiteScope サーバ統計の分析方法 (1219 ページ)
- ▶ 監査ログの設定方法 (1220 ページ)

参照情報

- ▶ SiteScope ログ・ファイルの列 (1221 ページ)
- ▶ 監査ログのエントリ (1222 ページ)
- ▶ SiteScope サーバ統計のユーザ・インタフェース (1232 ページ)

概念

サーバ統計の使用

SiteScope の[サーバ統計] コンテキストには、いくつかの重要な SiteScope サーバのパフォーマンス測定値の概要が表示されます。このパフォーマンス測定値は、SiteScope のパフォーマンス、安定性、状況の分析、およびボトルネックのデバッグに使用できます。このコンテキストには、SiteScope サーバの負荷を表す統計情報、実行中のモニタや最近実行されたモニタのリスト、perfex プールのサマリ、スレッド・プール、Telnet 接続、SSH 接続が含まれます。また、SiteScope ログ・ファイルも表示されます。[サーバ統計] コンテキストは、20 秒ごとに更新されます。

[サーバ統計] コンテキストには、次のページがあります。

ページ	説明
一般	SiteScope サーバの負荷を表す重要な統計情報(実行中モニタ数や待機中モニタ数など) およびタイプごとの実行中モニタ数のリストが表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1233 ページ「[一般] ページ」を参照してください。
実行中のモニタ数	実行中の SiteScope モニタ、最近実行されたモニタ、実行された時間、実行で返された状態のリストを表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1234 ページ「[実行中モニタ] ページ」を参照してください。
Perfex プロセス プール	プロセス・マネージャ・サマリや、perfex ツールおよび perfex_dispatcher ツールの統計情報テーブルが表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1236 ページ「[Perfex プロセス プール] ページ」を参照してください。
SSH 接続	SSH を使用して、UNIX または Windows のリモート・サーバに接続している場合、SSH 統計および SSH 接続サマリが表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1238 ページ「[SSH 接続] ページ」を参照してください。

ページ	説明
Telnet 接続	リモート UNIX または Windows サーバへの接続に Telnet を使用した場合の Telnet 統計を表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1241 ページ「[Telnet 接続] ページ」を参照してください。
ログ ファイル	SiteScope のパフォーマンスの問題の理解、モニタと警告の問題のトラブルシューティング、SiteScope の管理アクションの確認に役立つ、SiteScope のログ・ファイルのリストを表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1242 ページ「[ログ ファイル] ページ」を参照してください。

SiteScope サーバの負荷を表す統計情報の解析

監視負荷は、SiteScope の拡大・縮小の問題、モニタ設定の問題、またはネットワーク・パフォーマンスの問題の重要な指標になります。SiteScope モニタの実行モデル、および該当のモデルに応じたサーバ・パフォーマンス・データの解析に関する簡単な説明を次に示します。

SiteScope モニタ・インスタンスは、スケジュールされた間隔で定期的に SiteScope アプリケーションによって実行される不可欠な命令セットです。モニタ・インスタンスを定義すると、SiteScope によって、実行（更新）の頻度とスケジュール・オプションに基づいてモニタが実行用のキューに入れられます。モニタ・インスタンスが「無効」とマークされている場合でも、キューにスケジュールされますが、通常の命令は実行されません。

Java ベース・アプリケーションとして、SiteScope では、マルチスレッドを利用してモニタ・タスクを並列実行できます。実行がスケジュールされた各モニタ・インスタンスはスレッドに割り当てられます。スレッドに割り当てられると、モニタ・インスタンスは**実行中モニタ**になります。モニタの実行命令の結果が得られるか、タイムアウト値（該当する場合）に達するまで、スレッドに割り当てられたままになります。

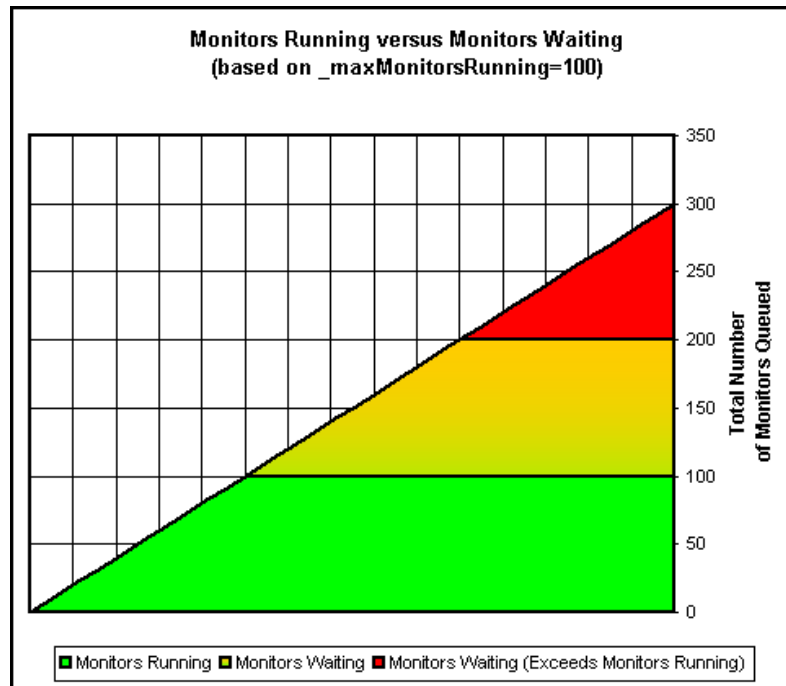
このモデルでも、モニタはすぐに実行されるわけではなく、同時に実行できるモニタ・スレッドの数には制限があります。使用できるスレッドの上限に達すると、実行を要求されたモニタは、実行スレッドを待機する**待機中モニタ**になります。

サーバ容量やネットワーク・デプロイメントの詳細は大きく異なる可能性があるため、特定の値や制限を SiteScope の監視負荷に割り当てることは困難です。また、単純にトランザクションのネットワーク・トラフィックの問題や SiteScope のモニタ設定の問題が原因で、監視負荷が時間の経過とともに大きく変わる場合もあります。

監視負荷を解析するための重要な警告シグナルとして、実行中モニタ数に対する待機中モニタ数の割合が挙げられます。通常、実行中モニタ数に対する待機中モニタ数の割合が常に 1:2 以上になっていなければ、一部のモニタが実行を待機していても問題はありません。たとえば、実行中モニタの最大数が 100 で、待機中モニタ数が 50 の場合、待機中モニタと実行中モニタの割合が 1:2 になります。

注 : `master.config` で制御される `_maxMonitorsRunning=` 設定のモニタ実行スレッドの初期最大数は 400 です (`master.xml` の標準設定値は 30 です)。

次のグラフは、実行中モニタ数と待機中モニタ数の関係を視覚的に表しています。このグラフは、モニタ数が 100 に設定されている `_maxMonitorsRunning` に基づいています。緑色の領域は、キューのモニタの数が 100 を超えるまでは、要求されたすべてのモニタを SiteScope で実行できることを表しています。このレベルでは、実行がスケジュールされている追加モニタの状態が [Monitor Waiting] になります。赤色の領域は、待機中モニタ数が実行中モニタ数の 2 倍以上になっていることを表しています。これは、SiteScope モニタ設定がサーバおよびネットワークの容量に対してうまく調整できていないことを示しています。



待機中モニタ数が多すぎる状態が継続する場合、次のモニタ設定を調整できます。

- ▶ **頻度。**これは、すべてのモニタ・タイプの基本的なスケジュール・パラメータです。短い間隔で多数のモニタが実行（または更新）されるように設定されていることが原因で、実行中モニタ数と待機中モニタ数が多くなっていることがよくあります。最小更新間隔は 15 秒です。さまざまなシステム要因によって、一部のモニタ・アクションで完了時間が 15 秒より長くなる場合があります。たとえば、Web トランザクション、データベース・クエリ、リモート・サーバへのログオン、正規表現の照合でモニタの完了が遅延する可能性があります。1377 ページ「モニタ・サマリ・レポート」を使用して、モニタ・グループの「**頻度**」設定を確認し、一部のモニタの値を増やすことを検討してください。
- ▶ **エラーの検証。**このオプションを定期的または頻繁に使用すると、該当の SiteScope モニタでエラー状態が検出されるたびにモニタ実行のキューが急激に増加します。このオプションにはその目的がありますが、すべてのモニタに標準設定で使用しないでください。1377 ページ「モニタ・サマリ・レポート」を使用して、「**エラーの検証**」設定が有効になっている可能性のあるモニタを表示します。

SiteScope サーバのパフォーマンス・データの詳細については、1234 ページ「[実行中モニタ] ページ」を参照してください。

ログ・ファイルの使用

SiteScope には多数のログ・ファイルが保持されています。ログ・ファイルは、SiteScope のパフォーマンスの問題の把握、モニタや警告の問題のトラブルシューティング、SiteScope の管理アクションの確認を行う場合に役立ちます。

[サーバ統計] コンテキストの「ログ ファイル」メニューを使用して、ログ・ファイルにアクセスできます。ログ・ファイルをクリックすると、新しいブラウザ・ウィンドウが開き、ログ・ファイルのテキストが表示されます。スクロール・バーを使用してログの内容を表示できます。また、ブラウザのテキスト検索ユーティリティを使用して特定の情報を見つけることもできます。たとえば、モニタの「**名前**」プロパティに表示される一意のテキスト文字列を検索して、特定のモニタ・インスタンスのエントリを見つけることができます。各種 SiteScope ログ・ファイルの詳細については、1242 ページ「[ログ ファイル] ページ」を参照してください。

ログ・ファイルはプレーン・テキストで書き込まれ、**<SiteScope のルート・パス>%logs** ディレクトリに保存されます。標準設定では、これらのログ・ファイルはタブ区切りのテキスト・ファイルになります。これらのファイルの順序や内容を理解しておく、特定のモニタの結果を検証する場合や、SiteScope モニタの結果を別のデータベースに移す場合に役立ちます。詳細については、1221 ページ「SiteScope ログ・ファイルの列」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 1217 ページ「監査ログの使用」
- ▶ 1218 ページ「監査ログの制限事項」

監査ログの使用

SiteScope の監査ログには、SiteScope で実行されたアクション、実行時間、実行ユーザが記録されています。これには、新しいユーザ・インタフェースで実行された設定の変更（モニタ、テンプレート、警告の作成など）が含まれています。

注：SiteScope が HP Business Service Management の [システム可用性管理] に関連付けられている場合、SiteScope で実行したアクションは SiteScope の監査ログではなく HP Business Service Management の監査ログに表示されます。

それぞれの操作が実行されると、監査ログにエントリが作成されます。現在の監査ログがそのサイズ制限に達すると、監査ログが閉じて新しいログが作成されます。古いログの名前は、**audit.log.1**、**audit.log.2** のようになります（以下同様）。名前に連結される数値が高いほど、古いログになります。保持するバックアップ監査ログのサイズ制限と最大数の設定の詳細については、1220 ページ「監査ログの設定方法」を参照してください。

現在の監査ログの名前は **audit.log** で、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>%logs** ディレクトリにあります。このディレクトリまたは SiteScope アプリケーションから監査ログにアクセスできます。監査ログの表示の詳細については、1242 ページ「[ログ ファイル] ページ」を参照してください。

モニタ・ツリーで実行される大部分の操作は、監査ログに記録されます。監査ログに記録されない操作のリストについては、1218 ページ「監査ログの制限事項」を参照してください。

監査ログの制限事項

- ▶ 監査ログのエントリは、英語でのみ作成できます。これは、SiteScope の表示言語に関係なく、監査ログのエントリの表示も英語のみであることを意味しています。
- ▶ 次の操作は監査ログに記録されません。

- ▶ テンプレートをデプロイするときに行う、テンプレートのさまざまな要素に対する操作は記録されません。

たとえば、グループ **MM2_Servers**（この新しいグループにはモニタが含まれます）を作成するテンプレートをデプロイする場合がこれに該当します。監査ログのエントリは次のようになります。

実行された操作： 設定テンプレート "MM2" は "MM2_Servers" に貼り付けられました。

MM2_Servers グループのモニタの作成に関するエントリは監査ログにありません。

- ▶ SiteScope から HP Business Service Management へのアタッチおよびデタッチはログに記録されません。

SiteScope が HP Business Service Management の [システム可用性管理] に関連付けられている場合、SiteScope で実行したアクションは SiteScope の監査ログではなく HP Business Service Management の監査ログに表示されます。

タスク

SiteScope サーバ統計の分析方法

このタスクでは、SiteScope サーバ統計とログ・ファイルを分析する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1219 ページ「前提条件」
- ▶ 1219 ページ「SiteScope サーバ統計の表示」
- ▶ 1220 ページ「SiteScope ログ・ファイルの表示」

1 前提条件

[サーバ統計] コンテキストにアクセスするには、適切なユーザ権限が必要です。

- a 左側の表示枠で **[プリファレンス]** をクリックして、**[ユーザ管理プリファレンス]** を選択します。
- b ユーザ名を右クリックして、**[ユーザの編集]** を選択します。
- c **[ユーザ プロファイルの編集]** ダイアログ・ボックスで **[権限]** を展開します。
- d **[その他]** セクションで **[サーバ統計の表示]** が選択されていることを確認します（この設定は標準設定で選択されます）。

2 SiteScope サーバ統計の表示

[サーバ統計] コンテキストでは、SiteScope サーバの負荷、実行中および最近実行したモニタのリスト、perfex プロセス・プール統計、Telnet 接続統計、SSH 接続統計を表示できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1232 ページ「SiteScope サーバ統計のユーザ・インタフェース」を参照してください。

3 SiteScope ログ・ファイルの表示

[サーバ統計] コンテキストの [ログ ファイル] ページで、さまざまな SiteScope ログ・ファイルを表示できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1242 ページ「[ログ ファイル] ページ」を参照してください。

監査ログの設定方法

このタスクでは、監査ログの最大サイズを設定する手順について説明します。

1 <SiteScope のルート・ディレクトリ>%conf%core%Tools%log4j%PlainJava%ディレクトリにある **log4j.properties** ファイルを開きます。

2 **MaxFileSize** にログの最大行数を設定します。

3 **MaxBackupIndex** に、保持しているバックアップ監査ログが何個に達したら最も古い監査ログを削除するのか、最大数を設定します。

たとえば、**MaxBackupIndex** が 5 の場合、保持するバックアップ監査ログは最大 5 個です。5 個のバックアップ・ログ・ファイルが存在する場合、現在の **audit.log** ファイルが **MaxFileSize** サイズに達すると、**audit.log.5** が削除され、**audit.log.4** が **audit.log.5** に、**audit.log.3** が **audit.log.4** というように名前が変更されます。現在の **audit.log** の名前が **audit.log.1** に変更されて、新しい **audit.log** が作成されます。

参照情報

SiteScope ログ・ファイルの列

SiteScope が、インフラストラクチャ内のコンポーネントの可用性をテストするようにモニタ指示を実行すると、モニタの結果がデータ・ログ・ファイルに書き込まれます。SiteScope 監視データのログの各ログ・エントリの先頭 6 列は、どのモニタ・タイプでも同じです。各ログ・エントリの第 7 列以降、各列の内容はモニタ・タイプごとに固有になります。

次の表で、それぞれの列の内容について説明します。各ログ・ファイル内の列は、タブ区切りのテキストとして書き込まれます。

列	列のデータ
1	サンプルが記録された日時。
2	カテゴリ（たとえば、good, error, warning, nodata など）。
3	モニタが定義したモニタ・グループ名（ownerID と呼ばれます）。
4	モニタ・タイトルのテキスト。
5	stateString（[Group details] ページに表示される状態文字列）。
6	ID: サンプル番号（このモニタの一意の ID。グループ + ID がモニタの一意のキーになります）。サンプル番号は、そのモニタの一意のサンプル番号です。

監査ログのエントリ

監査ログの各行には、SiteScope で実行された操作が記述されます。

本項の内容

- ▶ 1223 ページ「SiteScope の開始」
- ▶ 1223 ページ「グループ操作」
- ▶ 1224 ページ「モニタ操作」
- ▶ 1224 ページ「一般プリファレンスの更新」
- ▶ 1225 ページ「その他のプリファレンスの更新」
- ▶ 1226 ページ「テンプレートの適用」
- ▶ 1226 ページ「テンプレート・コンテナ」
- ▶ 1227 ページ「テンプレートの作成, 削除, 変更」
- ▶ 1227 ページ「テンプレート変数」
- ▶ 1228 ページ「テンプレート・グループ」
- ▶ 1228 ページ「テンプレート・リモート・オブジェクト」
- ▶ 1229 ページ「テンプレート警告」
- ▶ 1229 ページ「テンプレート・モニタ」
- ▶ 1230 ページ「警告」
- ▶ 1230 ページ「レポート」
- ▶ 1231 ページ「[グローバル検索と置換] の操作」
- ▶ 1231 ページ「ログインとログアウト」
- ▶ 1231 ページ「ログインの失敗」
- ▶ 1232 ページ「パスワードの変更」
- ▶ 1232 ページ「カテゴリ」

SiteScope の開始

SiteScope を再起動すると、エントリは次のようになります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - SiteScope 監査ログが初期化されました
```

グループ操作

グループに対して実行された操作は次の形式になります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作: グループ "<グループ名>" "<操作>" "<コンテナ>"
```

各パラメータの説明：

- ▶ **<グループ名>** は、操作対象となったグループの名前です。
- ▶ **<操作>** は、次のいずれかになります。
 - ▶ **Created In。** グループが作成された場所。
 - ▶ **Updated in。** グループの情報が更新された場所。
 - ▶ **Deleted From。** グループが削除された場所。
 - ▶ **Pasted On。** ユーザがグループ間で情報をコピーしている。
- ▶ **<コンテナ>** は、操作対象となったグループ・コンテナの名前です。

モニタ操作

モニタに対して実行された操作は次の形式になります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : モニタ "<モニタ名>" "<操作>" "<コンテナ>"
```

- ▶ **<モニタ名>**は、操作対象となったモニタの名前です。
- ▶ **<操作>**は、次のいずれかになります。
 - ▶ **Created In** : ユーザがモニタを作成した場所。
 - ▶ **Updated in** : ユーザがモニタの情報を更新した場所。
 - ▶ **Deleted From** : ユーザがモニタを削除した場所。
 - ▶ **Pasted On** : ユーザが情報をモニタ間でコピーしている。
- ▶ **<コンテナ>**はコンテナの名前です。

一般プリファレンスの更新

モニタ・ツリーの [**プリファレンス**] コンテナの下にある [**一般プリファレンス**] への変更は次の形式になります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : "<プリファレンス名>" が更新されました
```

<**プリファレンス名**>は、変更されたプリファレンスの名前です。

プリファレンスの変更の内容はログには含まれません。

その他のプリファレンスの更新

モニタ・ツリーの「**一般プリファレンス**」に表示されていないプリファレンスへの変更は次の形式になります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ: <ユーザ名> 実行された操作: "<プリファレンス名>" が "<オブジェクト名>" "<操作>" と命名されました
```

- ▶ **<プリファレンス名>**はプリファレンスの名前です。
- ▶ **<オブジェクト名>**は、プリファレンスが参照するオブジェクトの名前です。
- ▶ **<操作>**は、次のいずれかになります。
 - ▶ **Updated** : ユーザがプリファレンスを変更している。
 - ▶ **Deleted** . ユーザがプリファレンスを削除している。

この形式は、次のプリファレンス・タイプに使用されます。

- ▶ Microsoft Windows リモート・サーバ
- ▶ UNIX リモート・サーバ
- ▶ 電子メールのプリファレンス
- ▶ ページャ・プリファレンス
- ▶ SNMP プリファレンス
- ▶ 時間指定スケジュールのプリファレンス
- ▶ 期間指定スケジュール・プリファレンス
- ▶ ユーザのプリファレンス

テンプレートの適用

テンプレートをデプロイしてエンティティが作成されると、ログ・エントリは次のようになります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ: <ユーザ名> 実行された操作: 設定テンプレート  
"<テンプレート名>" が "<グループ名>" に貼り付けられました
```

- ▶ **<テンプレート名>**は、エンティティの作成元となったテンプレートの名前です。
- ▶ **<グループ名>**は、テンプレートから作成されたエンティティが含まれるグループの名前です。

注: テンプレートをデプロイしてどのエンティティが作成されたかを確認するには、テンプレート自体の内容を参照します。エンティティに関する情報は監査ログには含まれません。

テンプレート・コンテナ

テンプレート・コンテナが作成、削除、更新されると、ログ・エントリは次のようになります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ: <ユーザ名> 実行された操作: テンプレート・コン  
テナ "<コンテナ名>" "<操作>" "<コンテナ>"
```

- ▶ **<コンテナ名>**は、作成、削除、または更新されたテンプレート・コンテナの名前です。
- ▶ **<操作>**は、次のいずれかになります。
 - ▶ **Created in.** ユーザがテンプレート・コンテナを作成した場所。
 - ▶ **Deleted from.** ユーザがテンプレート・コンテナを削除した場所。
 - ▶ **Updated in :** ユーザがテンプレート・コンテナを変更した場所。
- ▶ **<コンテナ>**は、テンプレートが含まれるコンテナの名前です。

テンプレートの作成, 削除, 変更

テンプレートが作成, 削除, 更新されると, ログ・エントリは次のようになります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : テンプレート
"<テンプレート名>" "<操作>" "<コンテナ>"
```

- ▶ **<テンプレート名>**は, 作成, 削除, または更新されたテンプレートの名前です。
- ▶ **<操作>**は, 次のいずれかになります。
 - ▶ **Created In** : ユーザがテンプレートを作成した場所。
 - ▶ **Deleted from** : ユーザがテンプレートを削除した場所。
 - ▶ **Updated in** : ユーザがテンプレートを変更した場所。
- ▶ **<コンテナ>**は, テンプレートが含まれるコンテナの名前です。

テンプレート変数

サーバ ID などのオブジェクトに関連するテンプレート変数がコンテナ内で作成, 削除, 更新されると, ログ・エントリは次のようになります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : テンプレート変数
"<変数名>" "<操作>" "<コンテナ>"
```

- ▶ **<変数名>**は, 作成, 削除, または更新された変数の名前です。
- ▶ **<操作>**は, 次のいずれかになります。
 - ▶ **Created In** : オブジェクトのテンプレート変数が作成された場所。
 - ▶ **Deleted from** : オブジェクトのテンプレート変数が削除された場所。
 - ▶ **Updated in** : オブジェクトのテンプレート変数が更新された場所。
- ▶ **<コンテナ>**は, テンプレート変数が含まれるコンテナの名前です。

テンプレート・グループ

特定のオブジェクト・タイプのテンプレート・グループが作成、削除、更新されると、ログ・エントリは次のようになります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : テンプレート・グループ "<グループ名>" "<操作>" "<コンテナ>"
```

- ▶ **<グループ名>**は、作成、削除、または更新されたテンプレート・グループの名前です。
- ▶ **<操作>**は、次のいずれかになります。
 - ▶ **Created In** : オブジェクトのテンプレート・グループが作成された場所。
 - ▶ **Deleted from** : オブジェクトのテンプレート・グループが削除された場所。
 - ▶ **Updated in** : オブジェクトのテンプレートが更新された場所。
- ▶ **<コンテナ>**は、テンプレート・グループが含まれるコンテナの名前です。

テンプレート・リモート・オブジェクト

テンプレート・リモート・サーバが作成、削除、更新されると、ログ・エントリは次のようになります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : テンプレート・リモート "<リモート名>" "<操作>" "<コンテナ>"
```

- ▶ **<リモート名>**はリモート・サーバの名前です。
- ▶ **<操作>**は、次のいずれかになります。
 - ▶ **Created In** : リモート・エンティティが作成された場所。
 - ▶ **Deleted from** : リモート・エンティティが削除された場所。
 - ▶ **Updated in** : リモート・エンティティが更新された場所。
- ▶ **<コンテナ>**は、リモート・エンティティが含まれるコンテナの名前です。

テンプレート警告

警告のテンプレートが作成，削除，更新されると，ログ・エントリは次のようになります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : テンプレート警告 "<警告名>" "<操作>" "<コンテナ>"
```

- ▶ **<警告名>**は，テンプレート警告の定義対象となるオブジェクトの名前です。
- ▶ **<操作>**は，次のいずれかになります。
 - ▶ **Created In** : テンプレート警告が作成された場所。
 - ▶ **Deleted from** : テンプレート警告が削除された場所。
 - ▶ **Updated in** : テンプレート警告が更新された場所。
- ▶ **<コンテナ>**はテンプレート・コンテナの名前です。

テンプレート・モニタ

モニタのテンプレートが作成，削除，更新されると，ログ・エントリは次のようになります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : テンプレート "<モニタ名>" "<操作>" "<コンテナ>"
```

- ▶ **<モニタ名>**はモニタの名前です。
- ▶ **<操作>**は，次のいずれかになります。
 - ▶ **Created In** : モニタのテンプレートが作成された場所。
 - ▶ **Deleted from** : モニタのテンプレートが削除された場所。
 - ▶ **Updated in** : モニタのテンプレートが更新された場所。
- ▶ **<コンテナ>**は，テンプレートが含まれるコンテナの名前です。

警告

警告に対して実行された操作は次の形式になります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : 警告 "<警告名>"  
"<操作>" "<コンテナ>"
```

- ▶ **<警告名>**は警告の名前です。
- ▶ **<操作>**は、次のいずれかになります。
 - ▶ **Created In** : 新規警告が作成された場所。
 - ▶ **Updated in** : 新規警告が更新された場所。
 - ▶ **Deleted From** : 新規警告が削除された場所。
 - ▶ **Pasted On** : ユーザが警告間で情報をコピーしている。
- ▶ **<コンテナ>**は、警告のコンテナです。

レポート

レポート定義に対して実行された操作は次の形式になります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : レポート "<レポート名>" "<操作>" "<コンテナ>"
```

- ▶ **<レポート名>**はレポートの名前です。
- ▶ **<操作>**は、次のいずれかになります。
 - ▶ **Created In** : 新規レポートが作成された場所。
 - ▶ **Updated in** : 新規レポートが更新された場所。
 - ▶ **Deleted From** : 新規レポートが削除された場所。
 - ▶ **Pasted On** : ユーザがレポート間で情報をコピーしている。
- ▶ **<コンテナ>** : レポートのコンテナ。

〔グローバル検索と置換〕の操作

〔グローバル検索と置換〕の操作は次の形式になります。

YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : GSAR 操作を開始しました

YYYY-MM-DD HH:MM:SS - グローバル置換は、グループ "<グループ名>" を更新しました。

YYYY-MM-DD HH:MM:SS - グローバル置換は、レポート "<レポート名>" を更新しました。

YYYY-MM-DD HH:MM:SS - グローバル置換は、モニタ "<モニタ名>" を更新しました。

YYYY-MM-DD HH:MM:SS - グローバル置換は、警告 "<警告名>" を更新しました。

YYYY-MM-DD HH:MM:SS - グローバル置換は、プリファレンス "<プリファレンス名>" を更新しました。

YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : GSAR 操作を終了しました

開始操作と終了操作は、常にログに表示されます。エントリは、〔グローバル検索と置換〕で実行されたアクションに応じて表示されます。

ログインとログアウト

ログインとログアウトは次の形式になります。

YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : <メッセージ>

<メッセージ>は次のいずれかになります。

- Logged in.
- Logged out.

ログインの失敗

ログイン試行の失敗は次の形式になります。

YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ名とパスワードが合致しません。ログインできませんでした。

パスワードの変更

パスワード操作は、次の形式でログに記録され、表示されます。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : <メッセージ>
```

<メッセージ>は次のいずれかになります。

- ▶ Changed password successfully.
- ▶ Failed to change password.

カテゴリ

カテゴリに対して実行された操作は、次の形式でログに記録され、表示されます。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : カテゴリ "<カテゴリ名>" "<操作>"
```

- ▶ <カテゴリ名>はカテゴリの名前です。
- ▶ <操作>は、次のいずれかになります。
 - ▶ **Created**。新規カテゴリが作成された場所。
 - ▶ **Updated** : 新規カテゴリが更新された場所。
 - ▶ **Deleted** : 新規カテゴリが削除された場所。

SiteScope サーバ統計のユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ [一般] ページ (1233 ページ)
- ▶ [実行中モニタ] ページ (1234 ページ)
- ▶ [Perfex プロセス プール] ページ (1236 ページ)
- ▶ [SSH 接続] ページ (1238 ページ)
- ▶ [Telnet 接続] ページ (1241 ページ)

▶ [ログ ファイル] ページ (1242 ページ)

[一般] ページ

このページでは、現在実行中のモニタ数、実行中モニタの最大数、待機中のモニタ数、1 分あたりのモニタ実行数など、主要な SiteScope サーバ・パフォーマンス統計の概要を表示できます。現在実行中のモニタ・タイプのリスト、タイプごとの実行中インスタンス数も表示されます。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキスト > [一般] を選択します。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、各モニタ・パフォーマンス・データ・ページを表示できます。
関連タスク	1219 ページ「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1212 ページ「サーバ統計の使用」

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
[全体統計]	
[実行中モニタ数]	[現在] 列：更新頻度またはスケジュールに基づいて実行キューに入っており、現在実行中のスレッドを持つモニタ数が表示されます。つまり、これらのモニタは実行中であることを示します。 [最大数] 列と [次で測定] 列：実行されたモニタの最大数と、いつ実行されたかが表示されます。

UI 要素	説明
【待機中モニタ数】	【現在】 列：更新頻度またはスケジュールに基づいて実行キューに入っており、現在実行待機中のスレッドを持つモニタ数が表示されます。つまり、これらのモニタは実行中ではないことを示します。 【最大数】 列と 【次で測定】 列：いずれかの時点で発生した待機中モニタの最大数と、いつ発生したかが表示されます。
【実行モニタ数/秒】	【現在】 列：最後の 10 分間の監視における平均が周期的に表示され、モニタが実行される速度（1 分あたり）が追跡されます。 【最大数】 列と 【次で測定】 列：1 分あたりの実行中モニタの最大数と、いつ実行されたかが表示されます。
【タイプごとの実行中モニタ数】	
<実行中のモニタ・リスト>	現在実行中のモニタ・タイプのリストと、タイプごとの実行中インスタンス数が表示されます。



【実行中モニタ】 ページ

このページでは、実行中の SiteScope モニタ、最近実行されたモニタ、実行された時刻、実行で返された状態のリストを表示できます。

アクセス方法	【サーバ統計】 コンテキスト > 【実行中のモニタ数】 を選択します。
重要な情報	管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。
関連タスク	1219 ページ「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1212 ページ「サーバ統計の使用」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[実行中のモニタ数]	
[実行時間]	現在実行中のモニタの実行時間（秒単位）。
[スキップ]	現在実行中のモニタのスキップ数。スケジュールされている次の実行時までにはモニタのアクションが完了しなかった場合、SiteScope モニタはスキップとしてレポートされます。
[グループ名]	現在実行中のモニタが属するグループ。
[モニタ名]	現在実行中の SiteScope モニタの名前。モニタ名リンクをクリックすると、選択したモニタの [ダッシュボード] ページが開きます。実行時間が長引いているモニタやスキップは赤で表示されます。
[現在の状態]	現在実行中のモニタから返された状態。次に例を示します。
[最近のモニタの実行]	
[日付と時刻]	モニタが実行された日時。モニタは、実行を完了した日時の新しい順に表示されます。
[グループ名]	モニタが属するグループ。
[モニタ名]	SiteScope が実行したモニタの名前。
[現在の状態]	モニタが返した状態（ 正常 、 警告 、 エラー ）と測定値サマリの詳細。



[Perfex プロセス プール] ページ

このページには、プロセス・マネージャ・サマリ、perfex プールごとのプール統計と状態が表示されます。perfex は、プロセッサ・イベント・カウンタへのコマンド・ライン・インタフェースです。perfex は、指定されたコマンドの完了後に、さまざまなハードウェア・パフォーマンス・カウンタの値を出力します。perfex_dispatcher は、Microsoft Windows リソース・モニタに使用されるプロセスです。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキスト > [Perfex プロセス プール] を選択します。
重要な情報	管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。
関連タスク	1219 ページ「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1212 ページ「サーバ統計の使用」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[プロセス マネージャ サマリ]	
[分あたりの呼び出し数]	SiteScope サーバで 1 分あたりに発生するプロセス呼び出し数。
[二重の失敗]	SiteScope が 2 回連続してリモート・サーバへの接続を試みた後に接続に失敗した回数。接続の失敗の詳細については、モニタの実行ログとエラー・ログを確認してください。
[停止したプロセス]	SiteScope が最後に再起動してから、エラーが原因で停止したプロセスの数（プロセスがタイムアウトした場合など）。
[生成したプロセス]	SiteScope が最後に再起動してから、すべてのプールについて生成したプロセスの数。生成したプロセスと停止したプロセスの数が多い場合、[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [一般設定] > [perfex タイムアウト (秒)] で perfex タイムアウト値を増やします。

UI 要素	説明
【クリーン済みプロセス】	SiteScope は、最大アイドル時間を超えたプロセスを除去します。標準設定で、アイドル・プロセスは 10 分経過すると除去されます。アイドル・プロセスの最大時間は、 [プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [一般設定] > [perfex プロセスの最大アイドル時間 (分)] で変更できます。クリーニング・プロセスにより、SiteScope マシンのメモリ・フットプリントが改善されます。プロセスの除去が特に重要なのは、ネットワーク速度が低下して perfex の終了までに時間がかかる場合です。この場合、結果的により多くの perfex が作成されますが、それらは使用されません。
【プール統計 - perfex/perfex_dispatcher】	
【プロセス プール キューの長さ】	使用可能な perfex の現在待機中のモニタ数。この値は、perfex で実行中のモニタ数が多すぎる、または perfex プールが小さすぎることを示す場合があります。
【空きプロセスの平均待機時間 (ミリ秒)】	プロセスが使用可能になるまでの平均待機時間 (ミリ秒単位)。この値が 30,000 ミリ秒 (30 秒) を超えると、それ以降のモニタが失敗します。平均待機時間が長い場合は、プールのプロセス数を増やす必要があることを示します。
【平均実行時間 (ミリ秒)】	perfex の実行にかかる平均時間 (ミリ秒単位)。ここでは、次を示します。 ▶ ネットワーク速度。要求を送信し、サーバから応答を受信するのにかかる時間。 ▶ perfex の可用性。実行を完了し、perfex をプールに戻すまでにかかる平均時間。 ▶ perfex を使用しているモニタ数。
【アイドル プロセス】	現在アイドル状態のプロセスの数。
【使用中プロセス】	現在使用中状態のプロセスの数。

UI 要素	説明
[プロセス合計]	プロセスの総数（アイドル・プロセスと使用中プロセスの合計）。
[プロセス プールの最大サイズ]	プロセス プールあたりに使用可能な最大プロセス数。標準設定値は 200 です。プロセス・プールの最大サイズは、[インフラストラクチャ プリファレンス] > [一般設定] > [プールあたりの最大プロセス数] で変更できます。
[サーバタイムアウトを待機するプロセス]	呼び出しタイムアウトを過ぎたプロセス、接続を閉じるためにサーバ・タイムアウトを待機しているプロセス、またはプールに戻るために応答を待機しているプロセスの数。



[SSH 接続] ページ

このページには、リモート UNIX または Windows サーバに接続するためにセキュア・シェル（SSH）を使用する場合、SSH 統計および SSH 接続のサマリが表示されます。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキスト > [SSH 接続] を選択します。
重要な情報	管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。
関連タスク	1219 ページ「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1212 ページ「サーバ統計の使用」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[SSH 統計]	
[開いた合計]	開いた SSH 接続の総数。この数が [現在割り当て済みのリソース] の数を大きく上回っている場合は、設定の問題を示しています。次の状況が発生していないかを確認する必要があります。 ▶ 接続キャッシュが無効になった ▶ 不正なログインまたはパスワードが使用された ▶ リモート・サーバ・タイムアウトが短すぎる
[閉じた合計]	最後に SiteScope が再起動されてから閉じた SSH 接続の数。
[V1 を開くのに失敗した合計]	SSH バージョン 1 を使用して開くことに失敗した SSH 接続の数。標準設定では、V2 での接続を試みる前に、V1 を使用した接続が試行されます。この数が大きい場合は、問題が発生しているリモート・サーバで [SSH バージョン 2 のみを使用] オプションを選択することをお勧めします。

UI 要素	説明
[V2 を開くのに失敗した合計]	SSH バージョン 2 を使用して開くことに失敗した SSH 接続の数。この数が大きい場合は、リモート・サーバで正しいログインとパスワードが使用されたことを検証し、リモート・サーバ上の SSH バージョンを検証します (V1 または V2)。
[再利用]	最後に SiteScope が再起動されてから再利用された SSH 接続の数。
[現在割り当て済みのリソース]	現在開かれている SSH 接続の数。
[現在使用中]	現在開かれていて、実行中のモニタで使用されている SSH 接続の数。
[SSH 接続サマリ]	
<ホスト名>	各ターゲット・リモート・サーバについて、次の情報を表示する行があります。 ▶ マシン名。監視対象のリモート・サーバの名前。 ▶ 使用中セッション数。監視対象のリモート・サーバで開かれている SSH セッション数。 ▶ アイドル セッション数。監視対象のリモート・サーバのアイドル SSH セッション数。 ▶ 最大セッション数。監視対象のリモート・サーバの SSH セッション (アイドル状態および使用中) の最大数。 ▶ キューの長さ。キューにある SSH セッション数。 ▶ 平均待機時間。SSH セッションが空くまでの平均待機時間 (ミリ秒単位)。 注 : SiteScope で同時に使用できる SSH 接続数は 500 に制限されています。

[Telnet 接続] ページ

このページには、リモート UNIX または Windows サーバに接続するために telnet を使用する場合、telnet 統計が表示されます。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキスト > [Telnet 接続] を選択します。
重要な情報	管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。
関連タスク	1219 ページ「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1212 ページ「サーバ統計の使用」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

パラメータ	説明
Telnet 統計	
開いた合計	最後に SiteScope が再起動されてから開いた telnet 接続の数。
閉じた合計	最後に SiteScope が再起動されてから閉じた telnet 接続の数。
再利用	最後に SiteScope が再起動されてから再利用された telnet 接続の数。
現在割り当て済みのリソース	現在開かれている telnet 接続の数。

パラメータ	説明
現在使用中	現在開かれていて、実行中のモニタで使用されている telnet 接続の数。
Telnet 接続サマリ	
<ホスト名>	各ターゲット・リモート・サーバについて、次の情報を表示する行があります。 ▶ マシン名 : 監視対象のリモート・サーバの名前。 ▶ 使用中セッション数 : 監視対象のリモート・サーバで開かれている telnet セッション数。 ▶ アイドル セッション数 : 監視対象のリモート・サーバのアイドル telnet セッション数。 ▶ 最大セッション数 : 監視対象のリモート・サーバの telnet セッション（アイドル状態または使用中）の最大数。 ▶ キューの長さ : キューにある telnet セッション数。 ▶ 平均待機時間 : telnet セッションが空くまでの平均待機時間（ミリ秒単位）。 注 : SiteScope で同時に使用できる telnet 接続数は 500 に制限されています。



[ログ ファイル] ページ

このページでは、SiteScope ログ・ファイルを調査できます。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキスト > [ログ ファイル] を選択します。
関連タスク	▶ 1219 ページ「SiteScope サーバ統計の分析方法」 ▶ 1220 ページ「監査ログの設定方法」
関連情報	▶ 1216 ページ「ログ・ファイルの使用」 ▶ 1221 ページ「SiteScope ログ・ファイルの列」 ▶ 1222 ページ「監査ログのエントリ」 ▶ 1218 ページ「監査ログの制限事項」

【ログ ファイル】 テーブル

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
	列タイトルの矢印をクリックして列の並べ替え順序を変更します。並べ替え順序を示す矢印の左側に小さい上向き矢印と下向き矢印が表示されます。 注: [タイプ] 列のタイトルの矢印をクリックすると、ログ・タイプのリストが開き、表示するログ・タイプでリストをフィルタできます。フィルタをクリアするには、矢印をもう一度クリックして [(All)] を選択します。
【タイプ】	ログ・ファイルのタイプ。ログ・ファイルの各種タイプの詳細については、1243 ページ「ログ・ファイルのタイプ」を参照してください。
【ログ ファイル】	ログ・ファイルの名前。ログ・ファイルのリンクをダブルクリックすると、Web ブラウザでファイルが開きます。
【サイズ】	ログ・ファイルのサイズ。
【最終更新日】	ログ・ファイルが最後に変更された日時。

ログ・ファイルのタイプ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
【監査ログ】	実行された設定の変更（モニタ、テンプレート、警告の作成など）がすべて含まれているログへのリンクが含まれています。監査ログの詳細については、1217 ページ「監査ログの使用」を参照してください。
【BSM 統合ログ】	BSM にレポートするように SiteScope が設定されている場合、接続および監視データの転送に関する情報が含まれています。

UI 要素	説明
[日次ログ]	個々のモニタ測定値が含まれているログへのリンクがあります。SiteScope によって新規モニタ・ログが毎日作成され、24 時間以内に実行されたすべてのモニタが記録されます。これらのログは、SiteScope レポートのベースになります。 注：モニタの環境によっては、モニタ・ログのサイズが非常に大きくなる場合があります。サイズが大きくなると、Web ブラウザを使用して表示することが実質的にできなくなります。
[エラー ログ]	SiteScope の操作に関連するさまざまなメッセージが含まれています。このメッセージには、モニタ・アクションやデータ通信アクションの実行時に SiteScope で発生した可能性のあるエラーのレコードが含まれます。また、いつ SiteScope が停止または開始されたか、およびタスクを完了できないことが原因でスキップしているモニタがあるかどうかを示すメッセージも含まれます。
[実行モニタ ログ]	モニタの管理に関連する特定のモニタの実行やアクションの情報が含まれています。これは、モニタのトラブルシューティングに役立ちます。
[その他のログ] 次のようなさまざまなログ・ファイル・タイプがあります。	
[alert.log]	SiteScope で警告が生成されるたびに警告情報が記録されます。これは、警告アクションのトラブルシューティングや、警告が送信されたかどうかの確認に使用できます。
[monitorCount.log]	SiteScope で使用されているモニタおよびライセンス・ポイントの総数が計測されます。また、各タイプのサーバの状況モニタの数やライセンス・ポイントの使用状況も示されます。このログは、SiteScope が起動したとき、1 日に 1 回更新されます（変更ごとではありません）。このログ・ファイルは、[ヘルプ] > [SiteScope のバージョン情報] を選択していつでも更新できます。
[Operator.log]	SiteScope オペレータのアクション（主に確認機能の使用に関する情報）を記録するために使用する任意指定のログ・ファイル。このログは、1 つ以上のモニタに確認が追加された場合に作成されます。

UI 要素	説明
[Post Log File]	作成された SiteScope サーバへの HTTP Post 要求を記録するために使用する任意指定のログ・ファイル。このファイルを使用して、実行された管理アクションを追跡できます。このログは、 <code>_postLogFile=true</code> 設定が master.config ファイルに存在している場合にのみ有効になります。
[remotes_multi_test]	複数のリモートについてテストを行った場合に、リモート・サーバ接続のテスト結果を表示します。
[silent_deployment]	送信されたサイレント・デプロイメントの要求の詳細と対応するデプロイメントの結果が記録されます。また、失敗したサイレント・デプロイメントのエラー・メッセージも含まれます。このログは、SiteScope が起動したとき、1 日に 1 回更新されます（変更ごとではありません）。 注： CSV ファイルを使用してテンプレートをデプロイする場合、CSV ファイルで使用している英語以外の文字は、 silent_deployment ログ・ファイルではサポートされません。正しいエンコーディング・オプションが選択されている場合、デプロイメント値はユーザ・インタフェースに正しく表示されます。
[skip_monitor.log]	スキップされたモニタの詳細が記録されます。スキップが発生するたびに、スキップの日時、モニタの名前（および ID）、サーバ名、スキップ数、モニタの状態（モニタが無効になっていたかどうか）が含まれる行が追加されます。
[URL Details]	SiteScope URL モニタ・タイプによって作成された HTTP および HTTPS 要求のすべての内容を記録するために使用する任意指定のログ・ファイル。これは、URL モニタ・タイプおよび URL シーケンス・モニタ・タイプのトラブルシューティングに使用できます。 このログは、 <code>_urlDetailLogEnabled=true</code> 設定が master.config ファイルに存在している場合にのみ有効になります。これは、URL モニタ・タイプが含まれる個々のモニタ・グループの設定ファイルに <code>_urlDetailLogEnabled=true</code> 設定を追加して選択的に使用できます。

第 IX 部

警告とレポート

61

SiteScope 警告

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope 警告の概要 (1251 ページ)
- ▶ 警告アクションの作成 (1254 ページ)
- ▶ SiteScope 警告が送信される時期について (1255 ページ)
- ▶ 警告テンプレートのカスタマイズ (1260 ページ)
- ▶ データベース警告を使った作業 (1262 ページ)
- ▶ モニタの無効化 / 有効化警告を使った作業 (1263 ページ)
- ▶ 電子メール警告を使った作業 (1264 ページ)
- ▶ ログ・イベント警告を使った作業 (1265 ページ)
- ▶ ページャ警告を使った作業 (1266 ページ)
- ▶ 送信警告を使った作業 (1267 ページ)
- ▶ スクリプト警告を使った作業 (1268 ページ)
- ▶ SMS 警告を使った作業 (1272 ページ)
- ▶ SNMP トラップ警告を使った作業 (1274 ページ)
- ▶ サウンド警告を使った作業 (1275 ページ)

タスク

- ▶ 警告の設定方法 (1276 ページ)
- ▶ 警告メッセージ内容のカスタマイズ方法 (1279 ページ)
- ▶ 警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ方法 (1281 ページ)

参照情報

- ▶ SiteScope 警告テンプレートのディレクトリ (1282 ページ)
- ▶ SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ (1283 ページ)
- ▶ SiteScope 警告のユーザ・インタフェース (1292 ページ)

概念

SiteScope 警告の概要

SiteScope 警告は、警告定義の状態が検出された場合にトリガされる通知アクションです。警告を使用して、イベント、要素の状態の変更、インフラストラクチャのシステムの変更の通知を送信します。たとえば、「Good」から「Error」への変更（監視対象システムが応答しなくなったことを示します）が SiteScope モニタで検出された場合に警告がトリガされます。

警告定義には、警告をトリガできるモニタ、対象となる条件、送信する情報、警告の **recipient** を SiteScope に通知する設定が含まれています。たとえば、特定のシステムでエラー状態が検出されたときに、特定のサーバ・アドレスおよびエラー・コードを SiteScope からページまたは電子メールに送信するための指示が含まれる警告を作成できます。また、SiteScope では、スクリプト警告を使用して復旧スクリプトやアクション・スクリプトを自動的に起動することで、問題に対応することもできます。たとえば、システムが応答しなくなったことや、CPU 使用率が 100% に達したことがモニタで検出された場合に、スクリプトを実行してサーバを再起動するようにスクリプト警告を設定できます。警告のタイプの詳細については、1304 ページ「[アクション タイプ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

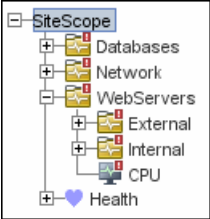
SiteScope 警告は、複数の方法で設定できます。警告は、1 つ以上の個々のモニタ、1 つ以上のモニタ・グループ、モニタとグループの組み合わせ、すべてのモニタおよびグループにグローバルに関連付けることができます。通常、グローバルまたはグループ全体に警告に関連付けるのが最も効率的ですが、必要な制御ができない可能性もあります。

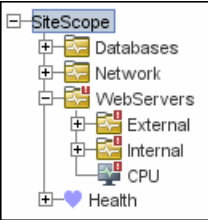
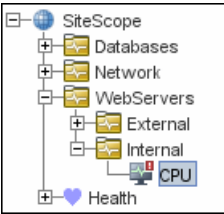
各警告定義ページの「**フィルタ設定**」機能を使用してフィルタ条件を作成すると、グローバル警告およびグループ警告をより詳細な条件で制御できます。フィルタ条件を使用して、特定のタイプのモニタや特定のテキスト文字列を含むモニタなど、フィルタ条件に一致したモニタに警告を限定することができます。たとえば、CPU モニタのフィルタ条件を使用してグローバル警告を作成すると、CPU モニタ・タイプの場合にのみトリガされる警告が作成されます。警告を設定する方法の詳細については、1292 ページ「SiteScope 警告ページ」を参照してください。

注：また，警告を使って作業する場合，SiteScope API を使用することもできます。詳細については，36 ページ「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。

警告の関連付けと考慮事項

次の表に，各種警告の関連付けと考慮事項の概要を示します。

警告のクラス	説明
グローバル警告	特定の SiteScope の任意のモニタによって，警告に定義されたカテゴリの状態がレポートされたときにトリガされる警告。 警告定義を作成した後に追加した新規グループおよび新規モニタは，自動的にこの警告に関連付けられます。 次に，SiteScope ノードに関連付けられたグローバル警告の例を示します。この警告は，すべてのモニタでトリガされます。  注：グローバル警告は SiteScope 内のすべてのグループおよびモニタでトリガされる可能性があるため，グローバル警告を作成することはお勧めしません。

警告のクラス	説明
グループ警告	関連付けられているグループ内のモニタによって、警告に定義されたカテゴリの状態がレポートされたときにトリガされる警告。 次に、グループ警告の例を示します。この警告は、グループ WebServers 内にあるモニタまたはサブグループでトリガされます。  警告定義を作成した後に関連付けられているグループ内に追加した新規サブグループおよび新規モニタは、自動的にこの警告に関連付けられます。
個別モニタ警告	関連付けられているモニタによって、警告に定義されたカテゴリの状態がレポートされたときにトリガされる警告。 次に、個別モニタ警告の例を示します。この警告は、関連付けられているモニタでのみトリガされます。  警告定義を作成した後に追加した新規モニタは自動的にこの警告に関連付けられませんが、警告定義を編集して追加できます。

SiteScope 警告の定義は、必要な数だけ作成できます。ただし、警告定義の数を最小限に抑えるように警告を計画および統合する必要があります。これにより、警告の管理が容易になり、警告のメッセージやアクションの重複を削減できます。

警告アクションの作成

SiteScope で警告スキームを作成する際には、警告条件を満たしたときにトリガされる警告アクションを作成します。警告アクションは、[警告時のアクション] ダイアログ・ボックスを使用して作成します。このダイアログ・ボックスでは、次の項目を決定します。

- ▶ 警告アクションのタイプ。使用可能な警告アクションの詳細なリストについては、1304 ページ「[アクション タイプ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- ▶ 送信する警告のタイプに関する設定。たとえば、電子メール警告アクションには受信者と受信者アドレスを定義できます。
- ▶ 警告をトリガする状態の条件。たとえば、モニタの状態が「エラー」から「使用不能」に変化した場合に警告アクションをトリガするように SiteScope に指示できます。
- ▶ 警告をトリガして送信する時期を決定するトリガ設定。詳細については、1255 ページ「SiteScope 警告が送信される時期について」を参照してください。

1 つの警告スキームに複数の警告アクションを作成できます。

- ▶ **複数の送信方法**：サウンド警告を送信する警告アクションと、電子メール警告を送信する別の警告アクションを作成できます。どちらも警告をトリガすると送信されます。
- ▶ **スケジュールに依存した送信**：同じ警告定義内に、異なるアクションのための異なるスケジュールを設定することもできます。たとえば、通常の業務時間中は電子メール警告アクションを送信し、夜間は SMS 警告アクションを送信するようにスケジュールを設定できます。どちらも同じ条件の変化によってトリガされますが、警告がトリガされる時間に応じて異なる時間に送信されます。
- ▶ **アクションの依存関係**：ほかの警告アクションに依存する警告アクションを作成することもできます。これにより、トリガ条件が最初に満たされたときにはある警告タイプを送信し、最初の警告タイプが複数回送信されている場合は別のタイプの警告のみを送信するように SiteScope に指示できます。

警告アクションをほかのモニタやグループにコピーして、ほかの警告で使用できます。ほかの警告の警告アクションを使用するには、警告をコピーしてほかのモニタまたはグループに貼り付けます。その警告のすべての警告アクションが新しい警告にコピーされます。その後で、新しいターゲット・モニタまたはグループに対してトリガする警告を編集できます。

異なる警告のタイプを使った作業の詳細については、1304 ページ「[アクションタイプ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

SiteScope 警告が送信される時期について

SiteScope では、関連付けられているモニタが警告トリガ条件に一致するとただちに警告がトリガされます。[警告時のアクション] ダイアログ・ボックスの [トリガの設定] オプションを使用すると、特定の条件が検出されたときに、それに関連して実際に警告が送信される時期を制御できます。たとえば、エラー条件が特定のモニタ実行数に対応する特定の間隔で継続して発生した後ののみ SiteScope から警告が送信されるように選択できます。これは、頻繁に変化する動的な環境パラメータを監視する、頻繁に実行されるモニタで使用する则便利です。場合によっては、1 つのエラー条件では介入が正当化されないことがあります。トリガの設定の詳細については、1322 ページ「トリガの頻度表示枠」を参照してください。

次の例では、異なる警告設定での、複数のモニタ実行でエラー条件が継続して発生した後の警告の送信方法について説明します。サンプリング間隔は、モニタの実行頻度に対応することに留意してください。モニタが 15 秒おきに実行され、3 回目のエラー読み取り後に警告が送信されるように設定されている場合、警告はエラー検出から 30 秒後に送信されます。モニタの実行間隔が 1 時間に 1 回で、同じ警告設定を使用する場合、警告は 2 時間後まで送信されません。

例 1 - 常時：条件が最低 N 回発生後

例 1a。最低 3 回のモニタ実行で条件が継続して発生した後、モニタがエラーになるたびに警告が送信されます。これを次の例 1b と比較してください。

警告設定	常時：条件が最低 3 回発生後								
サンプリング間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=3 警告！	c=4 警告！	c=5 警告！	c=0	c=1	c=2

例 1b。最低 3 回のモニタ実行で条件が継続して発生した後、モニタがエラーになるたびに警告が送信されます。連続するエラー読み取りの間にエラー以外の読み取りがモニタから 1 回返されたときに、カウントがリセットされることを示しています。これを前述の例 1a と比較してください。

警告設定	常時：条件が最低 3 回発生後								
サンプリング間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=0	c=1	c=2	c=3 警告！	c=0	c=0

例 2 - 1 回のみ：条件がちょうど N 回発生後

最低 3 回のモニタ実行でモニタがエラーになると、それ以降にエラーが返される期間に関係なく、警告が 1 回だけ送信されます。

警告設定	1 回のみ：条件がちょうど 3 回発生後								
サンプリング間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=3 警告！	c=4	c=5	c=6	c=7	c=8

例 3 - 最初に X 回、以後 Y 回ごとに繰り返す

例 3a。モニタが 5 回エラーになると警告が送信され、それ以降はエラー読み取りが連続して 3 回発生するたびに送信されます。これを次の例 3b と比較してください。

警告設定	最初に 5 回、以後 3 回ごとに繰り返す								
サンプリング間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=3	c=4	c=5 警告！	c=6	c=7	c=8 警告！

例 3b。 モニタが 3 回エラーになると警告が送信され、それ以降はエラー読み取りが連続して 5 回発生するたびに送信されます。これを前述の例 3a と比較してください。

警告設定	最初に 3 回、以後 5 回ごとに繰り返す								
サンプリング間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=3 警告！	c=4	c=5	c=6	c=7	c=8 警告！

例 4 - 複数の警告の設定：

複数の警告を作成し、モニタに複数の警告を関連付けることができるため、特定の状況で複数のアクションが実行されるように SiteScope に指示できます。たとえば、任意のモニタからエラー状態が返されるたびにユーザを呼び出すように SiteScope に指示する警告を作成できます。次に、ディスク領域モニタからエラーが返されるとサーバの /tmp ディレクトリにあるファイルを削除するスクリプト・ファイルを実行するように SiteScope に指示する別の警告を作成できます。ディスクがいっぱいになると、最初の警告定義によってユーザが呼び出され、2 つ目の警告定義によって /tmp ディレクトリにあるファイルを削除するスクリプトが実行されます。

SiteScope 警告は、モニタ読み取りの状態に変化があると生成されます。そのため、OK または警告条件、およびエラー条件に対し警告を設定できます。これを利用する 1 つの方法として、エラーと OK に 1 つずつ、2 つの警告を追加します。条件が 3 回検出された後に警告が送信されるように設定します。OK 警告には、**[モニタが以前に少なくとも 3 回エラー状態だった場合]** チェック・ボックスを選択します。これによって、モニタが何らかの理由で（手動、スケジュール、**依存**によって）無効にされた場合など、一致しない OK 警告が回避され、再起動されます。また、OK 警告が対応するエラー警告が送信された後にのみ送信されるよう使用することもできます。これらの 2 つの警告を使用すると、リンクまたはサービスが停止する（モニタが OK から error への変更を検出する）と呼び出しを受け、正常に戻る（モニタが error から OK への変更を検出する）と再び呼び出しを受けます。

次に、1 つのモニタで 2 つの警告を使用する例を示します。条件が少なくとも 3 回のモニタ実行で継続して発生した後のエラーに対して 1 回送信される **Alert on error**。少なくとも 1 回のエラーまたは警告間隔の後の「good」状態に対して 1 回送信される **Alert on OK**。

エラー の警告 の設定	対象： エラー		1 回のみ：条件がちょうど 3 回発生後						
OK の警告 の設定	対象： OK		1 回のみ：条件がちょうど 1 回発生後および Only alert if monitor was previously in error at least 3 times						
サンプリン グ間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=3 警告！	c=4	c=5	c=6	c=7	c=1 警告！

モニタの状態が変化すると、関連する状態のカウントがゼロにリセットされます。

警告テンプレートのカスタマイズ

SiteScope では、警告メッセージおよびレポートを生成するときにテンプレートを使用します。ほとんどの場合、警告の作成時には「警告」ページで使用するテンプレートを選択します。既存のテンプレートをカスタマイズするか、既存のテンプレートをコピーして独自のテンプレートを作成できます。テキストの追加や削除、プロパティ変数の追加（1283 ページ「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」のリストを参照）、テンプレートに含まれるテキストやプロパティ変数の順序の変更によって、警告テンプレートをカスタマイズできます。

注：新しいファイル名でカスタム警告テンプレートを作成することをお勧めします。SiteScope に装備されたいずれかの標準設定テンプレートを変更し、同じファイル名で変更を保存した場合、SiteScope を再インストールするか SiteScope インストールをアップグレードすると、その変更が失われる可能性があります。

カスタム警告テンプレートを SiteScope で使用できるようにするには、該当する警告タイプのテンプレートを含むディレクトリにカスタマイズした警告テンプレートを保存する必要があります。コピーおよびカスタマイズできる SiteScope 警告テンプレートが含まれるディレクトリ名のリストについては、1282 ページ「SiteScope 警告テンプレートのディレクトリ」を参照してください。

これらのグループのテンプレートは、プロパティ変数マーカを含むテキスト・ファイルです。これらのテンプレートを作成または変更するには、テキスト・エディタを使用します。示されたディレクトリに保存した新規テンプレートは、「警告」ページの該当する警告で使用可能になります。

警告テンプレート設定のカスタマイズの詳細については、1279 ページ「警告メッセージ内容のカスタマイズ方法」および1281 ページ「警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ方法」を参照してください。

例 - 電子メール警告に使用される標準テンプレート

次に、電子メール警告に使用される標準設定テンプレートの例を示します。最初のセクションは警告ヘッダです。警告ヘッダの最初の行には、問題を送信した SiteScope インストールへのリンクが含まれます。これにより、問題を報告した SiteScope インストールにアクセスできます。

このリンクの下には、発生した警告の概要を示すテキスト・ブロックが表示されます。このテキスト・ブロックには次の内容が含まれます。

- ▶ 警告をトリガしたモニタの名前
- ▶ モニタが属するグループ
- ▶ モニタにより報告された警告の状態
- ▶ 状態が報告される前にモニタを実行した回数を示すサンプル ID 番号
- ▶ エラーが発生した時刻

```
This alert is from SiteScope at <SiteScopeURL>
Monitor: <groupID>:<name>
Group: <group>
Status: <state>
Sample #: <sample>
Time: <time>
-----Detail -----
<mainParameters>
<mainStateProperties>
```

<山括弧> 内に表示される名前は、プロパティ変数マーカーです。警告の生成時に、SiteScope によってこれらのマーカーが警告をトリガしたモニタまたはモニタ・グループの変数の対応する値に置換されます。

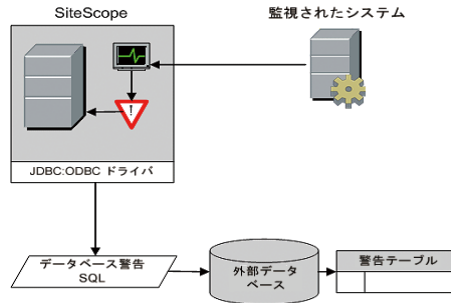
テンプレートのテキスト部分を追加または編集します。たとえば、上記のテンプレートの最初の行の文章を次のように変更できます。

```
<SiteScope URL>で Web 監視の警告が SiteScope によって生成されました
```

データベース警告を使った作業

データベース警告では、システム・フォールト・データやその他の状態の情報を任意の SQL 準拠データベースに転送できます。

次の図に、データベース警告を示します。



データベース警告タイプを使用するには、次のが必要です。

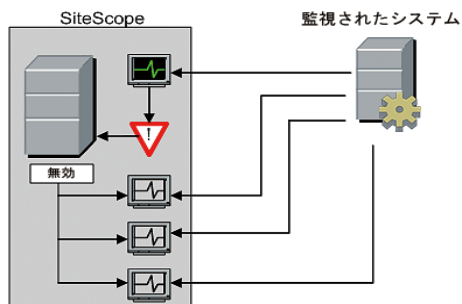
- ▶ SQL 準拠データベースへのアクセス。
- ▶ データベースに接続するために SiteScope サーバで使用する、適切なデータベース接続 URL。一般的なデータベース接続 URL の例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」セクションを参照してください。
- ▶ SiteScope サーバのデータベースと通信するために SiteScope アプリケーションで使用する、適切なデータベース・ミドルウェア・ドライバのインストール。一般的なデータベース・ドライバ設定の例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」セクションを参照してください。
- ▶ データベースに警告を入力するために SiteScope で使用される、対応する SQL ステートメントに一致するように作成および構造化されたデータベース・テーブル。

警告を設定する方法の詳細については、1276 ページ「警告の設定方法」を参照してください。

🔗 モニタの無効化 / 有効化警告を使った作業

モニタの無効化 / 有効化警告では、モニタの警告のトリガをオンおよびオフにできます。これは、一部のモニタでエラーが発生して不要な警告が生成されるサーバの保守やほかの活動を実行する場合に便利です。

次の図に、1 つのモニタに報告される条件に基づいて複数のモニタを無効化するための、警告タイプの例を示します。

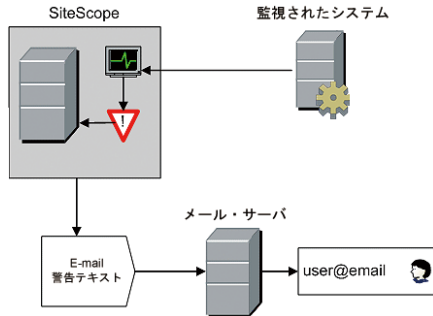


この警告タイプの機能は、モニタとモニタ・グループ間のグループ依存関係を作成する **「依存」** 機能と類似しています。重要な違いの 1 つは、対象のモニタまたはグループの状態が元の状態に戻っても、このタイプの警告によって無効化されたモニタは自動的に再有効化されない点です。モニタを無効化する、警告カテゴリが **「エラー」** の警告を 1 つ作成できます。次に、そのモニタを有効化する、警告カテゴリが **「正常」** の 2 番目の警告を作成できます。

警告を設定する方法の詳細については、1276 ページ「警告の設定方法」を参照してください。

🔗 電子メール警告を使った作業

次の図のように、電子メール警告では SiteScope から指定の電子メール・アドレスにイベント通知が送信されます。



電子メール警告タイプを使用するには、次が必要です。

- ▶ アクティブな電子メール・サーバへのアクセス
- ▶ 電子メール警告を受信できる 1 つ以上の電子メール・アカウント
- ▶ 外部の電子メール・サーバと連携できるように設定された SiteScope の電子メール・プリファレンス

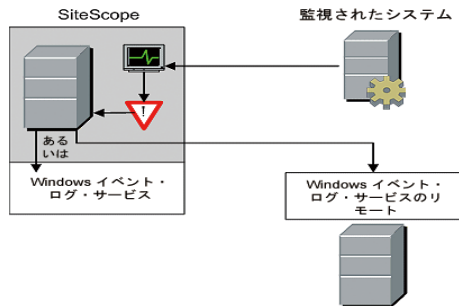
SiteScope の電子メール受信者の設定の詳細については、707 ページ「電子メール・プリファレンス」を参照してください。

警告を設定する方法の詳細については、1276 ページ「警告の設定方法」を参照してください。

🔵 ログ・イベント警告を使った作業

ログ・イベント警告を使用して、Windows アプリケーションのイベント・ログに記録されるイベントのタイプを拡張できます。これにより、通常は Windows オペレーティング・システムによって記録されないイベント・データをログ・クエリ・システムに転送できます。

次の図に、ログ・イベント警告を示します。



ログ・イベント警告タイプを使用するには、次のが必要です。

- ▶ Windows イベント・ログ・サービスへのアクセス。標準設定では、SiteScope が実行されているマシンのイベント・ログになります。警告定義を設定して、ログ・イベントを別のサーバに送信できます。
- ▶ Microsoft Windows プラットフォームで実行されている SiteScope。

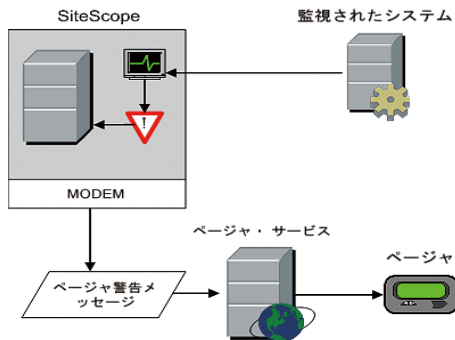
注意： SiteScope の Microsoft Windows イベント・ログ・モニタを使用している場合、無限ループ状態が発生してイベント・ログ・ファイルの空き領域がなくなる可能性があるため、ログ・イベント警告タイプを使用するときには注意が必要です。たとえば、Microsoft Windows イベント・ログ・モニタによって、ログ・イベント警告をトリガするイベントが検出され、新しいイベントがイベント・ログに書き込まれます。このことがイベント・ログ・モニタで検出され、ログ・イベント警告がトリガされます。このようなことが繰り返されると無限ループが発生します。これを回避するため、ログ・イベント警告タイプを Microsoft Windows イベント・ログ・モニタに関連付けないようにしてください。

警告を設定する方法の詳細については、1276 ページ「警告の設定方法」を参照してください。

🔗 ページャ警告を使った作業

ページャ警告を使用して、電子ページャにイベント通知を送信できます。これは、電子メールにアクセスできない場合に特に便利です。使用するページャのタイプやページャ・サービスの機能に応じて、問題や検出した条件についての簡略化した説明を含むページャ・メッセージを送信するように [ページャ警告] を設定できます。

次の図に、ページャ警告を示します。



ページャ警告タイプを使用するには、次が必要です。

- ▶ アクティブなページャ・サービスへのアクセス
- ▶ SiteScope サーバがページャ・サービスへの接続に使用できるモデム
- ▶ ページャ警告を受信できる 1 台以上のページャ
- ▶ モデムとページャ・サービスが連携するように設定された SiteScope ページャ・プリファレンス

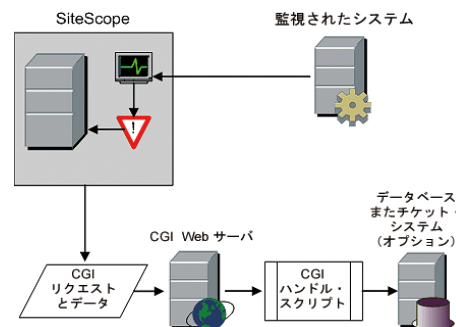
ページャ警告の使用を SiteScope に設定する方法の詳細については、717 ページ「ページャ・プリファレンス」を参照してください。

警告を設定する方法の詳細については、1276 ページ「警告の設定方法」を参照してください。

送信警告を使った作業

送信警告では、共通ゲートウェイ・インタフェース・プロトコル (CGI) を使用して、POST データが CGI 対応プログラムに転送されます。これは、トラブル・チケット・システムまたはレポーティング・データベースのフロント・エンドである別のサーバの CGI スクリプトにイベント・データを転送するために使用できます。この警告のタイプは、ほかのセキュリティ設定を変更せずに HTTP または HTTPS を使用し、ファイアウォールを通して警告情報を送信する手段を提供します。

次の図に、送信警告を示します。



送信警告タイプを使用するには、次のが必要です。

- ▶ SiteScope サーバと、CGI スクリプトまたはサーバを実行しているサーバの間の HTTP アクセス
 - ▶ 適切な CGI スクリプトまたはサーバへの CGI POST 要求の形式および構文
- 警告を設定する方法の詳細については、1276 ページ「警告の設定方法」を参照してください。

🔗 スクリプト警告を使った作業

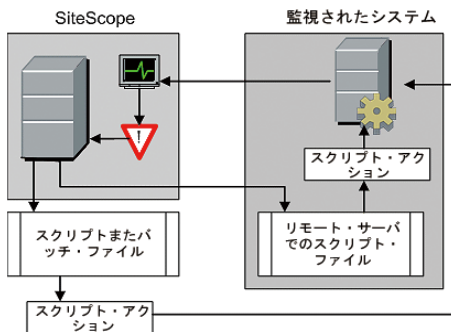
スクリプト警告では、自動的に復旧スクリプトを起動できます。スクリプト警告を設定して、サーバまたはサービスを再起動するコマンドを実行できます。

スクリプト警告の最も重要なコンポーネントは次のとおりです。

- ▶ スクリプト定義自体
- ▶ 警告をトリガするために割り当てられたモニタ
- ▶ 警告によって実行されるスクリプト

スクリプトの使用目的によっては、警告メッセージのテンプレートや、結果として生成される警告メッセージ・ファイルについても検討する必要があります。**[パラメータ]** 設定とスクリプト・テンプレートを使用して、データをスクリプトに渡すことができます。

次の図に、ローカル・スクリプトおよびリモート・ホストのスクリプトの、一般的なスクリプト警告の概念を示します。



スクリプト警告の定義またはインスタンスと、警告をトリガするモニタは、SiteScope のほかの警告やモニタと同様に処理されます。たとえば、リモート UNIX サーバで実行されている Web サーバを監視するモニタを作成するとします。スクリプトを実行するモニタに関連付けられたスクリプト警告を作成して、モニタでエラーが報告された場合に Web サーバ・プロセスを強制終了して再起動させることができます。

警告を設定する方法の詳細については、1276 ページ「警告の設定方法」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 1269 ページ「スクリプト・ファイルの管理」
- ▶ 1270 ページ「スクリプトへのデータの引き渡し」
- ▶ 1271 ページ「各種スクリプトの実行」
- ▶ 1271 ページ「スクリプトのトラブルシューティング」

スクリプト・ファイルの管理

スクリプト警告定義によって呼び出される、または実行されるスクリプト・ファイルを作成することは、SiteScope のこの自動化機能を使用する場合のもう 1 つの重要な手順です。スクリプトによって実行される特定のコマンドおよびアクションは、ユーザが決定できます。スクリプト・ファイルは、スクリプトを実行するオペレーティング・システムと互換性のあるプレーン・テキスト・ファイルで作成する必要があります。これは、SiteScope が実行されているサーバや、SiteScope からアクセスできるリモート・マシンになります。

SiteScope が実行されているマシンでスクリプトを実行するには、スクリプト警告が定義されている SiteScope マシンの **<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥scripts** ディレクトリにスクリプト・ファイルを保存する必要があります。

リモート・マシンでスクリプトを実行するには、SiteScope にリモート・マシンでの実行権限があるユーザ・アカウントの、ホーム・ディレクトリ・ツリーの **¥scripts** ディレクトリにスクリプトを保存する必要があります。

スクリプト実行時の現在の実行ディレクトリは、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥scripts¥** ディレクトリではなく **<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥classes¥** ディレクトリです。スクリプト自体によって実行されるコマンドの場合、相対実行ディレクトリは **<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥classes¥** になります。スクリプトによって呼び出されるほかのファイル・システム・コマンドまたはプログラムでは、現在のディレクトリに注意を払う必要がないようにフル・パスを使用してください。また、サーバ・システムの環境変数はスクリプトの実行に対応するように設定されていない場合があります。これも、スクリプトによって呼び出される実行可能ファイルにフル・パスを使用する理由の 1 つです。SiteScope ではなくコマンド・ラインからスクリプトを実行して動作させる場合、ユーザがエラーを特定する必要があります。

スクリプトへのデータの引き渡し

多数のパラメータがコマンド・ライン引数として SiteScope からスクリプトに渡されます。このオプションを使用して、スクリプトのアクションの変更に使用できるデータをスクリプトに渡すことができます。これにより、スクリプト警告に汎用性が備わります。標準設定では、SiteScope スクリプト警告からスクリプトに 7 個のコマンド・ライン引数が渡されます。コマンド・ライン引数は次のとおりです。

- ▶ スクリプト・ディレクトリのパス
- ▶ 警告の原因となったモニタの名前
- ▶ モニタの現在の状態
- ▶ 警告メッセージ・ファイルへのパス
- ▶ モニタの ID コード
- ▶ モニタのグループ
- ▶ 警告フォームの [パラメータ] テキスト・ボックスで指定した追加パラメータ

これらの標準設定の引数の 2 つによって、スクリプトからより多くのデータにアクセスできます。1 つは警告メッセージ・ファイルで、もう 1 つは [パラメータ] テキスト・ボックスです。警告メッセージ・ファイルは、スクリプト警告インスタンスに選択された警告テンプレートに基づいて SiteScope によって作成される、一時的なテキスト・ファイルです。作成または使用するテンプレートに応じて、警告メッセージ・ファイルには、カスタム情報や、警告をトリガしたモニタに固有のデータが含まれます。警告メッセージ・ファイルへのパスをスクリプトに渡すと、スクリプトからこのデータにアクセスできるようになります。

[パラメータ] テキスト・ボックスを使用して、スクリプトに渡す個々のモニタ・パラメータ・データを指定します。パラメータをスペースで区切って複数のパラメータを含めることができます。これにより、スクリプトに渡すパラメータの総数を効率的に増やすことができます。

スクリプト・ディレクトリのパスは、別のプログラムへの実行パスを設定する場合や、スクリプトによって作成される出力のディレクトリ・パスを設定する場合に役に立ちます。

スクリプトへのパラメータやデータの引き渡しの詳細およびその例については、1325 ページ「スクリプト警告のスクリプトの記述」を参照してください。

各種スクリプトの実行

非バッチ・スクリプト（VBScript や Perl など）をバッチ・ファイルにラッピングせずに実行できます（9.50 よりも前のバージョンの SiteScope ではできませんでした）。

- ▶ スクリプトを拡張子付きで表示するには、`_scriptMonitorExtensions` プロパティを **master.config** ファイルに追加します。たとえば、`.pl`、`.py`、または `.php` スクリプトを表示するには、次の形式を使用します。
`_scriptMonitorExtensions=.pl;.py;.php`
- ▶ スクリプトの拡張子を使用してスクリプト・インタープリタを実行するには、`_scriptInterpreters` プロパティを **master.config** ファイルに追加します。
`_scriptInterpreters=pl=c:/perl/perl.exe;py=c:/python/python.exe;php=c:/php/php.exe` のように `_scriptInterpreters` プロパティを **master.config** ファイルに追加します。

スクリプトのトラブルシューティング

このセクションでは、SiteScope スクリプトを使って作業する場合のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

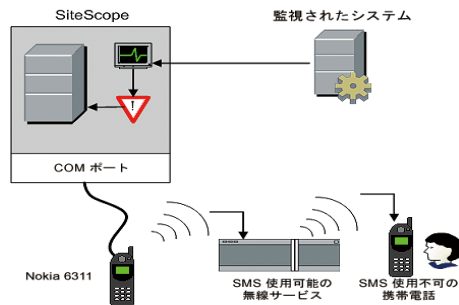
- ▶ スクリプトは、SiteScope サービスによって使用されるアカウントの権限で実行されます。スクリプトによっては、さらに権限が必要になります。この場合、[サービス] コントロール・パネルを使用して SiteScope のログイン・アカウントを変更し、SiteScope を再起動する必要があります。たとえば、サービスの再開またはリモート・マシンの再起動を行うスクリプトや、保護されたファイルをコピーするスクリプトがこれに該当します。
- ▶ スクリプトは SiteScope サービスによって実行されるため、ログイン時に実行される操作はスクリプトでは実行されない可能性があります。たとえば、マッピングされているドライブ、環境変数、ほかのログイン・スクリプトの項目は使用できません。また、キーボードなどの入力デバイスから対話形式の入力を受け付けることはできません。ユーザの確認や入力が必要なスクリプトのアクションまたはコマンドは、スクリプトがハングアップする原因になります。ユーザのアクションが必要な対話形式のコマンドをスクリプトに含めないでください。また、WIN32 アプリケーション（メモ帳など）を開く場合も、ユーザがアプリケーションを終了するまで待機してからスクリプトの実行が続行されるため、スクリプトがハングアップする原因になります。
- ▶ スクリプト警告の状態のサマリに引用符が含まれている場合、スクリプト警告の結果では、SiteScope によって引用符が二重引用符に変更されています。内容の照合フィルタを定義する場合は、このことを考慮する必要があります。

SMS 警告を使った作業

SMS 警告は、イベント条件を報告した SiteScope モニタの名前とそのモニタの状態をメッセージの内容として送信するように設計されています。ページ警告の代替手段として、モバイル・ユーザに電子メールを使用せずにイベント通知を送信するために使用します。

注：現時点では、SMS 警告を SiteScope から送信するには、このセクションで指定したハードウェアを使用する必要があります。SiteScope を使用して SMS メッセージを送信する代替方法については、HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ 技術情報 (<http://support.openview.hp.com/selfsolve/documents>) を参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログインする必要があります。

次の図に、SMS 警告を示します。



SMS 警告タイプを使用するには、次のが必要です。

- ▶ SMS 警告を送信する SiteScope マシンの空きシリアル通信ポート 1 個
- ▶ SiteScope を実行するマシンにワイヤレス伝送デバイスを接続するためのシリアル・ワイヤレス・デバイス間インタフェース・ケーブル (RS-232 アダプタ・ケーブル Nokia DLR-3P)
- ▶ 警告を送信する SiteScope マシンに接続された SMS 対応のワイヤレス・デバイス (インタフェース・ケーブルを使用する Nokia 6310 電話)

- ▶ SMS 警告を有効にするために必要なソフトウェア（通常、SiteScope 7.6c1 以降に付属）

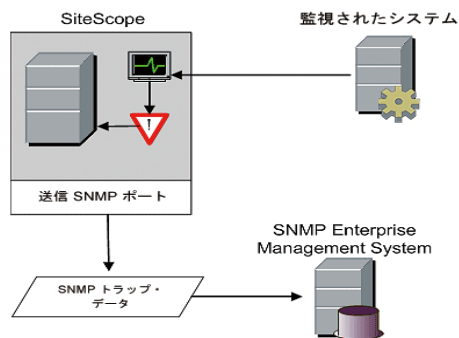
注 : Nokia Data Suite, Palm Hot Sync, そのほかの PDA ソフトウェアが SiteScope を実行するサーバ上で実行されていないことを確認してください。これらのプログラムは, COM ポートをバインドしてダイヤラを正常に動作できなくする可能性があります。

警告を設定する方法の詳細については, 1276 ページ「警告の設定方法」を参照してください。

SNMP トラップ警告を使った作業

SNMP トラップ警告は、任意のタイプの SiteScope モニタから SNMP 対応のホストまたは管理システムにイベント・データを転送します。つまり、SiteScope を使用して、独自の SNMP エージェントを持たないアプリケーションやシステムのイベントを監視および報告できます。たとえば、SNMP トラップ警告を使用して、SiteScope Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・ベースのモニタ・タイプまたは URL モニタから SNMP トラップの形式で測定値データを送信できます。

次の図に、SNMP トラップ警告を示します。



SNMP トラップ警告タイプを使用するには、次のが必要です。

- ▶ 適切な SNMP ネットワーク・ポートへのアクセス
- ▶ 適切な SNMP 管理コンソールと連携するように設定された SiteScope SNMP プリファレンス

SNMP 警告の使用を SiteScope に設定する方法の詳細については、727 ページ「SNMP プリファレンス」を参照してください。

警告を設定する方法の詳細については、1276 ページ「警告の設定方法」を参照してください。

サウンド警告を使った作業

サウンド警告は、警告の発生時に SiteScope が稼動しているマシンでサウンド・ファイルまたはオーディオ・ファイルを再生します。この警告は、サポート・スタッフが常駐する領域内に SiteScope サーバがあり、関連付けられたサウンド・ファイル进行处理できるサウンド・カードがサーバに装備されている場合にのみ効果があります。

または、SiteScope で提供する Web ページに警告オーディオ・ファイルを埋め込むように、SiteScope を設定できます。このオーディオ・ファイルは、メイン表示枠やグループの詳細ページなどの、モニタのエラー状態を含む SiteScope ページに埋め込まれます。これにより、ユーザ・インタフェース経由ですべての SiteScope クライアントにオーディオで通知できますが、これは SiteScope 警告とは異なるため、サウンド警告と同じ設定オプションは使用できません。エラー通知のオーディオ・ファイルを埋め込むように SiteScope を設定する方法の詳細については、HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報 (<http://support.openview.hp.com/selfsolve/documents>) を参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログインする必要があります。

警告を設定する方法の詳細については、1276 ページ「警告の設定方法」を参照してください。

タスク

警告の設定方法

このタスクでは、警告定義を設定する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1276 ページ「警告の作成」
- ▶ 1277 ページ「警告のテスト」
- ▶ 1278 ページ「警告のメッセージ内容のカスタマイズ」
- ▶ 1281 ページ「警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ方法」
- ▶ 1278 ページ「結果」

1 警告の作成

SiteScope ツリーのグループまたはモニタ・コンテナに、新規警告を作成するか、既存の警告をコピーすることができます。

- ▶ **新規警告を作成します。** 警告に関連付けるコンテナを右クリックし、**[新規作成]** > **[警告]** を選択します。警告の名前を入力し、警告をトリガするターゲットを選択して、警告アクションを設定します (**[警告アクション]** 表示枠で、**[新規警告アクション]** をクリックして **[警告時のアクション]** ウィザードを起動します)。各警告スキームに 1 つ以上の警告アクションを作成できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1294 ページ「**[新規警告]** / **[警告の編集]** ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- ▶ **警告定義をコピーします。** **[警告]** タブでコピーする警告を選択し、目的のグループまたはモニタ・コンテナに貼り付けます。警告ターゲットが、自動的に警告のコピー先のグループまたはモニタに変わります。

注意：警告定義をグループ・コンテナ間でコピーする場合、貼り付けた警告の **警告ターゲット** が自動的にリセットされて、警告の貼り付け先であるコンテナの子がすべて含まれます。警告の貼り付け後、割り当てた **警告ターゲット** が新しい警告コンテキストと全体的な警告計画に対し適切になるように、警告定義のプロパティを編集します。

2 警告のテスト

モニタ・ツリーの **警告** タブで警告を選択し、**テスト** をクリックします。テストするモニタ・インスタンスを選択し、**OK** をクリックします。ダイアログ・ボックスが開き、警告テストに関する情報が表示されます。

注：警告をテストするために、選択したモニタが、警告をトリガするように選択した状態カテゴリと同じ状態カテゴリを報告する必要はありません。たとえば、エラー条件によってトリガされる警告をテストする場合、テスト時点でモニタがエラーを報告する必要はありません。

3 警告のメッセージ内容のカスタマイズ

SiteScope 警告テンプレートをカスタマイズして、警告メッセージの内容と形式を変更します。タスクの詳細については、1279 ページ「警告メッセージ内容のカスタマイズ方法」を参照してください。

4 警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ

パーサで特定の区切り文字が必要な場合や、変数の識別に使用する括弧の区切り文字を変更する場合は、SiteScope 警告テンプレートのタグ・スタイルをカスタマイズします。タスクの詳細については、1281 ページ「警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ方法」を参照してください。

5 結果

警告がモニタ・ツリーの指定したコンテナに追加されます（ アイコンで示されます）。SiteScope ダッシュボードには、警告が 1 つ以上設定されている各グループまたはモニタの横に警告アイコン  も表示されます。

例：

SiteScope

Databases

Network

WebServers

External

Internal

CPU

CPU

Health

		<None>				現在の状態		»	
名前	状態	タイプ	ター...	サマリ	更新...	詳細			
選択した...									
CPU		CPU	Site...	1% ...	10/1...				
カウンタ (...)									
utilization				1%					
utilization c...				1%					
utilization c...				2%					

警告メッセージ内容のカスタマイズ方法

このタスクでは、SiteScope 警告テンプレートをカスタマイズして、警告メッセージの内容と形式を変更する方法について説明します。

- 1 SiteScope マシンの警告テンプレート・ディレクトリにアクセスできるテキスト・エディタを開きます。

SiteScope 警告テンプレートがあるディレクトリの名前のリストについては、1282 ページ「SiteScope 警告テンプレートのディレクトリ」を参照してください。

- 2 カスタマイズする警告のタイプの既存のテンプレート・ファイルをテキスト・エディタで開きます。
- 3 テンプレートを変更します。警告のタイプに応じて、テキストの追加や削除、テキストまたはプロパティ変数の順序変更、ほかのプロパティ変数の追加ができます。特定のプロパティを追加するには、該当のプロパティ変数名を山括弧のペア (<>) の間に入れてテンプレートに追加します。

特定のプロパティ変数のリストについては、1283 ページ「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。

- 4 該当の警告のタイプのディレクトリ内に、一意のファイル名で変更を保存します。

注：新しいテンプレートが [Action Type Settings Template] ドロップダウン・リストに追加されます。

例 - 電子メール警告メッセージの短縮

電子メール警告の長さを短くするには、不要な情報を表示するプロパティを削除します。たとえば、特定の警告の時間を報告する必要がない場合、`<time>` プロパティをテンプレートから削除できます。

ヒント: カスタマイズするテンプレートのベースとして、Typical テンプレート (標準設定) を使用することをお勧めします。

<SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.mail ディレクトリで、Typical テンプレート・ファイルを開きます。Time:`<time>` という行を削除します。新しいファイル名で変更を保存します。

例 - SNMP 警告メッセージの変更

SNMP モニタの状態ではなく、「Error」状態のカウンタとその値のリストが表示されるように SNMP 警告メッセージを変更できます。これにより、「Error」のしきい値を超えたカウンタのみがメッセージに表示されるようになり、ほかのすべてのカウンタは除外されます。

<SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.SNMP ディレクトリで、Default テンプレート・ファイルをテキスト・エディタで開きます。このファイルには次の行が含まれています。SiteScope%<group>%<name>%<sample>%<state>%

文字列 `<state>` を文字列 `<errorOnly>` に置換します。山括弧 (`<`, `>`) でテキストを囲んだ状態のままにしておきます。

注: 状態が「Warning」のカウンタのリストを表示するには、文字列 `<state>` を文字列 `<warningOnly>` に置換します。

<SiteScope のルート・ディレクトリ>%groups%master.config ファイルを編集して、次の行を追加します。`_errorOnlyDelimiter=`,

同様のエラー定義をほかにも追加します。

この例では、区切り文字はカンマ (,) ですが、スペース (" ") やタブ (¥t) も使用できます。**master.config** に追加した行は次のようになります。

```
_errorInsertHTML=
_errorOnlyDelimiter=,
_errorOnlyNewlineFormat=true
```

注：

文字列 <warningOnly> を使用する場合、**master.config** で文字列 **_warningOnlyDelimiter=<区切り文字>** を使用する必要があります。

master.config で **_errorOnlyDelimiter** が定義されていない場合、標準設定の区切り文字は空白 (" ") になります。

警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ方法

このタスクでは、たとえば、警告メッセージを処理するパーサで特定の区切り文字が必要な場合に、リストの項目間の区切り文字を変更する方法について説明します。変数の識別に使用される括弧の区切り文字を変更することもできます。これは、XML でメッセージを読み込み、XML 文字列で変数を置換する場合に便利です。

- 1 括弧の区切り文字を変更するテンプレート・ファイルを編集します。例：
 <SiteScope のルート・ディレクトリ>¥templates.mail¥.
- 2 テキスト・エディタを使用して、関連するファイルの最上部に次の行を追加します。

```
[Tag-Style:{}]
```

html の山括弧 (<>) の代わりに区切り文字として使用する文字（この例では {}）を、コロンの後に入力します。

- 3 Tag-Style 文字列で定義した新しい文字で関連する変数を囲むように編集します。例：{state}。

参照情報

SiteScope 警告テンプレートのディレクトリ

次に、コピーおよびカスタマイズできる SiteScope 警告テンプレートが含まれるディレクトリ名のリストを示します。

テンプレート・グループ	説明	場所
イベント・ログ	イベント・ログに書き込まれたデータの形式と内容。	<SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.eventlog
履歴	レポートが生成された受信者に通知する電子メール・メッセージの形式と内容。	<SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.history
電子メール	電子メールで送信された警告メッセージの形式と内容。	<SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.mail
テンプレート	ページ警告のグループ、詳細、場所、ページ形式、内容。	<SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.page
送信	送信警告によって CGI スクリプトに送信されたメッセージの形式と内容。	<SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.post
スクリプト	スクリプト警告がトリガされたときにスクリプトに送信されたメッセージの形式と内容。	<SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.script
SNMP	SNMP トラップがトリガされたときに SNMP によって送信されたメッセージの形式と内容。	<SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.snmp

SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ

次に、SiteScope 警告テンプレートに含まれる共通プロパティと共通イベント・マッピング属性のリストを示します。

使用可能なプロパティ	詳細／例	該当するテンプレート
<_customPropertiesValues>		
<_eventCategory>		NTEventlog
<_httpPort>		NTEventlog
<_webserverAddress>		NTEventlog
<alert>		XMLMail
<alertHelpURL>	警告トピックを含む、SiteScope ヘルプの URL。	NoDetails Traceroute WithDiagnostic
<alert::name>	警告の名前。	
<alert::id>	警告 ID。	
<alert::description>	警告定義のテキストの詳細。	
<alert::disableDescription>	無効操作の目的の詳細。	
<alert::actionID>	警告アクションの ID。	
<alert::actionName>	警告アクションの名前。	
<all>	モニタのすべてのプロパティ。	
<allThresholds>	電子メール警告でモニタのすべてのしきい値を返す。	
<automaticSeverityMapping>		
<bacMonitorID>	モニタの BSM ID	
<bacSessionID>	BSM プロファイル ID。	

使用可能なプロパティ	詳細／例	該当するテンプレート
<category>	モニタのカテゴリ。	Typical
<_classifier>	電子メール警告でモニタの最初のしきい値を返す。	
<currentTime>	警告の実行時刻。	
<diagnostic>		XMLMail
<diagnosticText>		Default User NoDetails WithDiagnostic
<diagnosticTraceRoute>		Traceroute WithDiagnostic
<errorCounterOnly>	エラー状態のモニタ・カウンタのリスト（カウンタ名のみを返す）。	
<errorOnly>	エラー状態のモニタ・カウンタのリスト（カウンタ名とカウンタ値を返す）。	Typical
<etiType>		
<etiValue>		
<eventID>		NTEventlog
<eventMachine>		NTEventlog
<eventSource>		NTEventlog
<eventType>		NTEventlog
<firstgroupdescription>		
<fullMonitorName>		
<FullGroupId>	SiteScope のルート・ディレクトリからグループへのフル・パス（¥SiteScope を除外）。	

使用可能なプロパティ	詳細／例	該当するテンプレート
<goodCounterOnly>	正常状態のモニタ・カウンタのリスト（カウンタ名のみを返す）。	Typical
<goodOnly>	正常状態のモニタ・カウンタのリスト。	Typical
<group>	モニタが含まれるグループの名前。	AllErrors Default Default User Irr-Default_mail_template NoDetails NTEventlogt PagerMail ShortMail Traceroute Typical WithDiagnostic XMLMail
<groupdescription>	グループの詳細	
<groupID>	グループの ID。	Default Typical WithDiagnostic XMLMail
<id>		XMLMail
<mainParameters>	パラメータとして設定されたメイン・モニタ・プロパティのリスト。	Default Default User NTEventlog WithDiagnostic

使用可能なプロパティ	詳細／例	該当するテンプレート
<mainStateProperties>	状態プロパティとして設定されたメイン・モニタ・プロパティのリスト。統計結果が「レポート」に表示されます。	Default Default User NTEventlog WithDiagnostic
<metric>		
<metricValue>		
<monitor>		XMLMail
<monitorName>		
<monitorType>		
<name>	モニタの名前 (as _name と同じ)。	Default Default User lr-Default_mail_template NoDetails NTEventlog PagerMail ShortestMail ShortMail ShortSubject Traceroute Typical WithDiagnostic XMLMail
<newSiteScopeURL>	SiteScope サーバの URL。	Default Typical
<newStatus>		
<oldStatus>		

使用可能なプロパティ	詳細／例	該当するテンプレート
<processtext>		
<remoteMachineName>	リモート・サーバ・マシンの名前。	
<sample>	サンプル番号。	AllErrors Default Default User NoDetails NTEventlog PagerMail ShortMail Traceroute Typical Typical.mail WithDiagnostic XMLMail
<secondaryParameters>	メインの状態プロパティとそのほかの内部プロパティのリスト。	
<secondaryStateProperties>	メインの状態プロパティとそのほかの内部プロパティのリスト。	
<server>		XMLMail
<sitescope>		XMLMail
<sitescopeURL>	管理者アクセス用の SiteScope のメイン・ページへの URL。	AllErrors Default User NoDetails Traceroute WithDiagnostic
<sitescopeuserurl>	ユーザ・アクセス用の SiteScope のメイン・ページへの URL。	

使用可能なプロパティ	詳細／例	該当するテンプレート
<state>	モニタが報告する状態文字列 (stateString と同じ)。	AllErrors Default Default User lr-Default_mail_template NoDetails PagerMail ShortestMail ShortMail ShortSubject Traceroute Typical WithDiagnostic XMLMail
<tag>	モニタのタグ (存在する場合)。	Default Default User lr-Default_mail_template NoDetails NTEventlog PagerMail ShortestMail ShortMail ShortSubject Traceroute Typical WithDiagnostic XMLMail

使用可能なプロパティ	詳細／例	該当するテンプレート
<tag:[tagName]>	警告をトリガしたモニタに割り当てられた [tagName] を含む検索 / フィルタ・タグの値を表示します。 例： 値 Apache がモニタに割り当てられた AppServer というタグがあり、モニタ用に設定された警告テンプレートに <tag:AppServer> を含めます。警告がトリガされた場合、警告テキストの新しいプロパティが Apache に置き換えられます。	
<targetHost>		
<thresholdCrossed>		
<time>	モニタが最後に実行を完了した時間。	AllErrors Default Default User Ir-Default_mail_template NoDetails NTEventlog Traceroute Typical WithDiagnostic XMLMail
<time-date>	モニタが完了した時間の日付部分。	
<time-time>	モニタが完了した時間の時刻部分。	

使用可能なプロパティ	詳細／例	該当するテンプレート
<warningCounterOnly>	警告状態のモニタ・カウンタのリスト（カウンタ名のみを返す）。	
<warningOnly>	警告状態のモニタ・カウンタのリスト（カウンタ名とカウンタ値を返す）。	Typical

電子メール・レポートのプロパティ

次のプロパティは、<SiteScope>\templates.history ディレクトリに保存されている電子メール・テンプレートに適用されます。

使用可能なプロパティ	説明
_httpPort	SiteScope へのアクセスに使用するポート番号
_webserverAddress	SiteScope サーバの IP アドレス
basicAlertSummary	トリガされた警告に関する基本情報
detailAlert Summary	警告に関する詳細な情報
reportIndexURL	管理レポート用の索引ページへの URL
reportPeriod	このレポートの対象期間
reportURL	HTML バージョンの管理レポートへの URL
summary	サマリと測定値情報
textReportURL	SiteScope で生成されたカンマ区切りのファイルへの URL
userReportIndexURL	ユーザがアクセス可能なレポート用の索引ページへの URL
userTextReportURL	ユーザがアクセス可能なレポートで生成されたカンマ区切りのファイルへの URL

使用可能なプロパティ	説明
userXMLReportURL	ユーザがアクセス可能なレポートで生成された XML ファイルへの URL
xmlReportURL	管理レポートで生成された XML ファイルへの URL



SiteScope 警告のユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ SiteScope 警告ページ (1292 ページ)
- ▶ [新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス (1294 ページ)
- ▶ [アクション タイプ] ダイアログ・ボックス (1304 ページ)
- ▶ [警告アクション] ダイアログ・ボックス - [アクション タイプの設定] 表示枠 (1307 ページ)



SiteScope 警告ページ

このページには、選択したモニタまたはグループに関連付けられている警告に関する情報が表示されます。このページを使用して、警告定義を追加、編集、削除します。

アクセス方法	モニタ・ツリーまたはテンプレート・ツリーで、警告の記号  が横に表示されているグループまたはモニタを選択します。右側の表示枠で [警告] タブをクリックすると、オブジェクトに設定されている警告が表示されます。
重要な情報	▶ 特定のモニタまたはグループに対して作成された警告は、オブジェクトの [モニタの警告] / [グループの警告] リストに表示されます。ターゲットのモニタまたはグループは、[モニタに関連付けられた警告] / [グループに関連付けられた警告] リストに表示されます。 ▶ 各テーブル・列は、列タイトルを右クリックすると昇順または降順に並べ替えられます。上矢印または下矢印は、並べ替え順序を示します。 ▶ また、警告を使って作業する場合、SiteScope API を使用することもできます。詳細については、36 ページ「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。
関連タスク	1276 ページ「警告の設定方法」
関連情報	1251 ページ「SiteScope 警告の概要」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
	子の警告を表示： 選択したノードの直接の子の警告のみを表示します。
	すべての子孫の警告を表示。 選択したノードのすべての子孫の警告を表示します。
	新規警告： [新規警告] ダイアログ・ボックスが開き、警告を設定して、選択した SiteScope グループまたはモニタに追加できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1294 ページ「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 注： このボタンは、[モニタの警告] / [グループの警告] テーブルでのみ使用できます。
	警告の編集： [警告の編集] ダイアログ・ボックスが開き、選択した警告のプロパティを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1294 ページ「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	コピー。 警告がコピーされます。 注： このボタンは、[モニタの警告] / [グループの警告] テーブルでのみ使用できます。
	貼り付け。 ツリーの選択した場所に警告を貼り付けます。 注： このボタンは、[モニタの警告] / [グループの警告] テーブルでのみ使用できます。
	警告の削除。 ツリーから警告を削除します。
有効化	有効化。 モニタ / グループに関連付けられている警告が有効になります。
無効化	無効化。 モニタ / グループに関連付けられている警告が無効になります。
	テスト。 選択したサーバの警告定義をテストします。
	すべて選択。 表示されている警告がすべて選択されます。

UI 要素	説明
	選択を解除。 選択をクリアします。
[名前]	SiteScope で認識される警告の名前。
[状態]	警告の状態（有効/無効）。
[詳細]	警告の詳細。
[アクション名]	[アクション タイプ] ダイアログ・ボックスの警告アクションの名前。

新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、SiteScope、グループ、またはモニタの警告を定義できます。

アクセス方法	警告を定義する SiteScope、グループ、またはモニタを右クリックし、 [新規作成] > [警告] を選択するか、 [警告] タブ（モニタまたはテンプレート・ビュー）で既存の警告を選択して、 [警告の編集]  ボタンをクリックします。
重要な情報	赤いアスタリスク（*）が付いたボックスは必須指定です。
関連タスク	▶ 1276 ページ「警告の設定方法」 ▶ 171 ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」
関連情報	▶ 1251 ページ「SiteScope 警告の概要」 ▶ 1304 ページ「[アクション タイプ] ダイアログ・ボックス」 ▶ 1307 ページ「[警告アクション] ダイアログ・ボックス - [アクション タイプの設定] 表示枠」 ▶ 735 ページ「共通イベント・マッピング」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
【名前】	警告定義の名前。SiteScope の表示でこの警告定義を識別するために使用します。
【警告の説明】	警告の詳細。この詳細はほかのコンテキストには表示されません。警告の編集時にのみ表示されます。

警告ターゲット

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
【警告ターゲット】	ショートカット・メニュー・ツリーを使用して、この警告をトリガするためのグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択します。ショートカット・メニューには、現在選択されているオブジェクトおよびすべての子オブジェクトが含まれます。現在のオブジェクトの横にあるボックスをチェックすると、チェックしたオブジェクト内のすべてのオブジェクトにこの警告が関連付けられます。個々のオブジェクトを 1 つ以上チェックすると、選択したオブジェクトにこの警告定義が関連付けられます。 あるいは、SiteScope のルートを選択し、フィルタに設定された条件に一致するオブジェクトに警告の対象を制限する警告フィルタ・ルールを [フィルタ設定] で定義することもできます。

警告アクション

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
	新規警告アクション。 [アクション タイプ] ダイアログ・ボックスが開き、警告をトリガしたときに実行するアクションを定義できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1304 ページ「[アクション タイプ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	警告アクションの編集。 [アクション タイプ] ダイアログ・ボックスが開き、警告アクションを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1304 ページ「[アクション タイプ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	警告アクションの削除。 警告アクションを削除します。関連付けられたモニタは無効にはなりません。
	重複。 警告アクションを複製します。
	すべて選択。 表示されている警告アクションをすべて選択します。
	選択を解除。 選択をクリアします。

UI 要素	説明
 <警告アクション・タイプ・アイコン>	警告に定義されているアクションの種類を示します。
	 データベース : 問題の詳細を含む警告メッセージを SQL データベースへのレコードとして送信します。
	 モニタの無効化/有効化 。警告の生成を手動で制御します。
	 電子メール : エラーまたは警告の詳細を含む電子メール・メッセージを、1 つ以上の電子メール・アドレスに送信します。
	 ログ・イベント : Microsoft Windows イベント・ログにイベントのログを記録します。
	 ページャ : SiteScope が特定の条件を検出したことを通知するメッセージをページャに送信します。
	 ポスト : モニタ条件の詳細を含む CGI POST を CGI スクリプト、サーブレット、またはそのほかの CGI 対応プログラムに送信します。
	 スクリプト : SiteScope は、警告トリガ条件が検出されるとスクリプトまたはバッチ・ファイルを実行できます。呼び出されるスクリプトまたはバッチ・ファイルは、コマンド・ライン入力から呼び出し可能なシステム・コマンドまたは任意の言語のプログラムを実行できます。
	 SMS : ショート・メッセージ・サービス (SMS) を使用して、短いテキスト・メッセージを SMS 対応の携帯電話やワイヤレス・デバイスに送信します。
	 SNMP トラップ : SNMP ホストまたは管理コンソールに SNMP トラップを送信します。
	 サウンド 。イベントが検出されると、SiteScope が稼働するマシン上でサウンドまたはオーディオ・ファイルを再生します。
[名前]	警告がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告の名前ではありません。

UI 要素	説明
[カテゴリ]	[状態トリガ] 表示枠で選択した、警告アクションをトリガするカテゴリ。[状態トリガ] のユーザ・インタフェースの詳細については、1321 ページ「[状態トリガ] 表示枠」を参照してください。
[いつ]	[トリガの頻度] 表示枠で選択した、いつ警告を送信するかを示すスケジュール。[トリガの頻度] のユーザ・インタフェースの詳細については、1322 ページ「トリガの頻度表示枠」を参照してください。
[スケジュール]	[アクション タイプの設定] 表示枠で選択した毎日または毎週のスケジュール。[アクション タイプの設定] のユーザ・インタフェースの詳細については、1307 ページ「[警告アクション] ダイアログ・ボックス - [アクション タイプの設定] 表示枠」を参照してください。
[ターゲット]	アクション・タイプのターゲット・データが含まれます。タイプに応じて、ターゲット列には次の内容が含まれます。 ➤ 電子メール：[電子メールの送信先] セクションで選択した電子メール受信者が含まれます。 ➤ 無効化または有効化。[ターゲット] リストで選択したターゲットが含まれます。 ➤ データベース：[データベース接続 URL] ボックスで入力した URL が含まれます。 ➤ ログ イベント：[電子メールの送信先] セクションで選択したログ・イベント受信者が含まれます。 ➤ ページャ：[ページャ警告受信者] リストで選択したページャ受信者が含まれます。 ➤ ポスト：[フォーム送信先 URL] ボックスで入力した URL が含まれます。 ➤ スクリプト：[スクリプト] ボックスで選択したスクリプトが含まれます。 ➤ SMS：[SMS 番号] ボックスで入力した SMS 番号が含まれます。 ➤ SNMP トラップ：[SNMP トラップ] リストで選択した SNMP トラップが含まれます。 ➤ サウンド。(この列は空です)。

HP Operations Manager 統合設定

注： [HP Operations Manager 統合設定] 表示枠は、HP Operations エージェントをインストールし、HPOM/BSM サーバに接続しており、[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックス ([**プリファレンス**] > [**統合プリファレンス**] > [**HP Operations Manager 統合**]) で [**共通イベント統合の有効化**] を選択している場合にのみアクティブになります。詳細については、171 ページ「SiteScope を使用して HPOM または BSM にイベントを送信する方法」を参照してください。

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
【イベント送信】	警告がトリガされると HPOM/BSM サーバへのイベントの送信を有効にします。 標準設定値： 選択されている
【モニタのイベントマッピングの使用】	選択した場合、警告がトリガされると、SiteScope は警告をトリガしたモニタに関連付けられたイベント・マッピング・テンプレートを使用してイベントを送信します。 クリアした場合、SiteScope は警告イベント属性値を使用してイベントを送信します。これらの値は、選択した警告イベント・マッピング・プリファレンスに従って入力されます。次の [イベントマッピング] 設定は、警告イベント・マッピングが使用される場合にのみ使用できます。 標準設定値： 選択されていない

UI 要素	説明
[イベント マッピング]	モニタ・インスタンスのイベントの送信に使用するイベント・マッピング・テンプレート。このテンプレートには、警告および警告をトリガしたモニタ（測定値レベルの実行時データは使用不可能）の SiteScope 実行時データとイベント送信に使用される属性値のマッピングが含まれます。 必要なイベント・マッピング・テンプレートを選択するか、標準設定のマッピングを使用します。[新規] または [編集] をクリックして共通イベント・マッピング・ダイアログ・ボックスを開き、新しいイベント・プリファレンスを設定するか、既存のイベント・プリファレンスを変更します。ユーザ・インタフェースの詳細については、741 ページ「[新規 イベント・マッピング] / [イベント・マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 注： この設定は、[モニタのイベント マッピングの使用] がクリアされている場合にのみアクティブになります。
[Event Type Indicator]	このイベントと一緒に送信される警告の event type indicator を入力できます。これは、測定値とインジケータ間のマッピングです。この設定は任意で、インジケータがなくてもイベントは送信されます。 トリガされた警告の CI タイプは、警告（グループの警告や測定値ごとに CI タイプをレポートするモニタの警告）の設定時に毎回わかっているわけではないので、インジケータを手動で入力すると役に立ちます。 注： 警告インスタンスは複数のモニタに関連付けられているか、複数のカウンタによってトリガされる場合があるため、インジケータは自動的に解決できません。
[Event Type Indicator state]	このイベントと一緒に送信されるイベント・タイプ・インジケータの状態を入力できます。これは、この状態変化を発生させるしきい値にマップされているイベント重大度レベル（不明、正常域、注意域、警戒域、重要警戒域、危険域）です。このフィールドの設定は任意で、インジケータ状態がなくてもイベントは送信されます。 注： 警告インスタンスは複数のモニタに関連付けられているか、複数のカウンタによってトリガされる場合があるため、インジケータ状態は自動的に解決できません。

警告の有効化/無効化

警告の生成を手動で制御するために使用します。監視対象のシステムが保守のためにオフラインになっている場合や、警告の受信者が一定期間受信不可能な場合などに役立ちます。

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
【警告を有効化】	無効化された警告アクションが上書きされ、定義した条件に基づいて警告が実行されるようになります。
【警告を無期限に無効化】	このラジオ・ボタンをクリアして警告定義を更新するまで、警告の条件に一致しても SiteScope で警告アクションが実行されないようになります。 注： このオプションを使用すると、一時的な条件に対応するために警告が無効になっている場合、予想される警告機能が失われる場合があります。後でこの状態を確認し、必要に応じて警告定義を手動で有効にしてください。
【警告を次の時間設定で無効化：<期間>】	指定した期間、警告条件が満たされても警告アクションの実行を停止します。警告はすぐに無効になり、期間が終了すると再度有効になります。
【1 回限定のスケジュールに基づいて無効化 開始 <時刻> 終了 <時刻>】	指定した期間、条件に一致しても SiteScope で警告アクションが実行されなくなります。警告は、この期間の開始時に無効になり、この期間を過ぎると再度有効になります。
【無効化の説明】	無効操作の目的の詳細（任意指定）。

フィルタ設定

入力した基準に一致するモニタのみに警告アクションを制限するフィルタ条件を作成します。大量のモニタに警告を定義しておき、選択したリスト内の特定のモニタのみが実際に警告をトリガするようにフィルタを適用できます。これによって警告定義の作成と警告管理を簡素化できます。警告のフィルタリングを無効にするには、該当するフィールドをクリアして、警告定義を更新します。

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[名前の一致]	名前の一部に特定のテキストが含まれるものを除き、関連付けられたグループまたはモニタすべてに対する警告を停止します。 ▶ 名前の文字列パターンを照合するための正規表現をこのテキスト・ボックスに入力します。詳細については、276 ページ「正規表現の概要」を参照してください。 ▶ フィルタ基準として使用するモニタ名文字列の全部または一部を入力します。たとえば、文字列「URL:」を入力すると、この警告は名前に「URL:」が含まれるモニタに制限されます。 注：照合では大文字と小文字が区別されます。
[状態の一致]	特定の状態テキストを返したものを除き、関連付けられたモニタすべてに対する警告を停止します。 ▶ 警告をトリガするモニタの状態テキストに表示される文字列を入力します。たとえば、テキスト「timeout」を入力すると、この警告に関連付けられ、タイムアウト状態になっているモニタのみが警告をトリガします。 ▶ 状態の文字列パターンを照合するための正規表現をこのテキスト・ボックスに入力します。詳細については、276 ページ「正規表現の概要」を参照してください。 注：照合では大文字と小文字が区別されます。

UI 要素	説明
[モニタ タイプ の一致]	警告アクションを, この警告に関連付けられている一連のモニタの中の特定のモニタ・タイプに制限します。[モニタ タイプ リスト] から対象とするモニタ・タイプを選択し, [選択されたモニタ タイプ リスト] ボタンに移動します。

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、108 ページ「検索/フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
[タグの追加]	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、119 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。



【アクション タイプ】 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、警告がトリガされたときに実行されるアクションを選択できます。

アクセス方法	警告を定義する SiteScope、グループ、またはモニタを右クリックし、 【新規作成】 > 【警告】 を選択するか、 【警告】 タブ（モニタまたはテンプレート・ビュー）で既存の警告を選択して、 【警告の編集】  ボタンをクリックします。 【新規警告】 または 【警告の編集】 ダイアログ・ボックスの 【警告時のアクション】 セクションで、 【新規警告アクション】  ボタンをクリックします。
重要な情報	▶ 一度に選択できる警告のタイプは 1 つのみです。 ▶ 警告を編集する場合、アクションの種類は変更できません。たとえば、警告のアクションの種類が電子メールの場合、SMS には変更できません。
関連タスク	1276 ページ「警告の設定方法」
関連情報	▶ 1251 ページ「SiteScope 警告の概要」 ▶ 1294 ページ「【新規警告】 / 【警告の編集】 ダイアログ・ボックス」 ▶ 1307 ページ「【警告アクション】 ダイアログ・ボックス - 【アクション タイプの設定】 表示枠」

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[データベース]	問題の詳細を含む警告メッセージを SQL データベースへのレコードとして送信します。次にデータベース・ツールを使用して、監視データのより詳細な記録、並べ替え、レポート作成を提供できます。データベース警告の詳細については、1308 ページ「データベース警告のプロパティ」を参照してください。
[モニタの無効化/有効化]	別のモニタでの状態の変化に基づいて、モニタまたはモニタ・グループを自動的に有効または無効にします。 注： このアクションは、テンプレート警告の作成時には使用できません。モニタの無効化 / 有効化警告の詳細については、1310 ページ「モニタの無効化 / 有効化警告のプロパティ」を参照してください。
[電子メール]	1 つ以上の電子メール・アドレスに、警告をトリガした条件の詳細を含む電子メール・メッセージを送信します。電子メール警告の詳細については、1311 ページ「電子メール警告のプロパティ」を参照してください。
[ログ イベント]	Microsoft Windows イベント・ログにイベントのログを記録します。 イベント・ログのエントリは、イベント・ビューアで表示、およびイベント・ログから中央管理された警告を実行するほかのソフトウェア・ユーティリティで使用できます。ログ・イベント警告の詳細については、1313 ページ「ログ・イベント警告のプロパティ」を参照してください。
[ページャ]	SiteScope が特定の条件を検出したことを通知するメッセージをページャに送信します。ページャ警告の詳細については、1314 ページ「ページャ警告のプロパティ」を参照してください。
[ポスト]	CGI POST メッセージを CGI スクリプト、サーブレット、その他の CGI 対応プログラムに送信します。メッセージには、モニタ条件の詳細が含まれます。送信警告の詳細については、1315 ページ「送信警告のプロパティ」を参照してください。

UI 要素	説明
[スクリプト]	警告条件に一致した場合に SiteScope でスクリプトまたはバッチ・ファイルを実行できます。スクリプトまたはバッチ・ファイルで、コマンド・ライン・エントリから呼び出せる任意の言語でシステム・コマンドまたはプログラムを実行できます。 この警告を使用して、重大状態または障害に自動的に対応する復旧スクリプト（サーバの再起動やファイルのコピーなど）を実行できます。スクリプト警告の詳細については、1316 ページ「スクリプト警告のプロパティ」を参照してください。
[SMS]	ショート・メッセージ・サービス（SMS）を使用して、短いテキスト・メッセージを SMS 対応の携帯電話やワイヤレス・デバイスに送信します。SMS 警告の詳細については、1318 ページ「SMS 警告のプロパティ」を参照してください。
[SNMP トラップ]	SNMP 管理コンソールまたはホストに SNMP トラップを送信します。SNMP エージェントでは通常サポートされないシステム・パラメータの SNMP レポートが使用可能になります。SNMP トラップ警告の詳細については、1319 ページ「SNMP トラップ警告のプロパティ」を参照してください。
[サウンド]	イベントが検出されると、SiteScope が稼働するマシン上でサウンドまたはオーディオ・ファイルを再生します。サウンド警告の詳細については、1320 ページ「サウンド警告のプロパティ」を参照してください。

[警告アクション] ダイアログ・ボックス - [アクション タイプの設定] 表示枠

[警告アクション] ダイアログ・ボックスでは、警告のタイプに固有の設定を定義し、警告がトリガされたときに実行するアクションを設定します。

アクセス方法	警告を定義する SiteScope, グループ, またはモニタを右クリックし, [新規作成] > [警告] を選択するか, [警告] タブ (モニタまたはテンプレート・ビュー) で既存の警告を選択して, [警告の編集]  ボタンをクリックします。[新規警告] または [警告の編集] ダイアログ・ボックスの [警告時のアクション] セクションで, [新規警告アクション]  ボタンをクリックします。[アクション タイプ] ダイアログ・ボックスで, アクションの種類を選択します。
重要な情報	▶ [警告アクション] ダイアログ・ボックスは, 次の 3 つの表示枠で構成されます。 ▶ アクションの種類の設定。[アクション タイプの設定] は, [アクション タイプ] ダイアログ・ボックスで選択した警告アクションの種類により異なります。詳細については, 下記の特定のアクションの種類を参照してください。 ▶ 状態トリガ。詳細については, 1321 ページ「[状態トリガ] 表示枠」を参照してください。 ▶ トリガの頻度。詳細については, 1322 ページ「トリガの頻度表示枠」を参照してください。 ▶ このダイアログ・ボックスで [ヘルプ] ボタンをクリックすると, ユーザ・ログインの資格情報の入力を促すメッセージが表示される場合があります。
関連タスク	1276 ページ「警告の設定方法」
関連情報	▶ 1251 ページ「SiteScope 警告の概要」 ▶ 1294 ページ「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」

次の要素は、[アクション タイプの設定] のすべてのアクションの種類で共通です。

UI 要素	説明
[アクション名]	警告がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告の名前ではありません。 例：すべての Solaris マシンの CPU をチェックして、警告がトリガされたときに SMS メッセージを送信するように警告を設定する場合、[一般設定] の警告名を Solaris_CPU、アクション名を send_sms に指定できます。

データベース警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[データベース接続 URL]	データベースに接続する URL を入力します。 例：Windows NT では、[設定] コントロール・パネルの ODBC データ・ソース・マネージャを使用して、「test」という名前の接続を作成し、データベース接続 URL に「jdbc:odbc:test」と入力します。 Windows 認証使用時の注意事項：Windows 認証を使用してデータベースにアクセスする場合、接続 URL として「jdbc:mercury:sqlserver://<server name or IP address>:1433;DatabaseName=<database name>;AuthenticationMethod=type2」を、データベース・ドライバとして「com.mercury.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver」を入力します。SiteScope サービスの実行元であるアカウントの Windows ユーザ資格情報を使用してデータベースへの接続が確立されるように、[データベース ユーザ名] ボックスおよび [データベース パスワード] ボックスは空のままにします。

UI 要素	説明
[データベース ドライバ]	JDBC データベース・ドライバの Java クラス名を入力します。 SiteScope では、プライマリとバックアップのデータベース接続の両方に同じデータベース・ドライバを使用します。カスタム・ドライバを使用する場合、<SiteScope のルート>/java ディレクトリにそのドライバをインストールする必要があります。SiteScope のデータベース・ドライバの設定の詳細については、『Monitor Reference』（英語版）の「Database Query Monitor Overview」を参照してください。
[SQL ステートメント]	データベースへの警告の追加に使用する SQL ステートメントを入力します。 山括弧 (<および >) で囲まれた項目は、警告をトリガしたモニタのフィールドで置換されます。 標準設定値: INSERT INTO SiteScopeAlert VALUES('<time>', '<group>', '<name><', '<state>')
[データベース ユーザ名]	必要に応じて、データベースに接続するユーザ名を入力します。
[データベース パスワード]	必要に応じて、データベースに接続するパスワードを入力します。
[バックアップ データベース接続 URL]	SiteScope 警告のログ記録にバックアップ・データベースが必要で、メインのデータベース接続が使用できない場合に使用するバックアップ・データベース接続の URL を入力します。 例: バックアップ・データベース接続の ODBC 接続の名前が testdb2 の場合、URL に「jdbc:odbc:testdb2」と入力します。
[スケジュール]	警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。 標準設定値: 毎日、全日

モニタの無効化 / 有効化警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[グループ/モニタ アクション]	警告がトリガされたときに、この警告アクションでモニタを無効化するか有効化するかを選択します。 標準設定値 : 無効化
[ターゲット]	この警告のアクションによって影響を受けるグループおよびモニタを選択します。[ターゲット] リストには、SiteScope に設定されたすべてのグループおよびモニタが含まれます。この警告アクションのグループ内で実行中のグループまたはモニタを選択し、[選択済みターゲット] リストに追加できます。 例 : この警告アクションがディスク領域モニタに設定されているとします。このモニタに対してトリガされた警告によって、同じサーバを監視しているすべての CPU モニタを無効にできます。 標準設定値 : 選択されていない
[スケジュール]	警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。 標準設定値 : 毎日、全日

電子メール警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[電子メールの送信先]	次のいずれかを使用して、電子メール警告受信者を選択します。 ➤ 受信者。[電子メール警告受信者] リストから、警告の 1 人以上の電子メール受信者を選択します。このリストには、[電子メールのプリファレンス] で設定した受信者が表示されます。詳細については、707 ページ「電子メール・プリファレンス」を参照してください。 ➤ アドレス。1 つ以上の電子メール・アドレスをカンマ (,) 区切りで入力します。このアドレスは、公式規格の RFC 2822 に従って構文が有効かチェックされますが、そのほかのエラー（電子メールのユーザが存在するかどうかなど）はチェックされません。 注：[アドレス] ボックスにデータが含まれる場合、[電子メール警告受信者] リストからの選択は無視されます。 標準設定値：選択されていない
[件名]	電子メール警告アクション・メッセージの件名フィールド・テンプレートを選択します。Typical テンプレートには次の値が含まれます。 ➤ メッセージの件名（SiteScope 警告） ➤ モニタ警告のカテゴリ（「エラー」、「警告」、「OK」、「データなし」） ➤ モニタの名前またはモニタ・タイトル ➤ モニタにより返された状態 ➤ 警告を送信した SiteScope インストールのアドレス（括弧で表示） 標準設定値：Typical 例：SiteScope 警告, エラー, URL: http://gate.company.com, 不明なホスト名 (gate.company.com)

UI 要素	説明
[テンプレート]	電子メール警告アクションのテンプレートを選択します。 短い電子メール・メッセージの場合は、電子メール警告アクションで ShortMail テンプレートを選択します。そのほかのオプションでは、電子メール警告に含める詳細のレベルを選択できます。 標準設定値 : Typical。このテンプレートには次の値が含まれます。Monitor: <groupID>:<name>; Tags <tag>; Group: <group>; Status: <state>; Sample #: <sample>; Time: <time> 注 : <SiteScope のルート・ディレクトリ>\templates.mail ディレクトリに別のテンプレートを追加できます。使用可能なテンプレートの詳細については、テキスト・エディタでこのディレクトリ内のファイルを開き、各オプションで送信される値を参照してください。
[スケジュール]	警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。 この値は編集できません。プリファレンスでメール受信者に定義されたスケジュールによって決定されます。
[警告を解除するようアクションをマークする]	状態が変化して警告のトリガ条件が真でなくなった場合、このアクションで警告が解除され、送信メッセージに「解除」を追加した解除通知が送信されます。 標準設定値 : 選択されていない

ログ・イベント警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[送信先]	イベントがイベント・ログに追加される Windows マシンの名前を入力します。 標準設定値 : localhost (SiteScope が稼動しているマシン)。
[テンプレート]	ログ・イベント・タイプの警告アクション用のテンプレートを選択します。 標準設定値 : Typical 注 : 既存のテンプレートの内容を表示するか、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.eventlog に別のテンプレートを追加できます。
[メッセージ]	イベント・ログに送信されるメッセージのプレフィックスを入力します。
[イベント ソース]	ログが記録されたイベントの <Source> フィールドの設定に使用する文字列を入力します。 構文 : テキストで指定する必要があります。 標準設定値 : SiteScope
[イベント ID]	ログが記録されたイベントの <ID> フィールドの設定に使用する数字を入力します。 構文 : 数値で指定する必要があります。 標準設定値 : 1000
[イベント タイプ]	イベントに使用されるイベント・タイプを選択します。 標準設定値 : モニタの状態の使用。つまり、イベント・タイプは、モニタの状態が「エラー」の場合は エラー、「警告」の場合は 警告、「正常」の場合は 情報 となります。
[イベント カテゴリ ID]	この警告で作成されたイベントの「カテゴリ ID」として使用される数字を入力します。 標準設定値 : 0

UI 要素	説明
[スケジュール]	警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。 標準設定値 : 毎日、全日
[警告を解除するようアクションをマークする]	状態が変化して警告のトリガ条件が真でなくなった場合、このアクションで警告が解除され、送信メッセージに「 解除 」を追加した解除通知が送信されます。 標準設定値 : 選択されていない

ページ警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[ページ警告受信者]	[ページ警告受信者] リストから、警告の 1 人以上のページ受信者を選択します。このリストには、[ページ プリファレンス] で設定した受信者が表示されます。このトピックの詳細については、717 ページ「ページ・プリファレンス」を参照してください。 標準設定値 : 選択されていない
[テンプレート]	ページ警告アクション・タイプのテンプレートを選択します。 標準設定値 : Typical 注 : 既存のテンプレートの内容を表示するか、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.page ディレクトリに別のテンプレートを追加できます。
[メッセージ]	ページに送信されるメッセージ・テキストを入力します。 注 : 最大長は 32 文字です。

UI 要素	説明
[スケジュール]	警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。 注: この値は編集できません。プリファレンスで定義されたページ受信者用の定義済みスケジュールがあります。
[警告を解除するようアクションをマークする]	状態が変化して警告のトリガ条件が真でなくなった場合、このアクションで警告が解除され、送信メッセージに「解除」を追加した解除通知が送信されます。 標準設定値: 選択されていない

送信警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[フォーム送信先 URL]	SiteScope から警告に送信する CGI スクリプトの URL を入力します。次に例を示します。 <code>http://admindb.server.net/cgi-bin/error.pl</code> 。 構文: 文字列 <code>http://</code> を含める必要があります。URL アドレスの構文が有効かチェックされます。
[テンプレート]	送信警告アクション・タイプのテンプレートを選択します。 標準設定値: Typical 注: 既存のテンプレートの内容を表示するか、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.post ディレクトリに別のテンプレートを追加できます。
[認証ユーザ名]	送信警告で CGI スクリプトの URL にアクセスするユーザ名を入力します。ユーザ名が不要な CGI スクリプトもあります。 または、このエントリを空白のままにし、[一般設定] ([プリファレンス] > [一般プリファレンス]) の [標準設定の認証ユーザ名] セクションにユーザ名を入力します。複数のモニタで使用する共通の認証資格情報を定義する場合、この方法を使用します。

UI 要素	説明
[認証パスワード]	送信警告の認証ユーザ名のパスワードを入力します。 または、このエントリを空白のままにし、[プリファレンス] > [一般プリファレンス] の [標準設定の認証パスワード] セクションにパスワードを入力します。複数のモニタで使用する共通の認証資格情報を定義する場合、この方法を使用します。
[HTTP プロキシ]	CGI スクリプトの URL へのアクセスに使用する、HTTP プロキシ・サーバのドメイン名とポートを入力します。
[プロキシ サーバのユーザ名]	プロキシ・サーバで必要な場合、CGI スクリプトの URL にアクセスするユーザ名を入力します。 プロキシ・サーバがプロキシ認証をサポートしている必要があります。
[プロキシ サーバのパスワード]	プロキシ・サーバで必要な場合、CGI スクリプトの URL にアクセスするパスワードを入力します。 プロキシ・サーバがプロキシ認証をサポートしている必要があります。
[スケジュール]	警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。 標準設定値 : 毎日、全日

スクリプト警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[サーバ]	スクリプトを実行するサーバを選択します。 スクリプト・ディレクトリは、リモート・スクリプトを SiteScope で実行できるリモート・ログイン・アカウントのディレクトリ・ツリー内にある必要があります。 標準設定値 : SiteScope サーバ テンプレート・モードで作業する場合の注意事項を次に示します。 このフィールドのテンプレート変数の使用を有効にするテキスト・ボックスとして、ドロップダウン・リストが表示されます。

UI 要素	説明
[スクリプト]	選択した条件に応じて実行するスクリプトを選択します。 カスタム・スクリプトは、必要な数だけ作成できます。カスタム・スクリプトは、<SiteScope のルート・ディレクトリ>\scripts ディレクトリまたはリモート・マシンの該当するスクリプト・ディレクトリに置きます。ドロップダウン・リストで選択したサーバのこのディレクトリにあるすべてのファイルが、SiteScope によって表示されます。 標準設定値 : restartServer.bat
[パラメータ]	スクリプトに渡すことのできる追加のモニタ・パラメータ。その例を次に示します。 ▶ スクリプト・ディレクトリのパス ▶ 警告の原因となったモニタの名前 ▶ モニタの現在の状態 ▶ 警告メッセージ・ファイルへのパス ▶ モニタの ID ▶ モニタ・グループ これらのパラメータは、それぞれ 7 番目、8 番目、9 番目のようにコマンド・ラインの引数として送信されます。 スクリプトに渡すことのできるパラメータは、警告をトリガするモニタのタイプにより異なります。 構文 : プロパティ・リストのプロパティ名変数を山括弧 (<>) で囲みます。たとえば、サーバ名をスクリプトに渡す場合、テキスト・ボックスに「<_machine>」と入力します。複数の追加パラメータを渡すには、パラメータを 1 つの空白で区切ります。これは、コマンド・ラインで引数を追加する方法と同じです。 標準設定値 : 値なし。スクリプト警告では、コマンド・ライン引数として常に上記のパラメータをスクリプトに渡します。上記のパラメータを値に含める必要はありません。
[出力のエンコード]	スクリプト出力のエンコードを選択します。ここで選択することで、エンコードされたファイルの内容を SiteScope で正確に照合および表示できます。 標準設定値 : windows-1252

UI 要素	説明
[テンプレート]	スクリプト警告アクション・タイプのテンプレートを選択します。 標準設定値 : Typical 注 : 既存のテンプレートの内容を表示するか、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%templates.script ディレクトリに別のテンプレートを追加できます。
[スケジュール]	警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。 標準設定値 : 毎日、全日

SMS 警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[SMS 番号]	メッセージの宛先を識別する SMS サービスに必要な電話番号を入力します。 構文 : 数値のみ。最大 16 桁です。
[スケジュール]	警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。 標準設定値 : 毎日、全日

SNMP トラップ警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[SNMP トラップ]	警告をトリガする 1 つ以上の SNMP トラップを選択します。 標準設定値 : 選択されていない
[テンプレート]	SNMP トラップ警告アクション・タイプのテンプレートを選択します。 テンプレートの各行は、別々の SNMP 変数として送信されます。次の方法でテンプレート・ファイルを変更することもできます。 ➤ [Agent Host: <hostname-or-ip-address>] をテンプレートの最初の行に使用し、トラップ元としてこのホスト名または IP アドレスのあるトラップを送信します。標準設定では、SiteScope が稼動しているマシンの IP アドレスがトラップ元として使用されます。 ➤ [Command: <command name>] を使用し、標準設定のコマンドを上書きします。 ➤ [Type: <var-type>] を使用し、オブジェクトの標準設定のタイプを上書きします。 [OID: <object id>] を使用し、標準設定のオブジェクト ID を変更します。たとえば、var-binding 変数オブジェクト ID の変更これを使用します。 標準設定値 : Typical 注 : 既存のテンプレートの内容を表示するか、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %templates.snmp ディレクトリに別のテンプレートを追加できます。
[メッセージ]	この警告によって送信される、SNMP トラップに追加する任意のプレフィックスを入力します。

UI 要素	説明
[スケジュール]	警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。 標準設定値 : 毎日, 全日
[警告を解除するようアクションをマークする]	状態が変化して警告のトリガ条件が真でなくなった場合, このアクションで警告が解除され、送信メッセージに「解除」を追加した解除通知が送信されます。 標準設定値 : 選択されていない

サウンド警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[サウンド ファイル]	<SiteScope のルート・ディレクトリ>\templates.sound ディレクトリから再生されるサウンドを選択します。 .au のサフィックスの AU 形式 (8 ビット, &#micro;law, 8000 Hz, 1 チャンネル) で別のサウンドをディレクトリ に追加できます。 標準設定値 : 標準設定
[スケジュール]	警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。 標準設定値 : 毎日, 全日

 [状態トリガ] 表示枠

[状態トリガ] 表示枠は、警告アクションをトリガするオブジェクト・タイプの状態の選択に使用します。ある状態から別の状態に変化したときに警告がトリガされます。警告アクションをトリガするカテゴリを選択します。

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
【使用不能】	以前は使用可能だった監視対象マシンが使用不能に変化した場合、警告がトリガされます。
【エラー】	モニタが報告する状態が「正常」（標準設定）から変化した場合、警告がトリガされます。
【警告】	モニタが報告する状態が「正常」から変化した場合、警告がトリガされます。
【正常】	モニタが報告する状態が「エラー」から変化した場合、警告がトリガされます。



トリガの頻度表示枠

[トリガの頻度] 表示枠は、トリガの頻度の選択に使用します。

重要な情報	▶ 使用可能なオプションは、[状態トリガ] 表示枠で選択した内容により異なります。 ▶ このオプションの詳細については、1255 ページ「SiteScope 警告が送信される時期について」を参照してください。

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[エスカレート、次のアクション <N> が、<N> 回エラー状態だった場合]	作成する警告アクションが別の警告アクションに依存する場合、このオプションを選択します。この警告アクションが依存する別の警告アクションの名前を選択し、この警告アクションがトリガされる前に別の警告アクションがトリガされる回数を選択する必要があります。 例：特定の条件に一致したときにサウンド警告を送信する警告アクションを作成したとします。サウンド警告アクションが 3 回トリガされたときに、電子メール警告を送信するようにします。サウンド警告アクションの名前と 3 を選択します。 注：このオプションは、警告に別の警告アクションが定義されている場合にのみ表示されます。
[常時：条件が最低 <N> 回]	警告条件が少なくとも N 回発生後の最初のトリガ以降、警告条件が再度一致するたびに警告がトリガされます。 警告が最初にトリガされる前に、警告条件が一致する必要のある最小回数を入力します。 構文：数値のみ 範囲：1～99

UI 要素	説明
[1 回のみ : 条件がちょうど <N> 回]	警告条件が N 回一致した後に、1 回のみ警告がトリガされます。 警告がトリガされる前に、警告条件が一致する必要がある回数を入力します。 標準設定値 : 選択済み 構文 : 数値のみ 範囲 : 1~99
[最初に <X> 回、以後 <Y> 回]	警告条件が X 回連続で発生した後に警告がトリガされ、その後は警告条件が Y 回連続で発生するたびに警告がトリガされます。たとえば、X に 3 を設定して Y に 4 を設定した場合、警告アクションは警告条件発生 の 3 回目、7 回目、11 回目のように実行されます。 構文 : 数値のみ 範囲 : 1~99
[1 回のみ : <N> 件のグループエラーの後]	[状態トリガ] 表示枠で [エラー] を選択した場合にこのオプションが表示されます。 グループ内のいずれかのモニタが警告を N 回連続で報告した後にのみ、警告がトリガされます。 注 : このオプションは SiteScope グループでのみ使用できます。

UI 要素	説明
[1 回のみ : このグループ内のすべてのモニタがエラー状態になった後]	[状態トリガ] 表示枠で [エラー] を選択した場合にこのオプションが表示されます。 グループ内のすべてのモニタがエラー状態になった初回のみ、警告がトリガされます。 注 : このオプションは SiteScope グループでのみ使用できます。
[モニタが以前に error/warning 少なくとも <N> 回]	[状態トリガ] 表示枠で [正常] または [警告] を選択した場合にこのオプションが表示されます。 このオプションは、対象モニタまたはグループが次のいずれかの状態を報告するまで、警告のトリガを抑制します。 ➤ 警告カテゴリが「正常」の場合、「エラー」または「警告」 ➤ 警告カテゴリが「警告」の場合、少なくとも入力した回数での「正常」または「エラー」

62

スクリプト警告のスクリプトの記述

本章の内容

概念

- ▶ スクリプト警告のスクリプトの記述の概要 (1326 ページ)
- ▶ SiteScope のスクリプトを使った作業 (1326 ページ)
- ▶ SiteScope からスクリプトへのデータの引き渡し (1328 ページ)

概念

スクリプト警告のスクリプトの記述の概要

SiteScope では、エラーまたは警告ステータスが検出された場合にスクリプトまたはバッチ・ファイルを実行できます。通常、スクリプトのトリガとして機能するスクリプト警告を作成することによって、これを実行します。スクリプトまたはバッチ・ファイルは、システム・コマンドで実行するか、任意の言語で記述されたほかのプログラムを呼び出すことができます。危険域状態または失敗に自動的に対応する復旧スクリプトを作成する場合に、これを使用できます。

SiteScope 警告テンプレートに含まれる一般的なプロパティのリストについては、1283 ページ「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。

SiteScope のスクリプトを使った作業

SiteScope スクリプト警告を実行するスクリプト・ファイルは、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>%scripts** フォルダまたはリモート UNIX マシン（リモート・スクリプトの場合）に置く必要があります。たとえば、SiteScope がディレクトリ **C:%SiteScope** にインストールされていてスクリプトの名前が **actionTest.bat** の場合、SiteScope によって、作成したスクリプト警告に応じて次のコマンド・ラインが試行されます。

C:%SiteScope%scripts%actionTest.bat C:%SiteScope%scripts monitor_name

ここで、**C:%SiteScope%scripts** は最初のコマンド・ライン・パラメータで、**monitor_name** は 2 番目のコマンド・ライン・パラメータとなります。

注：スクリプト警告によって実行されるローカル・スクリプトは **<SiteScope のルート・ディレクトリ>%scripts** に置く必要がありますが、実行パスは **<SiteScope のルート・ディレクトリ>%classes** ディレクトリになります。現在の実行ディレクトリの定義に関する問題を避けるため、スクリプトで呼び出されるファイル・システム・コマンドやプログラムにはフル・パスを使用する必要があります。

スクリプトで実行するアクションは、スクリプトの作成者によって決定されます。**SiteScope** は、スクリプト警告で呼び出される各スクリプトにいくつかのコマンド・ラインの引数を渡します。この引数を使用して、**SiteScope** から送信された情報に基づいてプログラム・スクリプトを実行できます。標準設定では、**SiteScope** は次のパラメータをコマンド・ラインの引数として各スクリプト警告に渡します。

- ▶ スクリプト・ディレクトリのパス
- ▶ 警告の原因となったモニタの名前
- ▶ モニタの現在の状態
- ▶ 警告メッセージ・ファイルへのパス。
- ▶ モニタの ID コード。
- ▶ モニタが配置されたグループ。
- ▶ 警告フォームの **[パラメータ]** ボックスで指定された追加パラメータ。

これらのコマンド・ラインの引数は、通常のコマンド・ライン変数表記規則を使用して、ターゲット・スクリプトによってアクセスできます。これらの表記規則は、Windows NT システムの場合は %1, %2, %3 の形式で、UNIX スクリプトの場合は \$1, \$2, \$3 の形式です（使用されるスクリプトのシェルまたは言語により異なります）。標準設定では、最初の 6 つのパラメータ（つまり、%1 から %6）が各スクリプトに渡されます。その他のパラメータを渡すには、**[パラメータ]** ボックスでスクリプト警告設定にプロパティ変数またはパラメータを追加する必要があります。**[パラメータ]** ボックスに入力された最初の変数またはテキストは %7 としてアクセス可能で、以降 2 番目のパラメータは %8, 3 番目のパラメータは %9 のように指定してアクセスできます。

スクリプト警告のパラメータにアクセスする、Perl で記述されたスクリプトの例を次に示します。

```
print "スクリプト ディレクトリのパス名 : $ARGV[0]¥n";
print "警告の原因となっているモニタの名前 : $ARGV[1]¥n";
print "現在のステータス モニタ : $ARGV[2]¥n";
print "警告メッセージ ファイルのパス名 : $ARGV[3]¥n";
print "モニタの ID コード : $ARGV[4]¥n";
print "モニタのグループ : $ARGV[5]¥n";
```

スクリプトに渡されたパラメータを表示する、Microsoft Windows のバッチ・ファイルの例を次に示します。

```
echo スクリプト ディレクトリのパス名 : %1
echo 警告の原因となっているモニタの名前 : %2
echo 現在のステータス モニタ : %3
echo 警告メッセージ ファイルのパス名 : %4
echo モニタの ID コード : %5
```

SiteScope からスクリプトへのデータの引き渡し

7 つの標準設定パラメータに加えて、その他 2 つのパラメータとデータをスクリプトに渡すためのメカニズムがあります。一つは、スクリプト警告設定の追加パラメータ・ボックスを使用するメカニズムです。もう一つは、警告メッセージ・ファイルにアクセスするメカニズムです。

本項の内容

- ▶ 1328 ページ「スクリプト警告設定を使用したデータの引き渡し」
- ▶ 1330 ページ「警告メッセージ・ファイルを使用したデータの引き渡し」

スクリプト警告設定を使用したデータの引き渡し

追加のカスタム・パラメータとデータをスクリプトに送る最も簡単な方法は、[警告時のアクション] ダイアログ・ボックスを使用する方法です。スクリプトに渡された 7 番目の標準設定パラメータ（警告フォームで指定される追加パラメータ）には、スクリプトに送られる 1 つ以上のカスタム・パラメータを指定できます。[警告時のアクション] ダイアログ・ボックスの [アクション タイプの設定] 表示枠にある [パラメータ] ボックスで、スクリプト警告のカスタム・パラメータを指定します。

これらのパラメータには、ハード・コーディングされた値も指定できます。複数のパラメータをそれぞれ空白で区切って含めることができます。たとえば、次に示す 4 つのテキスト文字列をスクリプトに渡すとします。[パラメータ] ボックスに、次のように文字列を入力します。

パラメータ:

これらは、スクリプトに送られる 7 番目から 10 番目のコマンド・ライン・パラメータとなります。次の Windows バッチ・ファイル・スクリプトでは、標準設定パラメータと、[アクション タイプの設定] ページの [パラメータ] ボックスに入力した上記の追加例のカスタム・パラメータを表示します。

```
echo スクリプト ディレクトリのパス名 : %1
echo 警告の原因となっているモニタの名前 : %2
echo 現在のステータス モニタ : %3
echo 警告メッセージ ファイルのパス名 : %4
echo モニタの ID コード : %5
echo モニタのグループ : %6
echo 7 番目のパラメータ (customA) : %7
echo 8 番目のパラメータ (customB) : %8
echo 9 番目のパラメータ (customC) : %9
echo 10 番目のパラメータ (customD) : %10
```

警告メッセージ・ファイルを使用したデータの引き渡し

データと SiteScope モニタ・パラメータをスクリプトに渡す別の方法として、警告メッセージ・ファイルを使用する方法があります。このファイルは、[警告時のアクション] ダイアログ・ボックスで指定した警告テンプレートを 사용하여、SiteScope により作成されます。独自のカスタム警告テンプレートを作成し、カスタム・テキスト文字列、または使用可能な SiteScope パラメータのいずれかを渡すことができます。SiteScope に含まれる標準設定の NTEventLog テンプレートを次に示します。<> 括弧で囲まれたパラメータは、該当するスクリプト警告がトリガされるたびに、対応する値と置換されて警告メッセージ・ファイルに書き込まれます。SiteScope 警告テンプレートに含まれる一般的なプロパティのリストについては、1283 ページ「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。

NTEventLog スクリプト警告テンプレート

```

タイプ : <eventType>
イベント時刻 : <eventTime>
ソース : <event>
ソース ID : <eventID>
カテゴリ : <eventCategory>
マシン : <eventMachine>
メッセージ : <eventMessage>
モニタ : <name>
Group : <group>
Sample # : <sample>
Time : <time>
<mainParameters>
<mainStateProperties>

```

スクリプトでこのデータを使用するには、4 番目の標準設定コマンド・ライン・パラメータで指定されたパス名の場所にある警告メッセージ・ファイルに、スクリプトからアクセスする必要があります (1326 ページ「SiteScope のスクリプトを使った作業」を参照)。その後、スクリプトで警告メッセージ・ファイルの内容を解析し、スクリプトで使用するデータを抽出する必要があります。

復旧スクリプトの記述方法の詳細については、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%scripts ディレクトリにあるスクリプト・ファイルを参照してください。**actionTest.bat** のテンプレート例を使用して、独自のスクリプトを作成できます。**perlTest.pl** の例には、Perl スクリプトを呼び出す方法が示されています。**restartIIS.bat**、**restartService.bat**、**restartServer.bat** のスクリプトは、一般的な復旧アクションを実行します。

UNIX 環境のスクリプトの例には、アクションの **Test.sh** と **perlTest.pl** があります。

63

SiteScope レポート

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope レポートの概要 (1332 ページ)
- ▶ SiteScope レポート・タイプ (1334 ページ)
- ▶ SiteScope 管理レポートを使った作業 (1336 ページ)

タスク

- ▶ レポートの作成方法 (1338 ページ)

参照情報

- ▶ SiteScope レポートのユーザ・インタフェース (1340 ページ)

概念

SiteScope レポートの概要

SiteScope レポートには、時間の経過に伴う監視対象のサーバとアプリケーションのパフォーマンスに関する情報が表示されます。SiteScope レポートは、運用パフォーマンスと可用性の監視とトラブルシューティング、監視対象環境の確認を行ううえで重要なツールです。

単一のモニタ、複数のモニタ、さらには多数のモニタ・グループのレポートを作成できます。レポート定義には、特定のモニタの測定値、結果のサマリ、グラフなど、レポートの内容のオプションが含まれます。

セールス、マーケティング、カスタマ・サポート、運営の管理層を含む、組織の多くのユーザが SiteScope レポートを活用できます。SiteScope ユーザ・アカウントによって、レポートを表示する SiteScope サービスへのこれらのユーザのアクセスを制限できます。詳細については、760 ページ「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。

注：

- ▶ UNIX/Linux の SiteScope で特定のレポート要素を表示するには、SiteScope を実行しているサーバで X Windows システムが稼動している必要があります。
 - ▶ SiteScope インストールのアップグレード後に SiteScope バージョン 9.0 以降で生成されたレポートを開くには、レポート・フォルダ **<SiteScope のルート・ディレクトリ>%htdocs** の手動バックアップを作成し、新しいインストール・ディレクトリにコピーする必要があります。
 - ▶ インジケータ値は SiteScope レポートには表示されません。
-

SiteScope 監視データ・ログ・ファイル

レポートの生成に使用できる SiteScope 監視データは、SiteScope サーバに格納されたログ・データの量に制限されます。標準設定では、SiteScope では監視データ・ログ・ファイルを 40 日間保持します。ログ・ファイルは循環式で、ログ保有期間よりも古いファイルは自動的に削除されます。

注：長期間監視データ・ログを保持すると、設定したモニタの総数と日ごとに実行するモニタの頻度に応じて、SiteScope サーバのデータ格納上の問題が発生する可能性があります。データの累積率を見積もるため、**<SiteScope のルート・ディレクトリ>%logs** ディレクトリのログ・ファイルのサイズを監視する必要があります。

ログ・プリファレンスを使用して、SiteScope で監視データを保持する期間を変更できます。監視データを外部の SQL 準拠データベースにエクスポートして、監視データをより長期間保持するか、他のレポート・アプリケーションでできるように、SiteScope を設定できます。詳細については、700 ページ「ログ・プリファレンスの概要」を参照してください。

SiteScope レポート・タイプ

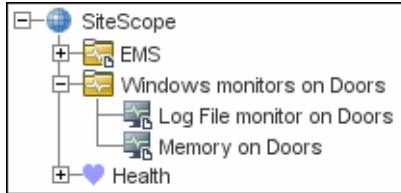
SiteScope には、4 種類の管理レポートが含まれています。次の表で、レポート・タイプとその使用法を説明します。

レポート・タイプ	説明
警告レポート	警告レポートでは、指定した期間に生成された SiteScope 警告に関する情報を表示できます。警告レポートはその場に応じて作成されます。また、警告レポートの設定は SiteScope 設定には保存されず、後で使用できません。 警告レポートの設定の詳細については、1367 ページ「[新規 SiteScope 警告レポート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
管理レポート	管理レポートでは、特定の期間のインフラストラクチャの可用性とパフォーマンス・データのサマリを表示できます。管理レポートは、SiteScope モニタによって収集されたデータから、事前に設定されたスケジュールで自動的に生成されます。事前に設定されたスケジュールに従い、SiteScope によって適切なログ・ファイルが読み取られ、指定した時間間隔のモニタ測定値に基づいてレポートが生成されます。レポート・データは、サードパーティ製のアプリケーションへのエクスポートに適したファイルに保存できます。 管理レポートの設定の詳細については、1343 ページ「[新規 SiteScope 管理レポート] / [管理レポートの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
モニタ・レポート	モニタ・レポートでは、設定のプロパティと既存のモニタの設定を確認できます。モニタ・レポートは 3 つのテキスト・データ形式のいずれかでエクスポートできます。指定したスケジュールに基づく管理レポートと異なり、モニタ・レポートはその場に応じて作成されます。また、モニタ・レポートの設定は SiteScope 設定には保存されず、後で使用できません。 モニタ・レポートの設定の詳細については、1364 ページ「[新規 SiteScope モニタ レポート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

レポート・タイプ	説明
クイック・レポート	クイック・レポートでは、特定の期間の指定したモニタまたはモニタ・グループの監視データを表示できます。 指定したスケジュールに基づいて生成される管理レポートと異なり、クイック・レポートはその場に応じて作成されます。また、モニタ・サマリ・レポートの設定は SiteScope 設定には保存されず、後で使用できません。 クイック・レポートの設定の詳細については、1357 ページ「[新規 SiteScope クイック レポート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
BSM 設定変更レポート	BSM 設定変更レポートでは、BSM に報告する設定に関する統計情報を表示できます。この情報はトラブルシューティングのみに使用します。 レポートは BSM から生成されます。BSM に報告する SiteScope が複数ある場合、このレポートに表示される情報には、選択した特定の SiteScope 以外の情報も含まれます。 例：プロファイル・データベースへのデータ入力の実失敗などの、レポート・ログの例外。 注：このレポートは、システム可用性管理から SiteScope にアクセスしていて、ユーザに SiteScope ログを表示する権限が付与されている場合にのみ使用可能です。

SiteScope 管理レポートを使った作業

レポートは、モニタ・ビューの [レポート] タブに要素として追加されます。SiteScope ノード、グループ、または個々のモニタに、レポートを子として追加できます。レポートは、次の例に示すように、レポートを作成したグループまたはモニタの横にある  アイコンで、左側のメニュー・ツリーに表示されます。



レポートには、レポートが追加されたコンテナに基づくスコープがあります。レポートに含めるデータのあるすべてのモニタを含む、コンテナまたは要素にレポートを追加します。その後、[レポートのターゲット] 表示枠を使用して、レポートに含めるモニタの選択を絞り込みます。

レポート・アイコンのあるノードを選択すると、[レポート] タブに 2 つのテーブルが表示されます。[レポート] テーブルには、このノードで作成したレポートが表示されます。[関連付けられたレポート] テーブルには、祖先ノードで作成され、監視対象の選択でこのノードに適用されたレポートが表示されます。

SiteScope レポート定義は、必要な数だけ作成できます。ただし、レポート定義数を最小に保つために、計画を立ててレポートを統合する必要があります。これによりレポートの管理が容易になり、過剰なレポート・メッセージやアクションを抑えることができます。多数のモニタのレポートを作成する場合、モニタまたは測定値のタイプに基づいて別々のレポートを作成することを検討する必要があります。たとえば、20 の異なるリモート・サーバのシステム・リソースのレポートを作成する場合、CPU やディスク領域などの数値を測定するモニタのレポートと、サービスやプロセスなどの基本的な可用性を報告するモニタのレポートを別々に作成することを検討します。

標準設定では、SiteScope は最近生成された 10 件のレポートを保持します。つまり、1 時間ごとのレポートでは過去 10 時間、日次レポートでは過去 10 日間、週次レポートでは過去 10 週間のレポートが利用可能です。このレポートの保管期間を変更するには、SiteScope `master.config` ファイルの `_maximumReports` の設定値を変更します。

管理レポート定義を削除すると、対応するレポートの生成は中止されます。以前に生成されたレポートは、基になるデータが削除されるまで引き続き使用できます。

レポート定義はコピーして貼り付けできます。レポート定義の設定は、**[レポートのターゲット]** 設定（レポートを貼り付けるコンテナのすべての子を含むように自動的にリセットされる）を除き、新しい場所に貼り付けられます。レポートの貼り付け後、割り当てられた **[レポートのターゲット]** が新しいレポート・コンテキストと全体のレポート計画に適したものになるように、レポート定義のプロパティを編集する必要があります。

タスク

レポートの作成方法

このタスクでは、SiteScope レポートの作成に関する手順を説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1338 ページ「レポート・タイプの選択」
- ▶ 1338 ページ「レポートの設定」
- ▶ 1339 ページ「結果」

1 レポート・タイプの選択

レポートを作成するグループまたはモニタ・コンテナを右クリックし、[レポート] をクリックするか、[レポート] タブから新しいレポートを作成します。追加または作成するレポート・タイプを選択します（管理レポートのみ追加できます。その他すべてのレポートはその場に応じて作成され、SiteScope に保存されません）。

レポート・タイプの詳細については、1334 ページ「SiteScope レポート・タイプ」を参照してください。

2 レポートの設定

レポートに含めるモニタを選択し、レポートを設定します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1340 ページ「SiteScope レポートのユーザ・インタフェース」を参照してください。

注：標準設定では、選択したコンテナ内のすべてのモニタのデータが含まれます。警告レポートの場合、レポートから選択したコンテナのモニタは削除できません。

3 結果

管理レポートは、モニタ・ツリーの選択したコンテナに追加されます（レポート  記号で表示）。ユーザ・インタフェースの詳細については、1369 ページ「管理レポート」を参照してください。

その他すべてのレポートは生成され、Web ブラウザに表示されます。

- ▶ 警告レポートの表示の詳細については、1379 ページ「警告レポート」を参照してください。
- ▶ モニタ・レポートの表示の詳細については、1377 ページ「モニタ・サマリ・レポート」を参照してください。
- ▶ クイック・レポートの表示の詳細については、1373 ページ「クイック・レポート」を参照してください。

参照情報

SiteScope レポートのユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ [レポート] ページ (1340 ページ)
- ▶ [新規 SiteScope 管理レポート] / [管理レポートの編集] ダイアログ・ボックス (1343 ページ)
- ▶ [新規 SiteScope クイック レポート] ダイアログ・ボックス (1357 ページ)
- ▶ [新規 SiteScope モニタ レポート] ダイアログ・ボックス (1364 ページ)
- ▶ [新規 SiteScope 警告レポート] ダイアログ・ボックス (1367 ページ)
- ▶ 管理レポート (1369 ページ)
- ▶ クイック・レポート (1373 ページ)
- ▶ モニタ・サマリ・レポート (1377 ページ)
- ▶ 警告レポート (1379 ページ)
- ▶ 注釈ツール (1381 ページ)

[レポート] ページ

このページには、SiteScope で定義されたレポートに関する情報が表示されます。このページでは、レポート定義の追加、編集、削除を行います。SiteScope オブジェクト（グループまたはモニタ）にレポートが設定されている場合、モニタ・ツリーのオブジェクト・アイコンの横にレポート記号  が表示されます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、[レポート] タブをクリックします。SiteScope オブジェクトを選択して、特定のオブジェクトのレポート・プロパティを表示します。
重要な情報	特定のモニタまたはグループに作成されたレポートは、オブジェクトの [モニタのレポート] / [グループのレポート] リストに表示されます。対象のモニタまたはグループは、[モニタに関連付けられたレポート] / [グループに関連付けられたレポート] リストに表示されます。

関連タスク	1338 ページ「レポートの作成方法」
関連情報	1336 ページ「SiteScope 管理レポートを使った作業」

ユーザ・インタフェース要素について以下に説明します。

UI 要素	説明
	子レポートの表示 ：選択したノードの直接の子レポートのみを表示します。
	すべての子孫レポートの表示 ：選択したノードのすべての子孫レポートを表示します。
	新規レポート 。設定するレポートの種類を選択できます。 [レポート] タブに追加されるのは管理レポートのみです（その他のレポート・タイプはすべてその場に応じて作成され、SiteScope には保存されません。[新規 SiteScope 管理レポート] のユーザ・インタフェースの詳細については、1343 ページ「[新規 SiteScope 管理レポート] / [管理レポートの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 注 ：このボタンは、[モニタのレポート] / [グループのレポート] テーブルでのみ使用できます。
	レポートの編集 ：選択した管理レポートのプロパティを編集できます。[管理レポートの編集] のユーザ・インタフェースの詳細については、1343 ページ「[新規 SiteScope 管理レポート] / [管理レポートの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	レポートのコピー 。選択したレポートのコピーを作成します。 注 ：このボタンは、[モニタのレポート] / [グループのレポート] テーブルでのみ使用できます。
	レポートの貼り付け 。ツリー内の選択した場所にレポートを貼り付けます。 注 ：このボタンは、[モニタのレポート] / [グループのレポート] テーブルでのみ使用できます。
	レポートを削除 。選択した管理レポートを [レポート] タブから削除します。

UI 要素	説明
	レポートの生成。 選択したモニタまたはグループの管理レポートを生成します。ユーザ・インターフェースの詳細については、1369 ページ「管理レポート」を参照してください。
	すべて選択： 表示されているすべてのレポートを選択します。
	選択を解除： 選択をクリアします。
タイプ	レポート・タイプを示します。
[タイトル]	SiteScope で認識されるレポートの名前。
[詳細]	レポートの詳細。
[有効]	このレポートの生成が有効かどうかを示します。
[パス]	このオブジェクトを対象とする祖先ノードへのリンクを表示します。 注： この列は、 [関連付けられたレポート] テーブルのみに表示されます。

[新規 SiteScope 管理レポート] / [管理レポートの編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、特定の期間のシステム可用性データのサマリを提供するレポートを作成できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタを右クリックして、[レポート] > [管理] を選択します。
重要な情報	レポートのテキスト・ボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コードを修正する修正アクションが行われます（たとえば、タグの不一致や、複数行にわたるため切り捨てられたコードなど）。悪意のある HTML コードや Javascript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。 ▶ タグ : script, object, param, frame, iframe。 ▶ on で始まる属性を含むタグは拒否される。例 : onhover。 ▶ 値に javascript が指定された属性。
関連タスク	1338 ページ「レポートの作成方法」
関連情報	▶ 1332 ページ「SiteScope レポートの概要」 ▶ 1340 ページ「[レポート] ページ」 ▶ 1369 ページ「管理レポート」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[レポートのタイトル]	この管理レポートのタイトルを入力します。この名前は、表示される管理レポート定義を識別するために使用されます。
[詳細]	(任意指定) このテキスト・ボックスは、レポート定義に関するその他の情報を記述するために使用します。たとえば、このレポートの目的、監視対象、設定日、読者などの情報を含みます。

レポートのターゲット

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[レポートのターゲット]	コンテキスト・メニュー・ツリーで、このレポートに含めるグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択します。コンテキスト・メニューには、現在選択されているコンテナおよびすべての子コンテナが含まれます。 標準設定値 ：現在のコンテナおよび選択されているすべての子要素。

表示設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[しきい値]	
[すべてのしきい値]	レポートに含まれているすべてのモニタのモニタ・エラー、警告、正常しきい値設定のテーブルを作成します。選択されている場合、このテーブルは最初のレポート・セクションに表示されます。 標準設定値 ：選択されていない
[エラーしきい値]	レポート期間中にモニタによって記録された個々のエラー読み取りのテーブルを作成します。 標準設定値 ：選択済み
[警告しきい値]	レポート期間中にモニタによって記録された個々の警告読み取りのテーブルを作成します。 標準設定値 ：選択済み
[正常しきい値]	レポート期間中にモニタによって記録された個々の正常読み取りのテーブルを作成します。 標準設定値 ：選択済み

UI 要素	説明
【稼働時間および読み取り】	
【稼働時間サマリおよび測定値サマリテーブル】	【稼働時間サマリ】 と 【測定値サマリ】 という 2 つのレポート・テーブルを作成します。これらのテーブルに含まれるデータの詳細については、1371 ページ「レポートの内容 - 管理レポート・ページ」を参照してください。 標準設定値 : 選択済み
【稼働時間: 警告を含む】	全体の稼働時間の計算に、警告としてレポートされるモニタ読み取りを含めます。 標準設定値 : 選択されていない
【稼働時間: 警告を無視する】	全体の 【稼働時間および読み取り】 のサマリ・セクションで警告としてレポートされるモニタ読み取りを含めないようにします。 注 : このオプションでは、テーブルの 【警告 %】 列が非表示になるだけで、稼働時間 % の計算は変更されません。 標準設定値 : 選択されていない
【稼働時間: エラーを無視する】	全体の 【稼働時間および読み取り】 のサマリ・セクションでエラーとしてレポートされるモニタ読み取りを含めないようにします。 注 : このオプションでは、テーブルの 【エラー %】 列が非表示になるだけで、稼働時間 % の計算は変更されません。 標準設定値 : 選択されていない
【一般】	
【測定値グラフ】	ドロップダウン・リストを使用して、グラフ・レポートに含めるグラフ測定値を選択します。オプションの詳細については、1355 ページ「グラフの測定値のオプション」を参照してください。

UI 要素	説明
[モニタ読み取り]	レポート期間中にモニタによって記録された個々の読み取り（エラー、正常、警告のすべての読み取りを含む）のテーブルを作成します。レポートの対象期間およびその期間中にモニタが実行された頻度によっては、このレポート・テーブルに空の「バケツ」が含まれる場合があります。 標準設定値：選択済み
[警告テーブル]	モニタに対して送信される警告のテーブルをレポートに含めるオプションを選択します。警告テーブル・レベルのオプションは次のとおりです。 ▶ 警告テーブルなし。 レポートに警告のテーブルは含まれません（標準設定）。 ▶ 基本警告テーブル。 送信された各警告の時間およびサマリ情報を表示します。 ▶ すべての警告に対する詳細警告テーブルの表示。 レポートに各警告の詳細な警告情報を表示します。 ▶ 失敗した警告に対する詳細警告テーブルの表示。 各警告の時間とサマリ情報、および失敗した各警告の完全診断のブレイクダウンを表示します。
[詳細モニタ情報]	各モニタについて収集したすべての情報をレポートに表示します。詳細情報を表示しない場合は、各モニタの主要なデータのみが表示されます。 標準設定値：選択されていない 例：URL シーケンス・モニタでこのボックスがチェックされている場合、シーケンスの各ステップのタイミング情報がレポートに表示されます。
[エラーの時刻]	レポート用に選択した各モニタを一覧表示するテーブル・サマリを作成し、レポート期間中にモニタの状態がエラーとして計算された時間（分単位）のサマリを表示します。 標準設定値：選択されていない

フィルタとスケジュールの設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
【モニタ フィルタ】	レポートに表示する、レポートのタイム・フレーム中に指定した状態になったモニタのサブセットを選択します。エラーまたは警告のモニタ、エラーのモニタ、警告のモニタ、正常だったモニタのみ、あるいはすべてのモニタを選択できます。 標準設定値：全モニタを表示 例：「エラーのモニタのみ表示」を選択すると、そのモニタがレポートの時間間隔中にエラーになった場合にのみレポート・データが表示されます。
【スケジュール フィルタ】	スケジュールの期間中にサンプルがある、モニタのデータのサブセットのみをレポートに表示するスケジュール・フィルタ・オプションを選択します。 標準設定値：レポートには、レポートの期間全体（毎日、終日）のデータが表示されます。 例：「平日、09:00～18:00」を選択すると、月曜日から金曜日の午前 9 時から午後 6 時までの期間のサンプルがある、選択したモニタのレポート・データが表示されます。すべての計算にはこのデータのみが使用されます。

UI 要素	説明
[レポートの対象期間]	監視データを表示する期間を選択します。設定した期間（時間単位）、過去 1 日、過去数日、過去 1 週間、過去 1 か月、または月の始まりから現在までのデータをレポートできます。 標準設定値：過去 1 日 注：毎日および過去 1 か月のレポートは、毎日予定の時間に生成されます。毎週のレポートは、日曜日の予定時刻に生成され、毎月のレポートは、1 か月分のデータが含まれるように、当月の翌月の 1 日に生成されます。
[レポート対象期間の最後]	ドロップダウン・リストから時間を選択して、レポートの終了時間を選択します。たとえば、午前 0 時から午前 0 時までレポートを実行できます。 標準設定値：レポートの実行時刻（指定時刻から開始され、レポートが生成された時刻に終了するレポートが生成されます）

レポート・フォーマット

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[ファイル形式]	このオプションでは、レポートの外観の一部をカスタマイズできます。次のオプションを使用できます。 ➤ 色付きの背景（標準設定） ➤ 色付きの背景、テーブルの枠線なし ➤ 白い背景

レポート配布

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[HTML 形式]	レポートを HTML 形式で送信するかどうかを選択します。SiteScope レポート・グラフィックを含めるには、このオプションを使用します。このオプションを選択しない場合は、テキスト形式のレポート・サマリのみが送信されます。 標準設定値 : 選択されていない
[レポートを電子メール アドレスに送信する]	生成されたレポートを電子メールで転送するには、生成時に毎回レポートを送信する宛先の電子メール・アドレスを入力します。複数の電子メール・アドレスにレポートを送信するには、電子メール・アドレスをカンマで区切ります。
[フォーマット テンプレート]	SiteScope で電子メール・メッセージを作成するときに使用するテンプレートを選択します。次のテンプレートから選択するか、いずれかのコピーを作成して、必要に応じてカスタマイズできます。 ▶ HistoryLongMail : 詳細な履歴レポートを送信するには、このオプションを選択します。ユーザ・リンクと管理リンクの両方が含まれます。 ▶ HistoryLongXMLMail : 詳細な履歴レポートを送信するには、このオプションを選択します。レポートおよび XML ファイルのユーザ・リンクと管理リンクの両方が含まれます。 ▶ HistoryMail : 履歴レポートを送信するには、このオプションを選択します。これが標準設定のオプションです。 ▶ HistoryMailAlertDetail : 電子メールで送信されるレポートにすべての警告を含めるには、このオプションを選択します。 ▶ HistoryMailNoLinks : リンクを含まないレポートを送信するには、このオプションを選択します。

UI 要素	説明
[カンマ区切りのファイル]	生成された管理レポートをカンマ区切りのテキスト・ファイルに保存する場合に選択します。このファイルは後でスプレッドシート・アプリケーションにインポートできます。 これらのファイルは自動的に <SiteScope のルート・ディレクトリ>\%htdocs ディレクトリに保存されます。自分のマシンに保存されているファイルの正確な場所を調べるには、レポートの [レポートの表示] タブをクリックして、[情報対象] 列にあるレポートの テキスト・リンク の上にポインタを移動します。Web ブラウザのステータス・バーにファイルの完全パスが表示されます。マシンに保存されているファイルを開くには、テキスト・リンク をクリックして [レポート] ページに移動します。[電子メール] テキスト・ボックスに電子メール・アドレスを入力すると、そのアドレスにカンマ区切りファイルのコピーが送信されます。 標準設定値: 選択されていない 注: カンマ区切りのファイルには、各モニタ読み取りに 2 つの列が作成されます。1 つには値と単位が含まれ、もう 1 つには値のみが含まれます。サードパーティ・アプリケーションではデータ値と単位を表すテキストが自動的に分離されない場合がありますが、この形式によってカンマ区切りデータをより簡単にそのようなアプリケーションにインポートできます。
[カンマ区切りのファイルを電子メールで送信]	テキスト・ボックスに電子メール・アドレスを入力すると、そのアドレスにファイルのコピーが送信されます。

UI 要素	説明
[XML ファイル]	生成された管理レポートを XML テキストファイルに保存するには、このボックスを選択します。これらのファイルは自動的に < SiteScope のルート・ディレクトリ > ディレクトリに保存されます。自分のマシンに保存されているファイルの正確な場所を調べるには、レポートの [レポートの表示] タブをクリックして、[情報対象] 列にあるレポートの xml リンクの上にポインタを移動します。Web ブラウザのステータス・バーにファイルの完全パスが表示されます。マシンに保存されているファイルを開くには、xml リンクをクリックして [レポート] ページに移動します。[電子メール] テキスト・ボックスに電子メール・アドレスを入力すると、そのアドレスにカンマ区切りファイルのコピーが送信されます。 標準設定値: 選択されていない 注: XML ファイルには、各モニタ読み取りに 2 つの列が作成されます。1 つには値と単位が含まれ、もう 1 つには値のみが含まれます。サードパーティ・アプリケーションではデータ値と単位を表すテキストが自動的に分離されない場合がありますが、この形式によって XML データをより簡単にそのようなアプリケーションにインポートできます。
[XML ファイルを電子メールで送信]	テキスト・ボックスに電子メール・アドレスを入力すると、そのアドレスに XML ファイルのコピーが送信されます。

計算メソッド

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[最良のケースの計算]	最良ケースのシナリオを使用して、モニタの稼働時間のパーセンテージ、警告のパーセンテージ、エラーのパーセンテージを計算するには、このオプションを選択します。このシナリオでは、最後の正常なモニタ実行からではなく、明確にエラーがレポートされた最初のモニタ実行から、モニタがエラーだった時間が計算されます。
[サンプリング間隔]	このタイム・スケール・オプションを使用して、モニタ読み取りの時間間隔を選択します。毎分 1 回から毎日 1 回の範囲から間隔を選択するか、自動スケールを使用できます。自動スケールを使用すると、SiteScope では特定のモニタの選択した期間に取得された読み取り数を判断し、管理レポートの適切な間隔が選択されます。 標準設定値 ：自動タイム スケール
[最大のグラフ値]	グラフに表示される最大値を選択するには、垂直スケール・オプションを選択します。特定のスケール値を選択すると、異なるモニタおよび時間のグラフとの比較が容易になります。 標準設定値 ：自動垂直スケール

管理設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[レポートの無効化]	このレポートの生成を一時的に無効にする場合に選択します。レポートをもう一度有効にするには、ボックスをクリアします。 標準設定値 : 選択されていない
[次の時間にレポートを生成 (HH:MM)]	この管理レポートを生成する時刻。レポートには、レポート実行時までの過去 1 日、1 週間、または 1 か月の情報が含まれます。たとえば、毎日のレポートを 18:00 (午後 6 時) に生成する場合、前日の 18:00 から当日の 18:00 までの間に生成されたデータが含まれます。標準設定値は 00:00 (午前 0 時) です。 標準設定値 : 04:00 注 : SiteScope 管理レポートを生成すると、モニタ数とレポートの対象期間によっては SiteScope の全体的なパフォーマンスと応答性に一時的に影響する場合があります。全体の監視タスクおよび負荷と比較して、オフピークの時間帯にレポートが生成されるようにスケジュール設定してください。毎日多数のレポートを生成する場合は、複数のレポートの [次の時間にレポートを生成] の値をずらして設定することを検討してください。

タグの検索/フィルタ

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<タグ名と値>	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、108 ページ「検索/フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
[タグの追加]	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、119 ページ「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注：棒グラフは、すべてのブラウザ・タイプから印刷できるように、標準 HTML を使用して生成されます。折れ線グラフは java アプレットを使用して生成され、すべてのブラウザからは直接印刷できない場合があります。

グラフの測定値のオプション

この表では、レポートに含めることができるグラフの測定値のオプションについて説明します。

グラフ	説明
なし - グラフなし	レポートにグラフは含まれません。レポートには、選択した表形式のデータ内容のみが含まれます。
棒グラフ - 測定値ごとに 1 つのグラフ	この棒グラフ・オプションを選択すると、指定したタイム・フレームで、グラフごとおよびモニタごとに 1 つの測定値タイプが表示されます。複数のモニタをレポートする場合、各モニタの測定値タイプごとに 1 つの棒グラフが生成されるので、グラフの数が最も多くなります。
折れ線グラフ - 測定値ごとに 1 つのグラフ	この折れ線グラフ・オプションを選択すると、1 つのモニタの測定値タイプごとに折れ線グラフが表示されます。棒グラフ・オプションと同様に、測定値タイプの互換性に関係なく、レポートの対象として選択した各モニタの測定値タイプごとに 1 つの折れ線グラフが生成されるので、折れ線グラフの数が最も多くなります。
折れ線グラフ - モニタインスタンスごとのグループ分け	この折れ線グラフ・オプションを選択すると、1 つのモニタ・インスタンスからのすべての測定値が、モニタごとに 1 つのグラフにグループ分けされます。実際に生成される折れ線グラフの数は、モニタでモニタ実行 (Microsoft Windows リソース・モニタ, UNIX リソース・モニタなどのタイプ) ごとに複数の測定値が記録されるかどうか、および測定値タイプが相互に互換するかどうかによって異なります。測定値タイプに互換性がない場合は、別々のグラフが生成されます。

グラフ	説明
折れ線グラフ - 同じ測定値の種類ของกลุ่ม分け	複数のモニタ・インスタンスで収集された同じ測定値タイプを 1 つのグラフにプロットするには、このオプションを選択します。折れ線グラフは、レポートの対象として選択したモニタの数に関係なく、互換性のある測定値タイプのセットごとに生成されます。
折れ線グラフ - 互換性のある測定値のグループ分け	選択したモニタからの互換性のある測定値をすべて 1 つのグラフに表示するには、このオプションを選択します。このオプションは、生成される折れ線グラフの合計数を最小化することを目的としています。生成されるグラフの数は、選択したモニタ・タイプおよびそれらのモニタによって収集される測定値タイプの互換性によります。レポートで選択されたすべてのモニタが同じタイプ、たとえば URL モニタである場合、各モニタを色分けした線で示す 1 つのグラフが生成されます。

注：棒グラフは、すべてのブラウザ・タイプから印刷できるように、標準 HTML を使用して生成されます。折れ線グラフは **java** アプレットを使用して生成され、すべてのブラウザからは直接印刷できない場合があります。

[新規 SiteScope クイック レポート] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、特定の期間にわたるモニタまたはモニタ・グループの 1 回限りの SiteScope 管理レポートを作成できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタを右クリックして、[レポート] > [クイック] を選択します。レポートのプロパティを設定し、[レポートの生成] をクリックします。 あるいは、モニタを選択して SiteScope ダッシュボードの [クイック レポート]  ボタンをクリックすることで、事前設定を使用してレポートを作成できます。
重要な情報	▶ クイック・レポートの時間間隔は、自動的には増分されません。つまり、クイック・レポートには必ず、レポート定義で指定した [レポート期間] の絶対的な間隔のデータが含まれます。クイック・レポートでより最近のデータを表示するには、[レポート期間] 設定を編集します。 ▶ BSM で作業する場合、システム可用性管理のクイック・レポート定義は、BSM コンテキストでのみ格納されます。クイック・レポート定義は SiteScope サーバに格納されず、サーバ上に存続しません。
関連タスク	1338 ページ「レポートの作成方法」
関連情報	▶ 1332 ページ「SiteScope レポートの概要」 ▶ 1373 ページ「クイック・レポート」

レポートのターゲット

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[レポートのターゲット]	コンテキスト・メニュー・ツリーで、このレポートに含めるグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択します。コンテキスト・メニューには、現在選択されているコンテナおよびすべての子コンテナが含まれます。 標準設定値：現在のコンテナおよび選択されているすべての子要素。

表示設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[しきい値]	
[すべてのしきい値]	レポートに含まれているすべてのモニタのモニタ・エラー、警告、正常しきい値設定のテーブルを作成します。選択されている場合、このテーブルは最初のレポート・セクションに表示されます。 標準設定値 ：選択されていない
[エラーしきい値]	レポート期間中にモニタによって記録された個々のエラー読み取りのテーブルを作成します。 標準設定値 ：選択済み
[警告しきい値]	レポート期間中にモニタによって記録された個々の警告読み取りのテーブルを作成します。 標準設定値 ：選択済み
[正常しきい値]	レポート期間中にモニタによって記録された個々の正常読み取りのテーブルを作成します。 標準設定値 ：選択済み
[稼働時間および読み取り]	
[稼働時間サマリおよび測定値サマリテーブル]	[稼働時間サマリ] と [測定値サマリ] という 2 つのレポート・テーブルを作成します。これらのテーブルに含まれるデータの詳細については、1374 ページ「レポートの内容」を参照してください。 標準設定値 ：選択済み
[稼働時間：警告を含む]	全体の稼働時間の計算に、警告としてレポートされるモニタ読み取りを含めます。 標準設定値 ：選択されていない

UI 要素	説明
【稼働時間: 警告を無視する】	全体の [稼働時間および読み取り] のサマリ・セクションで警告としてレポートされるモニタ読み取りを含めないようにします。 標準設定値: 選択されていない 注: このオプションでは、テーブルの [警告 %] 列が非表示になるだけで、稼働時間 % の計算は変更されません。
【稼働時間: エラーを無視する】	全体の [稼働時間および読み取り] のサマリ・セクションでエラーとしてレポートされるモニタ読み取りを含めないようにします。 標準設定値: 選択されていない 注: このオプションでは、テーブルの [エラー %] 列が非表示になるだけで、稼働時間 % の計算は変更されません。
【一般設定】	
【測定値グラフ】	ドロップダウン・リストを使用して、グラフ・レポートに含めるグラフ測定値を選択します。オプションの詳細については、1355 ページ「グラフの測定値のオプション」を参照してください。 標準設定値: 棒グラフ - 測定値ごとに 1 つのグラフ
【モニタ読み取り】	レポート期間中にモニタによって記録された個々の読み取り（エラー、正常、警告のすべての読み取りを含む）のテーブルを作成します。レポートの対象期間およびその期間中にモニタが実行された頻度によっては、このレポート・テーブルに空の「バケツ」が含まれる場合があります。 標準設定値: 選択済み

UI 要素	説明
[警告テーブル]	モニタに対して送信される警告のテーブルをレポートに含めるオプションを選択します。警告テーブル・レベルのオプションは次のとおりです。 ▶ 警告テーブルなし：レポートに警告のテーブルは含まれません（標準設定）。 ▶ 基本警告テーブル：送信された各警告の時間およびサマリ情報を表示します。 ▶ すべての警告に対する詳細警告テーブルの表示：レポートに各警告の詳細な警告情報を表示します。 ▶ 失敗した警告に対する詳細警告テーブルの表示：各警告の時間とサマリ情報，および失敗した各警告の完全診断のブレイクダウンを表示します。
[詳細モニタ情報]	各モニタについて収集したすべての情報をレポートに表示します。詳細情報を表示しない場合は，各モニタの主要なデータのみが表示されます。 例：URL シーケンス・モニタでこのボックスがチェックされている場合，シーケンスの各ステップのタイミング情報がレポートに表示されます。 標準設定値：選択されていない
[エラーの時刻]	レポート用に選択した各モニタを一覧表示するテーブル・サマリを作成し，レポート期間中にモニタの状態がエラーとして計算された時間（分単位）のサマリを表示します。 標準設定値：選択されていない

フィルタとスケジュールの設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[モニタ フィルタ]	レポートに表示する、レポートのタイム・フレーム中に指定した状態になったモニタのサブセットを選択します。エラーまたは警告のモニタ、エラーのモニタ、警告のモニタ、OK のモニタのみ、あるいはすべてのモニタを選択できます。 標準設定値: 全モニタを表示 例: [エラーのモニタのみ表示] を選択すると、そのモニタがレポートの時間間隔中にエラーになった場合にのみレポート・データが表示されます。
[スケジュール フィルタ]	スケジュールの期間中にサンプルがある、モニタのデータのサブセットのみをレポートに表示するスケジュール・フィルタ・オプションを選択します。 標準設定値: レポートには、レポートの期間全体（毎日、終日）のデータが表示されます。 例: [平日, 09:00~18:00] を選択すると、月曜日から金曜日の午前 9 時から午後 6 時までの期間のサンプルがある、選択したモニタのレポート・データが表示されます。すべての計算にはこのデータのみが使用されます。
[レポート期間]	監視データを表示する期間を指定します。レポートの対象範囲の開始時間を [開始] ボックスに入力し、終了時間を [終了] ボックスに入力します。 標準設定値: 期間は、クイック・レポートが生成された時刻の 1 時間前から現在の時刻までです。監視データをクイック・レポートに含める標準設定の期間を設定するには、[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [レポート設定] の [レポートの標準設定時間 (時間)] を設定します。 注: 時間は 24 時間形式で入力する必要があります。

レポート・フォーマット

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[レポート形式]	レポートの表示に使用する形式を、HTML 形式、テキスト形式、または XML 形式から選択します。 標準設定値 : HTML 形式
[ファイル形式]	このオプションでは、レポートの外観の一部をカスタマイズできます。オプションは次のとおりです。 ➤ 色付きの背景 (標準設定) ➤ 色付きの背景, テーブルの枠線なし ➤ 白い背景

レポート配布

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[レポートを電子メール アドレスに送信する]	生成されたレポートを電子メールで転送するには、生成時に毎回レポートを送信する宛先の電子メール・アドレスを入力します。複数の電子メール・アドレスにレポートを送信するには、電子メール・アドレスをカンマで区切ります。

計算メソッド

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[最良のケースの計算]	最良ケースのシナリオを使用して、モニタの稼働時間のパーセンテージ、警告のパーセンテージ、エラーのパーセンテージを計算するには、このオプションを選択します。このシナリオでは、最後の正常なモニタ実行からではなく、明確にエラーがレポートされた最初のモニタ実行から、モニタがエラーだった時間が計算されます。 標準設定値: 選択されていない
[サンプリング間隔]	このタイム・スケール・オプションを使用して、モニタ読み取りの時間間隔を選択します。毎分 1 回から毎日 1 回の範囲から間隔を選択するか、自動スケールを使用できます。自動スケールを使用すると、SiteScope では特定のモニタの選択した期間に取得された読み取り数を判断し、管理レポートの適切な間隔が選択されます。 標準設定値: 自動タイム スケール
[最大のグラフ値]	グラフに表示される最大値を選択するには、垂直スケール・オプションを選択します。特定のスケール値を選択すると、異なるモニタおよび時間のグラフとの比較が容易になります。 標準設定値: 自動垂直スケール



【新規 SiteScope モニタ レポート】 ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、1 つ以上のモニタ・グループで定義されたモニタの詳細情報を含むレポートを作成できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタを右クリックして、[レポート] > [モニタ] を選択します。
関連タスク	1338 ページ「レポートの作成方法」
関連情報	▶ 1332 ページ「SiteScope レポートの概要」 ▶ 1377 ページ「モニタ・サマリ・レポート」

【レポートのターゲット】

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
レポートのターゲット	コンテキスト・メニュー・ツリーで、このレポートに含めるグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択します。コンテキスト・メニューには、現在選択されているコンテナおよびすべての子コンテナが含まれます。 標準設定値 ：現在のコンテナおよび選択されているすべての子要素。

表示設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
【表示カラム】	レポート・列に表示するモニタ情報を選択します。[無効] や [頻度] などの特定のオプションが選択されている場合、または [モニタの詳細] などの値が指定されている場合にのみ、選択したパラメータのデータがレポートに表示されます。オプションや値が特定のモニタ・セットアップで定義されていない場合、そのモニタのパラメータの列は空白になります。 注：隣接する一連のグループを選択するには、SHIFT キーを押しながら選択します。隣接していない複数の項目を選択するには、CTRL キーを押しながらクリックします。
【パラメータの表示】	各モニタに定義されたパラメータをレポートに含める場合に選択します。このオプションには、上記のオプションのような個々の列ではなく、1 つのテーブルのセルで各選択モニタに定義したアクティブなオプションのリストが含まれます。 標準設定値：選択済み
【並べ替え基準】	レポートの並べ替えキーとして使用するモニタのパラメータを選択します。 標準設定値：モニタ タイプ
【並べ替え順序】	レポートの並べ替えに使用する順序を選択します。たとえば、レポートをモニタ・タイプのアルファベット順に並べ替えるには、[モニタ タイプ] を選択して、[昇順] 並べ替え順序を選択します。 標準設定値：昇順

設定のエクスポート

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[ファイルにエクスポート]	SiteScope でモニタ・サマリ・レポートのデータをテキスト・ファイルにエクスポートする場合，このボックスを選択します。 標準設定値 ：選択されていない
[ファイル名]	[ファイルにエクスポート] オプションが有効な場合，SiteScope によって，ここに指定したファイル名にデータが選択済みテキスト形式で書き込まれます。ファイルは <SiteScope のルート・ディレクトリ>%htdocs ディレクトリに書き込まれます。 標準設定値 ：monSummary
[ファイル形式]	エクスポート・ファイルの形式を選択します。カンマ区切りのテキスト，タブ区切りのテキスト，または HTML から選択できます。 標準設定値 ：カンマ区切り (csv)

[新規 SiteScope 警告レポート] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、特定の期間に送信された SiteScope 警告を表示するために使用するレポートを作成できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタを右クリックして、[レポート] > [警告] を選択します。
関連タスク	1338 ページ「レポートの作成方法」
関連情報	▶ 1332 ページ「SiteScope レポートの概要」 ▶ 1379 ページ「警告レポート」

[レポートのターゲット]

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
レポートのターゲット	コンテキスト・メニュー・ツリーに、このレポートに含めるグループまたはモニタ、あるいはその両方が表示されます。コンテキスト・メニューには、現在選択されているコンテナおよびすべての子コンテナが含まれます。 注： 選択したコンテナのグループまたはモニタはレポートから削除できません。

警告レポート設定

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
【警告のタイプ】	レポートに含める警告のタイプを選択します。 注： 隣接する一連のグループを選択するには、SHIFT キーを押しながら選択します。隣接していない複数の項目を選択するには、CTRL キーを押しながらクリックします。
【詳細レベル】	レポートに含める詳細のレベルを選択します。次のオプションを使用できます。 ▶ 基本。 送信された各警告の時間およびサマリ情報を表示します（標準設定）。 ▶ すべての警告についての詳細。 レポートに各警告の詳細な警告情報を表示します。 ▶ 失敗した警告についての詳細。 各警告の時間とサマリ情報、および失敗した各警告の完全診断のブレイクダウンを表示します。
【警告時間帯】	レポートの対象期間を指定します。レポート対象範囲の開始日時を【開始】ボックスで、終了日時を【終了】ボックスで選択または入力します。 標準設定値： 警告時間帯は、警告レポートが生成された時刻の 1 時間前から現在の時刻までです。 注： 時刻は 24 時間形式で入力する必要があります。

管理レポート

このレポートには、特定の期間のモニタおよびモニタ・グループの、インフラストラクチャの可用性およびパフォーマンス・データのサマリと特定の詳細情報が表示されます。管理レポートは、新たに出現した傾向を検出し、危機的狀態になる前に潜在的問題を修正するために使用します。

[テーブル形式](#)
[エラーリスト](#)
[警告リスト](#)
[良好リスト](#)

[レポートのインデックス](#)

Core Weekly Report

(情報 10/12/02 16:55 ~ 10/12/03 16:55)

稼動時間サマリ

名前	稼動時間 %	エラー %	警告 %	最終
Cpu monitor on localhost	100	0	0	good
Disk Space: D on SiteScope サーバ	100	0	0	good
Directory: c:\ on SiteScope サーバ	100	0	0	good
FTP: localhost	89.09	10.91	0	good

測定値サマリ

名前	測定値	Max	Avg	最終
Cpu monitor on localhost	utilization	24%	0.85%	8%
Disk Space: D on SiteScope サーバ	percent full	58%	58%	58%
Directory: c:\ on SiteScope サーバ	total of file sizes	0 bytes	0 bytes	0 bytes
Directory: c:\ on SiteScope サーバ	Last time since modified	n/a	n/a	n/a
FTP: localhost	round trip time	0.06 sec	0.05 sec	0.033 sec

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタ・コンテナを右クリックして、[レポート] > [管理] を選択します。レポートのプロパティを設定し、[OK] をクリックします。[レポート] タブでレポートを選択して、[レポートの生成]  ボタンをクリックします。表示するレポート期間の日付が記述されたリンクをクリックします。生成されたレポートがない場合、または更新されたレポートを作成する場合は、[生成] ボタンをクリックします。
重要な情報	▶ 管理レポートでは、英語以外のラベルはサポートされていません。 ▶ インジケータ値は SiteScope レポートには表示されません。
関連タスク	1338 ページ「レポートの作成方法」
関連情報	▶ 1336 ページ「SiteScope 管理レポートを使った作業」 ▶ 1343 ページ「[新規 SiteScope 管理レポート] / [管理レポートの編集] ダイアログ・ボックス」 ▶ 1340 ページ「[レポート] ページ」

レポートの内容 - インデックス・ページ

管理レポートのインデックス・ページに含まれている要素は次のとおりです。

UI 要素	説明
[最新のレポート]	現在選択されているモニタまたはグループの最新の管理レポートを表示する場合にクリックします。
[情報対象 <レポートの日付と時刻>]	現在選択されているモニタまたはグループの、リンクで指定されている期間の管理レポートを表示する場合にクリックします。管理レポート・ページの詳細については、下の「レポートの内容 - 管理レポート・ページ」を参照してください。
[生成]	レポートの生成が予定されている日時に関係なく、現在選択されているモニタまたはグループのレポートを新規作成する場合にクリックします。

レポートの内容 - 管理レポート・ページ

管理レポート・ページに含まれている要素は次のとおりです。

UI 要素	説明
【テーブル形式】	現在選択しているレポートでテーブル形式の測定値データに移動するには、 【テーブル形式】 リンクをクリックします。
【エラー リスト】	現在選択しているレポートでエラー状態のモニタのリストに移動するには、 【エラー リスト】 リンクをクリックします。
【警告リスト】	現在選択しているレポートで警告状態のモニタのリストに移動するには、 【警告リスト】 リンクをクリックします。
【良好リスト】	現在選択しているレポートで正常状態のモニタのリストに移動するには、 【良好リスト】 リンクをクリックします。
【レポートのインデックス】	管理レポートのインデックスに移動するには、 【レポートのインデックス】 リンクをクリックします。管理レポートのインデックス・ページの詳細については、1370 ページ「レポートの内容 - インデックス・ページ」を参照してください。
【稼働時間サマリ】	このテーブルには、次が表示されます。 ▶ 名前。 レポートに含まれているモニタの名前。 ▶ 稼働時間 %。 正常であるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。 ▶ 警告 %。 警告であるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。 ▶ エラー %。 エラーであるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。 ▶ 最終。 レポート期間のモニタの最終読み取り値。

UI 要素	説明
[測定値サマリ]	このテーブルには、次が表示されます。 ▶ 名前：レポートに含まれているモニタの名前。 ▶ 測定値。監視対象のパラメータ（エラー条件）。 ▶ Max。レポート期間中に測定値パラメータについて記録された最大値。 ▶ Avg。レポート期間中に記録された読み取りの平均値。 ▶ 最終：レポート期間のモニタの最終読み取り値。
<測定値グラフ>	レポート期間中に監視された各インスタンスのグラフ形式の測定値データ。
<測定値テーブル>	レポート期間中に監視された各インスタンスの測定値データを 30 分単位でテーブル形式で表示したもの。赤または黄色で強調表示されたエントリは、測定値がモニタのエラーまたは警告ステータスのしきい値を超えたことを示します。青はモニタが無効になっていることを示します。
<エラー・リスト・テーブル>	モニタのエラー・ステータスしきい値を超えたモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは赤で強調表示されます。
<警告リスト・テーブル>	モニタの警告ステータスしきい値を超えたモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは黄色で強調表示されます。
<良好リスト・テーブル>	モニタの正常ステータスしきい値内のモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは緑で強調表示されます。

🔍 クイック・レポート

このレポートには、特定の期間のモニタおよびモニタ・グループの、インフラストラクチャの可用性およびパフォーマンス・データのサマリと特定の詳細情報が表示されます。クイック・レポートは、その場に応じて生成され、SiteScope 設定データには保存されません。

ライセンス タイプ/ステータス: ポイント ライセンス (59 日間有効), ライセンス ポイント合計 500; 使用ポイント 6。

[テーブル形式](#)
[エラーリスト](#)
[警告リスト](#)
[良好リスト](#)

[Close Window](#)

複数のモニタ の サマリ

(情報 10/12/03 15:59 ~ 10/12/03 16:59)

稼働時間サマリ

名前	稼働時間 %	エラー %	警告 %	最終
Ping: 1.1.1.1	0	0	0	データはありません
Log Event Checker	0	0	0	データはありません
Cpu monitor on localhost	100	0	0	good
Directory: c:\ on SiteScope サーバ	100	0	0	good
Disk Space: D on SiteScope サーバ	100	0	0	good
FTP: localhost	92.33	7.67	0	good
BAC Integration Configuration	0	0	0	データはありません
Health of SiteScope Server	100	0	0	good

測定値サマリ

名前	測定値	Max	Avg	最終
Ping: 1.1.1.1	round trip time	n/a	n/a	n/a
Log Event Checker	matches/min	n/a	n/a	n/a
Log Event Checker	lines/min	n/a	n/a	n/a
Cpu monitor on localhost	utilization	8%	3.17%	8%

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタ・コンテナを右クリックして、[レポート] > [クイック] を選択します。レポートのプロパティを設定し、[レポートの生成] をクリックします。 あるいは、モニタを選択して、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [クイック レポート]  ボタンをクリックすることで、事前定義されている設定を使用してレポートを作成できます。
重要な情報	▶ クイック・レポートの時間間隔は、自動的に増分されません。つまり、レポートには必ず、レポート定義で指定した [レポート期間] の絶対的な間隔のデータが含まれます。クイック・レポートでより最近のデータを表示するには、[レポート期間] 設定を編集します。 ▶ BSM で作業する場合、システム可用性管理のクイック・レポート定義は、BSM コンテキストでのみ格納されます。クイック・レポート定義は SiteScope サーバに格納されず、サーバ上に存続しません。
関連タスク	1338 ページ「レポートの作成方法」
関連情報	1357 ページ「[新規 SiteScope クイック レポート] ダイアログ・ボックス」

レポートの内容

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<ライセンスの詳細>	ページ上部にライセンスの詳細が表示されます。これには、SiteScope のライセンス・カテゴリ、使用可能なモニタ・ポイント数、ライセンスの残り日数が含まれます。
[テーブル形式]	現在選択しているレポートでテーブル形式の測定値データに移動する場合にクリックします。
[エラー リスト]	現在選択しているレポートでエラー状態のモニタのリストに移動する場合にクリックします。

UI 要素	説明
[警告リスト]	現在選択しているレポートで警告状態のモニタのリストに移動する場合にクリックします。
[良好リスト]	現在選択しているレポートで正常状態のモニタのリストに移動する場合にクリックします。
[稼働時間サマリ]	このテーブルには、次が表示されます。 ▶ 名前 : レポートに含まれているモニタの名前。 ▶ 稼働時間 % : 正常であるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。 ▶ 警告 % : 警告であるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。 ▶ エラー % : エラーであるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。 ▶ 最終 : レポート期間のモニタの最終読み取り値。
[測定値サマリ]	このテーブルには、次が表示されます。 ▶ 名前 : レポートに含まれているモニタの名前。 ▶ 測定値 : 監視対象のパラメータ (エラー条件)。 ▶ Max : レポート期間中に測定値パラメータについて記録された最大値。 ▶ Avg : レポート期間中に記録された読み取りの平均値。 ▶ 最終 : レポート期間のモニタの最終読み取り値。
<測定値グラフ>	レポート期間中に監視された各インスタンスのグラフ形式の測定値データ。

UI 要素	説明
<測定値テーブル>	レポート期間中に監視された各インスタンスの測定値データを 30 分単位でテーブル形式で表示したもの。赤または黄色で強調表示されたエントリは、測定値がモニタのエラーまたは警告ステータスのしきい値を超えたことを示します。青はモニタが無効になっていることを示します。
<エラー・リスト・テーブル>	モニタのエラー・ステータスしきい値を超えたモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは赤で強調表示されます。
<警告リスト・テーブル>	モニタの警告ステータスしきい値を超えたモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは黄色で強調表示されます。
<良好リスト・テーブル>	モニタの正常ステータスしきい値内のモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは緑で強調表示されます。

モニタ・サマリ・レポート

このレポートには、レポートに含めるように選択したグループのモニタの構成および現在の設定に関する情報が表示されます。このレポートは、モニタのセットアップ情報およびモニタ・グループの編成と構成を表示するために使用します。たとえば、モニタのスキップで問題がある場合は、モニタ実行頻度（**[頻度]**設定）を確認し、比較できます。また、警告に影響する可能性があるモニタの依存関係を確認するためにレポートを使用することもできます。

SiteScope Monitor Summary Report

Group	name	class	frequency	disabled	schedule
Health	BAC Integration Configuration	BAC Integration Configuration	1 day		
Health	BAC Integration Statistics	BAC Integration Statistics	100 seconds		
Multiple Monitors	BAC Integration Statistics	BAC Integration Statistics	100 seconds		
Health	Connection Statistics Monitor	Connection Statistics Monitor	10 minutes		
Windows monitors for localhost	Cpu monitor on localhost	CPU Utilization	10 minutes		
Windows monitors for localhost	Directory: c:\ on SiteScope サーバ	Directory	10 minutes		
Windows monitors for localhost	Disk Space: D on SiteScope サーバ	Disk Space	10 minutes		
Windows monitors for localhost	FTP: localhost	FTP	10 minutes		
Health	Health of SiteScope Server	Health of SiteScope Server	5 minutes		
Health	Log Event Checker	Log Event Health Monitor	10 minutes		
Multiple Monitors	Log Event Checker	Log File	10 minutes		
Health	Monitor Load Checker	Monitor Load Monitor	100 seconds		
Multiple Monitors	Ping: 1.1.1.1	Ping	10 minutes		
Health	SSL Certificates State	SSL Certificates Status	1 day		

[ウィンドウを開く](#)

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタ・コンテナを右クリックして、[レポート] > [モニタ] を選択します。レポートのプロパティを設定し、[レポートの生成] をクリックします。
関連タスク	1338 ページ「レポートの作成方法」
関連情報	1364 ページ「[新規 SiteScope モニタ レポート] ダイアログ・ボックス」

レポートの内容

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
[Group]	モニタが属するグループ名。
[Name]	各モニタの表示名またはテキスト説明。
[Class]	モニタ・タイプ。
[Frequency]	モニタに設定されている実行頻度。
[Disabled]	モニタが無効かどうかを示します。
[依存]	このモニタの実行が他のモニタの状態に依存する場合は、依存する側のモニタを一覧表示します。
[ポイント]	モニタ・インスタンスによって使用されるライセンス・ポイントの数。
[OID]	このモニタのオブジェクト ID。
[スケジュール]	標準設定以外のスケジュールが選択されている場合は、モニタのスケジュール。
[エラー頻度]	[エラー頻度] オプションが選択されている場合は、エラー条件をレポートしたモニタの監視間隔（秒単位）。
[タイムアウト]	モニタのタイムアウト設定。
[エラーの検証]	[エラーの検証] オプションが選択されている場合は、[On] が表示されます。このオプションを選択すると、モニタでエラーが検出された場合にモニタを自動的に再実行します。
[モニタの詳細]	[モニタの詳細] ボックスのモニタのテキスト説明。
[しきい値]	モニタ・インスタンスのしきい値条件。

警告レポート

このレポートには、選択したコンテナのモニタに対して指定した期間中に生成された SiteScope 警告に関する情報が表示されます。

警告 (SiteScope) 10/12/03 16:08 ~ 10/12/03 17:08

Time	タイプ	メッセージ	モニタ	グループ
10/12/03 16:47	電子メール警告が送信されませんでした	test@yahoo.com, MISSING_MAIL_SERVER	FTP: localhost	Windows monitors for localhost
10/12/03 16:47	イベント ログ警告が実行されました	C:\SiteScope\tools\perfex.exe *3180 -e "Group: Windows monitors for localhost, Name: FTP: localhost, Status: ファイルが見つかりません," "1000" 0 error "SiteScope" localhost (0)	FTP: localhost	Windows monitors for localhost
10/12/03 17:07	サウンド警告が再生されました	Default	FTP: localhost	Multiple Monitors
10/12/03 17:07	サウンド警告が再生されました	Default	FTP: localhost	Multiple Monitors
10/12/03 17:08	サウンド警告が再生されました	Default	FTP: localhost	Multiple Monitors

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタ・コンテナを右クリックして、[レポート] > [警告] を選択します。レポートのプロパティを設定し、[レポートの生成] をクリックします。
関連タスク	1338 ページ「レポートの作成方法」
関連情報	1367 ページ「[新規 SiteScope 警告レポート] ダイアログ・ボックス」

レポートの内容

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
<レポートのタイトル>	レポートのタイトルには、レポートが作成されたモニタ・グループ・コンテナまたは個々のモニタの名前、およびレポートの対象期間が含まれます。
[Time]	警告が起動された時刻。
[Type]	警告アクションのタイプ。
[Message]	警告のメッセージのタイプ（標準、alarmなど）。
[Monitor]	警告が起動されたモニタの名前。
[Group]	警告が起動されたグループの名前。

注釈ツール

このツールを使用して、表示しているレポートのスナップショットに注釈を追加して、重要な領域を強調表示できます。注釈ツールは、ベースライン・モニタ測定値グラフを表示しているときに使用できます。注釈オプションを使用してスナップショットをカスタマイズできます。

注釈メニュー・バーの要素で次を行うことができます。

- ▶ スナップショットの外観を変更します。
- ▶ 注釈レポートを保存、印刷、電子メールで送信します。
- ▶ スナップショットに追加された注釈のテキストの外観をカスタマイズします。これらの要素は、テキスト・ツール・ボタン  が選択されている場合にのみ有効です。

アクセス方法	ページの右側にある 注釈 ボタン  をクリックします。
重要な情報	注釈ツールを使用するには、マシンに Sun JRE プラグイン 1.6.0_x （推奨される最新バージョン）がインストールされている必要があります。プラグインがマシンにインストールされていない場合は、インストールを促すメッセージが表示されます。
関連情報	▶ 1166 ページ「サーバ中心のレポートの生成」 ▶ 1176 ページ「サーバ中心のレポート」 ▶ 333 ページ「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」

注釈オプション

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
	パン ツール ：スナップショットに移動します。
	選択ツール ：スナップショットの特定の領域を選択します。

UI 要素	説明
	図形ツール：スナップショットに図形を追加します。図形ツール・ボタンをクリックすると、次の図形ボタンが有効になります。 ➤  四角形：スナップショットの特定の領域を四角形でマークします。 ➤  塗りつぶした四角形：スナップショットの特定の領域を塗りつぶした四角形でマークします。 ➤  楕円形：スナップショットの特定の領域を楕円形でマークします。 ➤  塗りつぶした楕円形：スナップショットの特定の領域を塗りつぶした楕円形でマークします。 ➤  角丸四角形：スナップショットの特定の領域を角丸四角形でマークします。 ➤  塗りつぶした角丸四角形：スナップショットの特定の領域を塗りつぶした角丸四角形でマークします。 カスタマイズ。このボタンを選択すると、インタフェースの次の各部分を使用して線の外観をカスタマイズできます。 ➤ 線の種類。追加する線の種類を選択します。次のオプションがあります。 ➤ 実線 ➤ 点線 ➤ 線の幅。注釈内の線の幅をピクセル単位で選択します。

UI 要素	説明
	線ツール：線ツールが有効になります。このツールは、選択したスナップショットの領域を線でマークします。 カスタマイズ：このボタンを選択すると、インタフェースの次の各部分を使用して線の外観をカスタマイズできます。 ▶ 線の種類。追加する線のスタイルを選択します。次のオプションがあります。 ▶ 標準の線 ▶ エンドポイント付きの線 ▶ 矢印付きの線 ▶ 線の種類：追加する線の種類を選択します。次のオプションがあります。 ▶ 実線 ▶ 点線 ▶ 線の幅：注釈内の線の幅をピクセル単位で選択します。
	テキスト ツール：スナップショットにテキストを追加します。 例：レポートの特定の領域をマークしている線の上に「これは問題のあるトランザクションです」という構文を追加します。

UI 要素	説明
[境界線と塗りつぶしの色]	該当の四角形を選択して、注釈の境界線と塗りつぶしの色を選択します。次の四角形を使用できます。 ➤ 上の四角形。線ツールで生成され、塗りつぶされていない図形に表示される線の色を選択します。 ➤ 下の四角形。図形を塗りつぶす色を選択します。 どちらの四角形をクリックしても、色を選択する次のタブを含むダイアログ・ボックスが表示されます。 ➤ Swatches ➤ HSB ➤ RGB
[不透明度]	不透明度バーをスライドして、注釈内で選択した図形の線、テキスト行、または図形の色濃さのレベルを選択します。 注： ➤ 不透明度が高いほど、より暗く表示されます。不透明度が低いほど、より明るく表示されます。 ➤ このフィールドは、図形ツール、ライン・ツール、またはテキスト・ツール・ボタンのいずれかが選択された場合に有効です。

注釈メニュー・バー

ユーザ・インタフェース要素を次に示します。

UI 要素	説明
	保存 : スナップショットをローカル・マシンに保存します。 注 : ▶ スナップショットは .png 形式で保存されます。 ▶ [マイ・ドキュメント]ディレクトリまたはそのサブ・ディレクトリに保存する場合, [新規フォルダ] アイコン  は選択できません。
	すべて選択 : スナップショットに追加されたすべての注釈を選択します。
	選択項目のクリア : すべての注釈をクリアします。
	元に戻す : スナップショットに対して実行した最新のアクションを元に戻します。
	やり直し . スナップショットに対して実行した最新のアクションのロール・バックをキャンセルします。
	ズーム イン : スナップショット・ビューを拡大します。
	ズーム アウト : スナップショット・ビューを縮小します。
	初期サイズの復元 : スナップショットを初期サイズに戻します。
	印刷 . スナップショットを印刷します。
	Send E-mail : 電子メールでスナップショットを送信します。
	リポジトリに保存 : スナップショットをレポート・マネージャにアップロードします。レポート・マネージャの詳細については、『Monitor Reference』（英語版）の「Report Manager Overview」を参照してください。 注 : このオプションは、SiteScope 機能から注釈ツールにアクセスしているときには使用できません。

UI 要素	説明
	ヘルプ : 現在表示しているページのヘルプをオンライン・ドキュメントで表示します。
	太字 : テキストを太字にします。 注 : このフィールドは, [テキスト ツール] ボタン  を選択するときのみ有効になります。
	斜体 : テキストを斜体にします。 注 : このフィールドは, [テキスト ツール] ボタン  を選択するときのみ有効になります。
	下線 : テキストに下線を引きます。 注 : このフィールドは, [テキスト ツール] ボタン  を選択するときのみ有効になります。
	アンチエイリアス : テキストまたは注釈行のピクセルの読み込みを調整し, 滑らかに表示されるようにします。 注 : このフィールドは, [テキスト ツール] ボタン  を選択するときのみ有効になります。
<フォント ファミリ>	レポート内のテキストのフォントを選択します。 注 : このフィールドは, [テキスト ツール] ボタン  を選択するときのみ有効になります。
<フォント サイズ>	レポート内のフォントのサイズを選択します。 注 : このフィールドは, [テキスト ツール] ボタン  を選択するときのみ有効になります。

索引

A

Active Directory

監視ソリューション 979

Active Directory ソリューション・テンプレート
デプロイ 982

AIX Host ソリューション・テンプレート
デプロイ 988

AIX ホスト, 監視ソリューション 985

API, SiteScope 36

B

BSM 統合設定 1194

BSM 統合統計 1196, 1197

[BSM 統合プリファレンス] ダイアログ・
ボックス 678

BSM 統合プリファレンスの設定
制限事項とトラブルシューティング 151

Business Service Management

SiteScope データの転送 126

SiteScope の登録 123, 661, 669

SiteScope 測定値のインジケータへの
マッピング 132

ゲートウェイ・サーバの変更 125, 663
システム可用性管理のインジケータの
管理 130

Business Service Management-SiteScope 接
続, SSL の使用 124, 662

Business Service Management プリファレンス
660

C

CI

ダウンタイム 138

cygwin OpenSSH, Windows でのインストール
572

D

Diagnostics 統合 667

[Diagnostics 統合プリファレンス] ダイアロ
グ・ボックス 689

DNS 参照ツール 222

F

FTP サーバ・ツール 227
ツール 227

H

HP Quality Center Application Server for
UNIX 1000

HP Quality Center Application Server for
Windows 999

HPOM/OMi 統合 666

HP Operations Agent 172

HP Operations Agent を使用したイベント統合
160

HP Operations Agent を使用した測定値統合
167

[HP Operations Manager Integration
Preferences] ダイアログ・ボックス
694

HP Quality Center

監視ソリューション 991

HP Quality Center9.2/10.0 License Status
1003

HP Quality Center ソリューション・テンプ
レート

システム要件 996

デプロイ 995

HP QuickTest Professional License Server
1007

HP Software サポート Web サイト 22

索引

HP サービス・マネージャ

 ホスト監視ソリューション 1009

HP ソフトウェア Web サイト 23

HP 統合設定（共通モニタ設定） 392

I

i18N

 多言語化を参照 811

Identity Management Single Sign-On (IDM-SSO) 823

IPv6

 IPv6 をサポートするモニタ 558

 SiteScope での IPv6 アドレスの優先の
 有効化 556

 SiteScope でのサポート 551

 混合環境での作業 554

 サポートされているプロトコル 555

J

JBoss アプリケーション・サーバ

 ホスト監視ソリューション 1019

JBoss Application Server ソリューション・テンプレート

 デプロイ 1012, 1022

JMX コンソール 35

L

LDAP 認証ツール 230

Lightweight シングル・サインオン 821

Linux Host ソリューション・テンプレート
 デプロイ 1030

Linux ホスト, ソリューションの監視 1027
logs

 統合モニタ 462

LW-SSO

 IDM-SSO への接続 823

 一般的な参照情報 825

 概要 826

 システム要件 828

 セキュリティに関する警告 829

 説明 822

 トラブルシューティングと制限事項
 831

M

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート

 設定 1039

 デプロイ 1037

Microsoft Exchange

 監視ソリューション 1033

Microsoft IIS

 ホスト監視ソリューション 1043

Microsoft IIS ソリューション・テンプレート

 デプロイ 1046

Microsoft SQL Server

 ホスト監視ソリューション 1049

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート

 デプロイ 1052

Microsoft Windows Host, 監視ソリューション
1057

Microsoft Windows Host ソリューション・
テンプレート

 デプロイ 1060

Microsoft Windows Media Player ツール 237

Microsoft Windows サーバ

 リモートの監視について 504

Microsoft Windows ソリューション・テンプレート

 デプロイ 1068

Microsoft Windows リモート・プリファレンス
504

N

NET

 ホスト監視ソリューション 1065

Network Node Manager

 イベントの転送 497

 データをエクスポートするスクリプト
 の記述 499

Network Node Manager 統合

 説明 498

[New Monitor Report] ダイアログ・ボックス
1364

[New Quick Report] ダイアログ・ボックス
1357

[New View/ フィルタの編集] ページ 113

O

OM エージェント 172
 OM エージェントのインストール 172
 OpenSSH for Windows, インストール 580
 Operations Manager
 SiteScope イベントの送信 160
 SiteScope 測定値のレポート 167
 SiteScope との統合 154
 SiteScope を使用してイベントを送信
 171
 SiteScope を使用して測定値をレポート
 179
 警告イベントの設定 164
 状態変更イベントの設定 163
 測定値名の整合 182
 に送信するイベントの設定 163
 Operations Manager に送信するイベントの設定
 163
 Operations Manager への SiteScope イベント
 のレポート 160
 Operations Manager への SiteScope 測定値の
 レポート 167
 Oracle
 監視ソリューション 1073
 Oracle Database ソリューション・テンプレート
 設定 1080
 デプロイ 1076
 テンプレート・ツール 1076

P

Ping ツール 243
 Post ログ 1245

R

Real Media Player ツール 247

S

SAP
 監視ソリューション 1083
 SAP NetWeaver ソリューション・テンプレート
 設定 1087
 SAP R/3 ソリューション・テンプレート 1086
 システム要件 1086

 設定 1087
 Siebel
 監視ソリューション 1091
 Siebel Application Server ソリューション
 システム要件 1095
 設定 1097
 デプロイ 1094
 Siebel Gateway Server ソリューション
 設定 1100
 Siebel Web Server ソリューション
 設定 1101
 SiteScope
 自動テンプレート・デプロイメント
 931
 SiteScope ダッシュボード
 [ダッシュボードのお気に入り]に保存]
 ダイアログ・ボックス 1152
 [ダッシュボードのお気に入り]の削除]
 ダイアログ・ボックス 1153
 SiteScope
 SNMP プリファレンス 729
 SSH クライアント 589
 アーキテクチャ 30
 主な機能 29
 および SSH 562
 管理者アカウントへのアクセス 44
 操作 58
 ソリューション・テンプレート 969
 テンプレートの作成 863
 モニタ・タイプ 321
 SiteScope API 36
 SiteScope-Business Service Management 接
 続, SSL の使用 124, 662
 SiteScope オブジェクトの検索 106
 SiteScope オブジェクトのフィルタ処理 106
 SiteScope 監視
 カテゴリ 321
 使用されるポート 365
 モニタを使った作業 319
 リモート・サーバ 324
 SiteScope 監視モデル 31
 SiteScope グループ 315
 操作 307
 SiteScope 警告アクション 1304
 SiteScope サーバの状況モニタ 1201
 UNIX のカウンタ 1202

- Windows のカウンタ 1203, 1204
- SiteScope 状況 1181
 - BSM 統合設定モニタ 1194
 - BSM 統合統計モニタ 1196, 1197
 - SiteScope サーバの状況モニタ 1201
 - SSL 証書の状態モニタ 1209
 - サーバの状況 1188
 - 負荷モニタの監視 1208, 1209
 - モニタ・グループ 1182
 - モニタの追加 1190
 - モニタ負荷 1189
 - ログ・イベント 1189
 - ログ・イベント状況モニタ 1205
- SiteScope 設定 611
- SiteScope 測定値のインジケータへの割り当て 132
- SiteScope ダッシュボード
 - サーバ中心のレポート 1176
 - SiteScope ダッシュボードのデータ分析 1134, 1136
 - SiteScope ツールへのアクセス 1133
 - Windows / UNIX サーバのリソースの監視 1138
 - 概念とタスク 1129, 1165
 - 概要 1130
 - [確認] ダイアログ・ボックス 1150
 - [現在の状態] ビュー 1140
 - サーバ中心のレポート 1166
 - [ダッシュボードの設定] ページ 1158
 - ダッシュボード・フィルタの概要 1131
 - [ダッシュボードフィルタ] ページ 1154
 - モニタの状態の確認 1132
 - [モニタ履歴] ビュー 1149
- SiteScope ダッシュボードのユーザ・インタフェース 1139
- [SiteScope ツール] メニュー 97
- SiteScope データ
 - Business Service Management への転送 126
- SiteScope 電子メール・プリファレンス 709
- [SiteScope テンプレート] ページ 893
- SiteScope の BSM 統合プリファレンス 661
- SiteScope の概要 28
- SiteScope の統合 32
 - Business Service Management と 122
- SiteScope の[ページャ プリファレンス] 719, 799
- SiteScope 範囲スケジュールのプリファレンス 755
- SiteScope フェールオーバー
 - テンプレート 957
- SiteScope へのアクセス 38
- SiteScope モニタ
 - 測定値ごとのトポロジをレポートするモニタ 150
 - 標準設定のトポロジ (ホスト以外) があるモニタ 149
 - 複数の CI を使用 150
 - ホスト・データのないモニタ 148
- SiteScope ユーザ・インタフェース 63
 - 共通ツールバー 56
 - コンテキスト・ツールバー 54, 64
 - コンテキスト・ツリー 54
 - コンテキスト・ボタン 57
- SiteScope レポート 1176, 1331
 - エラーの時刻の表示 1346, 1360
 - モニタ・エラーの表示 1344, 1358
 - モニタ警告の表示 1344, 1358
 - モニタの正常結果の表示 1344, 1358
 - モニタ読み取りの表示 1346, 1359
- SiteScope ログ・データベース・テーブル 701
- SMS 警告
 - 操作 1272
- SNMP
 - SiteScope プロパティの設定 728
 - 統合 728, 729
- SNMP 受信者設定 728
- SNMP ツール 258
- SNMP トラップ警告
 - 操作 1274
- SNMP トラップ・ツール 260
- SNMP トラップの設定 728, 729
- SNMP ブラウザ・ツール 254
- SNMP プリファレンス 728
- Solaris Host ソリューション・テンプレート
 - デプロイ 1106
- Solaris ホスト, ソリューションの監視 1103
- SSH 監視 561
 - OpenSSH for Windows 567
 - cygwin OpenSSH 567
 - SSH クライアントを使った作業 589

SSH サーバのインストールと設定 570
 UNIX サーバの設定 568
 Windows サーバの設定 566
 鍵ベース認証 594
 クライアントのパスワード認証 592
 設定オプション 563
 内部 Java SSH クライアント 590
 内部クライアントで SSH2 を使用 592, 593
 リモート NT SSH ファイルのインストール 583
 SSH クライアント
 内部 Java 590
 SSH でのセキュア監視 562
 SSL
 Business Service Management-SiteScope 接続 124, 662
 SSL 証書の状態モニタ 1209
 SSO, 認証 821

U

UNIX アダプタ
 アダプタ・コマンド・リスト 603
 アダプタ・ファイルの形式 602
 操作 598
 追加 599
 標準設定のアダプタ・ファイル・リスト 601
 UNIX サーバ
 接続方法 540
 リモートの監視について 504
 UNIX サーバの接続方法 540
 UNIX 用フェールオーバー監視テンプレート 965
 UNIX リモート・サーバ 504
 リモート・サーバを監視する設定 518
 URL 詳細ログ 1245
 URL ツール 263
 URL モニタ
 セキュリティ, 標準設定の認証資格情報の使用 612

W

WebLogic

監視ソリューション 1109
 WebLogic ソリューション・テンプレート
 監視対象モジュールの選択 1113
 使用 1113
 設定 1115
 デプロイ 1112
 WebSphere
 監視ソリューション 1119
 WebSphere ソリューション・テンプレート
 システム要件 1122
 設定 1124
 デプロイ 1122
 Web サービス・ツール 266
 Windows Management Instrumentation 364
 Windows サーバ
 perfex による接続のトラブルシューティング 545
 イベント・ログ・アクセスのトラブルシューティング 541
 リモートの監視 523
 Windows 用フェールオーバー監視テンプレート 965
 Windows リモート・サーバ
 リモート・サーバを監視する設定 506
 WMI, サポートされているモニタ 364

X

xml テンプレート・デプロイメント 931
 XML ドキュメント
 URL として監視 439
 内容照合値の使用 441
 内容の照合の構文例 439
 XSL 変換ツール 273

あ

アダプタ
 SiteScope UNIX アダプタ 598
 SiteScope UNIX アダプタの追加 599
 SiteScope UNIX アダプタ・ファイルの形式 602
 SiteScope の UNIX アダプタ・コマンド・リスト 603
 SiteScope の UNIX 標準設定のアダプタ・ファイル・リスト 601

い

- 依存関係, グループ 317
- 依存関係, 作成 325
- 依存関係の設定 (共通モニタ設定) 381
- [依存の対象モニタの選択] ダイアログ・ボックス 412
- 一般設定 (インフラストラクチャ・プリファレンス) 629
- 一般設定 (共通モニタ設定) 377
- 一般設定 (グループ) 316
- 一般プリファレンス
 - SiteScope の英語以外のロケールの設定 814
 - 特定の言語での UI の表示 815
 - ロケールの日付と時間の設定 814
 - Web スクリプト・モニタのファイル・ディレクトリの定義 613
 - プリファレンス 612
 - モニタの一時停止 613
- イベント管理 736
- [イベントマッピング] ページ 739
- イベント・ログ・ツール 224
- インフラストラクチャ・プリファレンス 628, 629, 636, 647, 649, 651, 652, 657
 - 警告設定 648
 - モニタ設定 638

え

- [影響を受けるオブジェクト] ページ, グローバル検索と置換 203
- [影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス, グローバル検索と置換 204
- 永続性設定 649
- 永続性設定, インフラストラクチャ・プリファレンス 649
- エージェント
 - HP Operations Agent 172
- エージェントレス SSH, サポートされているモニタ 586
- エラー限度, について 338
- エラーの時刻, レポート 1346, 1360
- エラーのリスト, レポート 1344, 1358
- エラー・ログ 1244
- エラーを無視する, レポートの稼働時間読み

取り 1345, 1359

お

- オペレータ・ログ 1244
- オンライン・リソース 22

か

- 確認
 - イベント 106
 - モニタ・ステータス 106
- [確認] ダイアログ・ボックス 1150
- カスタム形式設定
 - SiteScope レポート 1348, 1362
- カスタム設定 657
- カスタム設定, インフラストラクチャ・プリファレンス 657
- 稼働時間および読み取りオプション, レポート 1345, 1358
- 監査ログ
 - SiteScope の開始 1223
 - 一般プリファレンスの更新 1224
- 概要 1190
- カテゴリ 1232
- グループ操作 1223
- [グローバル検索と置換] の操作 1231
- 警告 1230
- 設定する 1220
- その他のプリファレンスの更新 1225
- テンプレート・グループ 1228
- テンプレート警告 1229
- テンプレート・コンテナ 1226
- テンプレートの削除 1227
- テンプレートの作成 1227
- テンプレートの適用 1226
- テンプレートの変更 1227
- テンプレート変数 1227
- テンプレート・モニタ 1229
- テンプレート・リモート・オブジェクト 1228
- パスワードの変更 1232
- モニタ操作 1224
- レポート 1230
- ログインとログアウト 1231
- ログインの失敗 1231

監視

- SiteScope サーバの状況 1181
- Windows 2000 のユーザ権限の設定 514
- Windows XP/2003 のユーザ権限の設定 513
- テンプレートをを使用したデプロイメント 837
- ドメイン権限の設定 511
- 監視に使用されるポート 365
- 管理者、ログイン・アカウント 44
- 管理レポート
 - フィルタとスケジュールの設定 1347
 - レポート フォーマット 1348
 - レポートのタイトル 1343
 - レポートのターゲット 1344
 - レポート配布 1349
 - 一般設定 1343
 - 管理設定 1353
 - 計算メソッド 1352
 - 表示設定 1344
 - 操作 1336
- [管理レポート] ダイアログ・ボックス 1343
- [関連する警告の有効化 / 無効化] 設定（共通のモニタ設定） 407

き

- 期間指定スケジュール・プリファレンス 752
- 技術情報 22
- 共通モニタ設定 375
 - HP 統合 392
 - 依存関係 381
 - 関連する警告の有効化 / 無効化 407
 - しきい値 384
 - 全般 377
 - タグの検索 / フィルタ 409
 - ベースライン設定 410
 - モニタの実行 379
 - モニタの有効化 / 無効化 404

く

- クイック・ヘルプ 56
- クイック・レポート
 - 設定のエクスポート 1366

計算メソッド 1363

- 表示設定 1358
- フィルタとスケジュールの設定 1361
- レポート配布 1362
- レポートのターゲット 1357
- レポート フォーマット 1362
- [クイック レポート] ダイアログ・ボックス 1357

グループ 616

- SiteScope の設定 315
- グローバル検索と置換 187
 - しきい値の設定 189
 - 状態の条件の上書き 189
- [グローバル検索と置換] ウィザード 196
 - [詳細フィルタ] ダイアログ・ボックス 204
 - [影響を受けるオブジェクト] ページ 203
 - [影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス 204
 - [サブタイプの選択] ページ 198
 - [サマリの確認] ページ 205
 - [サマリ] ページ 206
 - [タイプの選択] ページ 197
 - [置換モード] ページ 198
 - [変更の入力] ページ 200

け

警告

- SMS 1272
- SNMP トラップ 1274
- 概要 1251
- 警告アクションの作成 1254
 - [警告時のアクション] ダイアログ・ボックス 1304
- 警告テンプレートのカスタマイズ 1260
- 警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ 1281
- 警告テンプレートのメッセージ内容のカスタマイズ 1279
- コピーと貼り付け 1276
- サウンド 1275
- 作成 1276
 - [状態トリガ] 表示枠 1321
 - スクリプト 1268

設定 1276
送信 1267
データベース 1262
テーブル, レポート 1346, 1360
テスト 1277
電子メール 1264
テンプレートのディレクトリ 1282
トリガ 1255
[トリガの頻度] 表示枠 1322
ページャ 1266
編集 893, 896, 1293, 1296
メッセージ内容のカスタマイズ 1279
モニタの有効化および無効化 1263
ログ イベント 1265
警告アクション 1304
警告アクション, 作成 1254
警告設定, インフラストラクチャ・プリファ
レンス 648
警告テーブル, レポート 1346, 1360
警告テンプレート
 カスタマイズ 1260
 警告メッセージのカスタマイズ 1279
警告の有効化 / 無効化
 操作 1263
警告のリスト, レポート 1344, 1358
警告レポート
 警告レポート設定 1368
 例 1369, 1379
 レポートのターゲット 1367
[警告レポート] ダイアログ・ボックス 1367
警告ログ 1244
警告を含む, レポートの稼働時間読み取り
 1345, 1358
警告を無視する, レポートの稼働時間読み取り
 1345, 1359
[結果サマリの適用] ページ 918
言語の優先順位 812
[現在の状態] ビュー 1140

こ

コンテキスト・メニュー・オプション
 テンプレート・ツリー 83
 モニタ・ツリー 71
 リモート・サーバ・ツリー 82
[コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス 916

さ

サーバ設定 636
サーバ設定, インフラストラクチャ・プリ
 ファレンス 636
サーバ中心のレポート 1176
 作成方法 1170
 生成 1166
サーバ統計情報
 [Perfex プロセス プール] ページ 1236
 [SSH 接続] ページ 1238
 [Telnet 接続] ページ 1241
 [一般] ページ 1233
 解析 1213
 [実行中のモニタ数] ページ 1234
 使用 1212
 分析 1219
[サーバ統計] ページ 95
サービス・ツール 251
最大のグラフ値, レポート 1352, 1363
最良ケースの計算オプション, レポート
 1352, 1363
サイレント・デプロイメント・ログ 1245
サイレント・ログイン 33, 34
 サイレント・ログイン URL の作成 39
サウンド警告
 操作 1275
[サブタイプの選択] ページ, グローバル検索
 と置換 198
[サマリの確認] ページ, グローバル検索と置換
 205
[サマリ] ページ, グローバル検索と置換 206
サンプリング間隔 1363, 1352

し

資格情報のプリファレンス
 設定 789
 ユーザ・インタフェース 791
 概念 786
時間指定スケジュールのプリファレンス 751
時間指定スケジュール・ページ 753
しきい値
 インジケータに割り当てられた測定値
 331
 可用性 329
 状態の影響 330

スケジュール 329
 設定 328
 複数 330
 ベースライン 329
 ベースラインのアクティブ化 334
 ベースラインの計算 334
 ベースラインを使用した設定 333
 しきい値の設定 (共通モニタ設定) 384
 しきい値プロパティ, レポート 1344, 1358
 システム値
 正規表現でアクセス 289
 実行モニタ・ログ 1244
 自動テンプレート・デプロイメント 931
 XML 属性の参照情報 671, 951
 XML タグの参照情報 671, 949
 XML バリデータ 938
 XML ファイルの例 933
 XML 要素参照情報 949
 インスタンス変数 936
 グローバル変数 936
 制限事項 953
 デプロイメントの結果 941
 テンプレート更新レポート 940
 テンプレート変更適用 939
 トラブルシューティング 953
 必須変数 936
 変数 936
 順守レベル, 設定 337
 順守レベル, 微調整 422
 [詳細フィルタ] ダイアログ・ボックス, グ
 ローバル検索と置換 204
 詳細プロパティ, レポート 1343
 詳細モニタ情報, レポート 1346, 1360
 ショートカット・メニューのオプション
 診断ツール 1161
 [新規イベント・マッピング] / [イベント・
 マッピングの編集] ダイアログ・ボッ
 クス 741
 [新規管理レポート] ダイアログ・ボックス
 1343
 [新規警告レポート] ダイアログ・ボックス
 1367
 [新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・
 ボックス 119
 [新規モニタ ページ] 372
 診断ツール 209

プロセス 245
 [診断ツール] ビュー
 ショートカット・メニューのオプション
 1161

す

スキップされたモニタ設定 647
 スキップされたモニタ設定, インフラストラ
 クチャ プリファレンス 647
 スクリプト警告
 SiteScope へのデータの引き渡し 1328
 記述 1326
 警告メッセージ・ファイル 1330
 操作 1268
 データの引き渡し 1270
 トラブルシューティング 1271
 スケジュール
 時間指定スケジュール・ページ 753
 範囲スケジュール・ページ 755
 スケジュール・フィルタ, クイック・レポート
 1361
 スケジュール・フィルタ, レポート 1347

せ

正規表現 275
 * 数量詞 284
 SiteScope の日付変数 288
 一般の日付変数 289
 大文字と小文字の区別を無視 286
 改行を保持 286
 改行を無視 286
 区切られたログ・ファイル・エントリ
 の照合 298
 言語と国に固有の日付変数 291
 検索モード修飾子 286
 作業時の問題 302
 照合する句読点 282
 照合値の保持 287
 数量詞 284
 代替の使用 280
 定義 277
 テンプレート・モニタ 856
 日付を含むログ・エントリの照合 301
 メタ文字 281

- メタ文字を使用したパターンの照合 281
- 文字クラス 283
- 文字列リテラルの照合 279
- モニタ URL またはファイル・パスの特
殊置換 292
- ログ・ファイル内の数値の照合 300
- ログ・ファイルの例 294
- 正規表現ツール 249
- [整合性の確認] ページ 914
- 正常値のリスト, レポート 1344, 1358
- 正常な限度, について 338
- セキュア・シェル (SSH) を使用した監視
561
- セキュリティ
 - 標準設定の認証資格情報の使用 612
 - 標準のログイン・アカウント 44
 - ユーザ・アカウント 760, 766
 - ユーザ・パスワードの変更 764
- [設定のバックアップ] ダイアログ・ボックス
428

そ

- 送信警告
 - 操作 1267
- 測定値グラフ, レポート 1345, 1359
- 測定値名の整合 182
- ソリューション・セット
 - .NET 1065
 - AIX ホスト 985
 - BEA WebLogic 1109
 - HP Quality Center サーバ 991
 - HP Service Manager 1009
 - IBM WebSphere 1119
 - JBoss アプリケーション・サーバ 1019
 - Linux ホスト 1027
 - Microsoft Exchange 1033
 - Microsoft IIS 1043
 - Microsoft SQL Server 1049
 - Microsoft Windows Host 1057
 - Oracle データベース 1073
 - Siebel サーバ 1091
 - Solaris ホスト用 1103
- ソリューション・テンプレート
 - Active Directory 979

- SAP モニタ 1083
- SiteScope 969
 - 概要 970
 - [グループの選択] ダイアログ・ボックス
924, 927
 - [警告] タブ 895
 - デプロイ 974
 - [プロパティ] タブ 1340
 - ページ 976

た

- [ターゲット サーバのフィルタ] ダイアログ・
ボックス 117
- [タイプの選択] ページ, グローバル検索と置換
197
- ダウンタイム, CI 138
- [タグの検索 / フィルタ] 設定 (共通のモニタ
設定) 409
- タグの検索 / フィルタのプリファレンス 798
- [タグの検索 / フィルタ] のユーザ・インタ
フェース 112
- 多言語化
 - SiteScope の UNIX 対応モニタ 817
 - SiteScope の Windows 対応モニタ 817
 - SiteScope のサポート 811
 - SiteScope の制限事項 811
 - SiteScope ユーザ・インタフェース 811
 - 多言語ユーザ・インタフェースのサ
ポート 812
- 多言語ユーザ・インタフェースのサポート
812
- [ダッシュボードのお気に入り]に保存] ダイア
ログ・ボックス 1152
- [ダッシュボードのお気に入り]の削除] ダイア
ログ・ボックス 1153
- [ダッシュボードの設定] ページ 1158
- [ダッシュボード フィルタ] ページ 1154

ち

- [置換モード] ページ, グローバル検索と置換
198
- 注釈ツール
 - 設定 1381
 - ベースライン・モニタ測定値グラフ 430

つ

ツール 219

DNS 参照 222
 LDAP 認証 230
 Microsoft Windows Media Player 237
 Ping 243
 Real Media Player 247
 SNMP 258
 SNMP トラップ 260
 SNMP ブラウザ 254
 TraceRoute 262
 URL 263
 Web サービス 266
 XSL 変換 273
 イベント・ログ 224
 サービス 251
 正規表現 249
 データベース接続 215
 ニュース・サーバ 240
 ネットワークの状態 239
 パフォーマンス・カウンタ 241
 メールの送受信 233

[次の時間にレポートを生成] プロパティ 1353
 ツリーのフィルタ処理 107

て

[データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス 683

データベース警告
 操作 1262

データベース情報 219

データベース情報ツール 219

データベース接続ツール 215

データベース・ログ記録 700, 702

[デプロイ済みグループの選択] ページ 913

[デプロイメント値] ダイアログ・ボックス
 925

電子メール

統合 708, 709

電子メール警告

操作 1264

電子メール警告, テンプレートのプロパティ
 1283

電子メール, 使用するための SiteScope の設定
 44

電子メール・プリファレンス 708

テンプレート 837

[New Template Remote] ダイアロ
 グ・ボックス 903

SERVER_LIST 変数 852

インポートまたはエクスポート 888

オブジェクト 844

概要 843

カウンタ選択の例 857

[グループの選択] ダイアログ・ボックス
 924, 927

計画 847

[警告] タブ 895

更新 860

作成 860, 863

システム変数 852

[自動デプロイ XML の生成] ページ
 929

自動デプロイメント 931

[新規警告] ダイアログ・ボックス 909

[新規テンプレート] ダイアログ・ボッ
 クス 898

[新規テンプレート グループ] ダイア
 ログ・ボックス 905

[新規テンプレート コンテナ] ダイア
 ログ・ボックス 897

[新規テンプレート モニタ] ダイアロ
 グ・ボックス 908

[新規変数] ダイアログ・ボックス 900

正規表現照合の追加 887

正規表現を使用したカウンタ選択 856

設定のコピー 872

[デプロイメント値] ダイアログ・ボッ
 クス 925

テンプレートのインポート・ダイアロ
 グ・ボックス 911

[テンプレートのエクスポート] ダイア
 ログ・ボックス 910

[テンプレートの選択] ダイアログ・
 ボックス 413

[プロパティ] タブ 894, 1340

変更の適用 860

変数 849

変数の参照 853

変数の参照例 854

モニタのカウンタ選択 855, 887

索引

- ユーザ定義変数 851
- 予約済みテンプレート・グループ 891
- 例 846
- テンプレートの更新
 - [結果サマリの適用] ページ 918
- テンプレート設定 649
- テンプレート設定, インフラストラクチャ・プリファレンス 649
- テンプレート・ツリー
 - オブジェクト 83
 - コンテキスト・メニュー・オプション 83
- [テンプレート ツリーにコピー] ダイアログ・ボックス 414
- テンプレートの更新
 - [コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス 916
 - [整合性の確認] ページ 914
 - [デプロイ済みグループの選択] ページ 913
- テンプレート変更適用サマリ・レポート 920
 - [変数の変更] ページ 917
- テンプレート変更適用ウィザード
 - [整合性の確認] ページ 914
 - [デプロイ済みグループの選択] ページ 913
- テンプレート変更適用 860
 - 自動テンプレート・デプロイメント 939
- テンプレート変更適用ウィザード 912
 - [コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス 916
 - [結果サマリの適用] ページ 918
 - [変数の変更] ページ 917
- テンプレート変更適用サマリ・レポート 920

と

- 統合
 - HPOM/OMi 666
 - 汎用データ 664
- 統合プリファレンス
 - BSM 661
 - Business Service Management 661
- [統合プリファレンス タイプ] ダイアログ・

- ボックス 676
- [統合プリファレンス] ページ 675
- 統合モニタ
 - 操作 445
 - 廃止の置換 461
 - 廃止リスト 461
 - フィールドのマッピング 467
 - フィールドのマッピング, アクション・ディレクティブ 493
 - フィールドのマッピング, 一致条件 489
 - フィールドのマッピング, イベント 472, 484
 - フィールドのマッピング, イベントの例 477, 487
 - フィールドのマッピング, イベント・ハンドラの構造 488
 - フィールドのマッピング, 構造 471
 - フィールドのマッピング, 条件式 493
 - フィールドのマッピング, 測定値 478
 - フィールドのマッピング, 測定値の例 482
 - フィールドのマッピング, タグ 494
 - フィールドのマッピング, 文字列式 493
 - フィールドのマッピング, 例 495
- 統合モニタのトラブルシューティング 462
- 統合モニタのログ 462
- トポロジ・データ
 - SiteScope から Business Service Management 126
- トラブルシューティング
 - 監視対象システム 209
 - 統合モニタ 462
 - モニタの設定 209
- トラブルシューティングと技術情報 22
- トレース・ルート・ツール 262

な

- 内容の照合
 - システム日付変数の使用 288
 - 正規表現の使用 275
 - メタ文字の使用 281
 - 文字列リテラルの使用 279
 - ログ・ファイルの例 294

並べ替え基準, モニタ・レポート 1365
 並べ替え順序, モニタ・レポート 1365

に

日次ログ 1244
 ニュース・サーバ・ツール 240
 認証
 Lightweight シングル・サインオン 821
 LW-SSO, 概要 826
 LW-SSO の一般的な参照情報 825

ね

ネットワーク状態ツール 239

は

パーセンタイル範囲マッピング・テーブル 416
 廃止されたモニタ 370
 パスワード
 長さの設定, 英数字の設定, 句読点の設定 765
 変更 764
 要件の設定 765
 パフォーマンス・カウンタ・ツール 241
 パラメータの表示, モニタ・レポート 1365
 範囲スケジュール
 追加 757
 範囲スケジュール・ページ 755
 汎用データ統合 664

ひ

表示列, モニタ・レポート 1365

ふ

ファイル形式, モニタ・レポート 1366
 ファイルにエクスポート, モニタ・レポート 1366
 ファイル名, モニタ・レポート 1366
 フィルタ
 ダッシュボード 1154
 グローバル 107

[フィルタ タグ] ダイアログ・ボックス 118
 フェールオーバー監視テンプレート 957

概要 958

デプロイ 962

モニタ 959

フォーマット・テンプレート, レポート 1349

負荷モニタの監視 1208, 1209

ブラウザの言語のプリファレンス 812

プリファレンス

 Business Service Management 660

 SNMP トラップ 728

 インフラストラクチャ 628

 [共通イベントプリファレンス] の

 ワークフロー 737

 時間指定スケジュール 751

 タグの検索 / フィルタ 798

 範囲スケジュール 752

 ページャ 718

 ユーザ管理 760

 ログ 700

 電子メール 708

プロセス・ツール 245

へ

ページ・オプション

 お気に入りに追加 56

 ユーザのお気に入りにレイアウトを保存 56

ページャ

 接続 719, 799

ページャ警告

 操作 1266

ページャ・プリファレンス 718

ベースライン

 SiteScope でのしきい値の計算方法 341

 SiteScope によるエラー限度の計算方法 341

 アクティブ化 334

 エラー限度 339

 エラー限度の設定 422

 計算 334

 しきい値 340

 順守レベルの設定 337

 [順守レベルの微調整 / 限度の設定] ダイアログ・ボックス 422

索引

状態レポート 433
正常な限度 338
[設定のバックアップ] ダイアログ・ボックス 428
注意事項と制限事項 335
パーセンタイル範囲マッピング・テーブル 416
[ベースラインのアクティブ化] ダイアログ・ボックス 424
[ベースラインの計算] ダイアログ・ボックス 418
[ベースラインの削除] ダイアログ・ボックス 432
モニタしきい値の設定 347
[モニタ測定値グラフ] ダイアログ・ボックス 429
ベースライン設定 (インフラストラクチャブリファレンス) 652
ベースライン設定 (共通のモニタ設定) 410
ベースラインのアクティブ化 334
[ベースラインのアクティブ化] ダイアログ・ボックス 424
ベースラインの計算 334
[ベースラインの計算] ダイアログ・ボックス 418
[ベースラインの削除] ダイアログ・ボックス 432
ベースラインの状態 434
ベースラインのプロパティ 434
ヘルプ, クイック・ヘルプ 56
[変更の入力] ページ, グローバル検索と置換 200
変数
 テンプレート内 849
[変数の変更] ページ 917

む

無効化
 レポート 1353

め

メールの送受信ツール 233

も

モニタ

.NET 1065
Active Directory 979
AIX H 985
HP Quality Center サーバ 991
HP Service Manager 1009
Linux ホスト 1027
Microsoft Exchange 1033
Microsoft IIS 1043
Microsoft SQL Server 1049
Microsoft Windows Host 1057
Oracle データベース 1073
Siebel サーバ 1091
SiteScope で使用されるポート 365
Solaris ホスト用 1103
WebLogic サーバ 1109
WebSphere サーバ 1119
Windows 環境のみでサポートされている 363
WMI のサポート 364
依存関係の作成 325
一時停止 613
1 回実行するスケジュール 751
エージェントレス SSH のサポート 586
確認イベント 106
カテゴリ 321
共通設定 375
状態のしきい値 328
スキップのトラブルシューティング 1244
スケジュールに基づいた無効化 750
セキュリティ, 標準設定の認証資格情報の使用 612
デプロイメント 343
テンプレートを使用して作成 837
範囲スケジュール 752, 755
ベースラインしきい値 333
JBoss アプリケーション・サーバ 1019
モニタ・カウンタ・ログ 1244
モニタ・カテゴリ・リスト 358
モニタ設定, インフラストラクチャ・プリファレンス 638
[モニタ測定値グラフ] ダイアログ・ボックス 429
モニタ・タイプ 321

使用されるポート 365
 [モニタ タイプのフィルタ] ダイアログ・ボックス 116
 モニタ・ツリー
 オブジェクト 71
 コンテキスト・メニュー・オプション 71
 モニタ・テンプレート 837
 [モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックス 67
 モニタの実行設定 (共通モニタ設定) 379
 モニタのスキップのログ 1245
 モニタのデプロイ 343
 [モニタの有効化 / 無効化] 設定 (共通のモニタ設定) 404
 モニタ・フィルタ, クイック・レポート 1361
 モニタ・フィルタ, レポート 1347
 モニタ・プロセスの一時停止 613
 モニタ読み取り, レポート 1346, 1359
 [モニタ履歴] ビュー 1149
 モニタ・レポート
 表示設定 1365
 例 1373, 1377
 レポートのターゲット 1364
 [モニタ レポート] ダイアログ・ボックス 1364
 モニタ・ログ 1244

ゆ

ユーザ・インタフェース
 多言語のサポート 812
 ユーザ管理プリファレンス 766
 ユーザ管理プロファイル 766
 ユーザ・タイプ 761
 ユーザ・プリファレンス
 ユーザ・パスワードの変更 764
 ユーザ・プロファイル 760, 766
 ユーザ管理プリファレンス 760

り

リモート
 Microsoft Windows リモート・サーバ 504
 UNIX リモート・サーバ 504

リモート UNIX サーバの監視
 概要 504
 接続方法 540
 ユーザ・インタフェース 531
 リモート UNIX サーバ・プロファイル
 定義 519
 リモート Windows サーバの監視 504
 リモート Windows サーバ・プロファイル
 定義 510
 リモート・サーバ 503
 プロパティ 520
 リモート・サーバ・ツリー
 オブジェクト 82
 コンテキスト・メニュー・オプション 82
 リモート・サーバの監視 324
 リモートの複数テスト・ログ 1245

れ

レポート
 HTML 形式オプション 1349
 [New Monitor Report] ダイアログ・ボックス 1364
 [New Quick Report] ダイアログ・ボックス 1357
 XML ファイルを電子メールでそうしん 1351
 外部データベースへのログ記録 1333
 概要 1331
 使用されるログ・ファイル 1244
 [新規管理レポート] ダイアログ・ボックス 1343
 [新規警告レポート] ダイアログ・ボックス 1367
 データ量 1333
 電子メールで送信 1349, 1362
 テンプレートを使用した形式設定 1349
 モニタしきい値の表示 1344, 1358
 レポートを生成する時刻の制御 1353
 レポート期間, クイック・レポート 1361
 レポート形式, クイック・レポート 1362
 レポート形式設定オプション 1348, 1362
 レポート設定 651
 レポート設定, インフラストラクチャ・プリファレンス 651

索引

レポート対象期間の最後, レポート 1348

レポートのターゲット

警告のタイプ 1368

警告時間帯 1368

詳細レベル 1368

クイック・レポート 1357

警告レポート 1367

モニタ・レポート 1364

警告レポート 1344

レポートの対象期間 1348

ろ

ローカリゼーション

ローカル日付形式の照合 291

ログ・イベント警告

操作 1265

ログ・イベント状況モニタ 1205

ログイン, サイレント 33, 34

ログ・ファイル

monitorCount.log 1244

Post 要求 1245

SiteScope の再起動 1244

URL モニタの詳細 1245

オペレータ認知 1244

監視データ 1244

警告 1244

サイレント・デプロイメント 1245

データの保存量を設定 44

データベース・テーブル 701

データ列 1221

プリファレンス 700, 702

モニタの実行 1244

モニタのスキップ 1245

リモートの複数テスト 1245

[ログ ファイル] タブ 1242

ログ・ファイル, 表示 1190

ログ・プリファレンス 700, 702, 700